兵庫県文化財調査報告　第 484 冊

川西市

西畦野下ノ段・井戸遺跡

－　県道川西インター線建設工事・新名神高速道路　箕面～神戸間
（兵庫県域）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　－

平成 28（2016）年 3 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

西畦野下ノ段・井戸遺跡

兵庫県文化財調査報告　第484冊　平成28年3月

兵庫県教育委員会

27教Ⓣ1-018A4

川西市

西畦野下ノ段・井戸遺跡

（にしうねのしものだん・いど）

－　県道川西インター線建設工事・新名神高速道路　箕面～神戸間
（兵庫県域）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　－

平成 28（2016）年 3 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

西畦野下ノ段・井戸遺跡　遠景（南東から）

西畦野下ノ段・井戸遺跡と山下城址　（やや上が山下城址　南西から）

西畦野下ノ段・井戸遺跡　近景（南から）

1－1 区東半　全景　（西から）

２区西半　全景　（東から）

２区　掘立柱建物SB04　（東から）

３区　全景　（東から）

３区　SX540　遺物出土状況　（南西から）

４区　全景　（東から）

３区西半　全景　（南東から）

５区　全景　（東から）

５区　掘立柱建物SB16～18　（南から）

SK60　石敷検出状況　（北から）

SK1501　石敷検出状況　（西から）

SK796 出土　重圏文鏡

SD1602 出土　鳥形土製品

平安～鎌倉時代　出土遺物集合写真

例　　言

1．本書は、川西市西畦野字下ノ段および井戸に所在する西畦野下ノ段（にしうねのしものだん）・井戸（いど）遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は、県道川西インター線建設工事および新名神高速道路　箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴うもので、兵庫県阪神北県民局宝塚土木事務所と西日本高速道路株式会社関西支社新名神兵庫事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。

3．調査の推移

（発掘作業）

確認調査　平成 24 年 3 月 15 日
　実施機関：兵庫県立考古博物館

確認調査　平成 24 年 6 月 15 日
　実施機関：兵庫県立考古博物館

本発掘調査　平成 24 年 11 月 19 日～平成 25 年 3 月 5 日
　実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
　工事請負：三栄建設工業株式会社

本発掘調査　平成 24 年 11 月 22 日
　実施機関：兵庫県立考古博物館

本発掘調査　平成 25 年 3 月 7 日
　実施期間：兵庫県立考古博物館

本発掘調査　平成 25 年 5 月 28 日～平成 25 年 10 月 10 日
　実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
　工事請負：三栄建設工業株式会社

（出土品整理作業）

平成 26 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日
　実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

平成 27 年 4 月 1 日～平成 27 年 12 月 28 日
　実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

4．空中写真測量は、アジア航測株式会社（平成 24 年度）と株式会社オオバ大阪支店（平成 25 年度）と委託契約を交わして行った。

5．本書の第 1 図は国土地理院発行の 1 ／ 25,000「広根」（平成 20 年 3 月改訂）を用いた。第 2 図は、兵庫県教育委員会発行『平成 23 年度　兵庫県遺跡地図』の 79「広根」（平成 23 年日発行）をもとに加工している。

6．測量基準点は、２級基準点神２－１をもとに設置した。座標は世界測地系に基づくもので、調査地

は第Ｖ系に属する。水準高は東京湾平均海水準（Ｔ．Ｐ.）を基準とした海抜高度である。

7．本書の編集は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　中川　渉（当時　現兵庫県立歴史博物館）・甲斐昭光（当時　現兵庫県立考古博物館）・永惠裕和が担当した。また各章・節の執筆については、以下、担当を示す（なお、特に明記がない箇所については、中川・永惠が担当した）。

第１章　第２節　石道西ヶ峰一石五輪塔群――多賀茂治（兵庫県立考古博物館）

第３章　第２節　出土遺物　――大本朋弥（（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部、当時）

〃　第３節　出土遺物　――岸本一宏（（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部）

なお、第４章第１節では、立命館大学の青木哲哉先生から玉稿をいただいた。

8．本調査において出土した遺物や作成した写真･図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。

9．発掘調査及び報告書の作成にあたっては、下記の方々および機関のご協力・ご指導を得た。記して謝意を表します。

福永伸哉（大阪大学）、岡野慶隆・山田浩史（川西市教育委員会）、野原　孝（川西市郷土館）

（敬称略、五十音順）

凡　例

1．遺物には通し番号を付けている。ただし石製品及び金属製品には、その頭にそれぞれＳ、Ｍをつけて、土器と区別している。

2．土器の実測図は、種別ごとに以下のように断面の表現を区別している。

白抜き：縄文土器・弥生土器・土師器・土製品　／　黒塗り：須恵器　／

網掛け（薄）：黒色土器・瓦器　／　網掛け（濃）：陶磁器

3．遺構には通し番号を付し、その頭に遺構の種類を表記した。ただし、１・２区は１から、３区は501から、４区は701から、５区は1501からの通し番となっている。なお、掘立柱建物については、これと別に通し番号をつけた。

遺構の種類は次の略称を用いた。

ＳＨ：竪穴住居　／　ＳＢ：掘立柱建物　／　ＳＡ：柵例　／　ＳＰ：柱穴　／　ＳＫ：土坑　／

ＳＤ：溝　／　ＳＸ：墓・特殊遺構など

4．土層等の色調については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版　標準土色帖』1992年版　を使用した。

【本文目次】

第１章　位置と環境

第１節　地理的環境 …… 1

第２節　歴史的環境 …… 1

第２章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯 …… 9

第２節　確認調査 …… 9

第３節　本発掘調査 …… 12

第４節　整理作業 …… 14

第３章　調査の成果

第１節　調査の概要 …… 15

第２節　縄文時代の遺構と遺物 …… 21

第３節　弥生時代～古墳時代初頭の遺構と遺物 …… 25

第４節　平安時代～鎌倉時代の遺構と遺物 …… 36

第５節　石器・金属器 …… 60

第４章　自然科学分析

第１節　西畦野下ノ段･井戸遺跡の地形環境（青木） …… 63

第２節　西畦野下ノ段・井戸遺跡出土縄文土器の胎土分析（パリノ・サーヴェイ株式会社）…… 73

第３節　西畦野下ノ段・井戸遺跡における石材同定（肉眼鑑定）報告 …… 88

第４節　西畦野下ノ段・井戸遺跡の花粉分析および寄生虫卵分析（株式会社パレオ・ラボ）…… 90

第５章　まとめ

第１節　遺跡の形成 …… 93

第２節　瓦器椀の時期 …… 94

第３節　中世の掘立柱建物 …… 94

報告書抄録

【巻頭写真図版目次】

巻頭写真図版１　西畦野下ノ段・井戸遺跡　遠景（南東から）
巻頭写真図版２　西畦野下ノ段・井戸遺跡と山下城址（やや上が山下城址　南西から）
西畦野下ノ段･井戸遺跡　近景(南から)
巻頭写真図版３　1－1区 東半　全景（西から）
２区 西半　全景（東から）
２区　掘立柱建物 SB04（東から）
巻頭写真図版４　３区　全景（東から）
３区 SX540　遺物出土状況（南西から）
巻頭写真図版５　４区　全景（東から）
３区 西半　全景（南東から）
巻頭写真図版６　５区　全景（東から）
５区　掘立柱建物 SB16 ～ 18（南から）
巻頭写真図版７　SK60　石敷検出状況（北から）
SK1501　石敷検出状況（西から）
巻頭写真図版８　SK796出土　重圏文鏡
SD1602出土　鳥形土製品
平安～鎌倉時代　出土遺物集合写真

【挿　図　目　次】

第１図　遺跡の位置・地理的環境 …… 2
第２図　周辺の遺跡分布図 …… 3
第３図　山下城址縄張図 …… 5
第４図　石道西ヶ峰一石五輪塔群 …… 6
第５図　一石五輪塔集合写真 …… 6
第６図　遺構掘削状況 …… 9
第７図　事業の計画図 …… 10
第８図　調査区位置図 …… 11
第９図　足場写真撮影状況 …… 12
第10図　空中写真測量実施状況 …… 12
第11図　遺構実測状況 …… 13
第12図　学識経験者による調査状況 …… 13
第13図　現地説明会状況 …… 13
第14図　微地形等高線復元図 …… 15
第15図　遺構全体図 …… 17
第16図　1・2区北壁土層断面図 …… 18
第17図　4・5区土層断面図 …… 19・20
第18図　報告遺物の割合 …… 49
第19図　調査区周辺の地形分類図 …… 64
第20図　調査区付近における微地形の分布 …… 65
第21図　３区東部のトレンチ断面図（a－a’断面図） …… 67
第22図　５区東部のトレンチ断面図（a－a’断面図） …… 67
第23図　３区中央部のトレンチ断面図（b－b’断面図） …… 68
第24図　５区西部のトレンチ断面図（c－c’断面図） …… 68
第25図　４区東端のトレンチ断面図（d－d’断面図） …… 69
第26図　４区西端のトレンチ断面図（f－f’断面図） …… 70
第27図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（1） …… 79
第28図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（2） …… 80
第29図　砕屑物・基質・孔隙の割合 …… 80
第30図　砂の粒径組成 …… 81
第31図　胎土薄片（１） …… 84
第32図　胎土薄片（２） …… 85
第33図　胎土薄片（３） …… 86
第34図　胎土薄片（４） …… 87

第35図　西畦野下ノ段・井戸遺跡の石材同定結果 …… 89
第36図　花粉化石・寄生虫・プレパラート写真 …… 92
第37図　瓦器椀法量分布 …… 94
第38図　掘立柱建物諸属性一覧図 …… 95

【表　目　次】

第１表　畦野に関する文書集成 …… 8
第２表　試料一覧および胎土分類結果 …… 73
第３表　薄片観察結果（１～４）…… 75 ～ 78
第４表　石材同定結果表 …… 88
第５表　分析試料一覧 …… 90
第６表　産出花粉胞子一覧表 …… 91
第７表　寄生虫卵分析に用いた試料の計算値と寄生虫卵数 …… 91
第８表　遺物観察表 …… 97

【図　版　目　次】

図版１　縄文時代遺構平面図（１/600）
図版２　縄文時代前期～後期　土坑（1）
図版３　縄文時代前期～後期　土坑（2）
図版４　縄文時代晩期～後期　土坑（3）
図版５　弥生時代後期末～古墳時代初頭遺構平面図
図版６　弥生時代後期（1）　竪穴住居・土坑
図版７　弥生時代後期（2）　溝（1）　平面図
図版８　弥生時代後期（3）　溝（2）
図版９　弥生時代後期（4）　SX540
図版10　弥生時代後期（5）　SX540遺物出土状況図
図版11　弥生～古墳時代　土坑
図版12　弥生～古墳時代　土坑
図版13　平安～鎌倉時代遺構平面図（東側）
図版14　平安～鎌倉時代遺構平面図（西側）
図版15　掘立柱建物跡周辺図（1）SB22 ～ 24
図版16　掘立柱建物跡周辺図（2）SB02・03、19・20
図版17　掘立柱建物跡周辺図（3）SB05・06、13・14
図版18　掘立柱建物跡周辺図（4）SB10・11
図版19　掘立柱建物跡周辺図（5）SB12
図版20　SB01 ～ 03　平面図・断面図
図版21　SB04　平面図・断面図
図版22　SB05・06　平面図・断面図
図版23　SB07 ～ 09　平面図・断面図
図版24　SB10　平面図・断面図
図版25　SB11・12　平面図・断面図
図版26　SB13・14　平面図・断面図
図版27　SB15・16　平面図・断面図
図版28　SB17　平面図・断面図
図版29　SB18　平面図・断面図
図版30　SB19　平面図・断面図
図版31　SB20　平面図・断面図
図版32　SB21　平面図・断面図
図版33　SB22・24　平面図・断面図
図版34　SB23　平面図・断面図
図版35　SB25・SA01　平面図・断面図
図版36　SB05 雨落溝 断面図、SB10 雨落溝平面図・断面図
図版37　掘立柱建物跡　柱穴　土層名一覧（1）
図版38　掘立柱建物跡　柱穴　土層名一覧（2）
図版39　15・16区谷状落ち、SX795　平面図・断面図
図版40　中世墓（SX1617 ～ 1619・1633）
図版41　石敷遺構（1）
図版42　石敷遺構（2）
図版43　炉跡

図版44　焼土坑
図版45　集石遺構・溝状土坑
図版46　土坑（1）
図版47　土坑（2）
図版48　土坑（3）
図版49　土坑（4）
図版50　土坑（5）
図版51　土坑（6）、柱穴断面
図版52　出土土器（縄文時代１）
図版53　出土土器（縄文時代２）
図版54　出土土器（弥生～古墳時代１）
図版55　出土土器（弥生～古墳時代２）
図版56　出土土器（弥生～古墳時代３）
図版57　出土土器（弥生～古墳時代４）
図版58　出土土器（平安～鎌倉時代１）
図版59　出土土器（平安～鎌倉時代２）
図版60　出土土器（平安～鎌倉時代３）
図版61　出土土器（平安～鎌倉時代４）
図版62　出土土器（平安～鎌倉時代５）
図版63　出土土器（平安～鎌倉時代６）
図版64　出土土器（平安～鎌倉時代７）
図版65　出土土器（平安～鎌倉時代８）
図版66　出土土器（平安～鎌倉時代９）
図版67　出土土器（平安～鎌倉時代10）
図版68　出土石器（1）
図版69　出土石器（2）
図版70　出土石器（3）
図版71　出土金属器（1）
図版72　出土金属器（2）

【写 真 図 版 目 次】

写真図版１　西畦野下ノ段・井戸遺跡 遠景（南から）
西畦野下ノ段・井戸遺跡 遠景（東から）
写真図版２　１区　全景（真上から）
１区　全景（西から）
写真図版３　１区　東半（西から）
２区　東半（西から）
写真図版４　２区　全景（真上から）
２－２区　西半（西から）
３区　西半（西から）
写真図版５　４区　全景（真上から）
５区　全景（真上から）
写真図版６　４区　全景（西から）
写真図版７　５区　東半（西から）
写真図版８　５区　東半（東から）
５区　西半（西から）
写真図版９　SK80　土層断面（北から）
SK163　土層断面（南東から）
SK111　土層断面（東から）
SK111　完掘状況（東から）
SK313　土層断面（北から）
SK313　完掘状況（北から）
写真図版10　SK337　遺物出土状況（西から）
SK337　遺物出土状況（南から）
SK337　土層断面（東から）
SK337　完掘状況（西から）
SK501　完掘状況（北から）
SK501　完掘状況（東から）
SK501　土層断面（西から）
写真図版11　SK532　土層断面（東から）
SK532　完掘状況（南から）
SK584　土層断面（北東から）
写真図版12　SK604　土層断面（南から）
SK605　土層断面（東から）
SK606　土層断面（南西から）
SK607　土層断面（南から）
SK599　土層断面（西から）
SK1630　土層断面（南から）
写真図版13　SH1607　完掘状況（南西から）

SH1607　周溝断面（西から）
SH1607　土層断面（南から）
SH1607　遺物出土状況（東から）
SH1607　遺物出土状況（東から）
写真図版14　SD01・02・05　航空写真（真上から）
SD01・02・05（西から）
写真図版15　SD01 a-a’ 土層断面（東から）
SD01 d-d’ 土層断面（北東から）
SD01 d-d’ 断面付近（北東から）
SD02 c-c’ 土層断面（東から）
SD05 a-a’ 土層断面（東から）
SD05 f-f’ 土層断面（東から）
SD05 g-g’ 土層断面（東から）
写真図版16　SD01 d-d’ 付近遺物出土状況（東から）
SD01 d-d’ 付近遺物出土状況（東から）
SD01 d-d’ 付近遺物出土状況（東から）
SD01 d-d’ 付近遺物出土状況（東から）
SD01（SD1602）・SD1604・SK1605・
SK1606（南西から）
SK1603　土層断面（南西から）
SD1604　土層断面（西から）
写真図版17　SX540　遺物出土状況（南から）
SX540　完掘状況（南から）
写真図版18　SX540④・⑤区　遺物出土状況（南から）
SX540③・④区　遺物出土状況（南から）
SX540①区　遺物出土状況（南から）
SX540③区B群　遺物出土状況（東から）
SX540③区　遺物出土状況（南東から）
SX540　遺物出土状況　土製品アップ
SX540②区A群　遺物出土状況（北から）
SX540⑤区　遺物出土状況　砥石アップ
写真図版19　SX540　A-A’ 土層断面（南から）
SX540　A-A’ 土層断面（南から）
SX540　C-C’・D-D’ 土層断面（西から）
SX540　A-A’ セクション除去後(西から)
SX540　B-B’ 土層断面（西から）
写真図版20　SX1543　遺物出土状況（南から）
SX1543　土層断面（北から）
SX1543　遺物出土状況（東から）
SX1543　完掘状況（南から）
写真図版21　SX518　土層断面（北西から）
SX525　遺物出土状況（東から）
SX1539　（南から）
SX1539　土層断面（南から）
SX1539　遺物出土状況（西から）
SK796　重圏文鏡出土状況（南から）
SK1609　土層断面（西から）
写真図版22　SK1662　土器出土状況（南東から）
SK1662　土器出土状況（北東から）
SK41　土器検出状況（西から）
SK41　土器出土状況（南から）
SK41　完掘状況（北から）
写真図版23　SB01　全景（東から）
SB01　SP168（東から）
SB01　SP170（南から）
SB01　SP174（東から）
SB02・03　全景（西から）
写真図版24　SB04　全景（西から）
SB02　SP303（東から）
SB03　SP294（東から）
SB03　SP320（南から）
SB04　SP421（東から）
SB04　SP422（東から）
SB04　SP376（南から）
写真図版25　SB05・06　全景（南から）
SB05　SP974・SP886（南から）
SB05　SP835（西から）
SB06　SP817 青磁出土状況（北から）
SB06　SP1008・836（北から）
写真図版26　SB07・08　全景（南から）
SB07　SP1048･SB08　SP1058（南東から）
SB08　SP1056（南から）
SB08　SP1057（南から）
SB08　SP1059（南から）

写真図版27　SB09　全景（南から）
SB11　全景（南から）
SB09　SP1033（北から）
SB09　SP1034（北から）
SB11　SP1088（東から）
写真図版28　SB10　全景（南から）
SB10　SP1085（北から）
SB10　SP1065（東から）
SB10　SP870（南東から）
写真図版29　SB12　全景（西から）
SB13・14　全景（南から）
SB12　SP772（北から）
SB13　SP1019（東から）
SB14　SP871（南から）
写真図版30　SB15　全景（南から）
SB16　全景（南から）
SB15　SP956（南から）
SB16　SP965（西から）
SB16　SP1671（南から）
写真図版31　SB17　全景（南から）
SB18　全景（南から）
SB17　SP1506（南から）
SB17　SP1524（東から）
SB18　SP1687（南から）
写真図版32　SB19・20　全景（南から）
SB21　全景（南から）
SB19　SP1717（南から）
SB20　SP1559（西から）
SB21　SP1658（南から）
写真図版33　SB22～24　全景（南から）
SA01　全景（東から）
SA01　SP434（南から）
SB22　SP1801（南から）
SB23　SP1766（南から）
SB24　SP1765（南から）
写真図版34　谷状落ち　全景（北から）
谷状落ち　遺物出土状況（東から）
谷状落ち　土器出土状況（南から）
谷状落ち　土器出土状況（南から）
写真図版35　SX795　土層断面（西から）
SX795　土層断面（北から）
SX795　完掘状況（北から）
写真図版36　SX1617　全景（南から）
SX1617　完掘状況（南から）
SX1617　土層断面（南から）
SX1617　土層断面（東から）
SX1618　土層断面（南から）
SX1618　完掘状況（南から）
写真図版37　SX1619　遺物出土状況（西から）
SX1633　遺物出土状況（東から）
SX1633　青磁出土状況（東から）
SX1633　鉄刀出土状況（東から）
写真図版38　SK60　焼土検出状況（東から）
SK60　焼土検出状（東から）
SK60　石敷状況（北から）
SK60　土層断面（北から）
SK60　土層断面（東から）
写真図版39　SK60　土器出土状況（東から）
SK60　完掘状況（北から）
SX1501　検出状況（西から）
SX1501　上層土層断面（西から）
写真図版40　SX1501　上層半截状況（西から）
SX1501　上層礫除去状況（西から）
SX1501　土器出土状況（東から）
SX1501　炭層　瓦器出土状況（南から）
SX1501　炭層検出状況（西から）
写真図版41　SX1501　石敷検出状況（西から）
SX1501　石敷半截状況（西から）
SX1501　石敷断割り状況（南から）
SX1501　完掘状況（西から）
写真図版42　SK1537・1538　全景（南から）
SK740　（南から）
SK896　（北から）
SK176　（北東から）

SK187　土層断面（南から）
SK408　土層断面（南西から）
SK454　土層断面（北から）
写真図版43　SX745　集石検出状況（南から）
SX745　土層断面（南から）
SX745　遺物出土状況（東から）
SX745　遺物出土状況（北西から）
SX745　遺物出土状況（西から）
写真図版44　SX761　集石検出状況（南から）
SX1592　土層断面（南から）
SX1592　（南東から）
SX1592　完掘状況（南から）
写真図版45　SK68　完掘状況（南から）
SK72　土層断面（西から）
SK97　土層断面（南から）
SK104　土層断面（北から）
SK113　土層断面（南から）
SK134　土層断面（南東から）
SK183　土層断面（北西から）
SK261　土層断面（西から）
写真図版46　SK393　土層断面（南西から）
SK738　遺物出土状況（南から）
SK742　土層断面（南から）
SK759　土層断面（南から）
SD759内SK760・791　遺物出土状況（南から）
SK760　遺物出土状況（西から）
SK760　遺物出土状況（西から）
写真図版47　SK788　土層断面（北から）
SK794　遺物出土状況（西から）
SK794　土層断面（北西から）
SK793　土層断面（西から）
SK799　土層断面（東から）
SK813　土層断面（西から）
写真図版48　SK814　土層断面（西から）
SK872　土層断面（南から）
SK853　土器出土状況（西から）
SK853　土器出土状況（北東から）
SK859　土層断面（南東から）
SK859　土器出土状況（南西から）
SK878　土器出土状況（南から）
写真図版49　SK1579　土層断面（南西から）
SK763　（東から）
SX1614　土層断面（南東から）
SK256　土層断面（南から）
SP394　土層断面（南から）
SP862　土層断面（南から）
SP1071　土層断面（南から）
SP1571　土層断面（南から）
写真図版50　SK1616　出土土器
SK1630・111・501・313・337　出土土器
写真図版51　SK80・599・163　出土土器
包含層出土土器（1）
写真図版52　包含層出土土器（2）
SH1607・SD1602　出土土器
写真図版53　SD1602・SX518　出土土器
SD1602　出土土製品
写真図版54　SD1602　出土土器
SX1543　出土土器
SX540　出土土器（1）
写真図版55　SX540　出土土器（2）
写真図版56　SX540　出土土器（3）
SK41・1603・1662　出土土器
写真図版57　SK・SP・包含層　出土土器
SB03～10　出土土器
写真図版58　SB10・20　出土土器
SB12～25　出土土器
写真図版59　SD759　出土土器
SD822・857　出土土器
谷状落ち　出土土器（1）
写真図版60　谷状落ち　出土土器（2）
SX・SK　出土土器
写真図版61　SK396・738・794・760　出土土器
SX1619・1633　出土土器

写真図版62　SX60・1501　出土土器
SK853　出土土器
SK872・878・859　出土土器
写真図版63　SX・SK　出土土器
SD01　出土土器
SP409・743　出土土器
写真図版64　SP　出土土器
包含層　出土土器（1）
写真図版65　包含層　出土土器（2）
包含層　出土土器（3）
写真図版66　出土青磁・白磁
出土緑釉・灰釉陶器
写真図版67　出土石器（1）
写真図版68　出土石器（2）
写真図版69　遺構　出土金属器
写真図版70　包含層　出土金属器
出土スラッグ

第１章　遺跡の位置

第１節　地理的環境

西畦野下ノ段・井戸遺跡の所在する川西市は、兵庫県の東端に位置し、北側で猪名川町、大阪府能勢町、西側で宝塚市、南側で伊丹市、東側で大阪府の豊能町、箕面市及び池田市に接する。

市の面積は 53,44㎢、人口は約 16 万人であり、近年では京阪神地区のベットタウンとして機能している（兵庫県市町振興課編 2014）。

市域は南北に長く、北部は東から長尾丘陵、西から箕面丘陵が挟み込み、北摂山地の中に包摂される。市域北部には、２つの盆地があり、かつての東谷村と多田村であった集落が営まれている。これに対し、市域南部は北摂丘陵裾部から伸びる大きな扇状地が広がっている。

旧多田村と旧川西町を結ぶように南北に猪名川が縦断し、一庫ダムを水源とし旧東谷村にあたる盆地を縦断する一庫大路次川も旧多田村で猪名川へと注ぐ。川西市は、これらの水系でつながる旧東谷村、旧多田村、旧川西町の１町２村が昭和 29 年に合併してできた市である。

山がちな北部と伊丹台地に位置する南部とは国道 173 号線で繋がっている。また、南部の平野部には東西を横断してＪＲ福知山線・阪急宝塚線が、南北に能勢電鉄が縦断しており、東西南北への結節点となっている。これらの鉄道網の整備とその利便性の高さに起因して、昭和 40 年ごろから猪名川町南部とともに市の北部ではニュータウン造成が始まった。この開発によって、北部にはかつての集落を基盤とした農村的風景と近代的な分譲地を基盤とした都市的風景がモザイク状に展開する様相となり、今に至っている。また近年では、こういった旧来の住民とかつての新規住民が一体となった地域活性化のためのコミュニティづくりが行われている（「東谷ズム」「多田トラ市」などの住民主体の地域起こし活動が特筆される）。

第２節　歴史的環境

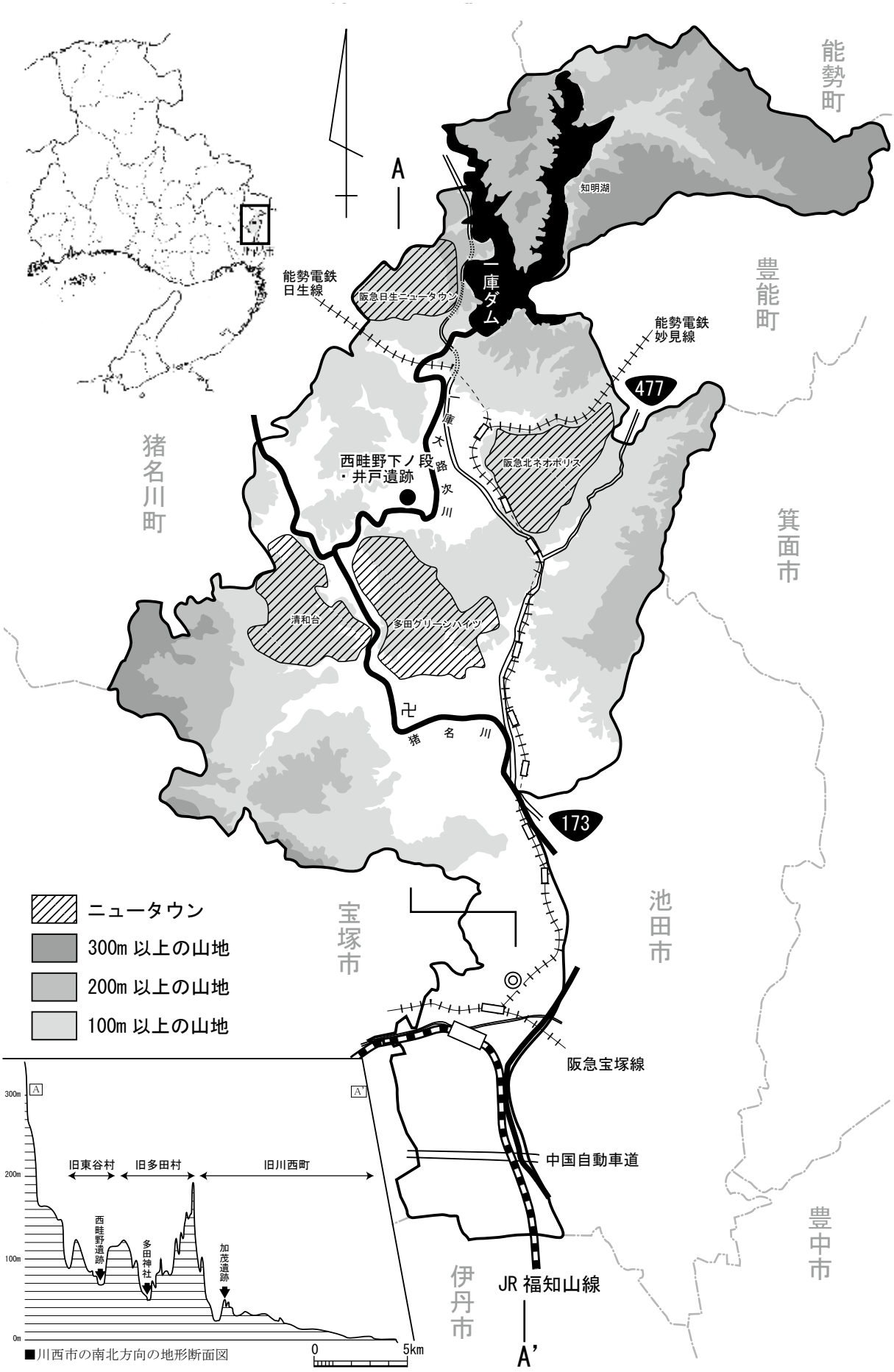
（１）周辺の遺跡

西畦野下ノ段・井戸遺跡周辺には埋蔵文化財包蔵地が少ないため、ここでは同じく北摂山地の盆地であり、隣接する多田盆地（旧多田村域）と東谷盆地（旧東谷村域）の埋蔵文化財包蔵地の比較を中心にしながら、歴史的環境について述べる。

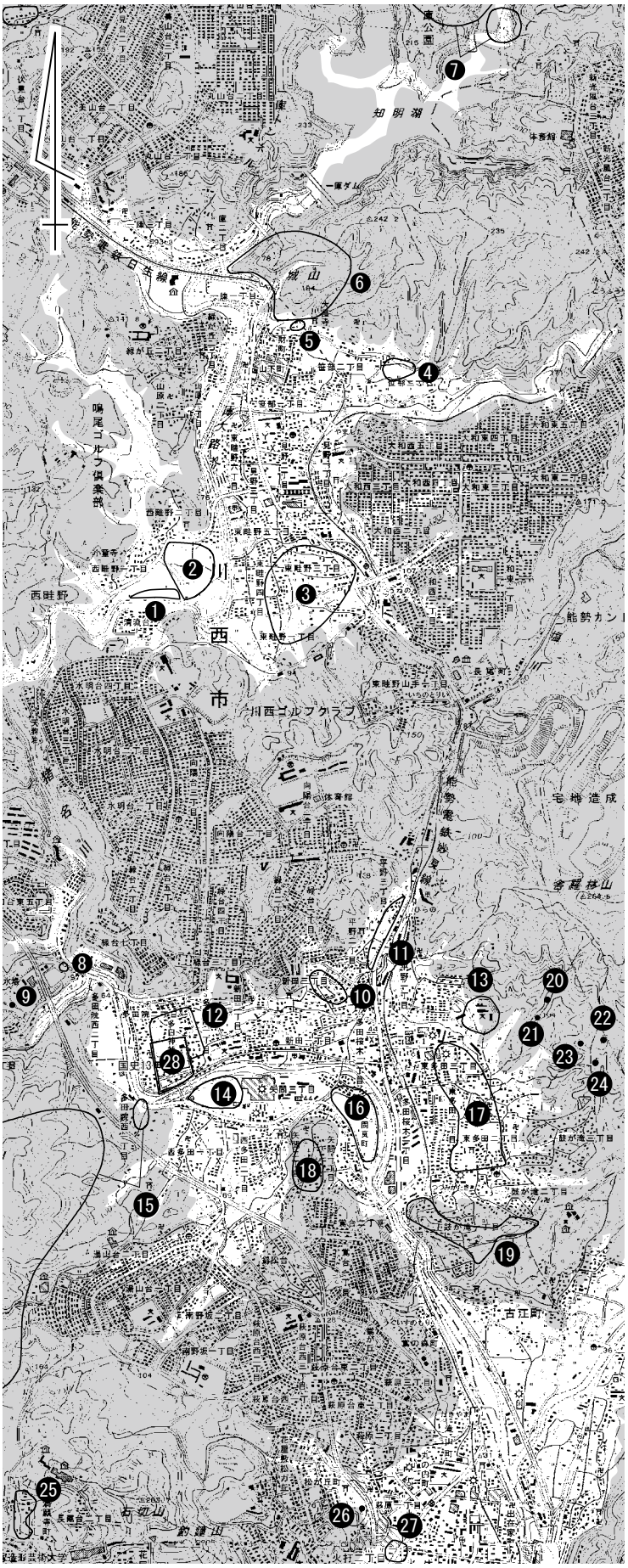
旧石器・縄文時代　両盆地では、旧石器時代の遺跡は見つかっていない。市域南部の加茂遺跡ではナイフ形石器・翼状薄片等の出土資料や採集資料が見つかっている。

縄文時代の遺跡も、旧石器時代同様に見つかっていない。しかし、縄文時代後期から晩期にかけての土器や石器は加茂遺跡の調査において見つかっている。また、加茂遺跡の西側では縄文時代後期の埋設土器が４基見つかっており、少なくとも後期には加茂遺跡周辺に集落が営まれていたことがわかる。

弥生時代　東谷盆地では、これまで弥生時代の遺跡は見つかっていない。多田盆地では、２つの遺物散布地と１つの集落遺跡が、いずれも標高 200m 以下の丘陵上で見つかっている。川西市と池田市にまたがる鼓ヶ滝遺跡では、住居跡は見つかっていないが、溝や小穴が確認されており、高地性集落の可能性が指摘されている。



第１図　遺跡の位置・地理的環境



No.	遺跡名	遺跡番号
1	**西畦野下ノ段・井戸遺跡**	180041
2	西畦野遺跡	180034
3	東畦野遺跡	180033
4	笹部遺跡	180037
5	山下遺跡	180036
6	山下城址	180035
7	国崎地区間歩群	180040
8	巌険遺跡	180022
9	巌険古墳	180023
10	新田城址	180031
11	西向遺跡	180032
12	多田院遺跡	180021
13	蓮源寺遺跡	180025
14	堂ノ本遺跡	180020
15	多田地区間歩群	180039
16	堂ノ前遺跡	180018
17	東多田遺跡	180024
18	矢問遺跡	180019
19	鼓ヶ滝遺跡	180017
20	上ケ芝１号墳	180029
21	上ケ芝２号墳	180030
22	松ケ芝１号墳	180026
23	松ケ芝２号墳	180027
24	松ケ芝３号墳	180028
25	満願寺遺跡	180016
26	勝福寺遺跡	180015
27	火打遺跡	180014
28	多田院（国指定史跡）	国史13

周辺の遺跡の大まかな時期

時代	旧多田村	旧東谷村
旧石器		
縄文		❶
弥生	❽❿⓲	❷❶
古墳	❾⓴～㉔㉖	
奈良		
平安	⓬⓭⓱㉕㉘	❶
中世	❿⓮	❻❶
近世	⓯	❺❼
その他	⓫⓰㉗	❸❹

旧多田村と旧東谷村の遺跡の時代別分類
（『兵庫県遺跡地図』第２冊より作成）

山地形
（明治20年仮製２万分の１地形図より作成）

0　1.500m

第２図　周辺の遺跡の分布図（1/35,000、『兵庫県遺跡地図』を利用）

市域南部では、下加茂遺跡・加茂遺跡・小戸遺跡などの集落遺跡が見つかっている。中でも加茂遺跡跡は、0.2㎢もの大規模集落であり、これまで200次を超える調査が実施され、環濠に囲まれた集落中心域や環濠外居住区、墓地等の集落構造が明確になってきている。

集落中心部では、竪板塀と考えられる区画を持つ大型掘立柱建物が見つかり、畿内を代用する大規模集落として注目され、平成12年に国の史跡に指定された。

古墳時代　多田盆地の東側丘陵で、５基の円墳が見つかっている。発掘調査が行われていないため、副葬品などの詳細は不明であるが､少なくとも近隣に造墓主体となった人々の集落の存在が推測される。また、多田盆地以北では、隣接する猪名川町を含め、古墳は確認されていない。

一方、市域南部では、古墳・集落遺跡が見つかっている。栄根遺跡で古墳時代の集落跡が検出された。栄根遺跡では自然流路に挟まれた微高地上に多数の竪穴住居が作られている。

古墳では、勝福寺古墳や豆坂古墳群がある。勝福寺古墳は、6世紀前半に構築された前方後円墳で、後円部に２基の横穴式石室、前方部に木棺直葬墓を設けるものであることが、これまでの調査によって明らかにされている。

奈良～平安時代　多田盆地には、国指定史跡多田院・多田神社遺跡・東多田遺跡がある。多田院は、天禄元（970）年に清和源氏の祖源満仲によって創建されたと伝えられる寺院である。18次におよぶ多田院遺跡の発掘調査では、仏堂と考えられる建物跡が検出されているが、いずれも室町～近世のものであり、多田院の創建期の伽藍配置を示す遺構は今のところ発見されていない。

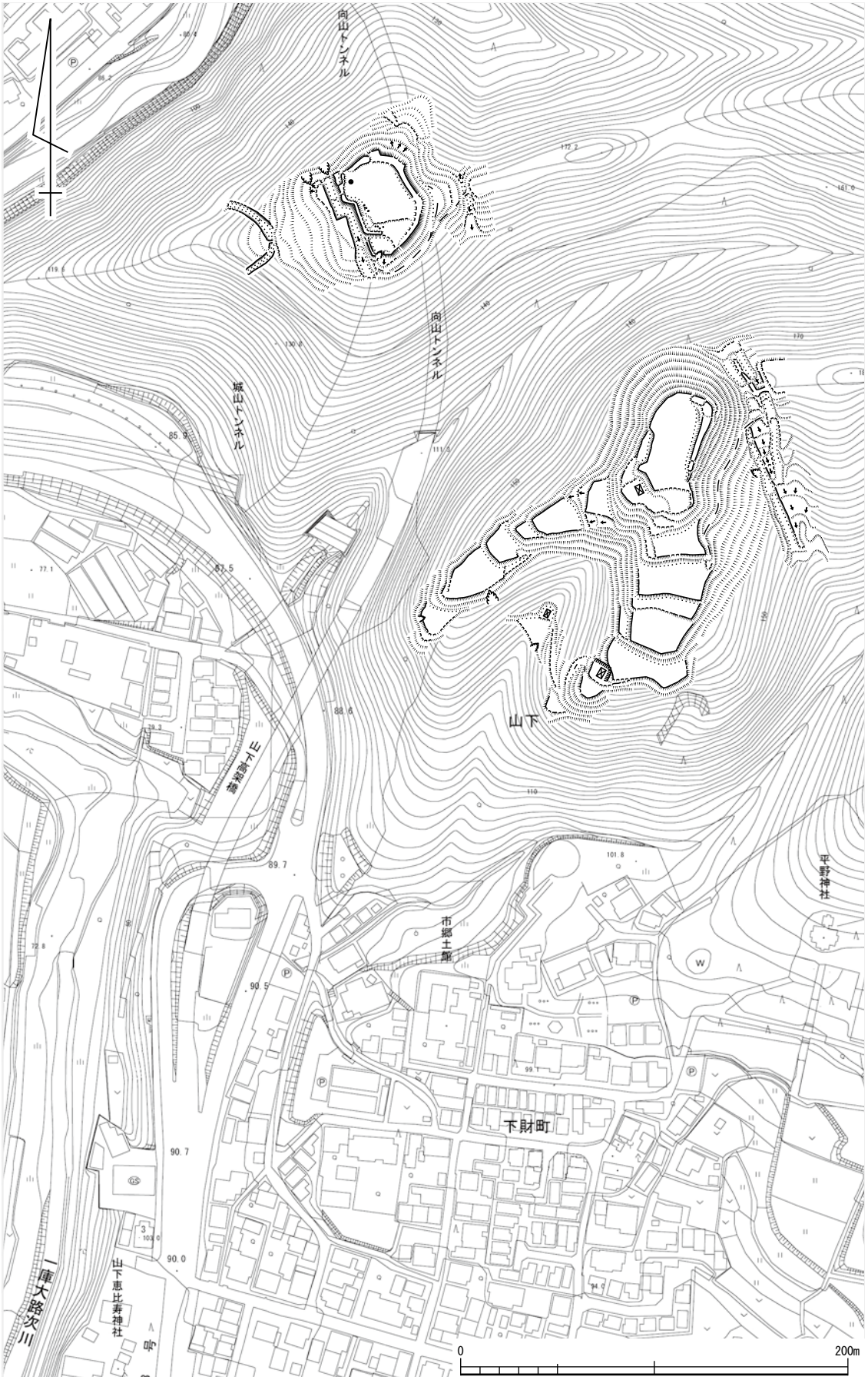
市域南部では、満願寺遺跡・栄根寺廃寺がある。満願寺遺跡では、発掘調査の結果、平安時代から室町時代にかけての三期の仏堂跡が検出されている。栄根寺廃寺では、火災を受けた仏堂と須弥壇が検出されている。

中世　東谷盆地には山下城址がある。山下城址は東谷盆地北側の丘陵に所在する。城址は北尾根と南尾根に、遺構としては独立して存在している。前者は東西約135ｍ、南北約90ｍの比較的小規模な単郭の城館跡である。主郭を土塁が囲み、尾根続きに対しては横堀状の堀切を設け、導線を遮断している。後者は尾根の頂部から下る尾根続きに延びる連郭の城館跡である。最高所に主郭を設け、二股にわかれた尾根のそれぞれに階段状に曲輪を設けている。主郭の背後の尾根続きには堀切と土塁を設けて、導線を遮断している。多田院御家人の一人である塩川氏の支城と言われている（高橋2005）。文献資料には、この頃から東谷盆地の地名や事項が現れてくるが、遺跡として明確なものは少ない。

石道西ヶ峰一石五輪塔群

石道集落西側の丘陵上で県道川西インター線の工事中に一石五輪塔群が発見されたため、平成25年11月に兵庫県立考古博物館が調査をおこなった（遺跡調査番号：2013134）。尾根上の墓地に向かう参道の北側、1.5ｍ×0.5ｍの範囲に６基の花崗閃緑岩製の一石五輪塔が所在しており、その周辺には石材が散布していた。調査の結果、一石五輪塔群の下層で18世紀代の近世墓５基を検出した。いずれも円形ないしは楕円形の墓坑をもつ火葬墓であり、墓坑上には扁平な川原石を置く。うち２基には銅銭や陶磁器が副葬され、周辺からは土師器の小皿が出土している。

一石五輪塔はこの近世墓の上に立てられていた。いずれも16世紀～17世紀に製作されたものである。台石を伴うものと埋め立て式が混じること、地輪部の幅と全高の比率にばらつきが見られることなどから、若干時期差があると考えられる。設置方法も統一されていないので、別々の場所にあった


向山トンネル
向山トンネル
城山トンネル
山下
山下高等学校
市郷土館
平野神社
下財町
山下恵比寿神社
一庫大路次川
0
200m

第３図　山下城址 縄張図

第４図　石道西ヶ峰一石五輪塔群　写真

第５図　一石五輪塔　集合写真

一石五輪塔を 18 世紀以降に 1 箇所に寄せ集めた可能性が高い。もともと設置されていた場所については特定が難しいが、道路用地外の尾根上に川原石の散布が認められるので、この付近に石塔を伴う中世墓が存在した可能性も考えられよう。

近世　東谷盆地では、山下遺跡と国崎地区間歩（まぶ）群が見つかっている。江戸時代中期には、銀・銅精錬の新手法として、「山下吹き」が出現する（兵教委 1994）。この手法は、川西市山下で発明されたと言われており、精錬所跡である山下遺跡と関連性が高いと考えられる。現在この地域は住宅地となっているが、谷裾部分には、精錬所跡から産出されたと考えられるスラッグが多量に散布しており、現在では住宅地の擁壁などに利用されている。

国崎地区間歩群は、複数の間歩（銀・銅の採掘坑）である。国崎地区間歩群などで採掘された銀や銅を精錬したのであろう。近年では、各間歩の３次元測量も行われており、間歩内部の詳細が判明してきている。

小括　西畦野下ノ段・井戸遺跡の所在する東谷盆地では、中世以降に多田盆地の開発に続く形で人々の生活の痕跡が確認できる。今回は周辺遺跡として検討しなかったが、西畦野下ノ段・井戸遺跡と同時期に調査が行われた猪名川町の広根遺跡でも、中世を中心とする遺構が確認されていることから、こういった平安時代以降の猪名川・一庫大路次川水系での遺跡の出現は、多田盆地に所在する多田院を中心とした多田院御家人の開発によるものと推定することができる。

（２）文献資料から見た西畦野

管見の限り西畦野関連の文書は 35 点あり、時代別には古代が２点、中世が 25 点、近世が８点である。古代文書には、『住吉神社神代紀』と『日本後紀』がある。中世文書は基本的には所領関係のものであり、近世文書は西畦野村の郷帳や検地帳である（第１表）。

①「畝野」から「畦野」へ

現在の地名は「畦野」であるが、大同３年（808）に文献上に姿を表した畦野は、古代では「畦野」ではなく「宇祢野」あるいは「畝野」と表記されていた（史料１・２）。文書の上で名称の変換が起こるのは、早くとも江戸時代前期の延宝７年（1679）以降のようである（史料 31）。延宝７年の検地帳以降、当地は「畦野」と記されており、地名が「畝野」から「畦野」へと転換していく。残念ながら地名の文字表記の変化に関する直接的な史料は確認できなかった。

②畦野の所領支配関係

前節では、畦野周辺の遺跡の動態から隣接する多田庄との関わりについて推測した。ここでは史料から見える畦野の所領支配関係について概観する。

多田庄は、前述の通り、多田院を領主として成立した荘園であり、多田源氏発祥の地としても知られている。史料４・６・11・13・21 では、いずれも「多田庄西畝野」となっており、遺跡の所在する西畦野は多田庄の一部であったことが確認できる。

ただし、西畦野は多田庄の単一の支配を受けていたわけではなく、13 世紀初頭ごろから一部が満願寺領（現川西市の飛地満願寺町）、15 世紀初頭からは同じく一部が大徳寺の末寺である長盧寺領（現西宮市）となっていることが史料からわかる（史料３～７、17 ～ 18）。

建仁３（1203）年、畝野にあった「畝野御堂」を満願寺の常行堂として移築し、御堂のあった敷地６段と畠６段を供養料として寄進した（史料３）。満願寺に寄進されたのは、合計 12 段だけではなく、延応２（1240）年の寄進状では、「西畦野仲嶋新田幷荒野」を「自昔依為御堂之敷地」のため、先例に任せて寄進したとある（史料３）。その後は、満願寺領として少なくとも貞和５年（1349）年ごろまで存続していたようである。また、多田院から満願寺に対して、「西平井（居）」が寄進されている（史料６）。

応永 19（1412）年には「畑野興福菴」、翌年には庵に附随する「西畑野　澤ノ垣内」が大徳寺の末寺である長盧寺に寄進される（史料 17・18）。

以上のように、西畦野下ノ段・井戸遺跡を含む畦野は、多田院とその支配下の満願寺、大徳寺末寺の長盧寺といった、寺社による土地支配が入り組んだ土地であった。

この状況に変化が現れるのが、塩川氏の満願寺領押領である。南北朝期頃から、多田院御家人を先祖にもつ塩川氏が御家人の中で台頭し、西摂北部を中心に支配領域を南へと拡大していく（渡辺 2005、戦国史研究会 2011）。貞和５年正月より、塩川氏が満願寺の御堂の領地を押領して困窮しているとの言上状が満願寺から多田院に提出されている（史料 10）。この押領問題は幕府の「御奉行所」にまで提出される（史料 11・12）。

その後、文安４（1447）年、「深谷山」について多田院と西畝野村で所領争いが起こった際には、塩川氏に対して裁可を仰いでおり、遅くとも 15 世紀中ごろには西畝野村が塩川氏の所領支配を受けていたことがわかる（史料 23）。

③史料に現れる地名

地名の記載されている文書は、史料４・６・18・19 である。それらには、「仲嶋」「西平井（居）」「澤ノ垣内」「上ノカキ内」「西谷八王子」がある。これらのうち「仲嶋」と「西平井（居）」は「畝野御堂」に関わる土地であり、文脈からは両者が隣接した土地であることがわかる。また「カキ内」と「垣内」が同様の土地を指すものであれば、「垣内」は河川に隣接した部分と、それと対比して「上（の段丘上か？）」にある部分を含んだ一程度の広い地名であると推測できる。

参考文献

川西市1976『川西市史第４巻　史料編』
兵庫県1986『兵庫県史　資料編中世１』
兵庫県教育委員会1994 『兵庫県生産遺跡調査報告第４冊　製銅遺跡Ⅰ』
高橋成計2003「戦国期における摂津塩川氏の成立過程」豊能町歴史文化財紀要　豊能町教育委員会
渡邊大門2005「摂津国人塩川氏に関する一考察」『市史研究紀要たからづか』22
戦国史研究会2011『織田権力の領域支配』岩田書院
兵庫県市町振興課編2014『市町要覧2015』

第１表　畦野に関する文書集成

no	西暦	年号	年	月	日	内　　容	文書名	所収
1						天皇が采女に坂根山の山中に柏葉を取らせに遣ったことから、「采女山」と名付け、それが訛って「宇祢野」となった	住吉神社神代記（住吉大社司解）	
2	808	大同	3	7		牧馬が周辺集落に害を為すため、畝野牧を廃止する	日本後紀	
3	1203	建仁	3	2	10	畝野御堂６段と畠６段を満願寺に寄進し、常行堂とする	満願寺僧徒等解状抄写⊠某外題写	満願寺文書
4	1240	延応	2	3		西畝野仲嶋新田と荒野を先例に任せ、満願寺に寄進する	多田荘新田預所経阿畠地・荒野寄進状	満願寺文書
5	1300	正安	2	5	18	畝野庄源氏女の所領を源仲基の所領とする	源仲基田地寄進状	勝尾寺文書
6	1322	元享	2	8	18	西畝野西平井を満願寺に寄進する	多田荘政所沙弥某書下写	満願寺文書
7	1336	建武	3	11		西畝野村本御寄進外、田畑５町を満願寺に寄進するよう言上	満願寺衆徒等言上状写	満願寺文書
8	1337	延元	2	12	29	畝野太郎左衛門太郎の所領を中村千若丸に宛がう	後醍醐天皇綸旨	渡辺惣官文書
9	1339	延元	4	4	5	畝野太郎左衛門太郎の所領を野田兵衛尉正英に宛がう	後醍醐天皇綸旨	渡辺惣官文書
10	1349	貞和	5	2		西畝野の御堂田と仲嶋新田と西平居を三野（塩川）又七仲澄が押領する	満願寺衆徒等言上状写	満願寺文書
11	1349	貞和	5	4	29	三野の押領を藤井国貞が御奉行所へ訴え出る	藤井国貞書状案	満願寺文書
12	1349	貞和	5	4		三野の押領を満願寺衆徒が御奉行所へ訴え出る	満願寺衆徒等重言上状写	満願寺文書
13	1349	貞和	5	7	4	藤井と満願寺の訴状を受けて、僧道忍が奉行所へ注進する。	僧道忍書状写	満願寺文書
14	1361	正平	16	8	9	畝野太郎左衛門太郎の所領を野田明王丸へ宛がう	後村上天皇綸旨	渡辺惣官文書
15	1368	応安	1	2	8	西畝野村が多田院金堂修理供養料棟別を提供する	金堂供養棟別銭注文	多田神社文書
16	1376	永和	2	10	2	西畦野村 116 家が多田院諸堂造営棟別銭を提供する	諸堂造営棟別銭郷村注文	多田神社文書
17	1412	応永	19	3	23	宗意氣叟が畝野の興福庵を大徳寺末寺の長蘆寺に寄進する	宗意氣叟興福庵寄進状	大徳寺文書
18	1413	応永	20	1	26	令白が興福庵に隣接する澤之垣内を長蘆寺に寄進する	令白敷地寄進状	大徳寺文書
19	1418	応永	25	2	15	山原道金が購入した西畦野上ノカキ内 300 歩と西谷八王子免 10 歩を多田院に寄進する	山原道金田地寄進状	多田神社文書
20	1425	応永	32	3	10	令白が興福庵その他の寄進済みであることを証明する。	令白契約状案	大徳寺文書
21	1429	永享	1	12	12	小泉左近将監入道に、興福庵が本寺如意庵の命に従わない理由を尋ねる。	京極多田家奉行人連署奉書（折紙）	大徳寺文書か？
22	1445	文安	2	8	6	山原浄祐が西畝野村のホウソ木ノ本の畠を多田神社に寄進する	山原浄祐畠地寄進状	多田神社文書
23	1447	文安	4	7	12	塩川氏に対し、西村仲延と福田仲繁が西畝野と多田院の山林相論について裁可を仰ぐ	福田仲繁・西村仲延連署書状（折紙）	多田神社文書
24	1456	康正	2	8	16	西畝野村が、山原村領内を自領と称し、押領することを佐々木道誉の代官が停止させる。	山原村境定状案	多田神社文書
25	1486	文明	18			多田神社へ西畝野村から段銭を収める	多田荘段銭結解状	多田神社文書
26	1506	永正	3			多田神社へ西畝野村から段銭を収める	多田荘段銭結解算用状	多田神社文書
27	1574	天正	2			満願寺領の西畝野村の田畑についての明細	西畦野村満願寺田注文	満願寺文書
28	1594	文禄	3			西畝野村の検地帳。畦野の村名は、「西畝野」	御検地帳	
29	1605	慶長	10			西畝野村の検地帳。畦野の村名は、「西畝野」	摂津国絵図記載村高	
30	1615 ～	天正	19			西畝野村の検地帳。畦野の村名は、「西畝野」	摂津一国高御改帳并領主村名付	
31	1679	延宝	7			西畝野村の検地帳。畦野の村名は、「西畦野」	検地帳	
32	1679	延宝	7			西畝野村の検地帳。畦野の村名は、「西畦野」	村明細帳面	
33	1702	元禄	15			西畝野村の検地帳。畦野の村名は、「西畦野」	摂津国郷帳	
34	1835	天保	5			西畝野村の検地帳。畦野の村名は、「西畦野」	摂津国郷帳	
35	1837	天保	7			西畝野村の検地帳。畦野の村名は、「西畦野」	天保国絵図作成につき達し	

※川西市 1976、兵庫県 1986 などを元に作成。

第２章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

西日本高速道路（株）、及び中日本高速道路（株）は、愛知県名古屋市と兵庫県神戸市を結ぶ延長約174km の国土開発幹線自動車道である新名神高速道路建設事業を進めている。新名神高速道路は、兵庫県内では川西市東畦野から猪名川町、宝塚市を通り、神戸市北区の神戸ジャンクションに至る延長21km であり、川西市内には西畦野・石道地区の丘陵部に（仮称）川西インターチェンジが設置される予定である。

一方、兵庫県は、新名神高速道路（仮称）川西インターチェンジへのアクセス道路として、また、川西市内の主要な南北道路である国道 173 号と県道川西篠山線を東西に結ぶ全長 3.3km、幅員 26m の４車線道路である県道川西インター線建設工事を進めており、道路網の効率的利用促進を行い、生活圏の拡大を図ろうとしている。

川西市内のこれら事業地に近接して、西畦野遺跡（県遺跡番号：180034）が存在し、平成 10 年度に兵庫県教育委員会が実施した事業地内の分布調査においても遺物が表面採集されたため、地下の遺跡の状態を確認するための確認調査が必要であると判断された。

第２節　確認調査

遺跡調査番号：2011314

実施日：平成 24 年３月 15 日

兵庫県教育委員会では、この計画に伴って埋蔵文化財の分布調査を平成 10 年度に行い、続いて確認調査を平成 23 年度に実施した。

確認調査の体制および調査結果は以下のとおりである。

調査体制

調査担当職員：山田清朝（兵庫県立考古博物館　課長補佐）・仁尾一人（同　主査）

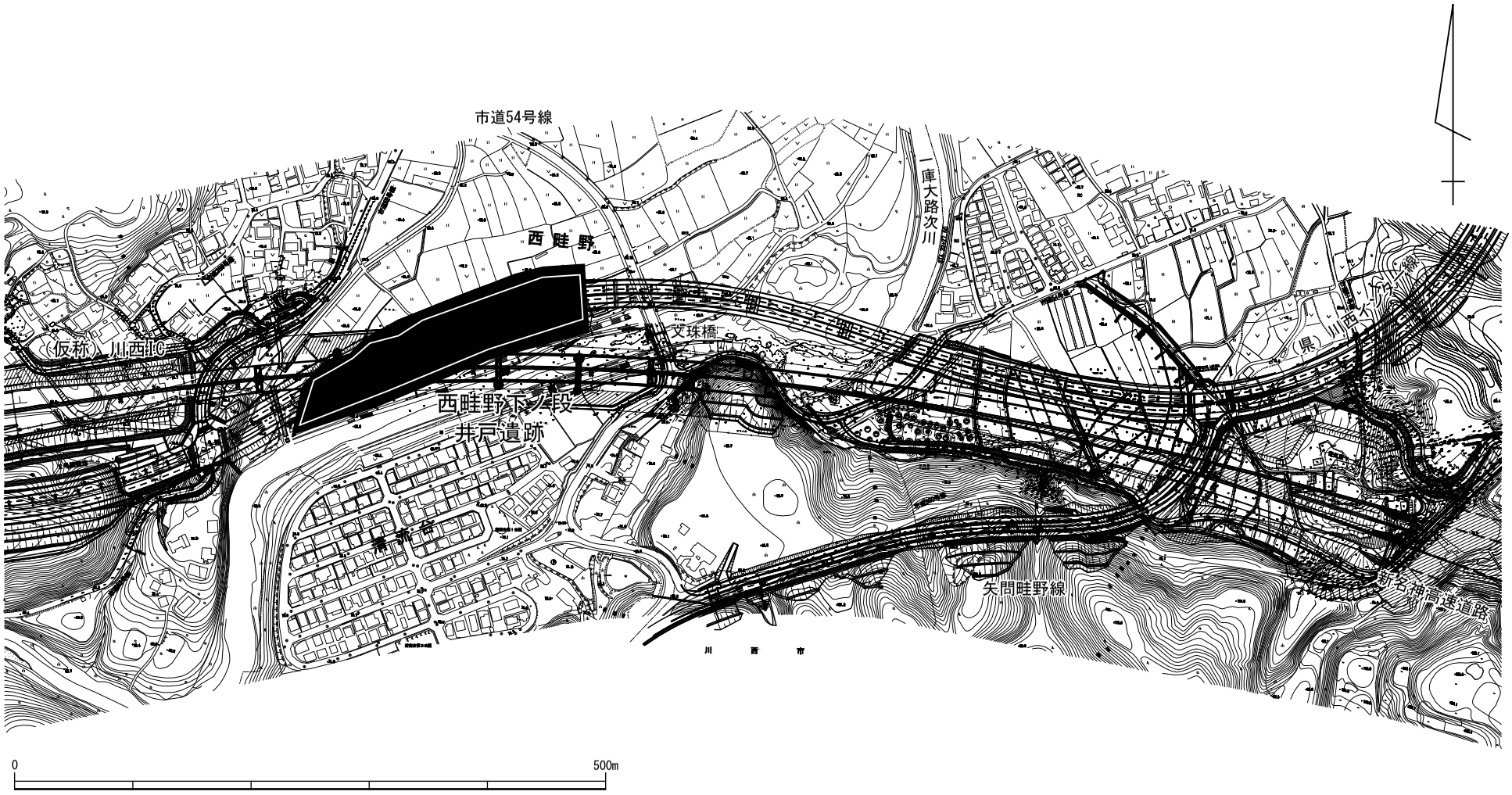
調査結果

12 ヶ所のトレンチ（トレンチ１～ 12）を設定した。トレンチ１は３×３m、トレンチ２・３・９～11 は２×３m、他は２×２mの大きさとした。調査は、遺構・遺物の認められる深さまで重機による掘削を行い、それ以下は人力による遺構・遺物の確認につとめ、調査終了後は埋戻しを行い、旧状に復した。

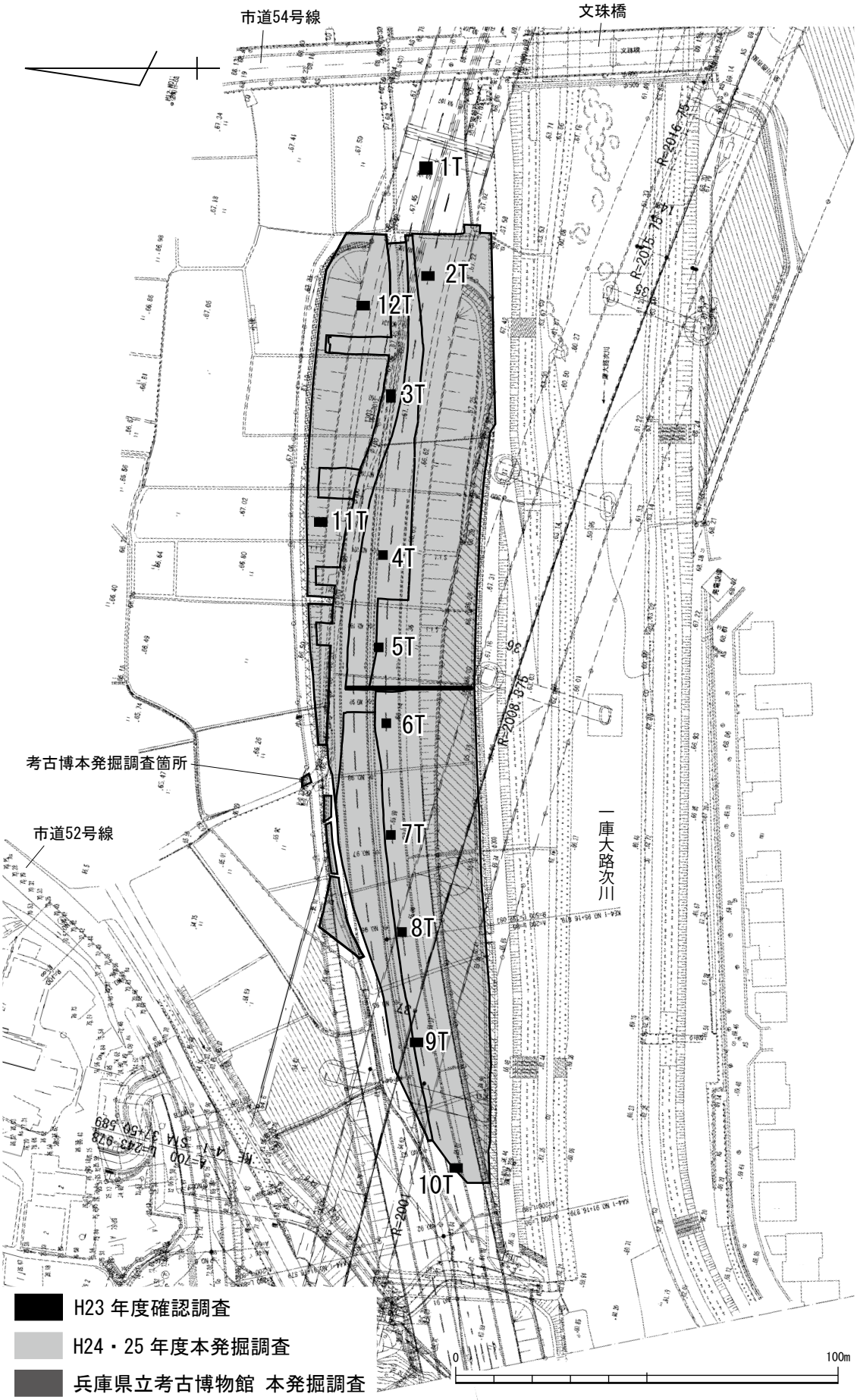
トレンチ３・５・10・11 から柱穴が、トレンチ 12 から竪穴住居の可能性のある遺構が確認された。これらは、耕土・床土の直下あるいは床土下層の灰色土の下面で検出されたもので、トレンチ９・10 北側の旧河道らしき部分を除く範囲に広く遺跡が存在することが判明した。

第６図　遺構掘削状況

なお、確認調査の結果認められた埋蔵文化財包蔵地は、「西


市道54号線
一庫大路次川
西畦野
（仮称）川西IC
文珠橋
西畦野下ノ段
井戸遺跡
清新台
矢問畦野線
川西市
（県）川西大阪線
新名神高速道路
0
500m

第７図　事業の計画図


市道54号線
文珠橋
1T
2T
12T
3T
11T
4T
5T
6T
考古博本発掘調査箇所
市道52号線
7T
8T
9T
10T
一庫大路次川
H23 年度確認調査
H24・25 年度本発掘調査
兵庫県立考古博物館 本発掘調査
0
100m

第８図　調査区位置図

畦野下ノ段・井戸遺跡」として兵庫県遺跡地図に登載された。（遺跡番号：180041）

第３節　本発掘調査

確認調査の結果、本発掘調査が必要と判断されたのは、東西 260 m、南北 50 mの約 9.800㎡に及ぶ。

本発掘調査は、新名神高速道路および（一）川西インター線の建設工事の進捗に合わせて、南北に２分割し、北半を平成 24 年度に、南半および北半の一部を平成 25 年度に調査することになった。兵庫県宝塚土木事務所から県教育委員会へ調査依頼（平成 24 年８月 24 日付　神北（宝土）第 1387 号、平成 25 年３月 25 日付　神北（宝土）第 2187 号）に基き、県教育委員会から調査委託を受けた（公財）兵庫県まちづくり技術センターが以下の体制で本発掘調査を実施した。

平成 24 年度調査体制

遺跡調査番号：2012136

実施期日：平成 24 年 11 月 19 日～平成 25 年３月５日

調査担当職員:甲斐昭光（(公財）兵庫県まちづくり技術センター　副課長)･永惠裕和（同　技術職員）

調査補助員：鹿倉智美

調査委託業者：三栄建設工業株式会社

空中写真測量委託業者：アジア航測株式会社

平成 24 年度調査日誌（抄）

平成24年11月７日	（水）	事業者、請負業者、考古博物館、周辺工事関係者と現地立会
同年11月26日	（月）	ネクスコ・県土木発注の諸工事関係者による第1回調整会議
同年11月28日	（水）	１区機械掘削開始
同年11月29日	（木）	１区人力掘削開始
同年12月25日	（火）	第２回調整会議
同年12月26日	（水）	１区空中写真測量撮影
同年12月27日	（木）	１区柱穴断割り開始
平成25年１月７日	（月）	２区機械掘削開始
同年１月８日	（火）	１区調査完了、２区人力掘削開始
同年１月18日	（金）	１区中間検査受検
同年１月29日	（火）	第３回調整会議
同年２月15日	（金）	２区空中写真測量撮影
同年２月17日	（日）	現地説明会開催（参加者300名超)。
同年２月19日	（火）	２区柱穴断割り等開始
同年２月26日	（火）	２区調査完了
同年２月28日	（木）	２区中間検査受検
同年３月５日	（火）	調査終了につき撤収

第９図　足場写真撮影状況

第 10 図　空中写真測量実施状況

平成 25 年度調査体制

遺跡調査番号：2013036

調査担当職員：中川渉（(公財）兵庫県まちづくり技術センター　副課長）・菅澤敏弘（同　臨時的任用職員）・上田健太郎（同　主査）

調査補助員：竹林裕一・下堂文寛

室内作業員：福永麻紀・木梨麻美

調査業務委託者：三栄建設工業株式会社

空中写真測量委託業者：株式会社オオバ

第 11 図　遺構実測状況

平成 25 年度調査日誌（抄）

平成25年５月16日（木）　事業者、請負業者、考古博物館、周辺工事関係者と現地立会

同年５月21日　（火）　発掘調査工事について、地元自治会へお知らせと説明

同年５月28日　（火）　ネクスコ・県土木発注の諸工事関係者による第1回調整会議

同年６月４日　（火）　３区機械掘削開始

同年６月６日　（木）　３区人力掘削開始

同年６月24日　（月）　第２回調整会議

同年６月25日　（火）　４区機械掘削開始

同年６月29日　（土）　地元説明会開催

（参加者64名）

同年７月３日　（水）　４区人力掘削開始

同年７月４日　（木）　３区空中写真測量撮影

同年７月９日　（火）　第１回中間検査

同年７月10日　（水）　３区柱穴断割り開始

同年７月23日　（火）　第３回調整会議

同年７月29日　（月）　ピット内より鏡出土

同年８月２日　（金）　５区重機掘削開始

同年８月８日　（木）　４区空中写真測量撮影

同年８月９日　（金）　４区柱穴断割り等開始

同年８月10日　（土）　地元説明会開催

（参加者30名）

同年８月12日　（月）　５区人力掘削開始

同年８月20日　（火）　第２回中間検査

同年８月21日　（水）　青木先生現地指導

同年９月20日　（金）　５区空中写真測量撮影

同年９月21日　（土）　現地説明会開催（参加者230名）

同年９月24日　（火）　ピット断割り開始

同年９月25日　（水）　第３回中間検査

第 12 図　学識経験者による調査状況

第 13 図　現地説明会状況

同年９月26日（木)･27日（金）　青木先生現地指導
同年10月３日（木）　終了立会
同年10月10日（木）　現場作業終了につき、撤収

また、平成 24 年度において、本体工事の工程上、上記の期間中に本発掘調査が行えなかった箇所については、県立考古博物館埋蔵文化財課により本発掘調査を行った。

遺跡調査番号：2012182
調査担当者：平田博幸（兵庫県立考古博物館　埋蔵文化財課長）

遺跡調査番号：2012208
調査担当者：多賀茂治（兵庫県立考古博物館　埋蔵文化財課主査）

第４節　整理作業

出土品整理は、平成 26・27 年度に（公財）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部において実施した。平成 26 年度には、土器の接合・復元、金属器の保存処理、遺物の実測を行い、平成 27 年度には、遺物のトレース・写真撮影、遺構のトレースを実施し、原稿執筆、編集作業を行った。なお、土器の水洗いについては､発掘調査時に監督員詰所において実施した。調査体制は以下のとおりである。

平成 26 年度整理体制

整理保存課	菱田淳子・長濱誠司・岡本一秀
調査第１・２課	中川渉・永惠裕和
整理嘱託員	栗山美奈・八木和子・高瀬敬子・島村順子・小野潤子・荻野麻衣・嶺岡美見・平宮可奈子・上西淳子・沼田眞奈美・桂　昭子・梶原奈津子・佐々木　愛
日々雇用職員	石田典子

平成 27 年度整理体制

整理保存課	菱田淳子・長濱誠司・岡本一秀
調査課	永惠裕和
整理嘱託員	池田悦子・佐々木誓子

第３章　調査の成果

第１節　調査の概要

（１）地形環境の復元

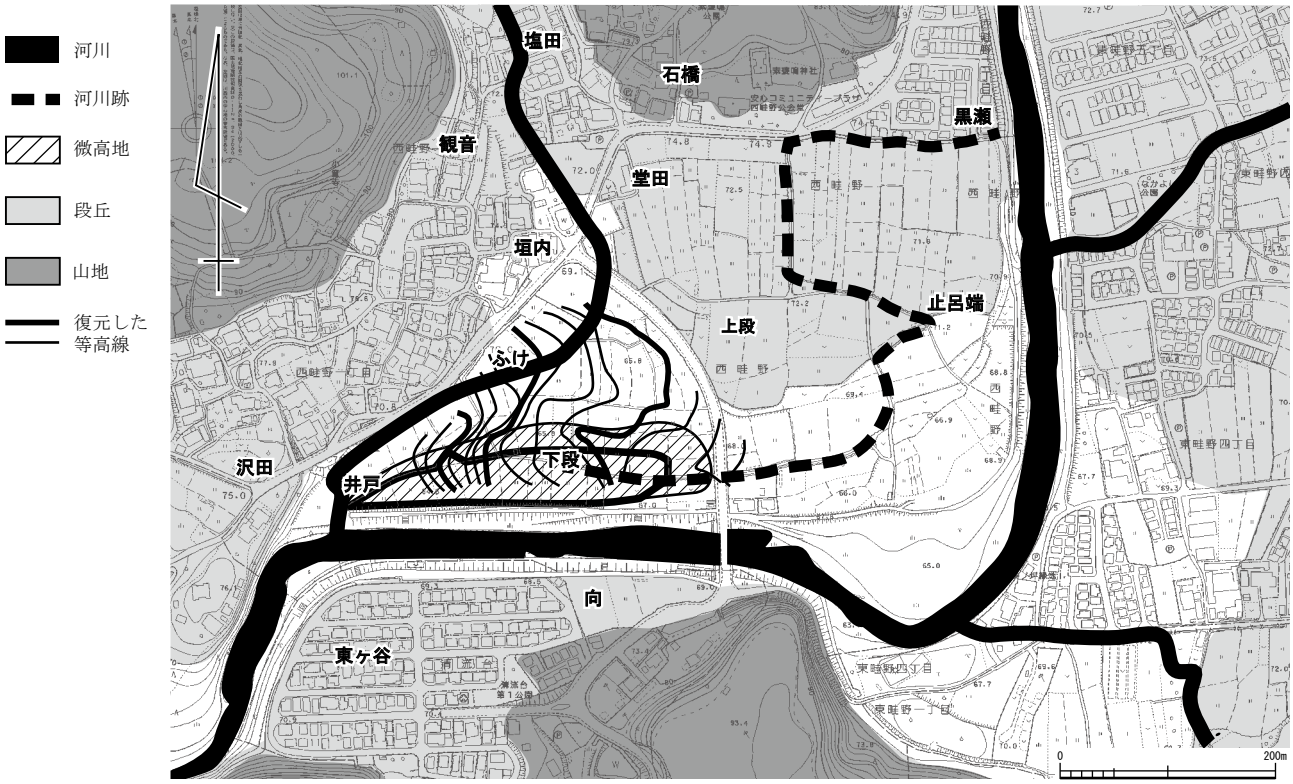
西畦野下ノ段・井戸遺跡の北側には、六甲山系から派生した２つの丘陵があり、南北に縦断しながら小河川が流れる。この小河川の両岸には丘陵から南へ向かって舌状にのびる段丘が位置する。この段丘上には、現在も西畦野集落が位置している。この段丘から更に南へ下がった部分が西畦野下ノ段・井戸遺跡の位置する地点である。

西畦野下ノ段・井戸遺跡の周辺地名には、「ふけ」や「下段」、「井戸」などがあり、立地としては集落内部の中で下に位置し、なおかつ小河川が２本横断していることからも、水分を含んだ土地であったことがわかる。

現在の地形図から微地形を復原すると、今回の調査区よりも北側で、小河川に伴って東西方向に標高が低くなることがわかる。一方で調査区がある下段付近はやや高くなっており、北側の小河川と南の一庫大路次川に挟まれながらも、微高地が広がっていたことがわかる。

（２）基本層序（第 17 図）

調査箇所の現況は水田で、東西方向で９～ 10 筆に水田区画され、上流側の東から西に向かって階段状に低くなっている。調査区の現状の地盤高は 65.2 ～ 67.5 ｍで、約 250 ｍの区間で 2.3 ｍの比高差をもっている。特に東端から 50 ｍ付近では 0.6 ｍの大きな段差が認められる。その段差付近を境に、東西で



第 14 図　微地形等高線復元図

（川西市史第２巻所蔵の「西畦野村延宝巡見村絵図」、兵庫県教委 1982『兵庫県の中世城郭・荘園遺跡』をもとに作成）

層序は大きく異なる。

上記段差付近より東側では耕土・床土の下に縄文時代～鎌倉時代の遺物包含層があり、その下層は極粗砂～φ 20cm の砂礫層となっている。この砂礫層は調査区東端から 50 ～ 70 mの範囲に微高地を形成しており、その上面で縄文時代～鎌倉時代の遺構を検出した。遺構検出面の標高は 66.4 ～ 67.0 mである。

この砂礫層は段差付近より西に向かって下層へ潜りこみ、その上にシルト質砂層が土壌層を形成しつつ堆積を重ねている。南壁の 42 ～ 49 層は顕著な中世遺物包含層となっており、その下面の 58 層上面で縄文時代晩期～鎌倉時代の遺構を検出した。遺構検出面の標高は 64.5 ～ 66.5 mである。なお、調査区の西端から 25 mの範囲は一段低く削平されて包含層はなく、粗砂混じりの 59' 層の面で遺構を検出した。

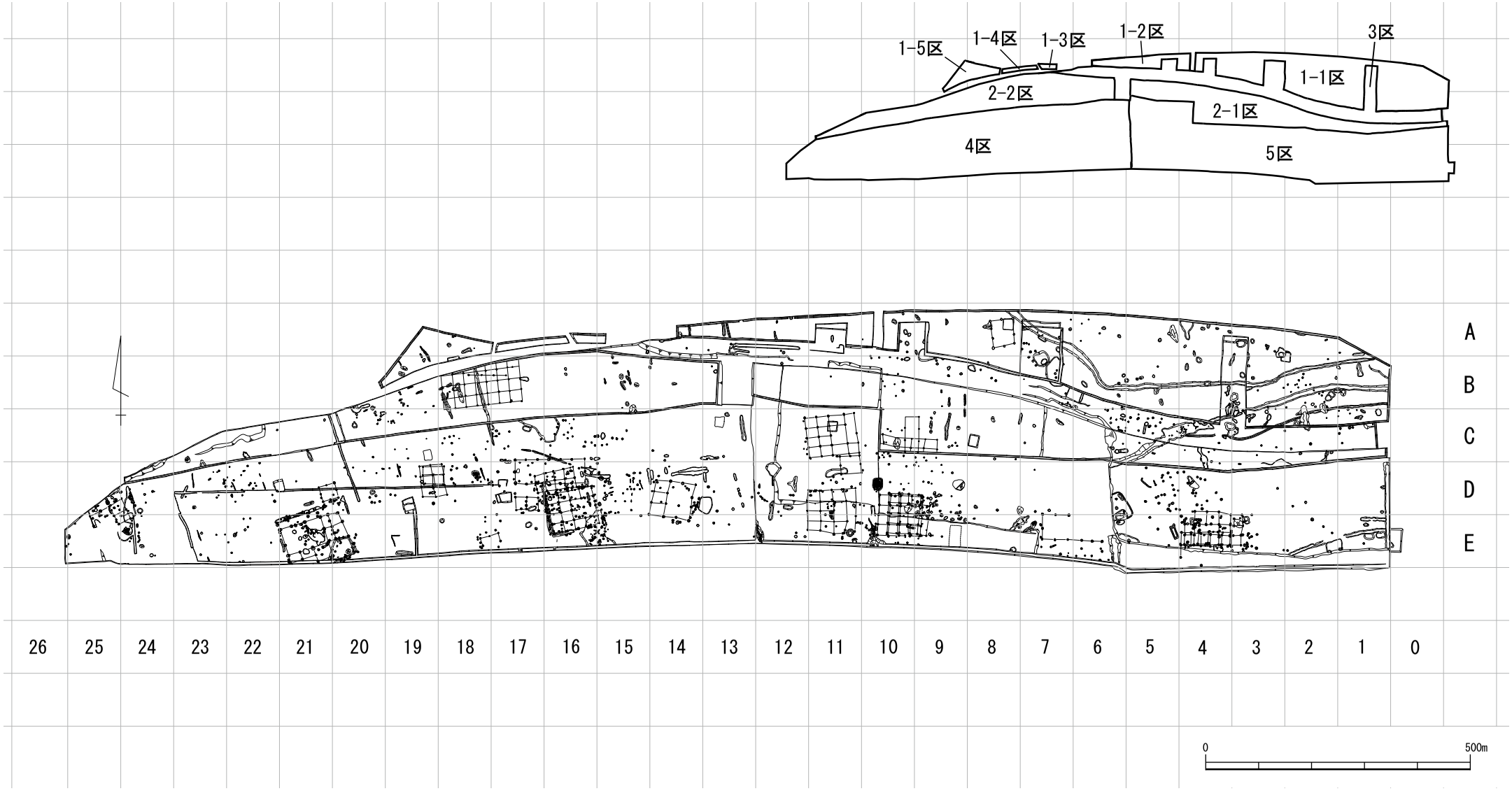
（３）遺構の検出状況（第 15 図）

検出された遺構・遺物は縄文時代～中世にかけての時代幅があるが、遺構の形成は断続的で、それぞれの時期により、前述の層序に対応した立地や遺構の性格を異にしている。その内容によって、遺跡の成り立ちは大きく３つの段階に分けて考えることができる。

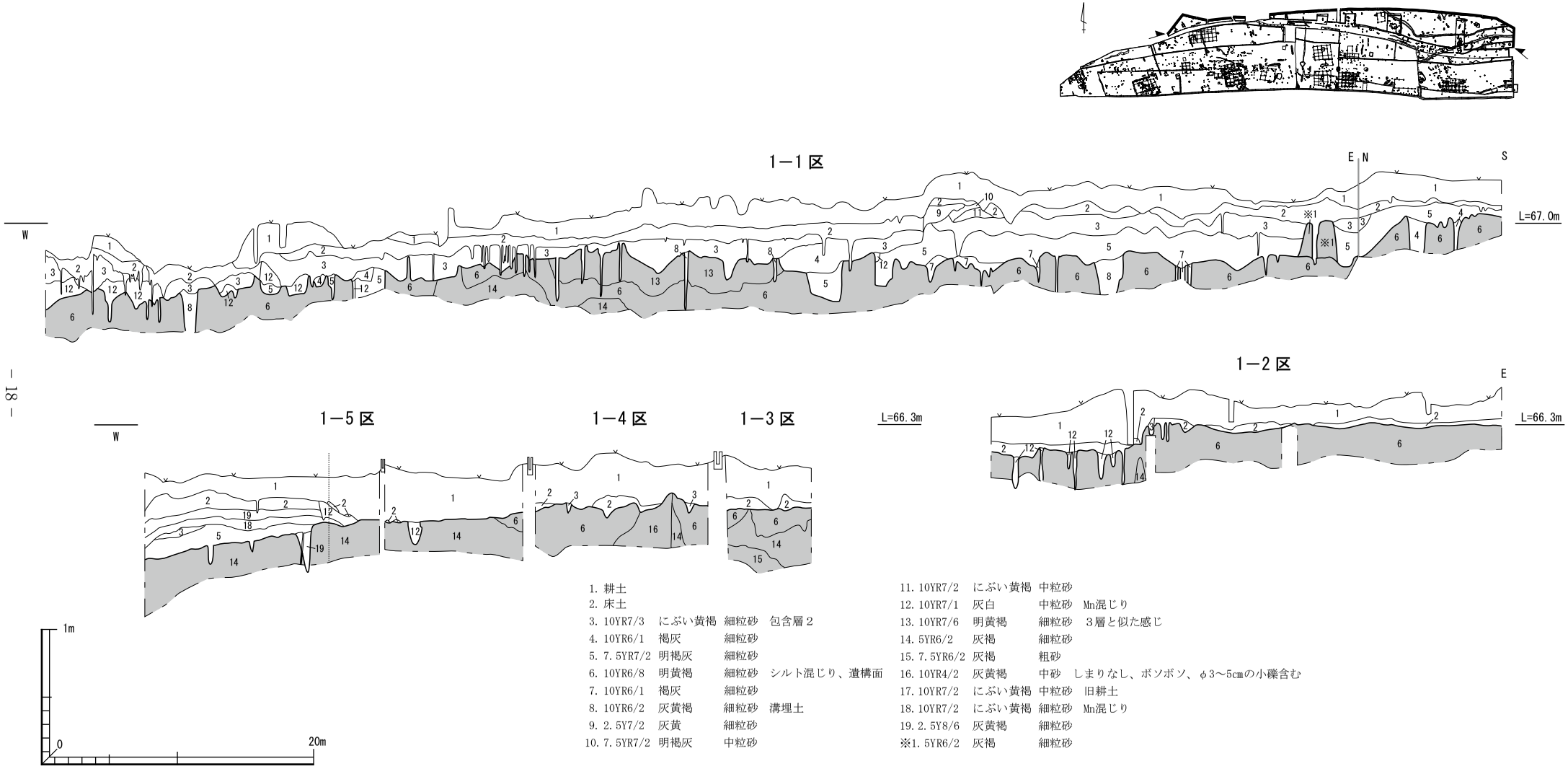
第１段階は、縄文時代～弥生時代前期にかけてである。この段階の遺構としては、縄文時代中･後･晩期、および弥生時代前期の土坑がある。なお遺物としては縄文時代前期の土器も出土しているので、そこまで遡る遺構が周辺にあった可能性が高い。ただし検出される土坑は各時期とも１基～数基程度で、長期にわたって集住して集落を形成した気配はなく、各時期間には数百～千年単位の隔たりがある。周辺に中心集落があったかどうかは不明だが、第１段階は、キャンプサイト的な遺構が不定期に設けられている状況として捉えておく。その中でも縄文時代後期までは遺構の分布が特に希薄で、立地する範囲も前述した調査区東端から 50 mまでの砂礫層上面に限られている。それに対して縄文時代晩期になると微高地が調査区中央付近まで拡大したようで、砂礫層を覆うシルト質砂層上面で遺構が検出できるようになり、土坑もその数をやや増してくる。さらに弥生時代前期の土坑からは完形の甕が出土するなど、人の営みの痕跡が色濃くなってくるものの、いまだ居住域は形成されていない。

第２段階は弥生時代後期末～古墳時代初頭で、竪穴住居１棟、溝３本、土器溜まり１基、土坑などがある。遺構の分布範囲は調査区の中央付近まで広がり、微高地が西へ拡大していることがうかがえる。この段階になって初めて住居跡・溝などの居住痕跡が現れ、遺物の出土量もまとまったものになり、定住集落が形成された。しかしその前後の時期の連続は認められず、短期間で断絶したようである。

集落が本格的に長期間継続するようになるのは第３段階の平安時代～鎌倉時代で、遺構の分布範囲は調査区の全域に広がる。検出された遺構は掘立柱建物 25 棟、木棺墓 2 基、土壙墓 2 基、石敷遺構 2 基、炉跡・焼土坑 10 基、集石土坑 3 基の他、多くの土坑・柱穴などがある。掘立柱建物の多くは一庫大路次川の右岸に面して、数棟ずつのまとまりをもって並んでおり、立地から後述するように５つの居住域を設定できる。居住域内では複数回の建て替えが認められるところもあり、同一箇所を継続的に居住スペースにしていたようである。集落は鎌倉時代（13 世紀代）に最大化するが、もっとも古い遺構は 10 世紀後半に遡り、約 300 年間継続したとみられる。

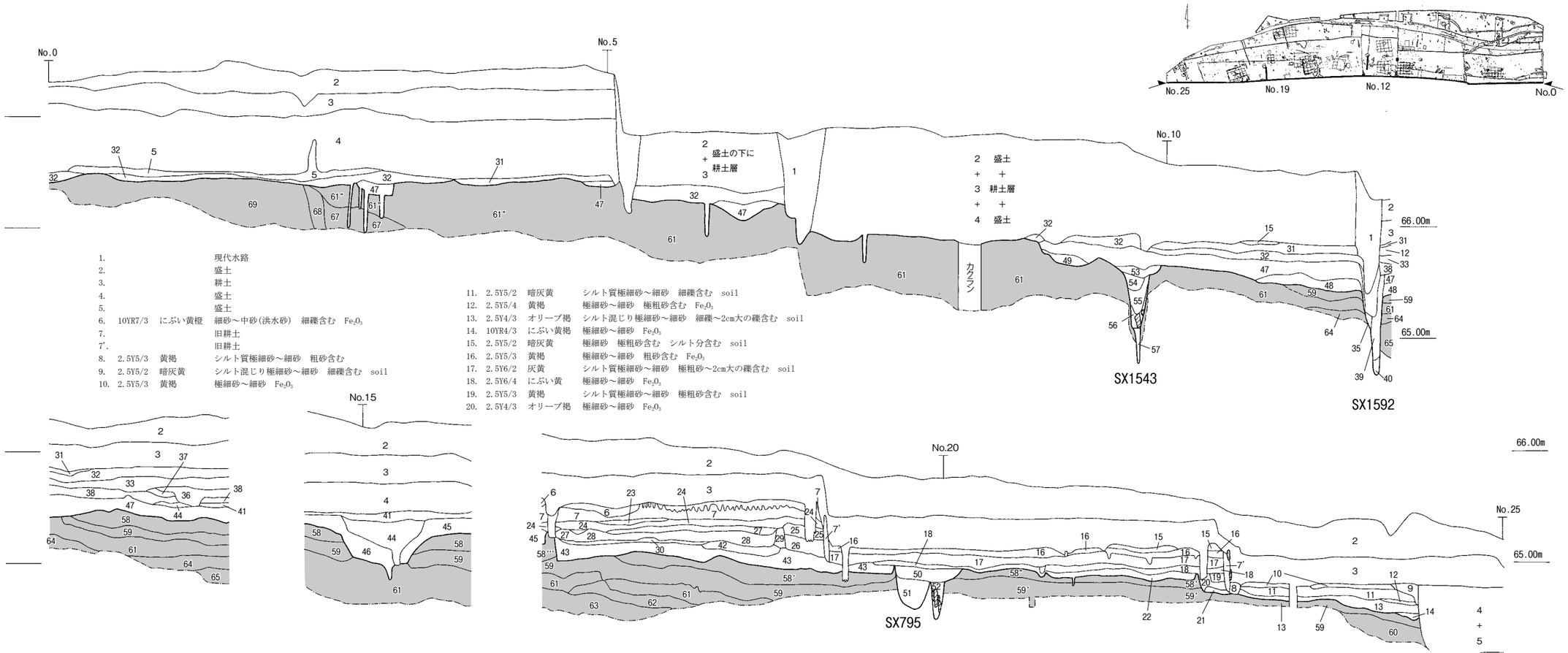

1-5区
1-4区
1-3区
1-2区
3区
1-1区
2-2区
2-1区
4区
5区
A
B
C
D
E
26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0
0
500m

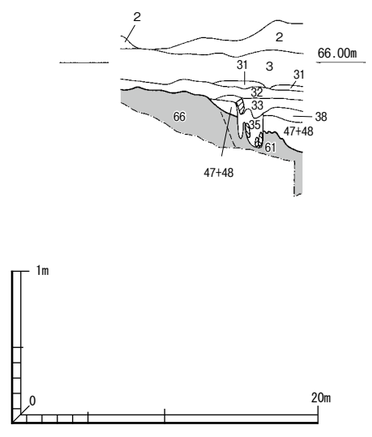
第 15 図　　遺構全体図

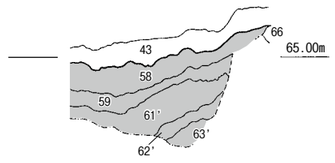


1. 耕土
2. 床土
3. 10YR7/3　にぶい黄褐　細粒砂　包含層２
4. 10YR6/1　褐灰　細粒砂
5. 7.5YR7/2　明褐灰　細粒砂
6. 10YR6/8　明黄褐　細粒砂　シルト混じり、遺構面
7. 10YR6/1　褐灰　細粒砂
8. 10YR6/2　灰黄褐　細粒砂　溝埋土
9. 2.5Y7/2　灰黄　細粒砂
10. 7.5YR7/2　明褐灰　中粒砂
11. 10YR7/2　にぶい黄褐　中粒砂
12. 10YR7/1　灰白　中粒砂　Mn混じり
13. 10YR7/6　明黄褐　細粒砂　３層と似た感じ
14. 5YR6/2　灰褐　細粒砂
15. 7.5YR6/2　灰褐　粗砂
16. 10YR4/2　灰黄褐　中砂　しまりなし、ボソボソ、φ3〜5cmの小礫含む
17. 10YR7/2　にぶい黄褐　中粒砂　旧耕土
18. 10YR7/2　にぶい黄褐　細粒砂　Mn混じり
19. 2.5Y8/6　灰黄褐　細粒砂
※1. 5YR6/2　灰褐　細粒砂

第16図　１・２区土層断面図







1. 現代水路
2. 盛土
3. 耕土
4. 盛土
5. 盛土
6. 10YR7/3 にぶい黄橙 細砂～中砂(洪水砂) 細礫含む Fe_2O_3
7. 旧耕土
7'. 旧耕土
8. 2.5Y5/3 黄褐 シルト質極細砂～細砂 粗砂含む
9. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト混じり極細砂～細砂 細礫含む soil
10. 2.5Y5/3 黄褐 極細砂～細砂 Fe_2O_3
11. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質極細砂～細砂 細礫含む soil
12. 2.5Y5/4 黄褐 極細砂～細砂 極粗砂含む Fe_2O_3
13. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト混じり極細砂～細砂 細礫～2cm大の礫含む soil
14. 10YR4/3 にぶい黄褐 極細砂～細砂 Fe_2O_3
15. 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂 極粗砂含む シルト分含む soil
16. 2.5Y5/3 黄褐 極細砂～細砂 粗砂含む Fe_2O_3
17. 2.5Y6/2 灰黄 シルト質極細砂～細砂 極粗砂～2cm大の礫含む soil
18. 2.5Y6/4 にぶい黄 極細砂～細砂 Fe_2O_3
19. 2.5Y5/3 黄褐 シルト質極細砂～細砂 極粗砂含む soil
20. 2.5Y4/3 オリーブ褐 極細砂～細砂 Fe_2O_3
21. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト混じり極細砂～細砂 極粗砂含む soil Mn
22. 2.5Y5/3 黄褐 極細砂～細砂 粗砂含む
23. 10YR7/2 にぶい黄橙 細砂～中砂(洪水砂) 粗砂含む Fe_2O_3
24. 10YR7/2 にぶい黄橙 シルト質極細砂～細砂 粗砂含む soil
25. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト質細砂 極粗砂～細礫含む soil
26. 2.5Y5/4 黄褐 極細砂～細砂 極粗砂含む Fe_2O_3
27. 10YR6/4 にぶい黄橙 極細砂～細砂(洪水砂) 粗砂含む Fe_2O_3
28. 10YR6/3 にぶい黄橙 シルト質極細砂～細砂 粗砂～細礫含む 土器 soil
29. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト質極細砂(水田畦畔)
30. 2.5Y5/3 黄褐 極細砂～細砂(洪水砂) Fe_2O_3
31. 2.5Y6/2 灰黄 シルト質極細砂～細礫 粗砂含む(洪水砂) Fe_2O_3
32. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質極細砂 極粗砂～細礫含む Fe_2O_3 soil
33. 2.5Y5/3 黄褐 シルト質極細砂～細砂 極粗砂～細礫含む Fe_2O_3 soil
34. 2.5Y4/2 暗灰黄 極細砂～中砂 細礫～4cm大の中礫含む シルトブロック含む ラミナ
35. 2.5Y4/4 褐 シルト質極細砂～粗砂 ラミナ 底面に20cm大の亜角礫
36. 土層註記なし
37. 土層註記なし
38. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質極細砂 極粗砂含む 土器 Fe_2O_3 soil
39. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト混じり極細砂～粗砂 グレーディング 細礫～5cm大の中礫含む
40. 2.5Y4/4 褐 極細砂～細砂質シルト 10cm大の中礫含む しまりよい
41. 2.5Y7/3 浅黄 極細砂(洪水砂) 土器 Fe_2O_3
42. 2.5Y4/3 オリーブ褐 極細砂～細砂 シルト分含む 細礫含む 土器 soil Mn(中世包含層)
43. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト質極細砂～細砂 細礫～中礫含む 土器 soil Mn(中世包含層)
44. 10YR4/4 褐 極細砂～細砂質シルト 土器(中世包含層)
45. 10YR6/3 にぶい黄橙 シルト質極細砂～細砂 1cm大の礫含む 土器 (中世包含層)
46. 10YR4/2 灰黄褐 極細砂質シルト 10～40cm大の亜角礫含む(平安・中世包含層)
47. 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂～細砂質シルト 細礫含む 土器 soil Mn(中世包含層)
48. 10YR5/2 灰黄褐 極細砂質シルト 極粗砂含む soil Mn
49. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質極細砂～細砂 極粗砂～中礫含む soil(中世包含層)
50. 2.5Y5/3 黄褐 シルト質細砂 粗砂含む 土器 Mn
51. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト質極細砂～細砂 褐色シルトブロック含む 土器
52. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト質細砂～中砂 細礫～40cm大の亜円礫含む 土器
53. 10YR4/2 灰黄褐 極細砂～細砂質シルト 極粗砂含む 大礫含む
54. 10YR3/2 黒褐 シルト質極細砂～細砂 極粗砂～細礫含む
55. 10YR4/3 にぶい黄褐 極細砂質シルト 土器
56. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質細砂 細礫～2cm大の中礫含む 40cm大の礫含む
57. 10YR4/3 にぶい黄褐 細砂質シルト
58. 10YR4/4 褐 シルト質極細砂 土器・炭含む
58'. 2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト質極細砂～細砂 細礫含む 土器 炭(上面で中世遺構検出)
58". 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト混じり極細砂～細砂 細礫含む soil Mn
58"'. 10YR4/4 褐 シルト質極細砂 土器・炭含む soil(水田畦畔)
59. 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂～細砂 磨滅した土器の細片 soil(下層の土壌層)上面にMn
59'. 10YR3/3 暗褐 シルト混じり細砂 粗砂含む soil Mn
60. 2.5Y4/3 オリーブ褐 細砂～中砂 粗砂～細礫含む
61. 10YR5/4 にぶい黄褐 極細砂～細砂
61'. 10YR4/4 褐 シルト混じり極細砂 磨滅した土器
61". 10YR5/4 にぶい黄褐 シルト質極細砂～細砂 細礫～4cm大の中礫含む
62. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト質極細砂 Fe_2O_3 soil
62'. 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト～シルト質極細砂～細砂 soil Mn
63'. 10YR4/4 褐 極細砂～細砂 シルト分含む
63. 10YR5/4 にぶい黄褐 シルト～シルト質極細砂 炭
64. 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂～細砂 soil
65. 10YR4/4 褐 シルト質極細砂～細砂
66. 2.5Y5/4 黄褐 シルト質極細砂～細砂 上面にMn
66'. 2.5Y5/4 黄褐 シルト質極細砂 Mn
67. 10YR4/4 褐 細砂～中砂 細礫～大礫含む
68. 中礫～巨礫 マトリックスは10YR4/2灰黄褐 シルト質細砂～極粗砂
69. 極粗砂～20cm大の巨礫 淘汰悪い ラミナ

第17図 4・5区土層断面図

第２節　縄文時代の遺構と遺物

１．概要

縄文時代前期・中期・後期・晩期、弥生時代前期の土坑が、単独もしくは数個の単位で見つかった。面的にも時期的にも広がりがなく、ある時期に訪れた人間が個別に遺構を残していった印象である。

遺構が分布する範囲は調査区の東半部である。特に縄文時代前期～後期については、調査区東端から西へ 50 ～ 60 ｍの範囲で露出する砂礫層上面に限られている。晩期になると、遺構の分布は低地を覆うシルト層上面にも及び、調査区東端から西へ 150 ｍの範囲にまで遺構が認められた。この時期には微高地が拡大したことがうかがえる。

２．遺構

（１）土坑

SK80（図版 2、写真図版 9）

１－１区東端から約 20 ｍ西側の南壁沿いに位置し、南半部は側溝で失われた。東西 1.0 ｍ×南北 0.9 ｍ以上の楕円形で、深さ 0.5 ｍの平底の断面を呈する。埋土の中位に土器片が認められる。

図化した遺物には深鉢（20・21）がある。

SK111（図版 2、写真図版 9）

１－１区東端から約 35 ｍ西側に位置し、上部を弥生時代後期末～古墳時代初頭の溝 SD05 に切られる。南北 0.9 ｍ×東西 1.15 ｍの不整楕円形で、深さ 0.5 ｍの平底の断面を呈する。埋土下層に 10 ～ 20㎝大の礫が含まれる。

図化した遺物には深鉢（12）、底部（13）がある。

SK313（図版 2、写真図版 9）

２－１区東端から約 95 ｍ西側の南西隅に位置する。東西 1.2 ｍ×南北 2.1 ｍの不整楕円形で、0.85 ｍの深さがある。埋土はブロック状の土塊で、風倒木の可能性がある。

図化した遺物には深鉢（16）がある。

SK163（図版 2）

１－１区東端から約 60 ｍ西側の南壁沿いに位置する。東西 0.7 ｍ×南北 1.5 ｍの長円形で、深さ 0.13 ｍの皿状の断面を呈する。

図化した遺物には深鉢（24）がある。

SK337（図版 3、写真図版 10）

２－２区東端から約９ｍ西側に位置する。南北 0.4 ～ 0.5 ｍ×東西 0.9 ｍの不整長円形で、0.17 ｍの深さがある。埋土上層は炭混じりで、中位から土器片・礫が出土した。

図化した遺物には深鉢（17）、台石（S13）がある。また、写真図版のみの個体（18・19）もある。

SK501（図版 3、写真図版 10）

３区東端の北隅に位置し、北半部と東端は側溝で失われている。南北 0.9 ｍ以上×東西 2.05 ｍ以上の不整楕円形で、深さ 0.23 ｍの平底から 40° ほどの角度で立ち上がる。坑底には 10 ～ 25cm 大の礫が含まれる。

図化した遺物には深鉢（14・15）がある。

SK532（図版 3、写真図版 11）

３区東端から 25 ～ 30 m西側で北へ拡張した地区に位置する。南北 1.3 m × 東西 1.6 mの楕円形で、深さ 0.1 mの皿状の断面を呈する。

図化した遺物には底部（39）、石斧（S9）がある。

SK584（図版 3、写真図版 11）

３区東端から約 65 m西側で北へ拡張した地区に位置する。径 2.8 ～ 3.0 mの不整円形で、深さ 0.15 mの皿状だが、東寄りに深さ 0.35 mの落ち込みがある。埋土には土器の細片が含まれているが、遺構面との土質の判別は困難である。

図化した遺物はない。

SK599（図版 4、写真図版 12）

３区東端から約 70 m西側で北へ拡張した地区に位置し、北東端は溝 SD05 に切られ、西端は側溝で一部失われている。南北 0.55 m × 東西 0.9 m以上の溝状で、深さ 0.15 mの皿状の断面を呈する。

図化した遺物には深鉢（22）がある。

SK604（図版 4、写真図版 12）

３区東端から約 93 m西側で北へ拡張した地区に位置する。東西 0.73 m × 南北 0.85 mの楕円形で、深さ 0.15 mの逆台形の断面を呈する。

図化した遺物はない。

SK605（図版 4、写真図版 12）

３区東端から約 94 m西側で北へ拡張した地区に位置する。東西 0.5 m × 南北 0.5 m以上の溝状で、深さ 0.18 mの緩やかなＶ字形の断面を呈する。

図化した遺物はない。

SK606（図版 4、写真図版 12）

３区東端から約 93 m西側で北へ拡張した地区に位置する。東西 0.57 m × 南北 0.75 mの楕円形で、深さ 0.1 mの皿状の断面を呈する。

図化した遺物はない。

SK607（図版 4、写真図版 12）

３区東端から約 93 m西側で北へ拡張した地区に位置する。東西 0.7 m × 南北 1.04 mの楕円形で、深さ 0.17 mの緩やかなＶ字形の断面を呈する。

SK1616（図版 4）

５区東端の壁面で見つかり、一部東側へ拡張して検出した。西端は側溝で失われているが、0.85 m × 1.02 m以上の不整楕円形で、深さ 0.15 mの平底から 30° ほどの角度で立ち上がる。埋土には 2 ～ 15cm 大の礫と土器片が多数含まれる。

図化した遺物には浅鉢、深鉢（1 ～ 10）がある。

SK1630（図版 4、写真図版 12）

５区東端から約 50 m西側で、南半部は水田の段差で失われている。0.6 m × 0.7 m以上の不整楕円形で、深さ 0.2 mのボウル状の断面を呈する。

図化した遺物には深鉢（11）がある。

３． 出土遺物

（１）中期末の遺構（北白川Ｃ式）

SK1616（図版 52、写真図版 50）（1 ～ 10）

10 点の土器が出土している。1 は口縁部文様帯と胴部文様帯を隆帯によって区分する深鉢 A1 類の口縁部片であり、隆帯上には斜めのキザミが施される。口縁部は側文様やや乱れた矢羽根状の刺突が、胴部文様には縦位帯縄文が施される。2 ～ 4 は深鉢 A4 類の口縁部文様帯と胴部文様帯を区分する連弧文および楕円形区画文である。5・6 は正面観台形の大波状口縁を呈する深鉢 C 類の口縁部と胴部である。7・8 は有文浅鉢 A 類の緩やかな波状を呈する口縁部で、側文様の横長の渦巻文が施文されている。9・10 は無文深鉢である。9 は表裏ナデ調整、10 は胎土に角閃石を含み、外面を巻貝条痕によって調整しているが内面は磨滅のため不明である。1 の隆帯上のキザミ、3 の区画文様、有文浅鉢からは北白川 C 式前半期におさまるものと思われる。

SK1630（図版 52、写真図版 50）（11）

11 は深鉢胴部であり、縦位の帯状文が施される。

SK111（図版 52、写真図版 50）（12・13）

12 は有文深鉢 A5 類の胴部破片で、Ｊ文に類似した文様を施す。13 は深鉢底部であり平底を呈する。

SK501（図版 52、写真図版 50）（14・15）

14 は口縁部と胴部の境界を隆帯で区分している有文深鉢であるが、隆帯が円弧を描くこと、隆帯を水平にした際の上面観が内向きの円弧を呈することから深鉢 C 類と判断した。口縁部には弧状の沈線文が描かれており、胴上部にも沈線で文様が描かれているようだが判然とせず、簡素な文様となると思われる。15 は胴部の弧線文である。

SK313（図版 52、写真図版 50）（16）

有文深鉢の胴部破片で、器壁が薄く垂下する沈線文が内面に突出していることから近畿北部・西部に分布する平式の影響が認められる。

SK337（図版 52、写真図版 50）（17）（18・19 は写真図版のみ）

有文深鉢の胴部破片であり、丸棒状工具による沈線文が施される。

（２）後期前葉の遺構

SK80（図版 52、写真図版 50・51）（20・21）

外面に LR 縄文を施す無文土器のみ出土しており、20 は全面に、21 は胴部のみで頸部は無文を呈する。北白川上層式 1 期の所産であろう。

（３）晩期の遺構

SK599（図版 52、写真図版 50・51）（22・23）

有刻突帯文土器の口縁部が出土している。長原式である。

SK163（図版 52、写真図版 50・51）（24）

有刻突帯文の胴部破片が出土しており、長原式のものである。23･24 は胎土に角閃石を含みチョコレート色を呈する胎土である。

（４）包含層他（図版 53、写真図版 51・52）（25 ～ 49）

25・26 は羽島下層Ⅱ式の破片で内外面に条痕が明瞭に残る。25 は緩やかに内湾する口縁部片で 2 連 1 対の刺突文が時計回りに 4 段施されているが、刺突が重複して上下互い違いになるなど施文の乱れが

見てとれる。26は胴部片で25とは異なる原体で2段以上の刺突をしているが、刺突が一部途切れている。

27は北白川下層Ⅱ式の緩やかに内弯する口縁部で竹管文を4段以上施す。胎土には角閃石を含み、色調・焼成は25・26に近い。

28～36は北白川C式期の土器片である。28は深鉢A1類で口縁部に上下互い違いの刺突文が施される。29は深鉢A1類、30・32は深鉢A1f類であり、横走する幅の広い沈線文が施文され省略化された口縁部文様になっている。31は深鉢A5類であろう。33～35は深鉢C類、36は口縁部が突起状に肥厚する無文深鉢である。北白川C式期後半期の所産であると思われる。

37は双耳壺の縄掛突起部分であり、破断面には穿孔の痕が認められる。一般的に双耳壺の縄掛け突起部分は穿孔部を中心としてそこに向かって緩やかに肥厚していくが、本資料は複雑な意匠をもつ不定型な上面観を呈し、突起端部にはキザミが施される。上下左右に入り組み状に沈線文が施され、沈線間は磨消縄文が施されていたと思われるが磨滅が著しく不明瞭である。後期前葉の所産であろう。

38は深鉢頸胴部の橋状把手で、胴部には丸棒状工具を用いた多条の沈線文が施文される。縁帯文土器成立期に位置付けられる。

39～49は晩期の土器である。40・41は滋賀里Ⅲb式、42・43は船橋式、44～48は長原式に位置付けられる。39・44・45・49は胎土に多く角閃石を含んでおり、遺構出土資料と合わせてみても晩期の土器は他の時期のものに比べその比率が高くなっている。

第３節　弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺構と遺物

１．概要

遺構が分布する範囲は調査区の東半部で、縄文時代晩期～弥生時代前期とほぼ共通している。見つかった遺構の西端は、調査区東端から西へ 105 mの範囲であった。

調査区北東隅から数本の溝が南西方向に向かって延びており、主にその溝に沿って竪穴住居・土坑や不定形な落ち込みが認められた。

２．遺構

（１）竪穴住居

SH1607（図版６、写真図版 13）

５区東端から約 50 m西側に位置し、西半部は水田の段差で失われている。南北 5.45 m×東西 3.9 m以上の隅丸方形であるが、南辺は SK1802・SK1612 に切られていて残存状況が悪い。検出面で周壁溝と柱穴などを検出したが、壁面の立ち上がりは捉えられなかった。ただし精査時に上面の埋土から数個体の土器が出土しているため、ある程度の立ち上がりは残っていたと思われる。

構造は 4 本柱で、床面壁際の周壁溝と中央土坑、北東壁際の土坑からなる。4 本柱のうち西側 2 本は失われ、残っているのは東側の 2 本の柱穴 SP1610・1813 のみである。SP1813 は、土坑 SK1802 の底面で検出した。柱穴の掘り方は径 0.35 ～ 0.4 m、検出面からの深さ 15cm 程度である。周壁溝は幅 0.2 m、深さ 8 ～ 10cm で壁際をめぐるが、削平されているため、全周するかは不明である。

中央土坑 SK1609 は、東西 0.5 m×南北 0.6 mの楕円形で、深さ 0.16 mの皿状の断面を呈する。埋土下層には土器片と炭を含む。

北東隅の東周壁溝の内側に沿って、細長い土坑 SK1608 がある。幅 0.5 m×長さ 1.5 mで、深さ 0.45 mのＵ字状断面を呈する。

図化した遺物には、底部の（52）と SK1609 から出土した小型器台（53）、埋土から出土した鉢（50・51）がある。

（２）溝

SD01・519・1602、SX540（図版 7 ～ 10、写真図版 14 ～ 19）

１－１区東端から３区、２区を貫流し、５区では水田の段差で途切れるものの、西端で SD1602 につながる。検出した範囲の中ほどでは、溝が幅 1.6 ～ 2.5 m、延長約 9 m、深さ最大 0.45 mの不定形な落ち込みに拡大し、いわゆる土器溜まり（SX540）となっている。この SX540 を境に、東端までの約 34 mの区間の溝は、幅が 0.55 ～ 1.15 m、深さ 0.1 ～ 0.28 mの皿状の断面で、ほとんど傾きが認められない。しかし SX540 から西端までの約 34 mの区間では、幅 1.6 m、深さ 0.3 mにまで拡大し、両端で約 0.55 mの比高差をもつ。西端の SD1602 の部分は上部が大きく削平されていて、幅 0.55 ～ 1.4 m、深さ 0.15 ～ 0.2 mと一定しないものの、埋土には多くの土器片が含まれ、鳥形土製品も出土した。

SD01 出土の遺物には甕（54 ～ 56）、高坏（57 ～ 59）が、SD1602 出土の遺物には甕 60 ～ 66）、高坏（67・68）、鳥形土製品（69）がある。

中央の土器溜まり SX540 は、よどみ状の落ち込みとなっていて、埋土の下層や中層に認められる細

礫～中礫の堆積層から、数度の洪水で埋積を重ねていたことが判る。その下層から上層にかけて大量の土器片の他、砥石・台石などの石器、くさび状の鉄器などが出土しており、継続的に投棄が繰り返されていた様子がうかがえる。

SX540 出土の遺物には甕（75 ～ 82）、壺（83 ～ 92）、鉢（93）、高坏・器台（94 ～ 103）、土錘（104 ～ 109）がある。

SD1604（図版 8、写真図版 14・16）

5 区の SD1602 の東側に平行するが、ほとんど削平されており、わずかに 1.8 mほどの延長が残る。現状の幅は 0.45 m、深さ 0.2 mである。

図化した遺物はない。

SD02・SD514（図版 7 ～ 9、写真図版 14・15）

1－1 区東端から 3 区につながり、SX540 に合流する。溝の遺存状況は悪く断続的になっており、現状の幅は 0.4 ～ 0.55 m、深さ 10cm 前後である。延長約 39 mの両端の比高差は 5cm ほどで、ほとんど傾きがない。

図化した遺物はない。

SD05・SD597（図版 7・8、写真図版 14）

1－1 区東端から途中まで SD01 と平行するが、約 51 m西進したところで屈曲し、北西方向に約 24 m進んで調査区外へ延びる。東端から屈曲部までは、溝の幅が 0.55 ～ 0.9 m、深さは 0.1 ～ 0.25 mの皿状で、傾きは 10cm 程度である。しかし屈曲部から西端までの区間では、幅 1.35 m、深さ 0.28 mに拡大し、両端で約 0.2 mの比高差がつく。遺構面がシルト層になると溝が大きくなるのは、SD01 と共通している。

図化した遺物はない。

（3）土坑

SK1603（図版 8、写真図版 14・16）

5 区の SD1602 と SD1604 の間に位置する。0.5 m × 0.7 mの不整楕円形で、深さ 0.15 mの皿状の断面を呈する。

図化した遺物には鉢（112）がある。

SK1605（図版 8、写真図版 14）

5 区の SD1604 と切り合う。0.9 m × 1.6 mの不整楕円形で、深さ 0.2 mの皿状の断面を呈する。坑底には 5 ～ 20cm 大の礫が多く含まれる。

図化した遺物には壺（113）がある。

SK1606（図版 8、写真図版 14）

5 区の SD1602 の北に位置する。1.1 m × 1.6 mの不整楕円形で、深さ 0.2 mの皿状の断面を呈する。

図化した遺物はない。

SX518・SK520・SK525・SK526（図版 11、写真図版 21）

1－1 区東端から約 30 m西側付近で、SD01（SD519）、SD02、SD05 の周りにいくつかの不定形な落ち込みが存在する。形状や深さが不安定なものが多く、風倒木のようなものかもしれない。

SX518 は一部 SD02 と重複している。形状は 2 つの落ち込みに分かれるが、全体としては 2.1 m × 2.9 mほどの規模で、北寄りのもっとも深いところの深さが 0.37 mである。

SK520 は SD01 と重複する位置にあるが、西半部が側溝で失われ、詳細は不明である。南北 0.9 m×東西 0.4 m以上の楕円形で、深さは 0.25 mである。

SK525 と SK526 は、SD01（SD519）と SD05 の間に位置し、一部が切り合っている。SK525 は南北 0.4 ～ 0.5 m×東西 1.15 mで、深さは 0.1 mである。SK526 は東西 1.4 m×南北 1.7 mで、深さは 0.35 mである。

図化した遺物には、SX518 の甕（71・72）と土錘（73）がある。

SX1543（図 11、写真図版 20）

５区東端から 97 m西側に位置する、南北方向の溝状の落ち込みである。検出したのは南北 5.5 mの範囲であるが、南側は調査区範囲外へ続く。落ち込みの北側は 0.2 mほどの細い溝状だが、北端から 1.7 m付近から階段状に深さを増しながら幅も広がる。A・B 断面付近では幅 0.8 ～ 1.1 m、深さ 0.4 mほどで、ピット状の落ち込みとの切り合いも認められる。埋土からは、10 ～ 20cm 大の礫とともに、台付鉢（71）の完形品が出土した。南端はさらに幅広く、かつ一段深くなっており、幅 3.4 m、深さは 0.9m 近くなる。

図化した遺物には、台付鉢（74）がある。

SK1539（図版 12、写真図版 21）

SX1543 の約 8 m西に位置する。東西 0.6 m×南北 1.4 mの弧状の落ち込みで、両端にピット状の落ち込みが認められるが、関係は不明である。深さは 0.2 mで、10 ～ 30cm 大の礫とともに、弥生土器片が出土した。

図化した遺物はない。

SX1662（図版 12）

５区東端から 10 m西側に位置し、南半部を水田の段差に切られる。東西 0.6 m×南北 0.5 m以上の楕円形で、深さ 0.3 mのＶ字状の断面を呈する。埋土からは縄文土器（爪形文）（27）の混入も認められたが、手焙り形土器（117）などの弥生土器が出土した。

他に図化した遺物には甕の口縁（115）と高坏（116）がある。

SK41（図版 12、写真図版 22）

１－１区東端から約 22 m西側に位置する。0.3 m× 0.4 mの楕円形の掘り方に、完形の弥生土器の甕（110）が横たえられている。検出面からの掘り方の深さは 0.1 mだが、土器の残存状況からみると 0.2 m以上の深さがあったと知れる。掘り方は平底で、坑底に堆積した 2 層の上に土器は据えられている。

３．出土遺物

（１）概要

出土した遺物のうち、弥生時代～古墳時代前期に属するもので図示できたものは 72 点である。時期的には、弥生時代前期のものが 1 点のみ SK41 から出土している以外はすべて弥生時代後期後半～古墳時代前期の布留２式に限られる。出土遺構は住居跡 SH1607 のほか溝（SD01・SD1602）などがあるが、土坑（SX･SK）の数が最も多く、遺物量も最も多い。ほかには柱穴･包含層があるが、出土量は少ない。

出土遺物は土器が最も多いが、SX540 からは 6 点の土錘があり、特徴的である。この遺構からは四国東部系の甕も出土している。また、包含層からは北近畿系の土器も 1 点認められた。他に特筆できる遺物としては、SD1602 から出土した鳥形土製品や SK1662 から出土した手焙形土器があげられる。

遺構別の時期としては、弥生前期のものを除くと、SX540 出土土器が弥生後期末～布留２式までの幅があり、最も新しい時期までの遺物が出土している。そのほかに布留期までの土器を出土した遺構に

はSD01・SX518・SX1543・SP246があり、包含層からも出土している。その他の遺構では弥生後期末～庄内期に限られる。

遺構別の出土量としてはSK540が図示した遺物量が35点とずば抜けて多く、遺構の性格を推定するうえで参考になるであろう。次に出土量が多いのがSD1602で11点、SD01で6点と、溝という性格から当然の結果であろう。

以下、出土土器の詳細を出土遺構別に述べることとする。

（2）遺構出土遺物

SH1607　（図版54、写真図版52）

50は鉢の破片である。体部から弱く屈曲して内湾気味の口縁部となる。底部外面には凹凸があることから、台付鉢の可能性も残すが、剥離痕と確認できる部分は認められない。後期末～庄内期のものであろう。

51も鉢で、丸底底部から内湾しながら外上方にのびて口縁端部を丸くおさめたものである。外面底部に丸みがあり、ヘラケズリによる凹凸も認められ、高坏または台付鉢であった可能性もわずかながら残るが、脚部等の接合の痕跡は看取できない。体部外面は少し斜めの縦方向と、横方向のヘラミガキを施している。器表剥離のため内面の調整は不明であるが、内面底部にはユビオサエが残る。庄内期であろう。

52は甕と思われる底部片である。底面中央は6㎜程度の上げ底状になっており、灰白色を呈する。後期後半の所産と思われる。底部外面はナデ仕上げ、わずかに残る体部はタタキ仕上げのようである。

SH1607内SK1609　（図版54、写真図版52）

53は小型器台と思われる口縁部の小片である。口縁端部はほぼ垂直な面をもち、上下に少し拡張している。ナデ調整であることがわかる。庄内期の所産と思われる。

SD01　（図版54、写真図版52）

54～56はタタキ甕である。54は口縁端部を欠失するが、比較的大きな破片である。最大径は体部中央付近にあると思われ、15.0㎝を測る。外面は水平に近い方向の太筋のタタキで、２条/㎝である。内面は左上がりのナデ仕上げとなっている。口縁部は叩き出し技法を用いており、口縁部外面には指頭圧痕が目立つ。後期後半～布留初期のものと思われる。

55は体部から「く」字状に曲折して外上方に直線的にのびる口縁部となっている。口縁部の内外面は丁寧にナデており、端部は丸くおさめている。体部は左下がりの太筋タタキ（２条/㎝）成形で、内面上部にはヨコナデを施している。また、内面には体部と口縁部との接合痕が明瞭に残っている。後期後半～庄内期の所産と思われる。

56は、体部から外反しながら口縁部にいたる甕口縁部の破片で、口縁部も外反しており、端部は尖りぎみに丸くおさめている。内外面ともヨコナデ仕上げである。体部は2.7条/㎝とやや太筋のタタキ成形で、口縁部叩き出し技法を用いている。体部内面は左上がりのナデ仕上げとなる。後期末～庄内期の時期と思われる。

57～59は高坏・台付鉢である。57は有稜高坏の坏口縁部片で、直線的に外上方にのび、内外面はヨコナデ調整である。ただし、内面には横方向のヘラミガキの後、幅1㎜弱のヘラミガキを放射状に密に施し、丁寧なつくりとしている。

58 は椀形の坏部であることから、台付鉢の可能性が高い。外面には右下がりのヘラミガキを施し、内面にも単位は不明であるがミガキを施している。後期末～庄内期の可能性が高い。

59 は高坏の脚部で、器台脚部の可能性も残す。脚柱部から屈折して下外方に直線的に開く裾部には径９㎜の円形透孔を４方向に穿っている。裾部外面にはヨコナデ後ヘラミガキを疎らに施しているようである。内面にはヨコハケを断続的に施している。脚柱部は中空で、外面は縦方向のヘラミガキ、内面にはシボリ目を残すが、ヨコナデ仕上げとしている。脚柱部上端のみ中実となっていることから、庄内期～布留初期の所産とみてよいであろう。

SD1602 （図版 54、写真図版 53・54）

60 ～ 65 は甕の破片である。60 は、細く締まった頸部から曲折して外上方に外反気味にのびる口縁部を有する。屈曲部内面には稜をもち、口縁端部には面をもつが、はねあげ口縁状を呈している。体部は内湾気味に下外方にのびていることから、最大径は体部下半にあると思われる。体部外面は 2.5 条 /cm のやや太筋タタキを左下がり方向に密に施し、連続ラセン状を意識している。体部内面は左上がり方向のナデ仕上げである。口縁端部や体部の形態およびタタキの施し方から、庄内期の所産であることは疑いないであろう。

61 は、体部から「く」字状に曲折して外上方に外反気味にのびる口縁部である。口縁端部上端をナデることによって端部が水平近くになっている。口縁部はナデ、体部外面にはタタキ痕が残っている。庄内期の所産と思われる。

62 の口縁部は、上部を上からナデることによって外傾させ、端部外面をヨコナデして面をつくったのち、１条の凹線を施している。形態的特徴から庄内期のものと思われる。

63 は、はねあげ口縁の端部を有する小片である。胎土には細かい砂粒のみを含み、庄内期後半～布留前半期の甕胎土に類似している。時期的にも庄内後半～布留初期と思われる。口径は 13.3㎝を測り、口縁部はやや外反している。

64 は布留１式の時期の口縁部小片で、内湾気味である。端部は水平な面をもち、内面側への拡張が特徴的である。

65 は布留初期の口縁部小片である。内湾気味の口縁部で、端部は押さえることにより面を形成し、内外に若干拡張したかたちになっている。外面は被熱により黒ずんでいる。

66 は甕と思われる底部で、橙色を呈する。突出ぎみの平底で、体部外面は２条 /㎝の太筋タタキをラセン状に施している。内面はイタナデをクモの巣状に施していると思われる。庄内期のものと判断している。

67 は壺の口縁部片で、弱く外反しながら外上方にのび、端部は丸くおさめる。下端の割れ口は擬口縁となっていることから、頸部の外径は 10.4㎝であることがわかる。布留期の所産と思われる。

68 は台付鉢の脚部である。外反気味に下外方にのびる裾端部には水平な面をもつ。脚部外面はナデ、内面にはイタナデの工具痕が放射状に残っている。坏底部内面にはヘラミガキを施している。

69 は鳥形土製品であるが、頭部の口縁部と尾部上部および背の一部を欠損している。中空で、内面は粗いナデ調整、外面は丁寧なナデを施している。底部は長径 6.8㎝、短径 3.2㎝の小判形の平底で、体部もその形状に合わせるように楕円形を呈している。体部の最大幅は 5.4㎝で、残存高は 6.1㎝を測る。体部横断面の形状は岡山県百間川沢田遺跡出土の写実的なものに近く、丸みをもった逆台形に近い。頭部・尾部は欠失しているためその形状は窺い得ないが、頭部は形状を表現せず、頸部で口縁部となる一

方、尾部は外上方にのびて扁平あるいは尖りぎみとなって口縁部とはならないものと推測している。筆者の分類（岸本 1989）では容器としてのＩ類の中の、頭部を造出せずに口縁部となるＡ類にあたるが、Ｉ－Ａ類の中でもより写実的なものとして特筆できよう。時期的には、他の鳥形土製品の出土例から、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭と考えられる。

70 は管状土錘である。横断面は楕円形を呈し、細かい凹凸が目立つ。孔径は６㎜前後である。時期的には後期後半～布留期で問題ないと思われる。

SX518 （図版 55、写真図版 53）

71 は、体部から「く」字形に外折する口縁部を有する甕の口縁部片で、口縁部は内湾気味に外上方にのびる。端部は上方に若干はねあげている。体部との境の内面には明瞭な稜をもち、体部内面上端はヘラケズリ調整であることから、庄内期後半～布留初期の所産であろう。

72 は短い口縁部で口縁部端に面をもつ甕または壺の口縁部片で、口縁部は厚い器厚のまま外反して端部にいたる。頸部は明瞭でなくすぐに体部へと続くため、形態的には甕の可能性が高い。時期は後期後半～布留期であろう。

73 は管状土錘である。斜めに截断された破片となっているが、人為的ではないようである。横断面は楕円形に近い。孔径は 6㎜前後で、70 と同一の原体であった可能性が高い。時期的にも後期後半～布留期であろう。外面はナデ調整で、表面の凹凸は無く、平滑である。

SX1543 （図版 55、写真図版 54）

74 は台付鉢のほぼ完形品である。鉢部の口縁部は北近畿でよくみられるように小さく屈曲するものである。屈曲の形状からすれば、庄内期末～布留初期の可能性が高い。鉢部内面は全面が N2/0 黒色を呈しており、黒斑のようになっている。内面調整はハケのちナデ、外面は口縁部がヨコナデで体部にはハケを残している。脚部はハケで仕上げている。脚部内面の半分近くが黒斑となっている。

SX540 （図版 55・56、写真図版 54 ～ 56）

75 ～ 82 は甕およびその口縁部である。75 は短く外反する口縁の甕で、ほぼ完形に復元できた。口縁端部は単純に丸くおさめ、体部はやや長く、最大径は中位にある。底部は体部から突出する平底であるが、高さは低い。体部最大径は 19.6㎝で、平底の底部は約６㎜突出する。体部外面は３条 /㎝のタタキを左下がりに連続ラセン状に施し、中位以下には縦方向のタタキを疎らに加えている。外面の体部中位には煤状のものが付着して 10YR3/2 黒褐色を呈し、体部の 1/3 程度の下部は被熱により赤色化し、7.5YR6/3 にぶい褐色を呈している。その他の部分は 10YR8/2 灰白色である。体部内面はヨコハケ調整で、ナデは加えていない。口縁部は体部からのタタキ出し技法を用い、粘土紐を足して口縁部とし、ユビオサエの後、外面にタテハケを加えることによって接合を強固にしている。後期末～庄内期前半の所産であろう。SX540 の中央部分のＡ群より出土したものである。

76 は、体部から「く」字形に屈折して直線的に外上方に短くのびる口縁部で、端部は尖りぎみであるが丸くおさめている。体部は丸みがあり、最大径は中位にあると思われる。体部は左下がりのタタキ（３条 /㎝）で成形しているが、連続ラセン状と呼ぶにはやや雑である。内面調整はナデのようである。口縁部や体部の形状およびタタキなどから、庄内期のものである可能性が高い。SX540 の③区中央部分より出土したものである。

77 の甕口縁部は体部から曲折し、外反気味に外上方に短くのび、端部には面をもつ部分もある。体部は残存部の形状から浅いタイプと推定され、体部最大径は中位になるようである。体部外面には２条

/cmの太筋タタキを水平方向に施しているが、器表には粘土紐の継ぎ目やひび割れが目立っている。体部内面はイタナデを左上方向に施した痕跡が認められるが、単位等は不明である。庄内期後半～布留初期の可能性がある。SX540 の③区部分より出土したものである。

78 は 62 ほど明瞭でないが、口縁端部外面をヨコナデして面をつくったのち、１条の凹線を施したものである。はねあげ状口縁に近い。体部はタタキ成形で、口縁部下半にもタタキ目が認められることから、口縁部叩き出し技法によるものであることがわかる。接合面は丁寧なナデにより消されている。庄内期前半の可能性が高い。

79 は四国東部地域の甕片で、内面は 7.5YR6/4 にぶい橙色を呈する。直線的な肩部から曲折して外反する短い口縁部で、端部を若干肥厚させ、端部には内傾する面をつくりだすとともに上方に拡張している。体部内面には指頭圧痕が目立つ。胎土には細粒の金雲母が含まれている。庄内期を中心とした時期であろう。SX540 の③区Ｂ群部分より出土した。

80 ～ 82 は布留式の甕口縁部である。80 は内湾する口縁部で、端部に面をもつと同時に内外に若干拡張している。頸部付近は丸みがあるが、体部内面は横方向のヘラケズリを施している。布留初期のものであろう。SX540 の③区部分より出土した。

81 は口縁端部を内側に大きく折り返して肥厚させる布留型甕口縁部である。口縁部は内湾し、体部内面を横方向にヘラケズリすることにより器壁が非常に薄くなっている。布留２式であろう。

82 も布留型口縁をもつ甕口縁部小片で、口縁端部内面の肥厚部分は 81 よりも少し幅広である。体部は内面を横方向のヘラケズリにより器厚を減じている。布留２式であろう。

83 は布留期の直口壺口縁部で、約半分が遺存している。口縁部高 5.1cmで、外反気味にのびている。7.5YR7/4 にぶい橙色の赤褐色に近い色調で、胎土にはチャート粒を多く含んでいる。SX540 の③区Ｂ群部分より出土したものである。

84 も布留期の直口壺口縁部片で、口縁部高は 6.9cmである。器表には 5YR6/6 橙色のスリップがかけられていたようである。内外面に横方向のヘラミガキがヨコナデの後に加えられており、内面は密であるものの、外面は疎らとなっている。胎土には石英粒が目立つ。SX540 の③区Ｂ群部分より出土したものである。

85 は複合口縁の壺口縁部である。口縁部分はほぼ完形で、外面屈曲部の稜はにぶいが、そこから一度立ち上がったのち外折する部分は明瞭に表現されており、庄内期の特徴を示しているものと判断できる。なお、屈曲部の下面はヘラを押し当てて整形している。外面調整ヨコナデであるが、内面はハケのちヨコナデで、部分的に粗くヘラミガキを加えている。残存高は 5.7cm。SX540 の③区Ｂ群部分より出土したものである。

86 ～ 90 は壺・甕・鉢等の底部である。86 は体部の角度から壺と思われる底部で、約１cm突出した平底を有している。体部外面は 2.5 条 /cmで左下がりのタタキ成形で、部分的にイタナデを加えている。黒斑が認められる。内面は左上がりのハケであるが、クモの巣状にはなっていない。残存部分の最大径は 22.7cmである。後期末～庄内期であろう。

87 は甕と思われる底部である。突出ぎみの平底で、底面には木の葉の葉脈が明瞭に観取できる。体部外面は太筋（２条 /cm）のタタキを連続ラセン状に施し、内面はイタナデである。残存部の上部は被熱により変色・変質している。SX540 の④区部分より出土したものである。

88 も甕と思われる底部で、平底は体部から５mm程度突出している。体部外面は３条 /cmのタタキを連

続ラセン状に施し、内面は左斜め上方向のイタナデである。SX540 の③区部分より出土したものである。

89 は外面にタタキ目が認められない底部で、鉢と思われる。底部は貼り付けの輪高台で、断面は三角形に近い。体部内面はヨコハケ調整である。SX540 の東部分の①区より出土したものである。

90 は台付鉢底部あるいは蓋のつまみ部分の破片である。ここでは台付鉢として記述する。脚台部の外面にはユビオサエやユビナデが顕著に認められる。体部外面はケズリとしている可能性がある。内面はハケのようであるが、部分的に遺存しているのみである。SX540 の③区Ｂ群部分より出土したものである。

91・92 は有孔鉢の底部である。91 の底部は４㎜ほどの上げ底となっており、中央よりやや偏った位置に外側から径７㎜の孔を穿っている。体部外面は左下がりのタタキ（2.3 条 /㎝）成形で、内面はハケを下から上へ施している。SX540 の③区Ｂ群部分より出土したものである。

92 は突出ぎみの平底である。底部ほぼ中央に径８㎜程度の孔を外側から穿ち、内面は孔周囲をヘラで掻き取ることにより最大径 1.5㎝とした結果、孔の断面形が台形に近くなっている。体部外面は３条 /㎝の左下がりのタタキ、内面底面付近はイタナデをクモの巣状に施している。SX540 の埋土下層から出土した。

93 は平底鉢である。全体の約 1/3 程度の破片で、図上はほぼ完形品である。口縁端部は尖りぎみに丸くおさめ、体部内外面や底面には指頭圧痕がめだつ。SX540 の④区部分より出土したものである。

94 は台付鉢で、脚部を欠失する。鉢部高 3.2㎝と小型で、碗形を呈している。内外面ともナデ仕上げであるが、外面には粘土紐の接合痕や粘土のひび割れが目立つ。脚部は「ハ」字形に開くものである。SX540 の③区部分より出土したものである。

95 も台付鉢と判断した。脚部はやや器壁が厚く、「ハ」字形に開く。内面はナデ調整。鉢部は底部のわずかな部分しか遺存していないが、ミガキ調整があるようにもみえる。天地逆の可能性も否定しえない。5YR6/6 橙色を呈する。

96 も台付鉢と思われる脚部で、鉢部は碗形を呈するものと思われ、内面にはミガキを施しているようである。脚裾部は外反せず内湾しながら下外方に開き、端部は丸くおさめる。脚部内面はナデ仕上げ、外面にはヘラミガキを施している。鉢部と脚部との接合部外面の補強粘土は 10YR7/2 にぶい黄橙色を呈するが、それ以外の部分の大半は 7.5YR7/4 にぶい橙色を呈しており、成分の異なった粘土を補強部分に使用していることがわかる。SX540 の③区Ｂ群部分より出土した。

97 は壺または器台の口縁部片である。口縁端部より約３㎝内側で曲折しはじめることから、頸部が存在して壺となる可能性も残しているが、ここでは器台として報告する。口縁部の内外面に４条１単位の櫛描波状文を描き、口唇部に刻目を加えている。複合口縁状を呈しているが、口縁端部下方への拡張部分が剝離している可能性も残る。器表が荒れているため、調整痕はほとんど残っていない。後期末～庄内期のものであろう。

98 は有段高坏または器台の坏部片である。下段部の直径は 11.0㎝で、ほぼ直立するが、やや外傾している。内面はヘラケズリ後に横方向のヘラミガキ、外面はナデ調整後に横方向のヘラミガキをそれぞれ加えている。庄内期のものと思われる。

99 は高坏と思われる脚部である。中実の脚柱部から大きく下外方に開く裾部となり、端部は丸くおさめている。裾部は若干外反している。直径７㎜の円形透孔は３方向に穿っている。脚柱部の外面は縦方向のヘラミガキで、その下部にハケ痕が残っているが、その他の部分の調整は器表が荒れているため

不明である。SX540 の③区Ｂ群部分より出土した。

100 も高坏と思われる脚部である。空間が狭いながらも中空の脚柱部から大きく下外方に開く裾部となるが、99 よりもなだらかに開いている。裾端部は丸みがある面となっている。直径５㎜の円形透孔が２箇所遺存しており、全体として４方向の可能性が高いが、３方向であった可能性も否定できない。脚柱部外面は縦方向のヘラミガキであるが、ケズリ状に施している部分が目立つ。裾部内面は横方向のハケ、外面は下側が左に偏った縦方向のヘラミガキとなっている。SX540 の④区部分より出土したものと SK618 出土破片が接合した。

101 は器台の脚部と思われる。大きな脚部で、厚みもあり重厚な感があるが、坏部は横外方に少し開いた後、屈折して上方にのびる形態であろう。ただし、屈曲部の外径は 7.1㎝と小さい。脚部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はイタナデをクモの巣状に施している。SX540 の③区部分より出土したものである。

102 は高坏と思われる脚部である。中実の脚柱部から急に大きく開く裾部となるが、端部は欠失している。外面から径７～８㎜の円形透孔を３方向に穿っているが、三等分された均等な位置ではなく、偏っている。外面はヘラミガキ調整であり、部分的にハケ痕が残っている。SX540 の③区部分より出土したものである。

103 は庄内期～布留期にかけての小型器台の脚部である。「ハ」字形に直線的に下外方に開く脚部で、端部は尖りぎみに仕上げている。直径７㎜の円形透孔を外側から５方向に穿っている。脚部中央の穿孔は径８㎜の円形で、上から穿っている。坏部は底面を一部残すのみで、形状は窺い得ない。脚部外面はヘラミガキのようであるが、はっきりとは確認できない。内面は目の粗いハケを斜め放射状に施している。SX540 の②区部分より出土したものである。

104 ～ 108 は土師質で円柱状の管状土錘で、109 は球形の土錘である。いずれも器表が荒れているため調整痕は不明である。104 は完形品で、直径６㎜前後の紐通し孔は中央部で狭まってしまっていることから、後で穿孔した可能性がある。SX540 の③区北西側部分より出土した。

105 はほぼ完形品で、直径５～６㎜の紐通し用の円形穴を図の上方から穿っているようにみえる。SX540 の③区部分より出土したものである。

106 は完形品で、端部の稜は丸みがある。中央の紐通し孔は端部で径６㎜程度であるが、中央部では４㎜程度に狭まっている。SX540 の③区部分より出土したものである。

107 も完形品で、紐通し孔の直径は６～７㎜である。SX540 の③区南側部分より出土したものである。

108 は端部が尖りぎみに細くなる形態のもので、端部先端に欠損部分が認められる。横断面は楕円形を呈し、紐通し孔は直径６㎜程度である。SX540 の④区部分より出土したものである。

109 は球形を呈しているが、1/5 程度が欠失している。紐通し孔は直径３～４㎜程度の円形で、全体の約半分近くに黒斑が認められる。SX540 の上層部分より出土したものである。

以上のように、SX540 から出土した土器は、時期幅があるものの、概ね後期後半～布留２式の時期のものに限定できるようである。また、６点の土錘についてはその所属時期を与えることが難しいが、SX540 出土の他の土器が示す時期と同じであっても問題がないことから、後期後半～布留期の時期のものととらえておきたい。

SK41　（図版 57、写真図版 56）

110 は前期の小型甕で、口縁部の一部を欠失する以外は完形品である。如意形口縁に近く、端面に刻

目を連続して施している。大きく３分割して成形したようである。下部では、外面の下端から７㎝上部あたりに粘土の接合痕がほぼ全周し、外面調整と表面の凹凸が異なっている。もう一か所は内面の口縁端部から５㎝ほど下がった位置で、ユビオサエと凹面が全周している。

使用痕跡では、外面の下端から４㎝ほど上部から口縁部下３㎝ほどの間の高さ約９㎝の部分が10YR3/2 黒褐色という、被熱により焦げた色調を呈していることと、内面の口縁端部から下に８㎝と10㎝の間も焦げたような色調を示している部分が約半周において認められる。なお、外面変色部分には煤状のものが付着している部分が多い。

外面調整は下端が縦方向のイタナデ、その上部は右上がりのナデで、下部接合部から上部は縦方向のハケもしくはイタナデとなっている。内面はイタナデを左上方向に施し、上部接合部から上部はユビオサエとあまいヨコナデで仕上げているようである。

全体的に胎土は粘性の少ないものが使用されているようで、細かいひび割れが目立ち、脆い。

SK1534 （図版 57、写真図版 57）

111 は甕口縁部である。体部から外反して外上方に短くのびる口縁部で、端部には丸みのある面をもつ。体部はタタキ成形、体部内面にはヨコナデ痕が残る。後期末～庄内期の所産であろう。

SK1603 （図版 57、写真図版 56）

112 は平底の鉢の約 1/2 の破片である。体部は底部から外上方にのびた後、一度上方に曲折し、外反して口縁部となっており、口唇部を外側からナデているようである。口唇部の遺存状況は良くない。体部はタタキ成形のようで、内面はナデ仕上げとなっている。形態的には後期末～庄内期前半の可能性が高い。

SK1605 （図版 57、写真図版 57）

113 は壺と思われる底部である。１㎝ほど突出した平底で、体部は横外上方に大きく開き、３条 /㎝のタタキ成形となっている。底部周囲にはユビオサエが認められる。内面は６条 /㎝の粗いハケを底部中心から放射状を基本として乱雑に施している。焼成は良好で器表もよく残っている。外面の一部に黒斑が認められる。後期後半～庄内期前半の可能性がある。

SK 番号不明 （図版 57、写真図版 57）

114 は小型壺または鉢と思われる器種の底部である。突出ぎみの平底で、体部外面は縦方向のヘラミガキとなっている。内面はナデのようであるが、詳細不明である。残存上部内面にヨコナデが認められることから、鉢の可能性が高いと判断している。後期後半～庄内期前半の所産であろう。焼成は良好で堅緻。

SK1662 （図版 57、写真図版 56・57）

115 ～ 117 の３点を図示した。115 の口縁部小片は甕と思われ、外反気味にのびた口縁部で、端部はやや丸みのある面となり、斜め方向の刻目を密に加えているようである。後期後半ごろの所産と思われる。

116 は高坏または台付鉢の坏部・鉢部の約 1/2 の破片である。丸みのある碗形を呈し、口縁端部付近は器厚が増し、端部は丸くおさめている。器表剝離が著しく、調整痕は残存していない。脚柱部との接合面は擬口縁の剝離面となっており、脚柱の径は 4.3㎝程度と判断できる。胎土には１～２㎜の石英・長石類の砂粒を多く含んでいる。後期末～庄内期であろう。

117 は手焙形土器の覆部片である。屈曲部の突帯部分での外径は 15.2㎝、突帯には３㎜間隔で刻みを

加えているが、全周するか否かは不明である。覆部はタタキ成形のようで、外面には縦方向のハケを加えている。内面にはナデや指頭圧痕が残る。鉢部と覆部の境で屈曲するタイプであるが、屈曲角度がにぶいことから、高橋一夫氏分類の２期～３a 期にあたり、後期末～庄内式期であろう。

SP246 （図版 57、写真図版 57）

118 は甕の体部片で、外面が多方向の細かいハケ調整、内面はヘラケズリとナデで器壁がかなり薄いことから、布留前半期の所産と思われる。体部に５×２㎜程度の楕円形の孔が認められるが、内側からあいたもので不自然であり、割れ口も新しいことから、後世のものの可能性が高い。外面には煤が付着している。SP246 の第１層から出土した。

（３）包含層出土遺物 （図版 57、写真図版 57）

119 は（３－３区Ｎ中央出土の）高坏または鉢の口縁部付近の小片である。口縁部が屈曲するもので、３条の擬凹線が観取できる。高坏とすれば北近畿系のものとなる。遺構検出時に出土した。胎土には細かい砂粒を含み、他の土器とは異なっている。

120 は（３－４区出土の）複合口縁の壺口縁部片で、端部は丸味のある面となっており、内側に若干肥厚している。屈曲部外面の稜はやや鋭い。口縁部外面には幅７㎜程度のハケを左斜め上方向に連続的に施しており。波状文の省略したかたちにもみえる。

121 は（３－４区出土の）管状土錘であるが、大きく欠失している。横断面は楕円形で、端部には丸みがある。紐通し孔は直径７㎜を測る。他の遺構出土例から、後期後半～布留期のものであろう。遺構検出時に出土した。

第４節　平安時代～鎌倉時代の遺構と遺物

１．概要

見つかった遺構には掘立柱建物、木棺墓、石敷遺構、炉跡、焼土遺構、集石遺構、土坑などがある。掘立柱建物は 25 棟が復元でき、調査区の全域に分布するが、特に一庫大路次川に面した調査区の南側に沿って、数棟ずつの単位で間隔を置いて立地するのが特徴的である。ただしその単位ごとの間には、溝や柵などで仕切った痕跡は認められない。また調査範囲内では、井戸も見つからなかった。

上記の建物のまとまりの周囲には、木棺墓、石敷遺構、炉跡、焼土坑、集石遺構、土坑などが付属して、１つの建物群をなしている。一方、調査区の北側では、単独で立地する掘立柱建物や石敷遺構などの例が目立つ。

遺構の形成は、出土した土器からみて、平安時代中期（10 世紀代）に遡り、平安時代後期～鎌倉時代（12 ～ 13 世紀）に最盛期を迎えている。

２．遺構

（１）掘立柱建物・柵列

25 棟の掘立柱建物のうち、居住用の母屋となるとみられる建物を中心としたまとまりを１つの単位として、5 箇所の居住域Ａ～Ｅを設定する。居住域Ａは、調査区西端の SB12 とその周囲の SX745、SK760 などとする。居住域Ｂは、４区中央西寄りの SB10・11 とその周囲の SD790・923-1、SX795、SK794 などとする。居住域Ｃは、４区東半の SB04 ～ 09・13 ～ 15 とその周囲の SD822・857、SX761、SK853・859 などとする。居住域Ｄは、５区西側の SB02・03・16 ～ 20 とその周囲の SX1501・1537・1538 などとする。居住域Ｅは、５区東側の SB21 ～ 25 とその周囲の SX1617 ～ 1619・1633 などとする。

SB01（図版 20、写真図版 23）

１－１区東端から約 75 m西側に位置し、単独で立地する。東西２間×南北３間の側柱建物で、東辺の柱１本は失われている。建物の規模は東西 3.9 ～ 4.0 m×南北 4.5 ～ 4.9 m。柱間は東西が約 2.0 m、南北が 1.4 ～ 1.8 m。柱穴掘り方は直径 30cm 前後、深さ 10 ～ 40cm。西辺の柱列の方位は、Ｎ７°Ｗ。

図化した遺物には SP170 から出土した椀（122）がある。

SB02（図版 16・20、写真図版 23・24）

２－１区東端から約 90 m西側に位置し、の SB03 と重複している。東西１間×南北３間分を検出したが、残りが悪く建物構造は不明である。検出した範囲の建物の規模は東西 2.6 m×南北 6.8 m。南北の柱間は 2.2 ～ 2.3 m。柱穴掘り方は直径 20 ～ 25cm、深さ 10 ～ 30cm。南北方向の柱列は、ほぼ方位北を向いている。出土した遺物はない。

SB03（図版 16・20、写真図版 23・24）

居住域Ｄの SB02 と重複しており、２－１区と５区にまたがって検出された。南北２間以上×東西４間の総柱建物とみられるが、残りが悪く構造は不明である。検出した範囲の建物の規模は南北 3.5 ～ 4.0 m×東西 10.3 m。柱間は南北が 1.6 ～ 2.2 m、東西が 2.2 ～ 2.6 mだが、西から２間目だけが広く 3.0 mとなっている。柱穴掘り方は直径 20 ～ 30cm、深さ 10 ～ 20cm。南北方向の柱列は、ほぼ方位北を向いている。遺物は出土していない。

SB04（図版 21・37、写真図版 24）

２－２区東端から約 45 m西側に位置し、単独で立地する。南北 3 間以上×東西 7 間の総柱建物で、北側の水路部分にもう 1 間延びていた可能性がある。検出した範囲の建物の規模は南北 7.5 ～ 7.7 m ×東西 15.0 m。柱間は南北が 2.1 ～ 2.3 m、東西が 2.1 m。柱穴掘り方は直径 20 ～ 25cm、深さ 3 ～ 30cm。南北の柱列の方位は、N 6°W。遺存状況が悪く、所々の柱が抜けているが、梁間・桁行とも柱が直線的に通り、整然とした設計である。ただし建物の規模に比して、使われている柱は 15cm 程度の直径である。

図化した遺物には SP422 から出土した瓦器椀（123）と SP442 から出土した土師小皿（124）がある。

SB05（図版 17・22・36・37、写真図版 25）

４区東端から約 35 m西側に位置し、SB06 ～ SB09 とともに居住域Ｃに属する。南北 4 間×東西 4 間の総柱建物で、東から 2 列目中央の柱が抜けており、土間状となっている。建物の規模は南北 7.3 ～ 7.4 m×東西 8.7 ～ 8.9 m。柱間は南北が 1.8 ～ 1.9 m、東西が 2.1 mで、東側 1 間分のみが 2.2 ～ 2.3 m。柱穴掘り方は直径 20 ～ 50cm、深さ 20 ～ 60cm で、東端の柱列に細いものが多い。西辺の柱列の方位は、N 12°W。

建物の西辺と南辺に沿って 2 本の溝が認められる。西辺全体をカバーする溝 SD822 は、延長 8 m、幅 0.4 ～ 0.7 m、深さ 0.2 mで、南西隅で一旦途切れる。南辺の溝 SD857 は、南西隅からの延長 4.2 m、幅 0.7 m、深さ 0.15 mで、西側の 2 間分に該当する。ただし溝は 2 本とも柱穴掘り方と切り合っていて、雨落ち溝というには近接しすぎており、役割は不明である。

SD822 の溝底および建物の北辺には小ピットが並び、他にも多数の柱穴が存在するため、何度かの建て替えがあった可能性があるが、復元しえたのは SB05 のみである。しかし建物の南東隅にかかる幅 4 mほどの谷状落ち（図版 39）からは 10 世紀代から 13 世紀までの遺物が出土し、長期にわたって利用された空間であることを示す（図版 17 参照）。

図化した遺物には SP から出土した土師小皿（125 ～ 130）、皿（131）、須恵器鉢（132･133）、瓦器椀（134 ～ 137）がある。

SB06（図版 17・22・37、写真図版 25）

SB05 の北辺に接し、1 間分西へずれる。居住域Ｃに属する。南北 2 間×東西 4 間の総柱建物である。建物の規模は南北 3.2 ～ 3.9 m×東西 7.5 m。柱間は南北が 1.4 ～ 2.1 m、東西が 1.8 ～ 2.0 m。柱穴掘り方は直径 20 ～ 40cm、深さ 15 ～ 50cm。南北の柱列の方位は、N 8°W。SB05 に近接し、柱列の方位もほぼ共通するので両者は一連の施設とみられる。

図化した遺物には SP から出土した土師小皿（138）、瓦器椀（139 ～ 141）、青磁碗（142）がある。

SB07（図版 23、写真図版 26）

４区東端から約 60 m西側に位置し、SB05 とは約 20 mの間隔がある。SB08 と重複する位置関係で、SB07 の SP1048・1052 が、SB08 の SP1058・1061 を切っている。居住域Ｃに属する。東西 2 間×南北 3 間の総柱建物である。建物の規模は東西 4.3 ～ 4.7 m×南北 5.8 ～ 6.0 m。柱間は東西が 2.1 ～ 2.5 m、南北が 1.8 ～ 2.1 m。柱穴掘り方は直径 25 ～ 30cm、深さ 15 ～ 65cm。西辺の柱列の方位は、N 5°W。

図化した遺物には SP934 から出土した瓦器椀（143）がある。

SB08（図版 23、写真図版 26）

SB07 と重複する位置関係で、柱穴を切られている。居住域Ｃに属する。東西 2 間×南北 2 間の総柱

建物だが、北辺中央の柱穴が認められない。建物の規模は東西 3.7 ～ 4.0 m × 南北 3.2 ～ 3.4 m。柱間は東西が 1.6 ～ 2.1 m、南北が 1.5 ～ 1.8 m。柱穴掘り方は直径 20 ～ 30cm、深さ 3 ～ 30cm。西辺の柱列の方位は、ほぼ方位北を向いている。

図化できる遺物は出土していない。

SB09（図版 23、写真図版 27）

４区東端から約 50 m西側に位置し、SB05 とは約 10 mの間隔がある。居住域Ｃに属する。東西 2 間 × 南北 1 間以上の側柱建物である。検出した範囲の建物の規模は、東西 3.6 m × 南北 1.6 m以上。柱間は東西が約 1.8 m、南北が 1.6 m。柱穴掘り方は直径 25 ～ 40cm、深さ 25 ～ 40cm。西辺の柱列の方位は、N 20° W。

図化した遺物には SP1033 から出土した須恵器椀（144）がある。

SB10（図版 18・24・36・38、写真図版 28）

４区東端から約 80 m西側に位置し、SB11 とともに居住域Ｂを形成する。多くの柱穴が集中し、複数の建物に分かれる可能性もあるが、西・北・東辺を囲むような溝の存在から 1 つの建物として復元する。ただし建物の構造は複雑で、南北 3 間 × 東西 4 間を基本としながら、北西側の 2 間 × 3 間は側柱の土間状で、床面の不定形な凹みに炭化物が多く含まれている。その東側の 1 間分は半間のところで柱を追加して 2 間 × 2 間の総柱としている。南側の 1 間分は一部が調査区外のため判然としないが、南西側の 1 間 × 2 間も半間のところで柱を追加して 2 間 × 2 間の総柱とするようである。さらに南東隅の 1 間四方は柱の並びが乱れていて、その部分に台形落ち込み SX795 が存在する（以上、図版 18 参照）。

建物の規模は南北 8.0 ～ 8.8 m × 東西 11.4 ～ 12.6 m。柱間は南北が 2.4 ～ 2.8 m、東西が 2.3 ～ 3.1 m を基本とするが、半間のところは 1.3 ～ 2.4 mで区画している。柱穴掘り方は直径 38 ～ 80cm、深さ 20 ～ 98cm で、大型で深い掘り方のものが多い。柱の太さも 20 ～ 30cm あり、SP1084 の底には礎盤状の板石が据えられていた。建物の立地する地質が、他の地点に比べて中砂～粗砂混じりで軟弱なのを反映するものとみられる。西辺の柱列の方位は、N 19° W。

建物西辺の溝 SD790 は延長 2.6 m、幅 0.35 m、深さ 0.13 mで、西辺の一部に該当する。北辺の溝 SD923-1 は延長 9.0 m、幅 0.55 ～ 0.75 m、深さ 0.35 mで、西寄りの 3 間分に該当する。東辺の溝 SD794 は延長 2.3 m、幅 0.4 m、深さ 0.35 mで、北端の一部に該当する。SD923-1 と SD794 は建物から 1.5 mほど離れていて雨落ち溝の役割を果たしたと思われるが、SD790 は柱穴に近接しており他の役割を想定する必要がある

建物の南東隅は柱穴の配置が乱れてやや広がっていて、そのスペースに台形落ち込み SX795 が収まり、南西隅はさらに調査区外へ続く。南北 3.6 m、東西 5.5 m以上、深さ 0.3 mで、底面は平坦である。上層には 15 ～ 30cm 大の亜円礫が含まれる。

図化した遺物には SP から出土した土師小皿（145 ～ 147）、瓦器椀（148 ～ 154）、陶器甕（155）がある。

SB11（図版 18・25、写真図版 27）

SB10 の北東隅の北側に位置し、居住域Ｂに属する。南北 2 間 × 東西 2 間の側柱建物で、規模は南北 2.9 m × 東西 3.0 m。柱間は南北が 1.4 ～ 1.5 m、東西が 1.5 m。柱穴掘り方は直径 25 ～ 40cm、深さ 20 ～ 70cm。南北方向の柱列の方位は、N° 16 W。

図化できる遺物は出土していない。

SB12（図版 19・25、写真図版 29）

４区の西端に位置し、居住域Ａに属する。調査区内で南北２間×東西３間分を検出したが、柱穴の残りが悪く構造の詳細は不明で、さらに北側へ延びていた可能性もある。検出した範囲の規模は南北 4.1 m×東西 6.9 m。柱間は南北が 1.8 ～ 2.3 m、東西が 1.9 ～ 2.8 m。柱穴掘り方は直径 25 ～ 50cm、深さ 8 ～ 30cm。南北方向の柱列の方位は、N 25° W。

図化した遺物には SP744 から出土した須恵器鉢（156）がある。

SB13（図版 17・26、写真図版 29）

４区東端から約 40 m西側に位置し、SB06 と重複するが、柱穴に直接の切り合い関係はない。居住域Ｃに属する。南北２間×東西６間の側柱建物で、南東隅の柱のみは SK735 によって失われている。規模は南北 4.5 ～ 4.8 m×東西 13.2 m。柱間は南北が 2.2 ～ 2.4 m、東西が 2.0 ～ 2.4 m。柱穴掘り方は直径 30 ～ 60cm、深さ 15 ～ 35cm。南北方向の柱列は、ほぼ方位北を向いている。

図化した遺物には SP739 から出土した黒色土器（157）がある。

SB14（図版 17・26、写真図版 29）

SB13 の南西隅の南側に位置し､SB13 とともに居住域Ｃに属する。南北１間×東西２間の建物である。規模は南北 2.5 m×東西 4.3 m。東西の柱間は 2.0 ～ 2.3 m。柱穴掘り方は直径 30 ～ 40cm、深さ 25 ～ 45cm。南北方向の柱列は、ほぼ方位北を向いている。

図化できる遺物は出土していない。

SB15（図版 27、写真図版 30）

４区東端から約 10 m西側で、SB05 の約 10 m東側に位置する。居住域Ｃに属する。南北３間×東西３間の建物で、東側２間分は土間状となっている。建物の規模は南北 6.7 ～ 7.0 m×東西 7.6 ～ 7.7 m。柱間は南北が 1.8 ～ 2.6 m、東西が 2.4 ～ 2.7 m。柱穴掘り方は直径 25 ～ 55cm、深さ 35 ～ 55cm。西辺の柱列の方位は、N 12° E。

図化できる遺物は出土していない。

SB16（図版 27、写真図版 30）

５区西端から約 20 m東側で、SB02・03・17 ～ 20 とともに居住域Ｄを形成する。SB17 の南東隅の南側に位置し、一連の建物とみられる。南北２間×東西２間の側柱建物だが、南辺中央の柱がない。規模は南北 3.3 ～ 3.4 m×東西 3.8 ～ 3.9 m。柱間は南北が 1.6 ～ 1.7 m、東西が 1.9 m。柱穴掘り方は直径 25 ～ 30cm、深さ 10 ～ 35cm。南北方向の柱列の方位は、N 6° W。

図化できる遺物は出土していない。

SB17（図版 28、写真図版 31）

５区西端から約 15 m東側に位置し、居住域Ｄに属する。南辺の東寄りに SB16 が付属し、7 m隔てた南側に SB18 と、5 m隔てた東側に SB03 が位置する。南北４間×東西４間の総柱建物で、東から２列目中央の柱が抜けて土間状となる他、東辺の北から２番目の柱も認められなかった。建物の規模は南北 7.5 m×東西 9.5 m。柱間は南北が 1.8 ～ 1.9 m､東西の西側２間分が 2.2 ～ 2.3 m､東から２間目が 3.1 m、東側１間分が 1.9 ～ 2.0 m。柱穴掘り方は直径 25 ～ 40cm、深さ 10 ～ 30cm で、東端の柱列に細いものが多い。南北の柱列の方位は、N 8° W。

図化した遺物には SP1507 から出土した土師小皿（158）と椀（159）がある。

SB18（図版 29、写真図版 31）

５区西端から約 15 m東側に位置し、居住域Ｄに属する。7 m隔てた北側に SB17 と、4.5 m隔てた東側に SB19 が位置する。南北 4 間×東西 4 間の総柱建物で、東から 2 列目中央の柱が抜けて土間状となる他、東辺の南から 2･3 番目の柱が 1 本で代用され、東辺のみ 3 間となる。建物の規模は南北 7.6 ～ 8.3 m×東西 9.0 ～ 9.4 m。柱間は南北が 1.8 ～ 2.2 m、東西の西側 2 間分が 2.1 ～ 2.6 m、東側 2 間分は 1.6 ～ 2.5 mでばらつきが大きい。柱穴掘り方は直径 15 ～ 30cm、深さ 10 ～ 25cm。南北の柱列はほぼ方位北を向いている。

図化した遺物には SP1697 から出土した土師器椀（160）がある。

SB19（図版 16・30、写真図版 32）

５区西端から約 30 m東側に位置し、居住域Ｄに属する。SB20 と重複するが、柱穴の直接の切り合いはない。他にも柱穴の並びは認められるが、建物として復元できたのはこの 2 棟である。南北 4 間×東西 4 間の総柱建物で、東から 2 列目中央の柱が抜けて土間状となる。建物の規模は南北 7.3 ～ 7.7 m×東西 8.2 m。柱間は南北が 1.8 ～ 2.0 mだが東辺のみ 1.5 ～ 2.1 mとばらつく。東西の柱間は 2.0 ～ 2.1 m。柱穴掘り方は直径 25 ～ 40cm、深さ 10 ～ 50cm。南北の柱列の方位は、Ｎ 5°Ｅ。

図化した遺物には SP から出土した土師小皿（161 ～ 164）、青磁碗（165）、瓦質甕（166）、突帯壺の体部（167）がある。

SB20（図版 16・31、写真図版 32）

SB19 と重複し、1 間分東へずれる。居住域Ｄに属する。南北 4 間×東西 4 間の総柱建物で、北東の角と東辺南から 2 番目の柱が抜けている。建物の規模は南北 7.5 m×東西 7.5 ～ 7.8 m。柱間は南北が 1.8 ～ 2.0 m、東西が 1.7 ～ 2.4 m。柱穴掘り方は直径 25 ～ 40cm、深さ 10 ～ 45cm。西辺の柱列の方位は、Ｎ 4°Ｅ。

図化した遺物には SP から出土した土師器（168・169）、瓦器椀（170・171）、青磁碗（172）がある。

SB21（図版 32、写真図版 32）

５区東端から約 60 m西側に位置し、SB19・20 や SB22 ～ 24 の中間に所在するが、居住域Ｄに属するものとする。南北 2 間×東西 5 間以上の側柱建物で、水田の段差によって大きく削平されているため、南辺は 5 間、北辺は 2 間分を残すが東端は不確定である。検出した範囲の規模は南北 4.8 m×東西 11.3 m以上。柱間は南北が 2.1 ～ 2.7 m、東西が 1.9 ～ 2.6 m。柱穴掘り方は直径 35 ～ 50cm、深さ 20 ～ 50cm。南北方向の柱列は、ほぼ方位北を向いている。

建物の規模・構造、柱間、方位が類似していることから、本来は SB13 と同じ 2 間× 6 間の側柱建物であった可能性が高い。

図化した遺物には SP1656 から出土した瓦器椀（173）がある。

SB22（図版 15・33、写真図版 33）

５区東端から約 35 m西側に位置し、居住域Ｅに属する。SB22 ～ 24 の 3 棟は重複するが、柱穴の直接の切り合いはない。他にも柱穴の並びは認められるが、建物として復元できたのはこの 3 棟である。南北 2 間以上×東西 4 間の総柱建物で、北から 3 列目西端の柱以外は、水田の段差によって南半部が失われている。検出した範囲の建物の規模は南北 4.7 m以上×東西 7.8 m。柱間は南北が 2.4 m、東西が 1.8 ～ 2.2 m。柱穴掘り方は直径 30 ～ 45cm、深さ 8 ～ 45cm。西辺の柱列の方位は、ほぼ方位北を向いている。

図化できる遺物は出土していない。

SB23（図版 15・34、写真図版 33）

居住域Ｅに属する。重複する SB22 ～ 24 の 3 棟の中で、他より 2 間分北へずれる。南北 3 間以上×東西 5 間の総柱建物で、南へさらに延長したかは、水田の段差により不明である。また西と北から 3 本目の柱がなくて土間状となっており、さらに北西隅の柱も認められない。検出した範囲の建物の規模は南北 5.8 ～ 6.5 m以上×東西 10.7 ～ 11.0 m。柱間は南北が 1.8 ～ 2.5 m、東西が 1.8 ～ 2.5 mで、土間にあたる西から 2 ～ 3 間目で柱間が広くなる傾向にある。柱穴掘り方は直径 30 ～ 50cm、深さ 10 ～ 30cm で、北辺の SP1632 は底に板石を据えていた。南北の柱列の方位は、ほぼ方位北を向いている。

図化した遺物には SP から出土した土師小皿（174）、瓦器椀（175 ～ 177）がある。

SB24（図版 15・33、写真図版 33）

居住域Ｅに属する。重複する 3 棟のうち、SB22 の柱列との対応が感じられる。南北 1 間以上×東西 3 間の建物で、北から 3 列目以南は水田の段差によって失われている。検出した範囲の建物の規模は南北 2.3 ～ 2.7 m以上×東西 6.2 m。柱間は東西が 1.8 ～ 2.6 m。柱穴掘り方は直径 35 ～ 40cm、深さ 15 ～ 35cm。南北の柱列の方位は、ほぼ方位北を向いている。

図化した遺物には SP1643 から出土した土師小皿（178）と瓦質羽釜（179）がある。

SB25（図版 35）

３区と２－１区にまたがっており、３区東端から約 45 m西側で単独に立地する。南北 2 間×東西 2 間の総柱建物だが、東辺中央の柱がない。建物の規模は南北 4.5 ～ 4.7 m×東西 5.8 ～ 6.1 m。柱間は南北が 2.2 ～ 2.4 m、東西が 2.8 ～ 3.1 m。柱穴掘り方は直径 20 ～ 40cm、深さ 10 ～ 45cm。南北の柱列の方位は、Ｎ４°Ｗ。

図化した遺物には SP557 から出土した土師皿（180）と甕（181）がある。

SA01（図版 35、写真図版 33）

２－２区に位置し、SB04 と重複している。東西方向に 3 間分の並びを検出したが、周囲に関連する意向は認められない。検出した延長は 7.1 m、柱間は 2.3 ～ 2.5 m。柱穴掘り方は直径 20 ～ 30cm、深さ 10 ～ 25cm。柱列は、ほぼ方位北に直交している。

図化できる遺物は出土していない。

（2）谷状落ち・SX795

谷状落ち（図版 39、写真図版 34）

谷状落ちは SB05 南東隅にかかるように南から北へと延びる落ち込みである。落ち込みの南側は、調査区南壁へと続いており、調査区外へと伸びている。落ち込みは、上面全体を洪水砂と考えられる酸化鉄を含む浅黄色極細砂（第４層）に覆われている。遺構の埋土は、極細砂シルト質を呈する第５～７層である。第６層では、直径 10 ～ 40cm の比較的大型の亜角礫を、第７層では小型の 1 cm 大の礫を、落ち込み底部に接した状態で検出した。いずれも面の向きや傾きが不規則な方向であり、周辺から流れこんだものと考えられる。落ち込みの底部は水平ではなく、北から南へと緩やかに傾斜している。遺物は、中世のものに限られ、土師器皿・同坏・瓦器・鍋・羽釜・須恵器甕・土錘・青磁とバラエティに富んでいる。

この谷状落ちは、SB05 の南東隅に落ち込みの方が位置することや、落ち込み底部が北から南へと傾斜すること、さらに出土遺物に豊富な日常雑器を持つことから、単独で存在したものではなく、掘立柱

建物の水屋としての機能を持っていた可能性がある。

SX795（図版 39、写真図版 35）

SX795 は、SB10 の南東隅に位置し、掘立柱建物内に位置する。平面は台形を呈し、南西隅部分が調査区外へと伸びる。検出面から SX795 の底部までの深さは、南北方向で約 2.3 m、東西方向で約 2.2 m であり、SX795 の底部はほぼ水平であった。埋土は２層に分類で、大半が黄褐色極細砂～細砂の第１層である。第１層は、直径 15 ～ 30cm 大の亜円礫を含み、SX795 の底部に接した状態で出土した。これらの礫群は、SX795 内の四方にあり、まとまっていない。またいずれの礫も面の向きや傾きが不規則な方向であり、周辺から流れ込んだものと考えられる。遺物は、土師器皿が出土している。

SX795 は南西に伸びる部分を除いて、SB10 の南東隅の一間内に収まる。遺物は土師器皿のみと僅少であるが、SB10 との位置関係から考えて、SB10 の水屋と考えたい。

（３）木棺墓・土壙墓

SX1617（図版 40、写真図版 36）

５区で、SB22・23 の西外側に位置する。掘り方は長方形で、長さ 2.5 m、幅 0.9 m、深さ 0.4 m。掘り方の中央部は掘りすぎていて、数 cm 埋め立てている。木棺の側板と小口板の痕跡が断面で観察でき、その棺の長さ 2.0 m、幅 0.55 m、深さ 0.37 m。主軸の方位は、N 20° Wで、SB22・23 とは約 20° ずれている。

遺物は出土してない。

SX1618（図版 40、写真図版 36）

５区で、SB22・23 の西内側に位置するが、南側の過半は水田の段差で失われている。掘り方は隅丸の長方形で、検出した範囲の長さ 0.75 m、幅 0.85 m、深さ 0.17 m。木棺の側板と小口板の痕跡が断面で観察でき、その棺の検出した範囲の長さ 0.5 m、幅 0.5 m。主軸の方位は、N 4° W で、SB22・23 とのずれはわずかである。

図化できる遺物は出土していない。

SX1619（図版 40、写真図版 37）

５区で、SB23 の西壁際に沿っている。掘り方はやや歪な長方形で、長さ 1.3 m、幅 0.6 ～ 0.7 m、深さ 0.16 m。掘り方の断面は皿状で、木棺痕跡を観察できず、土壙墓と考えられる。主軸の方位は、N 3° Wで、SB23 とほぼ同一である。

図化した遺物には土師小皿（236）がある。

SX1633（図版 40、写真図版 37）

５区で、SB23 の東壁際に沿っている。掘り方は不整長方形で、長さ 1.4 m、幅 0.78 ～ 1.0 m、深さ 0.16 m。掘り方の断面は皿状で、木棺痕跡を観察できず、土壙墓と考えられる。主軸の方位は、N 4 ° Wで、SB23 と約 3° のずれある。中央付近に 30cm 大の礫が落ち込んでいて、その傍らに切っ先を南へ向けた刀（M7）が、北側の中央付近に青磁碗（237）が副葬されていた。また、埋土から刀子（M6）も出土している。

（４）石敷遺構

SK60（図版 41、写真図版 38・39）

H23 年度の確認調査で、SK60 の南東隅部が検出され、竪穴住居跡の可能性が指摘された。H24 年度の本発掘調査時には、確認調査に引き続き、SK60 の焼土東西 1.94 m、南北 1.9 mを検出した。焼土は平坦ではなく、東を除く三方が土手状に盛り上がり、東側が検出面から中央に向かって緩やかに下降するすり鉢状であった。焼土の堆積状況を確認するために断割調査を行ったところ、下層より炭層（第５層、東西 0.76 m、南北 0.46 m）と炭層の直下から石敷を検出した。

石敷は、直径 25cm 大の川原石と思われる扁平な亜角礫を敷き詰めたものである。石敷の表面には、直上の炭層がべっとりと付着していた。石敷の頂部の高さはほぼ水平であるが、中央から東側がやや下がる。それに対応して、直上の炭層も厚く堆積する。これらの石には、被熱を受けたものが４石あり、特に西側の石（東西断面図に西端）は原型を留められないほどもろくなっていた。他の３石には、表面にのみ被熱が認められた。また、石と石の間には焼土が入り込んでいた。

後述の SX1501 のような壁面を形成する立石はなく、その痕跡も確認できなかった。ただし、西壁と北壁で焼土が壁状に立ち上がっており、本来は立石が据えられていた可能性がある。個別の石は、第６層にめり込む形で据えられており、石を除去した面は凹凸が激しい。頂部を水平に揃えるために、据え付け時に傾斜を調整したと考えられる。

焼土周囲には、焼土を中心として桁行２間、梁行１間の建物跡と考えられる柱穴群を検出した。周囲の柱穴群は、調査の工程上一段下げを行った後に断割調査を行ったが、明瞭な埋土の堆積は確認できなかった。石敷の直上で、土師器皿（238）と瓦器片が出土した。

SX1501（図版 42、写真図版 39 ～ 41）

５区で、SB02･03･16 ～ 20 に囲まれた中央に位置し、もっとも接近している SB19 北西隅の柱穴とは、60 ～ 70cm 程しか離れていない。中央南北に水田段差が通っており､西半部は約 30cm 削平されている。検出時は、周囲をめぐる石列の内側に、10 ～ 30cm 大の亜角礫が盛り上がるように集積されている状況であった。内側の集石は焼土・炭を含む土（1 層）で埋まっており、特に中央付近の２層では、焼土ブロックと炭層が互層状となっていた。1・2 層の下は焼土ブロック・炭を含む土（3 層）で埋めたてられ、その上面の南東寄りに 4 点の椀・皿が重ねて埋置されていた。一番上が土師器皿（244）、以下 3 枚は瓦器椀（245 ～ 247）で、上向きに置かれていた。3 層の下には炭層（4 層）が 2 ～ 5cm の厚みで一面に広がっており、火が焚かれた後あまり攪乱されずに埋めたてられた状況を示す。炭層の下は平石を敷き詰めた礫床となっており、その中でも中央東寄りの石の赤化が著しく、もっとも強く熱を受けたことを示す。

改めて全体の形状を説明すると、掘り方の平面形状は隅丸長方形で、南辺は弧状となっている。掘り方の南北が長軸で 2.34 m、東西の短軸が 1.92 m、検出面からの深さ 0.56 m。掘り方の壁面に沿って、30 ～ 50cm 大の平石を立て並べて腰石状の周壁としている。その上部には 20 ～ 30cm 大の礫を、現状で２～３段､側面を見せるように積み上げており､高さ 50cm 以上の側壁とする。壁の立ち上がり角度は、南･北壁はほぼ垂直で、東･西壁はやや外開きになる。周壁下端の規模は、長軸 1.9 m、短軸 1.3 mである。

この周壁の内側が前述の礫床となっており、使われている平石は南西側がやや大きく 20 ～ 40cm 大、北東側は 10 ～ 20cm 大のものが多い。礫床の規模は、長軸 1.66 m、短軸 1.23 m。礫床の外縁の石に並

びがあり、外周を決めてから内側の石材を配置している。その外周と周壁の間には５～15cm の間隙が認められ、礫床上面の炭層はその間隙にも及んでおり、特に炭化材なども残っていないところから、火を焚いた時点では間隙は空間となっていたようである。

これに類似した遺構はこれまでに火葬遺構と評価されたこともあるが、今回出土した炭層を水洗したところ、骨片をはじめ手がかりになるような遺物は得られず、その性格は不明である。

図化した他の遺物には、土師器羽釜・鍋（239 ～ 241）、土師器小皿（242）、瓦器椀（243・248）、土師器皿（249）、須恵器の底部（250）がある。

（５）炉跡・焼土坑

比熱による焼土面や炭層などを伴う土坑を焼土坑としてまとめる。そのうち一定した構造のものが２つ並ぶ SX1537・1538 については、何らかの生産に関わる炉跡とした。

SX1537・1538（図版 43、写真図版 42）

SX1537 は、５区の SB18 の南東隅に重なっており、そこから約１m隔てた南側に SX1538 が位置する。SB18 の柱穴との切り合いはない。

SX1537 は平面円形で、直径 0.9 m、深さ 0.15 m。皿状の床面にチップ状の炭と、5mm ～ 2cm 大の焼土片を多く含む炭層が、5cm ほどの厚さで堆積している。

SX1538 は南側 1/3 ほどが側溝で失われているが、やはり平面円形で、直径 0.78 m、深さ 0.3 m。皿状の床面にチップ状の炭を多く含む炭層が、2cm 前後の厚さで堆積している。

２つの遺構の床面から肩部にかけて比熱によって赤く硬化した焼土面があり、その下にも炭が混じる層が認められるところから、あらかじめ路床を調整する作業を行っていたかもしれない。炭層の水洗選別では手がかりになるような遺物は得られなかったため、この炉でどのような作業を行っていたかは不明である。

図化した遺物は SX1537 では土師器小皿（251）、瓦器椀（252･253）、SX1538 では瓦器椀（254）がある。

SX740（図版 43、写真図版 42）

４区の SB23 の西端に重なっているが、柱穴との切り合いはない。東西 0.54 m × 南北 0.72 mの隅丸方形で、深さ 5cm の皿状の断面を呈する。坑底の焼土面に炭層を伴う。

遺物は出土してない。

SX943（図版 43）

４区の SB07 の西端近くに位置する。ほとんど削平されていて、0.3 m × 0.34 mほどの焼土面が残るのみである。

SX896（図版 43、写真図版 42）

４区の SB05 の東側に位置する。東西 0.55 m × 南北 0.86 mの不整楕円形で、深さ 23cm の箱形の断面を呈する。中層以上に 20 ～ 30cm 大の礫や焼土塊を含むが、直接火を受けた痕跡は乏しい。

遺物は出土してない。

SK70（図版 44）

Ｃ３区で検出した、直径 45cm の２基の土坑である。北側の土坑を南側の土坑が切っている。双方の土坑の壁は焼土になっているが、切りかっている南側の焼土の方が、北側のそれよりも焼け締まっている。土坑の深度は約 25cm と近く、埋土も同じ灰白色細粒砂である。遺物は出土していない。

SK176（図版 44、写真図版 42）

１－１区で検出した焼土坑である。西側に焼土が、そこを端として三方に焼土片が東西 0.4 m、南北 0.35 mに拡がる。焼土は、土坑の西側底から東側まで伸びるが、底全体には拡がらない。

焼土の直上で鍋と考えられる土師器片が出土した。

SK187（図版 44、写真図版 42）

１－２区で検出した焼土片と炭片を伴う土坑である。北側の一部は調査区外にあるため、全容はわからないが、平面形は楕円形を呈する。深さは 8cm である。焼土は、SK187 の第１層付近のみで、底面までは続かない。炭層は第１層から底面まで拡がる。遺物は出土していない。

SK408（図版 44、写真図版 42）

２区で検出した焼土と炭を伴う土坑である。東西 0.72 m、南北 0.77 mの不整形な円形を呈する。底までの深さは 10cm である。土坑底面で、東西 0.65 m、南北 0.5 mの炭層の広がりが検出された。炭層の下層には焼土が部分的に検出された。炭層と焼土を除去した後、精査をすると、土坑底面に直径 6cm の小さいピットが複数検出できた。須恵器･土師器が出土しているが、細片のため図化していない。

SK454（図版 44、写真図版 42）

２区で検出した焼土と炭を伴う土坑である。南側の一部を側溝によって破壊してしまったが、東西 0.82 m、南北 1.1 m以上の長方形に近い楕円形を呈する。焼土・炭混じりの堆積土を掘削すると、炭が３ヶ所、焼土が２ヶ所、点的な広がりを検出した。また、土坑の底には、長軸約 20cm、短軸約 10cm の小ピットを 10 ヶ所検出した。遺物は出土していない。

（６）集石遺構

SX745（図版 45、写真図版 43）

４区西端に近い SB12 の南側に位置する。1.6 m × 1.85 m以上の楕円形だが、掘り方の北半は検出できなかった。現状で深さ 0.1 ～ 0.2 mの浅い落ち込みとなっており、10 ～ 40cm 大の礫が 1 ～ 1.5 mほどの範囲にかたまっている。礫中からは土器片や鉄鏃などが出土した。

図化した遺物には瓦器椀（208）、土師鍋・羽釜（209・210）、瓦質羽釜（211）、ふいごの刃口（212）、雁股鏃（M4）がある。

SX761（図版 45、写真図版 44）

４区の SB07・08 と SB13 の間に位置する。1.2 m × 1.8 mの不整楕円形で、深さ 0.2 mの皿状の落ち込みの坑底付近から上面まで、数 cm ～ 25cm 大の礫が含まれている。

図化できる遺物は出土していない。

SX1592（図版 44、写真図版 44）

５区の南西隅で、４区との境界部に位置する。幅 1.25 m、長さ 4 m以上の溝状の落ち込みで、南側は調査区外へ続く。深さ 0.5 ～ 0.6 mの逆台形の断面形で、坑底に 15 ～ 50cm 大の礫が落ち込んでいる。

図化した遺物には須恵器の鉢の口縁部（213）がある。

（７）土坑

SK68（図版 46、写真図版 45）

南北 1.3 m、東西 0.75 mの楕円形を呈する土坑である。深さは 0.1m である。土師器が出土しているが、

細片のため図化していない。

SK72（図版 46、写真図版 45）

長軸 1.75 m、短軸 0.9 mの不定形な形の土坑である。土坑内部で上下 2 段に分かれる。深さは最も深い地点で、約 0.35m である。埋土には直径 10cm 大の礫が含まれている。土師器片が出土しているが、細片のため図化していない。

SK97（図版 46、写真図版 45）

南北 1.35 m、東西 0.67 mの楕円形を呈する土坑である。深さは 0.15 mである。埋土から土師器片が出土しているが、小片のため図化していない。

SK104（図版 46、写真図版 45）

南北 0.7 m、東西 0.6 mの楕円形を呈する土坑である。深さは 8cm で、単層である。瓦器と土師器が出土しているが、細片のため図化していない。

SK113（図版 46、写真図版 45）

南北 0.8 m、東西 0.75 mの円形を呈する土坑である。深さは 0.17m である。土師器、瓦器小片が出土している。瓦器椀底部（214）を図化した。

SK134（図版 47、写真図版 45）

南北 0.75 m、東西 0.46 mの楕円形を呈する土坑である。深さは 0.12m である。土師器皿と土師器が出土しているが、細片のため図化していない。

SK161（図版 47）

南北 0.6 m，東西 0.55 mの不整形な円形を呈する土坑である。深さは 0.27m である。土師器が出土しているが、細片のため図化していない。

SK183（図版 47、写真図版 45）

長軸 1.38 m、短軸 0.5 mの楕円形を呈する土坑である。深さ 0.15m である。土師器が出土しているが、細片のため図化していない。

SK194（図版 47）

南北 0.73 m，東西 0.75 mの円形を呈する土坑である。深さ 0.2m である。土師器が出土しているが、細片のため図化していない。

SK228（図版 47）

長軸 0.85 m、短軸 0.7 mの楕円形を呈する土坑である。深さは 0.3m である。調査区端に位置するため、全体を検出できていない。須恵器・土師器が出土しているが、細片のため図化していない。

SK261（図版 47、写真図版 45）

南北 0.8 m，東西 2.6 mの楕円形を呈する土坑である。土坑の底はなだらかな傾斜ではなく、中央部やや西寄りが盛り上がり、検出状況からは３つのブロックに分かれている。土師器皿（215）が出土している。

SK393（図版 48、写真図版 46）

長軸 0.72 m、短軸 0.35 mの楕円形を呈する土坑である。深さは 0.18 mで、底付近に直径 12cm の亜角礫が混入していた。土師器が出土しているが、小片のため図化していない。

SK738（図版 48、写真図版 46）

検出時に切り合い関係を取り違えたが、４区の SB13 の柱穴 SP1026 に南端を切られている。0.6 m×

1.1 m以上の楕円形で、深さ 0.3 mほどである。

図化した遺物には須恵器椀（218）がある。

SK742（図版 48、写真図版 46）

２-2 区の SB04 と 4 区の SB13 の間に位置する。0.9 m × 1.6 mの隅丸方形で、深さ 0.27 mの箱形の断面を呈する。墓壙の可能性もあるが、長軸方向はN 70° Wで、建物の方向と一致しない。

SD759 内 SD760・791（図版 48・49、写真図版 46）

SD759 は、4 区の SB12 の東側に位置し、柱穴が一部重複している。幅 0.6 ～ 2.3m、長さ 5.8 mの溝状で、深さ 0.2 m未満の浅い落ち込みである。SD759 の東肩に沿って、SK760・791 が並ぶ。

SK760 は幅 0.35 ～ 0.7m、長さ 1.55 m、深さ 0.4 mの溝状の土坑だが、坑底にピット状の落ち込みがあり、断面では柱穴を切り込んでいるのが観察できる。埋土上面から土師器皿と瓦器椀などが出土した。

SK791 は 0.6m × 0.7 mの楕円形で、深さ 0.25 mの土坑である。

図化した遺物には SK760 から出土した、土師小皿（219 ～ 223）、瓦器椀（224･225）、釘（M8）がある。

SK788（図版 49、写真図版 47）

４区で、SB07 の南側に位置する。直径 0.9 mの円形で、深さ 0.14 mの皿状の断面を呈する。

図化した遺物には須恵器椀の底部（228）がある。

SK793（図版 49、写真図版 47）

４区で、SB10 の北東隅から北へ 2 m外側に沿って、東西方向に延びる。幅 0.3 m、長さ 1.2 m、深さ 0.33 mの溝状の土坑を、幅 0.6 m、長さ 1.8 m、深さ 0.35 mの土坑が切っている。SB10 北辺の雨落ち溝とみられる。

図化した遺物には土師皿（229）がある。

SK794（図版 49、写真図版 47）

４区で、SB10 の北東隅から東へ 1.5 m外側に沿って、南北方向に延びる。幅 0.35 ～ 0.4 m、長さ 2.35 mの溝状の土坑である。SB10 東辺の雨落ち溝とみられる。

図化した遺物には土師小皿（230・231）がある。

SK799（図版 49、写真図版 47）

４区で、SB10･11 と SB07･08 の間に位置する。0.8 m × 0.95 mの楕円形で、深さ 0.46 mの土坑である。

図化した遺物には鉄鍋の体部（M9）がある。

SK813（図版 50、写真図版 47）

４区で、SB05 の西側に接する溝 SD822 に東半部を切られる。0.73 m × 0.6 m以上の楕円形で、深さ 0.13 mの土坑である。坑底に 30cm 大の礫が落ち込む。

図化した遺物には土師皿など（232 ～ 234）がある。

SK814（図版 50、写真図版 48）

４区で、SB05 北西隅の内側に位置する。直径 0.8 mの円形で、深さ 0.22 mの土坑である。

図化した遺物には土師小皿（233）、がある。

SK872（図版 50、写真図版 48）

４区で、SB05 の西側に接する溝 SD822 北端の延長上に位置しており、その一部であった可能性もある。0.45 m × 0.75 mの楕円形で、深さ 0.22 mの起伏のあるＶ字形断面を呈する。

図化した遺物には土師小皿（259）がある。

SK853（図版 50、写真図版 48）

４区で､SB05 東辺の外側に位置する。0.56 m × 0.72 mの楕円形で､深さ 0.18 mの皿状の断面を呈する。坑底付近から瓦器椀が数点出土したが、上向きと下向きが混在している。

図化した遺物には瓦器椀（256 ～ 258）がある。

SK859（図版 50、写真図版 48）

４区で、SB05 東辺の内側に位置する南北方向の溝状落ち込みで、北側延長上にある SD822 と一連であった可能性がある。0.38 m × 0.95 m、深さ 0.15 mで、瓦器椀、土師器羽釜などが出土した。

図化した遺物には瓦器椀（261）と土師器の羽釜（262）がある。

SK875（図版 50）

４区で、SB05 東辺の外側に位置する。直径 0.5 mの円形で、深さ 0.15 mのボウル状の断面を呈する。周辺には他にも SK853・874 など円形・楕円形の土坑が集中する。

図化できる遺物は出土していない。

SK878（図版 50、写真図版 48）

４区で、SB05 の西側に接する溝 SD822 に中央部を、SK813 に北西隅を切られる。SD822 の東側までを一体とすると、0.5 m × 0.25 mの楕円形で、深さ 0.17 mの土坑である。埋土から瓦器椀が出土した。

図化した遺物には瓦器椀（260）がある。

SK1558（図版 50）

５区で、SB20 東辺の内側に位置するが、柱穴との切り合いはない。0.4 m × 0.9 m、深さ 0.22 mの溝状の土坑である。

図化した遺物には土師小皿（266）、瓦器椀底部（267）がある。

SK1579（図版 50、写真図版 49）

５区で、SB20 北東隅の外側に位置する。直径 0.45 mの円形で、深さ 0.18 mのボウル状の断面を呈する。周辺には他にも円形・楕円形の土坑が十数基集中する。

図化した遺物には瓦器椀底部（268）がある。

SK763（図版 51、写真図版 49）

４区西端で、SB12 の北側に位置し、建物の北辺と平行する。幅 0.33 m以上、長さ 1.35 m、深さ 8cm の落ち込みで、北側は調査区外に続く。

図化した遺物には瓦器椀（226）、土師鍋（227）がある。

SX1614（図版 51、写真図版 49）

５区中央で、SB21 の東側に位置する。幅 0.57 m以上、長さ 2.15 m、深さ 0.14 mの落ち込みで、南側は水田の段差で失われている。

図化した遺物には土師皿（269）がある。

（８）柱穴

SP256（図版 51、写真図版 49）

南北 0.22 m、東西 0.3 mの楕円形を呈する土坑である。深さは 0.18 mで、単層である。瓦器と土師器が出土しているが、細片のため図化していない。

SP394（図版 51、写真図版 49）

南北 0.23 m、東西 0.33 mの楕円形を呈する土坑である。深さは 0.54 mで、単層である。瓦器と土師器が出土しているが、細片のため図化していない。

SP409（図版 51）

南北 0.58 m、東西 0.35 mの楕円形を呈する土坑である。深さは 0.1 mで、単層である。瓦器と土師器が出土しているが、細片のため図化していない。

SP862（図版 51、写真図版 49）

南北 0.35 m、東西 0.32 mの楕円形を呈する土坑である。深さは 0.3 mで、単層である。瓦器と土師器が出土しているが、細片のため図化していない。

SP1071（図版 51、写真図版 49）

南北 0.5 m、東西 0.47 mの楕円形を呈する土坑である。深さは 0.24 mで、単層である。瓦器と土師器が出土しているが、細片のため図化していない。

SP1571（図版 51、写真図版 49）

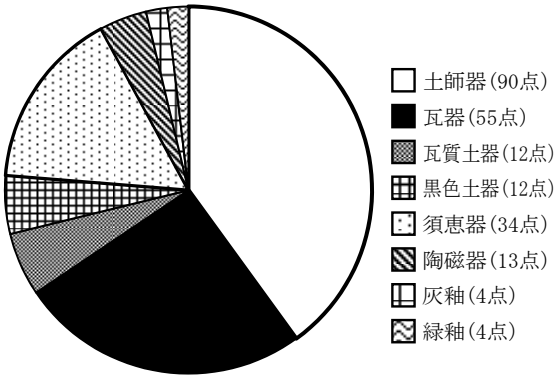
南北 0.37 m、東西 0.4 mの楕円形を呈する土坑である。深さは 0.34 mで、単層である。瓦器と土師器が出土しているが、細片のため図化していない。

３．遺物

（１）概要

中世の遺物には、出土量順に土師器、瓦器、須恵器、瓦質土器、黒色土器、陶磁器などがある。図化した資料は、合計 224 点である。

土師器は、皿･鍋･鉢･土錘などがあるが、土師器皿の出土量が多い。調整は口縁部を強くナデることにより面取りをしたようにする、いわゆるＪタイプが多い。



第 18 図　報告遺物の割合

瓦器には、椀、羽釜などがある。椀の出土量が圧倒的に多いが、摩滅により調整が観察できないものが多い。暗文や成形技法から和泉産が主で、少量の樟葉産が混じる。

須恵器には坏や椀、鉢などがある。京都府亀岡市の篠窯跡産と考えられる 10 世紀代のものも少量あることが特筆される。東播系須恵器のこね鉢も見られる。

輸入陶磁器は、太宰府分類で 13 世紀から 14 世紀に位置付けられる龍泉窯系の鎬蓮弁を持つ青磁が多く出土している。

（２）遺構出土遺物

SB03（図版 58、写真図版 57）

須恵器椀１点（122）が SP170 から出土している。122 は、口縁端部がナデによって外反するもので、内外面には火襷がみられる。

SB04（図版 58、写真図版 57）

瓦器椀１点（123）、土師器皿１点（124）が SP442 から出土している。瓦器は、口縁端部の内外面に沈線を持つ。内面は摩滅しているが、体部にユビオサエの痕跡が残る。土師器皿は全体をナデで仕上げる。底部から口縁にかけて外反する。

SB05（図版 58、写真図版 57）

土師器７点（125 ～ 131）、須恵器２点（132・133）、瓦器４点（134 ～ 137）が出土している。土師器はいずれも皿で、126 ～ 129 は強いナデで口縁を直線的に立ち上げる。須恵器は、坏Ｂと鉢である。131 は残存状態が悪く、かろうじて高台が巡ることが観察できる。133 は口縁部のみ残存する。口縁端部がやや肥大する。瓦器は、いずれも椀である。135 ～ 137 は口縁部に強いナデを施し、緩やかではあるが直立させようとしている。

SB06（図版 58、写真図版 57・66）

土師器１点、瓦器３点、青磁１点が出土している（188 ～ 142）。138 は皿で、口縁端部を丸くおさめる。139 は瓦器椀であるが、底部のみ残存している。142 は青磁碗で、鎬を持たない蓮弁文が施される。大宰府分類のⅡ－ｃ類であろう（大宰府市教委 2011）

SB07（図版 58、写真図版 57）

瓦器１点（143）が出土している。椀であり、内外面ともに摩滅している。口縁部下部を強いナデで立ち上げる。

SB09（図版 58、写真図版 57）

須恵器１点出土している。144 の口縁はゆるやかに外反し、やや尖り気味に端部をおさめる。

SB10（図版 58、写真図版 57・58）

土師器３点（145 ～ 147）、瓦器７点（149 ～ 154）、陶器１点（155）出土している。145 ～ 147 はいずれも皿である。いずれも口縁部にナデを施し、立ち上げる。

SB12（図版 59、写真図版 58）

須恵器１点が出土している（156）。鉢の口縁部から体部にかけて残存している。口縁端部は内傾気味に垂直に立ち上がる。東播系須恵器である。

SB13（図版 59、写真図版 58）

黒色土器椀１点（157）が出土している。口縁端部をやや尖り気味におさめる。

SB17（図版 59）

土師器２点（158・159）が出土している。159 は内黒土器の底部である。

SB18（図版 59）

土師器１点（160）が出土している。比較的口径の大きな坏である。

SB19（図版 59、写真図版 58・66）

土師器４点、青磁１点、瓦質土器２点（166・167）が出土している。161 ～ 164 は土師器皿である。161、163 は底部から口縁部が直線的に立ち上がる。165 は青磁碗である。鎬蓮弁が外面に施され、龍泉

窯系の製品で、Ⅱ－ｂ類にあたると思われる（太宰府市教委 2000）。

SB20（図版 59、写真図版 58・66）

土師器３点、瓦器１点、青磁１点が出土している。168 ～ 170 は皿である。168・169 は口縁部に強いナデを施し外反する。171 は椀である。体部に２段のユビオサエが見られる。口縁端部はナデで丸くおさめる。172 は青磁碗である。口縁部は緩やかに外傾する。龍泉窯系の製品で太宰府分類のⅠ－３類にあたる。

SB21（図版 59、写真図版 58）

瓦器椀（173）が１点出土している。口縁部をナデて直線的に立ち上げる。

SB23（図版 59、写真図版 58）

土師器１点､瓦器３点が出土している。174 は皿で､ユビオサエが内外面に残る。175 ～ 177 は椀である。摩滅しており、ミガキ・暗文は確認できない。176 は口縁部内面に沈線を持つ。

SB24（図版 59、写真図版 58）

土師器皿１点（178）、瓦質羽釜１点（179）が出土している。178 は口縁端部をナデて直線的に立ち上げる。

SB25（図版 59、写真図版 59）

土師器皿１点（180）、土師器鍋１点（181）が出土している。180 は高台の付く皿である。181 は口縁部のみで判断が難しいが、口縁下部外面にユビオサエがあることから、鍋であろうと判断した。

SD759（図版 59、写真図版 58）

瓦器小皿１点（182）が出土している。口縁部はなでによって外反し、端部は丸くおさめる。

SD769（図版 59）

土師器１点（183）が出土している。

SD822（図版 60、写真図版 59）

土師器２点（184・186）、須恵器１点が出土している。185 は椀で底部は糸切り、器壁は薄い。186 は羽釜である。

SD857（図版 60、写真図版 59）

土師器２点、瓦器１点が出土している。187 は口縁部を強くナデて直線的に立ち上げる。189 は甕である。頸部から口縁部が、くの字状になり、端部は尖り気味となる。口縁部下の内外面にはハケメを施す。体部は失われているが、長胴形を呈すると思われる。

谷状落ち（図版 60、写真図版 59・60）

土師器皿１点（190）、瓦器椀４点（191 ～ 195）、白磁１点（197）、青磁２点（198・199）、三足鍋の脚１点（196）、土師器羽釜１点（201）、瓦質羽釜２点（202・203）、土師器甕１点（204）、須恵器甕２点（206）が出土している。191、195 は口縁部をナデて外反させ直線的に立ち上げる。端部はやや尖り気味におさめる。195 は見込みに鋸歯状のミガキが残る。192、194 は緩やかに底部から口縁部が立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。194 は残りが悪いが鋸歯状の暗文が見られる。193 は底部から直線的に口縁部が立ち上がる。口縁は立ち上がりよりも内傾し、端部を丸くおさめる。高台は他の瓦器椀が潰れた三角形を呈するのに対し、逆台形に踏ん張った形状である。197 は白磁の皿である。平底で口縁部を直線的に立ち上げる。灰白色の釉がかかるが、口縁端部の内面が露胎し口禿げになっている。太宰府分類のⅨ－１ｃにあたり、出現年代は 13 世紀後半～ 14 世紀前半である。198、199 は高台の付く底部の

みである。高台はいずれも台形で、内刳は浅い。高台の下端からは釉が塗布されない。太宰府分類の龍泉窯青磁碗Ⅳ類に該当し、出現年代は14世紀初頭以降である。201～203は羽釜である。いずれも口縁部が内傾し、202では段を持つが、摩滅のため調整はわからない。鍔はいずれも上向きに突出し、202では端部が鋭くなる。204は土師器甕である。頸部から口縁部にかけて、くの字状にくびれる。外面体部には８条を単位としたタタキが横方向に施される。205は外面体部にはタタキが施され、花型のスタンプが設けられる。206にも同様のスタンプが見られることから、205、206は同一個体の可能性がある。

SX795（図版60）

土師器皿１点（207）が出土している。全体にナデが施され、口縁部が外傾する。

SX745（図版61、写真図版60）

瓦器椀１点（208）、土師器甕（209）、土師器羽釜１点（210）、瓦質羽釜１点（211）、羽口１点（212）が出土している。208は口縁部にナデが施され、やや外反する。体部外面にはユビオサエの痕跡が残る。底部内面には輪状の暗文が残る。209は外面を縦方向のハケメで、内面を横方向のハケメで調整する。口縁部は外反する。210は摩滅がひどく、調整は確認できない。口縁部が強く内傾する。211は全体にナデが施される。212は外面に鉄滓が付着している。穴部分は全体に黒く変色しており、一部にオリーブ色の付着物が残る。

SX1592（図版61、写真図版60）

須恵器鉢１点（213）が出土している。口縁部の外側端面が直線的に立ち上がる。

SK113（図版61、写真図版60）

瓦器椀１点（214）が出土している。高台が輪高台にならず平高台になる。底部内面に螺旋状の暗文がある。

SK261（図版61、写真図版60）

土師器皿１点（215）が出土している。

SK396（図版61、写真図版61）

瓦器椀１点（216）が出土している。平高台で底部から緩やかに内湾しながら口縁部が立ち上がる。

SK472（図版61、写真図版60）

天目碗１点(217)が出土している。口縁部､底部は残っておらず､直線的に立ち上がる体部のみである。外面が赤褐色を呈する鉄釉が底部から約１cm付近まで施釉される。内面は黒色釉である。

SK738・908（図版61、写真図版61）

須恵器椀が１点（218）出土している。底部を回転ヘラ削りで切り離した後、やや外傾した台形の高台を貼り付ける。体部から口縁部は直線的に立ち上がり、端部はやや尖り気味に丸くおさめる。内面には、ナデが段状に顕著に残る。外面には火襷がみられる。形態や調整から三田相野窯産と考えられる。

SK760（図版61、写真図版61）

土師器５点（219～223）、瓦器２点（224・225）が出土している。219～223は、いずれも底部をユビオサエした後、ナデで仕上げる。220は口縁部を強くなでることで、底部と口縁部に段を儲けている。224は体部をユビオサエした後、ナデで仕上げる。口縁端部はやや肥厚させ、丸く納める。底部見込みには輪状の暗文が残る。225は摩滅が激しく、調整の詳細は不明である。

SK763（図版 61、写真図版 60）

瓦器椀１点（226）、土師器鍋１点（227）が出土している。226 は体部をユビオサエした後、ナデで仕上げる。227 は羽釜の口縁部である。外面は摩滅が激しく調整は不明である。内面には口縁部以下に、６本を一単位とするハケメが残る。口縁部はナデてほぼ垂直に立ち上げ､端部は外傾した形でおさめる。

SK788（図版 61、写真図版 60）

228 は須恵器椀の底部と体部の一部が残存する。218 と同様の成形を行う。

SK793（図版 61）

土師器皿１点（229）が出土している。229 は全体をナデでしあげる。底部から口縁部は大きく屈曲し、口縁部はヨコナデで直線的に外傾しながら立ち上げる。

SK794（図版 61、写真図版 61）

土師器皿２点（230・231）が出土している。230 は、ユビオサエした後ナデで仕上げる。口縁部は強くヨコナデを施し、やや直線的に立ち上げ端部を尖り気味におさめる。

SK813（図版 61）

土師器皿１点（232）が出土している。

SK814（図版 61）

土師器皿３点（233 ～ 235）が出土している。234 は全体をナデで仕上げ、口縁部にヨコナデを施し、口縁部をやや外反気味に立ち上げる。233、235 はユビオサエした後ナデで仕上げる。235 では底部から外傾しながら直線的に立ち上がる。

SX1619（図版 62、写真図版 61）

土師器皿１点（236）が出土している。236 はナデで全体を仕上げる。口縁部はヨコナデによって外反気味に立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。

SX1633（図版 62、写真図版 61）

青磁碗１点（237）が出土している。ほぼ完形である。体部外面には鎬蓮弁が施される。全体的に施釉されるが、高台の底部から碗底部にかけては露胎している。体部上半までヘラ削りで仕上げ、口縁部はナデで仕上げる。内面見込みには２ヶ所のトチン跡がある。

SK60（図版 62、写真図版 62）

土師器皿１点（238）が出土している。ナデで全体を仕上げ、口縁部はヨコナデによってゆるやかに外反気味に立ち上げる。口縁端部は丸くおさめるが、全体的に波打った形状をしている。なお口縁内部の表面にはススが付着している部分がある。

SX1501（図版 62、写真図版 62・63）

土師器３点（242･244･249）、瓦器５点（243･245 ～ 248）、羽釜３点（239 ～ 241）、須恵器１点（250）が出土している。244 は全体をナデで仕上げた後、口縁部に強いヨコナデを施し、端部を肥厚させる。端部は丸く納める。底部から体部下方にかけては、墨書らしき文様が施される。246 は、全体をナデで仕上げる。体部はゆるやかにたちあがり、口縁部付近でやや肥厚する。内面は摩滅が激しいが、口縁部付近から見込みにかけて暗文が施される。247 はユビオサエの後、口縁部～体部をナデを施し口縁部をやや外反気味に立ち上げる。内面は口縁部から見込みまで暗文が施される。239 は羽釜の体部上半の一部が残る。突帯は口縁下部からゆるやかに張り出し、下段ではほぼ水平に体部へ取り付く。突帯端部はナデにより方形に仕上げられる。外面にはタテハケが部分的に見られる。240 と 241 は鍋の脚である。

250 は鉢の底部である。底部は回転ヘラ削りで切り離した後、ナデで仕上げられる。

SX1537（図版 62）

土師器皿１点（251）、瓦器椀２点（252・253）が出土している。251 は全体をナデで仕上げる。器壁は全体に厚い。底部からヨコナデで口縁部を外傾して立ち上げる。253 は口縁部から体部が残存する。全体をナデで仕上げ、器壁は薄い。口縁部をヨコナデし、端部を外反させる。

SX1538（図版 62、写真図版 63）

瓦器椀１点（254）が出土している。ユビオサエした後ナデで仕上げる。口縁部はヨコナデを施し、端部を緩やかに外反させる。端部はやや肥厚し、外方へ向いた先端部は丸くおさめる。

SK828（図版 63）

土師器鍋１点（255）が出土している。口縁部のみ残存する。内面は斜め方向のハケメ、外面はナデが施される。内外面ともに、付着物は見られない。

SK853（図版 63、写真図版 62）

瓦器椀が２点（256・257）、黒色土器１点（258）が出土している。256 はユビオサエの後ナデで仕上げる。口縁部は強いヨコナデを施し、端部を肥厚させる。257 は体部をナデで仕上げた後、口縁部にヨコナデを施し外反させる。高台は貼り付けで、断面は潰れた台形を呈するが、全周はしない。内面には口縁部から底部にかけて暗文が施され、見込みでは平行線状となる。258 は現状で２段になるユビオサエを施した後ナデで仕上げる。口縁部はヨコナデを施す。高台の内側には２本の平行沈線とそれに直交する１本の沈線で×字のヘラ記号を施す。内面は口縁部から見込みにかけて暗文が施される。

SK872（図版 63、写真図版 62）

土師器皿１点（259）が出土している。底部から体部にかけてユビオサエの後ナデで仕上げる。口縁部はヨコナデを施し、外傾させて立ち上げる。

SK878（図版 63、写真図版 62）

瓦器椀１点（260）が出土している。底部から体部にかけてはユビオサエの後ナデで仕上げる。口縁部はヨコナデを施し、体部の立ち上がりよりも傾きを減じて、直線的に立ち上げる。内面は摩滅が著しいが、暗文が僅かに確認できる。

SK859（図版 63、写真図版 62・63）

瓦器椀１点（261）、羽釜１点（262）が出土している。261 は全体にユビオサエの後ナデで仕上げ、口縁部まで直線的に立ち上げる。口縁端部のみヨコナデを施す。内面は口縁部から見込みまで暗文を施す。見込みの暗文は平行線状である。262 は羽釜である。緩やかに湾曲しながら体部が立ち上がり、突帯が水平に大きく張り出す。外面はナデが施され、部分的にススが付着する。

SK1106（図版 63、写真図版 63）

瓦器椀１点（263）、須恵器鉢１点（265）、土師器甕１点（264）が出土している。263 は体部をユビオサエの後ナデで仕上げる。口縁部はヨコナデを施し、体部からの立ち上がりの傾斜を減じながら立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。264 土師器甕である。体部から口縁部はくの字状に屈曲する。内外面ともに、ユビオサエの後、９本を１単位とするハケメが施される。265 は須恵器鉢の口縁部である。ナデで仕上げられ、口縁端部はやや内傾しながら垂直に立ち上がる。東播系須恵器である。

SK1558（図版 63）

土師器１点（266）、瓦器１点（267）が出土している。266 はてづくね成形の皿である。267 は底部の

み残存する。摩滅が激しいため調整はわからない。僅かに三角形の高台が付くことから、椀とした。

SK1579（図版 63）

瓦器椀 1 点（268）が出土している。底部のみ残存する。ユビオサエの痕跡が僅かに残る。内面見込みには暗文があり、平行線状か鋸歯状を呈する。

SK1614（図版 63）

土師器皿 1 点（269）が出土している。粘土継ぎ目で、底部を欠損している。ナデで仕上げ、口縁部はヨコナデによって外反する。

SD01（図版 63、写真図版 63）

瓦器椀 1 点（270）が出土している。てづくねで成形し、ナデで仕上げる。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部外面ではヨコナデを施し、口縁部を直線的に立ち上げる。

SD1540（図版 63）

土師器皿 1 点(271)が出土している。底部を回転糸切りで切り離し、体部から口縁部をなでで仕上げる。口縁部はやや外反する。

SP31（図版 63）

瓦器椀 1 点（272）が出土している。底部には成形台と思われる痕跡が残る。ユビオサエとナデで仕上げる。

SP115（図版 63）

土師器皿 1 点（273）が出土している。全体をナデで仕上げる。口縁部は丸くおさめる。

SP256（図版 64、写真図版 64）

黒色土器椀 1 点（274）が出土している。内面が黒色で、外面が灰白色を呈する内黒の椀である。ナデで全体をしあげ、口縁部はヨコナデで端部が丸くおさめる。内面は口縁部からヘラミガキが密に施される。内黒であることと形態から、畿内系Ⅰ類と思われる。

SP326（図版 64）

土師器皿 1 点（275）が出土している。全体をなででしあげる。口縁部はヨコナデにより、直立に近い角度で立ち上げる。

SP394（図版 64）

黒色土器椀 1 点（276）が出土している。口縁部をヨコナデによって、体部の立ち上がりよりも角度を減じて立ち上げる。口縁端部は外反する。口縁部内面には沈線がめぐる。

SP395（図版 64）

瓦器椀 1 点（277）が出土している。高台が外側へ踏ん張った形状をなす。内面にはヘラミガキが施される。

SP409（図版 64、写真図版 63・64）

須恵器椀 1 点（278、）黒色土器 1 点（279）が出土している。278 は、底部を回転ヘラ削りで切り離し、体部から口縁部をナデで仕上げる。底部と体部の境で粘土の継ぎ目が確認でき、それに伴い見込みは一段下がる。体部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。器形から相野窯跡産と考えられる。279 は断面が逆三角形を呈する高台を底部境いっぱいに巡らせる。体部はナデで仕上げ、内面には密なヘラミガキが施される。外面はにぶい黄橙色、内面は黒色を呈する内黒である。畿内系Ⅲ類か。

SP410（図版 64、写真図版 64）

瓦器椀 1 点（280）が出土している。ナデで仕上げ体部から口縁部を緩やかに立ち上げる。口縁部はヨコナデでわずかに外反させる。口縁部内面には沈線が 1 条巡る。内面は沈線より下に密なヘラミガキが施される。

SP409・410 周辺（図版 64、写真図版 64）

瓦器椀 1 点（281）が出土している。全体が摩滅しており、調整は判然としない。口縁部は強いヨコナデが施され、口縁部外面には沈線状になる。口縁端部は内傾し、丸くおさめる。内面には沈線が 1 条巡る。

SP743（図版 64、写真図版 63）

瓦器皿 1 点（282）が出土している。全体をナデで仕上げる。底部からは緩やかに立ち上がるが、口縁部下で強いヨコナデを施す。

SP802（図版 64）

瓦器椀 1 点（283）が出土している。底部には断面が潰れた逆三角形を呈する高台をつける。全体をナデで仕上げる。見込みには、鋸歯状の暗文がある。

SP811（図版 64）

土師器羽釜 1 点（284）が出土している。

SP830（図版 64、写真図版 64）

土師器皿 1 点（285）、瓦器椀 1 点（286）土錘 2 点（287・288）が出土している。285 はてづくねの小皿である。286 は全体をナデで仕上げる。口縁部はヨコナデを施し、やや外反させる。内面は摩滅しており、調整はわからない。287・288 は土錘である。287 は中央が最大径となり、両端がすぼまる。重さは 4.4 g。288 は先端部しか残存しないが、287 と同様の形態であったと思われる。

SP848（図版 64）

土師器皿 1 点（289）が出土している。全体をナデで仕上げる。

SP850（図版 64）

土師器 1 点（290）が出土している。底部は摩滅しており、切り離し手法はわからない。体部の内外面はナデで仕上げる。見込みは、一段下がる。形態から、回転台土師器と考えられる。

SP862（図版 64）

瓦器椀 1 点（291）が出土している。底部に断面逆三角形の高台を貼り付ける。全体をナデで仕上げ、体部から口縁部まで内湾する。口縁端部はヨコナデを施し丸くおさめる。内面には暗文がある。

SP923（図版 64）

土師器 1 点（292）が出土している。底部から体部にかけてユビオサエの後ナデで仕上げる。口縁部はヨコナデを施し、外傾させながら直線的に立ち上げる。

SP926（図版 64）

瓦器椀 1 点（293）が出土している。口縁端部近くまでユビオサエの後ナデで仕上げる。高台は貼り付けで、断面形状が底部内側に頂点の寄った逆三角形を呈する。口縁端部をヨコナデによって立ち上げる。内面には体部にヘラミガキを施し、見込みには鋸歯状の暗文を残す。

SP963（図版 64、写真図版 64）

須恵器壺 1 点（294）が出土している。胴部のみ残存している。端部が垂下する突帯を持つ。この突

帯の上部の一部が外傾していることから、さらにもう１条の突帯がめぐっていたものと考えられる。相野窯産か。

SP969（図版 64）

瓦器椀１点（295）が出土している。全体をナデで仕上げる。体部と口縁部境にヨコナデを施し、外面を内湾させる。底部内面にヘラミガキが部分的に残る。

SP999（図版 64、写真図版 63）

須恵器甕１点（296）が出土している。体部を８条１単位の平行タタキで成形する。頸部は斜め方向のタタキの後、ヨコナデを施す。口縁部はナデて外反させ、端部は上方にややつまみ上げる。

SP1008（図版 64）

瓦器椀１点が（297）が出土している。全体をナデで仕上げる。口縁部はヨコナデを施す。端部は丸くおさめる。体部はヘラミガキが残る。

SP1046（図版 64）

土師器甕１点（298）が出土している。体部はタタキで成形する。頸部はくの字状に折れ曲がり、直線的に口縁部を立ち上げる。

SP1071（図版 64）

須恵器坏Ｂ１点（299）が出土している。底部は回転ヘラキリで切り離した後、ナデを施す。高台は踏ん張った台形の断面を呈し、体部はナデで仕上げる。

SP1738・1770（図版 65）

土師器皿１点（300）が出土している。底部から体部はユビオサエの後、ナデて仕上げる。口縁部はヨコナデを施し、口縁部を立ち上げる。

SP1571（図版 65）

瓦器椀１点(301)が出土している。体部はユビオサエの後ナデで仕上げる。口縁部はヨコナデを施し、外面がやや内へへこむ。口縁端部は丸くおさめる。内面は口縁部からヘラミガキが残る。

SP1615（図版 65）

土師器鍋１点（302）が出土している。頸部以下の体部を４～５条を１単位とした平行タタキで成形する。頸部はヨコナデにより、くの字状を呈する。口縁部は外方へ端部が張り出し、先端はやや垂下する。内部は摩滅しており、調整は不明である。播但型鍋か。

（２）包含層出土土器

B1（図版 65）

土師器皿１点（303）が出土している。底部から体部をユビオサエとナデで仕上げ、口縁部はヨコナデでつまみ出す。

C1（図版 65、写真図版 66）

青磁碗１点（304）が出土している。高台は底部成形と一体の削り出し高台で、内面と高台外側端部から外面にかけて施釉している。見込みには亀甲紋が省略された文様が刻まれる。胎土は褐灰色で細砂を多く含む。

D~E13（図版 65、写真図版 66）

緑釉陶器２点（305 ～ 306）が出土している。305 は皿で一部残存する底部はヘラケズリ、体部から

口縁部はナデで仕上げる。内外とも灰色がかった緑釉が薄く残る。306 は小碗である。体部下半はケズリ、体部上半から口縁部はナデで仕上げ、口縁端部はやや外反する。オリーブ黒色の緑釉が全体に残る。

D~E15（図版 65、写真図版 64）

瓦器椀１点（307）が出土している。底部はナデで仕上げ、体部はユビオサエの後ナデで仕上げる。口縁部はヨコナデを施し、やや外反させる。端部は丸くおさめる。体部内面に３～４条のヘラミガキ圏線を施し、見込みには平行線状の暗文を施す。

D~E16（図版 65、写真図版 65・66）

須恵器椀２点（308 ～ 309）、緑釉陶器碗１点（310）、灰釉陶器皿１点（311）、青磁碗１点（312）、須恵器鍋１点（313）、瓦質羽釜１点（314）が出土している。308 は底部を回転糸切りで切り離し、体部はナデで仕上げる。309 は外面に火襷が残る。310 は、底部を回転ヘラキリで切り離す。底部以外に灰～灰オリーブ色の緑釉が残る。312 は外面に蓮弁が残り、龍泉窯産と考えられる。太宰府分類のⅡ－ａ類にあたる（大宰府市教委 2000）。313 は体部外面を平行タタキで整形する。頸部から口縁部はナデで成形し、頸部はくの字状を呈する。口縁端部は外側へ張り出し、先端部が垂下する。口縁部内面から頸部にかけてはナデで仕上げ、一段さがった体部は板ナデで整形する。314 は三足鍋である。体部内外面は摩滅している。突帯は断面が台形を呈し、上方向きに張り出す。口縁部内面にはユビオサエが列状に残る。

C~E12（図版 65、写真図版 65・66）

須恵器椀１点（315）、灰釉陶器碗２点（316・317）、緑釉陶器碗１点（318）が出土している。315 は高台内側が欠損している。体部半ばまでヘラケズリで仕上げ、口縁部内外面と体部内面はナデで仕上げる。口縁端部は僅かに外反する。316 は底部から体部下半を回転ヘラケズリした後、高台を貼り付ける。高台は断面が長方形を呈し、内側へ端部が内側へ入り込む。ヘラケズリの上部より施釉される。317 は底部を回転ヘラキリで切り離した後、高台をつける。K90 窯式の２期に相当すると考えられる。高台は 316 と比べると、やや潰れており、先端のやや尖った逆台形を呈する。高台外側付け根部分から内外面ともに施釉される。見込みには重ね焼きによる剥離があり、一部露胎が見られる。O53 窯式の１期に相当すると考えられる。318 は、内外面共にミガキが表面に残る。灰白色の緑釉が薄く残る。

E18（図版 65、写真図版 65）

須恵器６点（319 ～ 324）が出土している。319・320・323 は椀である。319・320 は底部を回転糸切りで切り離す。323 は全体をナデで仕上げ、口縁部が端反りする。321 は蓋である。口縁端部が外方へ延びる。322、324 は坏Ｂである。底部を回転ヘラキリで切り離した後、高台を貼り付ける。

E20（図版 65・66、写真図版 64・66）

土師器１点（325）、製塩土器１点（326）、備前焼すり鉢１点（327）、無釉陶器鍋１点（328）、須恵器坏Ｂ１点（329）、瓦器椀１点（330）、緑釉陶器碗１点（331）が出土している。325 はてづくねの小皿で、体部外面までユビオサエとナデを施し、口縁部から内面全体をナデで仕上げる。口縁部はやや肥厚する。内面の底部と体部の境目はやや凹む。326 は外面をナデで仕上げる。内面には布目痕が残る。327 は、内面に７条を１単位とする卸し目を斜めに施す。内外面は灰赤～暗赤灰色を呈する。328 は体部外面に平行タタキを施す。頸部は強めのヨコナデによりやや開いたくの字状を呈する。口縁部はヨコナデによって端部が外側へ垂下しながら貼りだす。内面はナデが施される。329 は底部を回転ヘラキリで切り離した後、高台を貼り付ける。330 は、底部に断面が逆三角形を呈する高台を貼り付ける。体部には疎らで

はあるが、縦横方向に交差するミガキが残る。口縁部はヨコナデによって屈曲しており、体部との境が段状に内湾する。口縁部は直線的に立ち上がる。体部内面にはミガキはなく、見込みに鋸歯状の暗文が残る。331 は体部が残る。体部下半はヘラケズリ、上半はナデが施される。内外面ともに、灰白色の緑釉が残る。

E21（図版 66、写真図版 65）

須恵器こね鉢３点（332 ～ 334）が出土している。いずれも口縁部を上方に持ち上げる。口縁部外側端部は外方に向かって張り出す。334 は片口の部分が残存している。東播系須恵器と考えられる。

D22（図版 66、写真図版 64）

ふいごの羽口１点（335）が出土している。

E22（図版 66、写真図版 65）

須恵器こね鉢１点（336）、瓦質土器火鉢１点（337）が出土している。336 は口縁端部を上方につまみ上げる。東播系須恵器か。337 は口縁部下段に突帯を２条貼り付ける。突帯間には竹管と思われるスタンプ文が残る。

C23（図版 66）

瓦質土器の羽釜１点（338）、土師器鍋の脚１点（339）が出土している。全体をナデで仕上げる。顎部は断面が台形を呈し、やや下方へ下がる。

D~E25（図版 67、写真図版 65）

須恵器坏Ｈ１点（340）、瓦質土器の鉢１点（341）が出土している。340 は、底部は回転ヘラキリで切り離し、体部全体がヘラケズリで仕上げられる。口縁部はナデで受け部を成形する。341 は、体部をユビオサエとナデで仕上げる。口縁部は強めのナデで口縁部の立ち上がりを外方へ傾ける。口縁端部外面には沈線が１条巡る。内面は摩滅しており、調整は不明である。口縁の一部に歪みがあり、本来は片口がついていたと考えられる。

D~E14（図版 67）

土師器３点（342 ～ 344）が出土している。342 は坏である。体部をユビオサエの後ナデで仕上げる。口縁部はナデを施し、端部先端をやや尖り気味に納める。内面はナデで仕上げる。231 は壺である。体部には縦方向のハケメが施される。頸部は屈曲の浅いくの字状を呈する。頸部から口縁部はナデで仕上げ、口縁部がやや外傾する。口縁部内面には横方向のハケメがあり、頸部以下はナデで仕上げる。344 は把手付き鍋である。体部はユビオサエの後ナデで仕上げる。把手は貼り付けで先端部が上方を向く。

C~E12（図版 67）

土師器甕１点（345）が出土している。口縁部のみ残存する。ナデによって口縁部全体を外側へ屈曲させる。端部は上方へつまみ上げられる。内面には横方向のハケメが残る。

D~E24・25（図版 67、写真図版 64）

須恵器の甕１点（346）が出土している。底部はナデで仕上げ、体部は８本を１単位とする縦方向のタタキの後、ナデで仕上げる。頸部から口縁部にかけてはナデで成形する。内部には同心円状の当て具痕が残る。

第５節　石器・金属器

１．石器（図版 68 ～ 70、写真図版 67・68）

（１）概要

出土している石器は、石鏃６点・石匙１点・石斧２点・砥石１点・台石２点である。

石鏃はいずれもサヌカイト製で、無茎・有茎ともに出土している。石斧は蛤刃型と乳棒状の２種類である。砥石には擦痕と線条痕が明瞭に残る。台石はいずれも扁平で、表面と考えられる面は摩滅している。

（２）遺物の詳細

S1 ～ S6 はサヌカイト製の石鏃である。S1 ～ S4 は凹基式、S5 は平基式、S6 は有茎である。S1 ～ S6 までいずれも先端部が欠損しているが、S5 のみ新欠がある。S1、S4 ～ 6 は二等辺三角形状に直線的に側辺部がのびる。S2 ～ S3 は基部よりの側辺部に抉り状の凹みが見られる。

S7 はサヌカイト製の石匙である。素材の切断面が三辺に残っており、もともと三角形であった薄片に対して敲打を施し、抉りを設ける。刃部も刃としての調整は少なく、部分的に当初の切断面が残る。

S8 は薄片である。断面は不整形な台形を呈する。

S9 は蛤刃型磨製石斧である。肉眼による石材同定で透閃石岩と判断される。断面は長方形を呈し、全面に擦痕が確認できる。刃部両端には、敲打痕と考えられる欠損が見られるが、剥離面が部分的に丸くなっており、敲石として使用した可能性もある。一部に被熱が見られる。

S10 は蛤刃型磨製石斧である。肉眼による石材同定では変閃緑斑岩と判断される。基部が欠損している。表面は擦痕が見られ、裏面は風化による摩滅で砂粒が目立つ。刃部両端及び刃先には使用痕が確認できる。一部に被熱が見られる。

S11 は乳棒状磨製石斧の基部である。肉眼による石材同定では緑色岩（変斑糲岩）とされる。断面は円形で、先端部に敲打痕が残る。

S12 は砥石である。肉眼による石材同定では頁岩と判断される。全面が砥面となり、表面を除く３面に線条痕が確認できる。右側面では、縦方向に深い線条痕が１条（6.7cm）確認できる。裏面では中央部を除く部分に約１～２cm の長さで横方向に線条痕が確認できる。左側面では、縦方向に深い線条痕が２条、斜め方向にも数条の線条痕が確認できる。

S13・S14 は台石である。S14 は肉眼による石材同定では、閃緑石と判断される。また、S14 は表面に風化が見られ、断面は緩やかな傾斜を持つ台形を呈しており、表面が摩滅している。

２．金属器（図版 71・72、写真図版 69・70）

（１）概要

金属器は、青銅鏡・鉄鏃・釘・鉄滓・刀・鍋・環など様々なものが出土している。青銅鏡に関しては、掘立柱建物跡を構成する柱穴の上面から出土している。当初は古銭などを想定しており、詳細な出土状況図は作成できていない。調査時の所見や出土した遺構の状況からは、掘立柱建物跡の廃絶時に流れ込んだものと考えられる。

刀に関しては、いずれも刀身の幅が小さいことから短刀と考えられる。M7 には、表面に鞘と思われる木質が残っている。

鍋はいずれも胴部と考えられる一方向に湾曲した薄い鉄片であり、厳密には鍋と断定できないが、本報告では鍋とした。

（２）遺物の詳細

M1 は重圏文鏡である。直径 4.0cm 厚さ 0.2 ｃｍのものである。中心の鈕のまわりを二重の圏線がめぐる。鈕穴は半円形を呈する。類例として、尼崎市下道部遺跡、大阪府豊中市利倉南遺跡に出土したものがある（下垣 2011）。いずれの遺跡も、包含層からの出土となっており、詳細な出土状況はわからない。M1 も、当初は中世の柱穴と思われた SK796 の埋土中より出土されている。

M2 は、刀子である。刀身の先端部のみが残っている。切先も部分的に欠損している可能性があり、ふくらから切先へはゆるやかに湾曲し、峰が直線にならない。

M3 は楔である。平面形は垂直方向に引き伸ばされた台形を呈する。断面は方形を呈し、厚みはいずれの箇所でも同じで約 1.15cm である。中央部分の表面には木質が遺存しており、楔の穿たれる方向（図版中の縦方向）とは直交する繊維が確認できる。

M4 は雁股鏃である。片方の先端部（図中左）と茎部分を欠損している。鏃身部と茎の間には傘状の段が設けられる。鏃身部両先端の間の凹みは浅く、また左右非対称である。断面形状は、鏃身部が長方形で、茎部が方形を呈する。

M5 は鉄滓である。

M6 は刀子である。刀身の大半が欠損しており、茎とそこから延びる刀身の一部が残存している。茎には穿孔はない。

M7 は刀（短刀）である。茎先端部分が欠損しているが、切先からほぼ全体が残っている。ふくらはゆるやかに切先へ向かい、峰と茎の間には段が設けられる。茎には目釘穴と考えられる穿孔が１ヶ所存在する。刀身の表面には木質が依存しており、刀身に平行する木目が確認できることから、刀身を格納していた鞘が遺存したものと判断できる。

M8 は釘である。

M9 は鉄鍋の破片と考えられる鉄片である。

M10 は農具である。

M11 は鉄鏃である。先端部と茎部分が欠損しているが、平面形が菱型を呈する。鏃身部の断面は平滑で約 2.6cm である。

M12 は鉄鏃である。茎部分が欠損している。平面形は不整形な楕円形を呈する。鏃身部の横断面は楕円形をしており、鏃の中央部分が厚い。茎部は方形の断面形状である。

M13 ～ 15 は釘である。断面は方形を呈する。

M16 は椀形鉄滓である。

M17 は釘である。

M18 は輪状の鉄製品である。

M19 は鉄鍋の破片と考えられる鉄片である。垂直方向はほぼ直線的に立ち上がるが、水平方向に緩やかに湾曲する。

M20 は刀（短刀）である。先端部が欠損しているため、全長はわからない。茎から投信の一部が残っている。刃先と茎部分は緩やかに傾斜する段をもつ。峰から茎にかけてはほぼ直角の段をもつ。茎には

目釘穴と考えられる穿孔が１ヶ所存在する。M7 とは異なり、表面には木質は遺存していなかった。

参考文献

岸本一宏　1989「鳥形土製品」『兵庫県文化財調査報告第64冊寺中遺跡』兵庫県教育委員会
中世土器研究会編1995『概説中世土器』真陽社
高橋一夫　1997「手焙形土器の研究⑶－近畿編－」『埼玉考古』第33号 埼玉考古学会
大宰府市教育員会2000『大宰府条坊跡ⅩⅣ－陶磁器分類編－』
下垣仁志　2011『立命館大学考古学資料第４冊　倭製鏡一覧』立命館大学考古学論集刊行会

第４章　自然科学分析

第１節　西畦野下ノ段・井戸遺跡の地形環境

青 木 哲 哉（立命館大学非常勤講師）

１．はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査区では、微地形とそれを構成する堆積物が直接観察され、堆積物については詳細な区分が行える。このため、堆積物ごとの細かいオーダーで地形環境を復原し、その変化を辿ることができる。しかも、堆積物には編年された考古遺物がしばしば含まれる。復原された地形環境の時期はそれを通して明確にすることが可能となる。また調査区では、人間活動の痕跡である遺構が検出されるため、過去の人間生活が知られる。そこでは、地形環境と人間生活の係わりをも分析できるのである。

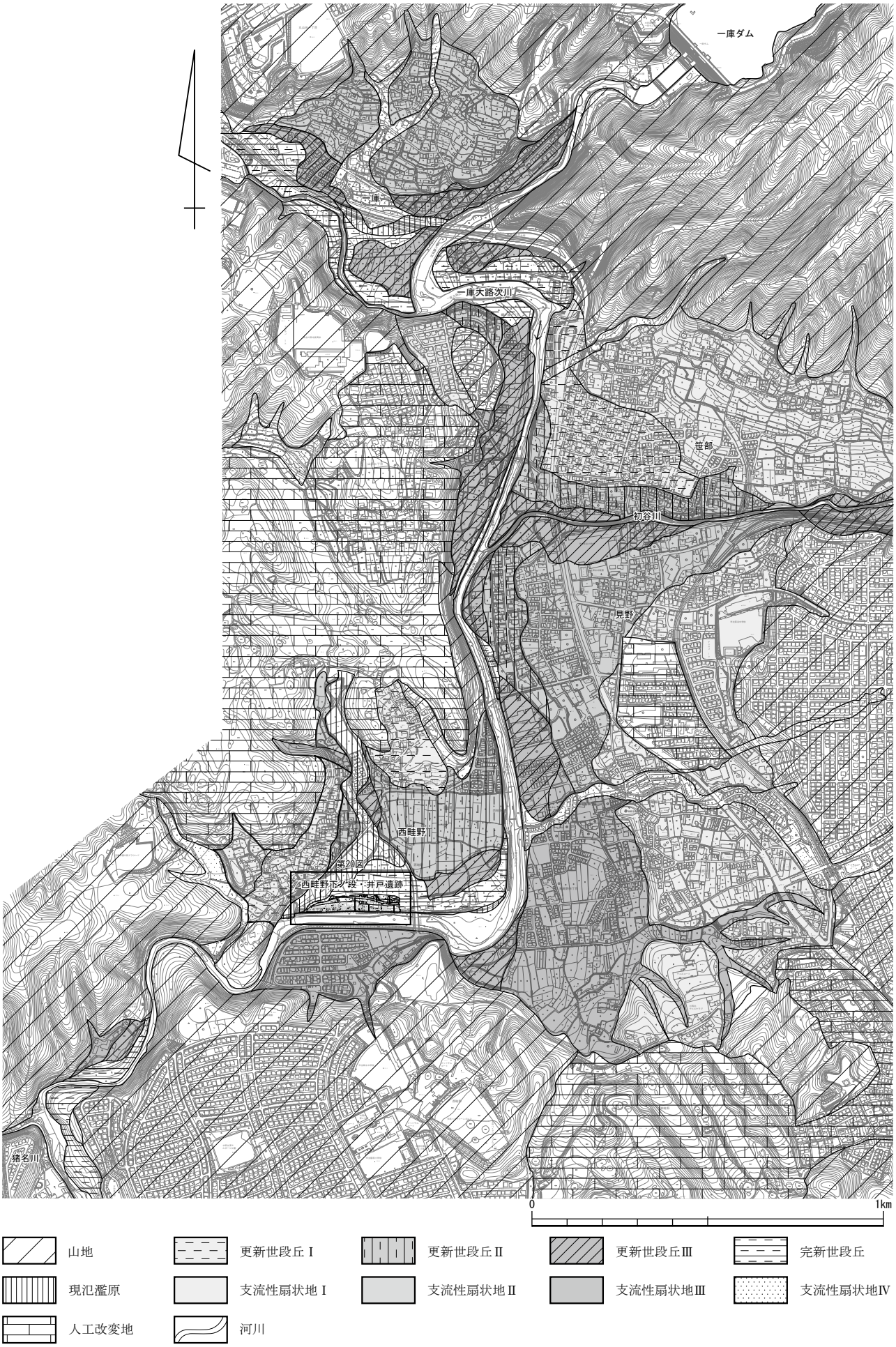
本稿では、西畦野下ノ段（にしうねのしものだん）・井戸遺跡における地形環境を明らかにし、それと人間活動との関係について考察したい。調査では、本遺跡の調査区（1 ～ 5 区）付近における地形の分類と堆積物の把握を試みた。地形分類では、まず 10,000 分の 1 空中写真を判読し、調査区周辺の地形を区分した。ついで、5,000 分の 1 空中写真の判読と現地踏査によって調査区付近における微地形の分類を行った。堆積物に関しては、主に調査区での地質断面を詳細に観察した。堆積物の観察は、遺構検出面より上位だけでなく、3 区の東部と中央部、4 区の東端と西部、ならびに 5 区の東部と西部で掘削したトレンチ断面によって遺構検出面以深についても行った。こうして得られた地形と堆積物の調査結果に、遺構の分布や時期などの発掘調査成果を加えて、調査区付近の地形環境、及びそれと人間活動との係わりを考察した。

２．調査区付近の地形分布

（1）調査区周辺の地形について

本遺跡の調査区は猪名川中流部の支流である一庫大路次川（ひとくらおおろじ）沿いの平野に位置する。平野の周囲には標高 130 ～ 240m の山地がみられ、そこは近年ゴルフ場や住宅地などの開発に伴って人工改変が著しく進んでいる。平野は、こうした山地に挟まれた盆地内に発達し、幅が 1km 以下と狭長である。平野には、更新世段丘、完新世段丘、現氾濫原、及び支流性扇状地が認められ、更新世段丘は 3 面、また支流性扇状地は 4 面に細分される（第 19 図）。本稿では、これらを高位のものから更新世段丘Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、ならびに支流性扇状地Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳと呼ぶ。平野にみられる各地形の特徴は次のとおりである。

〔更新世段丘〕　これは、一庫大路次川やその支流である初谷川などに沿って分布し、段丘面は下流へ緩やかに傾斜する。更新世段丘Ⅰは笹部と西畦野付近にみられ、段丘崖は 5m 前後の比高をもつ。更



第19図　調査区周辺の地形分類図

新世段丘Ⅱは更新世段丘Ⅲより１～2m 高く、見野や西畦野付近に分布する。更新世段丘Ⅲは、最もよく発達し、一庫大路次川や初谷川沿いに断続的に認められる。段丘崖は比高１～1.5m である。

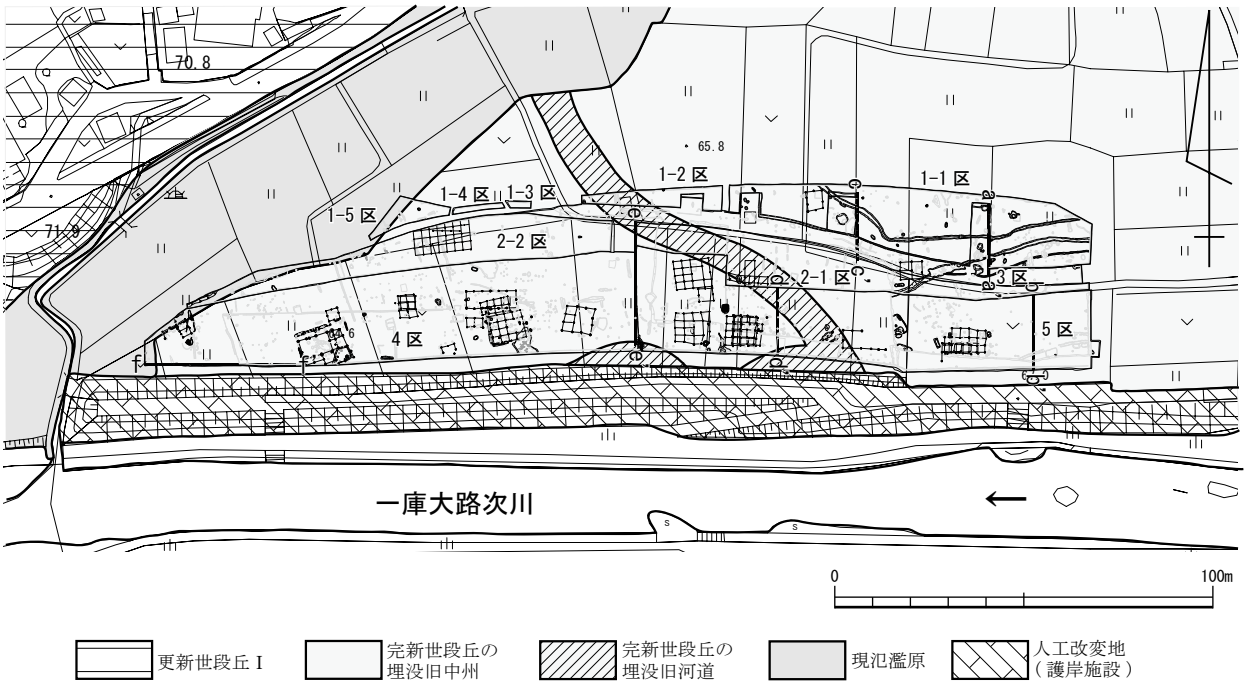
〔完新世段丘〕 この段丘は一庫大路次川沿いや一庫付近にみられる。これは、一庫付近で比較的連続するものの、一庫大路次川沿いでは断続的に分布する。段丘面は、現氾濫原より 30 ～ 50cm 高く、下流へ緩やかに高度を下げる。調査区は西端を除いてこの段丘に位置する。

〔現氾濫原〕 これはあまり発達しておらず、面積の小さいものが一庫や西畦野付近にみられるのみである。この地形は最も低く、洪水の際に冠水する危険性が高い。調査区西端は現氾濫原に位置している。

〔支流性扇状地〕 この扇状地は、背後の山地から堆積物が供給されてできたもので、調査区周辺の山麓に比較的よく発達する。これは、数％の急傾斜で地表高度を下げ、段丘化している。支流性扇状地Ⅰは主に一庫大路次川の東岸に認められ、比高 5m 前後の段丘崖をもつ。支流性扇状地Ⅱは、一庫や見野付近に分布し、支流性扇状地Ⅲより 2m 前後高い。支流性扇状地Ⅲは主に西畦野付近にみられ、段丘崖の比高は約 1.5m である。支流性扇状地Ⅳは、主に山地、更新世段丘、ならびに支流性扇状地を刻む谷の中に認められる。これらのうち、支流性扇状地ⅠからⅢはそれぞれ更新世段丘ⅠからⅢと、また支流性扇状地Ⅳは完新世段丘と傾斜変換線で接している。

（２）調査区の微地形と遺構について

調査区は西端を除いて完新世段丘に位置する。調査区の南には一庫大路次川が西流し、北から西にかけては現氾濫原が細長く延びる。調査区西端はこのような現氾濫原に位置し、そこには一庫大路次川の小規模な支流が流れる。完新世段丘は埋没した扇状地が段丘化したものであり、西端を除く調査区では埋没した旧中州と旧河道が存在する（第 20 図）。



第 20 図　調査区付近における微地形の分布

埋没旧中州は2か所で認められる。ひとつは調査区東部に分布し、そこには西端を除く1－1区、2－1区と3区の東部から中央部、及び5区東部が位置する。他の一つは調査区中央部から西部にかけてみられ、そこに位置する調査区は2－2区、西端を除く4区、ならびに5区西部などである。これらの埋没旧中州は東西に長く、現地表は約30cm緩やかに高くなる。

埋没旧中州上では遺構が多く検出されている。調査区東部の埋没旧中州上には、縄文時代中期末や後期前葉、晩期の土坑7基、弥生時代前期の土坑1基、弥生時代後期末から古墳時代初頭の竪穴住居跡1棟と土坑9基前後、弥生時代後期末から古墳時代前期の溝1条、13世紀ころの掘立柱建物跡6棟、木棺墓1基、及び土壙墓3基などが認められる。また、調査区中央部から西部の埋没旧中州上では、縄文時代中期末の土坑が1基､10世紀末から13世紀の掘立柱建物跡が17棟検出されている。これらのうち、両埋没旧中州上にみられる10世紀末から13世紀の掘立柱建物跡は5か所の居住域に区分され、多くの居住域で建物跡が建て替えのため重複する。

他方、埋没旧河道は3本みられる。1本は5区中央部から3区西部に向かって南南東－西北西方向に延びる。他の2本は4区と5区の境界南部、ならびに5区南部に分布し、そこでは埋没旧河道の一部が認められる。これら3本の埋没旧河道は一庫大路次川の流路跡に相当する。埋没旧河道上では遺構が少なく、5区中央部から3区西部へ延びる埋没旧河道上で縄文時代中期末の土坑1基と弥生時代後期末から古墳時代初頭の土坑や溝などが検出されている。10世紀末から11世紀ころの掘立柱建物跡も一部の柱穴がそこにみられる。なお、現氾濫原に位置する4区西端では、顕著な遺構が認められない。

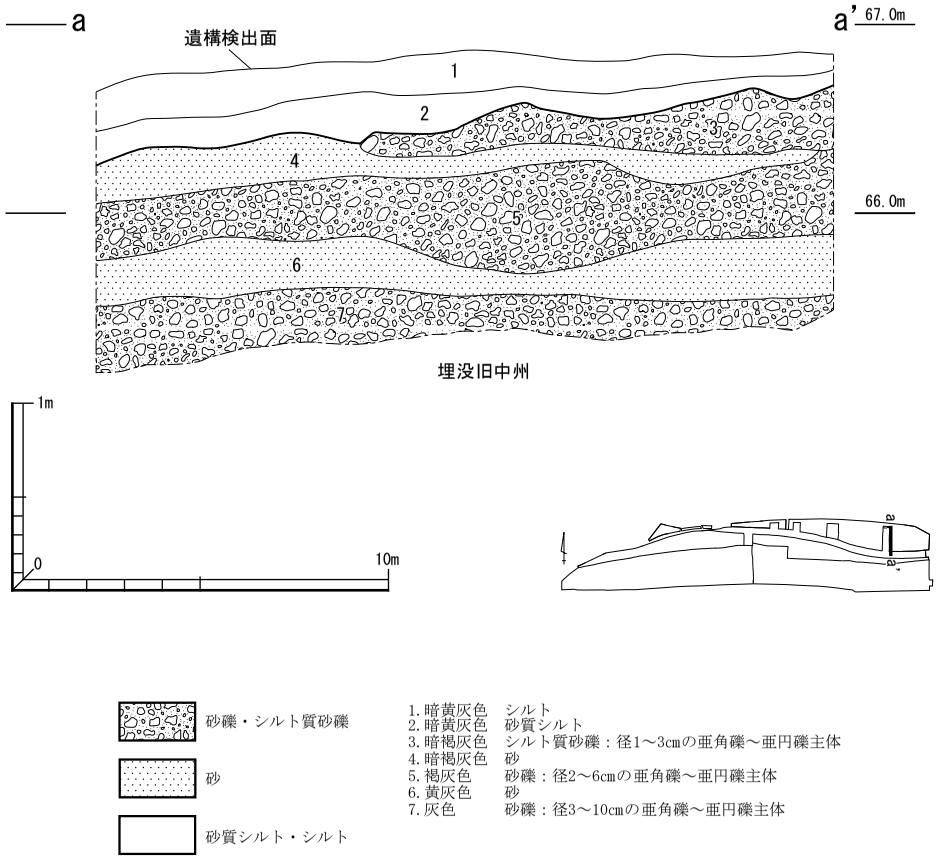
３．調査区における堆積物の特徴

（１）完新世段丘の堆積物について

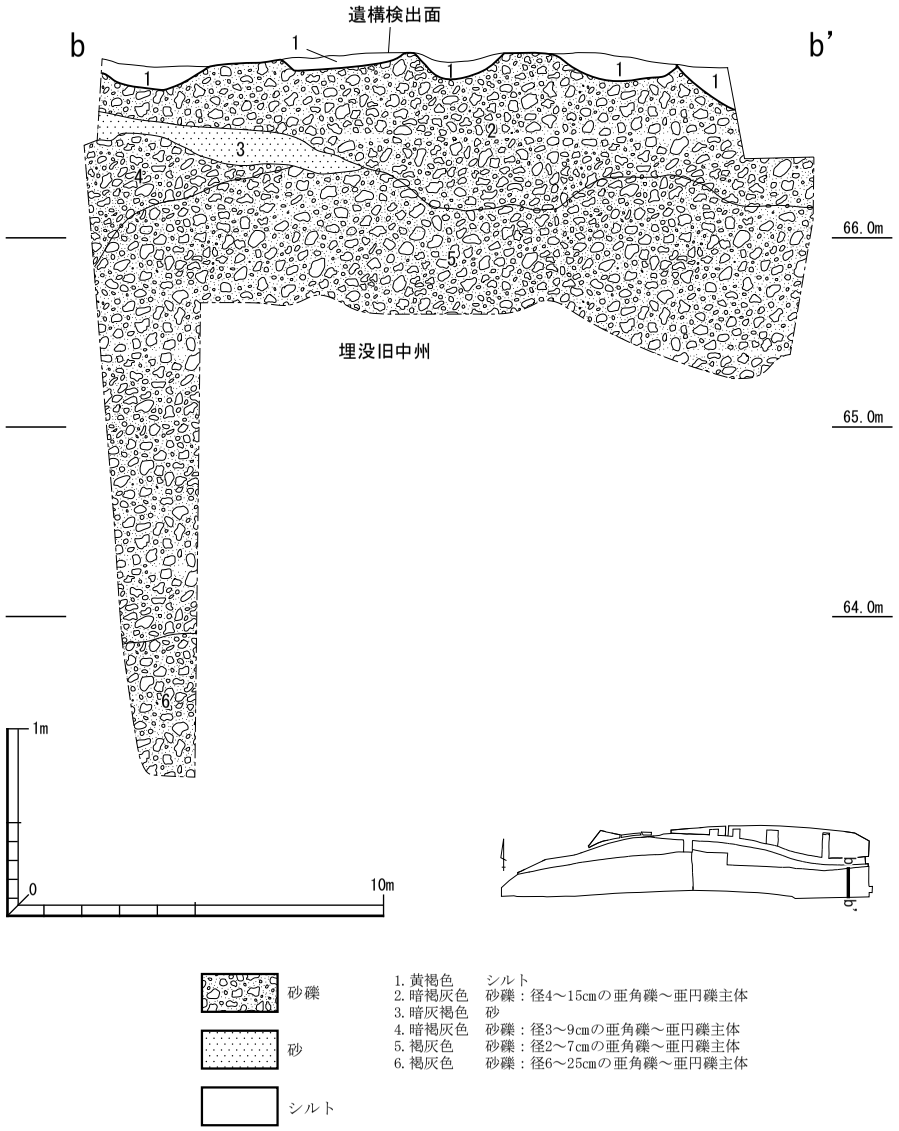
完新世段丘に位置する調査区（西端を除く範囲）では、主に一庫大路次川によってもたらされた河成堆積物が観察される（第21図～第26図)。埋没旧中州の分布範囲には、大きくみて砂礫とそれを覆う細粒堆積物が認められる。これらのうち、砂礫は扇状地の旧中州堆積物に該当する。この砂礫はさらに細分され、間には暗褐灰色や黄灰色などの砂（第21図の堆積物4・6、第22図の堆積物3、第23図の堆積物5、第24図の堆積物9・11）が20～60cmの厚さでレンズ状に挟まれる。最下位で確認される褐灰色の砂礫（第22図の堆積物6、第24図の堆積物12）は、径の大きい礫を多く含み、径5～26cmの亜角礫から亜円礫を主体とする。この砂礫は現地表下2.5m以深にみられる。

これより上位で観察される砂礫（第21図の堆積物3・5・7、第22図の堆積物2・4・5、第23図の堆積物4・6、第24図の堆積物8・10、第25図の堆積物13、第26図の堆積物34）は2～3層に細分される。いずれも径10cm以下の比較的細かい亜角礫から亜円礫を主体とする。砂礫の上面は、調査区東部の埋没旧中州より中央部から西部のそれで低く、それぞれ西（下流方向）へ高度を下げる。

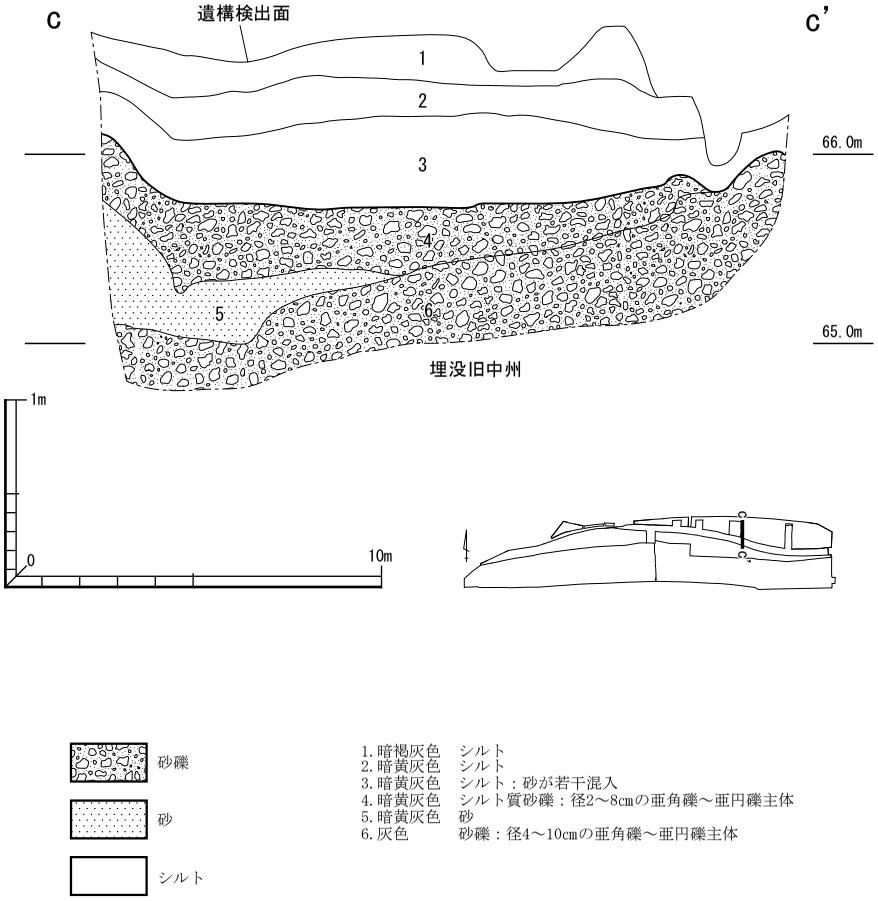
砂礫を覆う細粒堆積物は西方へ厚くなる。調査区西部では、それが約2.3mの厚さをもち、細分される堆積物の数が東部に比べて多い。細粒堆積物の下部は褐灰色や灰色の砂、シルト質砂、砂質シルト、及びシルト（第25図の堆積物8～12、第26図の堆積物27～33）からなる。これらは、調査区中央部から西部の埋没旧中州上に1～1.5mの厚さで分布し、6～7層に分けられる。細粒堆積物の上部では、褐灰色や黄褐色などの砂質シルトとシルトが観察される。これらは埋没旧中州上のほぼ全域で認められる。厚さは数十cm～1mで、調査区東端で薄い。この堆積物は、調査区東部の埋没旧中州上で約5層



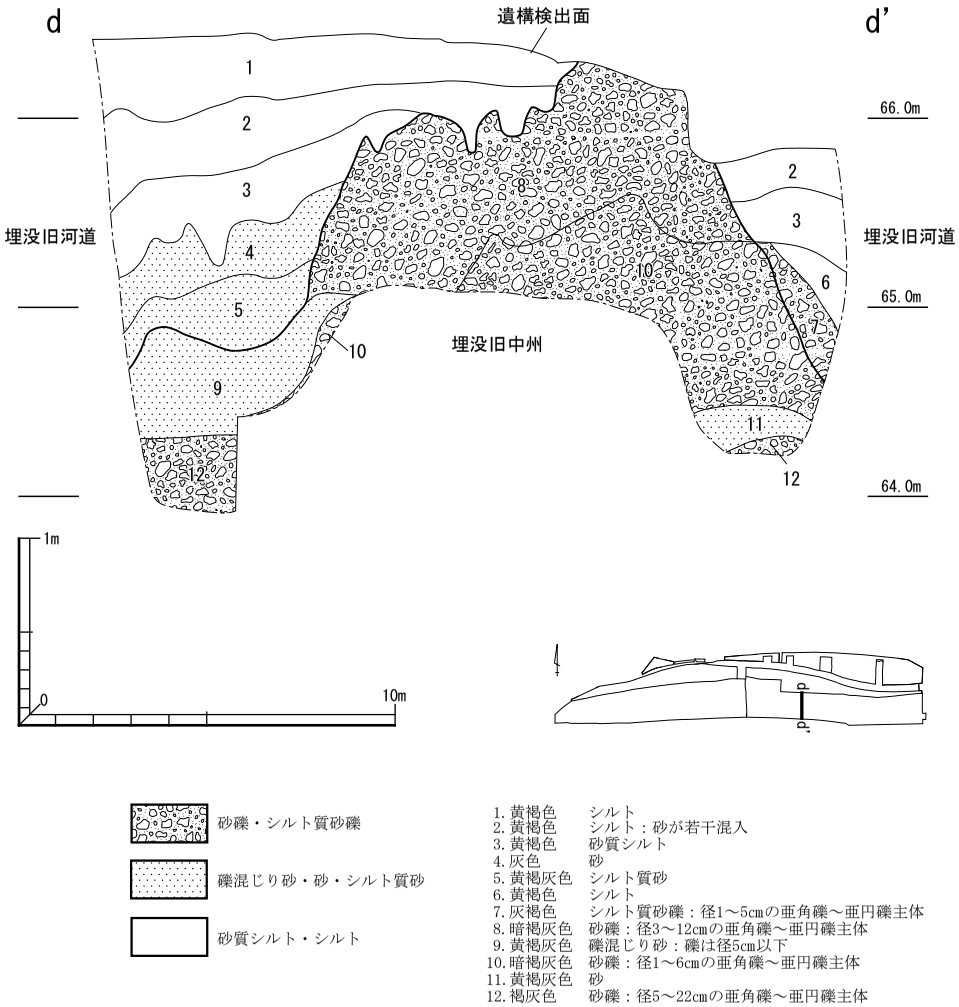
第 21 図　3 区東部のトレンチ断面図（a－a’断面図）



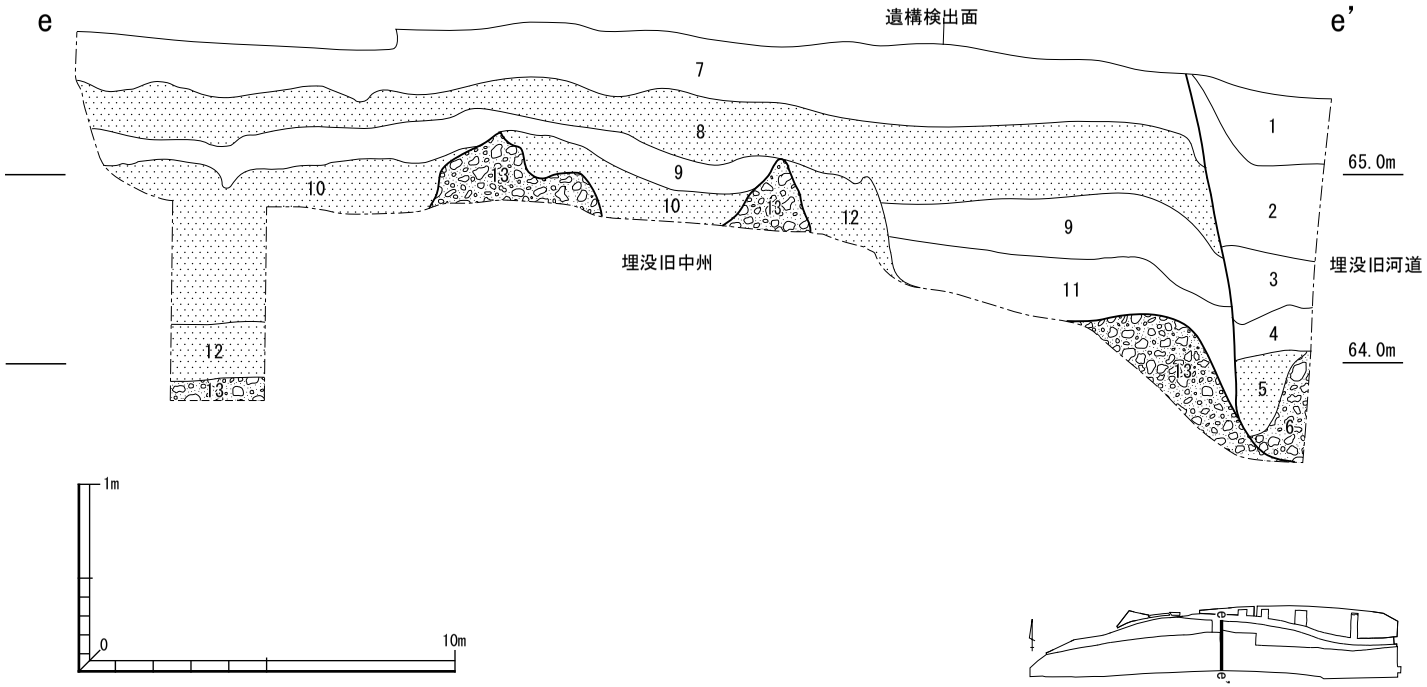
第 22 図　5 区東部のトレンチ断面図（b－b’断面図）

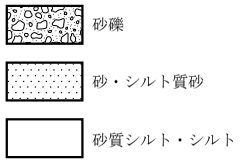


第 23 図　３区中央部のトレンチ断面図（c － c’ 断面図）



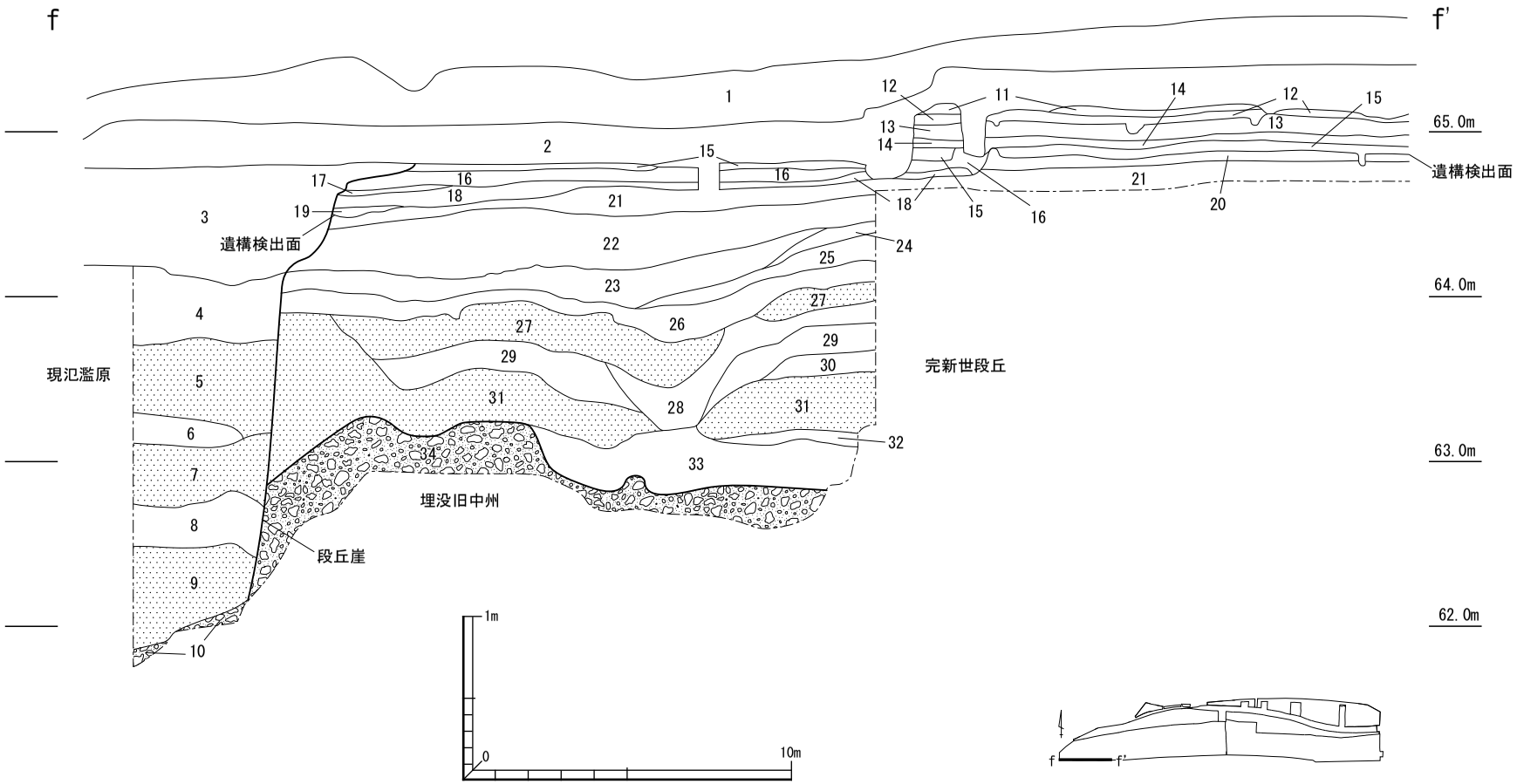
第 24 図　５区西部のトレンチ断面図（d － d’ 断面図）





1. 暗褐灰色　シルト
2. 黄褐灰色　砂質シルト
3. 黄褐灰色　シルト
4. 褐灰色　砂質シルト
5. 灰色　シルト質砂
6. 褐色　砂礫：径2～6cmの亜角礫～亜円礫主体
7. 黄褐灰色　シルト：砂が若干混入
8. 褐灰色　シルト質砂
9. 灰褐色　砂質シルト
10. 灰色　シルト質砂
11. 灰褐色　シルト
12. 灰色　砂
13. 褐灰色　砂礫：径3～10cmの亜角礫～亜円礫主体

第25図　4区東端のトレンチ断面図（e－e'断面図）



砂礫

シルト質砂

砂質シルト・シルト

1. 盛土
2. 現耕土
3. 盛土
4. 黄褐灰色　砂質シルト
5. 黄褐灰色　シルト質砂
6. 黄褐灰色　砂質シルト
7. 褐灰色　シルト質砂
8. 褐灰色　砂質シルト
9. 暗褐灰色　シルト質砂
10. 灰色　砂礫：径5～13cmの亜角礫～亜円礫主体
11. 暗灰黄色　シルト
12. 黄褐色　シルト
13. 灰黄色　シルト
14. にぶい黄色　シルト
15. 黄褐色　シルト
16. 暗灰黄色　シルト
17. 黄褐色　シルト
18. オリーブ褐色　シルト
19. にぶい黄褐色　シルト
20. オリーブ褐色　シルト：遺物を含む
21. 暗褐色　シルト：遺物を含む
22. 暗褐灰色　砂質シルト
23. 灰色　砂質シルト
24. 黄褐色　シルト
25. 暗褐灰色　シルト
26. 褐灰色　砂質シルト
27. 灰色　シルト質砂
28. 黄灰色　シルト
29. 褐灰色　砂質シルト
30. 黄灰色　シルト
31. 褐灰色　シルト質砂
32. 黄灰色　シルト
33. 褐灰色　砂質シルト
34. 褐灰色　砂礫：径3～13cmの亜角礫～亜円礫主体

第26図　4区西端のトレンチ断面図（f－f' 断面図）

（第 21 図の堆積物 1・2、第 22 図の堆積物 1、第 23 図の堆積物 1 ～ 3 など）、中央部から西部のそれで 16 層前後（第 25 図の堆積物 7、第 26 図の堆積物 11 ～ 26）に細分される。

細粒堆積物の上部では、ほぼ中位にみられる暗褐色とオリーブ褐色のシルトに遺物が混入する。この堆積物は 3 層（第 26 図の堆積物 20・21 など）に分けられ、とくに最上位にみられるオリーブ褐色のシルトは土壌化が著しい。これには主に 10 世紀末から 13 世紀の遺物が含まれ、その下面からは弥生時代後期末から古墳時代前期と 10 世紀末から 13 世紀の遺構が検出される。調査区東部に分布する埋没旧中州上の北部から東部、及び調査区中央部から西部にみられる埋没旧中州上の北部では、これらの堆積物が人為的に削り取られたため認められない。そこでは、遺物を含む堆積物の層準で縄文時代中期末、後期前葉、晩期、ならびに弥生時代前期の遺構が検出される。

一方、埋没旧河道は流下時期の異なる 2 種類に分けられる。ひとつは旧中州堆積物の砂礫を切る。これには 5 区中央部から 3 区西部へ延びる旧河道と 5 区南部に分布するものが相当し、それぞれ 1.6m と 1.1m 以上の深さをもつ。他の一つは、砂礫を覆う細粒堆積物（第 25 図の堆積物 7）を切る。4 区と 5 区の境界南部にみられるものがそれにあたり、深さが約 2m である。このような旧河道堆積物の下部にはいずれも砂礫（第 24 図の堆積物 7、第 25 図の堆積物 6）や砂（第 24 図の堆積物 4・5、第 25 図の堆積物 5）が認められ、砂礫に含まれる礫は径 1 ～ 6cm の亜角礫から亜円礫を主体とする。また、旧河道堆積物の中部から上部は砂質シルト（第 24 図の堆積物 3、第 25 図の堆積物 2・4）やシルト（第 24 図の堆積物 1・2・6、第 25 図の堆積物 1・3）からなる。

（２）現氾濫原の堆積物について

調査区西端には完新世段丘の段丘崖が認められ、それは比高 3m 以上である（第 26 図）。段丘崖より西の現氾濫原では、最下部に灰色の砂礫（第 26 図の堆積物 10）がみられ、その上位にシルト質砂と砂質シルトの互層（第 26 図の堆積物 4 ～ 9）が観察される。灰色の砂礫は扇状地堆積物にあたる。これは軟弱で、礫は径 5 ～ 13cm の亜角礫から亜円礫を主体とする。また互層は、褐灰色や黄褐灰色を呈し、2.4m の厚さをもつ。これらは調査区の北から西を流れる小規模な支流によって堆積したものである。

４．調査区付近における地形環境の変遷

調査区付近の地形環境は、これまで述べた事柄から次のように変遷したと考えられる。

〔ステージ 1〕　縄文時代中期末以前、調査区付近では主に一庫大路次川によって扇状地が形成された。まず径 20cm 以上の礫を多く含む砂礫がもたらされ、ついで径 10cm 以下の礫からなる砂礫が数度の洪水によって堆積した。扇状地の形成末期には、調査区の東部と中央部から西部に中州がつくられ、5 区南部や 5 区中央部から 3 区西部にかけて一庫大路次川が流れた。これらの流路はその後砂礫や砂、さらにシルトの堆積によって埋積された。

〔ステージ 2〕　扇状地の形成後、上面高度の低い調査区中央部から西部の旧中州上に洪水が数度及んだ。これに伴って砂、シルト質砂、砂質シルト、ならびにシルトの堆積がみられ、調査区中央部から西部の旧中州は埋没した。

〔ステージ 3〕　縄文時代中期末までに砂質シルトとシルトが調査区のほぼ全域に数度の洪水によってもたらされた。そのため、調査区東部の旧中州は埋没し、調査区中央部から西部のそれはさらに厚く細粒

堆積物に覆われた。この直後、4 区と 5 区の境界南部には一庫大路次川の流路が形成された。

〔ステージ 4〕 弥生時代後期末までに調査区南西部を中心とする範囲にシルトが 2 ～ 3 度堆積し、ほぼ同時期に調査区で人間が活動した。縄文時代中期末には調査区の東部と中央部から西部の埋没旧中州上で、また縄文時代後期前葉、晩期、及び弥生時代前期には調査区東部のそれで土坑などがつくられた。

〔ステージ 5〕 調査区付近には、少なくとも弥生時代後期末から 13 世紀にかけて洪水のほとんど発生しない比較的安定した環境が訪れた。こうした環境の下、弥生時代後期末から古墳時代初頭には調査区東部の埋没旧中州上に竪穴住居が建てられた。また 10 世紀末から 13 世紀までの間には、調査区の東部と中央部から西部の埋没旧中州上に掘立柱建物が多数建てられ、東部のそれには木棺墓や土壙墓も築造された。掘立柱建物は多くの場合建て替えられ、集落は比較的長く存続した。また、その建造は一部が 5 区中央部から 3 区西部へ延びる埋没旧河道上にも及んだ。

〔ステージ 6〕 13 世紀以降に洪水が発生し、調査区のほぼ全域にシルトの堆積がみられた。

〔ステージ 7〕 その後、一庫大路次川やその支流が下方侵食を行い、調査区付近の平野は段丘化した。その結果、調査区西端には段丘崖が形成され、完新世段丘上には洪水がほとんど及ばなくなった。

〔ステージ 8〕 調査区西端の現氾濫原では、調査区の北を流れる小規模な支流によって砂礫が堆積した。これに伴って扇状地がつくられた。

〔ステージ 9〕 現氾濫原では、数度の洪水によってシルト質砂と砂質シルトが扇状地上に交互にもたらされた。そのため、扇状地は細粒堆積物に被覆されて埋没した。

5．おわりに

本遺跡の調査区は、ほとんどが一庫大路次川に沿う完新世段丘に位置し、西端だけが現氾濫原にみられる。完新世段丘は縄文時代中期末以前に形成・埋没した扇状地が 13 世紀以降に段丘化したもので、そこには埋没旧中州と埋没旧河道が分布する。調査区では、埋没旧中州が東部（西端を除く 1 － 1 区、2 － 1 区と 3 区の東部から中央部、ならびに 5 区東部付近）と中央部から西部（2 － 2 区、西端を除く 4 区、及び 5 区西部付近）の 2 か所に認められる。他方、埋没旧河道は 3 本存在する。1 本は 5 区中央部から 3 区西部へ延び、他の 2 本は 5 区南部ならびに 4 区と 5 区の境界南部で局所的にみられる。

このような微地形のうち、埋没旧中州上では人間活動が比較的活発であった。それは縄文時代中期末、後期前葉、及び晩期、弥生時代前期、弥生時代後期末から古墳時代前期、及び 10 世紀末から 13 世紀にみられた。埋没旧中州上が人間活動の主要な場となった大きな一因はそこでの地形環境にあると考えられる。埋没旧中州上は、埋没旧河道上に比べてわずかに高く、比較的高燥で排水の便がよい。そのため、そこは居住域や墓域に適している。調査区では、こうした埋没旧中州上でとくに弥生時代後期末から古墳時代初頭と 10 世紀末から 13 世紀に人間が居住した。

中でも、10 世紀末から 13 世紀には他の時期に比して大規模で存続期間の長い集落が形成され、調査区ではこの時期に人間活動が最も盛んになった。これも地形環境と深く関連する。調査区付近では、少なくとも弥生時代後期末から 13 世紀にかけて洪水のほとんど発生しない比較的安定した環境が続いた。10 世紀末から 13 世紀の集落は、地形環境が 700 年以上にわたって安定していた地点に形成されたのである。調査区では、以上のような地形環境と人間生活の係わりが認められ、人間は微地形上の環境や洪水の発生を意識して活動の場を選定していたと考えられる。

第２節　西畦野下ノ段・井戸遺跡出土縄文土器の胎土分析

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

はじめに

今回の分析調査では、川西市西畦野の一庫大路次川右岸に広がる扇状地上に位置する西畦野下ノ段・井戸遺跡から出土した縄文土器について、その材質（胎土）の特性を明らかにし、その生産や供給事情に関わる資料を作成する。

１．試料

試料は、西畦野下ノ段・井戸遺跡から出土した16点の縄文土器片である。試料には、試料番号１～16までの番号が付されている。時期の内訳は、前期が２点、中期末が５点、後期が２点、晩期が４点、時期不明が３点である。また、深鉢とされた試料も６点ある。各試料の出土地区および出土遺構も含めて試料の一覧を第２表に示す。

２．分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲内

第２表　試料一覧および胎土分類結果

試料番号	報告番号	調査番号	ネーミング番号	種　別	器種	出土地区	出土遺構	備　考	胎土分類	
									鉱物・岩片	粒径
1		2013026	906	縄文土器		5区-0拡張区	SK1616	縄文中期末	A	2
2		2013026	906	縄文土器		5区-0拡張区	SK1616	縄文中期末	A	2
3		2013026	920	縄文土器		5区-5上段	SK1630	縄文中期末	A	2
4		2013026	74	縄文土器		3区-1	SK501	縄文中期末	A	2
5		2013026	175	縄文土器		3区-7N	SK599	縄文晩期	B	4
6		2013026	100	縄文土器		3区-3N	SK532	縄文	C	1
7		2012136	303	縄文土器		C18	西南付近深堀	縄文中期末	A	2
8		2012136	22	縄文土器		1-1(A-8)	SP166(SB03)	縄文後期前葉	C	3
9		2012136	3	縄文土器		1-1区(B6)	SD05	縄文晩期	F	1
10		2013026	51	縄文土器		3区-7N		縄文晩期	B	4
11	23	2013026	7	縄文土器	深鉢	3区-2		縄文前期	B	4
12	25	2013026	962	縄文土器	深鉢	5区-1	SK1662	縄文前期	B	5
13	18	2012136	16	縄文土器	深鉢	1-1区C2	SK80	縄文後期	A	2
14	19	2012136	17	縄文土器	深鉢	1-1区C2	SK80	縄文	A	3
15	12	2012136	20	縄文土器	深鉢	1-1区B4	SK111	縄文	A	2
16	22	2012136	60	縄文土器	深鉢	1-1区B7	SK163	縄文晩期	A	2

にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法が有効である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に 0.03mm の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて 0.5mm 間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により 200 個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の 3 次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

３．結果

（１）胎土の分類

観察結果を第３～６表、第 27 ～ 34 図に示す。以下に鉱物・岩石組成、粒径組成、砕屑物・基質・孔隙の割合の順に述べる。

１）鉱物・岩石組成

当社では、これまでに兵庫県下の遺跡から出土した土器の胎土分析を多量に行い、それらの結果について、特徴的に含まれる鉱物または岩石の種類によって胎土の特徴を分類し、それぞれに分類名を付してきた。ここでもその分類名を踏襲する。以下に分類ごとに述べる。

＜Ａ類＞

岩石片の主要な種類構成が、堆積岩類、凝灰岩と火山岩類、花崗岩類の 3 者が混在する組成を A 類としている。今回の試料では、最も多くの試料がこれに分類され、試料番号 1 ～ 4、7、13 ～ 16 の計 9 点になる。なお、試料番号 3 には凝灰岩・火山岩類および花崗岩類が計数されていないが、岩石片自体の留数が少ないことと試料番号 4 との組成の類似性から A 類にしている。

＜Ｂ類＞

角閃石の鉱物片を多量に含むことが特徴であり、伴う岩石片は花崗岩類および閃緑岩のみということが多い。今回の試料では、試料番号 5、10、11、12 の 4 点がこれに分類された。

＜Ｃ類＞

岩石片の種類構成において、花崗岩類が多い特徴を示す。今回の試料では、試料番号 6 ～ 8 の 3 点がこれに分類された。

＜Ｆ類＞

岩石片の種類構成において、凝灰岩や流紋岩・デイサイトあるいは安山岩などの火山岩が比較的多く含まれる。今回の試料では、試料番号 9 がこれに分類された。

２）粒径組成

各試料の砂分全体の粒径組成をみると、モードを示す粒径は試料により異なる。ここでは、モードを示す粒径により、粗粒傾向の組成から細粒傾向の組成に向かって、順に 1 類から 5 類までの分類を設定した。各分類の内容を以下に示す。

１類 : 極粗粒砂をモードとする。

第３表　薄片観察結果（1）

試料	砂粒区分		砂粒の種類構成																													合計
			鉱物片										岩石片															その他					
			石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	トレモラ閃石	緑簾石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	閃緑岩	珪長岩	ホルンフェルス	粘板岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物片	砂混じり粘土塊	酸化鉄結核	植物珪酸体	
1	砂	細礫																															0
		極粗粒砂	7	1	1									1		3				1							2						16
		粗粒砂	14	2	5									1		4				1					2	2	1						32
		中粒砂	1	1	1						2					1	1								1	1							9
		細粒砂	7		3											1											2						13
		極細粒砂	1		2																												3
		粗粒シルト	1		1																												2
		中粒シルト	1																														1
	基質																																318
	孔隙																																6
	備考		基質は雲母鉱物質である。凝灰岩は低結晶質なものが散見される。珪化岩の一部には、チャート様のものが認められる。																													
2	砂	細礫																															0
		極粗粒砂									1			1						1				2	1		1						7
		粗粒砂	7	2	1									3	2		1		4					1	6	5	4						36
		中粒砂	3								1			2	1					2				1	2			1					13
		細粒砂	3		2									1					1						1			1					9
		極細粒砂	4	1	1																							4					10
		粗粒シルト	3		1																											1	5
		中粒シルト	1																														1
	基質																																453
	孔隙																																14
	備考		基質は雲母鉱物質である。火山ガラスはバブルウォール型。																													
3	砂	細礫																									1						1
		極粗粒砂	3	4										2										1		3	4						17
		粗粒砂	12	8	2										2				2					2	3	3	2						36
		中粒砂	20	5	4							1		1												1	1	1					34
		細粒砂	19	3	4			1						1																			28
		極細粒砂	10	1	3																												14
		粗粒シルト	4		2																												6
		中粒シルト																															0
	基質																																620
	孔隙																																20
	備考		基質は雲母鉱物、酸化鉄が主体となっている。変質岩は風化岩など。																													
4	砂	細礫																															0
		極粗粒砂	7	1												1				1					2	3							15
		粗粒砂	20	10	3								1	1	1	1	2			3					3	5	2						52
		中粒砂	8	1	5											7	1		2						3		3		1				31
		細粒砂	3	2	3											4	1		1						2								16
		極細粒砂	3	1	2			1								2																	9
		粗粒シルト	2		1																												3
		中粒シルト																															0
	基質																																645
	孔隙																																7
	備考		基質は主に雲母鉱物、水酸化鉄で埋められる。流紋岩、凝灰岩は低結晶質である。																													
5	砂	細礫																		1													1
		極粗粒砂																		2													2
		粗粒砂			1		1	4				1								13													20
		中粒砂	3		2			11				1								4													21
		細粒砂	4		4		1	20				1																1					31
		極細粒砂	3		7			9																									19
		粗粒シルト	1		5			2																									8
		中粒シルト																															0
	基質																																433
	孔隙																																6
	備考		基質は褐色粘土鉱物、酸化鉄などで埋められる。花崗岩類は、花崗閃緑岩～石英閃緑岩質である。火山ガラスはバブルウォール型。																													

第３表　薄片観察結果（2）

試料	砂粒区分		砂粒の種類構成																													合計
			鉱物片										岩石片														その他					
			石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	トレモラ閃石	緑簾石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	閃緑岩	珪長岩	ホルンフェルス	粘板岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物片	砂混じり粘土塊	酸化鉄結核	植物珪酸体	
6	砂	細礫																		2		2											4
		極粗粒砂	7		2								1			1				14		2				3							30
		粗粒砂	10	1	2								1		1		1			8		1				2	1						28
		中粒砂	6	3	1											2				3		1					1						17
		細粒砂	4		3																						1						8
		極細粒砂	4	1	7																												12
		粗粒シルト	11	1	2																												14
		中粒シルト	3																														3
	基質																																608
	孔隙																																15
	備考		基質は主に、雲母鉱物、酸化鉄によって埋められる。																														
7	砂	細礫	1																	1													2
		極粗粒砂	8	1	2									2						5						1				1			20
		粗粒砂	21	8	5									7	2	1				4		1	1		2	4	1			5			62
		中粒砂	3	8	2			1				1			2				2						1			1					21
		細粒砂	1	2	4			1								1			1									4					14
		極細粒砂	1	1	4			1																				4					11
		粗粒シルト	5	2	1																											5	13
		中粒シルト	1																														1
	基質																																597
	孔隙																																27
	備考		基質は、雲母鉱物、褐色粘土鉱物、酸化鉄などで埋められる。火山ガラスはバブルウォール型。粘土塊としたものは、土器片とみられる。																														
8	砂	細礫																		1			1										2
		極粗粒砂																		4													4
		粗粒砂	4		4															6													14
		中粒砂	5	6	2															1		1											15
		細粒砂	4	1	5														1	1													12
		極細粒砂	2	1	3														1														7
		粗粒シルト	1	1	1																												3
		中粒シルト																															0
	基質																																226
	孔隙																																5
	備考		基質は褐色粘土鉱物、セリサイトなどで埋められる。ホルンフェルスにはざくろ石が含まれる。																														
9	砂	細礫														1									1								2
		極粗粒砂	5												2	11	1								1								20
		粗粒砂											1			15	1																17
		中粒砂		1												1																	2
		細粒砂	2		4			4								1																	11
		極細粒砂	1	1	5																												7
		粗粒シルト	5		1																												6
		中粒シルト	1																														1
	基質																																394
	孔隙																																9
	備考		基質は褐色粘土鉱物、炭質物、セリサイトなどで埋められる。凝灰岩は、低結晶質。																														
10	砂	細礫																		1													1
		極粗粒砂				1		1												2	7												11
		粗粒砂	1		3			7												2	15												28
		中粒砂	4		2			15			1									1	6							1					30
		細粒砂	5		5			20			2	3					1																36
		極細粒砂	5		3			13																									21
		粗粒シルト	6		3			7																									16
		中粒シルト	1																														1
	基質																																507
	孔隙																																9
	備考		基質は褐色粘土鉱物などによって埋められる。花崗岩類としたものは、石英閃緑岩に近い。火山ガラスはバブルウォール型。緑簾石あり。																														

第３表　薄片観察結果（3）

試料	砂粒区分		砂粒の種類構成																													合計
			鉱物片										岩石片														その他					
			石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	トレモラ閃石	緑簾石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	閃緑岩	珪長岩	ホルンフェルス	粘板岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物片	砂混じり粘土塊	酸化鉄結核	植物珪酸体	
11	砂	細礫																															0
		極粗粒砂																			1												1
		粗粒砂																		1	1												2
		中粒砂	2		2		1	4	1												3												13
		細粒砂	2		3			8	1			1																					15
		極細粒砂	1		4			4																									9
		粗粒シルト	1		3			3																									7
		中粒シルト																															0
	基質																																138
	孔隙																																1
	備考		基質は褐色粘土鉱物、炭質物などで埋められる。																														
12	砂	細礫																															0
		極粗粒砂																															0
		粗粒砂						2																									2
		中粒砂																			2												2
		細粒砂			5			6			1																						12
		極細粒砂			5			7			1																						13
		粗粒シルト			3			3																									6
		中粒シルト																															0
	基質																																88
	孔隙																																1
	備考		基質は褐色粘土鉱物、雲母鉱物などで埋められる。																														
13	砂	細礫	1																														1
		極粗粒砂	4	1	1															3						2					1		12
		粗粒砂	11	5	6									2		1	1			7			2		2	3	3						43
		中粒砂	21	3	4			1				1		1	1		1			1			2		3	4		1					44
		細粒砂	20	1	2							1				1									1		1						27
		極細粒砂	13	1	9																												23
		粗粒シルト	2		3																												5
		中粒シルト																															0
	基質																																488
	孔隙																																13
	備考		基質は褐色粘土鉱物、雲母鉱物、酸化鉄などで埋められる。凝灰岩、流紋岩は低結晶質。火山ガラスはバブルウォール型。ジルコンあり。																														
14	砂	細礫																		1													1
		極粗粒砂	4	1										2			2		1	3			1		1	2	2						19
		粗粒砂	14	7	4								1	4	1	3			2	4					1	3	4						48
		中粒砂	25	9	7	1								1					1	9					2	1	3						59
		細粒砂	26	2	6								3						2														39
		極細粒砂	14	2	6								1																				23
		粗粒シルト	6	1	3																												10
		中粒シルト	1																														1
	基質																																699
	孔隙																																18
	備考		基質は褐色粘土鉱物、雲母鉱物、酸化鉄などで埋められる。凝灰岩、流紋岩は低結晶質。																														
15	砂	細礫																															0
		極粗粒砂	2	1							1		1									1											6
		粗粒砂	19	3	9						1		2	2	2					9		2					1						50
		中粒砂	11	3	6											1			1	1					1	3							27
		細粒砂	7		3																												10
		極細粒砂	3		3					1			1																				8
		粗粒シルト	2		1																												3
		中粒シルト																															0
	基質																																321
	孔隙																																4
	備考		基質は褐色粘土鉱物、雲母鉱物、酸化鉄などで埋められる。凝灰岩は低結晶質である。																														

第３表　薄片観察結果（4）

試料	砂粒区分		砂粒の種類構成																													合計
			鉱物片										岩石片															その他				
			石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	トレモラ閃石	緑簾石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	閃緑岩	珪長岩	ホルンフェルス	粘板岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物片	砂混じり粘土塊	酸化鉄結核	植物珪酸体	
16	砂	細礫													1				1														2
		極粗粒砂	5	1									1	1						2			1				1						12
		粗粒砂	4	3	1									1				1	1				1			4				1			17
		中粒砂	3	1	2																												6
		細粒砂	4		1											1			1														7
		極細粒砂	2	1	1																												4
		粗粒シルト	2		2					1																							5
		中粒シルト	1		1																												2
	基質																																416
	孔隙																																5
	備考		基質は褐色粘土鉱物、雲母鉱物、酸化鉄などで埋められる。変質岩は酸化鉄化した風化岩など。凝灰岩は低結晶質。																													

２類：粗粒砂をモードとする。

３類：中粒砂をモードとする。

４類：細粒砂をモードとする。

５類：極細粒砂をモードとする。

各分類の点数は、２類が最も多く、８点あり、次いで４類が３点、１類と３類が２点ずつ、５類が１点という構成である。分類された結果を第３表に併記する。

３）砕屑物・基質・孔隙の割合

砕屑物・基質・孔隙の割合では、砕屑物の割合が10数％から20%台後半までの幅があるが、その中で各試料の値はばらつき、特に集中する値は見出せない。したがって、砕屑物の割合からは分類を設定することはできない。

（２）各時期の胎土

１）前期

試料番号11と12の２点であるが､両者ともにＢ類であり粒径組成は細粒傾向の強い４類と５類である。

２）中期末

５点の試料全点がＡ類である。粒径組成は、５点ともに粗粒傾向の強い２類である。

３）後期および後期前葉

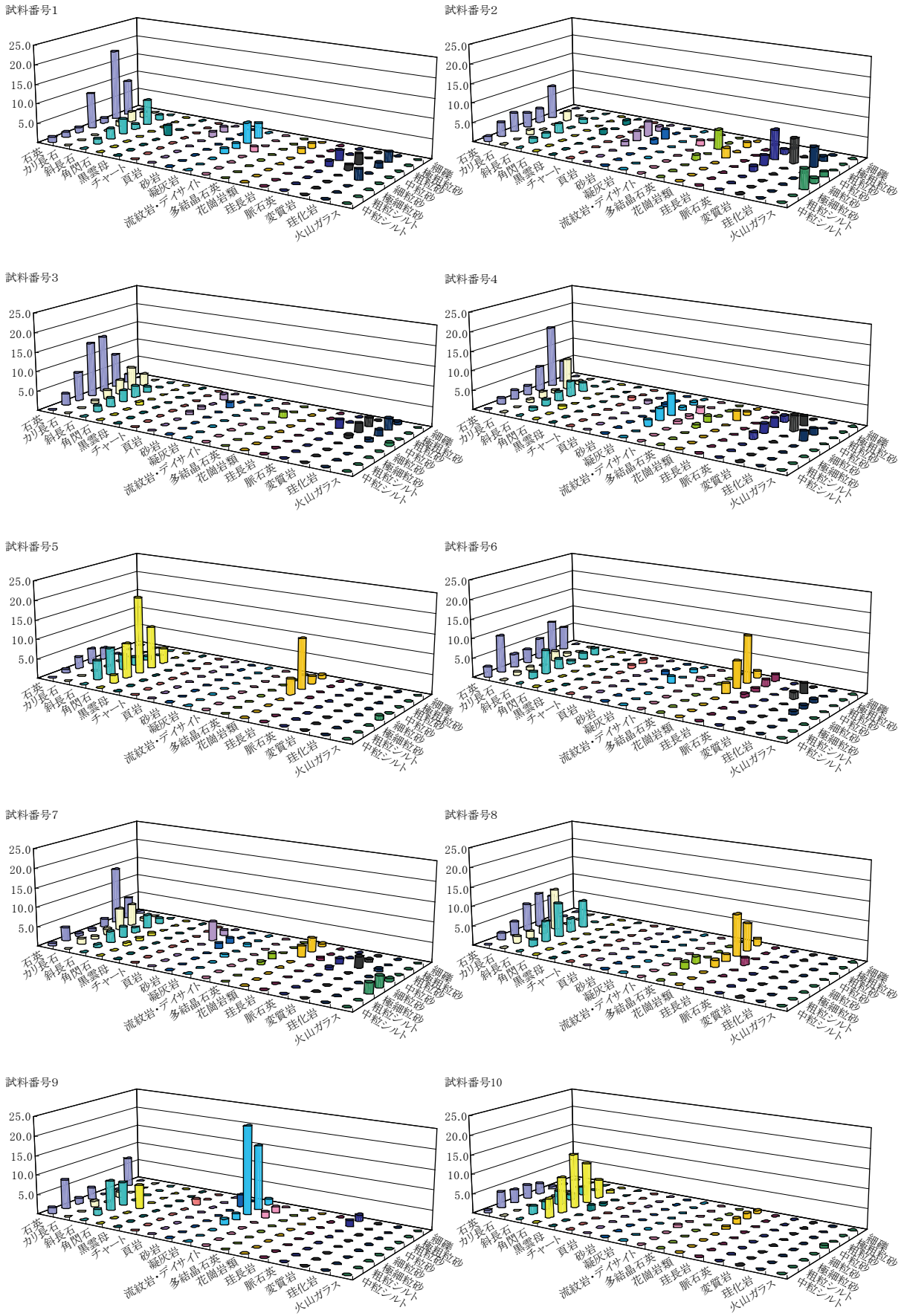
試料番号８と13の２点であるが、後期とされた試料番号13がＡ類に分類され、後期前葉とされた試料番号８がＣ類に分類される。粒径組成も試料番号13は２類、試料番号８は３類に分類された。

４）晩期

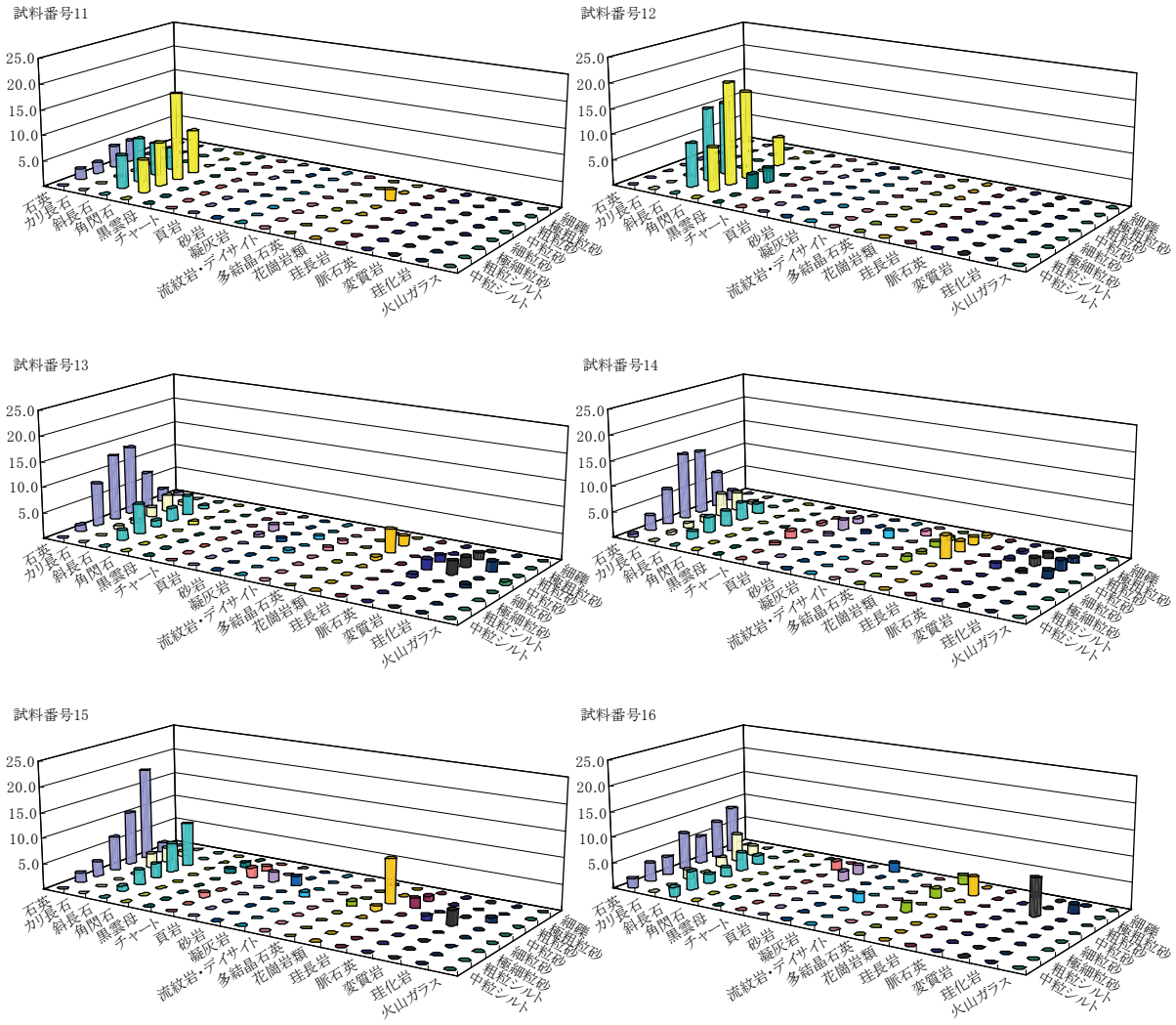
４点の試料のうち、Ｂ類が２点あり、他はＡ類とＦ類が１点ずつである。粒径組成は細粒傾向の強い４類が２点ある一方で粗粒傾向の強い１類と２類も１点ずつ含まれている。

５）時期不明

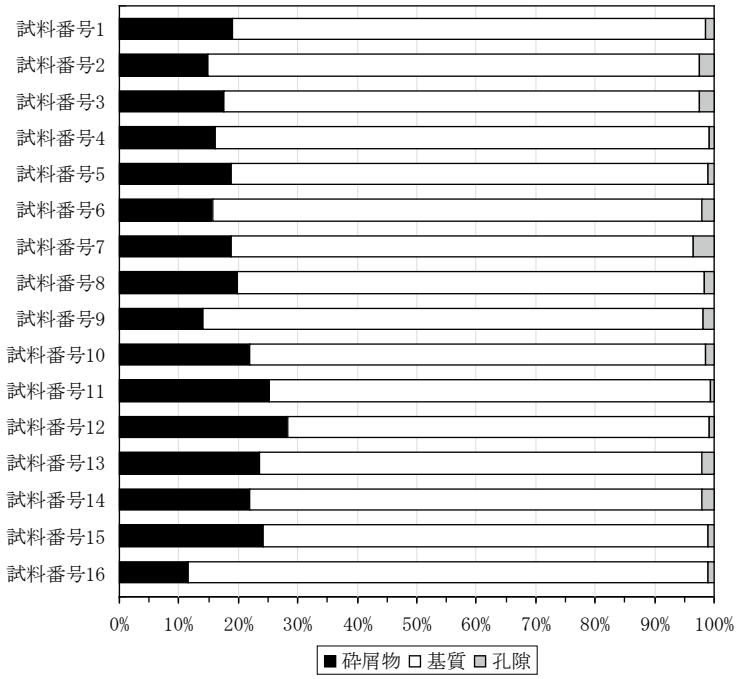
３点の試料のうち、Ａ類が２点、Ｃ類が１点という内訳である。粒径組成は粗粒傾向から細粒傾向までの１類、２類、３類に分かれた。



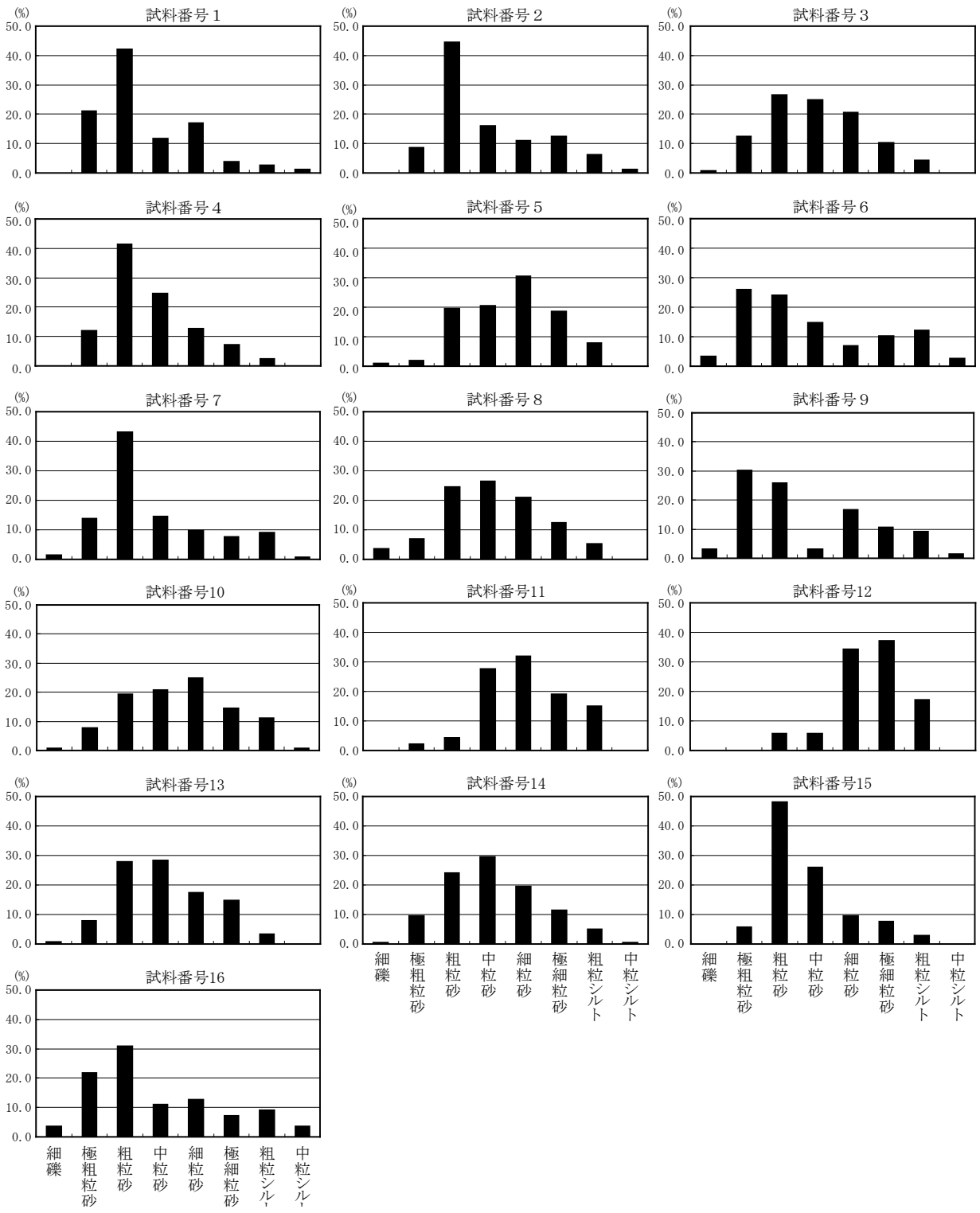
第 27 図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（1）



第 28 図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（２）



第 29 図　砕屑物・基質・孔隙の割合


試料番号１
試料番号２
試料番号３
試料番号４
試料番号５
試料番号６
試料番号７
試料番号８
試料番号９
試料番号10
試料番号11
試料番号12
試料番号13
試料番号14
試料番号15
試料番号16
(%)
50.0
40.0
30.0
20.0
10.0
0.0
細礫
極粗粒砂
粗粒砂
中粒砂
細粒砂
極細粒砂
粗粒シルト
中粒シルト

第 30 図　砂の粒径組成

４．考察

（１）胎土の鉱物・岩石組成と地質学的背景

縄文土器の胎土に認められた鉱物・岩石組成は、土器の材料となった粘土や砂の採取地（おそらく生産地か生産地にかなり近い場所と考えられる）における地質学的背景を反映している。今回の分析では、4 種類の鉱物・岩石組成が認められたことから、地質学的背景の異なる 4 つの場所で作られた土器が西畦野下ノ段・井戸遺跡に集まっている可能性がある。その生産地域について、本遺跡の立地する背後の地質から周辺域に広げてみることで検討してみたい。周辺地質については、上村ほか（1974）、猪木（1981）、日本の地質「近畿地方」編集委員会（1987）および日本地質学会編（2009）などを参照した。

西畦野下ノ段・井戸遺跡の立地する扇状地の背後には、現在はゴルフ場となっている丘陵地が広がるが、この丘陵地は、第四紀更新世の大阪層群により構成されており、その基盤は、古生代末から中生代中頃までに形成された丹波帯と呼ばれる堆積岩類からなっている。この丹波帯の堆積岩は、猪名川流域の山地や知明湖の北側に広がる山地を広く構成しており、したがって、これらの水系の河川砂には丹波帯に由来する堆積岩類が多く含まれている。さらに、猪名川の上流域の猪名川町付近の山地や知明湖の北側の能勢町付近の山地には剣尾花崗岩体と呼ばれる中生代白亜紀後期に貫入した花崗岩体の分布が認められ、さらに剣尾花崗岩体の周囲を取り囲むように白亜紀後期の火山岩類火砕岩類からなる有馬層群が分布している。このような地質学的背景により、西畦野下ノ段・井戸遺跡周辺の砕屑物中には、堆積岩類、凝灰岩、火山岩そして花崗岩類という複数種の岩石が混在していることが想定される。すなわち、今回の分析において A 類とした胎土は、西畦野下ノ段・井戸遺跡周辺の砕屑物を材料としている可能性があると考えられる。

一方、B 類については、その特殊な鉱物・岩石組成は、西畦野下ノ段・井戸遺跡の地質学的背景と明らかに異質であることがわかる。B 類から推定される地質学的背景は、角閃石花崗閃緑岩あるいは角閃石閃緑岩の岩体であり、そのような地質からなる山地周縁部の砕屑物が B 類の胎土の材料となっている可能性がある。B 類から推定される地質学的背景とそれを持つ地域を近畿地方でみるならば、各地に分布する領家花崗岩体からなる山地の周辺部である。現時点では、具体的な地域を絞ることはできないが、これまでの分析事例では、発掘調査所見により特に生駒山西麓地域とされた試料に B 類の組成が認められている。この地域も B 類の由来する地域の一つであるが、今後、発掘調査所見との検討が必要と考えられる。

C 類から推定される地質学的背景も、花崗岩体の分布する地域であるが、鉱物組成を見ると、斜長石に対するカリ長石の割合がそれほど低くはないことから、花崗岩類でも花崗閃緑岩を主体とする領家花崗岩類ではなく、狭義の花崗岩を主体とする白亜紀の貫入岩体からなる花崗岩体が推定される。前述した剣尾花崗岩体も狭義の花崗岩からなるが、現時点では C 類の地質学的背景として特定するものではない。ただし、C 類とした試料のうちの試料番号 6 などは、堆積岩類や凝灰岩も微量ながら混在しており、知明湖北側の山地の地質学的背景とも調和的である。

F 類の示す凝灰岩や流紋岩・デイサイトは、堆積岩類も微量ながら混在していることも考慮すると、猪名川上流域に分布する有馬層群に由来する可能性が高い。その材料採取地は、おそらく、猪名川沿いに西畦野下ノ段・井戸遺跡よりも上流の地域であると考えることができる。

（２）各時期における縄文土器の製作事情について

分析結果で述べたように、胎土の鉱物・岩石組成と土器の時期との間には、対応関係のある可能性が

高い。胎土の鉱物・岩石組成の違いは、土器の生産地の違いに対応する可能性も高いことから、西畦野下ノ段・井戸遺跡では、時期によって縄文土器の製作事情が異なっていたことが示唆される。

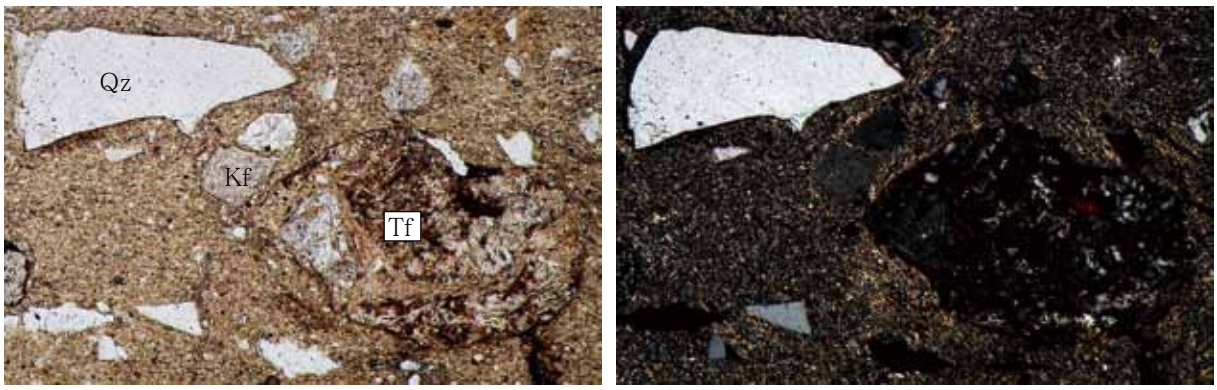
今回の試料の中で最も多数を占めたＡ類の胎土は、上述したように西畦野下ノ段・井戸遺跡周辺の砕屑物が材料として使用されていると考えられ、この胎土が各時期の土器に認められることは、各時期において基本的には周辺の材料を使用し、おそらく周辺で土器が作られていたことを示している可能性が高い。特に中期末の土器では今回の試料で見る限りにおいてはほとんどが周辺での製作であったことが推定される。

これに対して、前期と晩期の土器には、明らかに周辺での製作ではないことを示すＢ類の胎土が認められており、ある程度距離の離れた地域から、何らかの事情により当該地まで搬入された土器のあったことが示唆される。晩期にはＦ類の土器も含まれており、複数の地域との関係も示唆される。また、このような事情は、Ｃ類の土器を含む後期についても同様にあったことが考えられる。

今回の分析では、出土した土器の中から各時期について数点ずつ選択された試料の中で考察したものである。今後、出土状況全体を反映するような選択による試料の分析をすることができれば、各時期の状況について、より正確に捉えることが可能になると考えられる。特に、各時期におけるＡ類とそれ以外の胎土との割合などは、その時期における周辺地域との交渉の事情にも関連すると考えられ、有意な資料の作成が期待される。

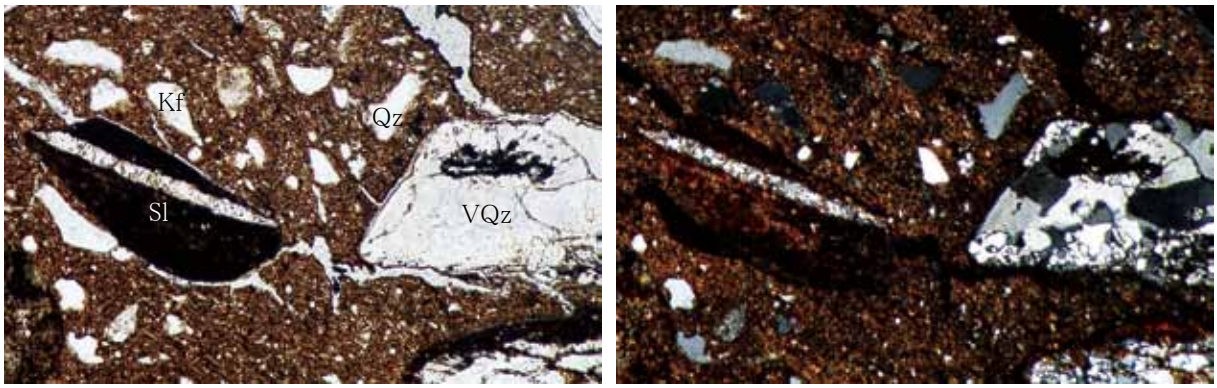
引用文献

猪木幸男,1981,20万分の1地質図幅「姫路」.地質調査所.
上村不二雄・坂本　亨・山田直利・猪木幸男,1974,20万分の1地質図幅「鳥取」.地質調査所.
松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－.日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120-121.
日本地質学会編,2009,日本地方地質誌5　近畿地方.朝倉書店,453p.
日本の地質「近畿地方」編集委員会,1987,日本の地質6　近畿地方.共立出版,297p.

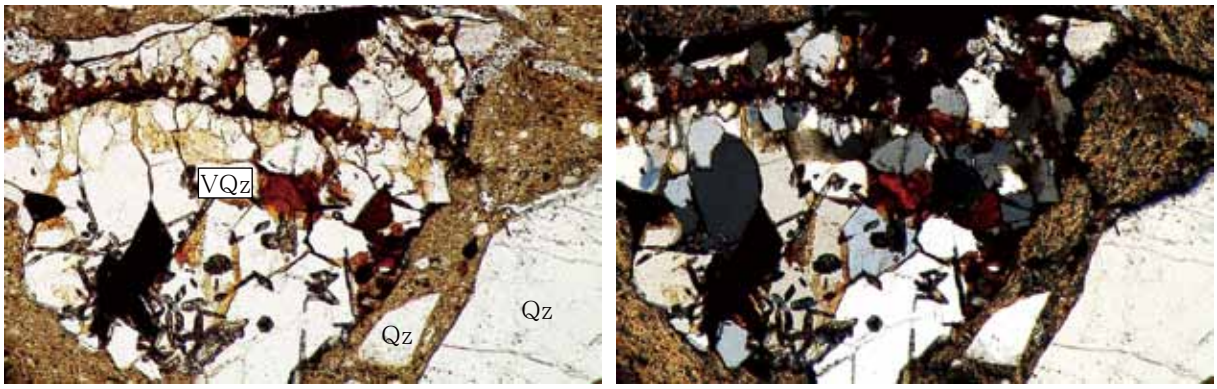


1.試料番号1(2013026-906 縄文土器 5区-0拡張区 SK1616 縄文中期末)

2.試料番号2(2013026-906 縄文土器 5区-0拡張区 SK1616 縄文中期末)



3.試料番号3(2013026-920 縄文土器 5区-5上段 SK1630 縄文中期末)

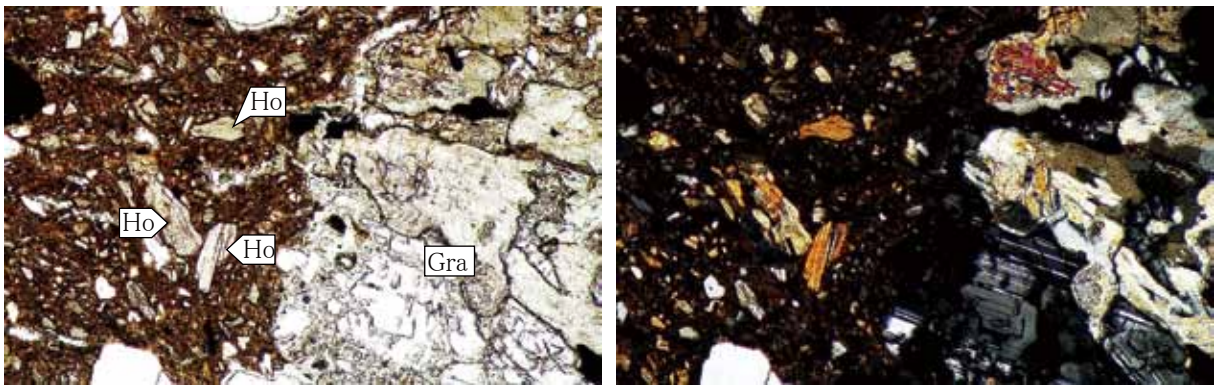


4.試料番号4(2013026-74 縄文土器 3区-1 SK501 縄文中期末)

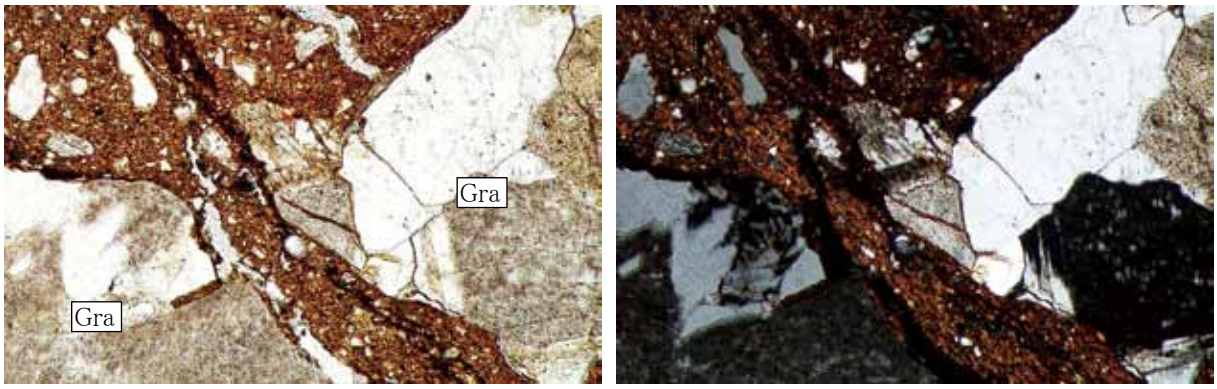
Qz:石英. Kf:カリ長石. Sh:頁岩. Ss:砂岩. Tf:凝灰岩.
Sl:粘板岩. VQz:脈石英.
Vg:火山ガラス.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

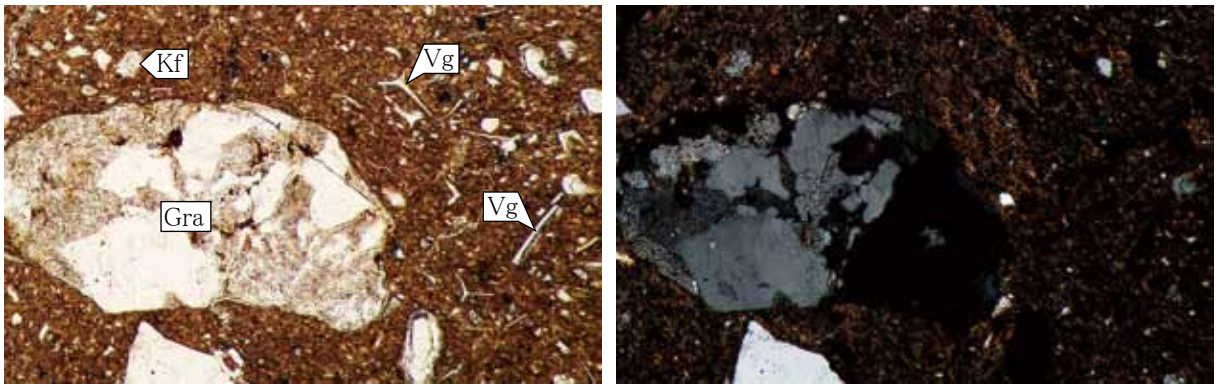
第31図 胎土薄片（1）



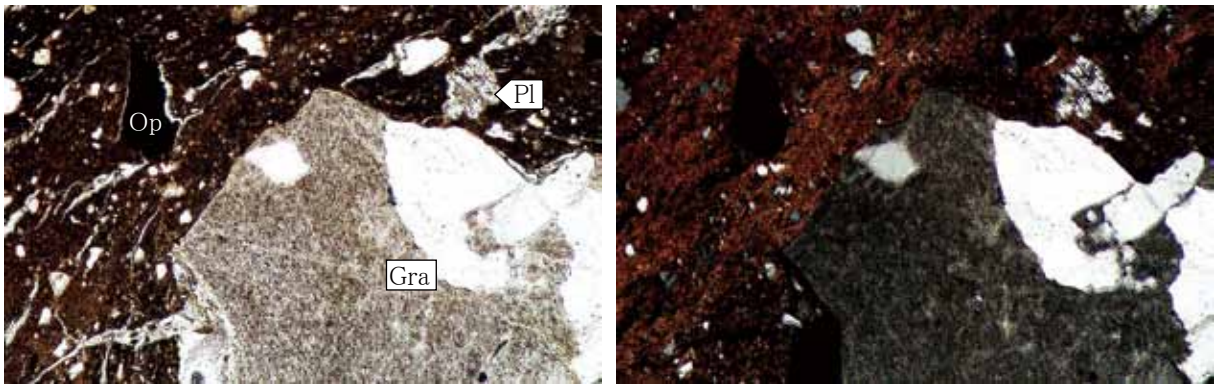
5．試料番号５(2013026-175　縄文土器　３区-7N　SK599　縄文晩期)



6．試料番号６(2013026-100　縄文土器　３区-３N　SK532　縄文)



7．試料番号７(2012136-303　縄文土器　C18　西南付近深掘　縄文中期末)

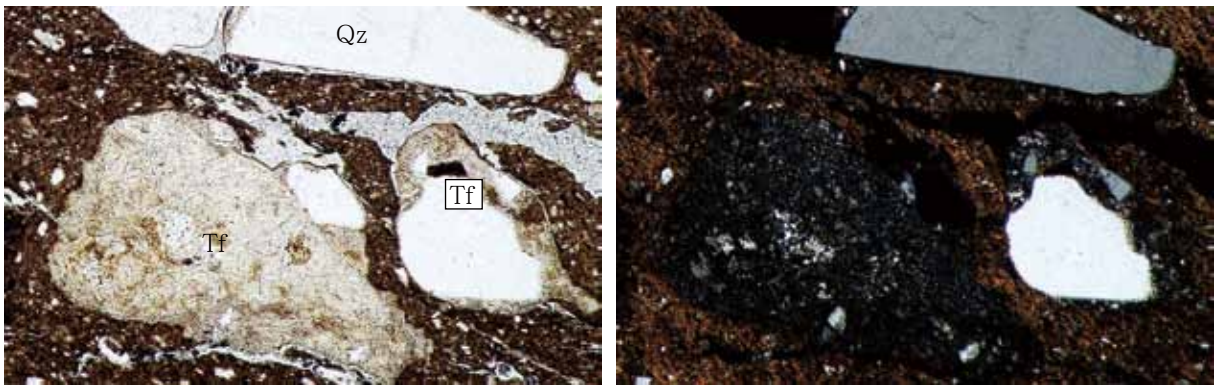


8．試料番号８(2012136-22　縄文土器　１-１(A-８)　SP166(SB03)　縄文後期前葉)

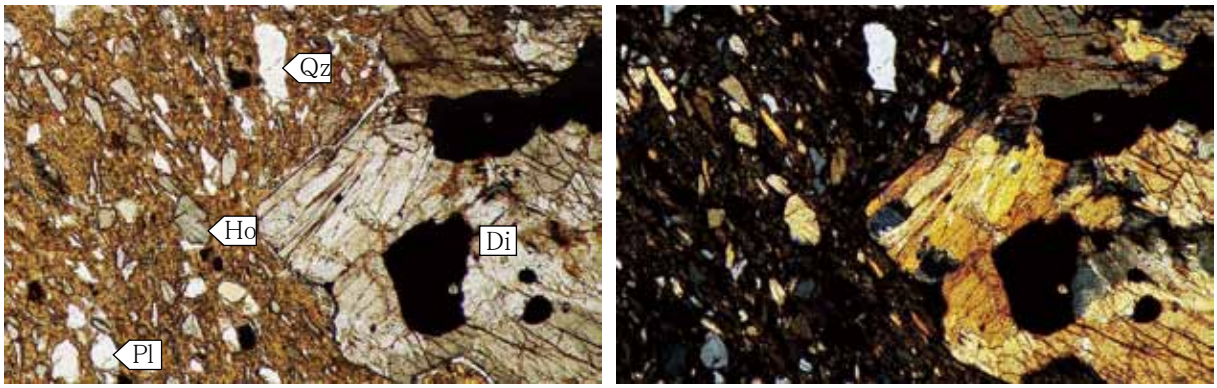
Kf:カリ長石．Pl:斜長石．Ho:角閃石．Op:不透明鉱物．Gra:花崗岩．Vg:火山ガラス．
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

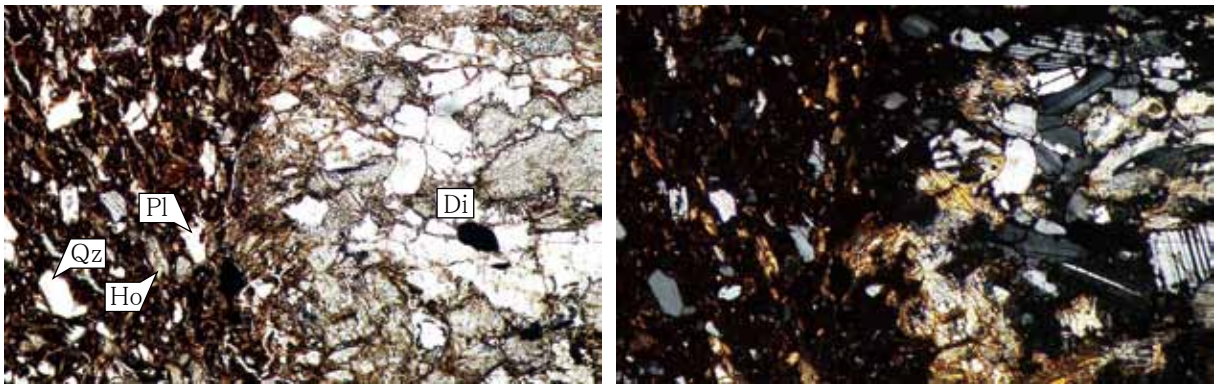
第32図　胎土薄片（２）



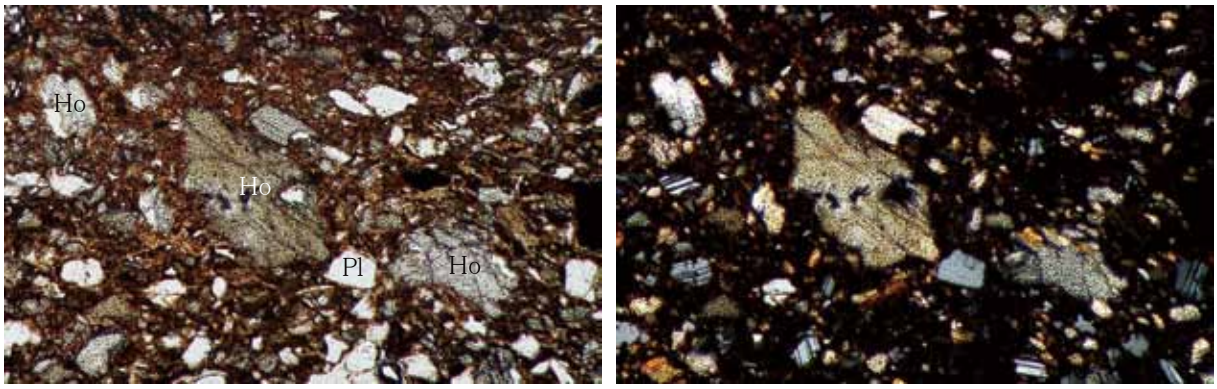
9.試料番号9(2012136-３　縄文土器　1-1区B6　SD05　縄文晩期)



10.試料番号10(2013026-51　縄文土器　３区-7N　縄文晩期)



11.試料番号11(報告番号23　2013026-７　縄文土器　深鉢　３区-２　縄文前期)

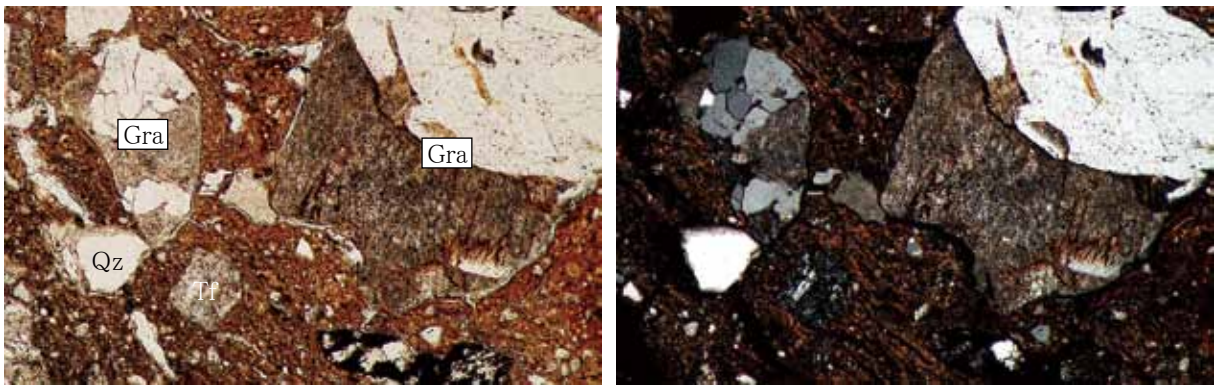


12.試料番号12(報告番号25　2013026-962　縄文土器　深鉢　５区-１　SK1662　縄文前期)

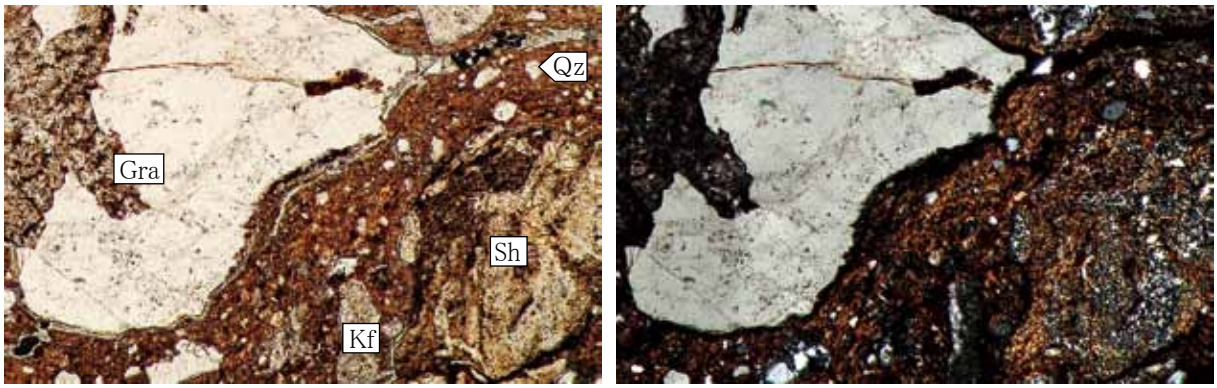
Qz:石英. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Tf:凝灰岩. Di:閃緑岩.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

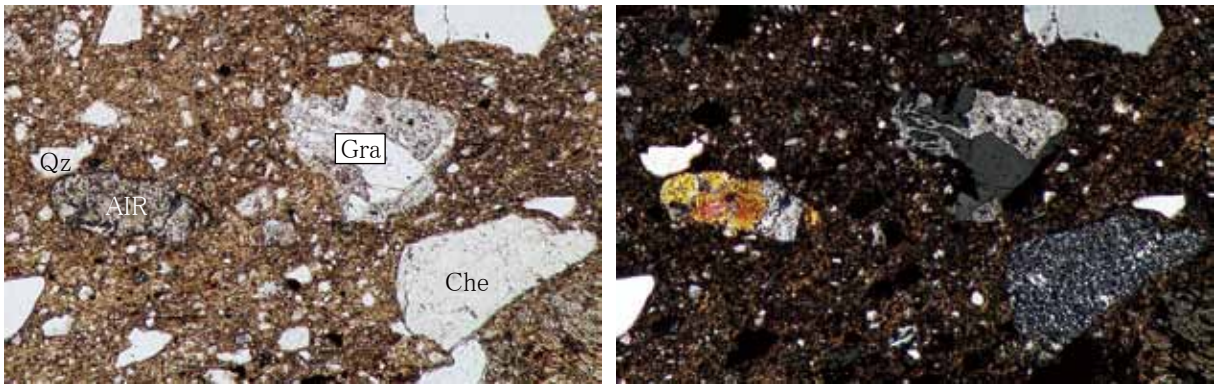
第33図　胎土薄片（３）



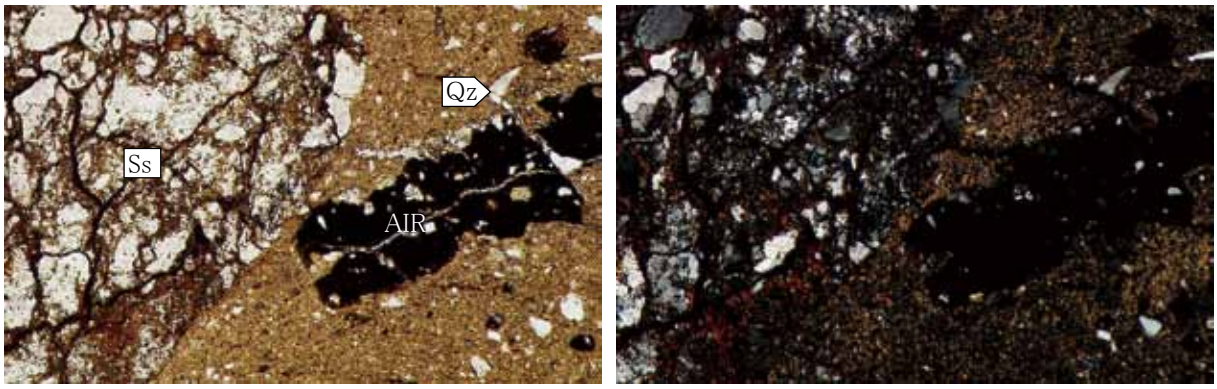
13. 試料番号13(報告番号18　2012136-16　縄文土器　深鉢　1－1区C2　SK80　縄文後期)



14. 試料番号14(報告番号19　2012136-16　縄文土器　深鉢　1－1区C2　SK80　縄文)



15. 試料番号15(報告番号12　2012136-20　縄文土器　深鉢　1－1区B4　SK111　縄文)



16. 試料番号16(報告番号22　2012136-60　縄文土器　深鉢　1－1区B7　SK163　縄文晩期)

Qz:石英. Kf:カリ長石. Che:チャート. Sh:頁岩. Ss:砂岩.
Tf:凝灰岩. Gra:花崗岩. AlR:変質岩.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

第34図　胎土薄片（4）

第３節　西畦野下ノ段・井戸遺跡における石材同定（肉眼鑑定）報告

１．同定方法

石材同定は、肉眼および双眼実体顕微鏡（20倍）を用い、石材の岩石組織観察を基本に行った。さらに、同定の信頼性を向上させるため比重を計測し、その結果も同定の参考とした。

２．同定結果

石材同定結果を第４表に示す。以下に、同定の根拠となった特徴を記載する。

第４表　石材同定結果表

報告番号	種別	器種	出土地区	出土遺構	層位	調査番号	岩石種名		重量	浮力	比重
S9	石器	磨製石斧	３区－３Ｎ	SK352		2013026	透閃石岩	被熱	292.5	100.3	2.92
S10	石器	石斧	３区－４		包含層	2103026	変閃緑斑岩	被熱	133.3	48.2	2.77
S11	石器	乳棒状石斧	３区－７Ｎ			2013026	緑色岩 （変斑糲岩）		162.7	53.1	3.06
S12	石製品	砥石	３区－４	SX540⑨		2013026	頁岩		1122.7	471.7	2.38
S14	石製品	台石	３区－４	SX540Ｊ		2013026	閃緑岩		1.64	0.59	2.78

１）透閃石岩

被熱による変色が認められるが、本来は淡帯緑白色～灰緑色と推定され、内部に曲がりくねった繊維状組織が認められる。磨かれた面に明瞭な光沢が認められることなどから、従来、蛇紋岩と判定されてきたが、比重および蛍光Ｘ線回折による分析から、透閃石（トレモライト）および緑閃石（アクチノライト）の集合岩である透閃石岩であることが明らかとなっている。透閃石岩の比重は2.85 ～ 3.00の範囲に分布する。

２）変閃緑斑岩

比較的大きな結晶の斑晶と、小さな結晶からなる石基から構成されている。石基部分も長柱状の結晶から構成されることから半深成岩であり、比重が2.77であることから閃緑斑岩と判定した。一個所あるガジリ部分では全体に緑色を帯びていることから、変質もしくは変成を受けた岩石と推定され、変閃緑斑岩と判断した。

３）緑色岩（変斑糲岩）

等粒状で粗粒の角閃石（暗緑色）および斜長石（明灰色）から構成され、角閃石が優勢で、比重が3.06であることから斑糲岩と判断される。全体に緑色を帯び、変成を受けていると判断できることから、大きな分類では緑色岩、細分された名称では変斑糲岩と判定した。

４）頁岩

極めて細粒の粒子から構成され、肉眼では粒子を確認することはできない。薄く剥がれる筋が認められないため、頁岩と判定した。比重は2.38であり、砥石に使われる頁岩･粘板岩に多い値である。

５）閃緑岩

等粒状で粗粒の斜長石（明灰色）および角閃石（暗緑色）鉱物から構成され、深成岩と判断される。比重が2.78であることから、閃緑岩と判定した。

報告番号　S9　透閃石岩

報告番号　S10　変閃緑斑岩

報告番号　S11　緑色岩（変斑糲岩）

報告番号　S12　頁岩

報告番号　S14　閃緑岩

第 35 図　西畦野下ノ段・井戸遺跡の石材同定結果

第４節　西畦野下ノ段・井戸遺跡の花粉分析と寄生虫卵分析

森　将志（パレオ・ラボ）

１．はじめに

兵庫県川西市に所在する西畦野下ノ段・井戸遺跡において、花粉分析用と寄生虫卵分析用の試料が採取された。以下では、採取された試料について行った花粉分析と寄生虫卵分析の結果を示し、考察を行った。

２．試料と方法

分析試料は、４区－15のSB10南東の谷状落ちから採取された２点と、４区－20南のSX795から採取された２点の計４点である（第５表）。いずれも中世の堆積物と考えられている。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

第５表　分析試料一覧

試料No.	地区	遺構	時期	土層
1	4区-15	SB10南東の谷状落ち	中世	断面図⑤（10YR4/4褐色極細砂～細砂質シルト）
2				南壁 断面図⑥(10YR4/2灰黄褐色極細砂質シルト)
3	4区-20南	SX795		A（2.5Y5/3黄褐色極細砂～細砂）
4				B(2.5Y4/3オリーブ褐色シルト混じり細砂～中砂)

２－１．花粉分析

試料（湿重量約4～5g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え１時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは全面を検鏡し、その間に現れる花粉･胞子を全て数えた。また、単体標本(PLC.1665)を作製し、写真を第36図に載せた。

２－２．寄生虫卵分析

試料を計量し、花粉分析と同様の方法で処理を行った。処理後の残渣に適容量のグリセリンを加え、計量を行った。この残渣からプレパラートを作製し、プレパラート全面に渡り検鏡した。なお、試料１g中の寄生虫卵含有数は、次式で求める。

$X = BD/AC$

X：試料１g中の寄生虫卵含有数、A：分析に用いた試料の重量（g)、B：濃縮試料＋グリセリンの重量（g)、C：濃縮試料＋グリセリンのうち、封入に用いた重量（g)、D：プレパラート中の寄生虫卵数

また、単体標本（PLC.1666）を作製し、写真を第36図に載せた。

３．結果

３－１．花粉分析

今回の分析試料には花粉化石がほとんど含まれておらず、4試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉７、草本花粉６、形態分類のシダ植物胞子２の総計15である。これらの花粉・シダ植物胞子の一覧を第６表に示した。なお、花粉化石の産出量が極めて少ないため、花粉分布図は示していな

い。

試料No. 1ではシイノキ属－マテバシイ属が、試料No. 4ではイネ科が多く産出している。

３－２．寄生虫卵分析

計量し、検鏡した結果を表３に示す。検鏡の結果、試料No. 1と試料No. 2において不明寄生虫卵が検出された。検出量は、No. 1では試料１g当たり19個、No. 2では試料１g当たり32個である。

第６表　産出花粉胞子一覧表

学名	和名	試料No.1	試料No.2	試料No.3	試料No.4
樹木					
Tsuga	ツガ属	－	－	－	1
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	－	1	－	－
Sciadopitys	コウヤマキ属	1	－	－	－
Betula	カバノキ属	1	－	－	－
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	－	－	－	2
Castanea	クリ属	5	－	－	1
Castanopsis－Pasania	シイノキ属－マテバシイ属	24	10	1	7
草本					
Gramineae	イネ科	2	2	2	35
Cyperaceae	カヤツリグサ科	－	－	－	1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	－	－	－	2
Artemisia	ヨモギ属	2	－	1	2
Tubuliflorae	キク亜科	－	－	－	1
Liguliflorae	タンポポ亜科	1	－	1	1
シダ植物					
monolete type spore	単条溝胞子	5	2	22	17
trilete type spore	三条溝胞子	5	－	7	4
Arboreal pollen	樹木花粉	31	11	1	10
Nonarboreal pollen	草本花粉	5	2	4	42
Spores	シダ植物胞子	10	2	29	21
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	46	15	34	73

第７表　寄生虫卵分析に用いた試料の計量値と寄生虫卵数

	試料No.1	試料No.2	試料No.3	試料No.4
分析に用いた試料(g)	4.5643	5.8380	5.7628	5.8625
残渣＋グリセリン(g)	0.9267	0.8461	0.8172	0.8722
封入に用いた量(g)	0.0639	0.0368	0.0728	0.0660
不明寄生虫卵	6	8	0	0
（試料1g当たりの個数）	19	32	0	0

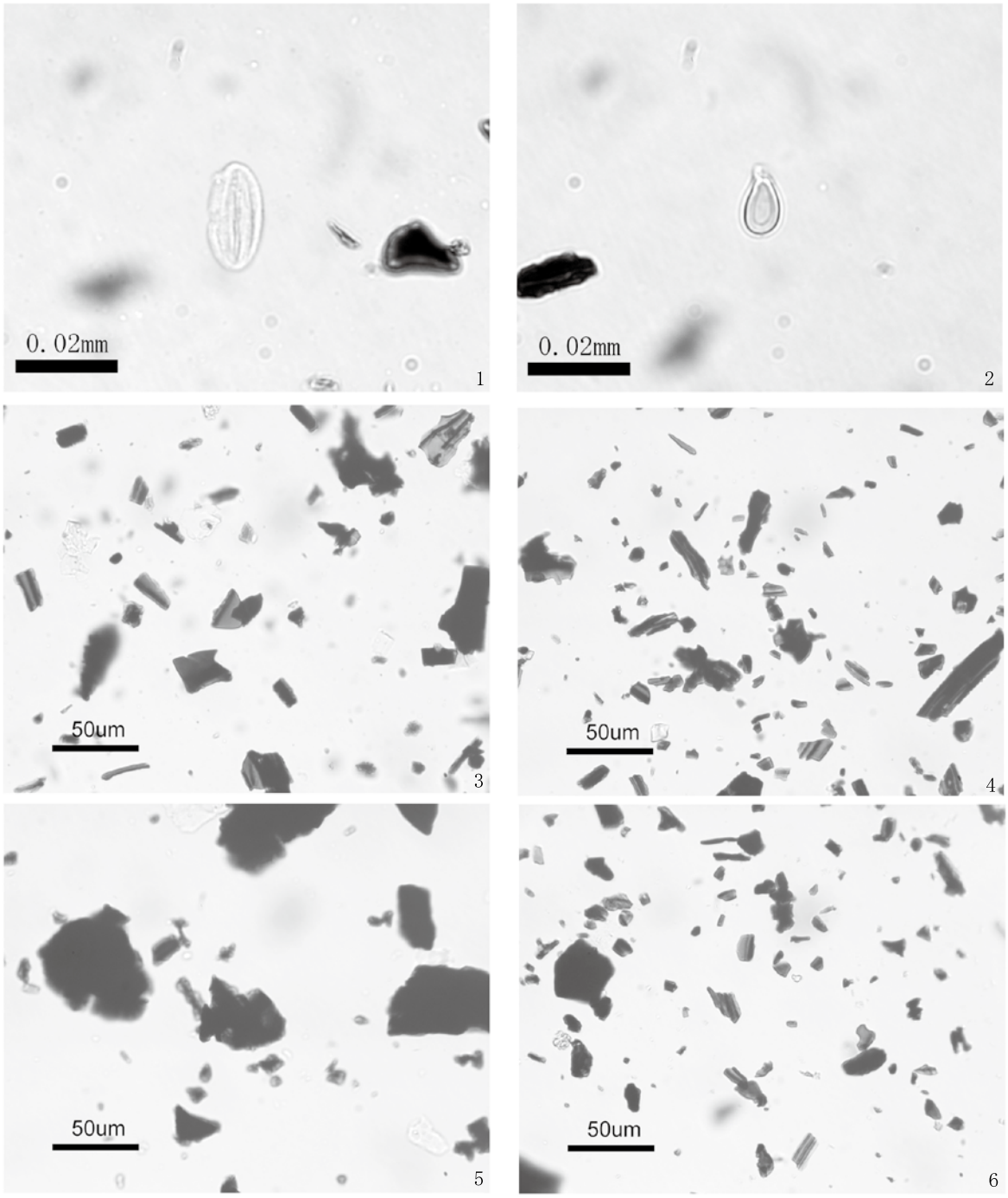
４．考察

いずれの試料も花粉化石はほとんど含まれていなかった。一般的に花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境に堆積すると紫外線や土壌バクテリアなどによって分解され消失してしまう。そのため、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では花粉化石が残りにくい。試料採取地点周辺は建物群が存在し、集落が成立していたような場所である。こうした場所は日当たりが良好なうえ、空気と触れる機会の多い堆積環境であったと推測されるため、花粉化石の保存に適した場所ではなかったと思われる。そのような中でも、試料No. 1ではシイノキ属－マテバシイ属が多く産出しており、それ以外の試料においてもシイノキ属－マテバシイ属は産出が確認される。よって、遺跡周辺にはシイノキ属－マテバシイ属などの照葉樹林が広がっていた可能性が考えられる。また、試料No. 4ではイネ科の産出が多い。SX795周辺にはイネ科植物が生育していた可能性が考えられる。

寄生虫卵分析の結果では、試料No. 1と試料No. 2において不明寄生虫卵の産出が確認できた。試料No. 1と試料No. 2の採取場所は、谷状に窪んだ場所であり、寄生虫卵が集積しやすかったと思われる。今回産出した寄生虫卵は、正体が不明であるため、詳細については推測できないが、集落周辺は寄生虫に汚染された場所であった可能性がある。ちなみに、寄生虫卵はキチン質の卵殻をもち、湿乾を繰り返す環境や乾燥した環境で分解されると指摘されており（金原,2004）、堆積時に寄生虫卵が含まれていたとしても、花粉と同様に分解消失してしまっている可能性もある。

引用文献

金原正明（2004）寄生虫卵分析．安田喜憲編「環境考古学ハンドブック」：419-429，朝倉書店.



1. シイノキ属-マテバシイ属（PLC.1665）
2. 不明寄生虫卵（PLC.1666）
3. 試料№1
4. 試料№2
5. 試料№3
6. 試料№4

第36図　花粉化石・寄生虫卵・プレパラート写真

第５章　まとめ

第１節　遺構の形成

西畦野下ノ段・井戸遺跡では、縄文時代から中世に至る遺構が出土している。ただし、それらはいずれも同一検出面上で検出しており、層位的には形成時期の差を確認できていない。ここでは自然科学分析を元にしながら、当遺跡における遺構群の形成について概観したい。

（１）立地概要

当遺跡は、完新世段丘上に位置している。この段丘上には、一庫大路次川によってもたらされた砂礫によって形成される旧中州と、その後にさらに上面にシルト質の土砂が堆積する。この２つの堆積物からなる地表面に、縄文時代から中世の遺構が形成される。調査区西側では、北から上位の更新世段丘の裾部を巡るように流れる流路によって削られる。この流路の起源はいつまで遡れるかは不明であるが、小字の検討からは近世初頭には成立していたものと思われる。

（２）縄文時代

今回の調査で見つかったのは土坑のみであるが、近隣に集落が存在した可能性が高い。胎土分析結果からは、それらから出土した土器のうち、中期末～後期にかけてのものが西畦野周辺の土を原料とし、前期、晩期のもので生駒西麓産の土を原料としていることが明らかとなった。これらのことより、当該期には前期に初めて外部から縄文人が到来し、中期から後期にかけて定住し、さらに後期から晩期にかけて再度外部から到来したと考えられる。

（３）弥生～古墳時代

後期末までに数度の洪水に見舞われるため、活発な集落形成は行われない。ただし、前代と同様に、近隣で集落が営まれていたと考えられ、調査区でも土坑が形成される。後期末以後には一庫大路次川の流路が安定したためか、洪水はほとんど発生せず、調査区付近は安定した環境となる。そのために、後期から庄内期にかけては竪穴住居跡や土器廃棄土坑が形成され、定住が窺われる。また、出土状況がやや不明であるが、柱穴内から青銅鏡が１点出土している。当遺跡の付近では、弥生時代の墳墓は不明であるが、青銅鏡を持つ有力者が近隣に存在していた可能性が高い。

（４）平安～鎌倉時代

12世紀後半～ 13世紀前半に、当遺跡は最盛期を迎える。多数の掘立柱建物とそれに伴う屋敷墓と考えられる木棺墓や土壙墓、火葬跡が検出された。弥生時代以来、大きな洪水には見舞われておらず、花粉分析結果によると、遺跡周辺は比較的乾燥した環境であったと考えられる。また、そのような状況の中で、一部の落ち込み遺構では、寄生虫卵が確認できた。この遺構は、共に掘立柱建物の隅部に位置し、出土した遺物も瓦器椀や鍋など生活に伴う雑器が多いことから、恒常的に水を扱う水屋であったと考えられる。墓からは、短刀や青磁碗などが出土しており、これらの掘立柱建物の主が葬られたと思われる。

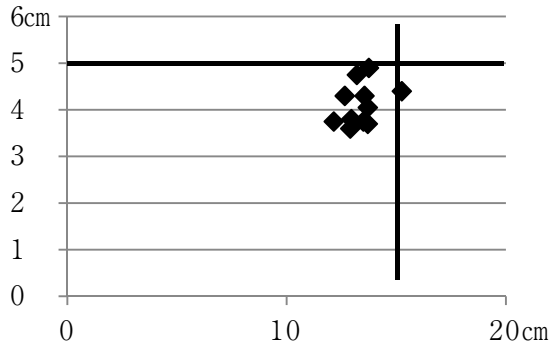
13世紀後半以後に洪水が発生し、調査区全体が洪水砂に覆われる。その後は大きな洪水は確認できないが、集落としては使用されず、水田として利用され、現在に至る。

第２節　瓦器椀の時期

瓦器と土師器について述べる。

報告書に掲載した土器は総数で86点である。大半が瓦器椀でわずかに小皿などが含まれる。

完存しており、口径・器高がわかるもの　は、154・171・191・224・245・246・247・256・257・260・307である。法量をみると口径が15cm以下、器高が５cm以下のものが大半を占める。見込みの暗文は、154、247が鋸歯状、224・246が渦巻き状、257・307で平行線状を呈する。橋本久和氏の瓦器椀編年（橋本2009）によれば、上述のような法量分布を持つものは、Ⅲ期（12世紀後半）以後とされる。さらに、取り上げた瓦器椀の見込みの暗文からは、帰属時期がⅢ- ２期～３期に絞り込むことができる。また、当遺跡の土師器皿は、バリエーションはあるものの、主体をなすものは口縁部外面が直線的に立ち上がり、面取りを施しているJタイプであり、12世紀後半から13世紀頃の所産と位置付けられ（中世土器研究会1995）、瓦器椀の年代観と大きく矛盾しない。



第 37 図　瓦器椀法量分布（Y：器高　X: 口径）

第３節　中世の掘立柱建物

（１）構造

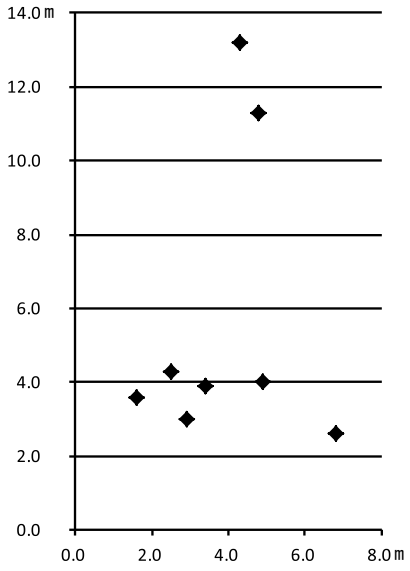
掘立柱建物は25棟を検出している。このうち、側柱と考えられるものが８棟、総柱と考えられるものが17棟である。面積は最小のもので６㎡、最大のもので116㎡と広狭の幅は大きい。

柱構造が側柱となるものは、SB01、02、09、11、13、14、16、21である。規模は、柱間で１～２間×２～３間が基本となるが、２間×５間以上の大型のものもある。床面積は①10㎡以下が２棟（SB09、11）、②10～20㎡が５棟（SB01、02、14、16）③20㎡以上が２棟（SB13、21）となる。①は調査区西側に位置し、他のものと比べ棟軸方位が異なり、西へ大きく振っている。②は調査区中央部分に位置する。棟軸方向はいずれも西へ０～７度傾いている。③は調査区中央部の東西に位置し、棟軸方向は真北である。東西方向に長く、床面は土間状を呈する。SB13の柱穴からは10世紀末～11世紀初めの須恵器が出土している。

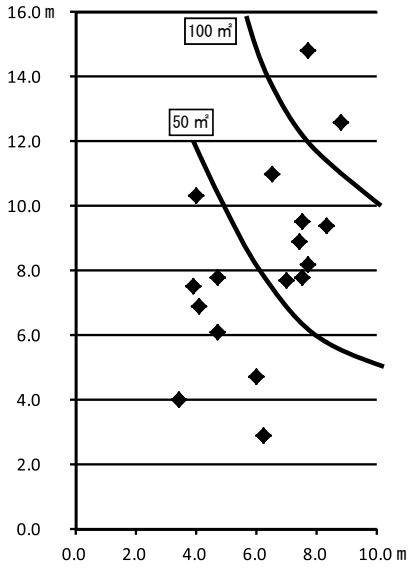
柱構造が総柱となるものは、SB03～08、10、12、15、18～20、22～25である。柱間でみると、１～４間×２～７間と多様である。床面積では、①50㎡以下、②50～100㎡、③100㎡以上の３つに分けられる。①は、SB03、06～08、12、22、24～25が該当する。２間×３～５間で、棟軸方向にはまとまりがない。②は、SB05、15、17～20、23が該当する。４間×４間が基本形となり、建物の東側に土間と考えられる２間×２間の柱のない空閑地がある。棟軸方向は、SB15のみが東へと傾ける以外は、

■掘立柱建物の属性一覧表

SB	種類	南北(m)	東西(m)	床面積(㎡)	棟軸方向	間数	立地	土間
1	側柱	4.9	4.0	20	N 7° W	２×３		
2	側柱	6.8	2.6	18	N 0° w	１×３	D	
3	総柱	4.0	10.3	41	N 0° W	２×４	D	
4	総柱	7.7	14.8	114	N 6° W	３×７	C	
5	総柱	7.4	8.9	66	N 12° W	４×４	C	○
6	総柱	3.9	7.5	29	N 8° W	２×４	C	
7	総柱	6.0	4.7	28	N 5° W	２×３	C	
8	総柱	3.4	4.0	14	N 0° W	２×２	C	
9	側柱	1.6	3.6+a	6	N 20° W	２×１＋a	C	
10	総柱	8.8	12.6	111	N 19° W	４×５	B	
11	側柱	2.9	3.0	9	N 16° W	２×２	B	
12	総柱	4.1	6.9	28	N 25° W	２×３	A	
13	側柱	4.3	13.2	57	N 0° W	２×６	C	
14	側柱	2.5	4.3	11	N 0° W	１×２	C	
15	総柱	7.0	7.7	54	N 12° E	３×３	C	
16	側柱	3.4	3.9	13	N 6° W	２×２	D	
17	総柱	7.5	9.5	71	N 8° W	４×４	D	○
18	総柱	8.3	9.4	78	N 0° E	４×４	D	○
19	総柱	7.7	8.2	63	N 5° E	４×４	D	○
20	総柱	7.5	7.8	59	N 4° E	４×４	D	○
21	側柱	4.8	11.3+a	54	N 0° W	２×５	E	
22	総柱	4.7+a	7.8	37	N 0° W	２×４	E	
23	総柱	6.5	11.0	72	N 0° W	１×３	E	
24	総柱	6.2	2.9	18	N 0° W	３×５	E	
25	総柱	4.7	6.1	29	N 4° W	２×２	E	



■側柱建物の面積



■総柱建物の面積

第 38 図　掘立柱建物の諸属性一覧図

真北から西へ数度傾いている。これらは構造からみて居住用の主屋と考えられる。③は、SB04、10である。前者が３間×７間で、後者が４間×５間と、当遺跡の掘立柱建物の中ではずば抜けて大きい。ただし、前者では柱穴の直径が他の掘立柱建物と比べて小さく、また後述する掘立柱建物の分布からも外れていることからも、主屋ではなく倉庫などの可能性が考えられる。一方、後者は複雑な構造で、3×4間に土間の部分と、半間に仕切る部分が輻輳する。北西部の土間では、床面の凹みに炭化物が広がっていたことや、柱穴の深度が他の掘立柱建物に比べて深く、また柱穴の直径も大きいことから、②の掘立柱建物と同一と評価しにくく、工房的な施設の可能性が指摘できる。

（２）立地

前節で構造と床面積から、掘立柱建物を概観した。本節ではさらに、立地から検討を行う。第３章でも述べたように、当遺跡の掘立柱建物はA ～ Eまでの５つの居住域を設定することができる。繰り返しになるが、それらはA：SB12、B：SB10 ～ 11、C：SB04 ～ 09・13 ～ 15、D：SB02・03・16 ～ 20、E：SB21 ～ 25である。これらの居住域にはいずれも土間を持つ総柱構造の掘立柱建物が位置し、周囲に側柱構造の掘立柱建物を随伴する。D群では火葬跡と考えられる石敷遺構があり、E群では木棺墓も居住域に伴う。また、C ～ E群では掘立柱建物の重複が見られ、特にC群では重複する掘立柱建物の棟軸方向が異なっていることからも、これらの居住域が一定期間存続していた可能性が高い。

それぞれの掘立柱建物の時期を限定するだけの遺物には恵まれていないが、柱穴から出土した少数の遺物を見る限り、大きな時間的懸隔がないと思われる。また、調査区全体で見ても、溝や塀などの区画施設や水源となる井戸がなく、個々の居住域の独立性が薄い。以上のことからは、これらの５つの居住域が、ほぼ同一時期に、同一の建物構成で立ち並ぶ並立的な様相が想定できる。

この12世紀後半～ 13世紀前半における居住域の成立は、第１章第２節で見た文献史料の検討とも整合する。管見の限り、当遺跡周辺が文献史料に現れるのは13世紀であり、その内容は寺社への田畑の寄進である。寄進できる余剰の農地の存在は、当遺跡でみた住民による開発が進展していたことをうかがわせる。さらに、14世紀代になると「畝野」を氏に冠する領主が現れることや、畝野の田畑を三野（後の塩川氏）が横領することからも、当遺跡周辺が一定の生産力を持つ農業生産地となっていたことがわかる。このように、当遺跡での掘立柱建物の成立は、東谷盆地における中世の発展を示すものであり、地域の歴史にとって一つの大きな起点となったと評価することができる。

第８表　遺物観察表

報告番号	種　別	器　種	法　量（cm）				残　存			備　考	出土遺構
			口径	器高	底径	腹径他	口縁	底	他		
1	縄文（中期）	深鉢	—	(7.0)	—				頸～体部破片	北白川Ｃ式深鉢Ａ類 矢羽根状刺突・キザミ＋縄文	SK1616
2	縄文	深鉢	—	(4.45)	—				体部 破片	北白川Ｃ式 深鉢Ａ類	SK1616
3	縄文	深鉢	—	(3.1)	—				体部 破片	北白川Ｃ式 深鉢Ａ(4?) 類	SK1616
4	縄文	深鉢	—	(2.95)	—				体部 破片	北白川Ｃ式	SK1616
5	縄文	深鉢 （波頂部）	—	(4.6)	—		破片		体部 破片	北白川Ｃ式 深鉢Ｃ類（波頂部）	SK1616
6	縄文	深鉢	—	(5.5)	—				体部 破片	北白川Ｃ式 深鉢 A4 類	SK1616
7	縄文（中期）	浅鉢（Ａ類）	—	(5.85)	—				口縁 若干	北白川Ｃ式浅鉢Ａ類 縄文＋沈線	SK1616
8	縄文	浅鉢	—	(3.65)	—		破片			北白川Ｃ式 浅鉢	SK1616
9	縄文	深鉢	—	(5.1)	—				胴下部 破片	北白川Ｃ式 深鉢Ｄ類	SK1616
10	縄文	深鉢	—	(4.7)	—		破片			写真図版のみ	SK1616
11	縄文	深鉢							体部破片	写真図版のみ	SK1630
12	縄文	深鉢	—	(3.5)					体部破片	沈線文	SK111
13	縄文	鉢（底部）	—	(3.6)	(14.1)			1/7		無文	SK111
14	縄文（中期）	深鉢	—	(5.5)					口縁付近	北白川Ｃ式深鉢Ｃ類 縁帯文	SK501
15	縄文（中期）	深鉢	—	(4.2)					体部破片	連弧文	SK501
16	縄文	深鉢	—	(2.1)			若干			たて沈線	SK313
17	縄文	深鉢							体部破片	縄文＋沈線	SK337
18	縄文								体部破片		SK337
19	縄文								体部破片		SK337
20	縄文（後期）	深鉢	—	(7.1)	腹径 (14.2)				体部 1/8	縄文	SK80
21	縄文	深鉢	—	(5.7)					体部破片	北白川上層式 縄文	SK80
22	縄文	深鉢	(13.0)	(5.4)	—		1/9			刻目突帯文 角閃石	SK599
23	縄文	深鉢	—	(5.1)	—				体部破片		SK599
24	縄文（晩期）	深鉢	—	(4.8)	—				体部破片	線刻文？ 刻目突帯文	SK163
25	縄文（前期）	深鉢		(4.8)					口縁付近破片	羽島下層Ⅱ式 連続刺突文	
26	縄文（前期）	深鉢	—	(2.95)					体部破片	刻目突帯文？	SD02
27	縄文（前期）	深鉢	(16.6)	(4.1)	—		1/12			北白川下層Ⅱ式 Ｃ字状爪形式	SK1662
28	縄文	深鉢	—	(3.2)					体部破片	北白川Ｃ式 刺突＋沈線	—
29	縄文	深鉢	—	(2.9)					口縁 屈曲部	沈線＋刺突	—
30	縄文（晩期）	浅鉢	—	(3.1)	—		若干			突帯＋沈線	—
31	縄文	浅鉢	—	(3.55)			若干			蛇行沈線	—
32	縄文 （中期末）	深鉢	(33.2)	(6.5)			1/20			条痕？	—
33	縄文	深鉢	—	(4.55)	—				斜状口縁部 破片		—
34	縄文（中期）	深鉢	—	(5.0)	—		突起部			北白川Ｃ式 深鉢Ｃ類	—
35	縄文	深鉢	—	(3.8)	—				体部破片	沈線	SD01
36	縄文（後期）	深鉢	—	(3.6)					波頂部	波状口縁突起部	—
37	縄文	双耳壺？突起	—	(3.05)					把手部		SP166(SB01)
38	縄文	深鉢	—	(2.6)					体部破片		面精査
39	縄文	（底部）	—	(3.2)	(9.5)			1/10			SK532
40	縄文	鉢	—	(2.6)	—				体部破片	押し引き・刺突列	—
41	縄文	深鉢	—	(3.25)	—				体部破片	クシ描き沈線文	
42	縄文	深鉢	—	(3.8)	—				体部破片	刻目突帯文	SD597
43	縄文（晩期）	深鉢	—	(4.05)					体部破片	刻目突帯文	SD05
44	縄文（晩期）	深鉢	—	(6.2)					口縁下半突帯部分	刻目突帯文	北西隅の晩期の遺構 (SK599 とみられる）
45	縄文（晩期）	深鉢	—	(3.0)	—		若干				—
46	縄文	深鉢	—	(3.75)					体部破片	刻目突帯文	SD01 中央
47	縄文（晩期）	深鉢	—	(2.65)					体部破片	Ｄ字刺突 刻目突帯文	SD01
48	縄文（晩期）	深鉢	—	(3.2)					体部破片	突帯＋キザミ	—
49	縄文	底部	—	(3.1)	(6.35)			完存		角閃石多混	
50	弥生	鉢	(13.1)	7.1	(4.6)		1/5	1/3			—
51	弥生	高坏	(14.5)	(5.85)			3/4		坏体部 1/3		—
52	弥生	甕（底部）	—	(2.0)	4.9			3/4			SH1607
53	弥生	小型器台	(10.3)	(1.75)	—		小片				SK1609
54	弥生	甕	(12.7)	(8.9)	—		1/4 弱				SD01 ③
55	弥生	甕	(13.8)	(5.0)	—		1/4				SD01
56	弥生	甕	(14.5)	(4.6)	—		1/9				SD01 ④
57	弥生	高坏	(21.6)	(3.9)	—		1/4 強				SD01 ①
58	弥生	坏部？	(10.3)	(3.6)	—		1/6				SD01
59	弥生	高坏	—	(7.9)	14.6			脚端部 3/4	脚柱ほぼ完存		SD01 ① SD01
60	土師器	甕	(15.45)	(11.7)	—		1/4		体部 1/4		SD1602 SD01 ②・SD01 中央
61	布留式	甕	(16.6)	(3.0)			1/9				SD1602
62	布留式	甕	(15.75)	(3.3)			1/9				SD1602
63	布留式	甕	—	(2.6)			1/12				SD1602
64	布留式	甕	(12.85)	(2.05)			1/10				SD1602

報告番号	種　別	器　種	法　　量（cm）				残　　存			備　　考	出土遺構
			口径	器高	底径	腹径他	口縁	底	他		
65	布留式	甕	(18.35)	(2.85)			1/18				SD1602
66	布留式	甕（底部）	—	(2.7)	4.4			完存			SD1602
67	布留式	壺	(15.5)	(4.95)	—		1/18		頸部 1/3		SD1602
68	弥生	脚	—	(4.55)	(8.15)			1/2			SD1602
69	土製品	鳥形	縦 (6.1)	横 (10.1)	厚 5.35				頭・尾欠損		SD1602
70	土製品	土錘	長 5.5	幅 2.9	厚 2.3	重 40.8g			完形		SD1602
71	土師器	甕	(13.65)	(3.15)	—		1/10				SX518・セクション
72	弥生	壺	(13.15)	(3.75)	—		1/3				SX518・セクション
73	土製品	土錘	長 (5.7)	幅 3.0	厚 2.8	重 (44.4)g			一端 1/2		SX518
74	庄内式	脚付鉢	13.6	10.5	8.2				完形		SX1543
75	弥生（庄内式）	甕	16.0	22.4	(3.7)		4/5	2/3			SX540 Ⓐ・〃Ⓑ
76	土師器	甕	(15.2)	(16.1)	—	腹径 (22.5)	1/6		体部 1/4		SX540 ④ 〃⑤・〃⑥あぜ・〃Ⓑ
77	布留式	甕	(13.55)	(9.1)		腹径 (15.8)	1/10		体部 1/4		SX540 ⑤ SX540 ⑦⑧
78	弥生	甕	(16.4)	(4.0)	—		1/6				SX540 ⑥
79	弥生	甕	(17.6)	(8.3)		腹径 (18.05)	若干		体部 1/9		SX540 ⑤ SX540B
80	土師器	甕	(15.3)	(3.75)			1/5				SX540 ⑤
81	布留式	甕	(15.7)	(4.3)			1/5				SX540 ⑤ 〃⑥あぜ・〃⑦
82	布留式	甕	(17.7)	(4.1)			1/15				SX540 ⑥
83	布留式	壺	(13.6)	(7.75)	—		1/2 強				SX540 ⑤⑥あぜ SX540 ⑥・Ⓑ
84	弥生	長頸壺	(14.7)	(7.2)			1/3				SX540 ⑥・B
85	弥生	二重口縁 壺	19.0	(5.65)	—		3/4				SX540 Ⓑ
86	弥生	壺（底部）	—	(7.6)	(4.65)			4/5	体部 1/4		SX540 ⑤ 〃⑤⑥あぜ・〃⑧
87	弥生	甕（底部）	—	(4.8)	(4.35)			1/2	体部 1/3	底部木葉痕	SX540 ⑦
88	布留式	甕	—	(4.0)	4.1			完	体部 1/4		SX540 ⑤
89	布留式	鉢（底部）	—	(4.2)	(4.85)			3/4	体部 1/4		SX540 ①
90	弥生	台付鉢（底）	—	(2.8)	(3.1)			ほぼ完形			SX540B
91	弥生	甑（底部）	—	(2.6)	4.1			完			SX540B
92	布留式	甑	—	(2.7)	(3.65)			完	体部 1/2		SX540 ④
93	布留式	鉢	(9.9)	5.1	4.4		1/12	ほぼ完形			SX540 ⑦⑧
94	布留式	脚付鉢	7.8	(4.6)	—		5/6		坏部ほぼ完存		SX540 ⑤⑥ SX540 ⑥
95	弥生	高坏（脚）	—	(3.0)	—				脚柱完存		SX540 ⑥
96	布留式	高坏（脚）	—	(6.35)	(7.45)			1/2	脚柱完存		SX540 ⑤
97	布留式	壺 or 器台	(15.0)	(2.2)			1/9			波状文	SX540 ④
98	弥生	高坏	—	(3.55)		幅最大 (13.5)			坏部 1/9		SX540 ⑥
99	弥生	高坏（脚）	—	(9.4)	(13.0)			2/5	脚柱部完存		SX540B
100	弥生	高坏	—	(9.85)	脚端部 (12.6)			脚部 1/5	脚柱 1/2		SK618 SX540 ④
101	弥生	脚部	—	(5.95)	8.9				脚端部 1/2		SX540 Ⓑ
102	布留式	高坏（脚）	—	(5.8)	—				脚柱完 脚裾 1/3		SX540 SX540 ⑤⑥あぜ
103	布留式	器台（脚）	—	(4.65)	(10.0)				脚 1/4		SX540 ④
104	土製品	土錘	長 7.45	幅 2.85	厚 2.7	重 (34.3)g			完形	孔 0.3 ～ 0.9cm	SX540 Ⓑ
105	土製品	土錘	長 6.15	幅 2.9	厚 2.45	重 (53.7)g			ほぼ完形		SX540 ⑤
106	土製品	土錘	長 5.1	幅 3.3	厚 2.8	重 53.7g			完形		SX540 ⑤
107	土製品	土錘	長 4.1	幅 2.6	厚 2.45	重 29.7g			完形		SX540 ⑤⑥あぜ
108	土製品	土錘	長 6.4	幅 2.5	厚 2.05	重 (34.3)g			若干欠損		SX540 ⑦
109	土製品？	不明	長 2.9	幅 2.7	厚 (2.3)	重 (19.7)g			部品としては ほぼ完存？		SX540 ⑤
110	弥生	甕	15.7	15.85	5.65		1/2	1/1			SP41
111	土師器	甕	(15.3)	(2.95)	—		1/8				SK1534
112	弥生	鉢	(9.4)	(6.4)	3.2	腹径 (8.15)	若干	完存			SK1603
113	弥生	壺	—	(6.1)	5.1			完存			SK1605
114	弥生	壺（底部）	—	(2.7)	3.9			完存			上段南西の弥生土坑
115	弥生	甕	(15.3)	(2.2)	—		1/15				SK1662
116	弥生	台付鉢	(12.55)	(5.6)	—		坏部のみ 1/4				SK1662
117	弥生	手焙り	—	(7.1)		腹径 (15.25)			体部 1/6		SK1662
118	庄内？	甕	—	(8.8)		腹径 (22.0)			体部 1/9	穿孔あり	SP246
119	弥生	鉢 or 高坏	(16.8)	(4.4)	—		小片				—
120	弥生	壺	(14.6)	(4.9)	—		1/7				—
121	土製品	土錘	長 (6.2)	幅 2.9	厚 (2.4)	重 (40.8)g					—
122	須恵器	椀	(12.8)	(2.9)			1/6				SP170(SB01)
123	瓦器	椀	(15.2)	(3.7)	—		1/4				SP422(SB04)
124	土師器	小皿	(8.25)	1.6	—		1/7				S442(SB04)
125	土師器	小皿	(6.3)	0.85	(5.1)		1/4				SP829
126	土師器	小皿	(6.9)	1.15	—		1/6				SP883 (＝1043)
127	土師器	小皿	(7.8)	(1.1)	—		1/9				SP993
128	土師器	小皿	(7.75)	(1.45)			1/4				SP884
129	土師器	小皿	(8.2)	(1.2)	(6.85)		1/3				SP834
130	土師器	小皿	(8.75)	(1.6)			1/5				SP834
131	土師器	小皿	(11.5)	(2.45)			若干	1/6			SP829
132	須恵器	椀（底部）	—	(2.2)	—			1/4 弱			SP973＝902(SB05)
133	須恵器	鉢	—	(3.7)			若干				SP883(＝1043)
134	瓦器	椀	(10.8)	(2.75)			1/8				SP884
135	瓦器	椀	(10.35)	(3.6)			1/6				SP834
136	瓦器	椀	(14.5)	(2.9)			1/15				SP843

報告番号	種　別	器　種	法　　量（cm）				残　　存			備　　考	出土遺構
			口径	器高	底径	腹径他	口縁	底	他		
137	瓦器	椀	(13.2)	(4.7)	—		1/12				SP993
138	土師器	小皿	(8.8)	1.35	(7.1)		若干	1/4			SP749
139	瓦器	椀（底部）	—	(1.2)	(5.25)			1/8			SP836
140	瓦器	椀	(13.2)	(3.6)	—		1/3		体部 1/3		SP752
141	瓦器	椀	(13.9)	(3.1)	—		若干		体部 1/5		SP752
142	青磁	碗	(16.4)	(6.0)			1/4				SP817
143	土師器	椀	(12.75)	(3.0)	—		1/6				SP934
144	須恵器	坏Ａ？	(13.8)	(2.2)	—		若干				SP1033
145	土師器	小皿	(7.0)	(1.5)	(6.55)		1/4				SP1073
146	土師器	小皿	(8.35)	(1.35)			1/4				SP920
147	土師器	小皿	(10.2)	(2.1)	—		1/3				SP866
148	瓦器	椀	—	(2.55)	(4.45)			1/4			SP1077
149	瓦器	椀	(13.8)	(2.95)	—		1/9				SP804
150	瓦器	椀	(13.9)	3.9	(3.2)		若干	1/3			SP1085
151	瓦器	椀	(14.65)	(3.75)	—		1/16				SP1077
152	瓦器	椀	—	(2.95)	—		若干				SP864・(1063)
153	瓦器	椀	(13.1)	4.1	(4.5)		1/5	1/5			SP1075
154	瓦器	椀	12.15	3.75	5.05		3/4	完存			SP1075
155	丹波 or 備前	甕	(32.7)	(2.1)	—		1/10				SP1073・SP1103
156	須恵器	鉢	(30.3)	(8.2)			1/9				SP744(915)
157	黒色土器	椀	(14.75)	(3.65)			1/12				SP739
158	土師器	小皿	(8.7)	1.5	—		小片				SP1509
159	内黒土師器	碗（底部）	—	(1.2)	(8.2)			1/7			(SB17)SP1509
160	土師器	坏	(15.8)	(2.1)			小片				SP1697
161	土師器	小皿	(6.8)	1.1	(5.8)		小片	小片			SP1548
162	土師器	小皿	(7.6)	(1.6)			1/6	1/4			SP1566
163	土師器	小皿	(8.5)	1.4	(7.35)		1/4 弱	1/4 弱			SP1758
164	土師器	小皿	(8.2)	(1.3)	(6.9)		1/4				SP1598
165	青磁	碗	(16.9)	(4.8)			1/8				SP1764・SP1758
166	土師器？	甕	(19.85)	(4.6)			小片				SP1547
167	瓦質土器	突帯付壺	—	(1.9)	(3.3)			1/2			SP1553
168	土師器	小皿	(7.9)	1.6	(7.4)		1/5	1/5			SP1555
169	土師器	皿	(14.8)	(1.65)	—		小片				SP1555
170	土師器	皿	(13.7)	(2.7)			小片				SP1730
171	瓦器	椀	15.25	4.4	5.25		1/4	完存			SP1104
172	青磁	碗	(15.85)	(4.4)	—		1/9				SP1559
173	瓦器	椀	(11.8)	4.5	(6.7)		1/4 弱	1/5 弱			SP1656
174	土師器	小皿	8.6	1.85	—		1/4 弱	1/2 弱			SP1779
175	瓦器	椀	—	(2.3)	(4.5)			1/4			SP1645
176	瓦器	椀	(13.95)	3.95			1/8	1/4			SP1625
177	瓦器	椀	—	(2.6)	—		若干				SP1625
178	土師器	小皿	(8.4)	(1.2)	(6.8)		1/4				SP1643・1644
179	瓦質土器	羽釜	—	(3.0)			若干				SP1643・1644
180	土師器	小皿	(10.0)	1.2	(7.1)		1/7	1/7			SP557
181	土師器	甕	(21.35)	(2.5)			1/9				SP552
182	瓦器	小皿	(7.9)	(1.4)			1/3				SD759
183	土師器	小皿	(7.6)	(1.35)	(6.1)		1/9	1/4			SD769
184	土師器	小皿	(8.15)	(1.4)			1/7				SD822
185	須恵器	椀 or こね鉢	—	(1.4)	(8.0)			1/6			SD822
186	土師器	羽釜	(26.3)	(4.5)	—		1/12				SD822
187	土師器	椀	(13.45)	(2.4)			1/7 弱				SD857
188	瓦器	椀	(14.1)	(3.2)			1/5	1/5			SD857
189	土師器	甕	(23.6)	(5.4)			1/7				SD857
190	土師器	小皿	(8.2)	1.35			1/3 強	2/3			谷状落ち
191	瓦器	椀	12.65	4.3	4.6				完形		谷状落ち
192	瓦器	椀	(13.3)	3.7	(6.6)		1/9	1/4			谷状落ち
193	瓦器	椀	(15.65)	4.3	(6.95)		1/12	1/6			谷状落ち
194	瓦器	椀	(3.3)	4.35	5.95		3/4	2/3			谷状落ち北端
195	瓦器	椀	(13.8)	5.05	(6.5)		1/6	1/2			谷状落ち
196	瓦質土器	脚	長 (16.65)	幅 (3.85)					脚 1 本		谷状落ち
197	白磁	小皿	—	(2.85)	(5.9)			1/4 弱			谷状落ち
198	青磁	碗（底部）	—	(2.35)	5.6			完存			谷状落ち
199	青磁	碗	—	(1.9)	(6.4)			1/2			谷状落ち
200	土製品	土錘	長 (3.15)	幅 1.6		重 (6.1)g			両端若干欠	孔径 0.55cm	谷状落ち
201	土師器	羽釜	(16.7)	(4.45)			1/9				谷状落ち
202	瓦質土器	羽釜	(20.9)	(6.75)	—		小片				谷状落ち
203	瓦質土器	羽釜	(24.3)	(6.55)			小片				谷状落ち
204	土師器	甕	(21.9)	(12.7)			1/10		肩部 1/6		谷状落ち
205	須恵器	甕	(22.7)	(4.8)	—		1/6			花形スタンプ文 206 と同一個体	谷状落ち
206	須恵器	甕		(8.3)					体部破片	花形スタンプ文	谷状落ち
207	土師器	皿	(10.0)	(1.5)	—		1/13				SX795 南東隅
208	瓦器	椀	(13.2)	3.4	(4.0)		1/12	3/5			SX745
209	土師器	甕	(20.9)	(6.6)	—		1/4				SX745 周辺
210	土師器	羽釜	(16.8)	(4.2)	—	鍔径 (23.8)	1/4				SX745 中央の落ち込み （井戸？の上）
211	瓦質土器	羽釜 （三足器）	(20.4)	(8.4)			1/9		鍔部 1/7		SX745
212	土師質	羽口（ふいご）	(8.3)	(4.2)		重 (26.3)g	1/5			幅 (6.2)cm	SX745
213	須恵器	こね鉢	—	(4.7)	—		若干				SX0592
214	黒色土器	椀	—	(1.4)	6.05			完存		暗文	SK113
215	土師器	皿	(9.6)	1.4							SK261
216	黒色土器	椀	(16.3)	6.0	8.05		若干	完存			SK396
217	施釉陶器	天目碗	—	(4.15)	(5.6)			1/12			SK472 南西
218	須恵器	椀	(13.7)	4.95	(7.1)		1/6	1/4			SK908・SK738
219	土師器	小皿	(7.5)	1.5	(5.9)		1/4	1/3			SK760 ②

報告番号	種　別	器　種	法　　量（cm）				残　　存			備　　考	出土遺構
			口径	器高	底径	腹径他	口縁	底	他		
220	土師器	小皿	(8.4)	1.3	(6.9)		1/5	1/2 弱			SK760
221	土師器	小皿	8.15	1.45	—		4/5	ほぼ完形			SK760 ④
222	土師器	小皿	8.65	1.5	—				ほぼ完形		SK760 ⑥
223	土師器	小皿	8.6	1.4			2/3				SK760 ①
224	瓦器	椀	12.95	3.8	4.7		1/2	3/4			SK760 ⑤
225	瓦器	椀	(13.7)	3.85	(5.05)		1/2 弱	2/3			SK760 ②
226	瓦器	椀	(14.5)	(3.5)	—		1/5				SK763
227	土師器	鍋	(32.6)	(5.3)	—		小片				SK763
228	須恵器	椀	—	(2.3)	(7.3)			1/3			SK788
229	土師器	小皿	(10.65)	1.85	(9.8)		1/6	1/6			SK793
230	土師器	小皿	8.15	1.45	—		3/4				SK794
231	土師器	小皿	8.55	1.8					完形		SK794
232	土師器	小皿	(7.7)	1.25	(6.1)		1/12	1/4			SK813
233	土師器	小皿	(7.7)	1.35			1/3				SK814
234	土師器	坏	(12.8)	(2.8)			1/10				SK814
235	土師器	皿	(14.9)	2.1	—		1/12				SK814
236	土師器	小皿	(8.25)	1.85			2/5	2/3			SX1619
237	青磁	碗	15.75	6.85	6.0		若干欠損		ほぼ完形		SX1633
238	土師器	小皿	9.0	1.95			3/4	完存			SK60
239	土師器	羽釜	—	(6.9)	—	鍔径 (35.9)			鍔部 1/9		SX1501
240	土師器	鍋（三足器）	—	(11.1)					脚の付根部		SX1501
241	土師器	脚（三足）	—	(11.6)		厚 2.0			脚先端 1/2		SX1501
242	土師器	小皿	(7.8)	1.2	(5.95)		1/4	1/4			SX1501
243	瓦器	椀	(12.6)	(4.05)	—		1/3				SX1501
244	土師器	椀	12.6	3.0	7.15				ほぼ完形		SX1501
245	瓦器	椀	13.5	3.75	3.0				完形		SX1501
246	瓦器	椀	13.75	4.9	5.7		5/6	完存			SX1501
247	瓦器	椀	13.55	4.3	3.8				完形		SX1501
248	瓦器	椀	(13.1)	(4.4)	—		1/3				SX1501
249	土師器	皿	(14.7)	(2.65)	—		1/9				SX1501
250	須恵器	鉢	—	(2.6)	(9.5)			1/4			SX1501
251	土師器	小皿	(8.25)	(1.4)	(6.8)		1/6	1/6			SX1537
252	瓦器	椀	—	(1.3)	(4.4)			1/4			SX1537
253	瓦器	椀	(12.15)	(2.1)	—		1/12				SX1537
254	瓦器	椀	(14.25)	(3.0)	—		1/6				SX1538
255	土師器	塝	—	(2.65)	—		小片				SK828
256	瓦器	椀	13.7	4.05	5.9		1/2 強	3/4			SK853
257	瓦器	椀	13.7	3.7	3.75		3/5	完存			SK853
258	黒色土器	椀	14.5	4.9	5.5				完形		SK853
259	土師器	小皿	(8.4)	1.4	(7.35)		1/7	1/2			SK872
260	瓦器	椀	13.2	4.75	(5.6)		1/2	2/3			SK878
261	瓦器	椀	(13.5)	3.85	(4.65)		1/4	1/6			SK859
262	土師器	羽釜	—	(12.9)		最大 (40.0)			鍔部 1/9		SK859・(SK875)
263	瓦器	椀	(14.3)	(3.5)	—		1/5				SK1106
264	土師器	鍋	(40.7)	(5.25)	—		1/5				SK1106
265	須恵器	鉢	—	(2.2)	—		小片				SK1106
266	土師器	小皿	(7.4)	(1.05)	—		1/3				SK1558
267	瓦質土器	皿？	—	(0.95)	(5.75)			1/6			SK1558
268	瓦器	椀	—	(1.05)	(5.7)			1/5			SK1579
269	土師器	小皿	(8.8)	(2.15)			1/6				SH1614
270	黒色土器	椀	10.0	3.5	5.25		7/8	9/10			SD01
271	土師器	小皿	(8.6)	1.45	(6.2)		若干	1/9			SD1540
272	土師器	皿 or 坏	—	(1.8)	(7.5)			ほぼ完形			SP31
273	土師器	皿	(9.6)	(1.5)	—		1/9				SP115
274	黒色土器	椀	(11.05)	(3.1)			1/7				SP256
275	土師器	小皿	(7.75)	1.6			1/3	1/3			SP326
276	黒色土器	椀	(13.8)	(3.3)			1/6				SP394
277	黒色土器	椀	—	(1.35)	(6.4)			1/4			SP395
278	須恵器	椀	(15.0)	5.45	(7.4)		1/4	3/4			SP409
279	黒色土器	椀	—	(2.4)	(8.05)			1/4			SP409
280	黒色土器	椀	(14.8)	(3.0)	—		1/12				SP410
281	土師器	椀	(13.45)	(4.5)			1/6				SP409・P410 周辺
282	瓦器	小皿	(8.6)	1.7			1/3				SP743
283	黒色土器 or 瓦器	椀	—	(1.0)	(4.5)			1/2			SP802
284	土師器	羽釜	(24.4)	(3.7)			1/15				SP811
285	土師器	小皿	(8.0)	1.15			1/3	1/3			SP830
286	瓦器	小皿	(13.3)	(2.75)	—		1/9				SP830
287	土製品	土錘	長 3.8	幅 1.15	厚 1.0	重 4.5 g			完形		SP830
288	土製品	土錘	長 (2.05)	幅 1.2	厚 (1.1)	重 (2.6)g			1/2		SP830
289	土師器	小皿	(8.8)	(1.0)	(7.6)		1/4 弱				SP848
290	土師器	椀	—	(1.5)	(6.8)			1/9			SP850
291	瓦器	椀	(12.8)	3.85	(5.25)		若干	1/4			SP862
292	土師器	小皿	(7.9)	(1.5)	—		1/4				SP923-2
293	瓦器	椀	(12.35)	3.05	(4.0)		1/4 弱	1/4 弱			SP926
294	須恵器	壺	—	(7.4)					体部 1/9		SP932
295	瓦器	椀	(13.55)	3.75	(3.85)		2/5				SP969
296	須恵器 or 瓦質土器	甕	(26.2)	(7.2)	—		1/12				SP999
297	瓦器	椀	(12.2)	(3.2)	—		1/4				SP1008
298	土師器	甕	(33.4)	(10.7)		腹径 (35.25)	若干		頸部 1/9		SP1046
299	須恵器	坏 B（底部）	—	(1.25)	(9.5)			1/6			SP1071
300	瓦質土器	小皿	(8.55)	1.95			1/4	1/4			SP1738・1770
301	瓦器	椀	(12.6)	(2.95)			1/4				SP1571
302	土師器	鍋	(24.0)	(7.25)			1/9				SP1615
303	土師器	小皿	8.8	1.7			1/2	1/2			包含層・B1

報告番号	種　別	器　種	法　　量（cm）				残　　存			備　　考	出土遺構
			口径	器高	底径	腹径他	口縁	底	他		
304	青磁	碗	—	(2.7)	(5.15)			1/3			包含層・C2
305	緑釉陶器	小碗	(10.75)	(2.85)	—		1/8				包含層・D ～ E13
306	緑釉陶器	皿	(13.75)	(2.2)	—		1/8				包含層・D ～ E13
307	瓦器	椀	12.9	3.6	3.5		1/3	完存			包含層・D ～ E15
308	須恵器	椀（底部）	—	(2.1)	(7.5)			1/6			包含層・D ～ E16
309	須恵器	椀	(16.0)	(3.6)			1/7				包含層・D ～ E16
310	須恵器	椀（底部）	—	(1.25)	(5.5)			1/6			包含層・D ～ E16
311	灰釉陶器	皿	—	(1.65)	—		若干				包含層・D ～ E16
312	青磁	碗	(17.2)	(3.55)	—		1/8				包含層・D ～ E16
313	須恵器？	鍋 or 甕	(23.55)	(5.2)			1/9				包含層・D ～ E16
314	瓦質土器	羽釜（三足器）	(21.45)	(9.2)			1/5				包含層・D ～ E16
315	須恵器	椀	(12.8)	(3.95)	(6.6)		1/9	若干			包含層・C ～ E11
316	灰釉陶器	碗	—	(3.0)	(7.0)			1/2			包含層・C ～ E11
317	灰釉陶器	碗	—	(1.85)	7.95			1/2			包含層・C ～ E11
318	緑釉陶器	碗	(16.7)	(2.95)	—		1/9				包含層・C ～ E11
319	須恵器	椀（底部）	—	(1.7)	(6.6)			1/2			包含層・C ～ E11
320	須恵器	椀（底部）	—	(2.2)	7.2			4/5			包含層・C ～ E11
321	須恵器	蓋	(15.7)	(1.05)	—		若干				包含層・C ～ E11
322	須恵器	坏B	—	(1.45)	(11.95)			1/8			包含層・C ～ E11
323	須恵器	椀	—	(2.35)			若干				包含層・C ～ E11
324	灰釉陶器？	坏B	—	(1.75)	(9.7)			1/4 弱			包含層・C ～ E11
325	土師器	小皿	(7.55	(1.8)	4.5		若干欠損	完	ほぼ完形		包含層・C ～ E11
326	土師器	製塩土器	(10.6)	(5.3)	—		1/6				包含層・C ～ E11
327	備前	すり鉢	—	(3.55)	(12.15)			1/6			包含層・C ～ E11
328	無釉陶器	鍋 or 甕	(18.3)	(6.05)			1/10				包含層・C ～ E11
329	須恵器	坏B	—	(2.0)	(10.3)			1/7			包含層・E20
330	瓦器	椀	(11.25)	(3.85)	(4.6)		1/4	1/4			包含層・E20
331	緑釉陶器	碗	—	(2.8)	—				体部 1/12		包含層・E20
332	須恵器	捏ね鉢	(26.6)	(3.7)			1/12				包含層・E21
333	須恵器	捏ね鉢	(34.4)	(7.1)			1/12				包含層・E21
334	須恵器	捏ね鉢	—	(2.9)					片口部破片		包含層・E21
335	土製品	ふいご 羽口？	長 13.5	幅 10.45	厚 6.85	重（492.8）g					包含層・D22
336	須恵器	こね鉢	(31.8)	(5.1)	—		1/14				包含層・E23
337	瓦質土器	焜炉	—	(8.0)	—		若干				包含層・E23
338	瓦質土器	羽釜	(28.85)	(4.9)			若干		鍔部 1/18		包含層・C23
339	土師器	鍋	—	(6.9)					脚の付根		包含層・C23
340	須恵器	坏身	(10.6)	2.8	(5.05)		若干	1/4			包含層・D ～ E25
341	瓦質土器	鉢	(23.4)	(8.15)			1/4 弱				包含層・D ～ E25
342	土師器	坏	(19.85)	(5.2)	—		1/8				包含層・D ～ E14
343	土師器	壺	(18.0)	(6.15)	—		若干		頸部 1/4		包含層・D ～ E14
344	土師器	把手付 鍋か鉢	—	(10.6)	—	腹径 (22.55)			把手部 1 ヶ所		包含層・D ～ E14
345	土師器	甕	—	(3.5)	—		若干				包含層・C ～ E12
346	須恵器	甕	16.3	37.85	腹径 37.35		1/2	3/4			包含層・D ～ E24・25
347	その他	炉壁？								写真のみ	—

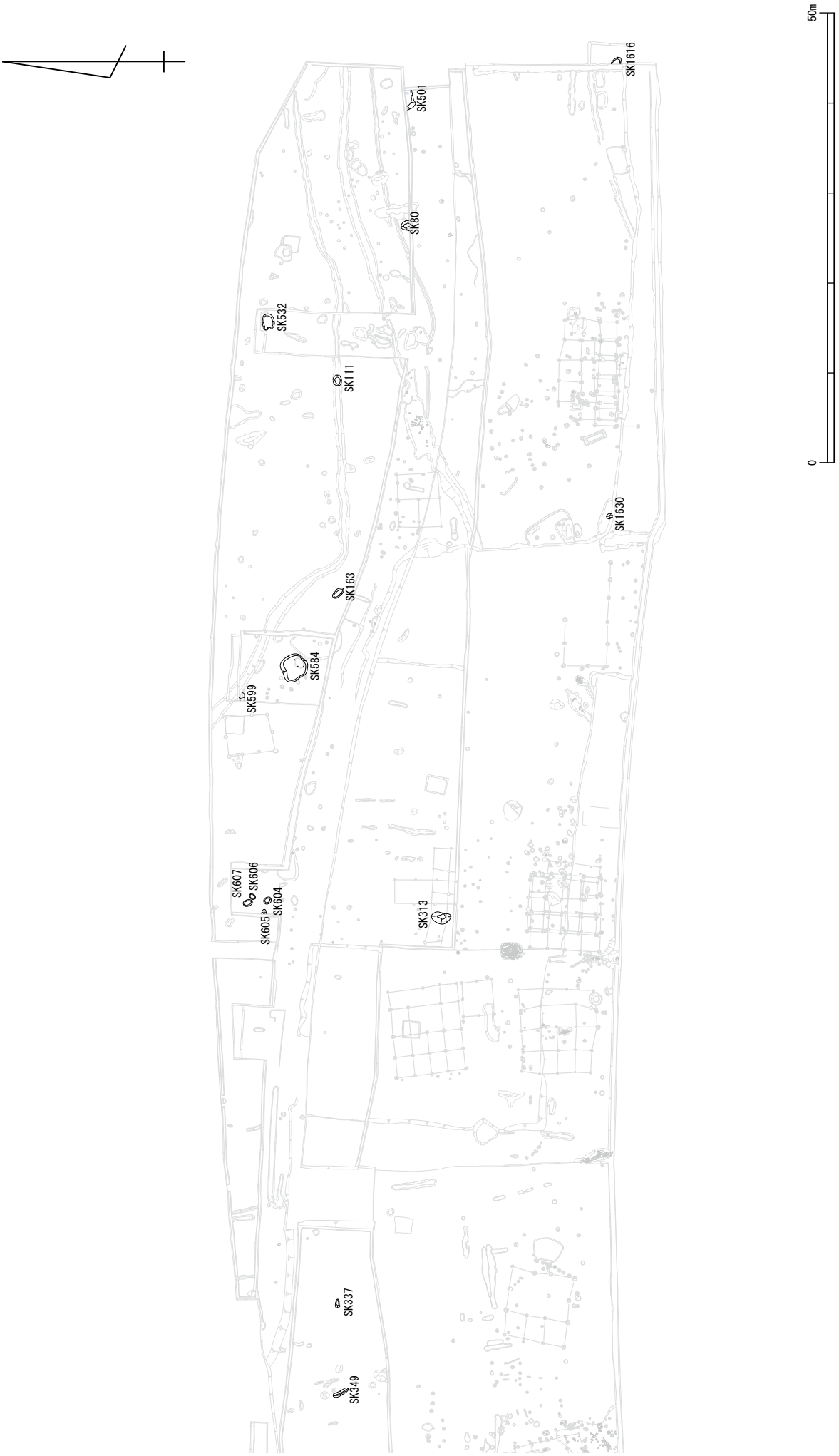
銅・鉄製品

報告番号	種　別	器　種	法　　量（cm）					備　　考	出土遺構
			長さ	幅	厚み	重量（g）	他		
M01	銅製品	鏡	4.0		紐 0.5 0.2	3.57	5/6		SP796
M02	鉄製品	刀子？	(4.8)	1.7	0.4	4.97			SD861
M03	鉄製品	くさび	6.35	1.6	1.15	17.32	完存？		SX540
M04	鉄製品	雁股鏃	(7.9)	(4.3)	0.8	18.74			SX745　中央落ち込み・南北セクション
M05	鉄製品	鉄滓	7.75	7.0	5.0	339.45			SX1592
M06	鉄製品	刀子	(4.6)	1.5	0.6	5.43			SX1633
M07	鉄製品	刀	(28.1)	2.6	1.3	174.90			SX1633
M08	鉄製品	釘	(4.7)	1.1	1.3	8.47			SK760
M09	鉄製品	鉄鍋	(3.95)	(4.45)	0.65	14.57			SK799
M10	鉄製品	農具？	(9.0)	(7.4)	1.5	140.30			SK908・738
M11	鉄製品	鉄鏃	(5.15)	(2.6)	0.4	8.20			SK1602
M12	鉄製品	鉄鏃	(3.2)	1.35	0.5	2.68			SK1802
M13	鉄製品	釘	7.05	0.7	0.6	5.69			SP847
M14	鉄製品	釘	(4.75)	1.1	0.85	6.31			SP847
M15	鉄製品	釘	8.4	1.0	0.5	4.84			SP1651
M16	鉄製品	椀形鉄滓	8.8	8.6	2.9	193.88			中世包含層
M17	鉄製品	釘	(4.45)	0.8	1.0	3.60			包含層・（南側溝面）
M18	鉄製品	輪状鉄製品	2.45	2.3	0.8	3.71			人力掘削
M19	鉄製品	鉄鍋？	(8.4)	(10.9)	0.5	91.70			人力掘削
M20	鉄製品	刀	(27.3)	2.6	0.8	108.20			中世包含層

石器・石製品

報告番号	種　別	器　種	法　量（cm）					備　　考	出土遺構
			長さ	幅	厚み	重量（g）	他		
S01	石器	石鏃	16.0	18.0	4.0	0.91	先端欠損		SK349
S02	石器	石鏃	(10.5)	11.6	2.5	0.1 以下	先端部欠損		SX540 ⑤
S03	石器	石鏃	(18.1)	14.5	3.5	0.7	先端部欠損		谷状落ち
S04	石器	石鏃	20.6	16.7	3.2	0.7	ほぼ完形		―
S05	石器	石鏃	24.3mm	15.6mm	5.5mm	1.6	先端基部左側若干欠？		―
S06	石器	石鏃	33.5	23.0	5.5	3.58	先端基部若干欠		SD01
S07	石器	石匙	39.7	48.3	4.8	8.3			―
S08	石器	剥片	102.7	71.3	22.0	158.4			―
S09	石器	磨製石斧	10.65	6.25	2.3	291.7	完形		SK532
S10	石器	石斧	6.8	4.75	2.7	132.9	柄側欠損		―
S11	石器	乳棒状石斧	6.4	5.0	4.2	162.2	折れ先端イキ		―
S12	石製品	砥石	173.0	65.5	50.0	11197	完形		SX540 ⑨
S13	石製品	台石	137.1	88.9	43.5	624.3		砂岩	SK337
S14	石製品	台石	4100	501.0	105.5	32400	完形		SX540 ⑦

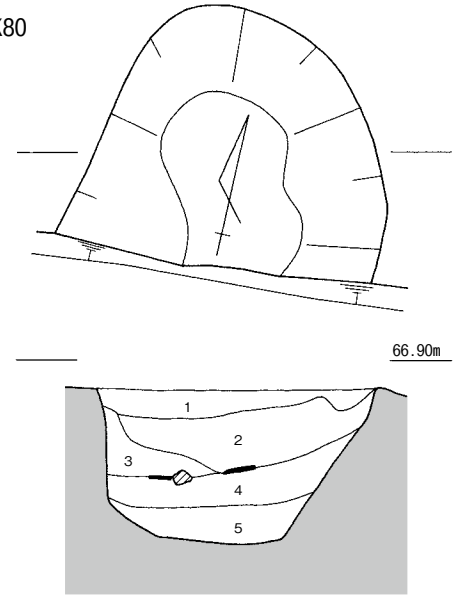
図　版


SK1616
SK501
SK80
SK532
SK111
SK1630
SK163
SK584
SK599
SK607
SK606
SK604
SK605
SK313
SK337
SK349
0
50m

縄文時代遺構平面図

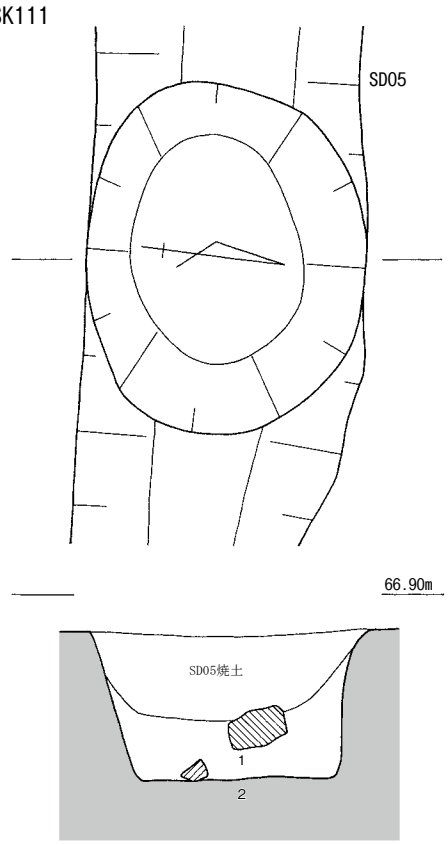
図版２

SK80



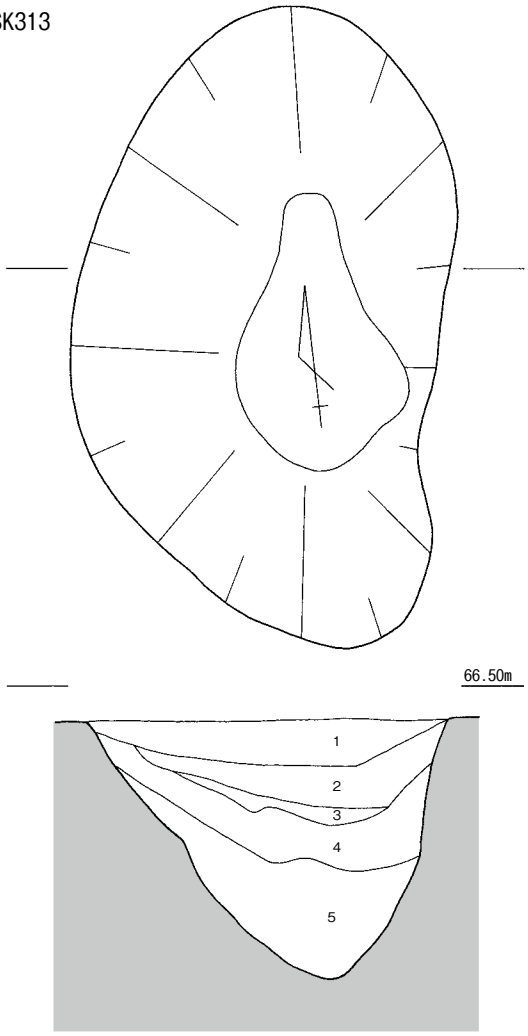
1. 10YR7/2　にぶい黄褐　中砂土
2. 10YR6/1　褐灰　細砂土
3. 10YR5/1　褐灰　細砂土
4. 2.5Y6/2　灰黄　粗砂土
5. 2.5Y4/2　暗灰黄　粗砂土

SK111



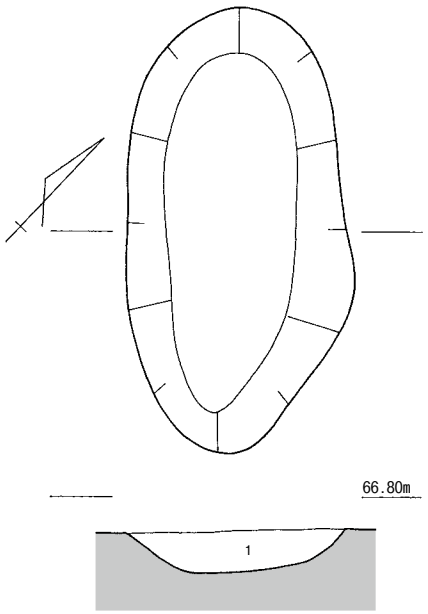
1. 2.5Y3/1　黒褐　シルト混じり細粒砂
2. 5Y5/1　灰　粗粒砂～極粗粒砂　地山

SK313

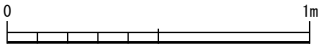


1. 2.5Y7/1　灰白　中粒砂(Mn入り)→他のSD・SK埋土に近い(自然堆積か？)
2. 2.5Y6/1　黄白　細粒砂(シルト質)
3. 2.5Y7/2　灰黄　細粒砂(シルト質、2.5Y7/1灰白のブロック少量混じる)
4. 2.5Y5/2　暗灰黄　細粒砂(シルト質、2.5Y8/6黄のブロック土混じる)
5. 2.5Y8/6　黄　細粒砂(シルト質、2.5Y5/2暗灰黄のブロック土混じる、土器混じり)

SK163

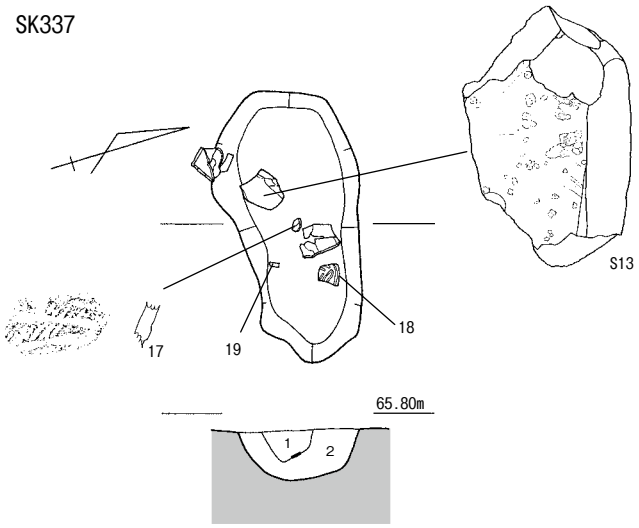


1. 10YR6/1　褐灰　細粒砂



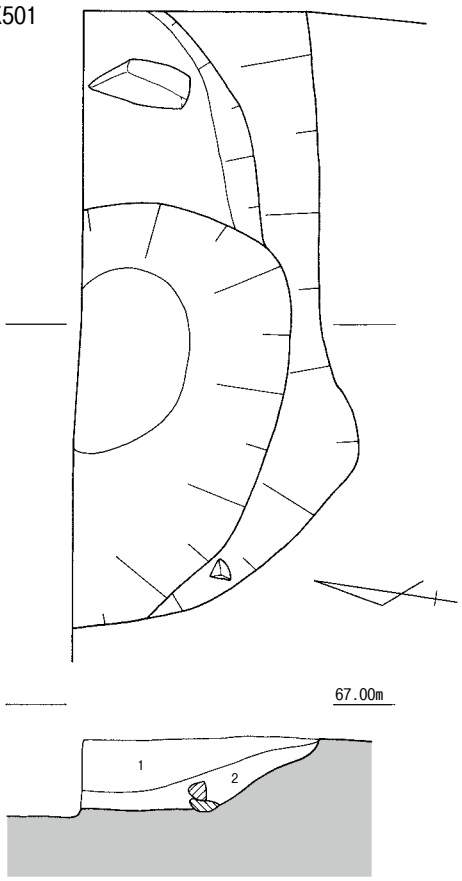
縄文時代前期～後期　土坑（1）（SK80・111・163・313）

SK337



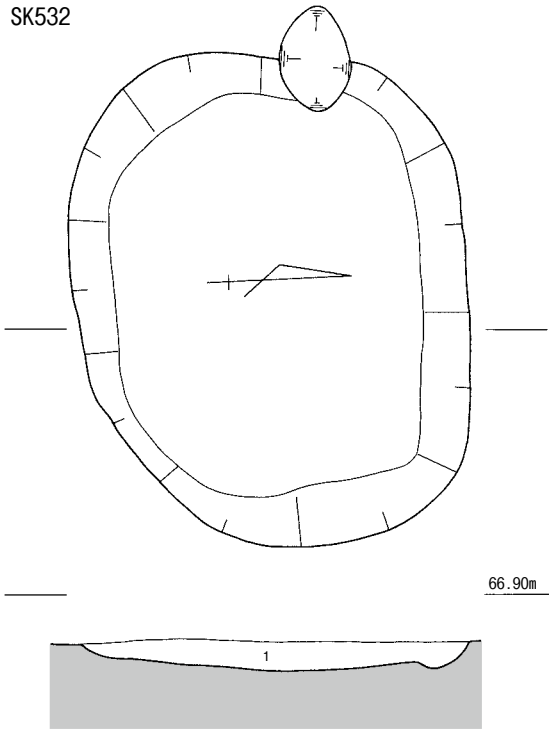
1. 10YR6/2　灰黄褐　細粒砂(炭混じり)
2. 2.5Y7/2　灰黄　細粒砂

SK501



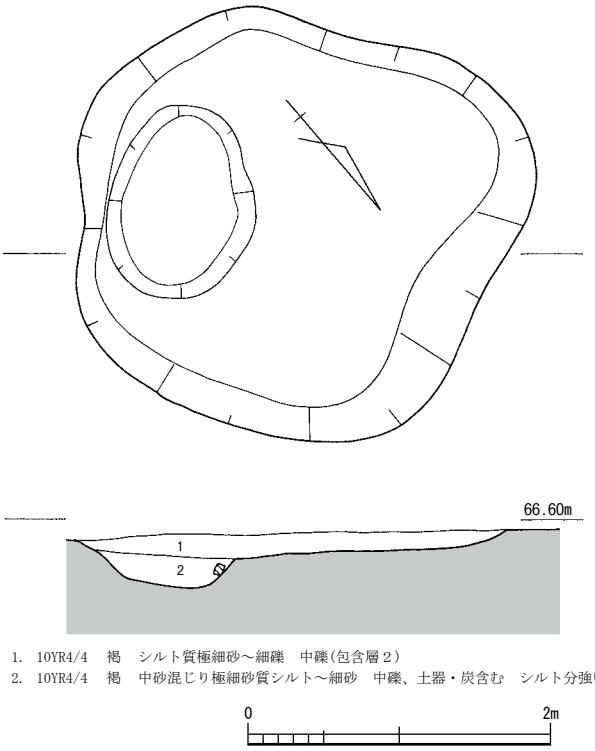
1. 10YR4/6　褐　粗砂混じり　中砂～細砂
2. 10YR4/3　にぶい黄褐　粗砂混じり　中砂～細砂　大礫含む

SK532



1. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質細砂　細礫～中礫含む　土器・石斧

SK584



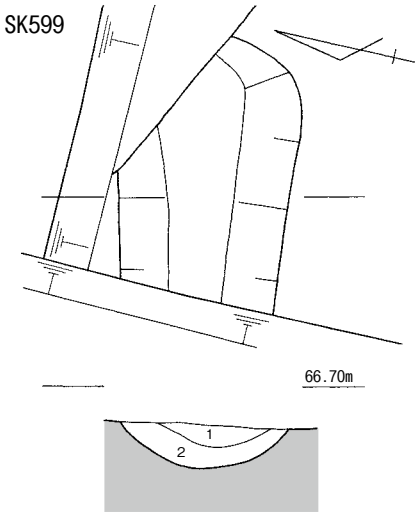
1. 10YR4/4　褐　シルト質極細砂～細礫　中礫(包含層２)
2. 10YR4/4　褐　中砂混じり極細砂質シルト～細砂　中礫、土器・炭含む　シルト分強い

0　1m

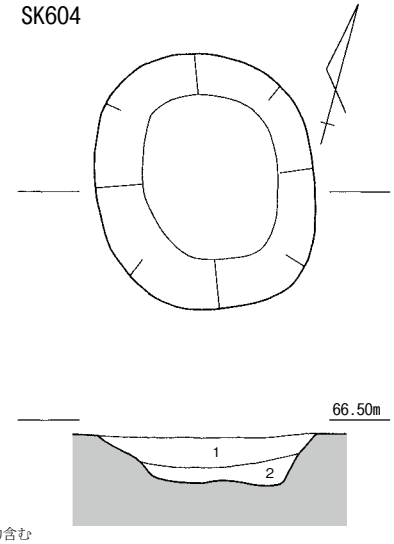
0　2m

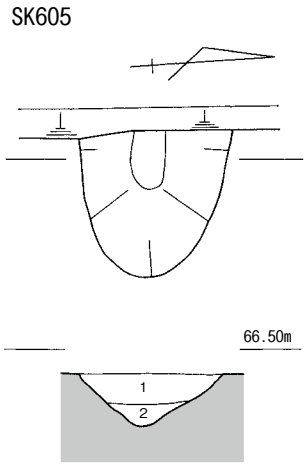
縄文時代前期～後期　土坑（2）（SK337・501・532・584）

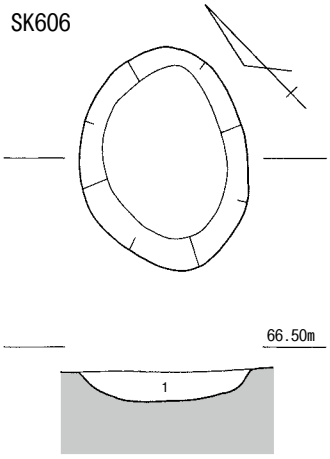
図版 4

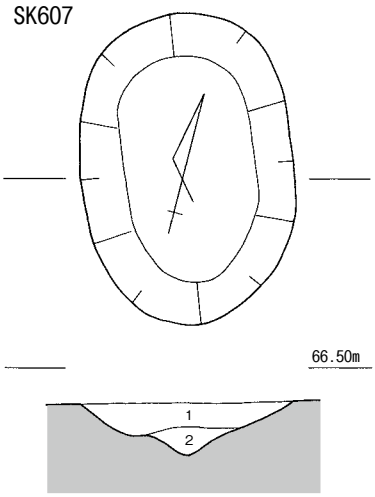


1. 10YR5/6　黄褐　　細礫(φ5mm)混じり　中砂～細砂　遺物含む
2. 10YR5/3　にぶい黄褐　細礫(φ1mm)混じり　細砂～極細砂

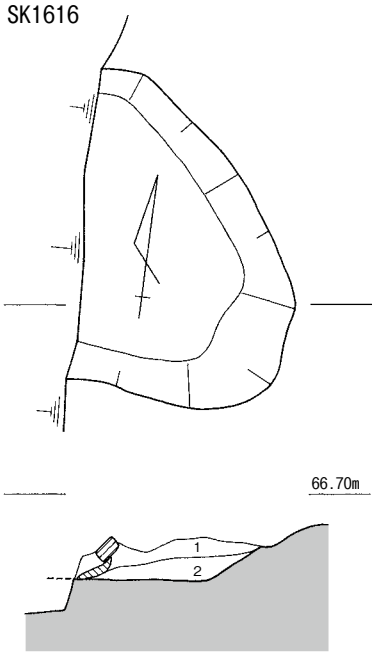




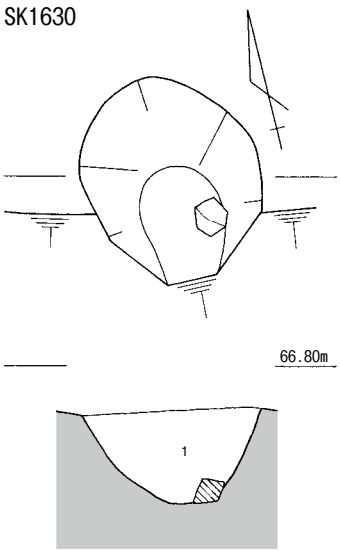




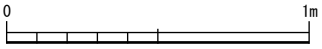
SK604～SK607　1. 10YR4/4　褐　　粗砂混じり　細砂～極細砂(Mn混じり)
2. 10YR4/3　にぶい黄褐　粗砂混じり　シルト質　細砂～極細砂



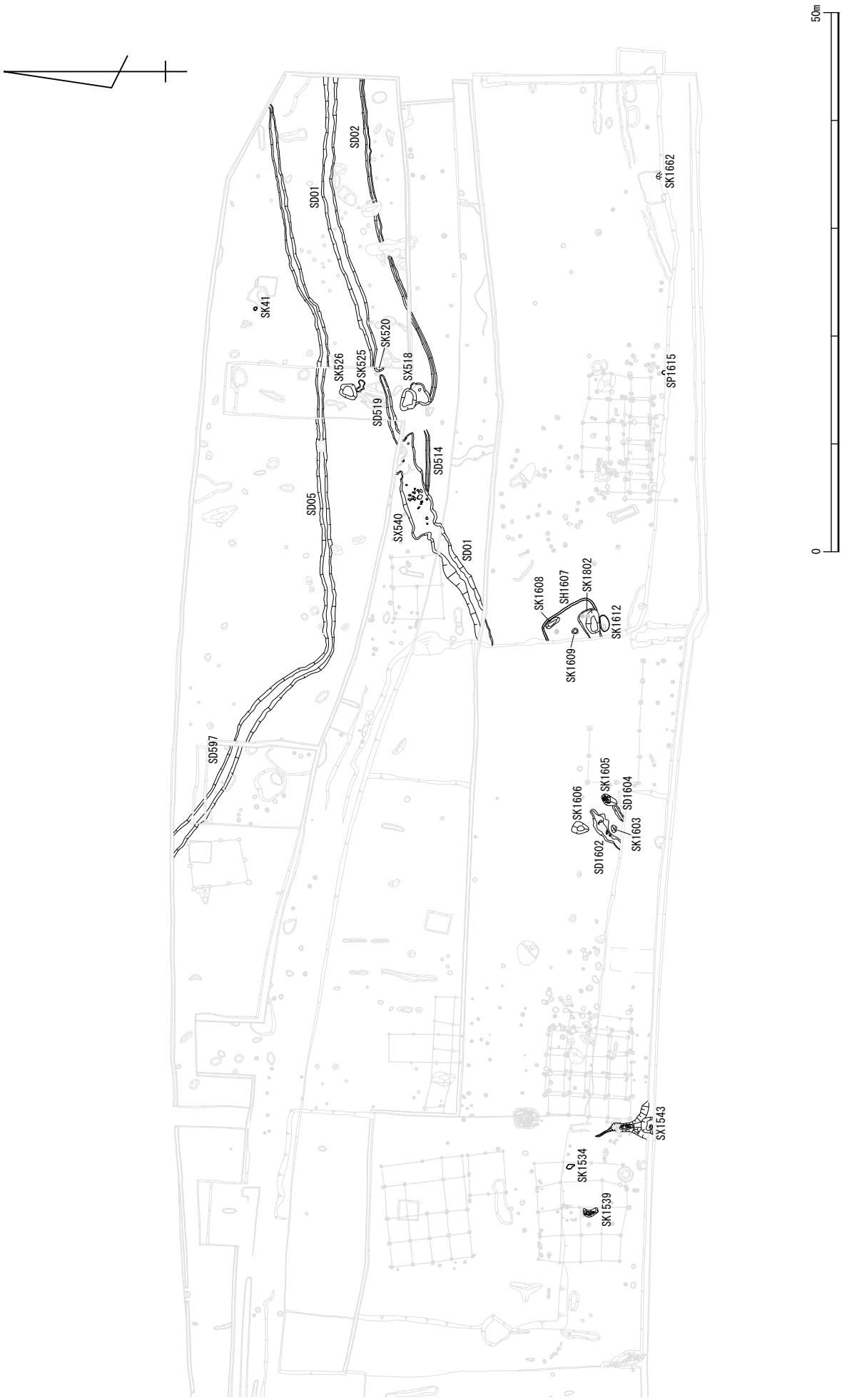
1. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト混じり
細砂～極細砂(細礫含む)
2. 10YR3/3　暗褐　　礫(φ2～5cm)混じり
細砂～中砂



1. 10YR5/3　にぶい黄褐　粗砂混じりシルト質細砂～極細砂
(小礫2～5cm含む黄褐色ベース層を
ブロック状に含む　土器含む)



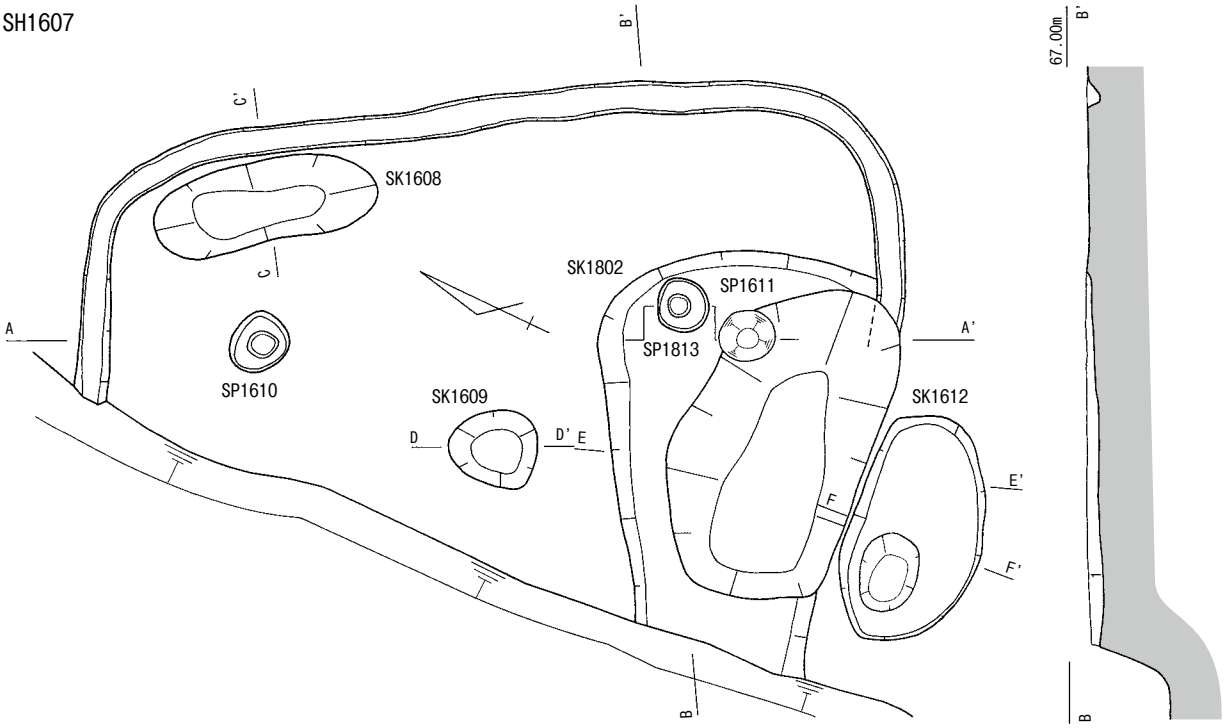
縄文時代前期～後期　土坑（3）（SK599・604 ～ 607・1616・1630）



弥生時代後期末～古墳時代初頭遺構平面図

図版 6

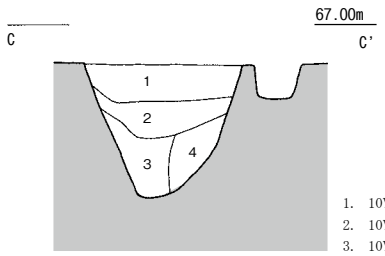
SH1607



1. 2.5Y5/3　黄褐　細礫～粗砂混じり　シルト質極細砂～細砂
2. 2.5Y4/6　オリーブ褐　細砂　極細砂～細礫含む　シルトブロック含む
3. 2.5Y4/3　オリーブ褐　細砂～極細砂　細礫～中礫含む
4. 2.5Y4/4　オリーブ褐　極細砂～細砂　極粗砂～中礫含む
5. 2.5Y5/3　黄褐　極細砂～細砂　極粗砂～中礫含む

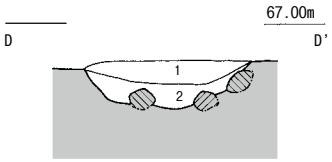
0　2m

SK1608



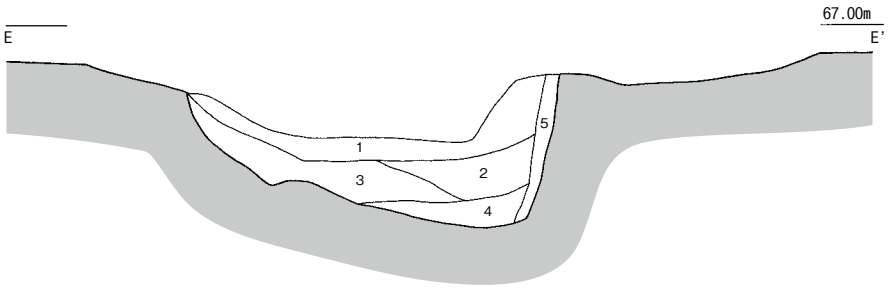
1. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質極細砂
2. 10YR3/3　暗褐　シルト質極細砂～細砂(細礫含む)
3. 10YR4/4　褐　粗砂混じり細砂～中砂
4. 10YR4/3　にぶい黄褐　粗砂混じり細砂～極細砂
(黄褐色シルトベースがブロック状に混じる)

SK1609

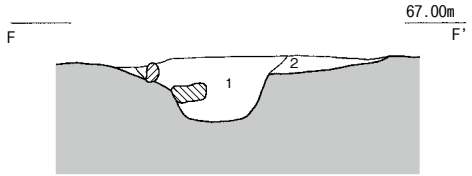


1. 10YR4/3　にぶい黄褐　細礫混じり　シルト質極細砂
2. 10YR3/3　暗褐　粗砂混じり　細砂～極細砂(土器・炭)

SK1802



SK1612

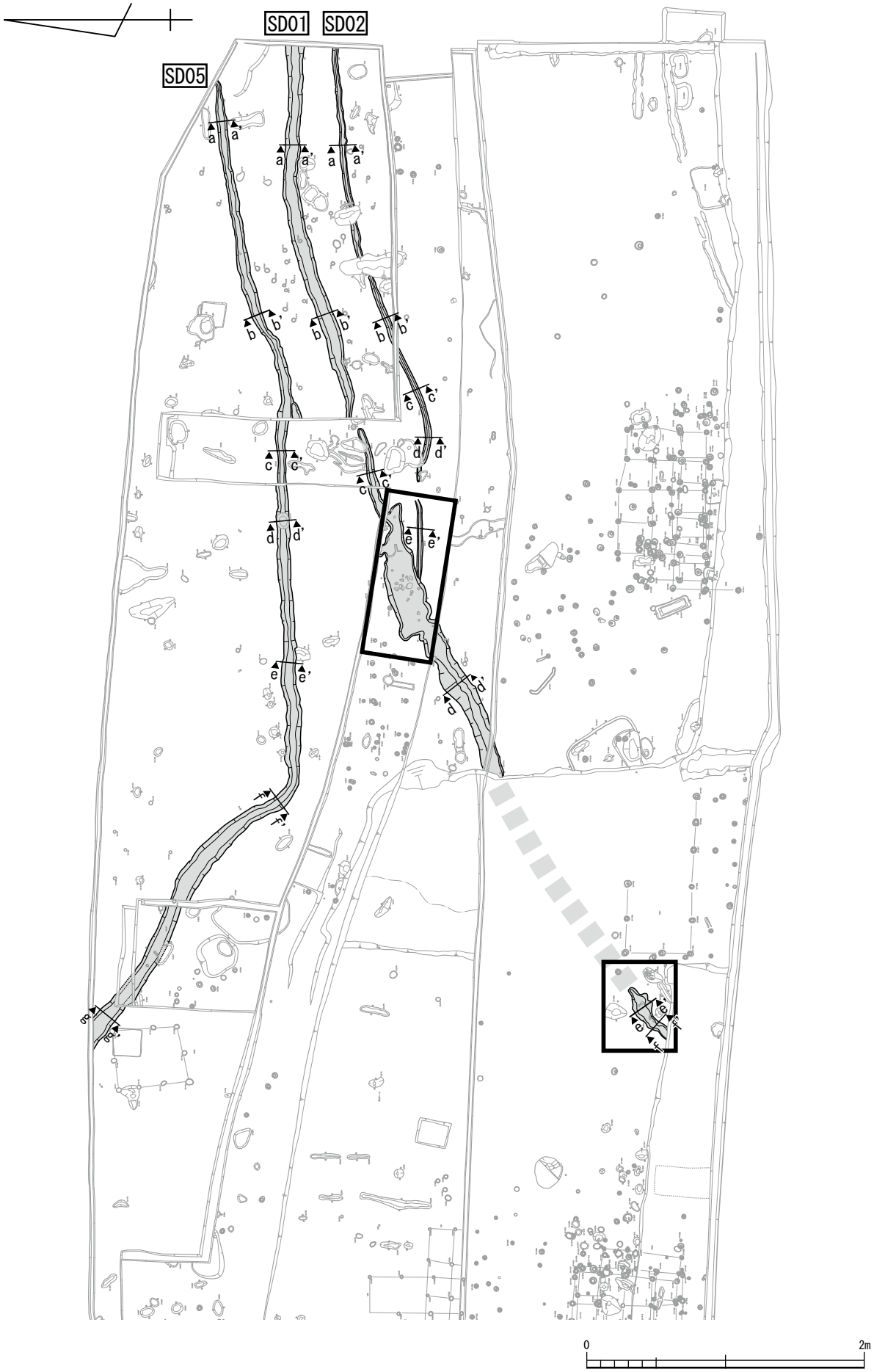


1. 10YR4/3　にぶい黄褐　粗砂混じり　礫層(φ2～10cm)
2. 10YR4/4　褐　細砂～中砂(小礫含む)(φ5cm程度)

1. 10YR4/4　褐　極粗砂混じりシルト質細砂　細礫～中礫含む　土器・炭
2. 10YR3/3　暗褐　極細砂～細砂質シルト　細礫～中礫含む、
黄褐色シルトブロック、鉄分のブロック含む
3. 10YR4/4　褐　ややシルト分強い
4. 2.5Y3/3　暗オリーブ褐　細礫～中砂混じりシルト　細礫～中礫含む
鉄分のブロック含む　土器・炭(2層と類似)
5. 10YR5/4　にぶい黄褐　細砂質シルト　細礫～中礫含む　黄褐色シルトブロック含む、
1・2・4層との境に鉄分沈着

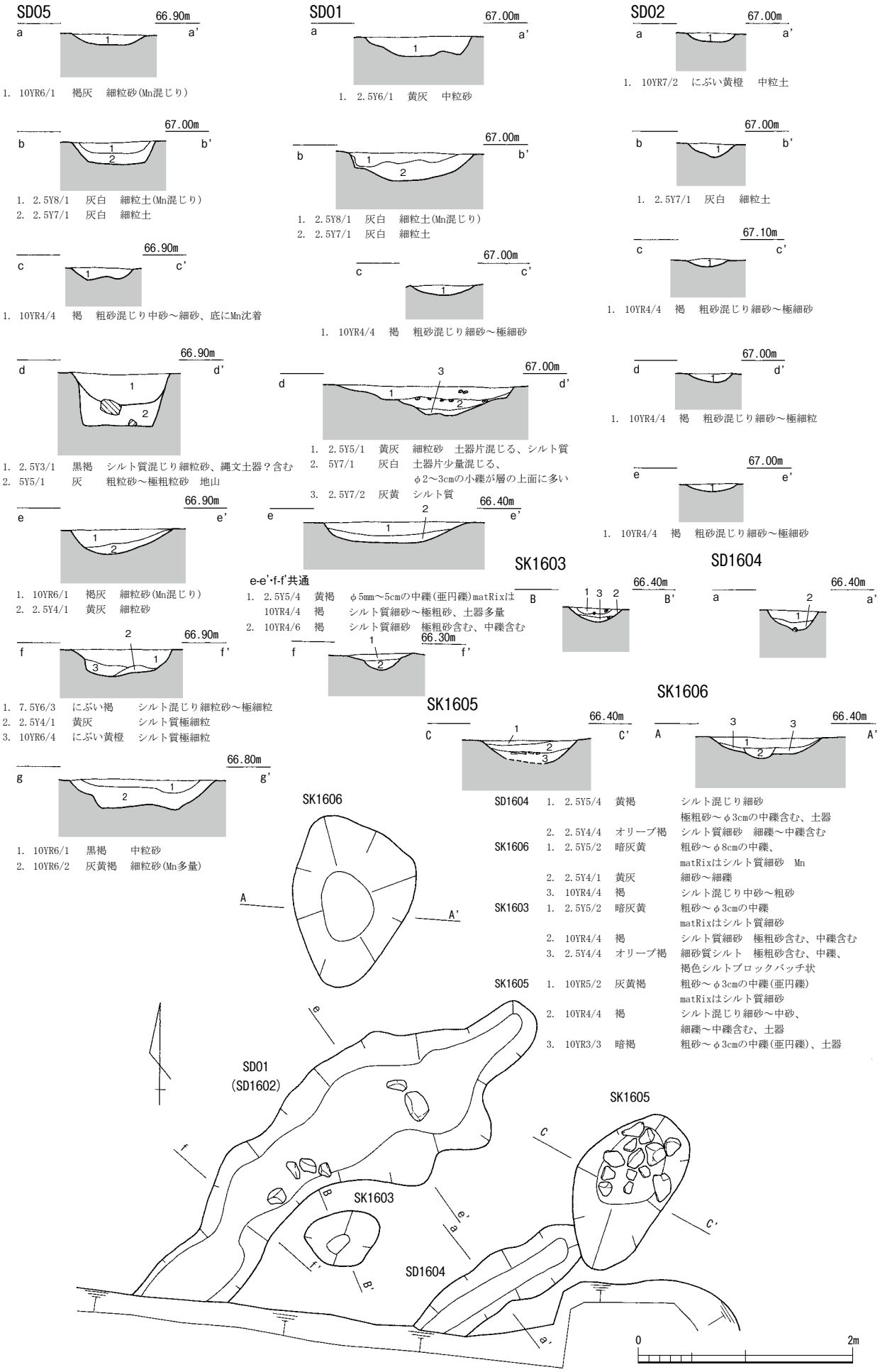
0　1m

弥生時代後期（1）竪穴住居・土坑（SH1607・SK1608・1609・1612・1802）

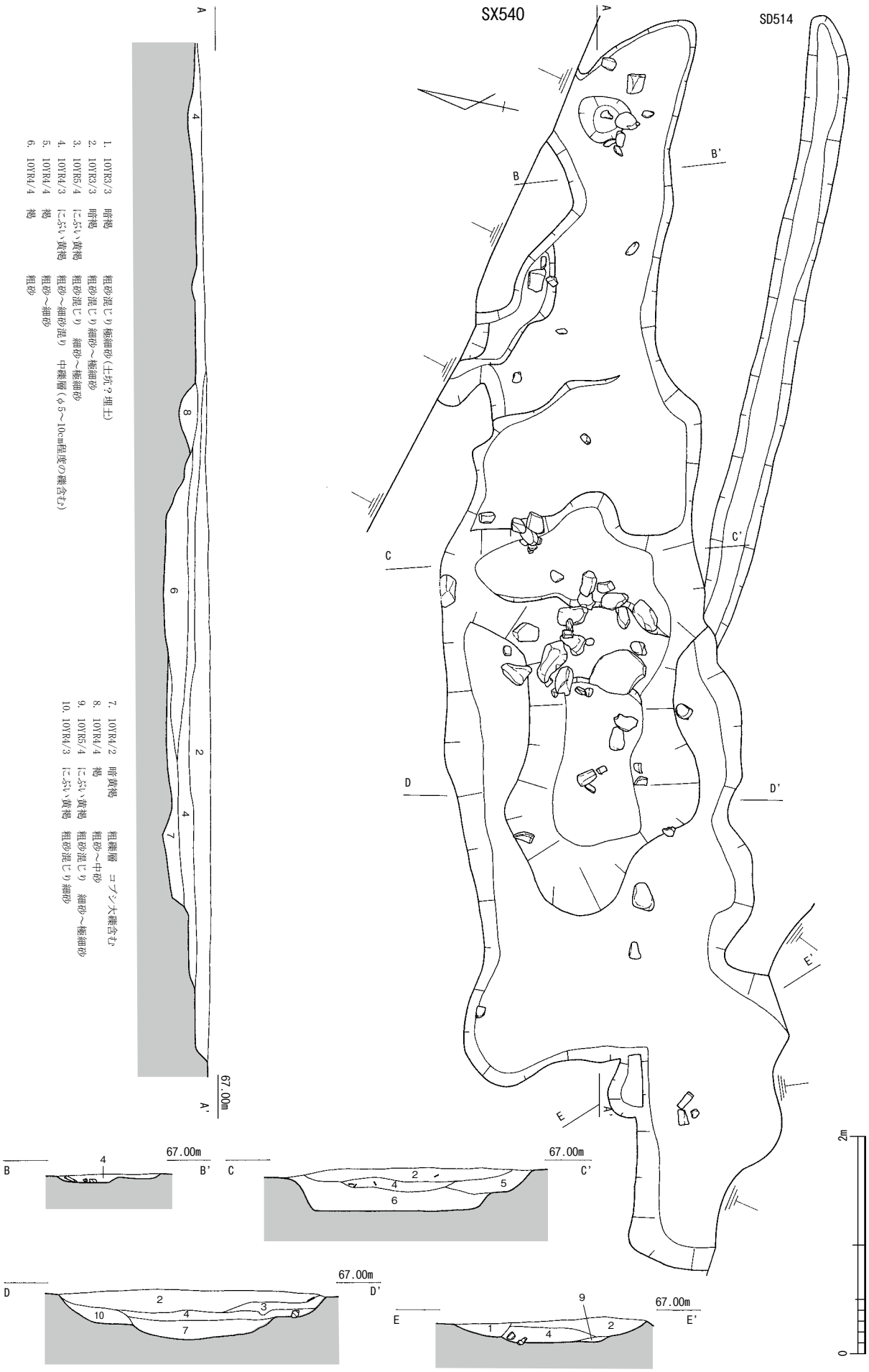


弥生時代後期（2） 溝（1） 平面図（SD01・02・05）

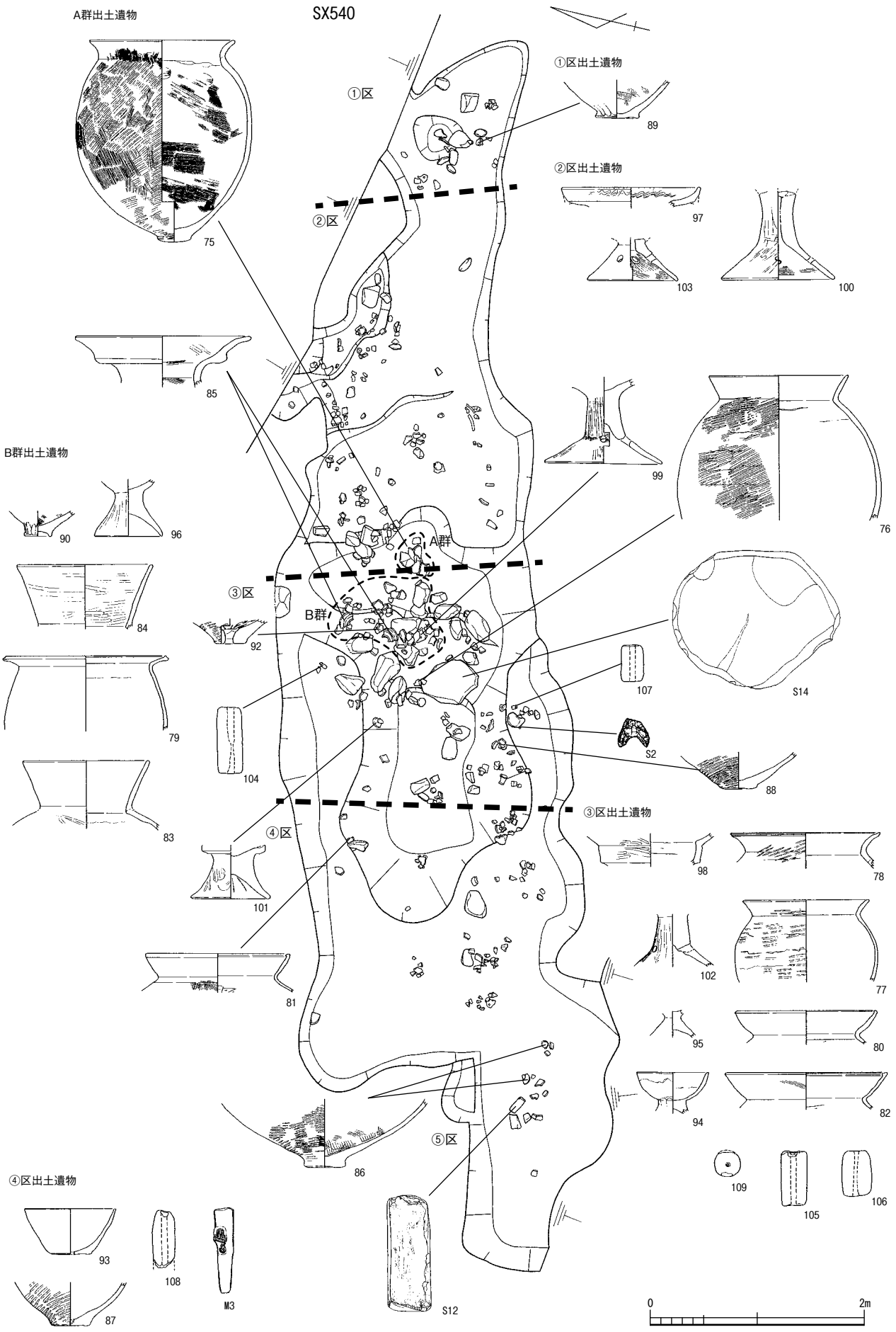
図版 8



弥生時代後期（3） 溝（2）（SD01・02・05・SK1603・1605・SD1604・1606）

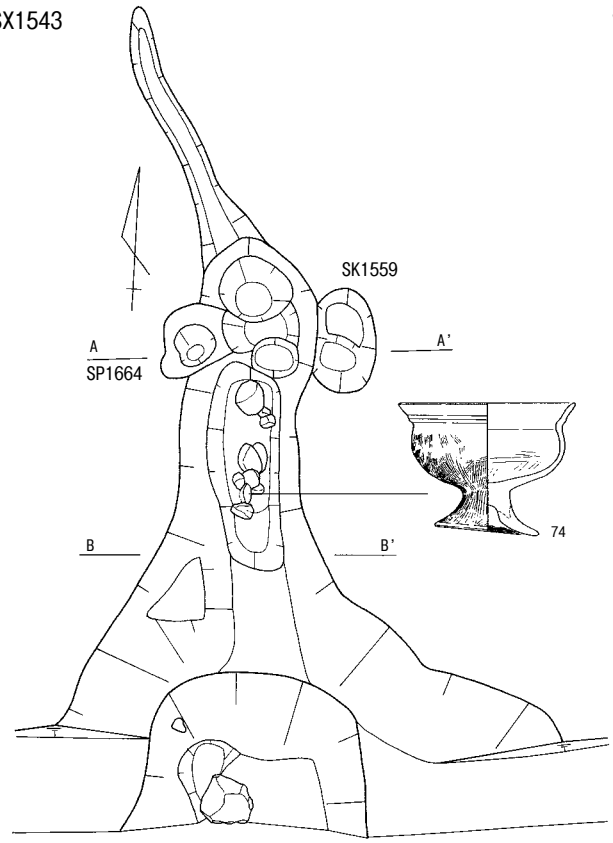


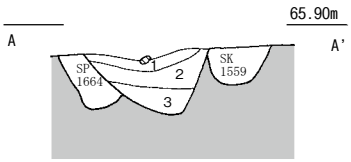
弥生時代後期（4） SX540

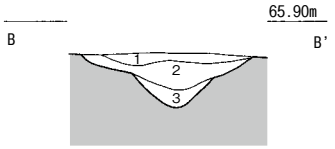


弥生時代後期（5） SX540 遺物出土状況図

SX1543

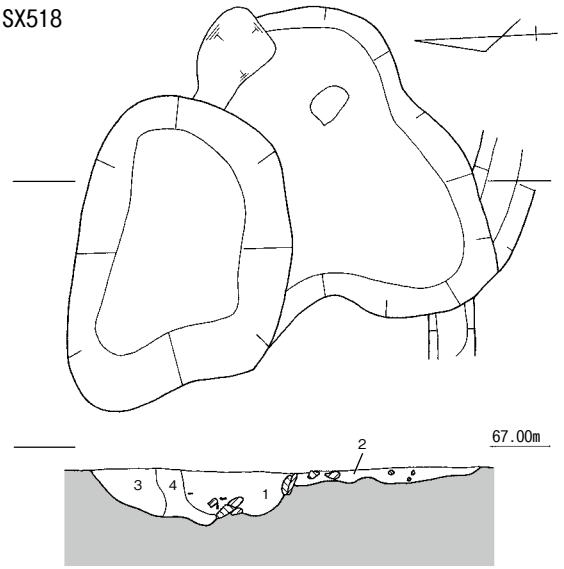






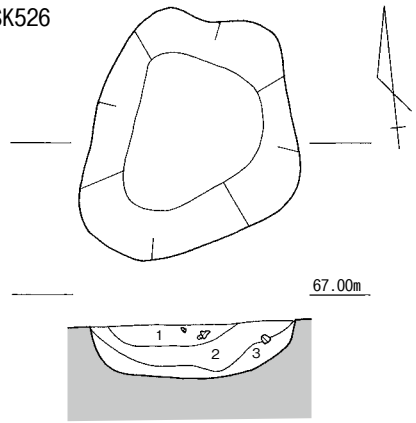
1. 2.5Y5/4　黄褐　シルト質極細砂～細砂　極粗砂～細礫含む，埋土中に10cm～20cmの角礫
2. 2.5Y4/4　オリーブ褐　シルト質細砂～中砂　埋土中に10cm～20cmの角礫
3. 10YR4/4　褐　シルト質極細砂～中砂　土器

SX518



1. 10YR4/4　褐　粗砂混じり細砂～極細砂，遺物含む
2. 10YR5/4　にぶい黄褐　粗砂混じり細砂～極細砂，φ2cm程度の礫含む，遺物含む
3. 10YR3/4　暗褐　粗砂混じり中砂～細砂
4. 10YR5/4　にぶい黄褐　粗砂

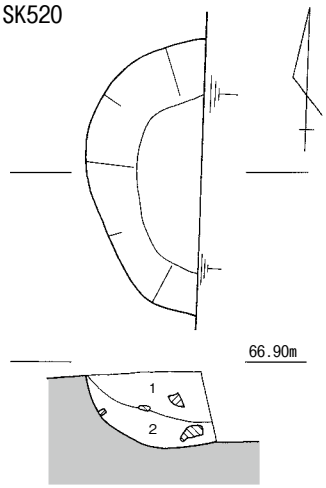
SK526



1. 10YR4/4　褐　粗砂～細砂，φ5cm大の礫含む
2. 10YR3/4　暗褐　粗砂混じり中砂～細砂
3. 10YR4/3　にぶい黄褐　粘質砂混じり粗砂，φ5cm程度の礫含む

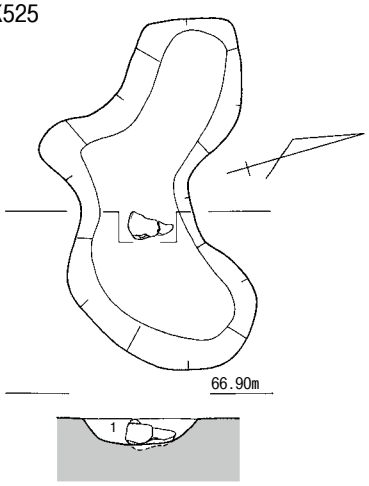
0　2m

SK520



1. 10YR4/4　褐　粗砂混じり細砂～中砂
2. 10YR3/4　暗褐　粗砂

SK525



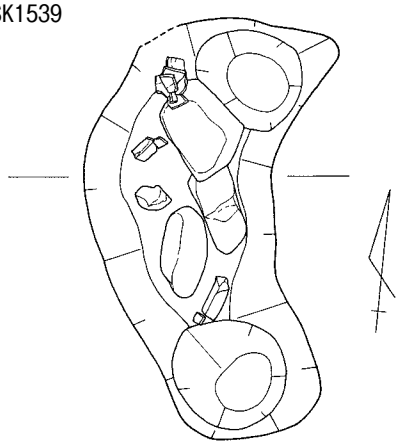
1. 10YR4/4　褐　粗砂混じり，小礫(φ～2cm程度)

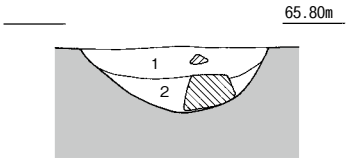
0　1m

弥生～古墳時代　土坑（SX1543・518・SK520・526・525）

図版 12

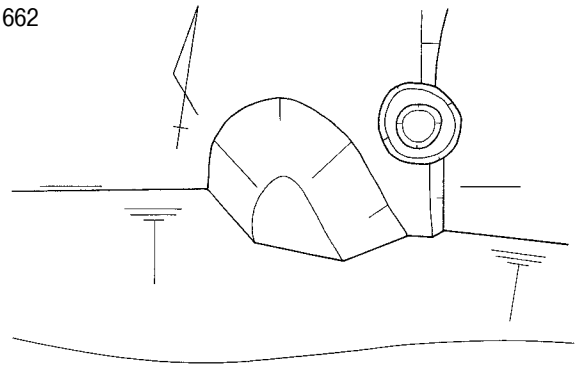
SK1539

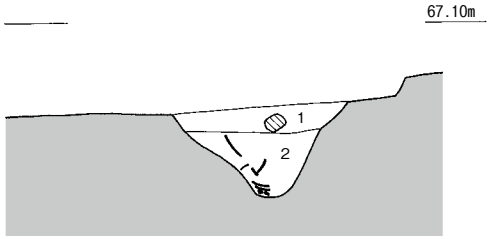




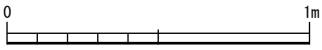
1. 2.5Y5/3　黄褐　シルト質細砂～極細砂
2. 10YR5/4　にぶい黄褐　シルト質細砂混じり極細砂

SK1662

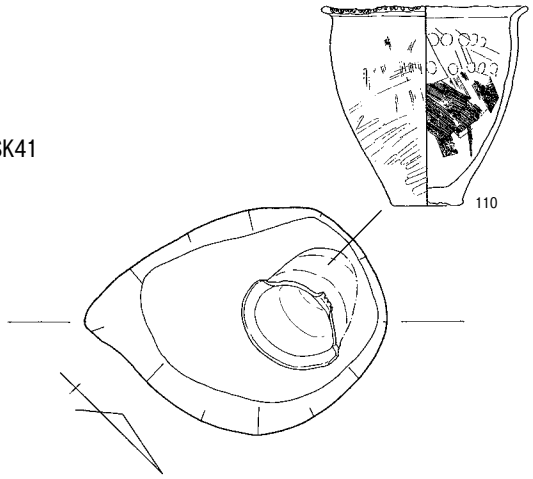


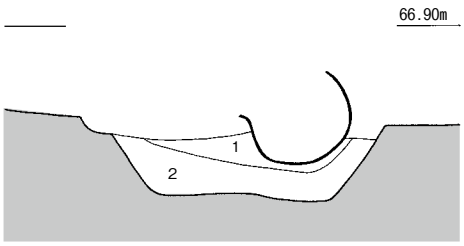


1. 10YR5/4　にぶい黄褐　粗砂混じりシルト質極細砂、土器含む
2. 10YR4/3　にぶい黄褐　粗砂混じり細砂～中砂、土器片含む

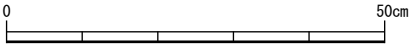


SK41



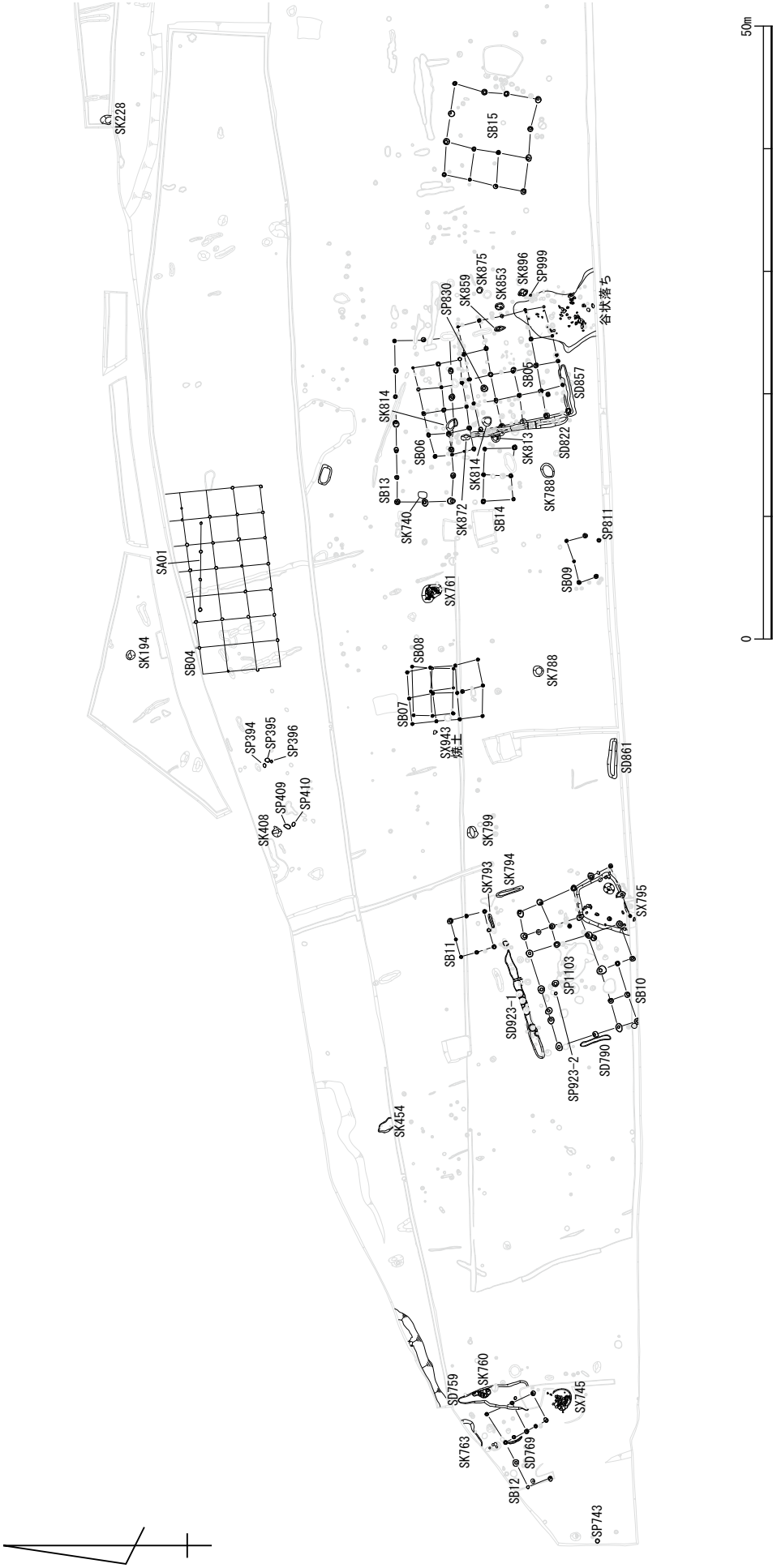


1. 10YR8/4　浅黄橙　中砂土
2. 10YR7/3　にぶい黄褐　細砂土

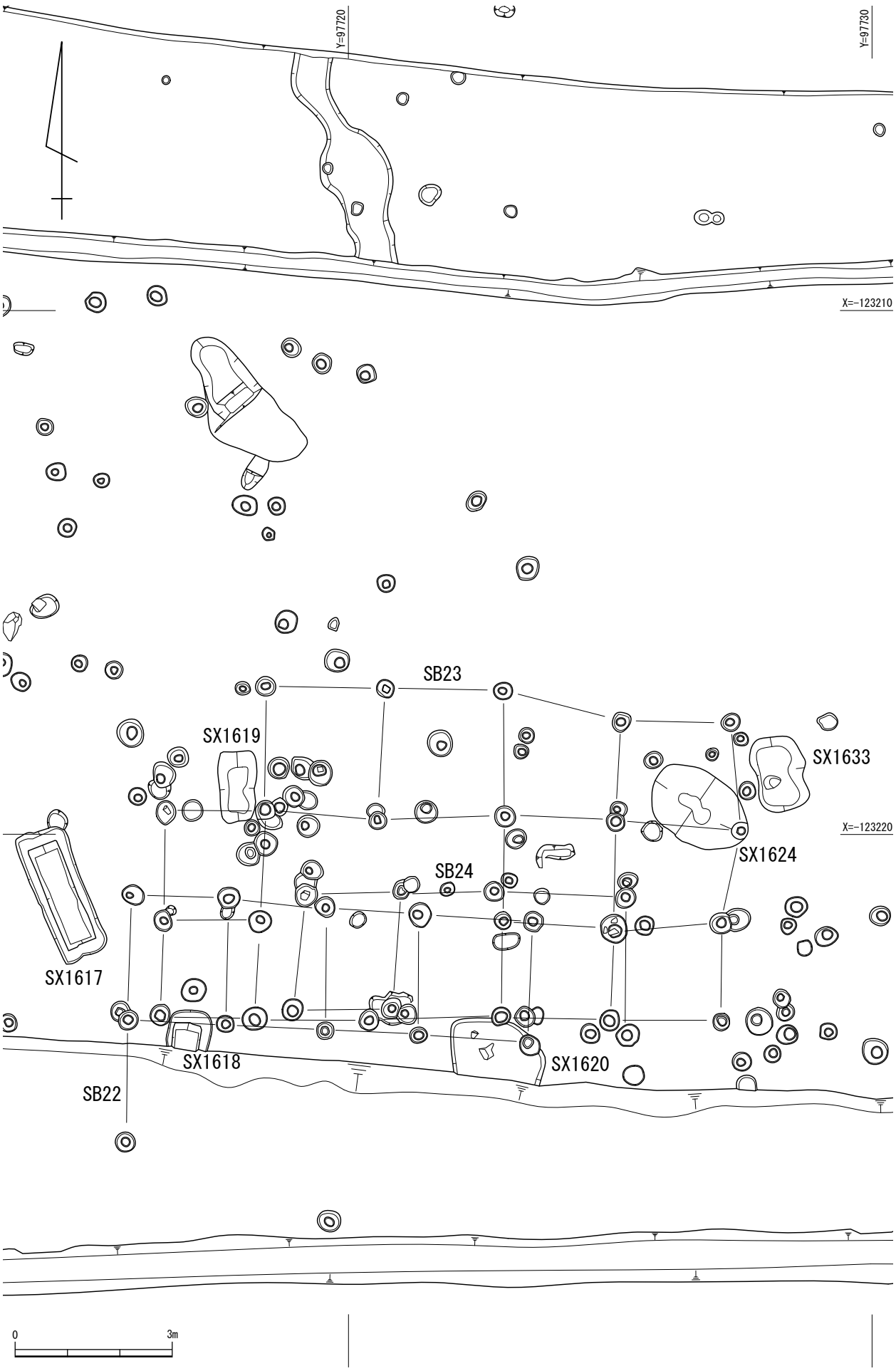


弥生～古墳時代　土坑（SX1539・1662・SK41）

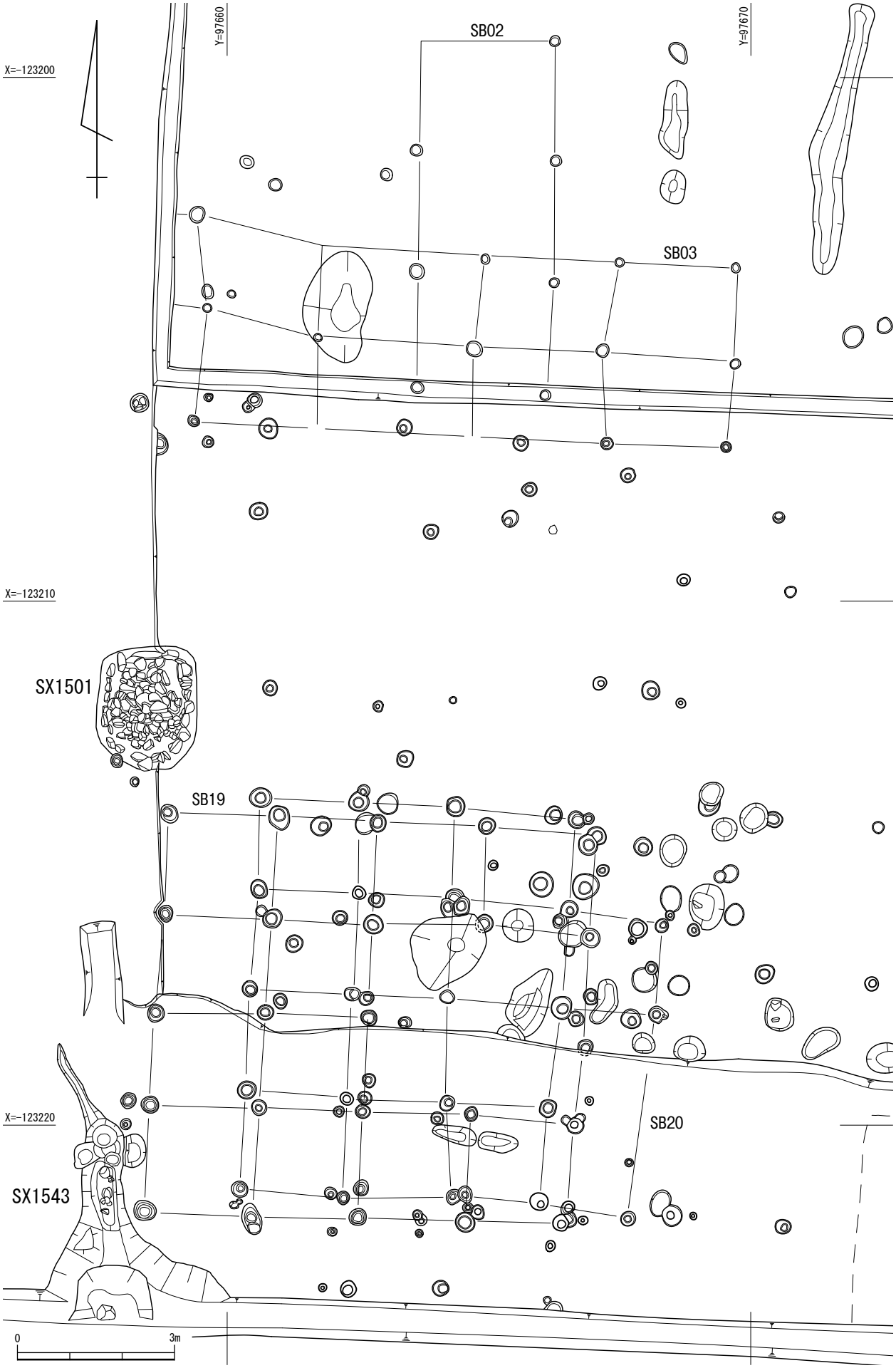
平安時代～鎌倉時代遺構平面図（東側）



平安時代～鎌倉時代遺構平面図（西側）



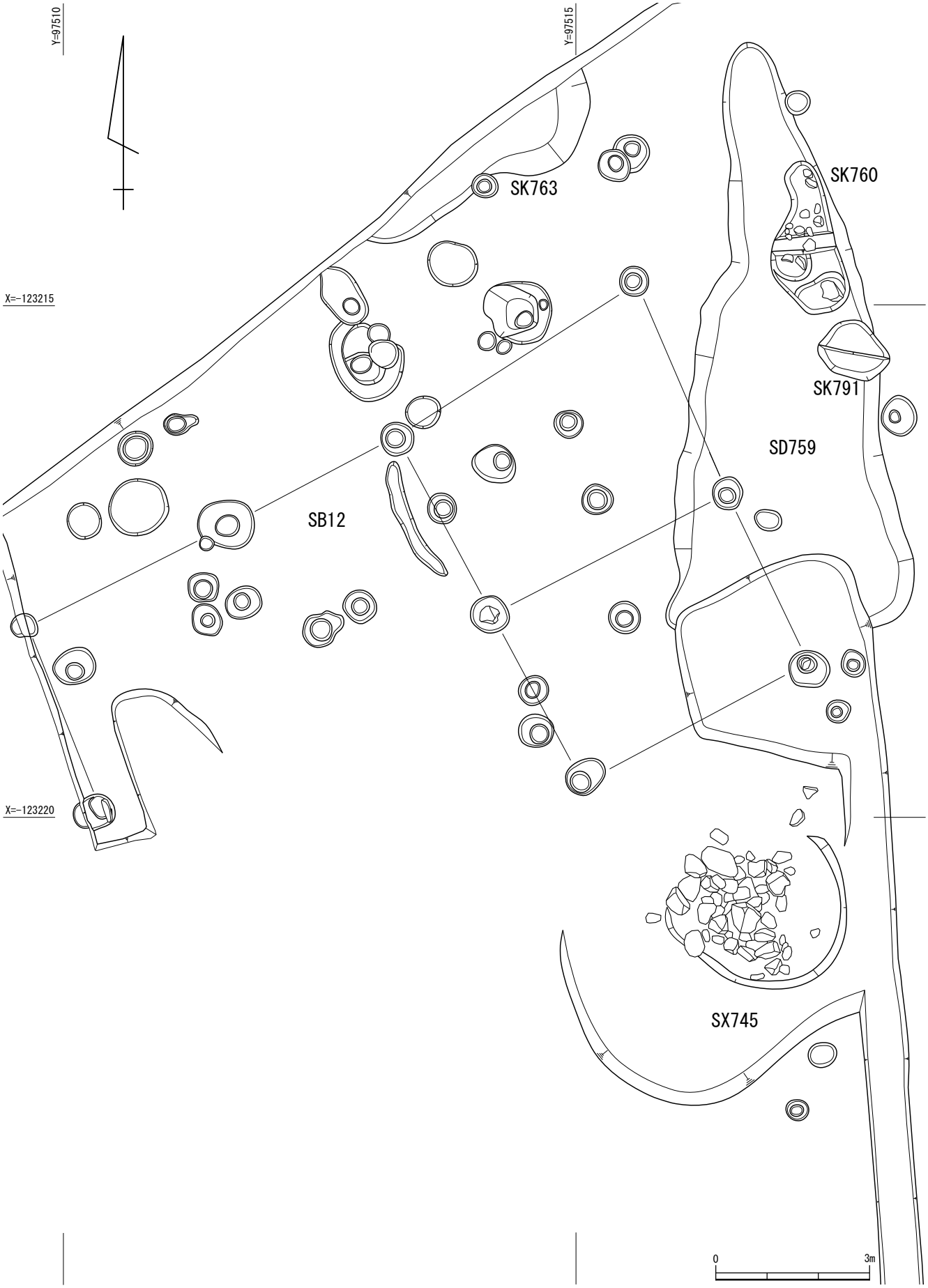
掘立柱建物跡周辺図（1）SB22 ～ 24



掘立柱建物跡周辺図（2）SB02・03、19・20

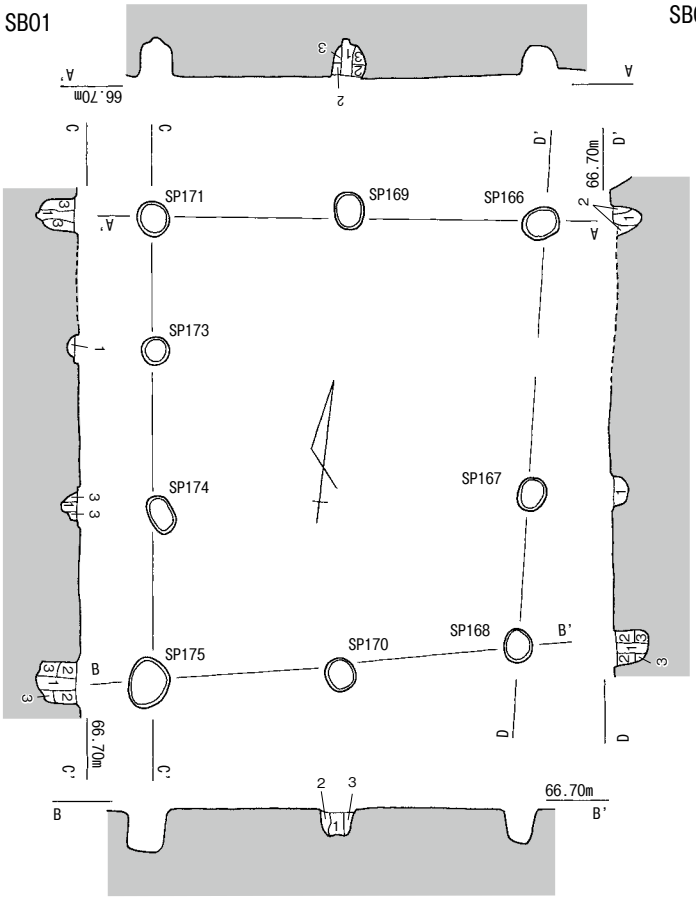
掘立柱建物跡周辺図（3）SB05・06、13・14

掘立柱建物跡周辺図（4）SB10・11



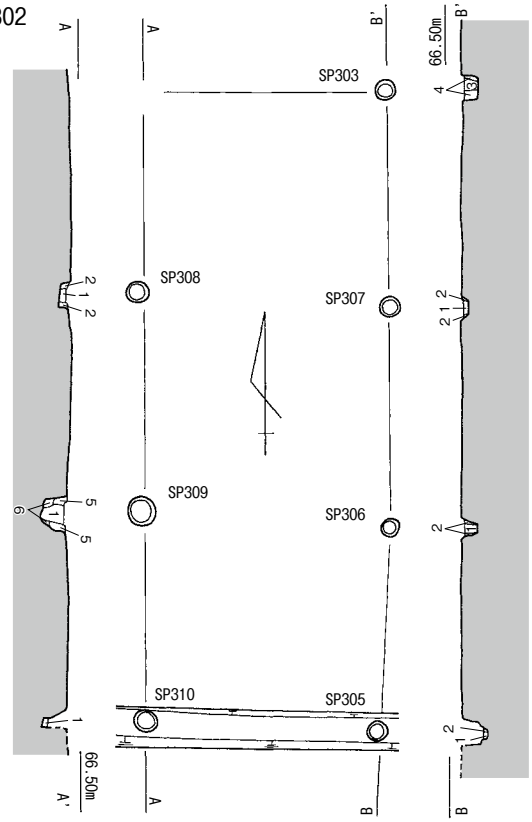
掘立柱建物跡周辺図（5）SB12

SB01



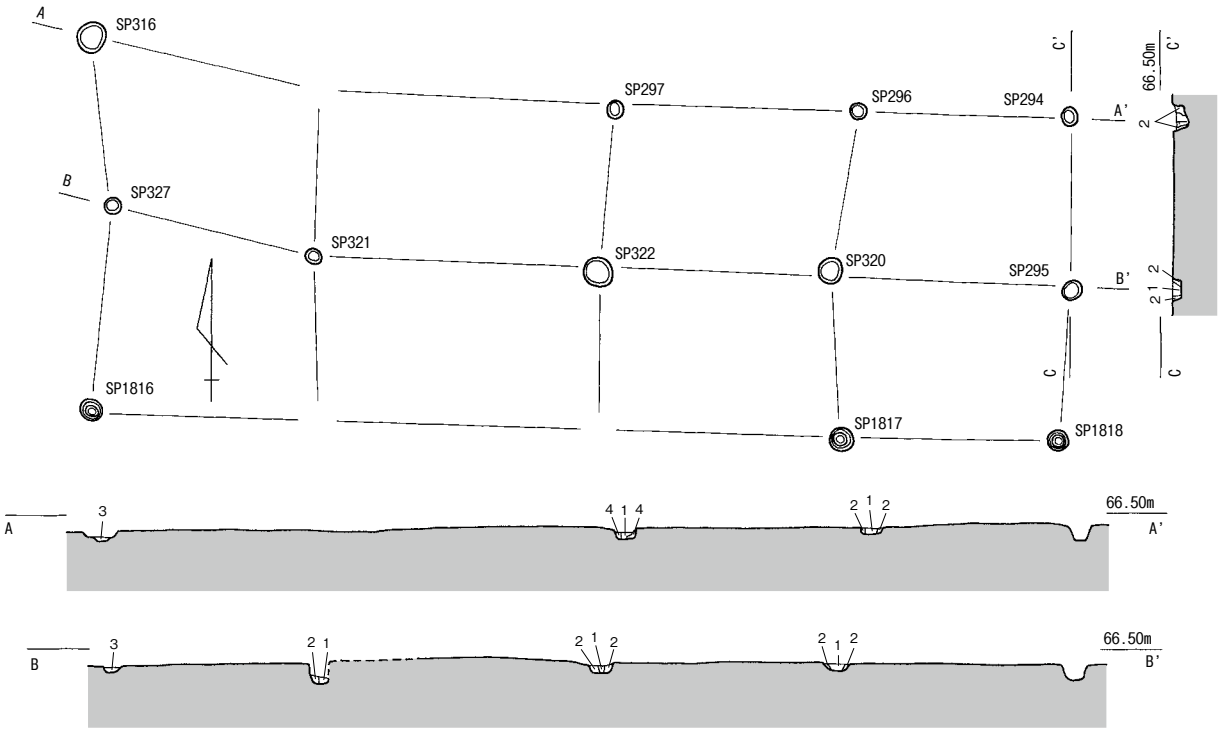
1. 5Y5/1 灰 細粒砂
2. 5Y7/1 灰白 細粒砂(2.5Y7/3浅黄色、粒砂がブロック状に混じる)
3. 2.5Y5/1 黄灰 細粒砂(シルト質)

SB02



1. 2.5Y5/1 黄灰 細粒砂シルト質
2. 2.5Y8/4 淡黄 細粒砂(地山に似る、ブロック状)
3. 2.5Y7/2 灰黄 粗砂
4. 2.5Y8/1 灰白 粗砂
5. 10YR8/3 浅黄橙 中粒砂Mn混じり
6. 10YR7/3 にぶい黄橙 中粒砂

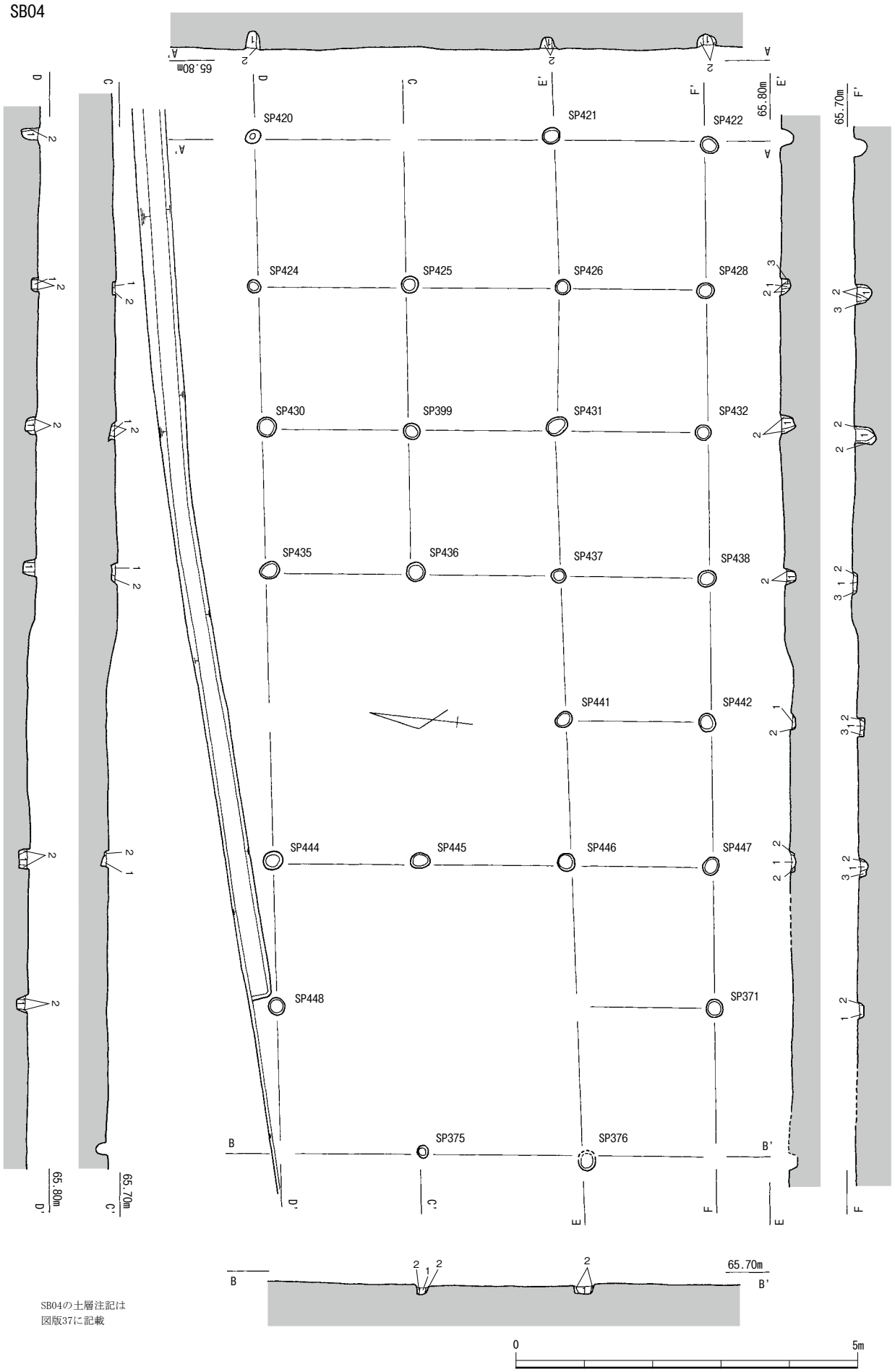
SB03



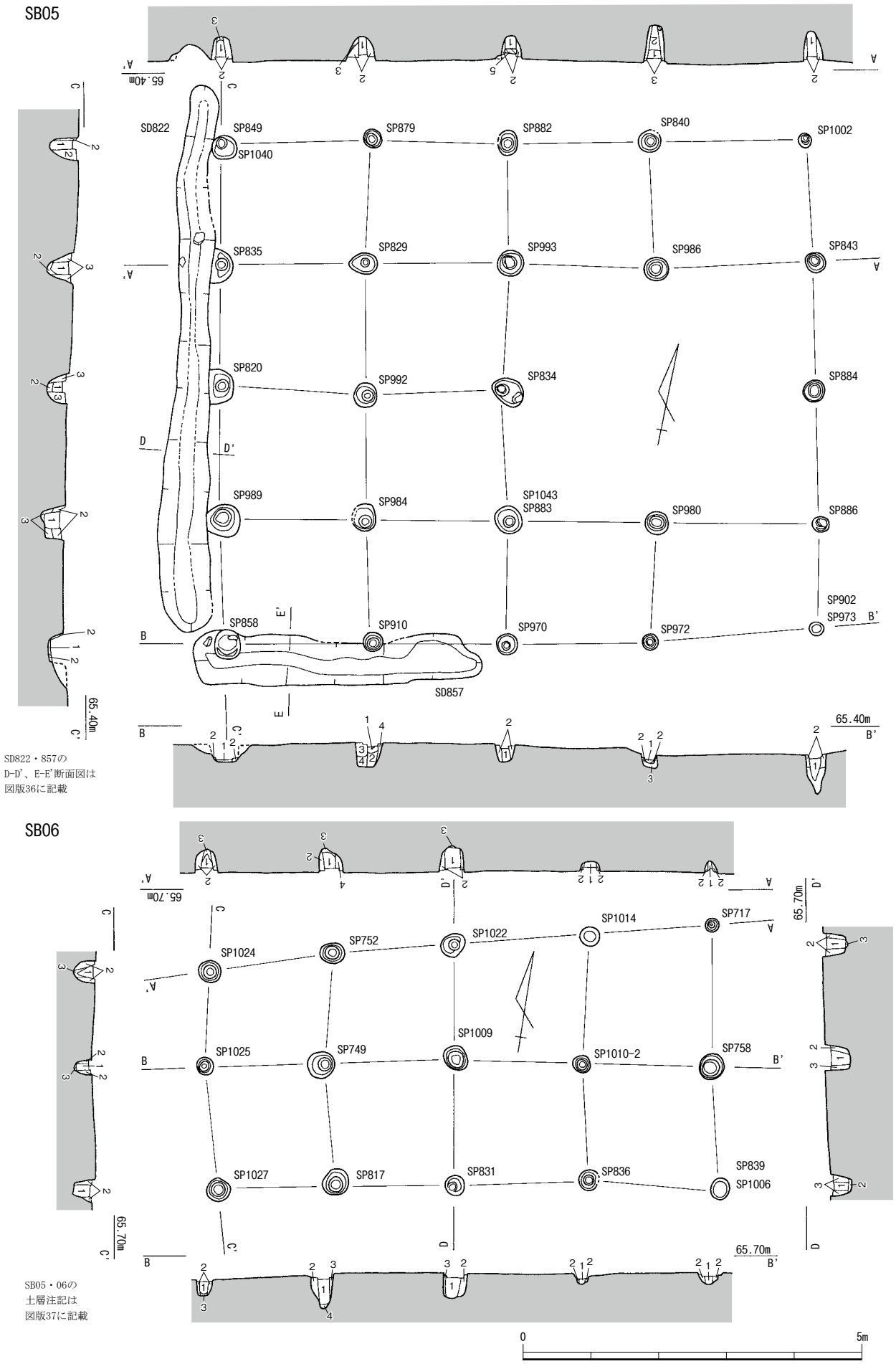
1. 2.5Y5/1 黄灰 細粒砂シルト質
2. 2.5Y8/4 淡黄 細粒砂(地山に似る、ブロック状)
3. 2.5Y8/1 灰白 細粒砂(Mn混じり)
4. 2.5Y8/2 灰白 中粒砂

0 5m

SB01 ～ 03 平面図・断面図

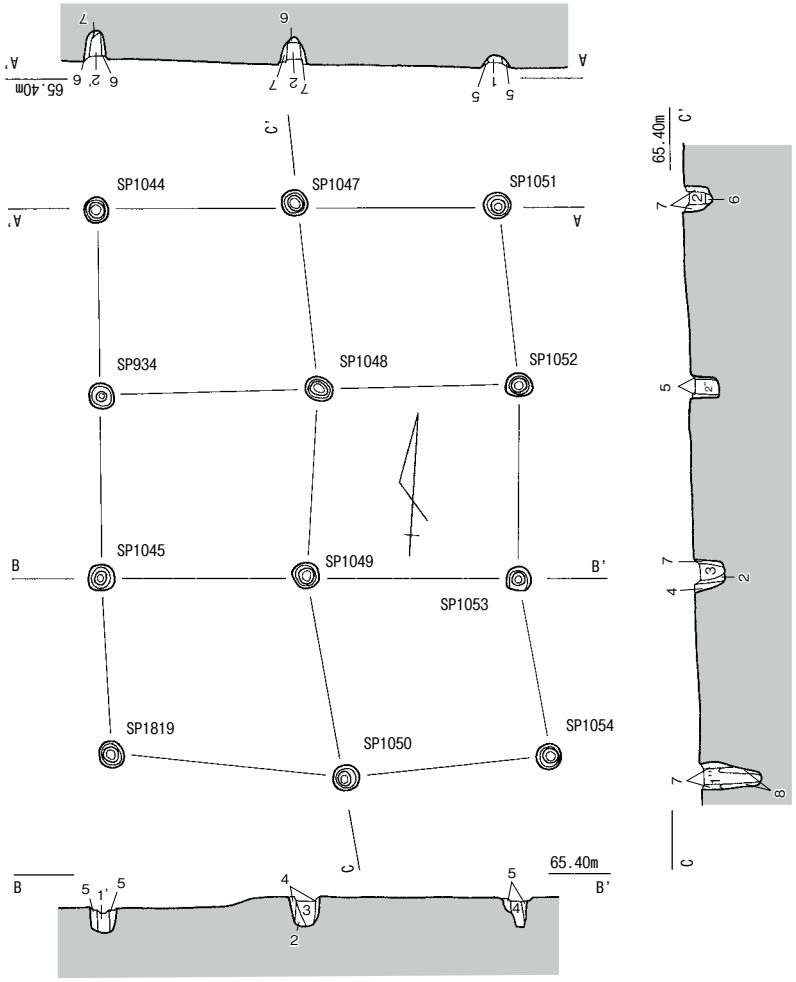

SB04
SP420
SP421
SP422
SP424
SP425
SP426
SP428
SP430
SP399
SP431
SP432
SP435
SP436
SP437
SP438
SP441
SP442
SP444
SP445
SP446
SP447
SP448
SP371
SP375
SP376
65.80m
65.70m
SB04の土層注記は
図版37に記載
0
5m

SB04　平面図・断面図



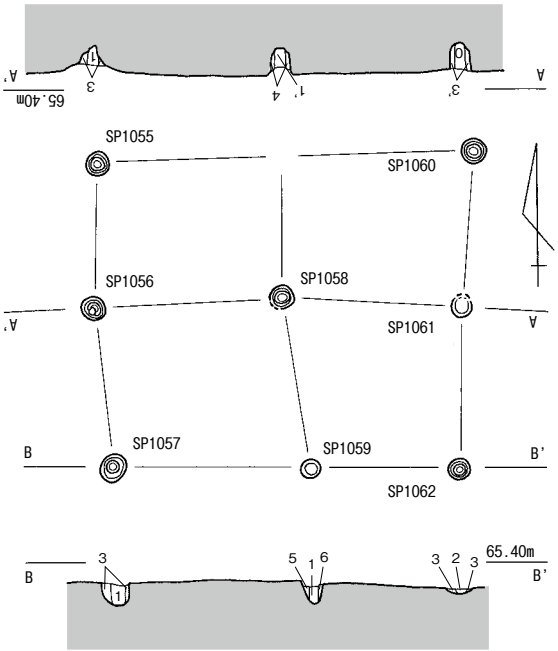
SB05・06　平面図・断面図

SB07



1. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト質極細砂
1'. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト質極細砂(炭含む)
1''. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト質極細砂(3層含む)
2. 2.5Y3/2 黒褐 シルト質極細砂
2'. 2.5Y3/2 黒褐 シルト質極細砂(炭含む)
2''. 2.5Y3/2 黒褐 シルト質極細砂(2層・Mn含む)
3. 10YR3/2 黒褐 シルト質極細砂(炭含む)
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト質極細砂(炭含む)
4. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト質極細砂(炭含む)
5. 2.5Y5/4 黄褐 シルト質極細砂
6. 2.5Y5/6 黄褐 シルト質極細砂
7. 2.5Y5/3 黄褐 シルト質極細砂

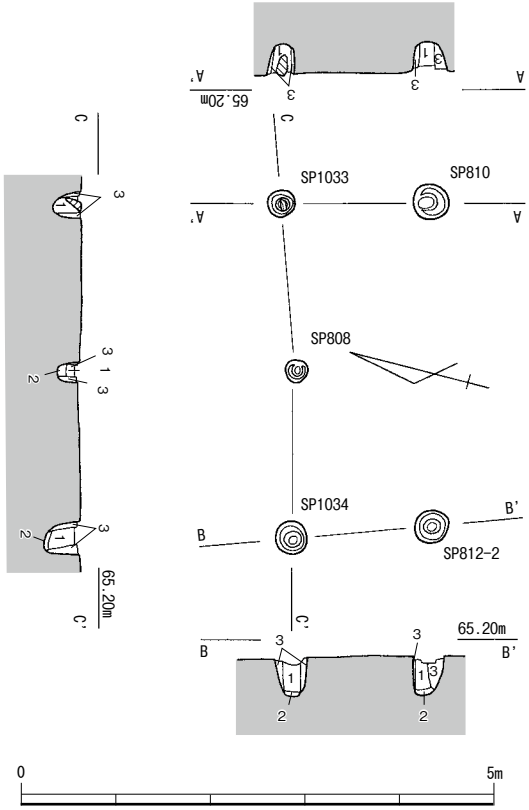
SB08



1. 雨の為、消失
1'. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト質極細砂(Mn含む)
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト質極細砂
3. 2.5Y5/4 黄褐 シルト質極細砂
3'. 2.5Y5/4 黄褐 シルト質極細砂(Mn含む)
4. 2.5Y5/6 黄褐 細砂
5. 2.5Y5/3 黄褐 シルト質極細砂
6. 2.5Y5/6 黄褐 シルト質極細砂

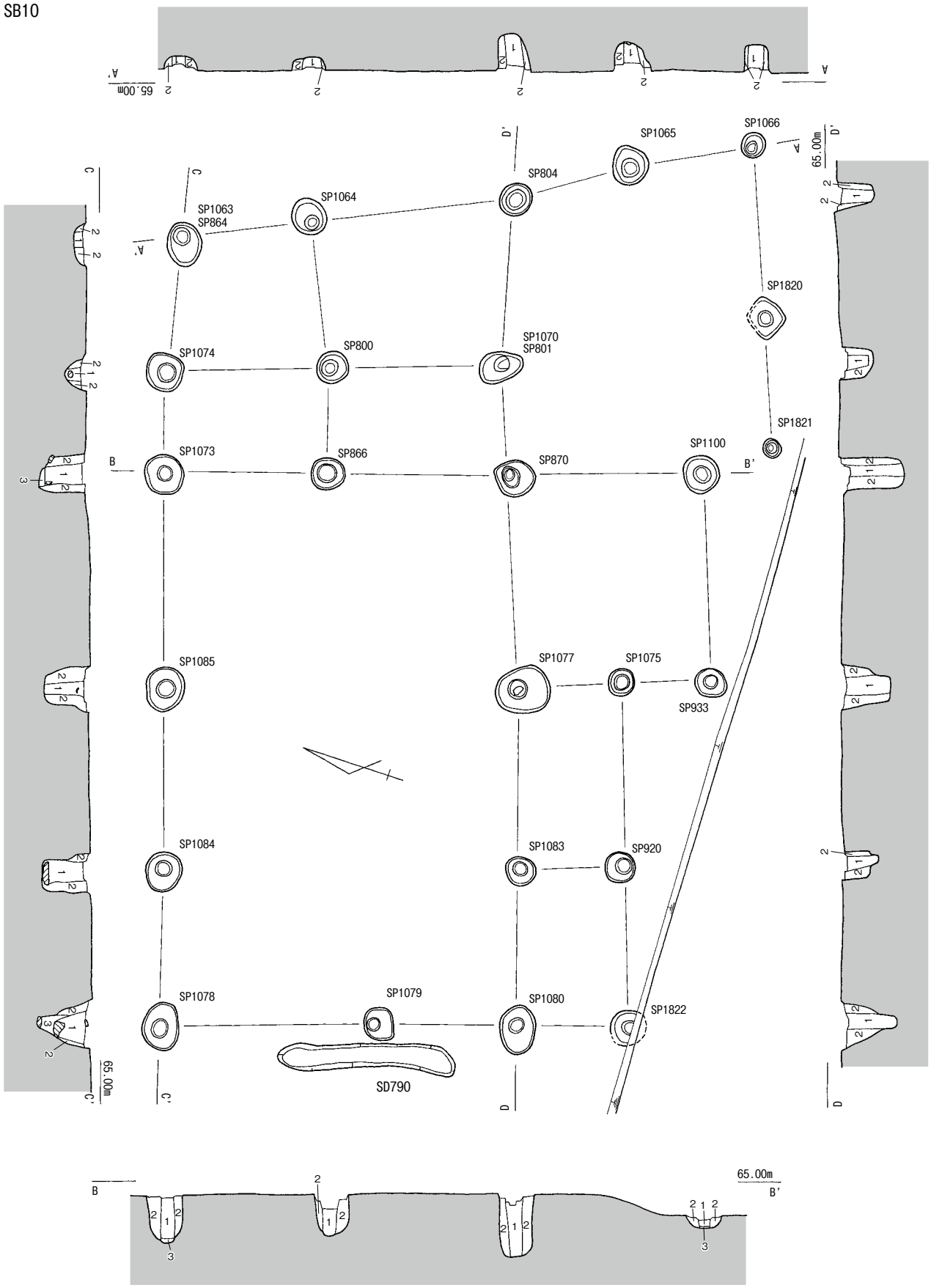
SB09

1. 2.5Y4/3 オリーブ褐 極細砂～細砂 シルト分含む 地山ブロック含む 炭・土器
2. 2.5Y4/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト 黄色土ブロック含む(柱根の有機質土)床面Fe_2O_3
3. 2.5Y4/4 オリーブ褐 細砂 シルト分含む



SB07 ～ 09　平面図・断面図

SB10

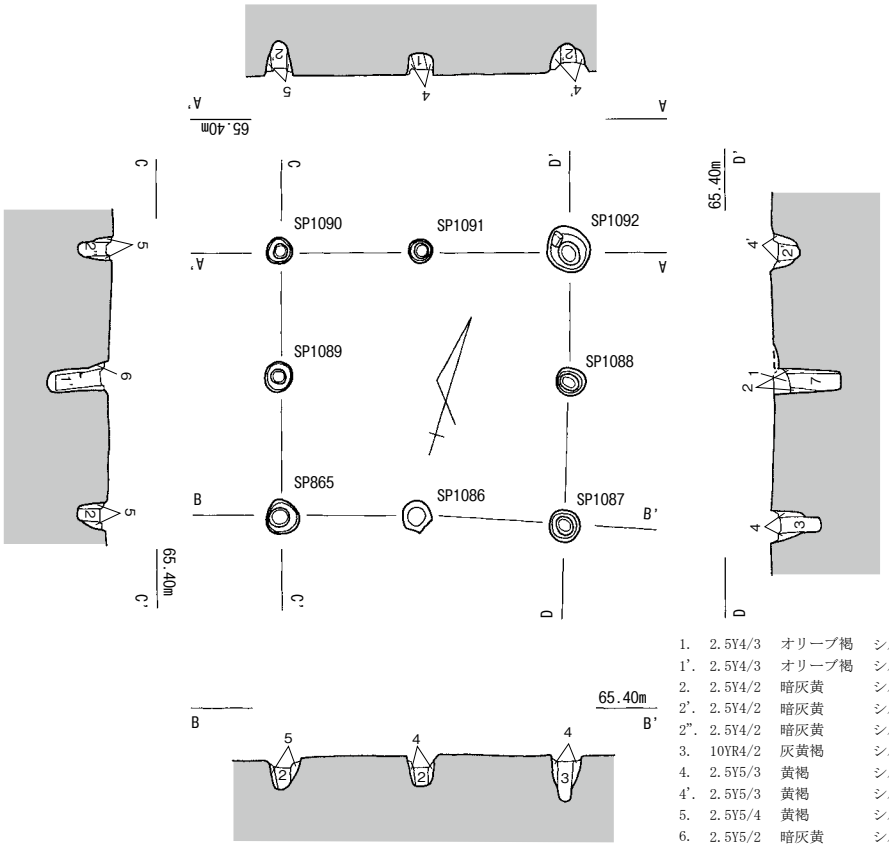


SB10の土層注記は図版38に記載

0 5m

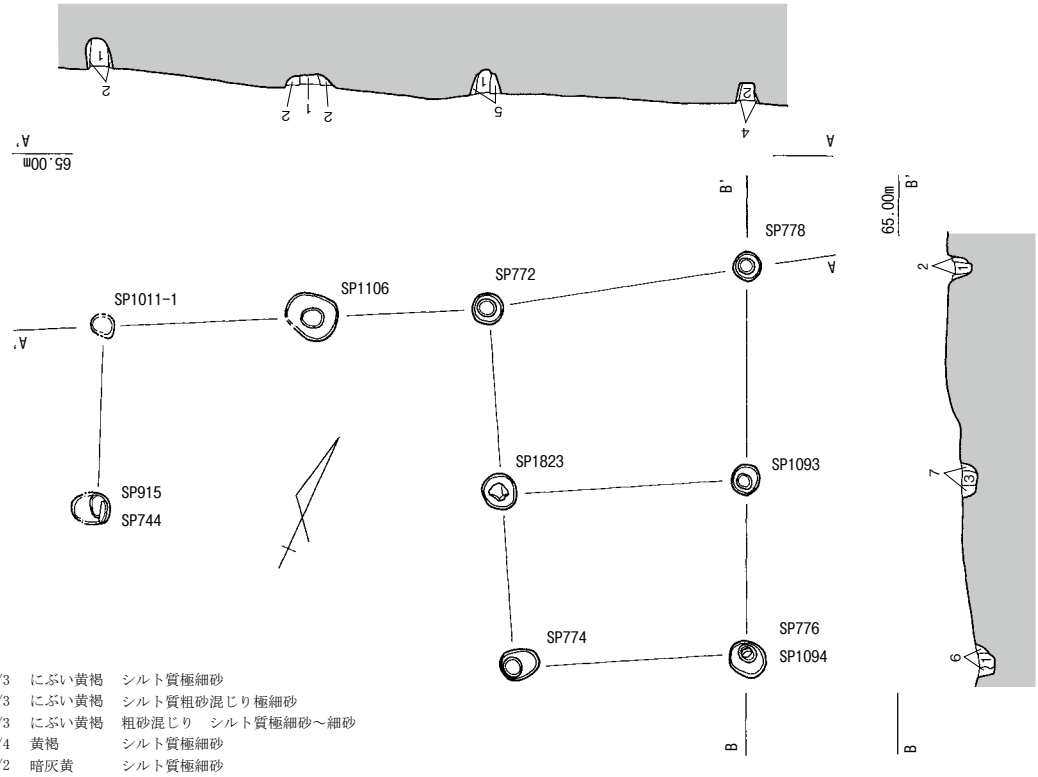
SB10　平面図・断面図

SB11



1. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト質極細砂
1'. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト質極細砂 鉄分層あり
2. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト質極細砂
2'. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト質極細砂(Mn混じる)
2". 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト質極細砂(5層・Mn混じる)
3. 10YR4/2 灰黄褐 シルト質極細砂
4. 2.5Y5/3 黄褐 シルト質極細砂
4'. 2.5Y5/3 黄褐 シルト質極細砂(Mn混じる)
5. 2.5Y5/4 黄褐 シルト質極細砂
6. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質極細砂 鉄分層あり
7. 2.5Y3/2 黒褐 シルト質極細砂(鉄分を含む)

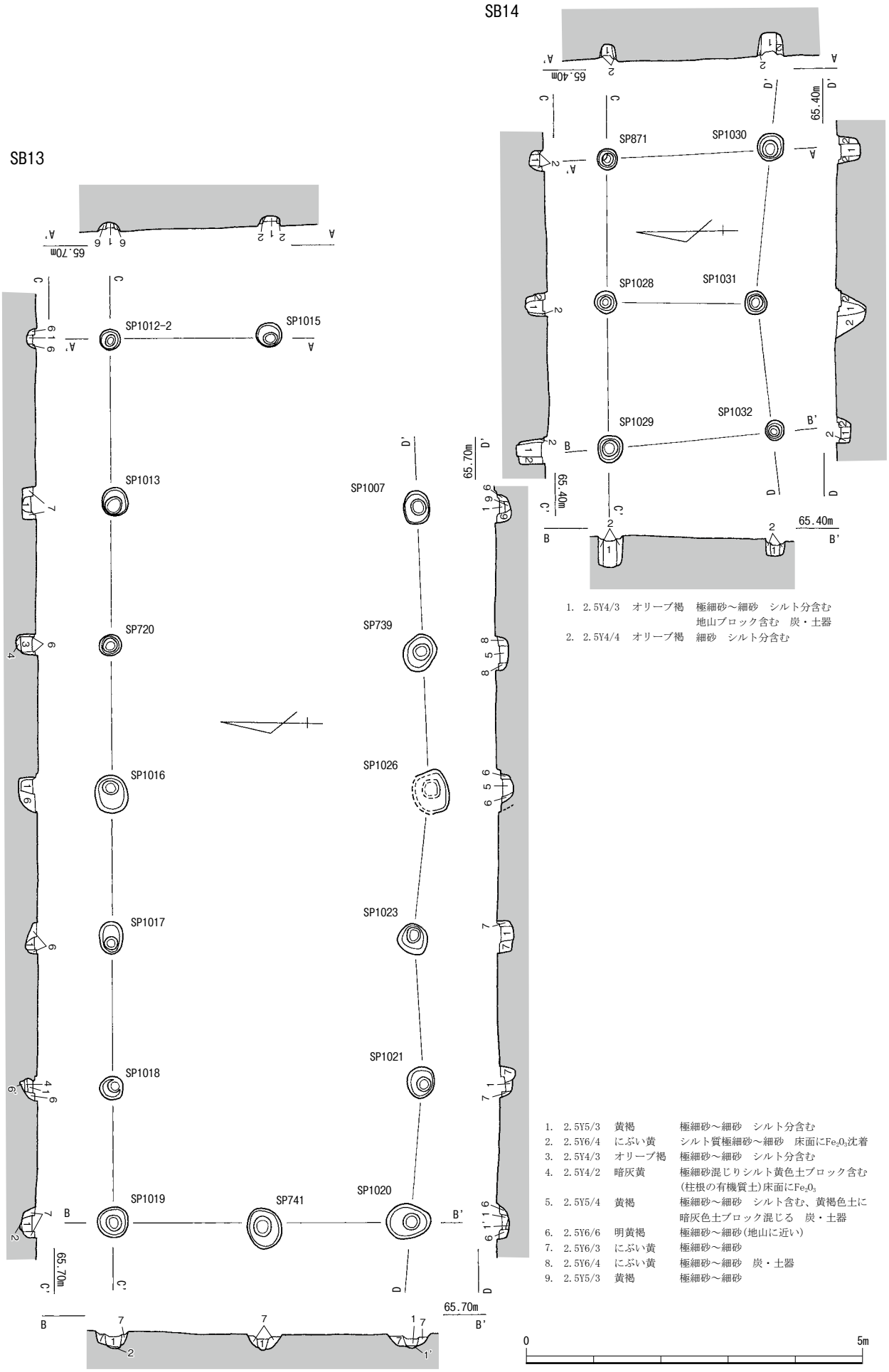
SB12



1. 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂
2. 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト質粗砂混じり極細砂
3. 10YR4/3 にぶい黄褐 粗砂混じり シルト質極細砂～細砂
4. 2.5Y5/4 黄褐 シルト質極細砂
5. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質極細砂
6. 10YR5/4 にぶい黄褐 シルト質極細砂(地山がブロック状に混じる)
7. 2.5Y5/3 黄褐 シルト質粗砂混じり極細砂

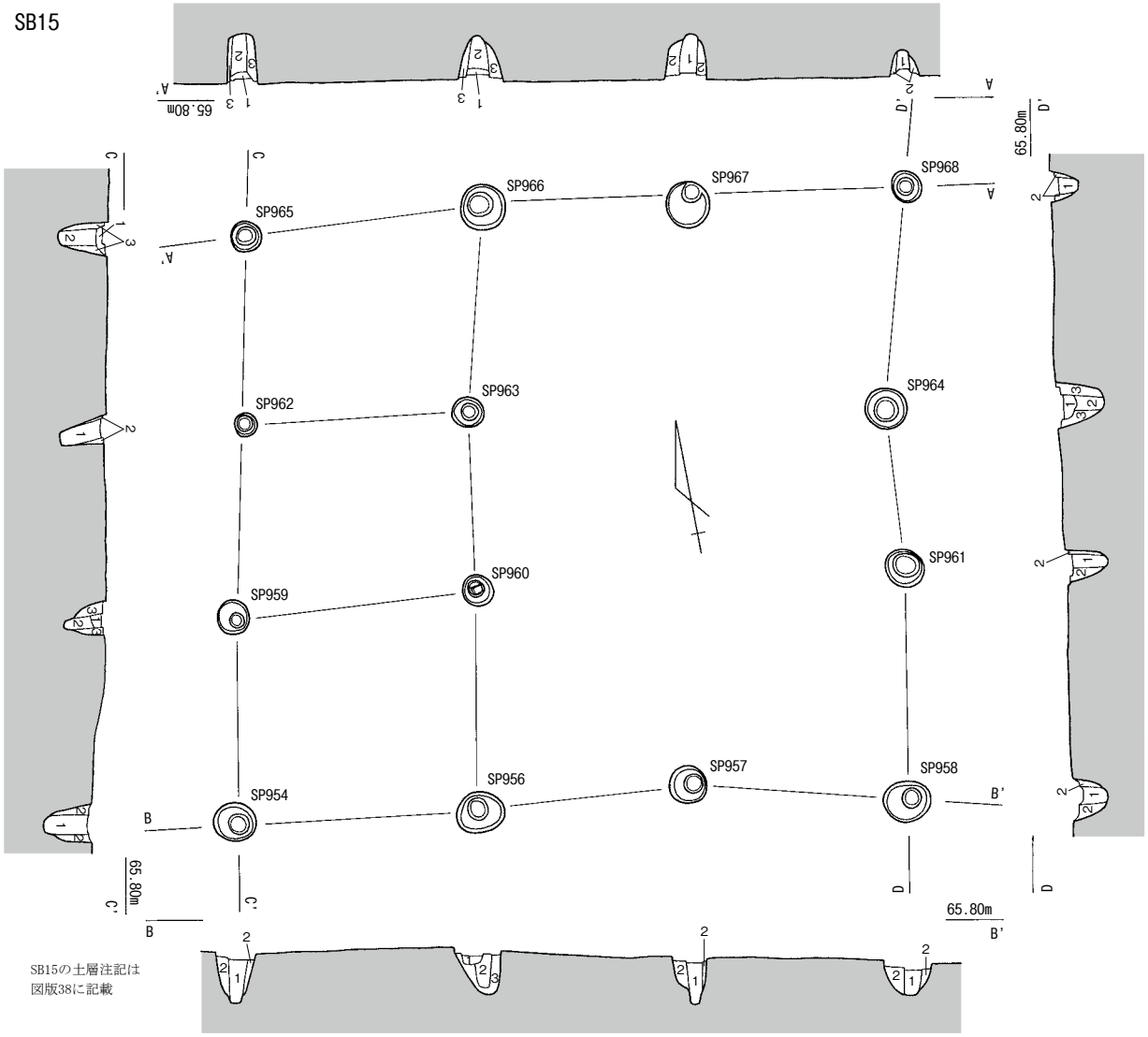
0 5m

SB11・12 平面図・断面図



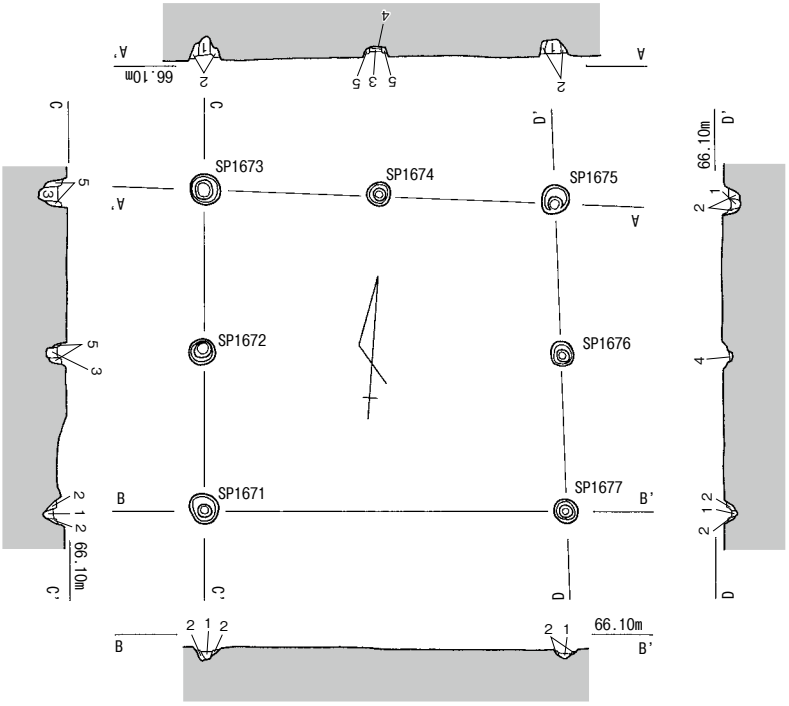
SB13・14 平面図・断面図

SB15



SB15の土層注記は
図版38に記載

SB16

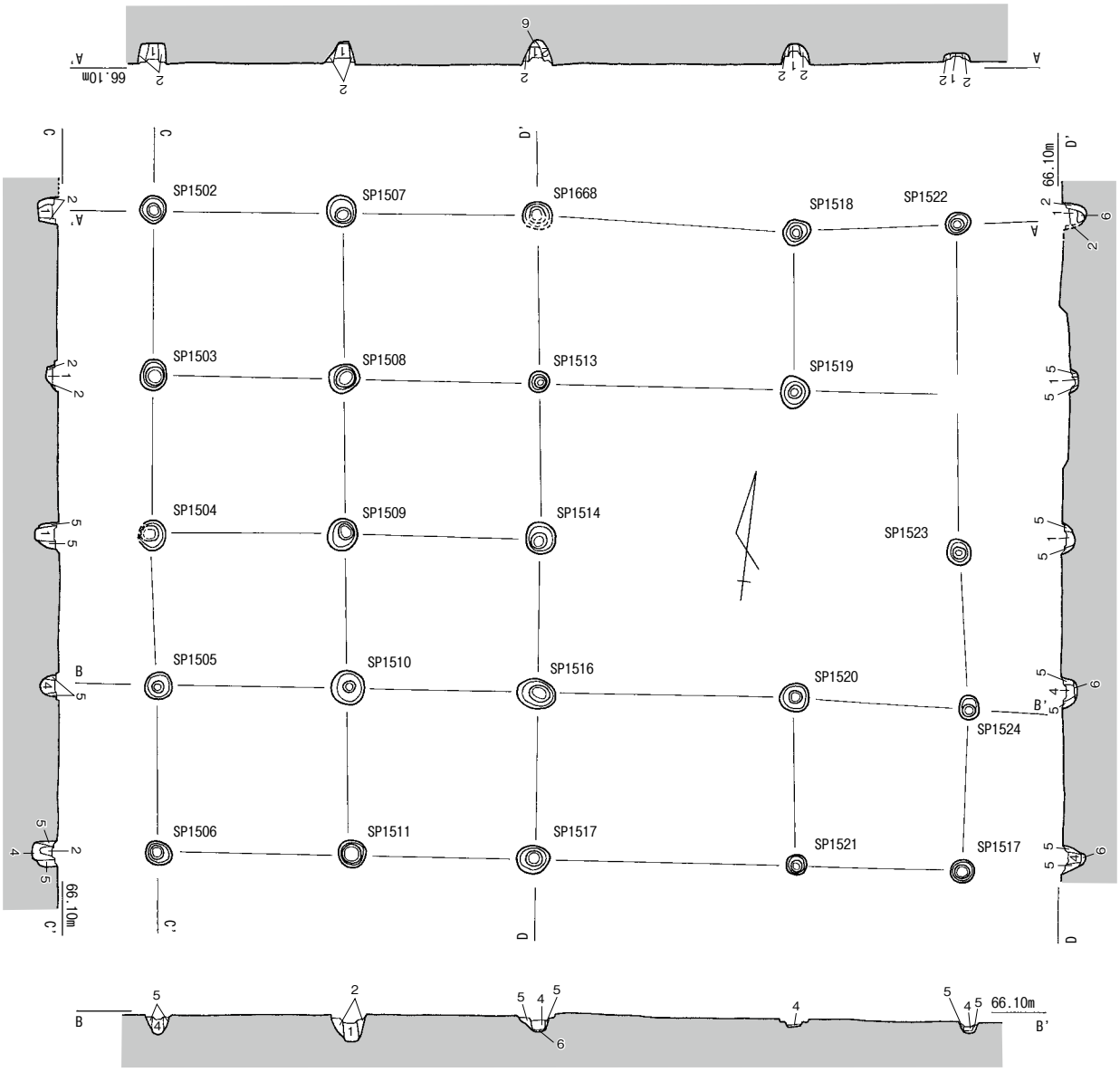


1. 2.5Y5/3 黄褐 シルト質極細砂～細砂 極粗砂含む 褐色土と黄色土のブロック混じり
2. 2.5Y6/4 にぶい黄 極細砂～細砂 極粗砂含む(地山に近い埋土)
3. 2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト質極細砂～細砂 極粗砂含む
4. 2.5Y7/3 浅黄 極細砂～細砂 外縁にFe_2O_3沈着(木根の影響受けたグライ化層)
5. 2.5Y5/4 黄褐 シルト質極細砂～細砂

SB15・16 平面図・断面図

図版 28

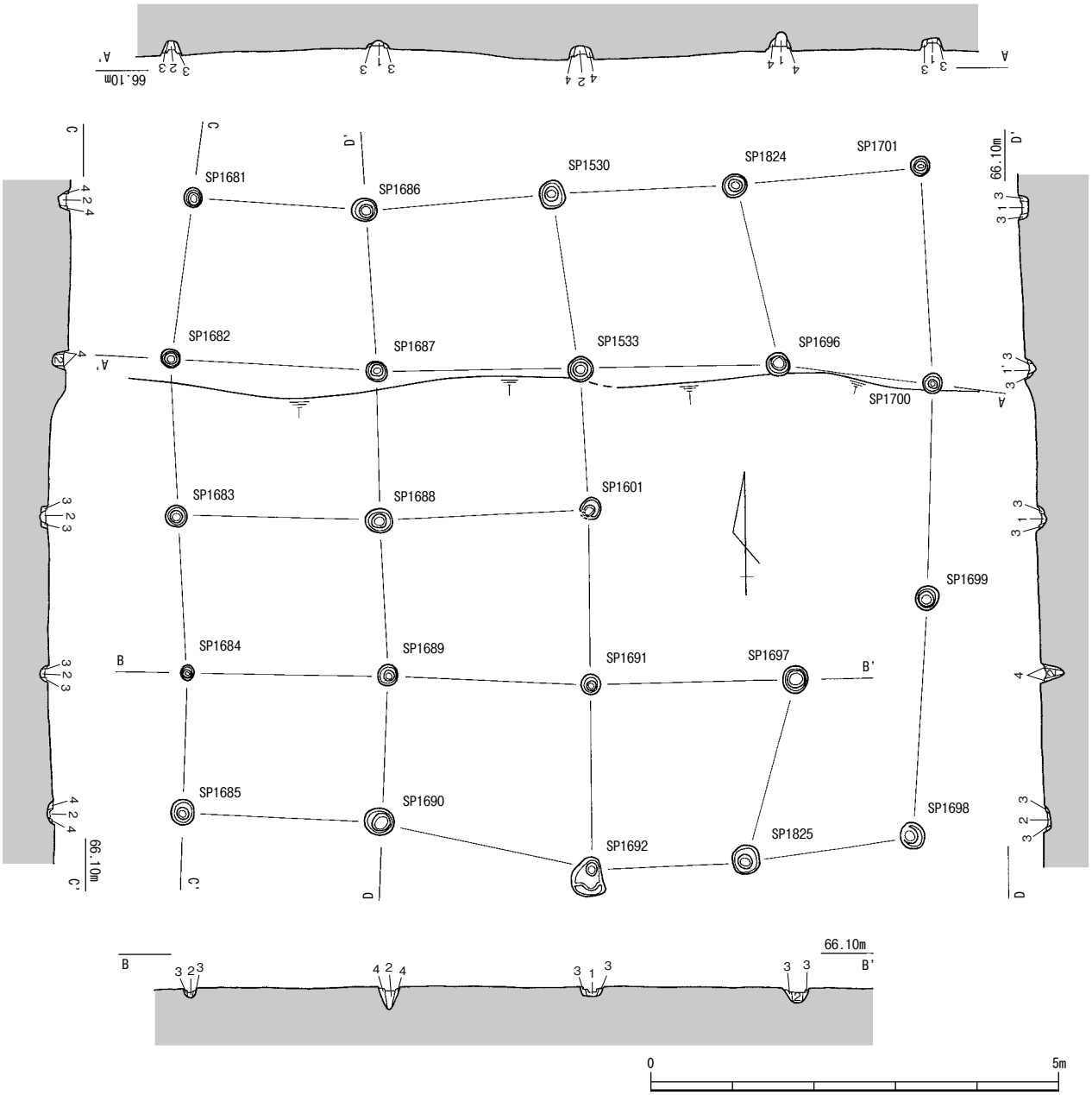
SB17



1. 2.5Y5/3　黄褐　シルト質極細砂～細砂　極粗砂含む　褐色土と黄色土のブロック混じり
2. 2.5Y6/4　にぶい黄　極細砂～細砂　極粗砂含む(地山に近い埋土)
3. 2.5Y4/3　オリーブ褐　シルト質極細砂～中砂　極粗砂含む
4. 2.5Y5/2　暗灰黄　シルト質極細砂～細砂　極粗砂含む
5. 2.5Y6/3　にぶい黄　シルト質極細砂～細砂　褐色土ブロック含む
6. 2.5Y7/3　浅黄　極細砂～細砂　外縁にFe_2O_3沈着(木根の影響受けたグライ化層)

SB17　平面図・断面図

SB18

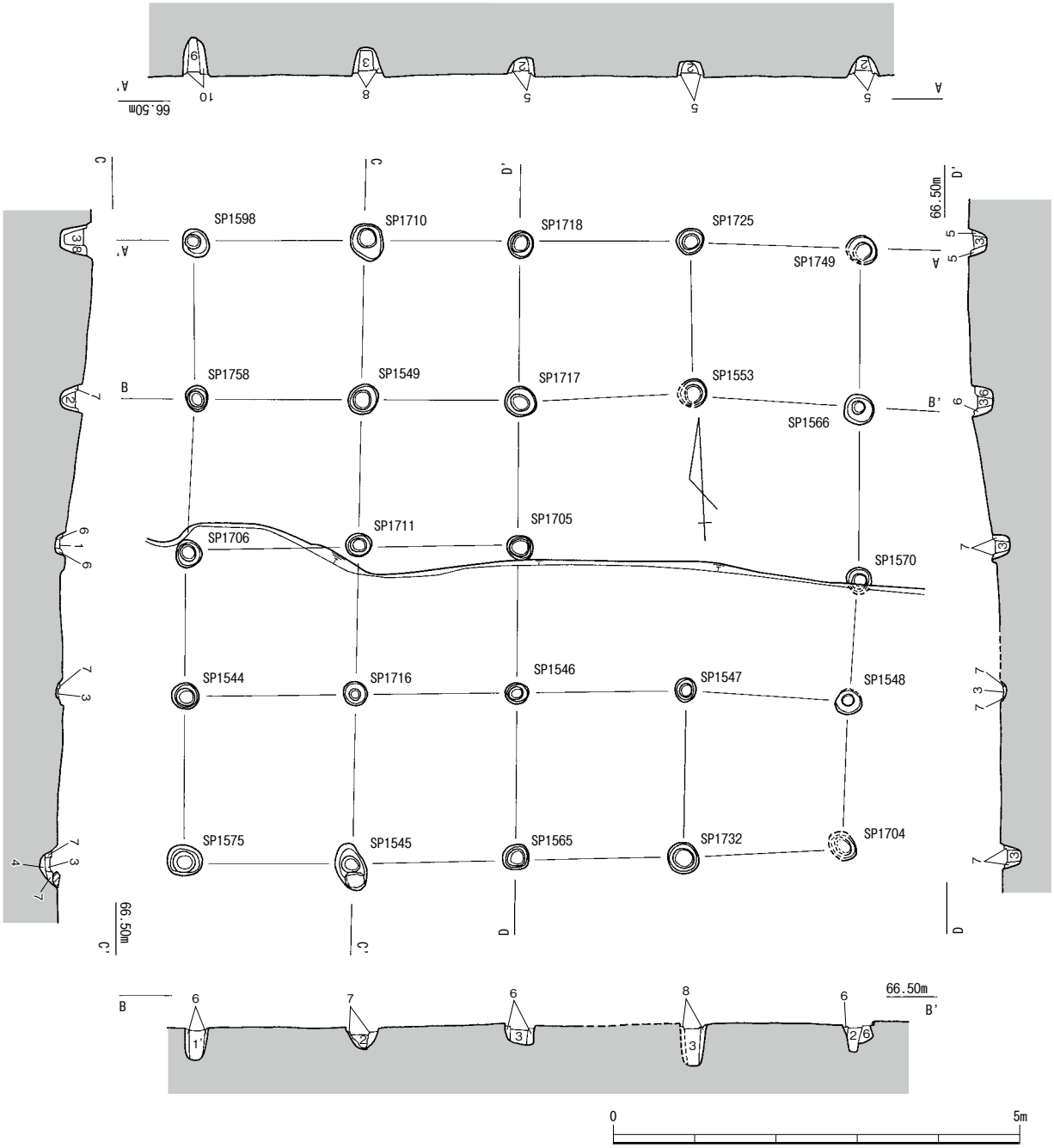


1. 2.5Y5/3 黄褐 シルト質極細砂～細砂 極粗砂含む 褐色土と黄色土のブロック混じり
1'. 2.5Y5/3 黄褐 シルト質極細砂～細砂 極粗砂含む 褐色土と黄色土のブロック混じり 1cm大の礫含む
2. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質極細砂～細砂 極粗砂含む
3. 2.5Y6/4 にぶい黄 極細砂～細砂 極粗砂含む(地山に近い埋土)
4. 2.5Y6/3 にぶい黄 シルト質極細砂～細砂 褐色土ブロック含む

SB18 平面図・断面図

図版 30

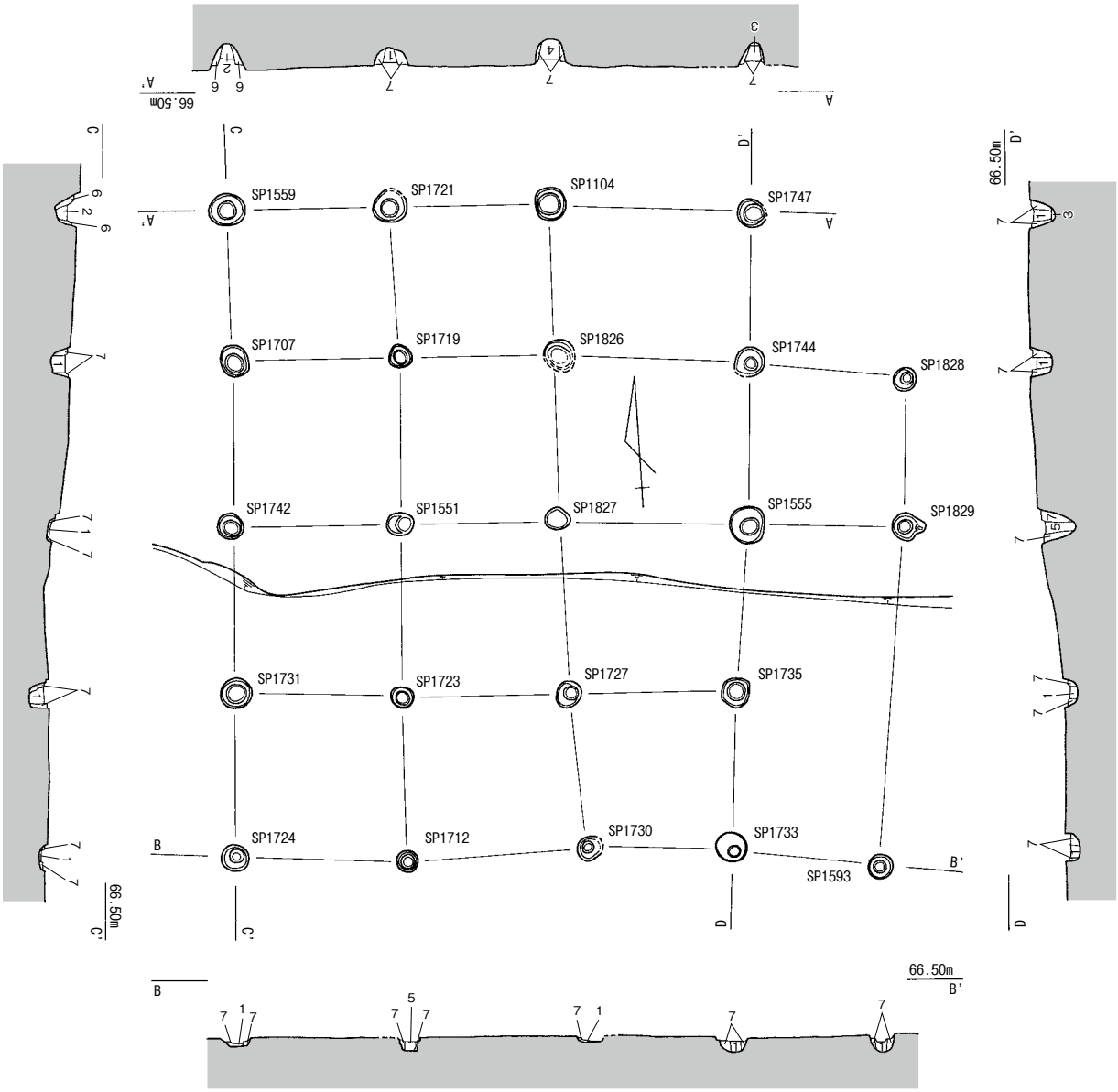
SB19



1. 2.5Y5/3 黄褐 シルト質極細砂～細砂 極粗砂含む 褐色土と黄色土のブロック混じり
1'. 2.5Y5/3 黄褐 シルト質極細砂～細砂 極粗砂含む 褐色土と黄色土のブロック混じり 10cm大の礫
2. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質極細砂～細砂 極粗砂含む
3. 2.5Y7/3 浅黄 極細砂～細砂 外縁にFe_2O_3沈着(木根の影響受けたグライ層)
4. 10YR5/2 灰黄褐 シルト質極細砂～細砂 極粗砂含む 炭
5. 2.5Y6/4 にぶい黄 極細砂～細砂 極粗砂含む(地山に近い埋土)
6. 2.5Y6/3 にぶい黄 シルト質極細砂～細砂 褐色土ブロック含む
7. 2.5Y5/3 黄褐 極細砂～細砂(地山に近い)中礫含む
8. 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂～細砂
9. 2.5Y5/3 黄褐 シルト質極細砂～細砂
10. 10YR5/6 黄褐 シルト質中砂～細砂

SB19 平面図・断面図

SB20

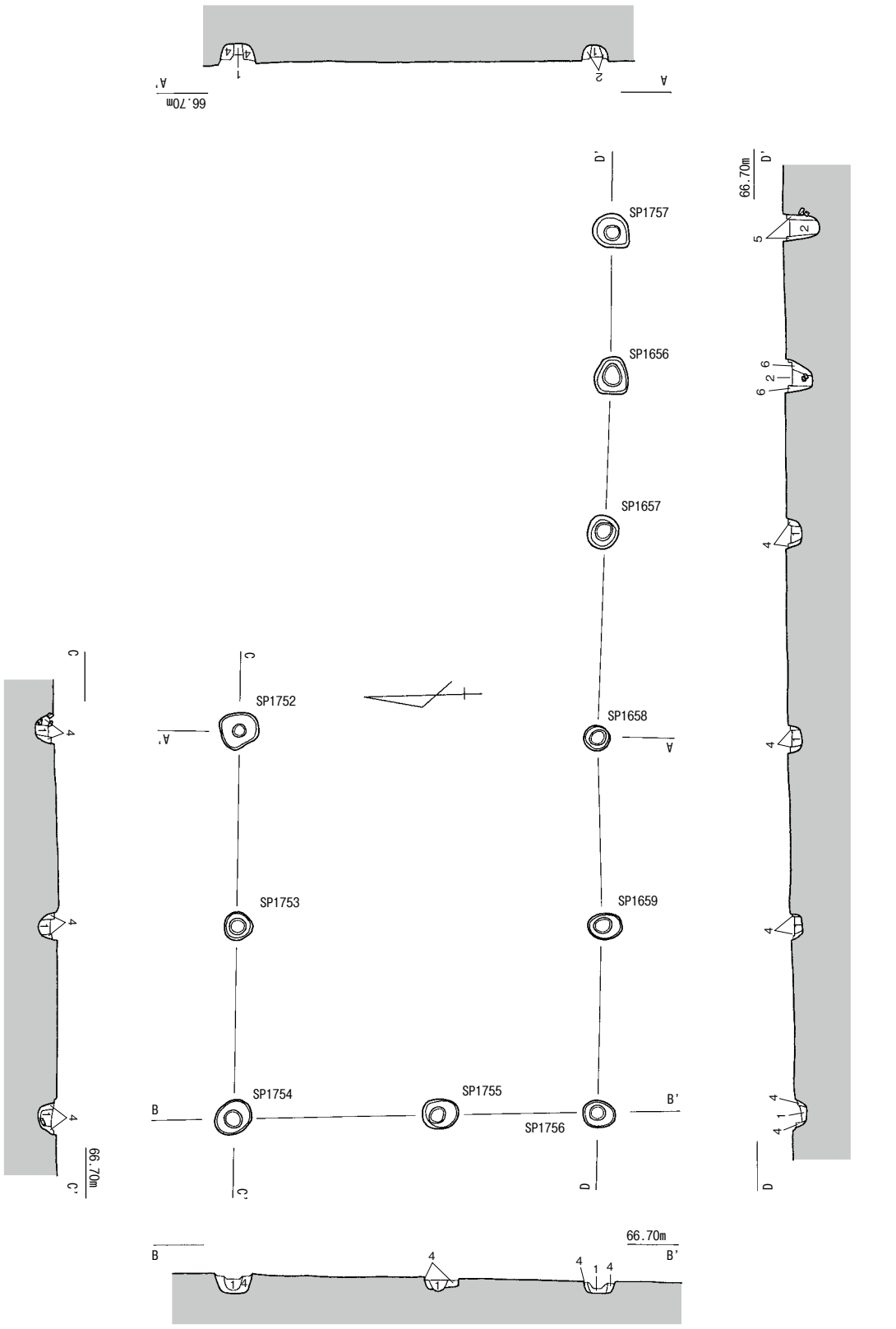


0 5m

1. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質極細砂～細砂 極粗砂含む
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト質極細砂～中砂 極粗砂含む
3. 2.5Y7/3 浅黄 極細砂～細砂 外縁にFe_2O_3沈着(木根の影響受けたグライ化層)
4. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト質極細砂～中砂 極粗砂含む
5. 10YR5/2 灰黄褐 シルト質極細砂～細砂 極粗砂含む 炭
6. 2.5Y5/4 黄褐 極細砂～細砂
7. 2.5Y6/3 にぶい黄 シルト質極細砂～細砂 褐色土ブロック含む

SB20 平面図・断面図

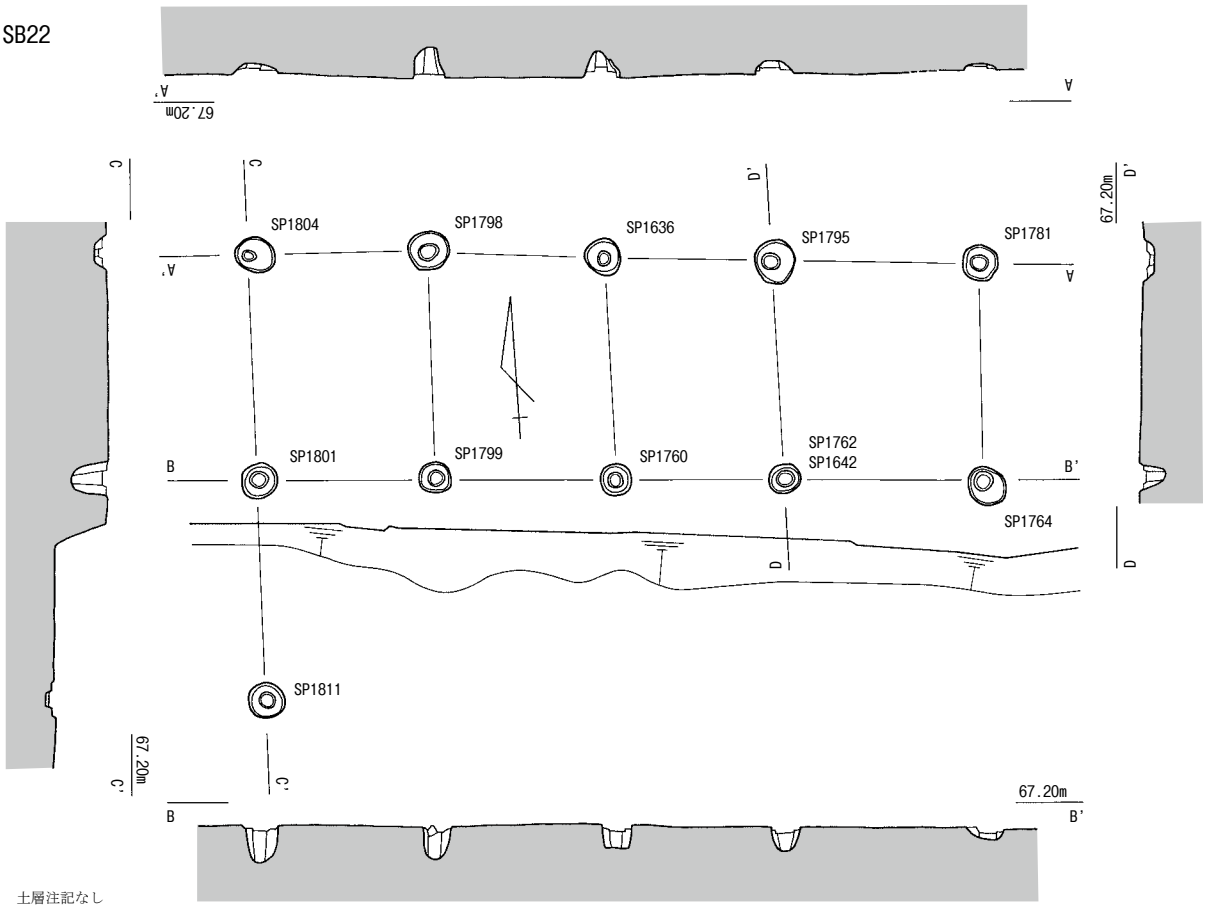
SB21



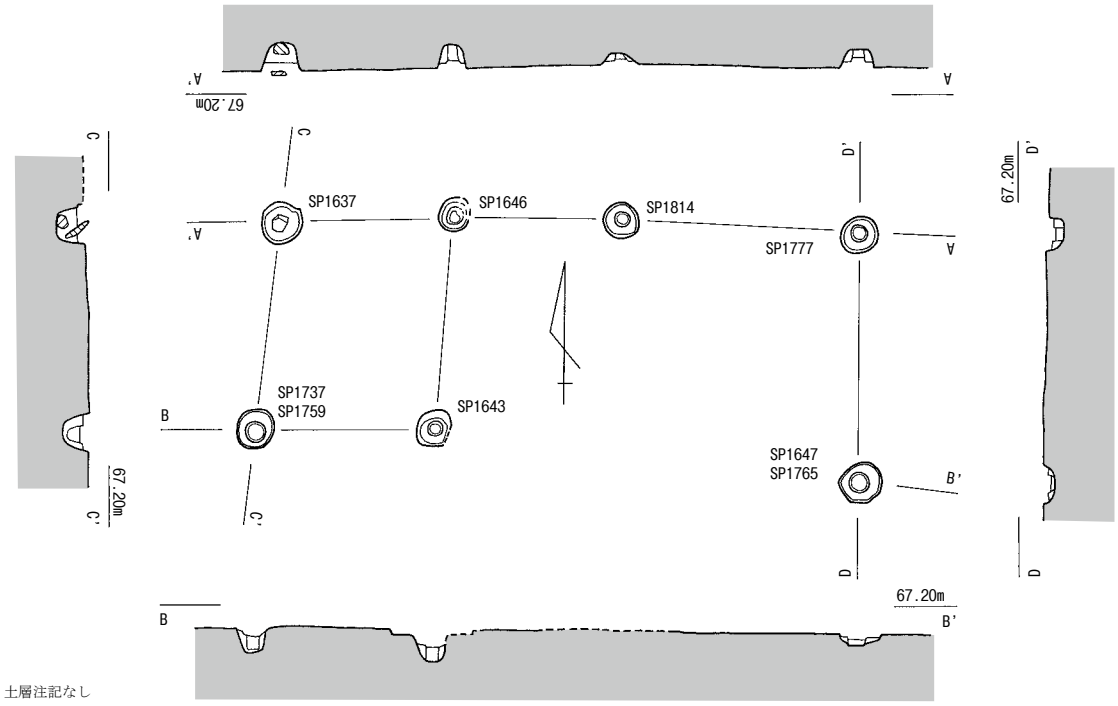
1. 10YR4/2　灰黄褐　シルト質極細砂～細砂　極粗砂～中礫含む
2. 2.5Y4/3　オリーブ褐　シルト質極細砂～中砂　極粗砂含む
3. 2.5Y5/2　暗灰黄　シルト質極細砂～細砂　極粗砂含む
4. 10YR6/4　にぶい黄橙　シルト質極細砂　極粗砂～中礫含む
5. 2.5Y5/4　黄褐　極細砂～細砂
6. 2.5Y5/4　黄褐　シルト質極細砂～細砂

SB21　平面図・断面図

SB22

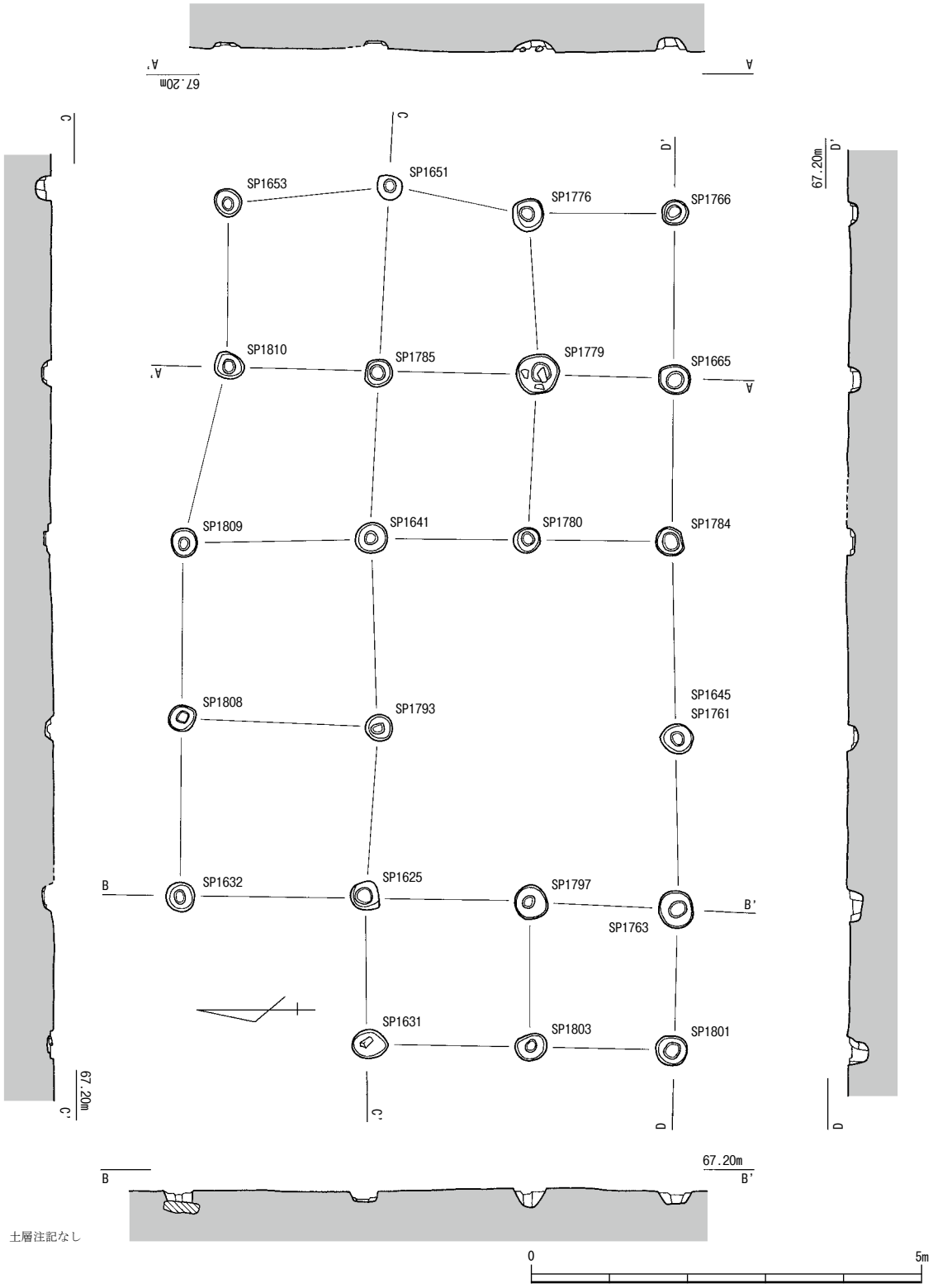


SB24



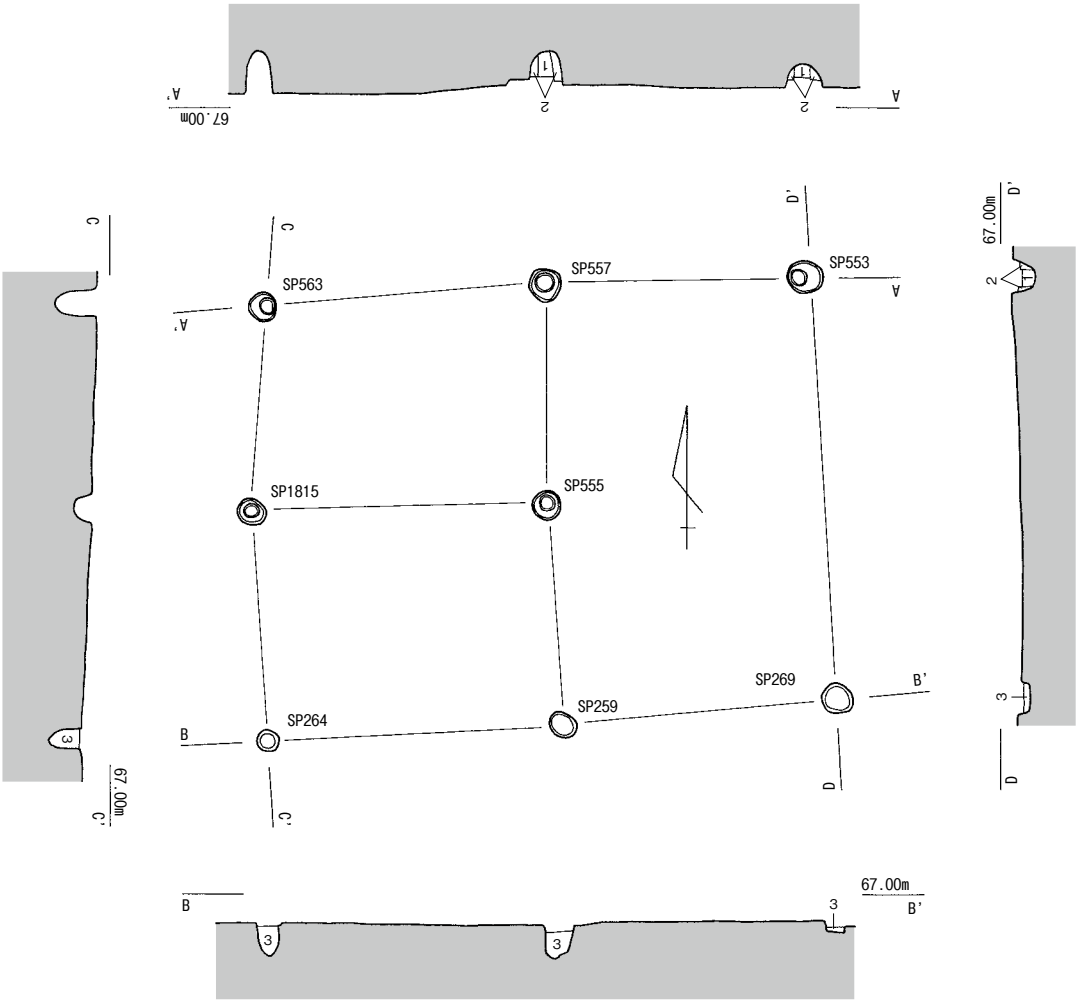
SB22・24　平面図・断面図

SB23



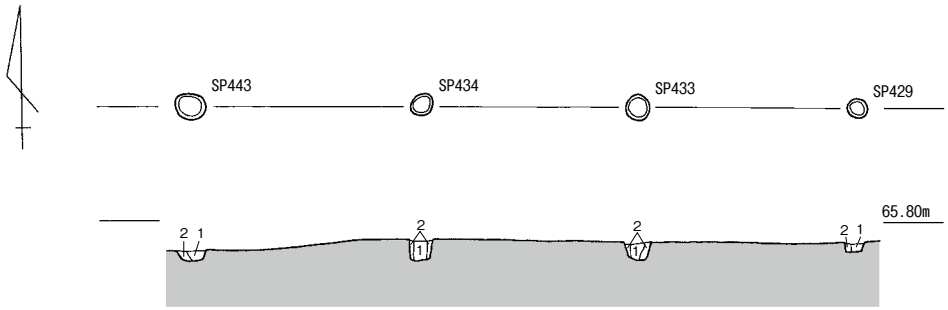
SB23　平面図・断面図

SB25



1. 10YR3/4　暗褐　シルト質極細砂(炭含む)
2. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質極細砂
3. 7.5YR5/1　褐灰　細砂

SA01



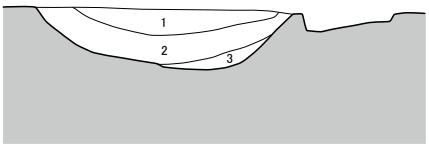
1. 2.5Y7/1　灰白　細粒砂
2. 2.5Y8/4　淡黄　細粒砂シルト質(1層がやや混じる)

0　5m

SB25・SA01　平面図・断面図

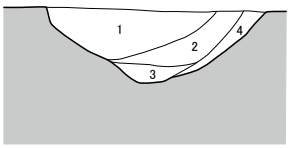
SB05 雨落溝断面図

SD857



1. 10YR4/4 褐 シルト質細砂～中砂
2. 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂～細砂
3. 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂

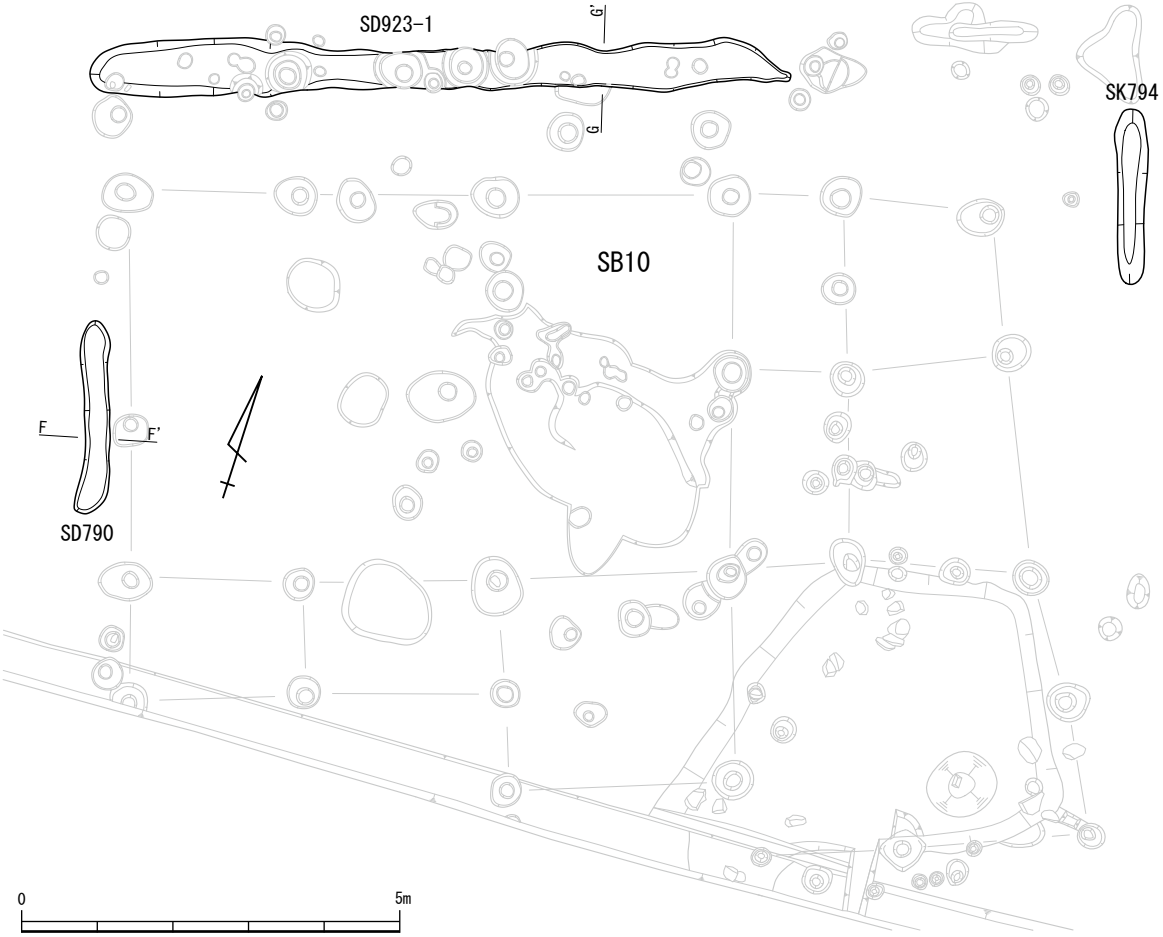
SD822



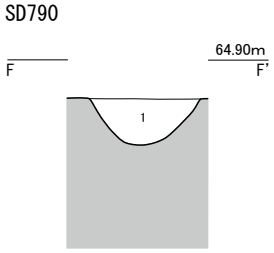
1. 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト質粗砂混り細砂～極細砂
2. 10YR4/4 褐 極細砂～細砂
3. 10YR4/3 にぶい黄褐 粗砂混じりシルト質極細砂
4. 10YR4/4 褐 シルト質極細砂

0 1m

SB10 雨落溝

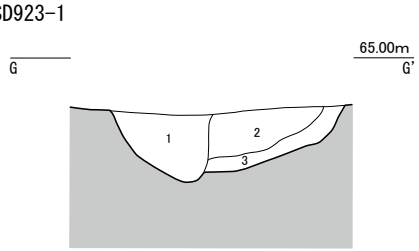


SD790



1. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト質細砂 1㎝の礫含む

SD923-1



1. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト質極細砂～細砂
2. 2.5Y6/4 にぶい黄 極細砂～細砂 粗砂含む
3. 2.5Y6/3 にぶい黄 極細砂～細砂 粗砂含む

0 1m

SB05 雨落溝断面図・SB10 雨落溝　平面図・断面図

図版21　SB04

A－A'

SP422	1. 7.5YR6/1	褐灰	細粒砂ややシルト質
	2. 2.5Y8/4	淡黄	細粒砂シルト質(2.5Y7/1灰白色細粒砂混じり)
SP421	1. 7.5YR6/1	褐灰	細粒砂ややシルト質
	2. 2.5Y8/4	淡黄	細粒砂シルト質(2.5Y7/1灰白色細粒砂混じり)
SP420	1. 10YR7/1	灰白	細粒砂
	2. 2.5Y7/3	浅黄	細粒砂

B－B'

SP375	1. 7.5YR6/1	褐灰	細粒砂ややシルト質
	2. 2.5Y8/4	淡黄	細粒砂シルト質(2.5Y7/1灰白色細粒砂混じり)
SP376	1. 7.5YR6/1	褐灰	細粒砂ややシルト質
	2. 2.5Y8/4	淡黄	細粒砂シルト質(2.5Y7/1灰白色細粒砂混じり)

C－C'

SP425	1. 5Y7/1	灰白	細粒砂
	2. 2.5Y8/4	淡黄	細粒砂シルト質(2.5Y7/1灰白色細粒砂混じり)
SP399	1. 5Y7/1	灰白	細粒砂
	2. 2.5Y8/4	淡黄	細粒砂シルト質(2.5Y7/1灰白色細粒砂混じり)
SP436	1. 10YR7/1	灰白	細粒砂
	2. 2.5Y8/4	淡黄	細粒砂シルト質(2.5Y7/1灰白色細粒砂混じり)
SP445	1. 10YR7/1	灰白	細粒砂
	2. 2.5Y8/4	淡黄	細粒砂シルト質(2.5Y7/1灰白色細粒砂混じり)
SP375	B－B'にあり		

D－D'

SP420	A－A'にあり		
SP424	1. 7.5Y5/1	灰	細粒砂
	2. 2.5Y8/4	淡黄	細粒砂シルト質(2.5Y7/1灰白色細粒砂混じり)
SP430	1. 10YR7/1	灰白	細粒砂
	2. 2.5Y7/3	浅黄	細粒砂
SP435	1. 7.5YR6/1	褐灰	細粒砂ややシルト質
	2. 2.5Y8/4	淡黄	細粒砂シルト質(2.5Y7/1灰白色細粒砂混じり)
SP444	1. 7.5YR6/1	褐灰	細粒砂ややシルト質
	2. 2.5Y8/4	淡黄	細粒砂シルト質(2.5Y7/1灰白色細粒砂混じり)
SP448	1. 7.5YR6/1	褐灰	細粒砂ややシルト質
	2. 2.5Y8/4	淡黄	細粒砂シルト質(2.5Y7/1灰白色細粒砂混じり)

E－E'

SP376	B－B'にあり		
SP446	1. 7.5YR6/1	褐灰	細粒砂ややシルト質
	2. 2.5Y8/4	淡黄	細粒砂シルト質(2.5Y7/1灰白色細粒砂混じり)
SP441	1. 7.5YR6/1	褐灰	細粒砂ややシルト質
	2. 2.5Y8/4	淡黄	細粒砂シルト質(2.5Y7/1灰白色細粒砂混じり)
SP437	1. 7.5YR6/1	褐灰	細粒砂ややシルト質
	2. 2.5Y8/4	淡黄	細粒砂シルト質(2.5Y7/1灰白色細粒砂混じり)
SP431	1. 7.5YR6/1	褐灰	細粒砂ややシルト質
	2. 2.5Y8/4	淡黄	細粒砂シルト質(2.5Y7/1灰白色細粒砂混じり)
SP426	1. 7.5YR6/1	褐灰	細粒砂ややシルト質
	2. 2.5Y8/4	淡黄	細粒砂シルト質(2.5Y7/1灰白色細粒砂混じり)
	3. 7.5Y7/1	灰白	細粒砂
SP421	A－A'にあり		

F－F'

SP371	1. 7.5YR6/1	褐灰	細粒砂ややシルト質
	2. 2.5Y8/4	淡黄	細粒砂シルト質(2.5Y7/1灰白色細粒砂混じり)
SP447	1. 7.5YR6/1	褐灰	細粒砂ややシルト質　土器・炭混じり
	2. 5Y7/1	灰白	細粒砂シルト質
SP442	1. 7.5YR6/1	褐灰	細粒砂ややシルト質
	2. 5Y7/1	灰白	細粒砂シルト質
SP438	1. 7.5YR6/1	褐灰	細粒砂ややシルト質
	2. 2.5Y8/4	淡黄	細粒砂シルト質(2.5Y7/1灰白色細粒砂混じり)
	3. 5Y7/1	灰白	細粒砂シルト質
SP432	1. 7.5YR6/1	褐灰	細粒砂ややシルト質
	2. 2.5Y8/4	淡黄	細粒砂シルト質(2.5Y7/1灰白色細粒砂混じり)
SP428	1. 7.5YR6/1	褐灰	細粒砂ややシルト質
	2. 2.5Y8/4	淡黄	細粒砂シルト質(2.5Y7/1灰白色細粒砂混じり)
	3. 2.5Y8/4	淡黄	細粒砂
SP422	A－A'にあり		

図版22　SB05

A－A'

SP843	1. 2.5Y5/6	黄褐	極細砂～細砂　シルト分含む(砂層に近い)
	2. 2.5Y6/4	にぶい黄	極細砂～細砂
SP986	1. 2.5Y4/4	オリーブ褐	シルト質極細砂～細砂　粗砂含む　土器
	2. 2.5Y5/6	黄褐	極細砂～細砂　シルト分含む(砂層に近い)
	3. 2.5Y6/4	にぶい黄	極細砂～細砂
SP993	1. 2.5Y4/2	暗灰黄	極細砂～細砂質シルト　土器 φ3～5cm細礫含む
	2. 2.5Y5/3	黄褐	シルト質極細砂～細砂
SP829	1. 2.5Y4/2	暗灰黄	極細砂～細砂質シルト　土器 φ3～5cm細礫含む
	2. 2.5Y5/3	黄褐	シルト質極細砂～細砂
	3. 2.5Y5/4	黄褐	シルト質極細砂～細砂
SP835	1. 2.5Y4/2	暗灰黄	極細砂～細砂質シルト　土器 φ3～5cm細礫含む
	2. 2.5Y5/3	黄褐	シルト質極細砂～細砂
	3. 2.5Y6/4	にぶい黄	シルト質極細砂～細砂 床面にFe_2O_3沈着還元色を呈する

B－B'

SP858	1. 10YR5/6	黄褐	極細砂～細砂　シルト分含む (砂層ややシルトっぽい)
	2. 2.5Y5/4	黄褐	シルト質極細砂～細砂
SP910	1. 2.5Y4/4	オリーブ褐	シルト質極細砂～細砂　粗砂含む　土器 (表土がブロック状に落ち込んだもの)
	2. 10YR5/6	黄褐	極細砂～細砂　シルト分含む (砂層ややシルトっぽい)
	3. 2.5Y5/3	黄褐	極細砂～細砂　炭・土器
	4. 2.5Y5/4	黄褐	シルト質極細砂～細砂
SP970	1. 2.5Y4/2	暗灰黄	極細砂～細砂質シルト 土器　φ3～5cm細礫含む
	2. 2.5Y5/3	黄褐	シルト質極細砂～細砂
SP972	1. 2.5Y4/4	オリーブ褐	シルト質極細砂～細砂　粗砂含む 土器(表土がブロック状に落ち込んだもの)
	2. 10YR5/6	黄褐	極細砂～細砂　シルト分含む (砂層ややシルトっぽい)
	3. 2.5Y5/4	黄褐	シルト質極細砂～細砂
SP902	1. 2.5Y4/2	暗灰黄	極細砂～細砂質シルト 土器　φ3～5cm細礫含む
	2. 2.5Y5/3	黄褐	シルト質極細砂～細砂

C－C'

SP1040	3 2.5Y4/2	暗灰黄	極細砂～細砂質シルト 土器　φ3～5cm細礫含む
	12 2.5Y5/3	黄褐	シルト質極細砂～細砂　土器・炭
SP835	A－A'にあり		
SP820	1. 2.5Y4/2	暗灰黄	極細砂～細砂質シルト 土器　φ3～5cm細礫含む
	2. 2.5Y4/2	暗灰黄	極細砂混じりシルト黄色土ブロック含む
	3. 2.5Y5/4	黄褐	シルト質極細砂～細砂
SP989	1. 2.5Y4/2	暗灰黄	極細砂～細砂質シルト 土器　φ3～5cm細礫含む
	2. 2.5Y4/4	オリーブ褐	細砂　シルト分含む
	3. 2.5Y5/3	黄褐	極細砂～細砂　炭・土器
SP858	B－B'にあり		

図版22　SB06

A－A'

SP717	1. 2.5Y5/3	黄褐	極細砂～細砂　シルト分含む
	2. 2.5Y6/6	明黄褐	極細砂～細砂(地山に近い)
SP1014	1. 2.5Y5/3	黄褐	極細砂～細砂　シルト分含む
	2. 2.5Y6/6	明黄褐	極細砂～細砂(地山に近い)
SP1022	1. 2.5Y5/3	黄褐	極細砂～細砂　シルト分含む
	2. 2.5Y6/6	明黄褐	極細砂～細砂(地山に近い)
SP752	1. 2.5Y5/3	黄褐	シルト質極細砂～細砂
	2. 2.5Y4/2	暗灰黄	極細砂～細砂質シルト、 土器　φ3～5cm細礫含む
	3. 2.5Y6/4	にぶい黄	シルト質極細砂～細砂
	4. 2.5Y6/6	明黄褐	極細砂～細砂(地山に近い)
SP1024	1. 2.5Y5/3	黄褐	極細砂～細砂　シルト分含む
	2. 2.5Y6/6	明黄褐	極細砂～細砂(地山に近い)
	3. 10YR5/6	黄褐	細砂　シルト分含む

B－B'

SP1025	1. 2.5Y5/3	黄褐	極細砂～細砂　シルト分含む
	2. 2.5Y6/6	明黄褐	極細砂～細砂(地山に近い)
	3. 2.5Y6/4	にぶい黄	シルト質極細砂～細砂
SP749	1. 2.5Y4/3	オリーブ褐	極細砂～細砂　シルト分含む
	2. 10YR3/2	黒褐	細砂　炭・土器
	3. 2.5Y6/6	明黄褐	極細砂～細砂(地山に近い)
	4. 2.5Y6/4	にぶい黄	シルト質極細砂～細砂 床面にFe_2O3沈着　還元色を呈する
SP1009	1. 2.5Y4/3	オリーブ褐	極細砂～細砂　シルト分含む
	2. 2.5Y4/4	オリーブ褐	細砂　シルト分含む
	3. 2.5Y6/6	明黄褐	極細砂～細砂(地山に近い)
SP1010-2	1. 2.5Y5/3	黄褐	極細砂～細砂　シルト分含む
	2. 2.5Y6/6	明黄褐	極細砂～細砂(地山に近い)
SP758	1. 2.5Y5/3	黄褐	極細砂～細砂　シルト分含む
	2. 2.5Y6/3	にぶい黄	極細砂～細砂

C－C'

SP1024	A－A'にあり		
SP1025	B－B'にあり		
SP1027	1. 2.5Y5/3	黄褐	極細砂～細砂　シルト分含む
	2. 2.5Y6/3	にぶい黄	極細砂～細砂

D－D'

SP831	1. 2.5Y4/2	暗灰黄	極細砂～細砂質シルト 土器　φ3～5cm細礫含む
	2. 2.5Y6/4	にぶい黄	シルト質極細砂～細砂
	3. 2.5Y5/3	黄褐	シルト質極細砂～細砂
SP1009	B－B'にあり		
SP1022	A－A'にあり		

図版 24　SB10

A － A'

SP1066	1.	2.5Y4/2	暗灰黄	シルト質極細砂
	2.	2.5Y5/3	黄褐	シルト質極細砂
SP1065	1.	2.5Y4/2	暗灰黄	シルト質極細砂（Mn 含む）
	2.	2.5Y5/4	黄褐	シルト質極細砂（Mn 含む）
SP804	1.	10YR4/1	褐灰	シルト質極細砂
	2.	2.5Y5/3	黄褐	シルト質極細砂
SP1064	1.	2.5Y4/2	暗灰黄	シルト質極細砂
	2.	2.5Y5/3	黄褐	シルト質極細砂
SP1063	1.	2.5Y4/2	暗灰黄	シルト質極細砂（Mn 含む）
	2.	2.5Y5/3	黄褐	シルト質極細砂（Mn 含む）

B － B'

SP1073	1.	2.5Y3/2	黒褐	シルト質極細砂　底に鉄分溜まる
	2.	2.5Y5/2	暗灰黄	シルト質極細砂
	3.	2.5Y4/4	オリーブ褐	シルト質極細砂
SP866	1.	2.5Y4/2	暗灰黄	シルト質極細砂
	2.	2.5Y5/3	黄褐	シルト質極細砂
SP870	1.	2.5Y3/3	暗オリーブ褐	シルト質極細砂（Mn・礫含む）
	2.	2.5Y5/3	黄褐	シルト質極細砂
SP1100	1.	2.5Y3/2	黒褐	シルト質極細砂
	2.	2.5Y4/2	暗灰黄	シルト質極細砂
	3.	2.5Y6/4	にぶい黄	細砂

C － C'

SP1063	A － A' にあり			
SP1074	1.	2.5Y3/3	暗オリーブ褐	シルト質極細砂
	2.	2.5Y4/3	オリーブ褐	シルト質極細砂
SP1073	B － B' にあり			
SP1085	1.	2.5Y4/2	暗灰黄	シルト質極細砂
	2.	2.5Y5/2	暗灰黄	シルト質極細砂　１・２層とも Mn 含む
SP1084	1.	2.5Y4/2	暗灰黄	シルト質極細砂（Mn 含む）
	2.	2.5Y5/3	黄褐	シルト質極細砂（Mn 含む）
SP1078	1.	2.5Y4/2	暗灰黄	シルト質極細砂
	2.	2.5Y5/3	黄褐	シルト質極細砂
	3.	2.5Y4/3	オリーブ褐	シルト質極細砂

D － D'

SP1080	1.	2.5Y4/2	暗灰黄	シルト質極細砂
	2.	2.5Y5/3	黄褐	シルト質極細砂
SP1083	1.	2.5Y4/2	暗灰黄	シルト質極細砂
	2.	2.5Y5/4	黄褐	シルト質極細砂
SP1077	1.	2.5Y4/2	暗灰黄	シルト質極細砂
	2.	2.5Y4/4	オリーブ褐	シルト質極細砂
SP870	B － B' にあり			
SP801	1.	2.5Y4/1	黄灰	シルト質極細砂
	2.	2.5Y4/3	オリーブ褐	シルト質極細砂 下の方はシルト質弱まりオリーブ強い
SP804	A － A' にあり			

図版 27　SB15

A － A'

SP968	1.	10YR5/6	黄褐	シルト質極細砂
	2.	10YR5/4	にぶい黄褐	シルト質粗砂混じり極細砂
SP967	1.	10YR5/4	にぶい黄褐	シルト質粗砂混じり細砂～中砂
	2.	10YR4/4	褐	シルト質粗砂混じり極細砂
SP966	1.	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト質極細砂
	2.	10YR5/6	黄褐	シルト質粗砂混じり極細砂
	3.	10YR4/4	褐	シルト質粗砂混じり極細砂
SP965	1.	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト質極細砂
	2.	10YR5/6	黄褐	シルト質粗砂混じり細砂
	3.	10YR4/6	褐	シルト質粗砂混じり極細砂～細砂

B － B'

SP954	1.	10YR5/4	にぶい黄褐	粗砂混じり極細砂～細砂
	2.	10YR5/6	黄褐	シルト質粗砂混じり極細砂
SP956	1.	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト質極細砂
	2.	10YR4/6	褐	シルト質粗砂混じり極細砂（炭含む）
	3.	10YR4/6	褐	シルト質極細砂
SP957	1.	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト質粗砂混じり極細砂～細砂
	2.	10YR4/4	褐	シルト質極細砂
SP958	1.	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト質粗砂混じり極細砂～細砂
	2.	10YR5/4	にぶい黄褐	シルト質極細砂

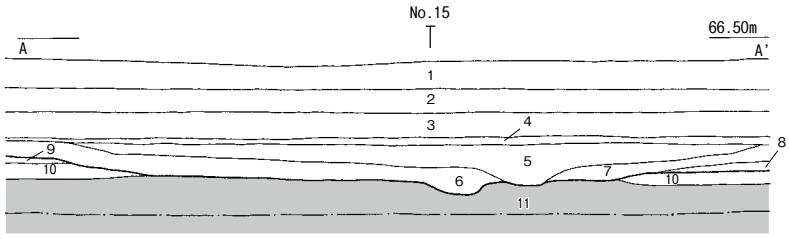
C － C'

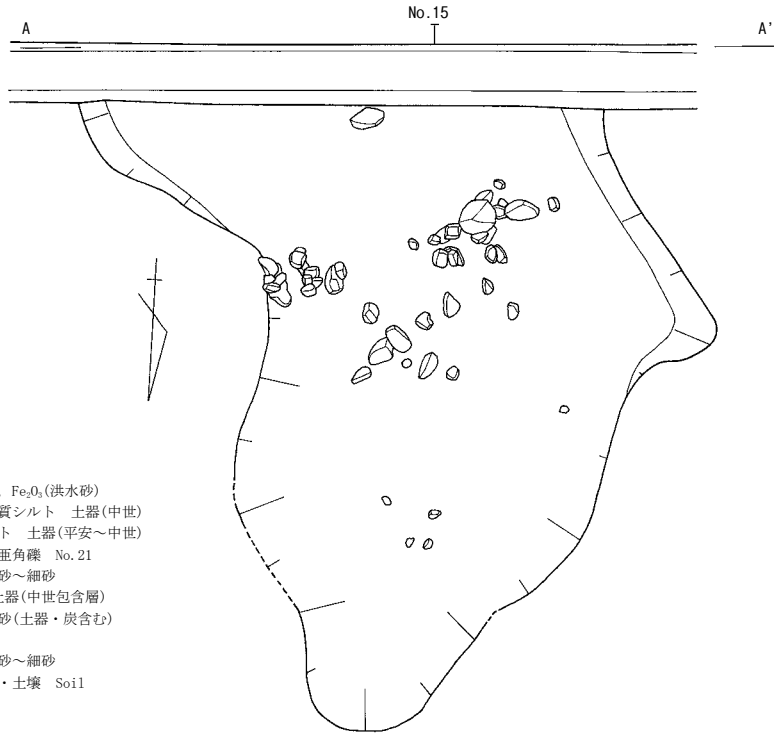
SP965	A － A' にあり			
SP962	1.	10YR5/6	黄褐	シルト質極細砂～細砂
	2.	10YR5/8	黄褐	シルト質極細砂～細砂
SP959	1.	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト質極細砂
	2.	10YR5/6	黄褐	粗砂混じり極細砂
	3.	10YR4/4	褐	粗砂混じり極細砂
SP954	B － B' にあり			

D － D'

SP958	B － B' にあり			
SP961	1.	10YR5/4	にぶい黄褐	シルト質極細砂
	2.	10YR4/4	褐	シルト質極細砂
SP964	1.	10YR4/3	にぶい黄褐	シルト質極細砂
	2.	10YR5/6	黄褐	シルト質極細砂
	3	10YR4/4	褐	シルト質極細砂
SP968	A － A' にあり			

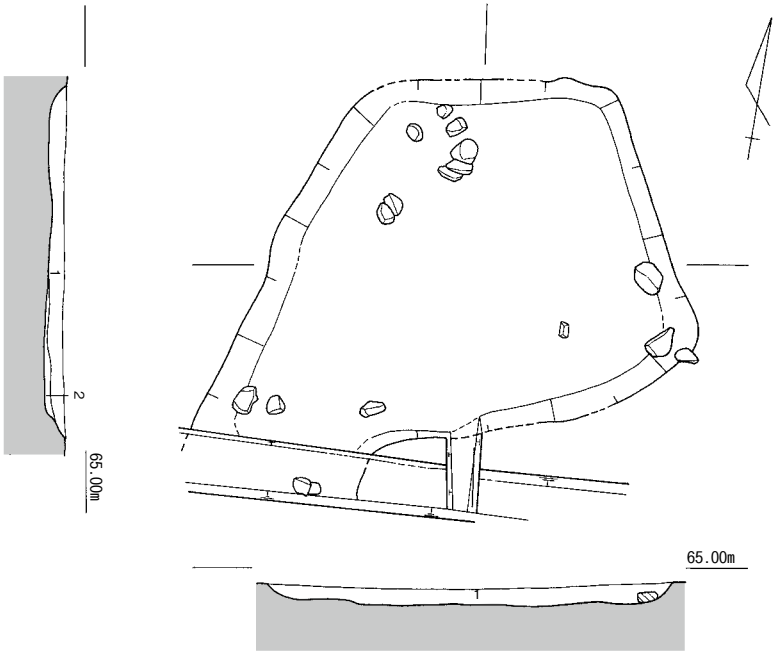
谷状落ち



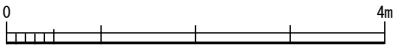


1. 盛土
2. 耕土
3. 旧耕土と盛土ブロック状
4. 2.5Y7/3 浅黄 極細砂 土器，Fe_2O_3(洪水砂)
5. 10YR4/4 褐 極細砂～細砂質シルト 土器(中世)
6. 10YR4/2 灰黄褐 極細砂質シルト 土器(平安～中世)
φ10～40cm大亜角礫 No.21
7. 10YR6/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂～細砂
1cm大の礫，土器(中世包含層)
8. 10YR4/4 褐 シルト質極細砂(土器・炭含む)
9. 2.5Y4/4 オリーブ褐 極細砂～細砂
10. 10YR4/3 褐 シルト質極細砂～細砂
わずかに土器・土壌 Soil
11. 10YR5/4 にぶい黄褐 極細砂～細砂

SX795

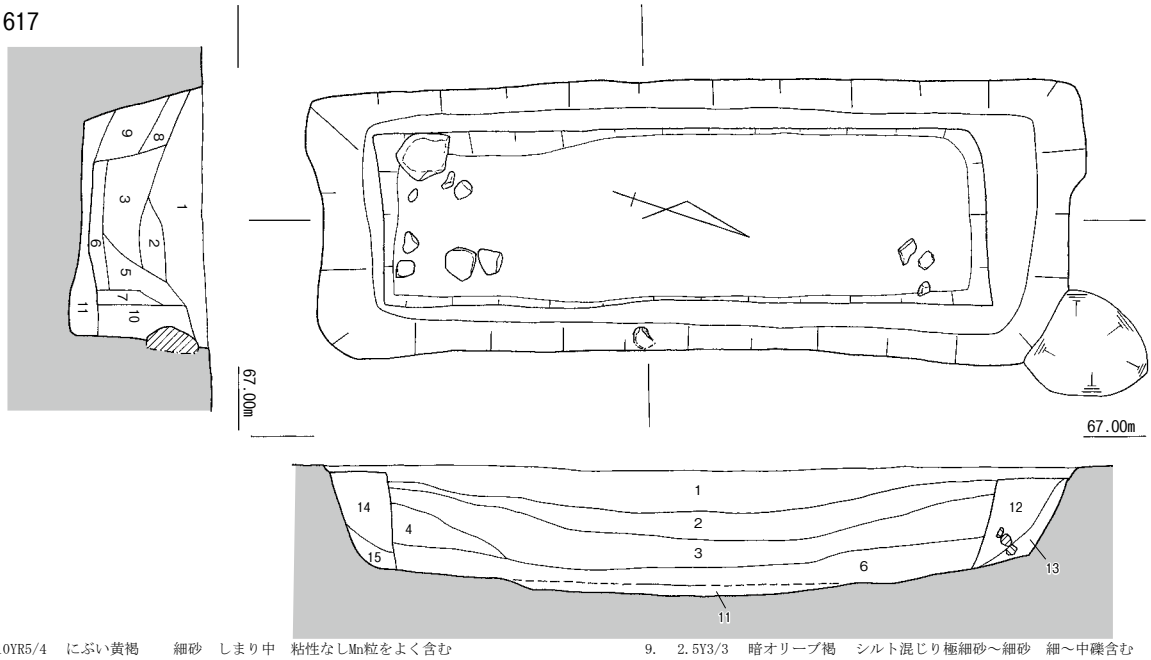


1. 2.5Y5/3 黄褐 極細砂～細砂 粗砂～中礫含む，φ15～30cm大の亜円礫・土器
2. 2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト混じり 細砂～中砂 Mn.



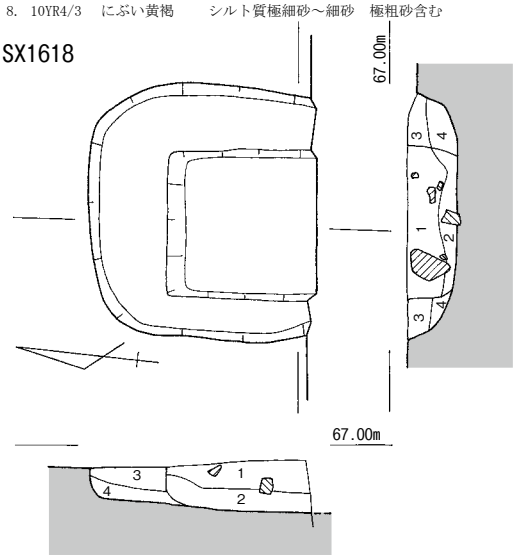
15・16 区谷状落ち SX795 平面図・断面図

SX1617



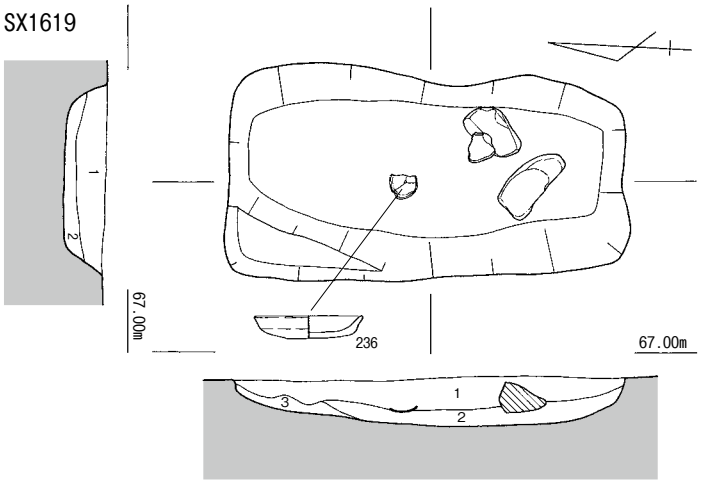
1. 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂 しまり中 粘性なしMn粒をよく含む
2. 10YR5/3 にぶい黄褐 極細砂～細砂 しまり中 粘性なしMn粒を含む
3. 10YR4/2 灰黄褐 中砂混じり細砂 しまり中 粘性なしMn粒をわずかに含む
4. 10YR3/3 暗褐 極細砂～細砂 しまりやや弱い 粘性弱
5. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト質極細砂～細砂 細礫含む
6. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト混じり中砂 細礫砂含む
7. 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂質シルト 細礫含む
8. 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂～細砂 極粗砂含む
9. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト混じり極細砂～細砂 細～中礫含む
10. 2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト質極細砂 細礫含む
11. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト混じり細砂
12. 10YR4/4 褐 細礫混じり細砂～極細砂(φ3cm程度の礫含む)
13. 10YR3/3 暗褐 細礫混じり中砂～細砂(φ3cm程度までの礫含む)
14. 10YR5/4 にぶい黄褐 シルト質極細砂
15. 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト質粗砂混じり細砂～極細砂

SX1618



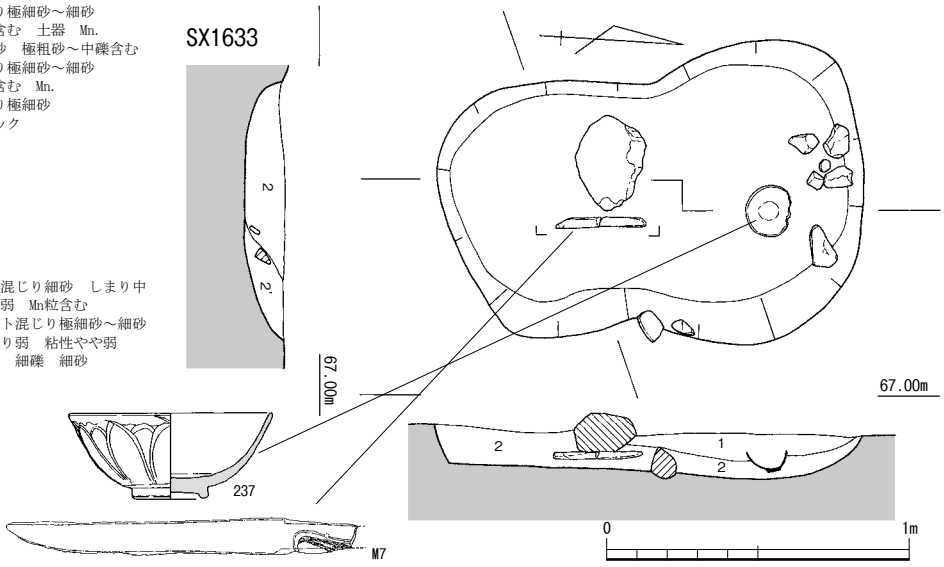
1. 10YR5/3 にぶい黄褐 極粗砂混じり極細砂～細砂 細礫～大礫含む 土器 Mn.
2. 10YR5/4 にぶい黄褐 極細砂～細砂 極粗砂～中礫含む
3. 10YR5/3 にぶい黄褐 極粗砂混じり極細砂～細砂 細礫～中礫含む Mn.
4. 2.5Y4/2 にぶい黄褐 極粗砂混じり極細砂 灰色土ブロック

SX1619



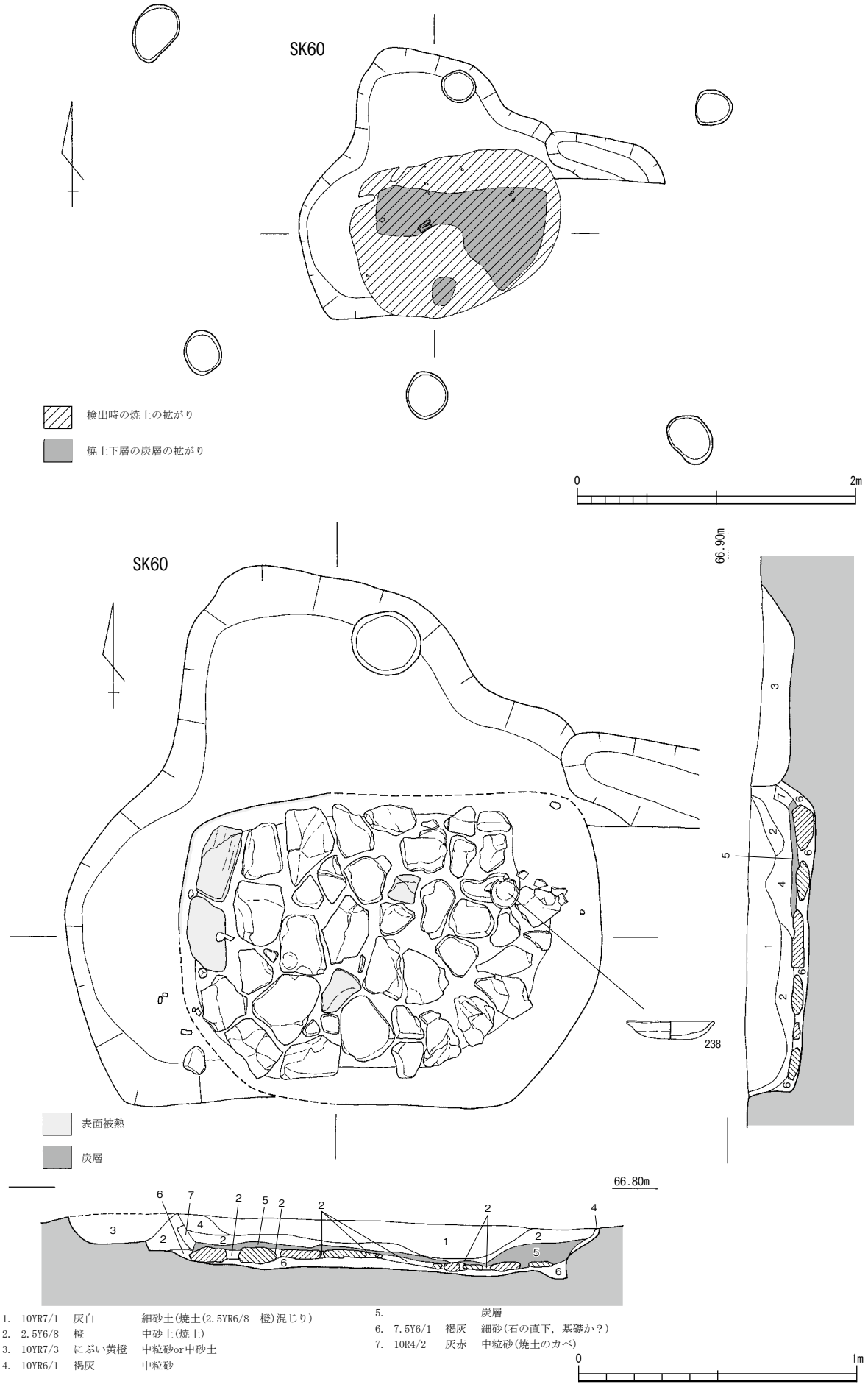
1. 10YR4/3 にぶい黄褐 極細砂～細砂 しまり中 粘性やや弱
2. 10YR3/2 黒褐 極細砂～細砂 しまりやや弱 粘性やや弱
3. 10YR4/2 灰黄褐 極細砂～細砂 しまりやや弱 粘性弱い

SX1633



1. 10YR4/2 灰黄褐 中砂混じり細砂 しまり中 粘性弱 Mn粒含む
2. 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト混じり極細砂～細砂 しまり弱 粘性やや弱
2'. 10YR4/3 にぶい黄褐 粗砂 細礫 細砂

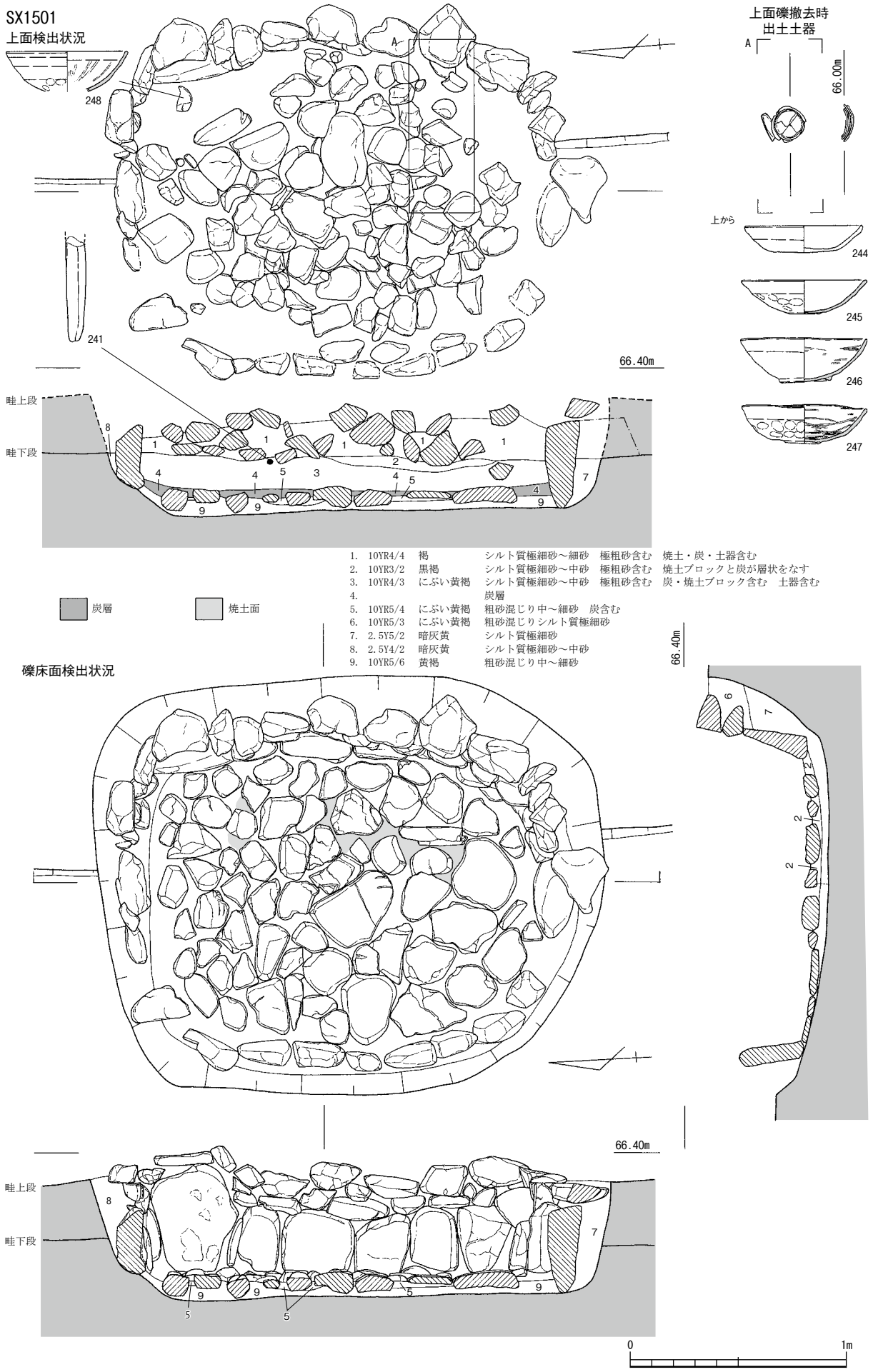
中世墓（SX1617 ～ 1619・1633）



1. 10YR7/1 灰白 細砂土(焼土(2.5YR6/8 橙)混じり)
2. 2.5Y6/8 橙 中砂土(焼土)
3. 10YR7/3 にぶい黄橙 中粒砂or中砂土
4. 10YR6/1 褐灰 中粒砂
5. 炭層
6. 7.5Y6/1 褐灰 細砂(石の直下，基礎か？)
7. 10R4/2 灰赤 中粒砂(焼土のカベ)

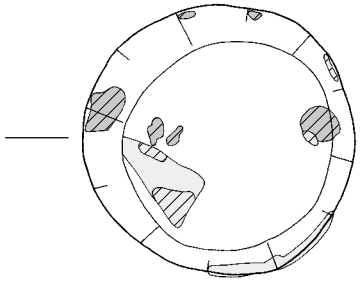
石敷遺構（1）（SK60）

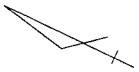
図版 42



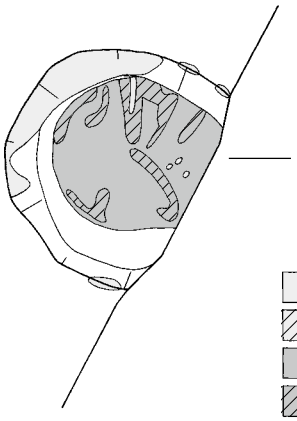
石敷遺構（2）（SX1501）

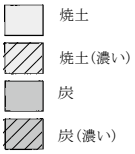
SK1537





SK1538



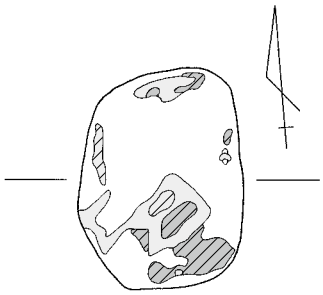


65.90m

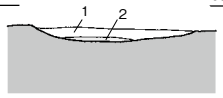
1. 2.5Y5/2　暗灰黄　極細砂～細砂　極粗砂～細礫含む
　チップ状の炭　５㎜～２cm大の焼土片多く含む(炭層)
2. 2.5Y5/3　黄褐　極細砂　炭・焼土片含む(地山と同質の土に炭が混じる、
　下焼きの痕跡か？)
3. 2.5Y5/4　黄褐　極細砂～細砂(地山)

1. 10YR4/1　褐灰　極細砂～細砂　チップ状の炭多量に含む(炭層)
2. 7.5YR5/4　にぶい褐　極細砂(焼土層)
3. 2.5Y5/3　黄褐　極細砂　炭・焼土片含む(地山と同質の土に炭が混じる、
　下焼きの痕跡か？)
4. 2.5Y5/4　黄褐　極細砂～細砂(地山)

SX740



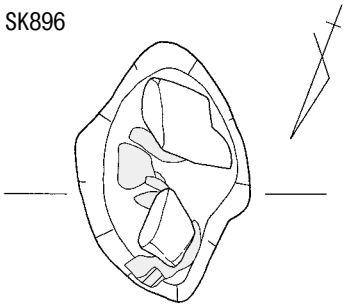
65.50m



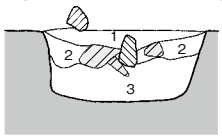
1. 10YR5/2　灰黄褐　シルト質極細砂に炭層及び焼土含む
2.　焼土

SK943

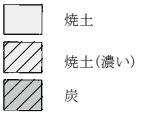
SK896

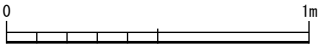


65.30m



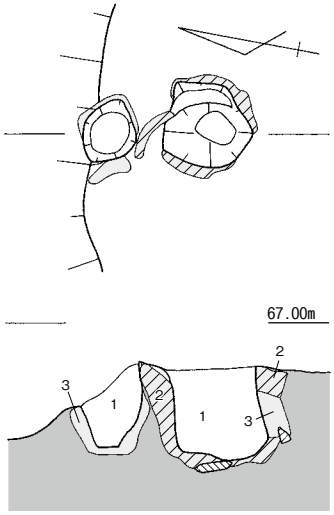
1. 10YR5/4　にぶい黄褐　シルト質極細砂～細砂　15～50cm大の亜角礫含む
2. 10YR5/3　にぶい黄褐　シルト質極細砂～細砂　①よりシルト分強い
　焼土ブロック　直径2cm大の円礫
3. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質極細砂～細砂(シルト分強い)





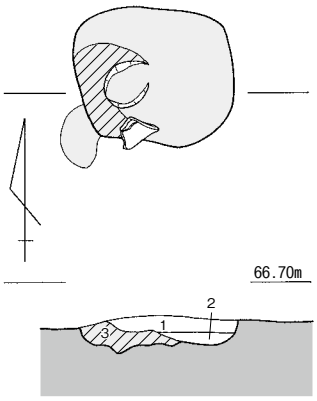
炉跡（SK1537・1538・740・943・896）

SK70



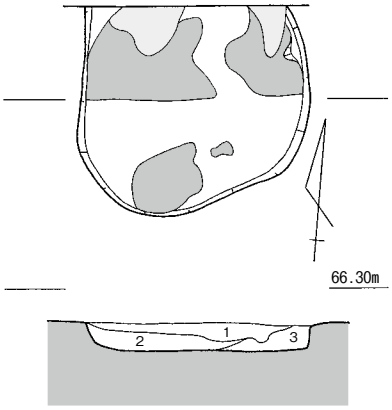
1. 2.5Y7/1 灰白 細粒砂
2. 7.5YR8/8 黄橙 中粒砂
3. 5YR5/6 明赤褐 中粒砂

SK176



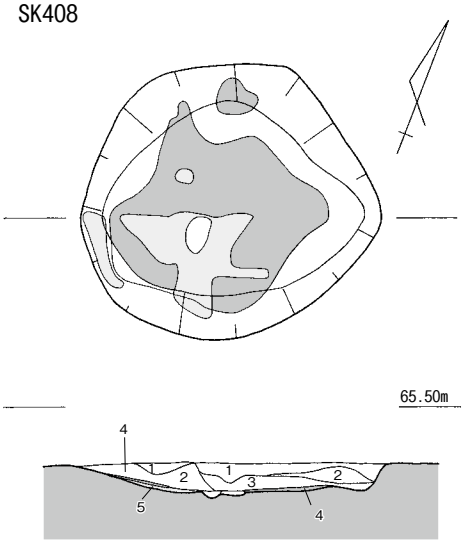
1. 7.5YR7/1 灰白 細粒砂（焼土混じり）
2. 5YR7/1 明褐灰 細粒砂
3. 2.5Y4/8 赤褐 中粒砂（焼土）

SK187



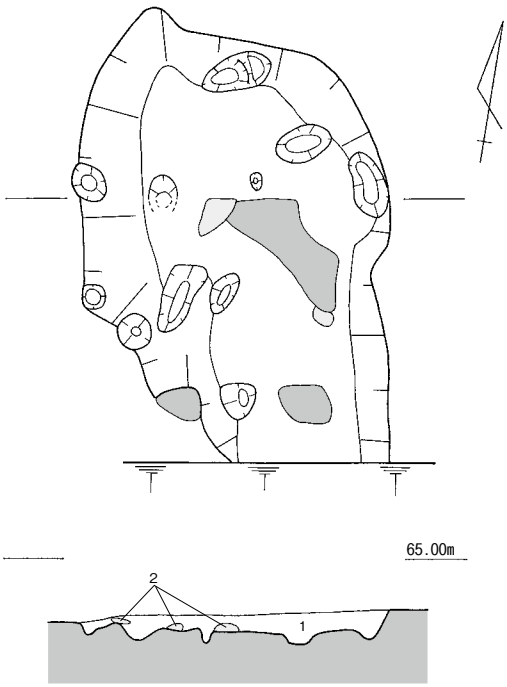
1. 2.5YR6/2 灰黄 細粒砂 炭・焼土混じり
2. 10YR7/4 にぶい黄褐 中粒砂 Mn混じり
3. 5Y6/1 灰 細粒砂

SK408



1. 10YR6/2 灰黄褐 細粒砂 炭・焼土混じり
2. 2.5Y7/2 灰黄 細粒砂 シルト質
3. 10YR6/1 褐灰 細粒砂 炭大量混じり
4. 炭層
5. 焼土

SX454



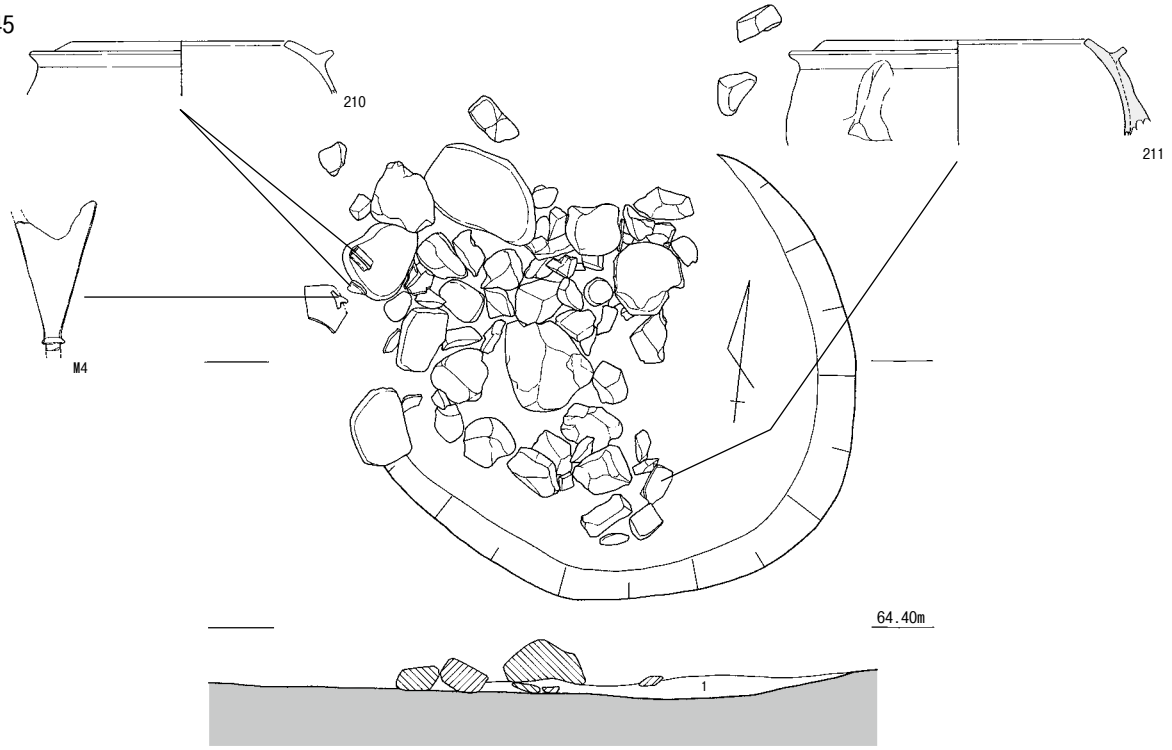
1. 10YR6/2 褐灰 極細粒砂シルト質(炭・焼土混じり)
2. 2.5Y7/8 黄 細粒砂(焼土固く焼きしまる)

焼土
焼土(濃い)
炭

0 1m

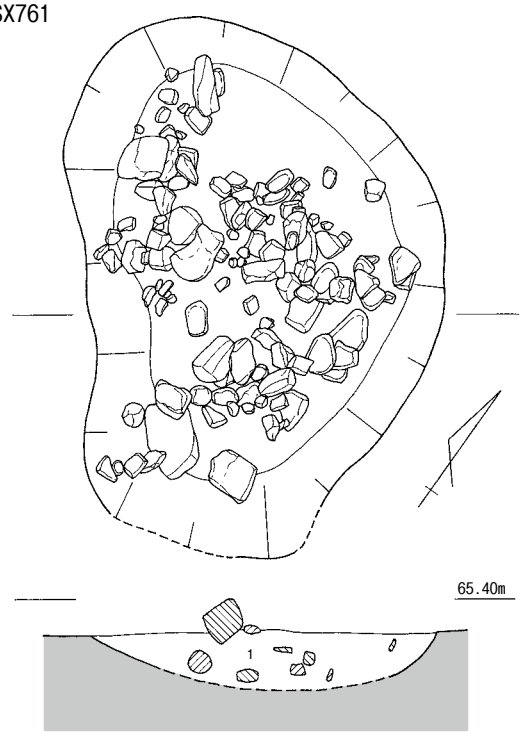
焼土坑（SK70・176・187・408・454）

SX745



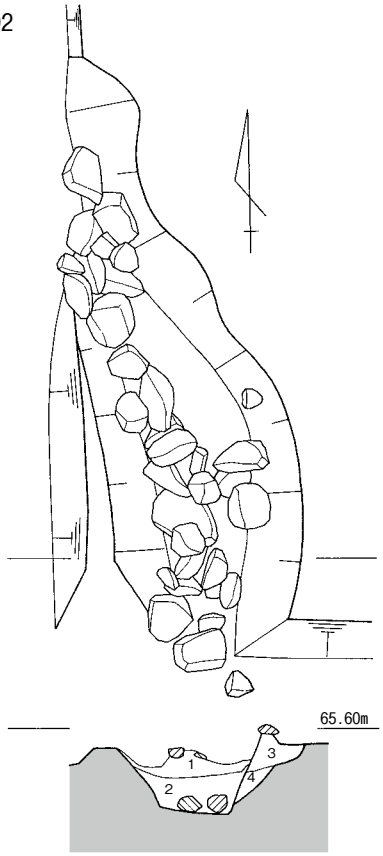
1. 2.5Y3/2　黒褐　シルト質極細砂～細砂　中砂～粗砂含む　炭、土器一部に焼土

SX761



1. 10YR5/4　にぶい黄褐　粗砂混じり中砂～細砂　φ3～20cmの礫が入っている
(埋められている、放りこまれている)

SX1592



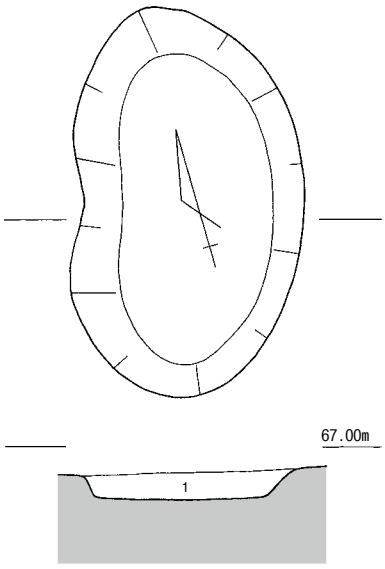
1. 2.5Y5/3　黄褐　シルト混じり粗砂
2. 2.5Y5/3　黄褐　細礫混じり　粗砂層(シルトも混じる)
3. 10YR4/3　にぶい黄褐　粗砂混じり　シルト質細砂～極細砂　Mn
4. 10YR4/4　褐　粗砂混じり　細砂～極細砂

0　1m

0　2m

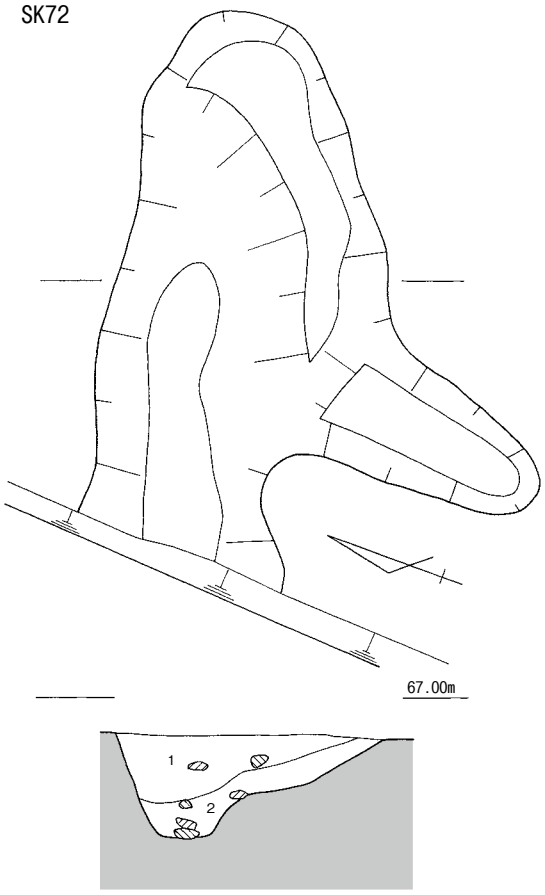
集石遺構・溝状土坑（SX745・761・1595）

SK68



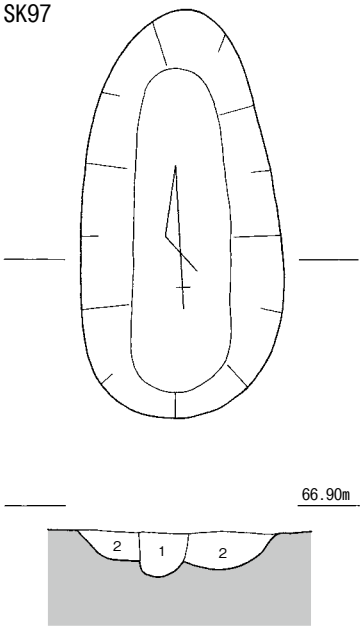
1. 2.5Y7/1　灰白　細砂土

SK72



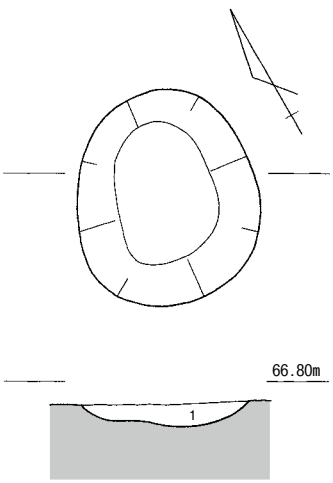
1. 10YR6/2　灰黄褐　中砂土
2. 10YR7/3　にぶい黄褐　細砂土

SK97



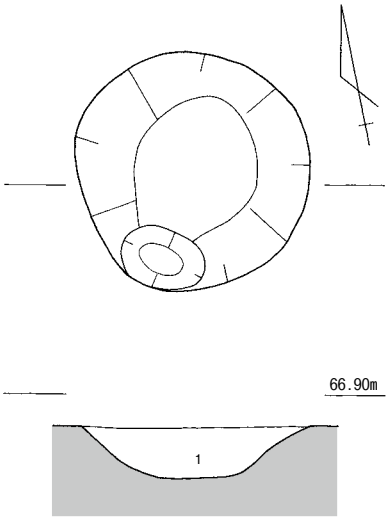
1. 10YR4/1　褐灰　シルト質細粒砂
2. 2.5Y6/2　灰黄　シルト質極細砂

SK104

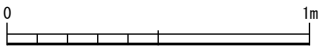


1. 10YR4/1　褐灰　シルト質極細砂

SK113

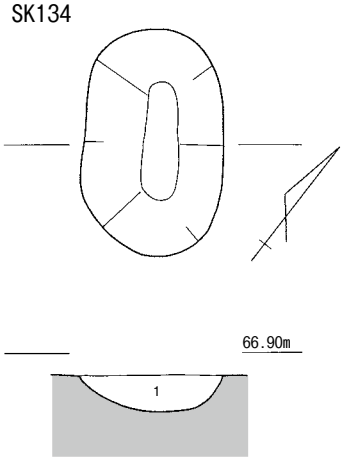


1. 2.5Y4/1　黄灰　シルト質極細粒砂



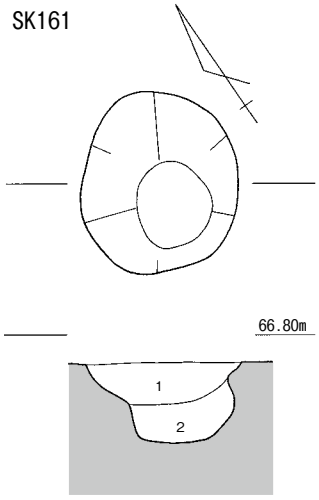
土坑（1）（SK68・72・97・104・113）

SK134



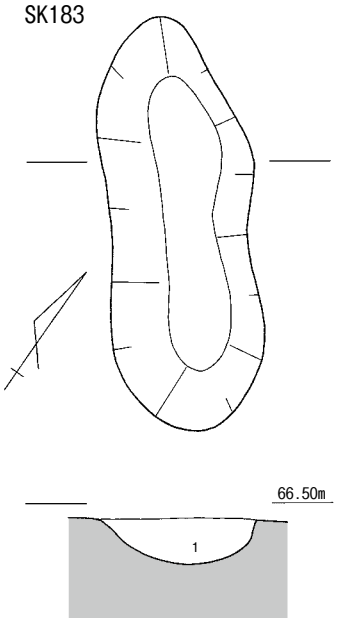
1. 2.5YR4/1　黄灰　シルト質極細粒砂

SK161



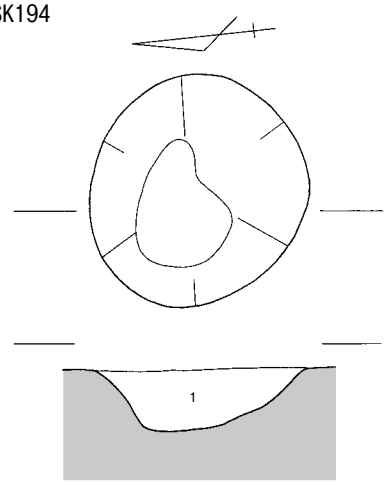
1. 10YR6/1　褐灰　細粒砂
2. 2.5YR4/1　黄灰　シルト質細粒砂

SK183



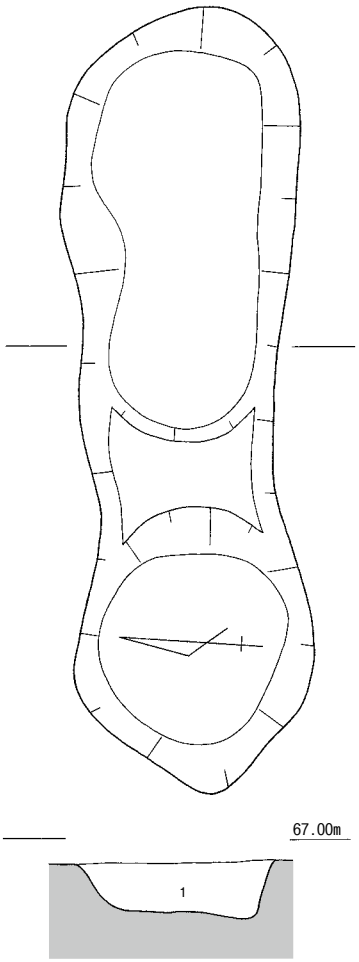
1. 10YR6/1　褐灰　中粒砂

SK194



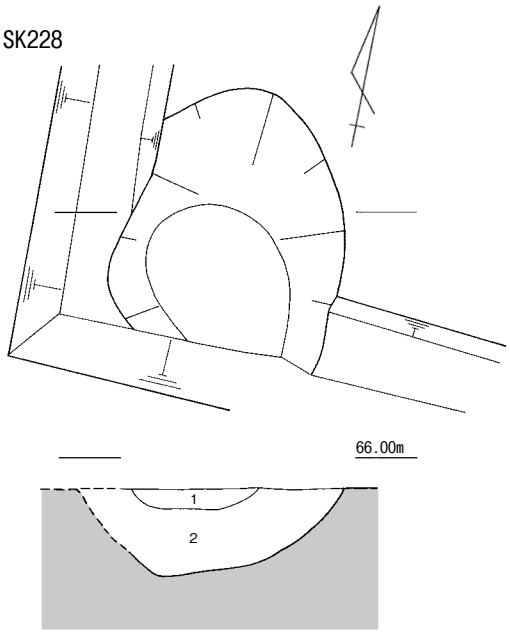
1. 10YR5/1　褐灰　シルト質極細粒砂(黄褐色シルトブロック含む)

SK261

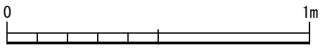


1. 7.5YR5/1　褐灰　シルト質極細砂

SK228

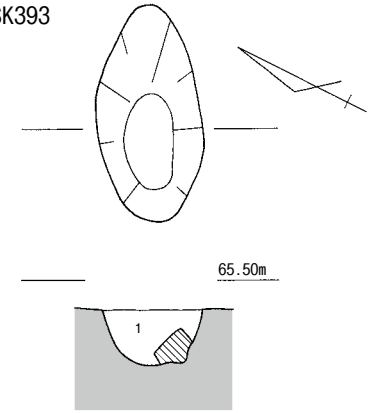


1. 10YR7/6　明黄褐　細粒砂
2. 10YR7/1　灰白　細粒砂、Mn混じり



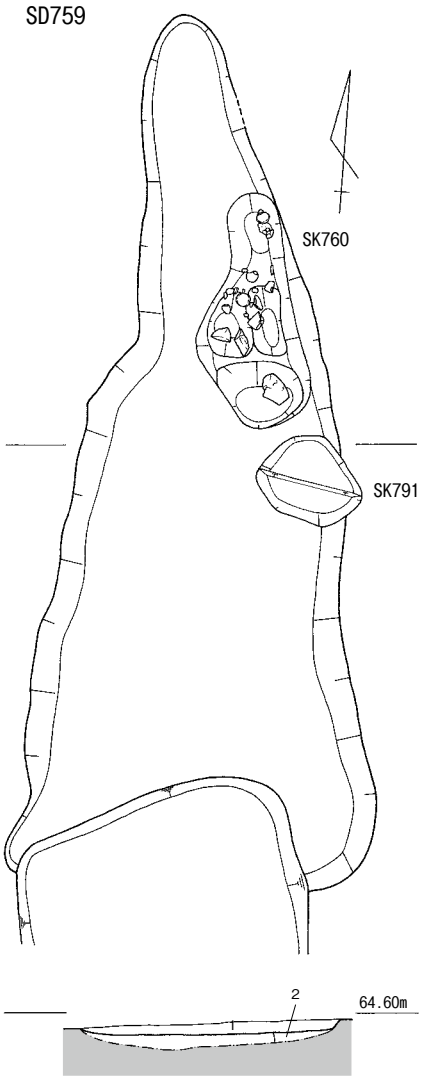
土坑（2）（SK134・161・183・194・228・261）

SK393



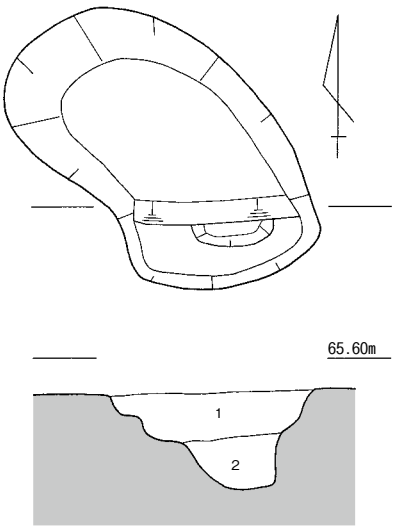
1. 2.5Y7/1　灰白　中粒砂

SD759



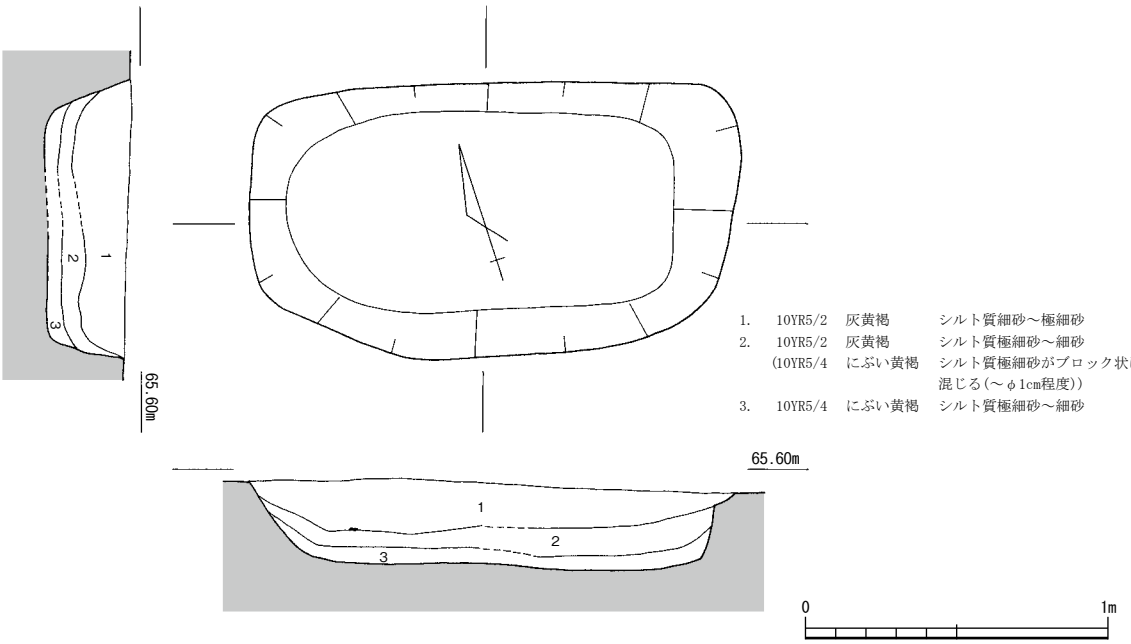
1. 10YR5/2　灰黄褐　粗砂混じり　極細砂～細砂　細礫含む
2. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質粗砂混じり細砂～極細砂、炭・土器含む

SK738(SK908)



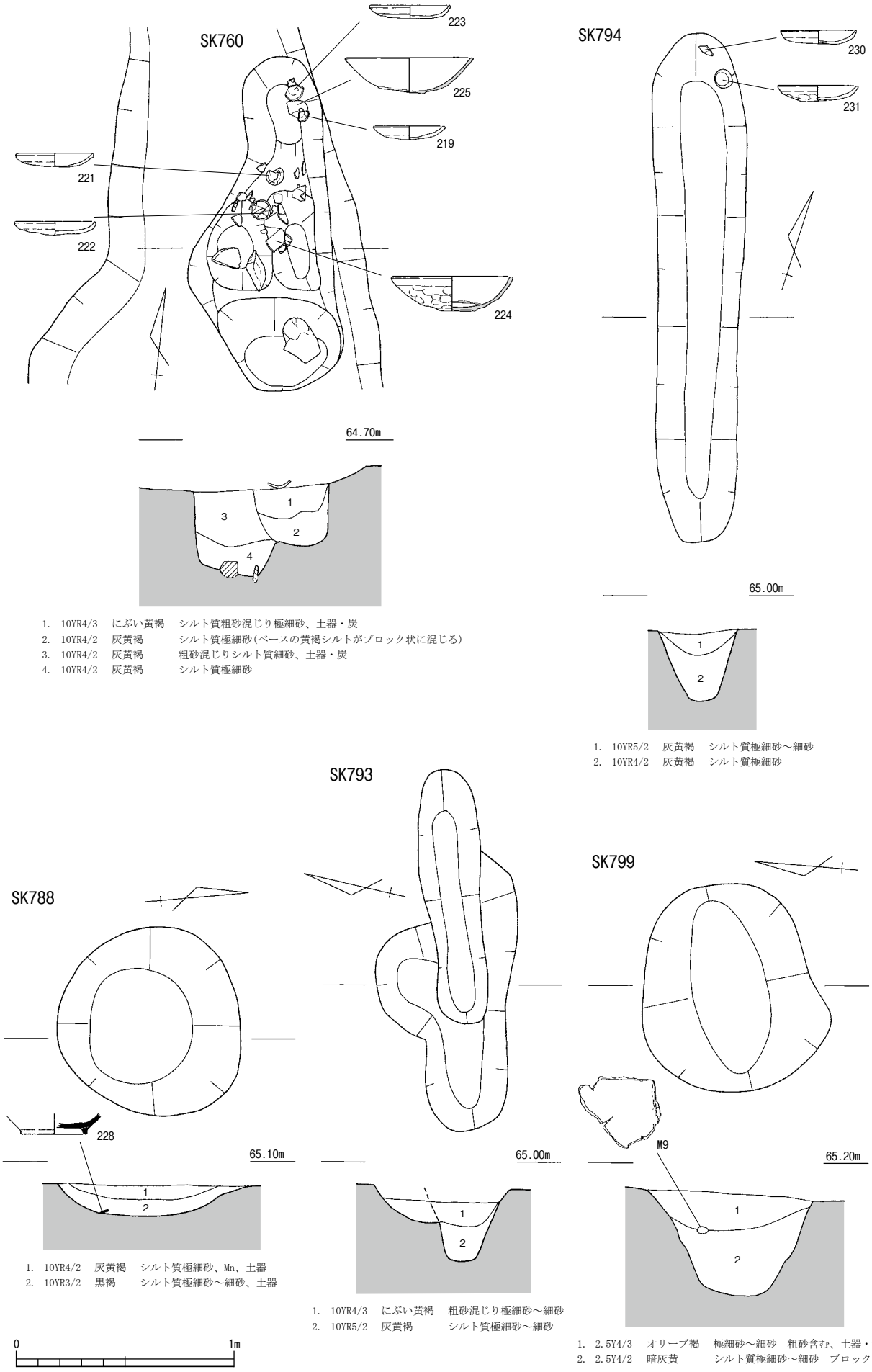
1. 10YR4/2　灰黄褐　粗砂混じり　極細砂～細砂
2. 10YR4/3　にぶい黄褐　極細砂～中砂

SK742

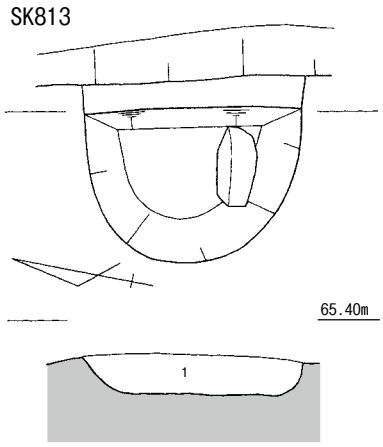


1. 10YR5/2　灰黄褐　シルト質細砂～極細砂
2. 10YR5/2　灰黄褐　シルト質極細砂～細砂
(10YR5/4　にぶい黄褐　シルト質極細砂がブロック状に混じる(～φ1cm程度))
3. 10YR5/4　にぶい黄褐　シルト質極細砂～細砂

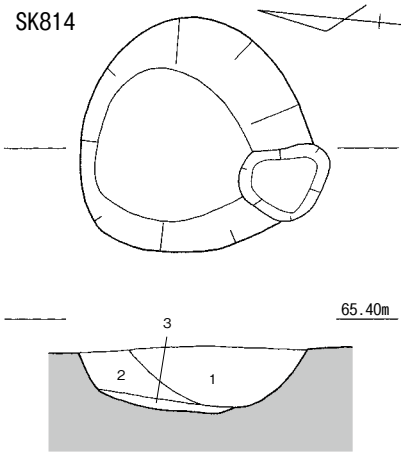
土坑（3）（SK393・738・742・759）



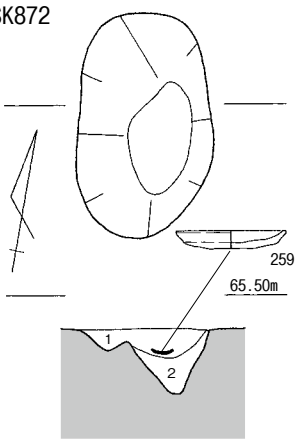
土坑（4）（SK760・788・793・794・799）



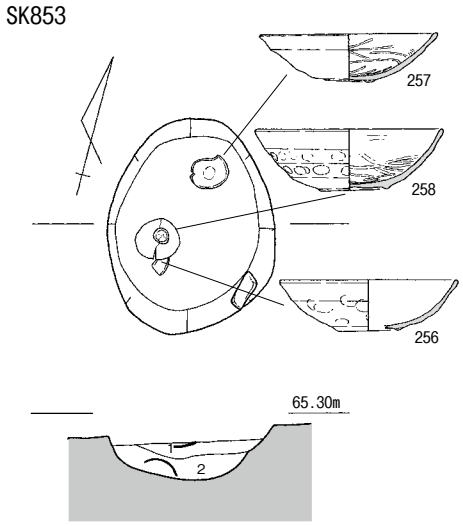
1. 2.5Y5/3　黄褐　シルト質極細砂～細砂　中礫
土器・φ2.5cm大礫　下面に焼土層



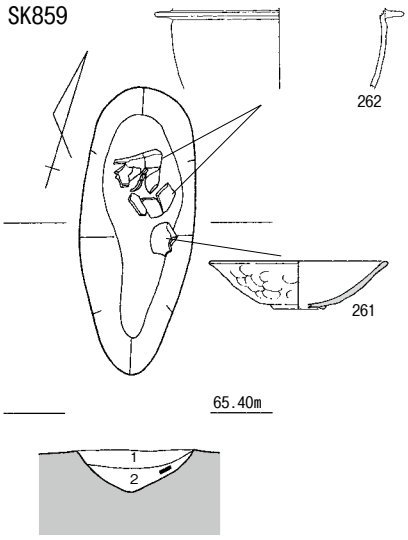
1. 2.5Y4/2　暗灰黄　シルト質極細砂～細砂
中礫　土器・炭
2. 2.5Y4/3　オリーブ褐　シルト質極細砂～細砂
3. 2.5Y5/2　暗灰黄　極細砂質シルト



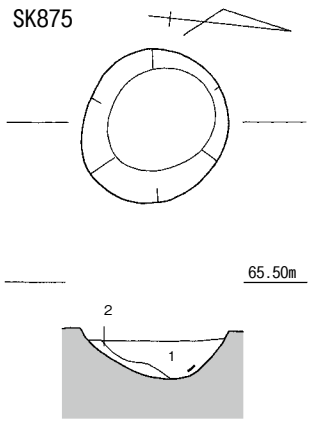
1. 2.5Y6/1　黄灰　細砂シルト質
2. 2.5Y5/1　黄灰　細砂シルト質
1.2ともに(ややMn混じる)



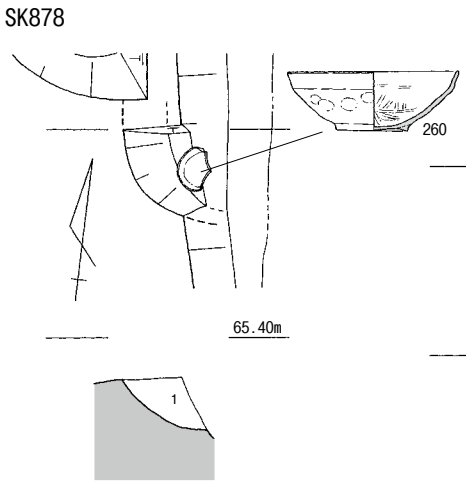
1. 10YR3/3　暗褐　シルト質細砂、土器片
2. 2.5Y3/3　暗オリーブ褐　シルト質極細砂～細砂、
瓦器椀完形、土器片



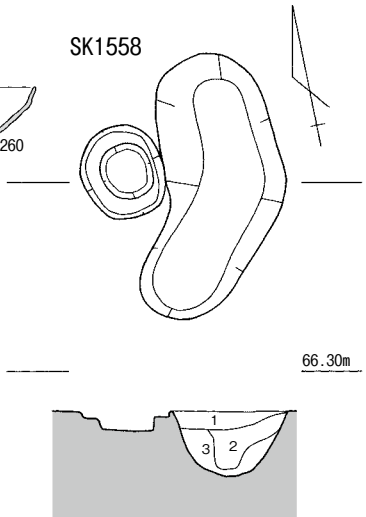
1. 2.5Y4/3　オリーブ褐　シルト質極細砂～細砂
極粗砂含む　土器
2. 2.5Y3/3　暗オリーブ褐　シルト混じり細砂



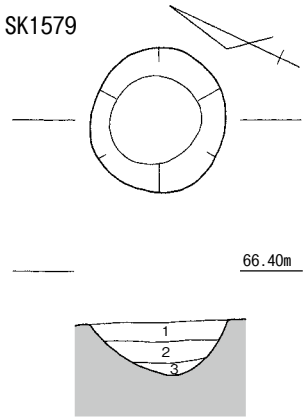
1. 2.5Y4/2　暗灰黄　シルト質細砂
φ5cm大角礫、土器
2. 2.5Y4/3　オリーブ褐　シルト質極細砂



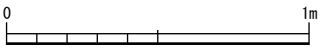
1. 2.5Y4/3　オリーブ褐　シルト質極細砂、瓦器椀



1. 2.5Y5/3　黄褐　極細砂～細砂、極粗砂含む、
焼土含む　土器(瓦器)
2. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質極細砂～細砂
3. 2.5Y5/6　黄褐　極細砂～細砂(地山掘り過ぎ)

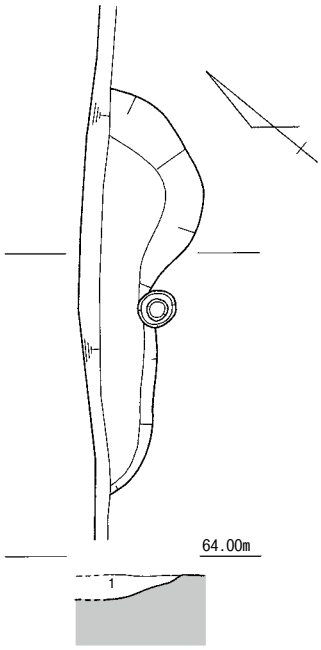


1. 2.5Y5/3　黄褐　シルト質極細砂～細砂、
細礫～中礫含む　Mn
2. 2.5Y4/4　オリーブ褐　シルト質極細砂～細砂、
細礫～中礫含む、土器(瓦器)
3. 2.5Y5/4　黄褐　シルト質極細砂～細砂、
中礫含む(地山に近い)



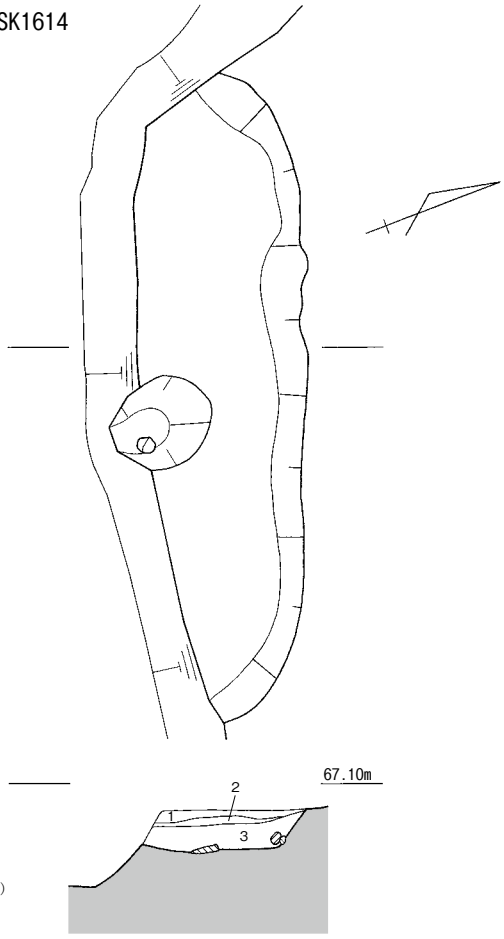
土坑（5）（SK813・814・872・853・859・875・878・1558・1579）

SK763

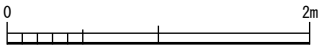


1. 10YR5/2　灰黄褐　シルト質極細砂

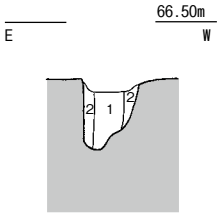
SK1614



1. 2.5Y4/3　オリーブ褐　シルト質極細砂(細砂混じる)
2. 10YR4/4　褐　粗砂混じりシルト質極細砂
3. 10YR5/4　にぶい黄褐　粗砂混じり細～中砂

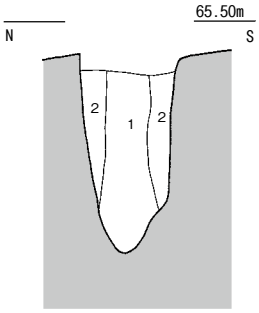


SP256



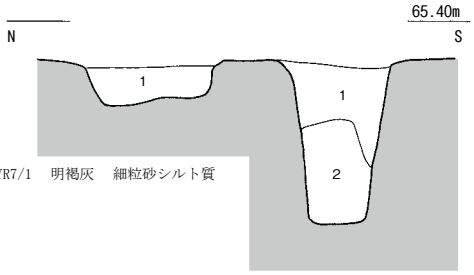
1. 2.5Y6/1　黄灰　細粒砂(地山ブロック混じり)
2. 10YR7/1　灰白　シルト質細粒砂
(地山ブロック多量に混じる)

SP394



1. 7.5YR7/1　明褐灰　細粒砂シルト質
2. 2.5Y8/4　淡黄　細粒砂(地山ブロックやや混じる)

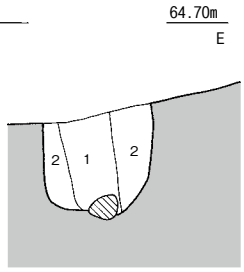
SP409　SP410



1. 7.5YR7/1　明褐灰　細粒砂シルト質

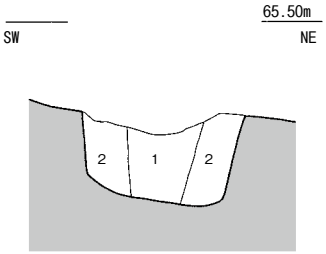
1. 7.5YR7/1　明褐灰　細粒砂シルト質
2. 10YR6/1　褐灰　細粒砂シルト質

SP862



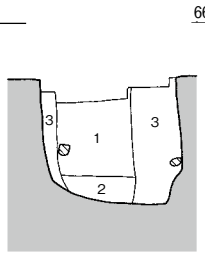
1. 2.5Y4/2　暗灰黄　シルト質極細砂
2. 2.5Y5/3　黄褐　シルト質極細砂

SP1071

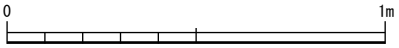


1. 2.5Y4/2　暗灰黄　シルト質極細砂　Mn含む
2. 2.5Y5/4　黄褐　シルト質極細砂　Mn含む

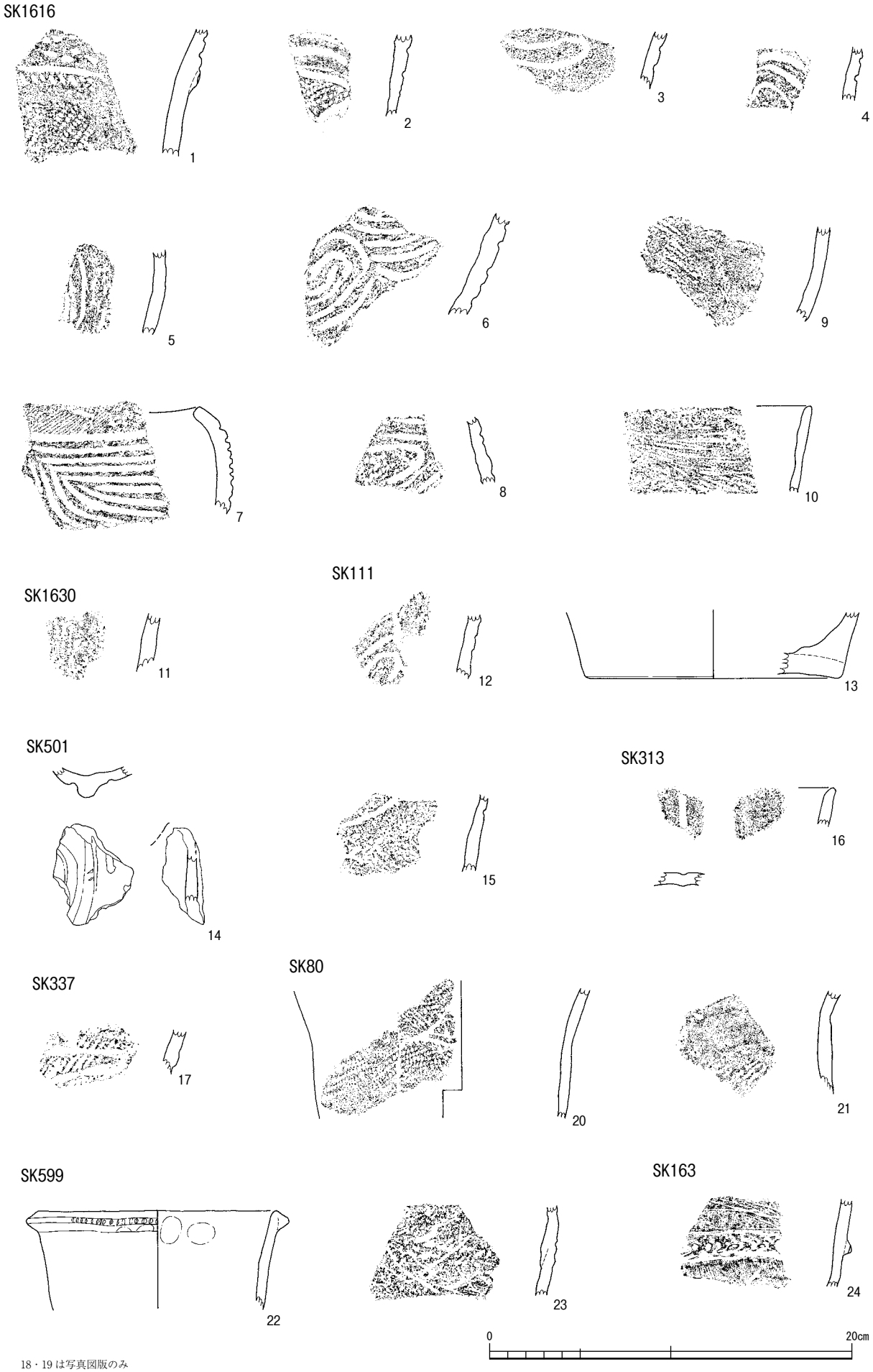
SP1571



1. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質極細砂～中砂
極粗砂～φ2cm大の礫含む　炭・土器
2. 10YR4/4　褐　シルト質極細砂～細砂
3. 10YR5/4　にぶい黄褐　極細砂～中砂　極粗砂～φ4cm大の礫含む

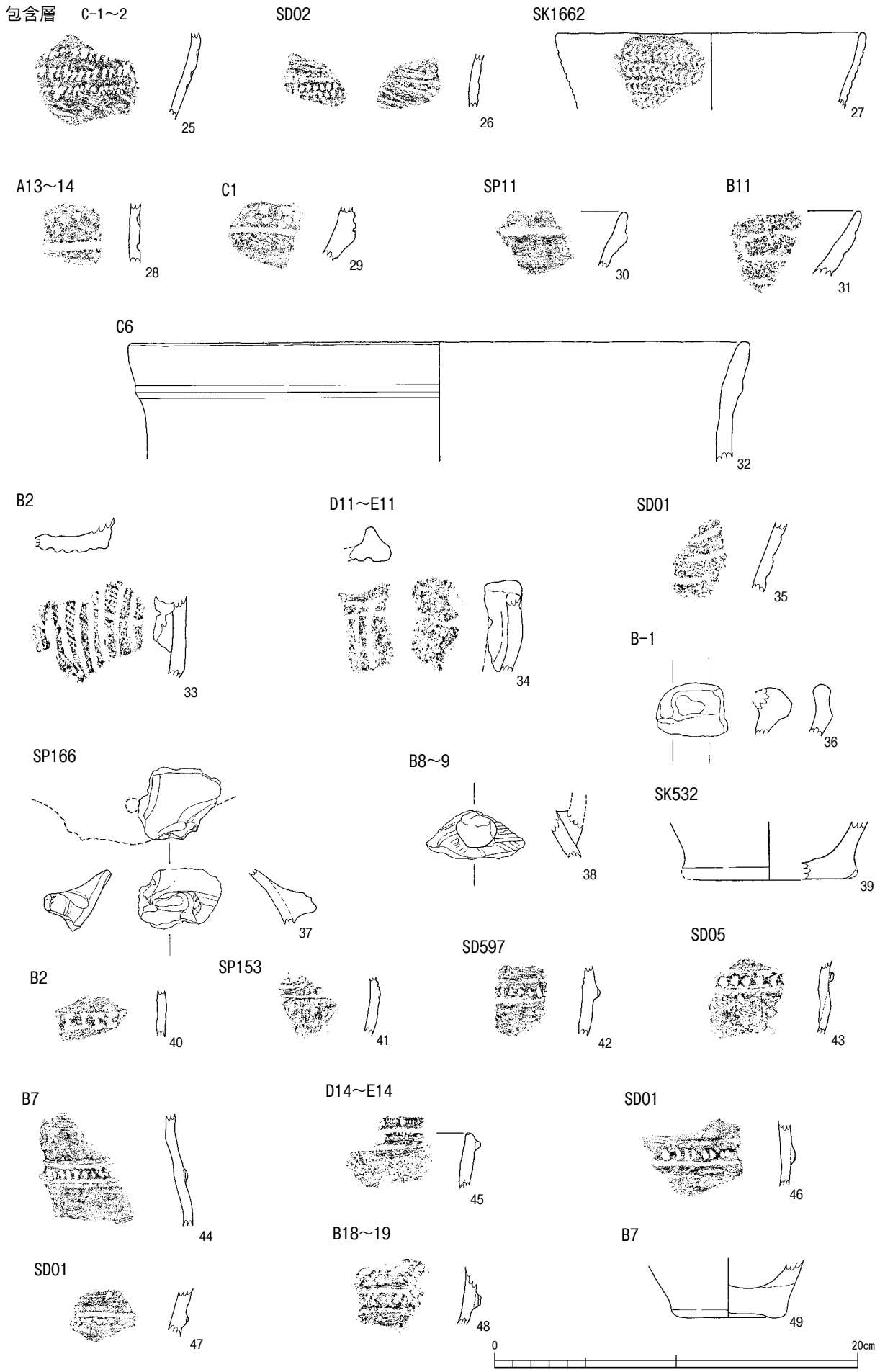


土坑（6）・柱穴断面（SK763・1614・SP256・394・409・410・862・1071・1571）



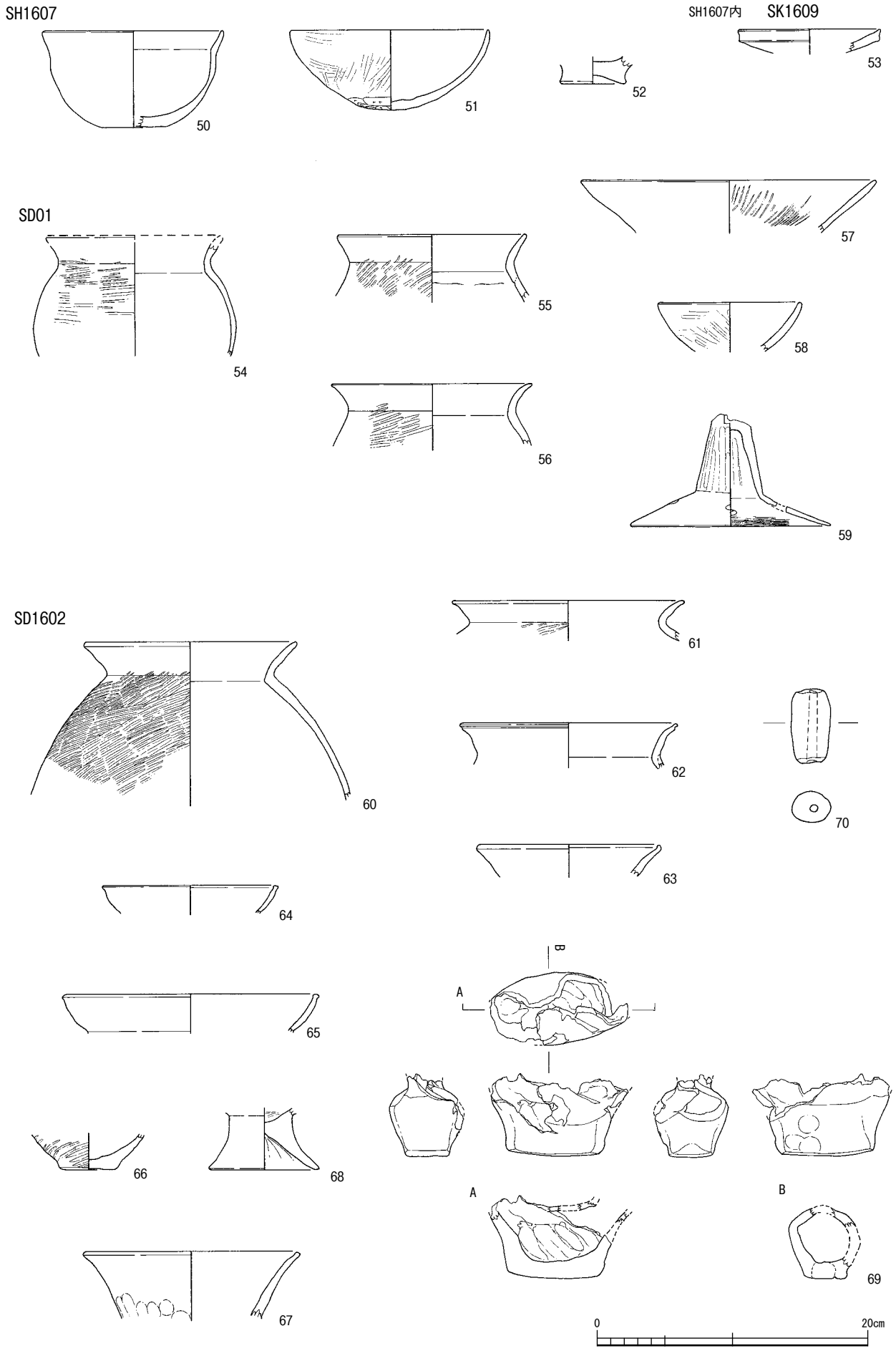
18・19 は写真図版のみ

出土土器（縄文時代１）

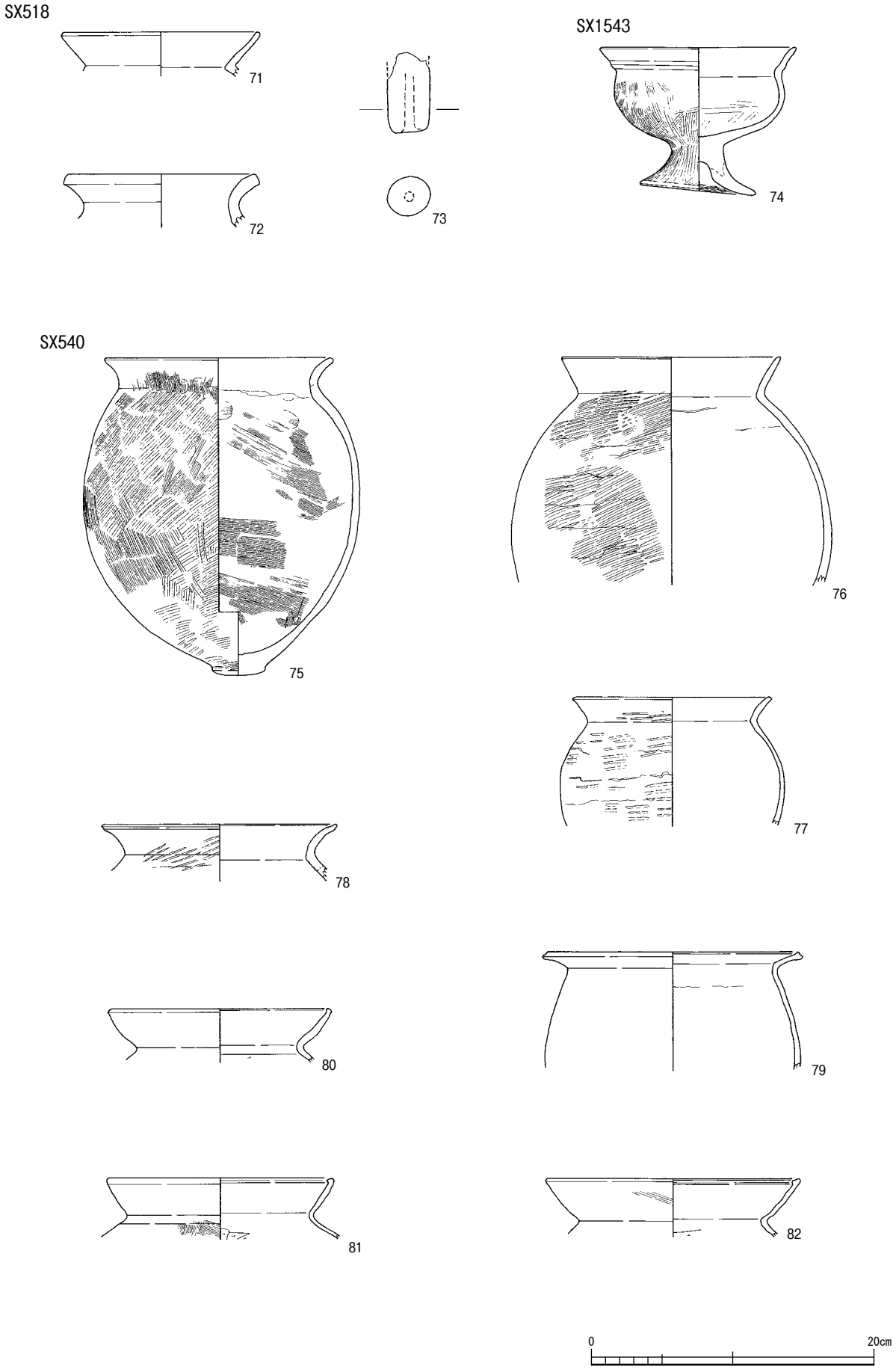

包含層 C-1～2
25
SD02
26
SK1662
27
A13～14
28
C1
29
SP11
30
B11
31
C6
32
B2
33
D11～E11
34
SD01
35
B-1
36
SP166
37
B8～9
38
SK532
39
B2
40
SP153
41
SD597
42
SD05
43
B7
44
D14～E14
45
SD01
46
SD01
47
B18～19
48
B7
49
0
20cm

出土土器（縄文時代２）

図版 54

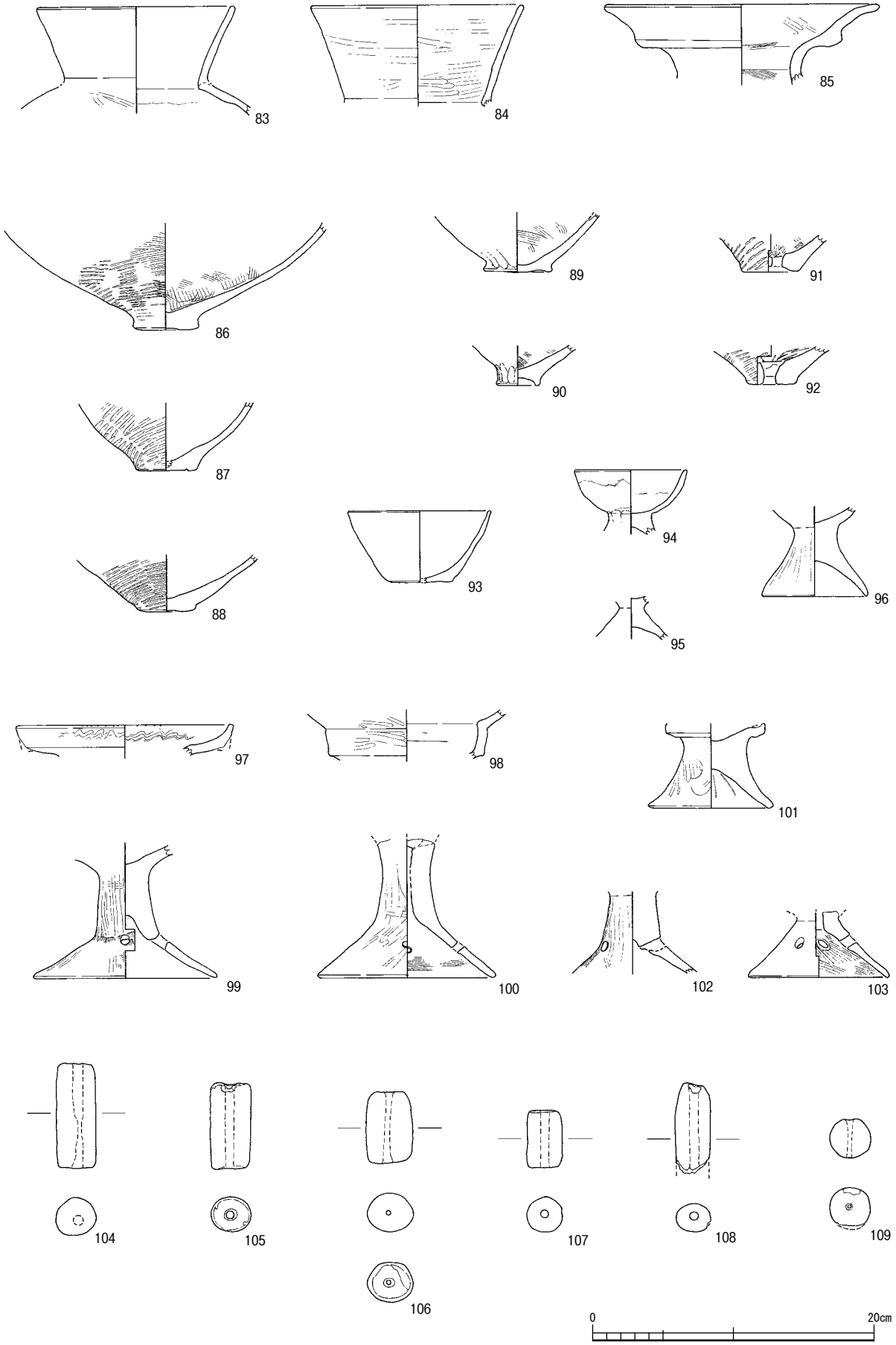


出土土器（弥生～古墳時代１）



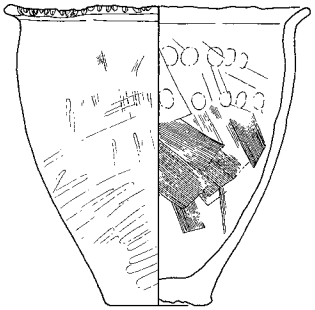
出土土器（弥生～古墳時代２）

SX540



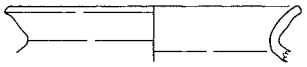
出土土器（弥生～古墳時代３）

SK41



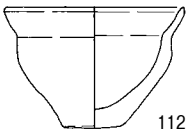
110

SK1534



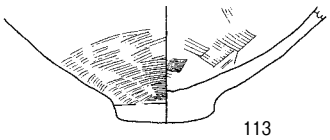
111

SK1603



112

SK1605

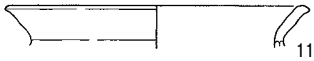


113

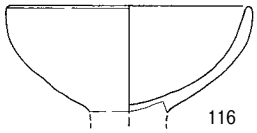
SK不明

114

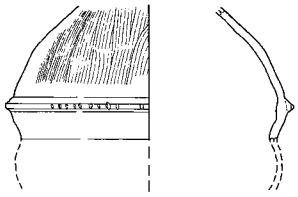
SK1662



115

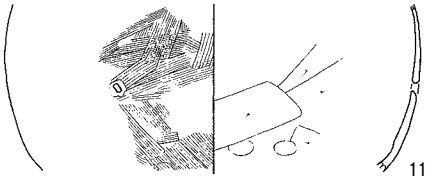


116



117

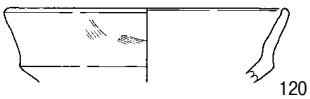
SP246



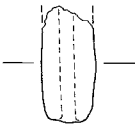
118

包含層

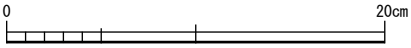
119



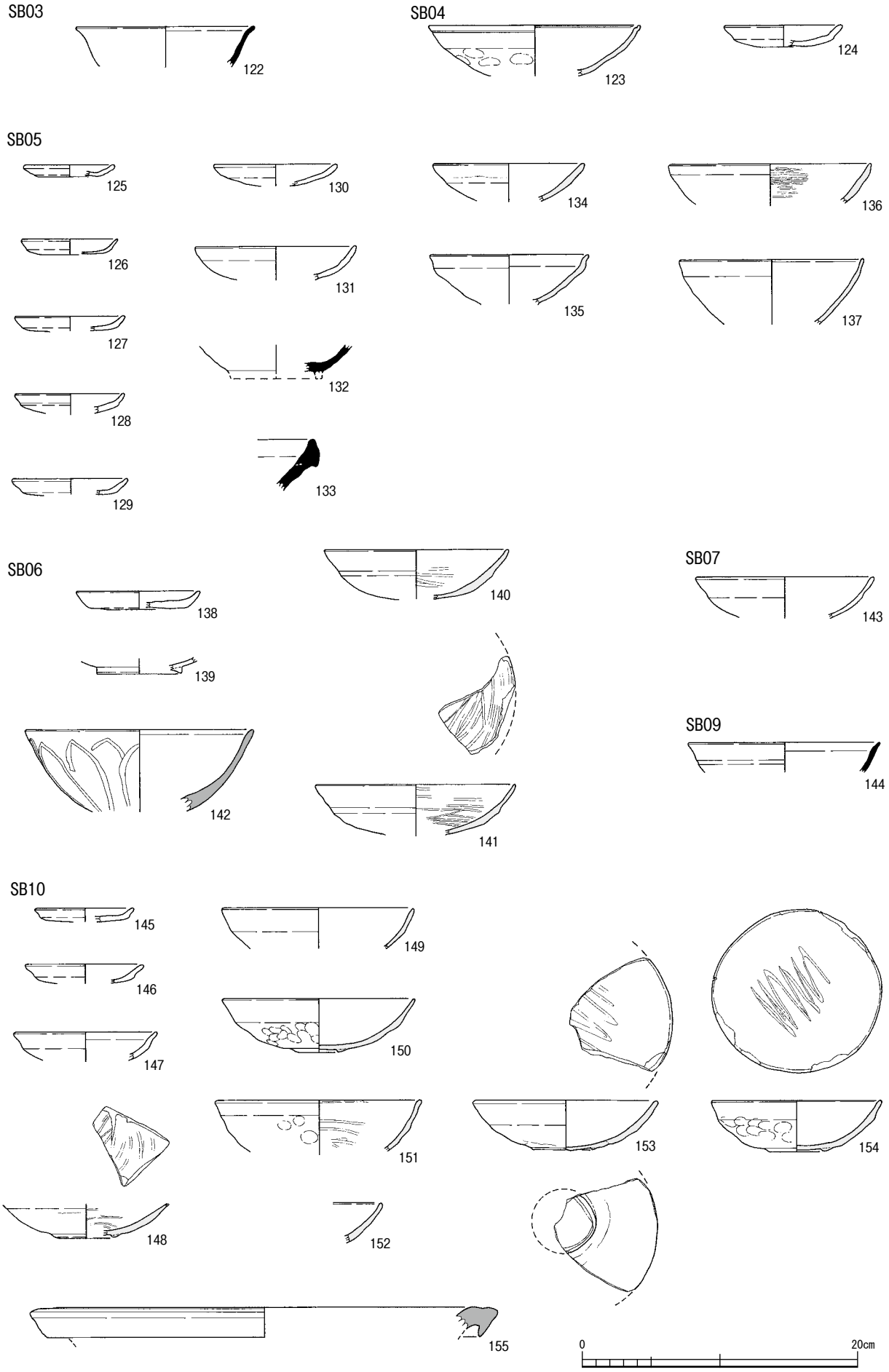
120



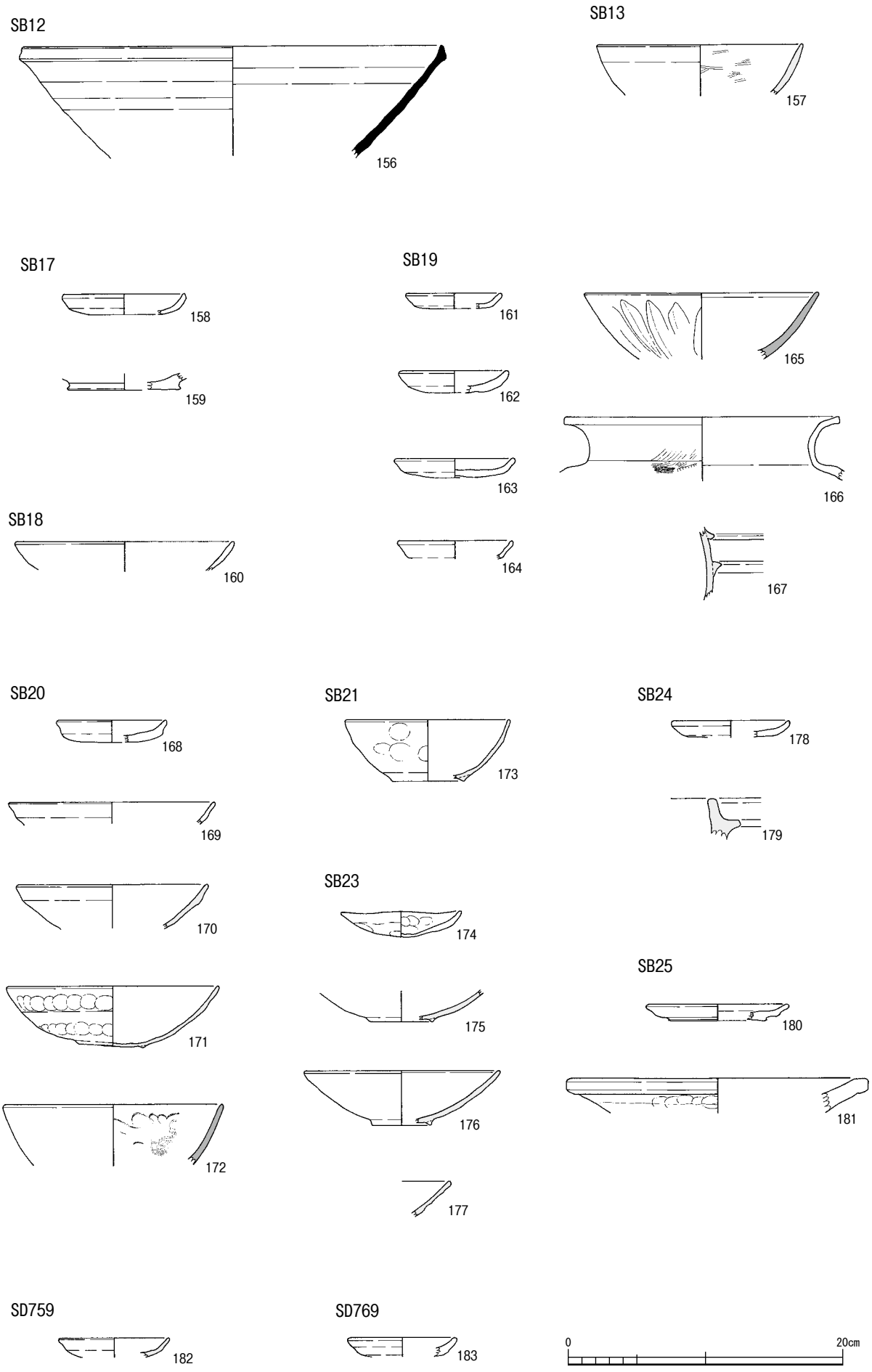
121



出土土器（弥生～古墳時代４）



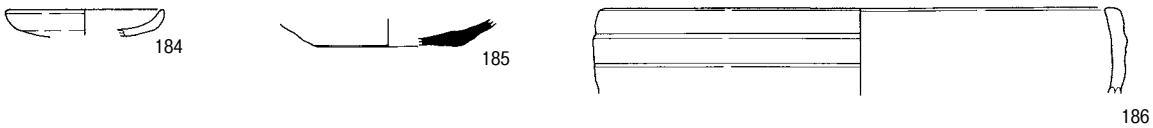
出土土器（平安～鎌倉時代１）



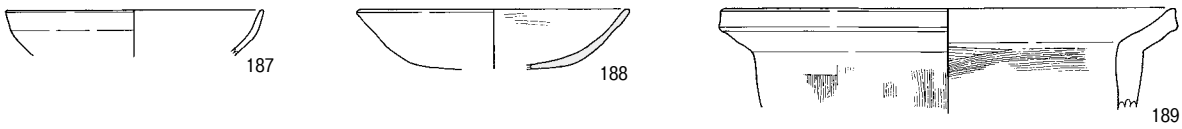
出土土器（平安～鎌倉時代２）

図版 60

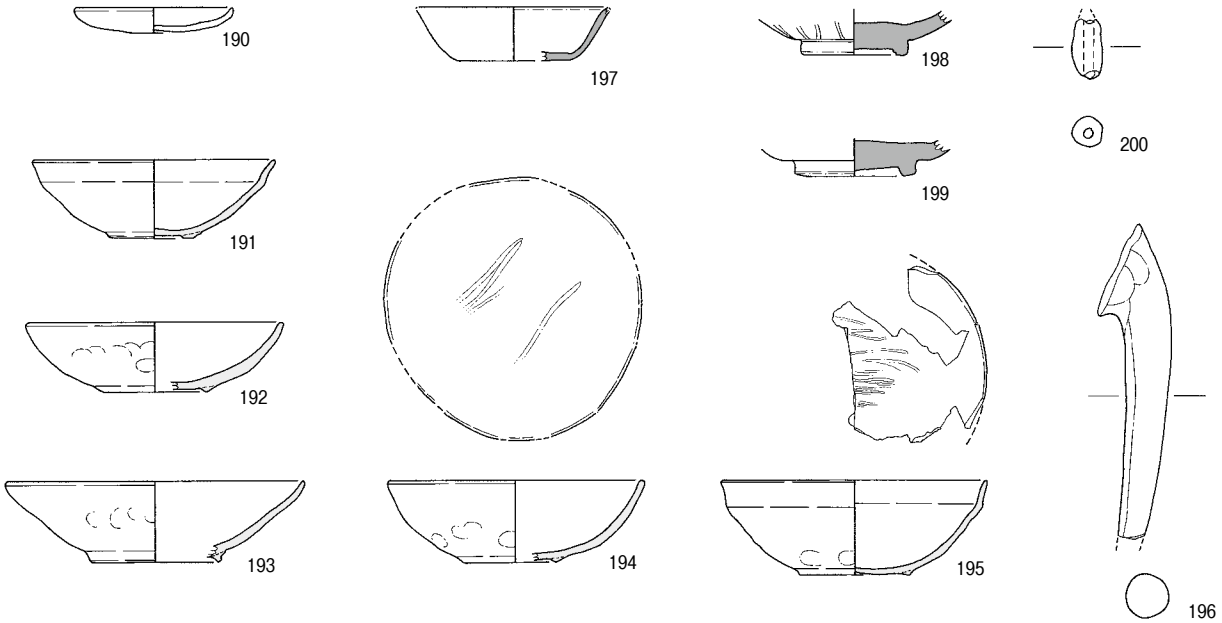
SD822

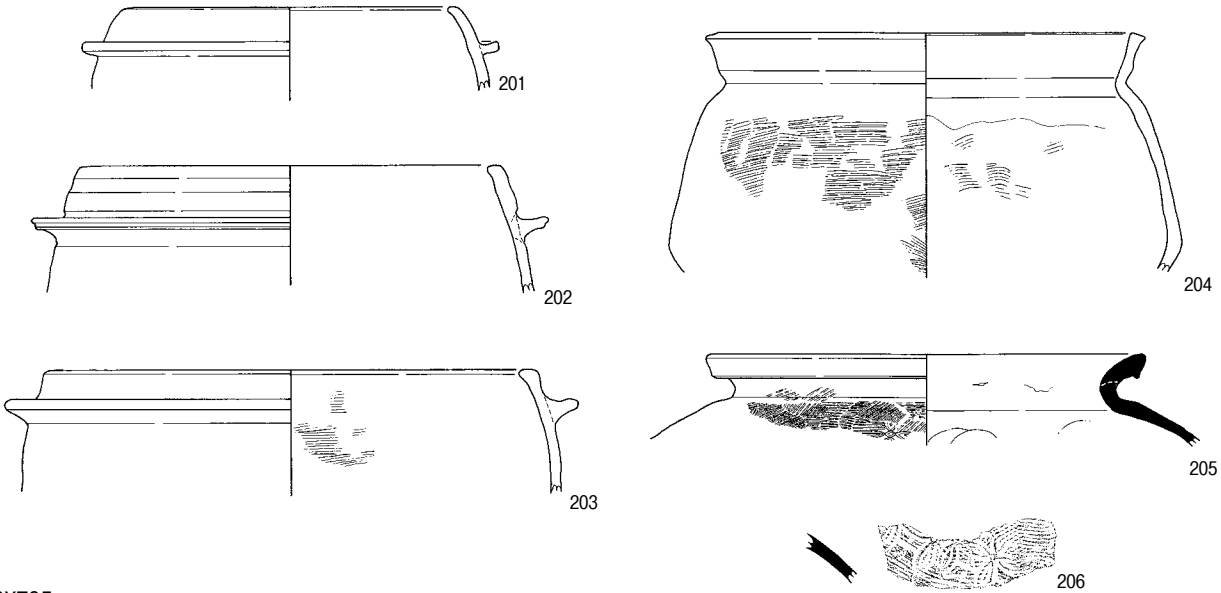


SD857

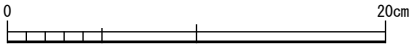


谷状落ち

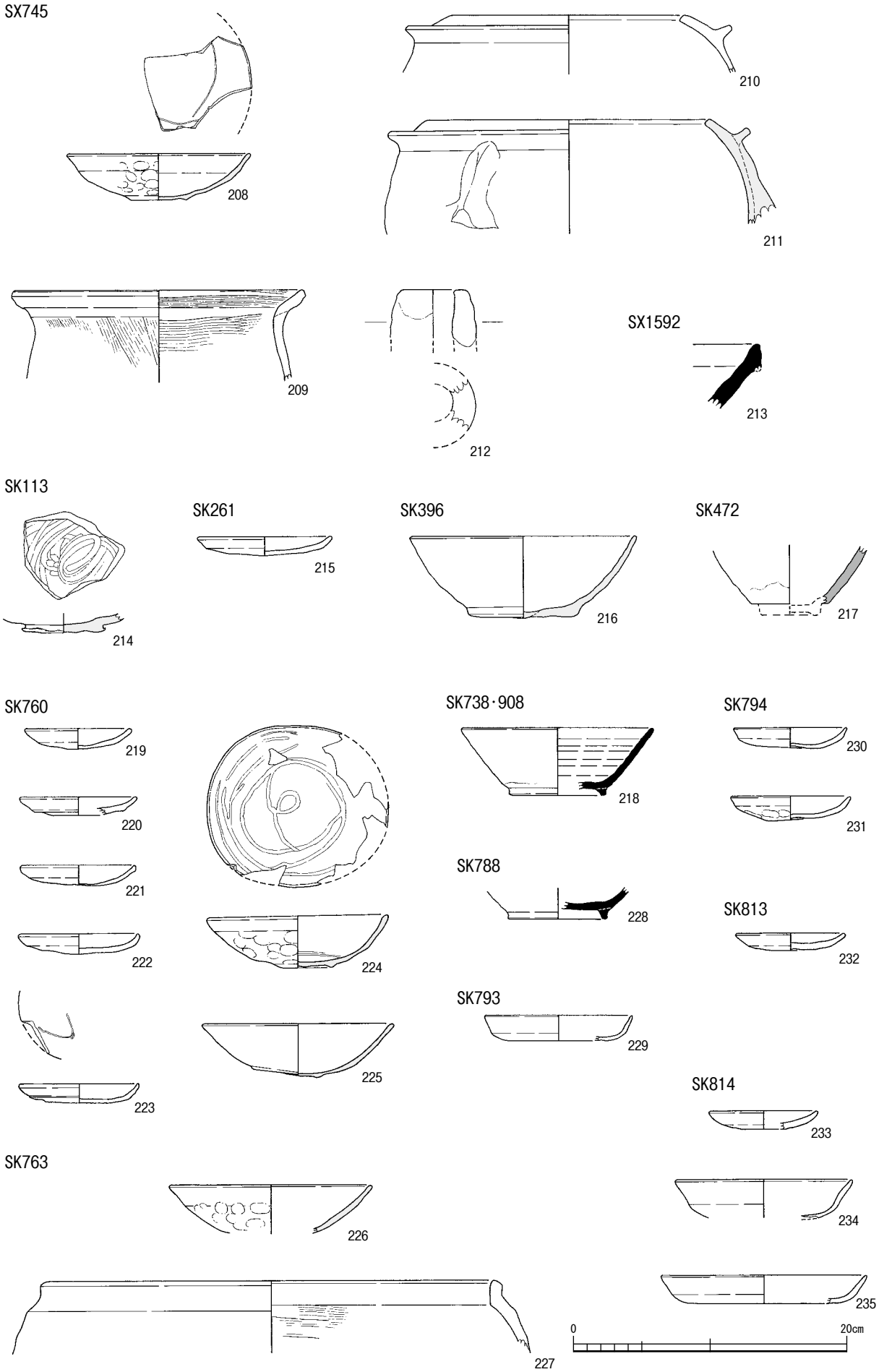




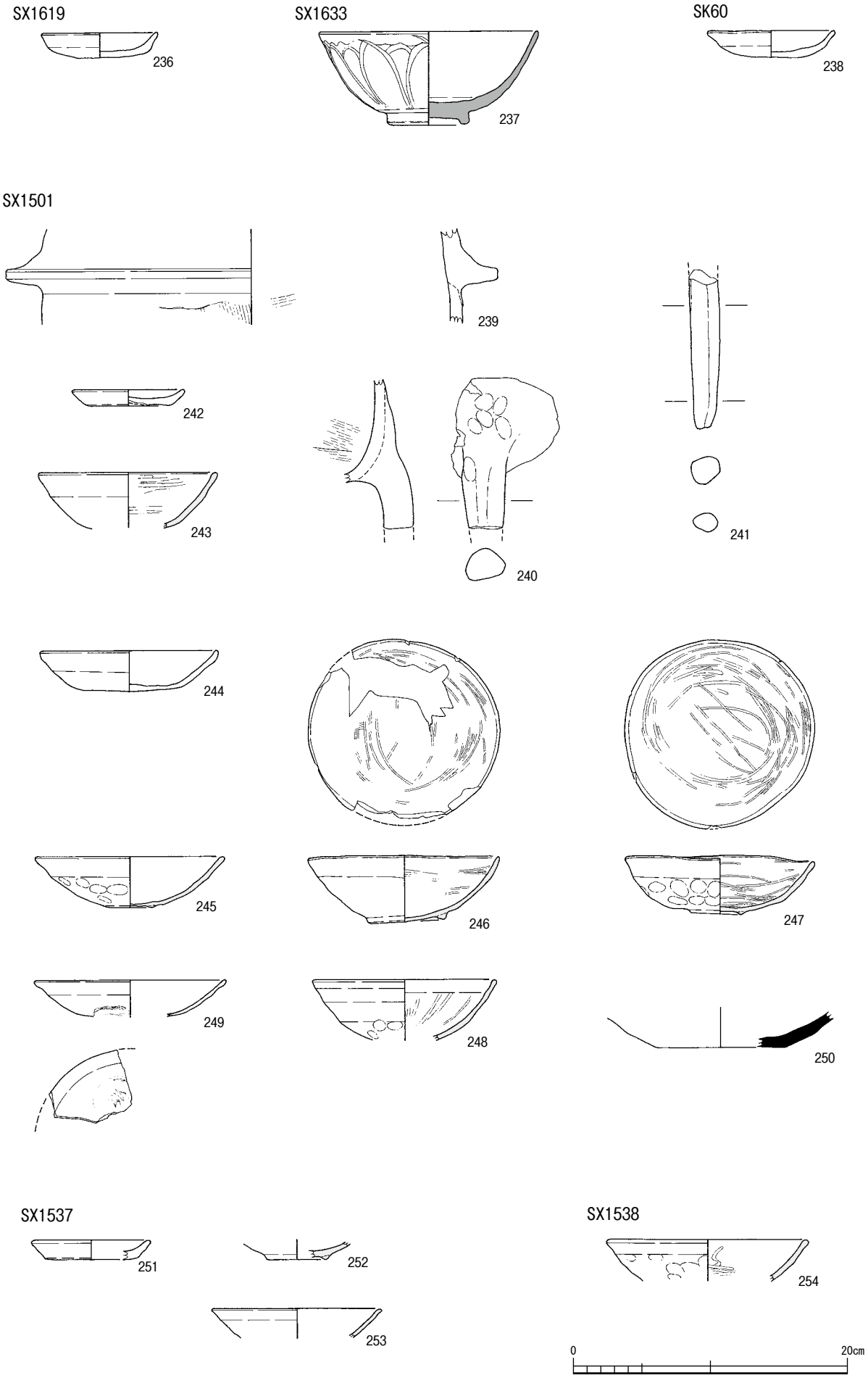
SX795



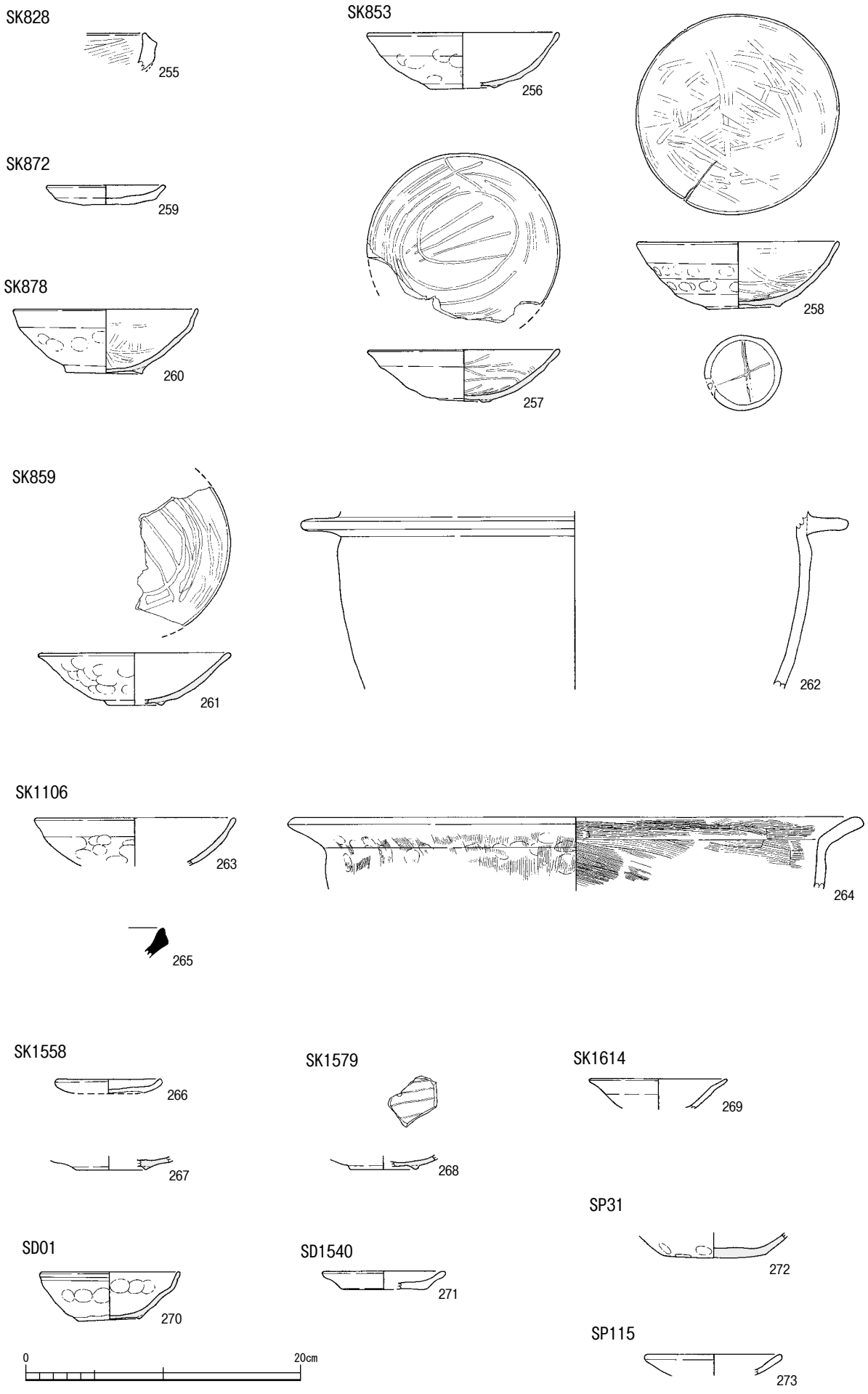
出土土器（平安～鎌倉時代３）



出土土器（平安～鎌倉時代４）

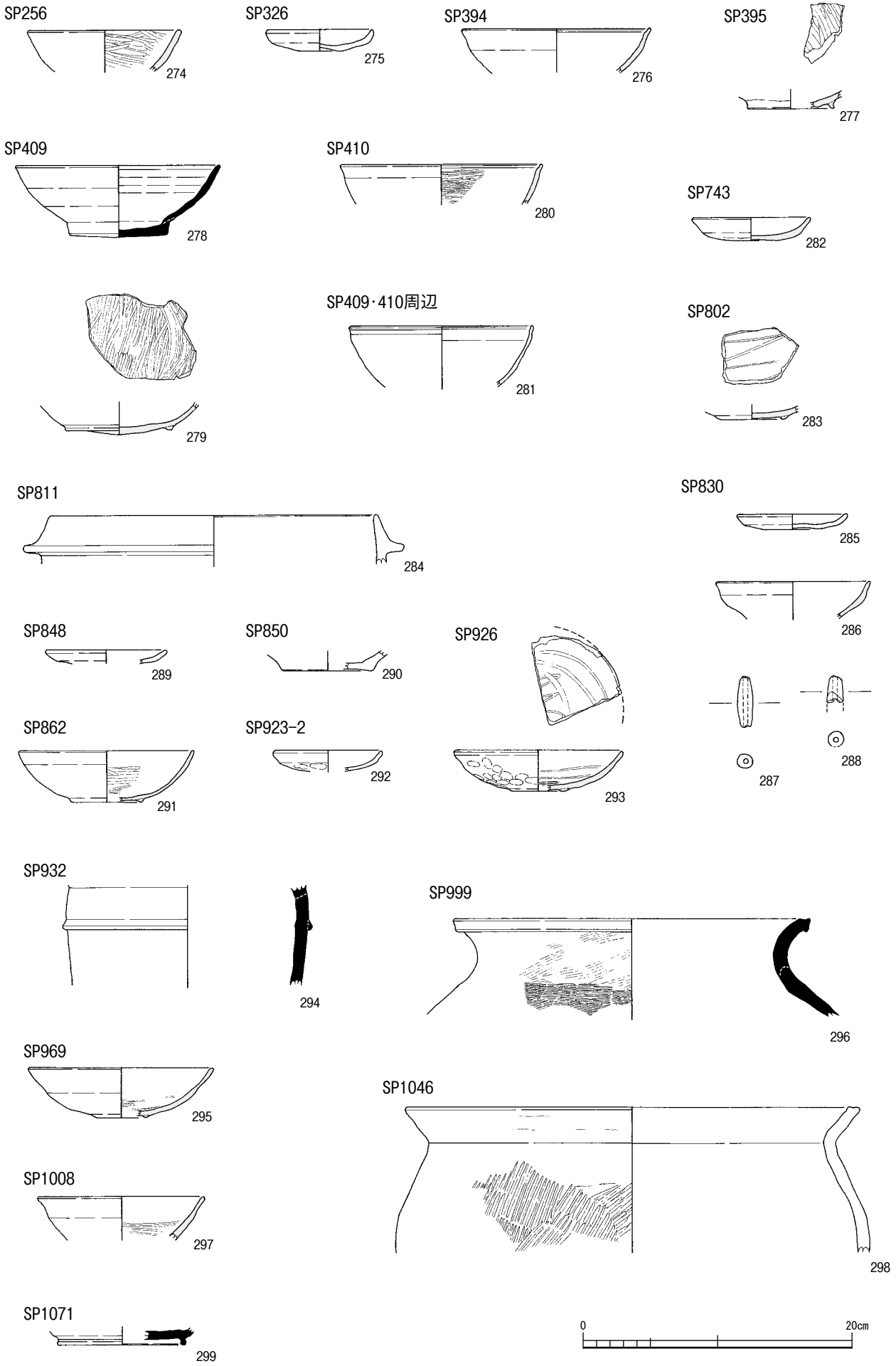


出土土器（平安～鎌倉時代５）



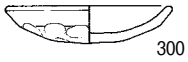
出土土器（平安～鎌倉時代６）

図版 64



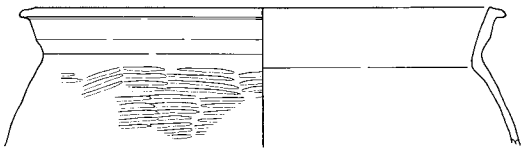
出土土器（平安～鎌倉時代７）

SP1738·1770



SP1571

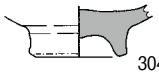
SP1615



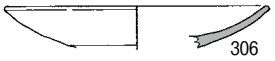
包含層

B1

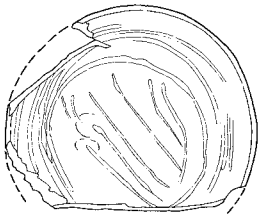
C1

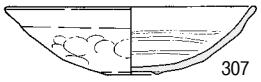


D13～E13

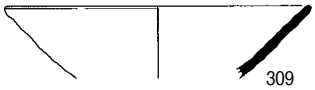


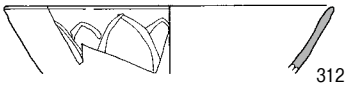
D15～E15

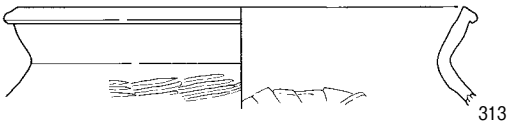


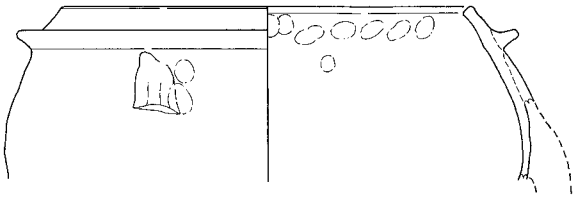


D16～E16

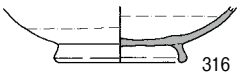


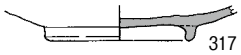


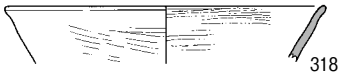




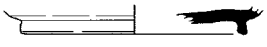
C11～E11

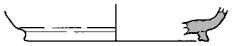




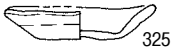


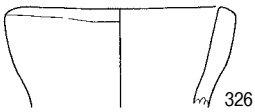
E18

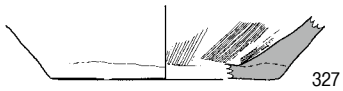


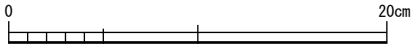


E20



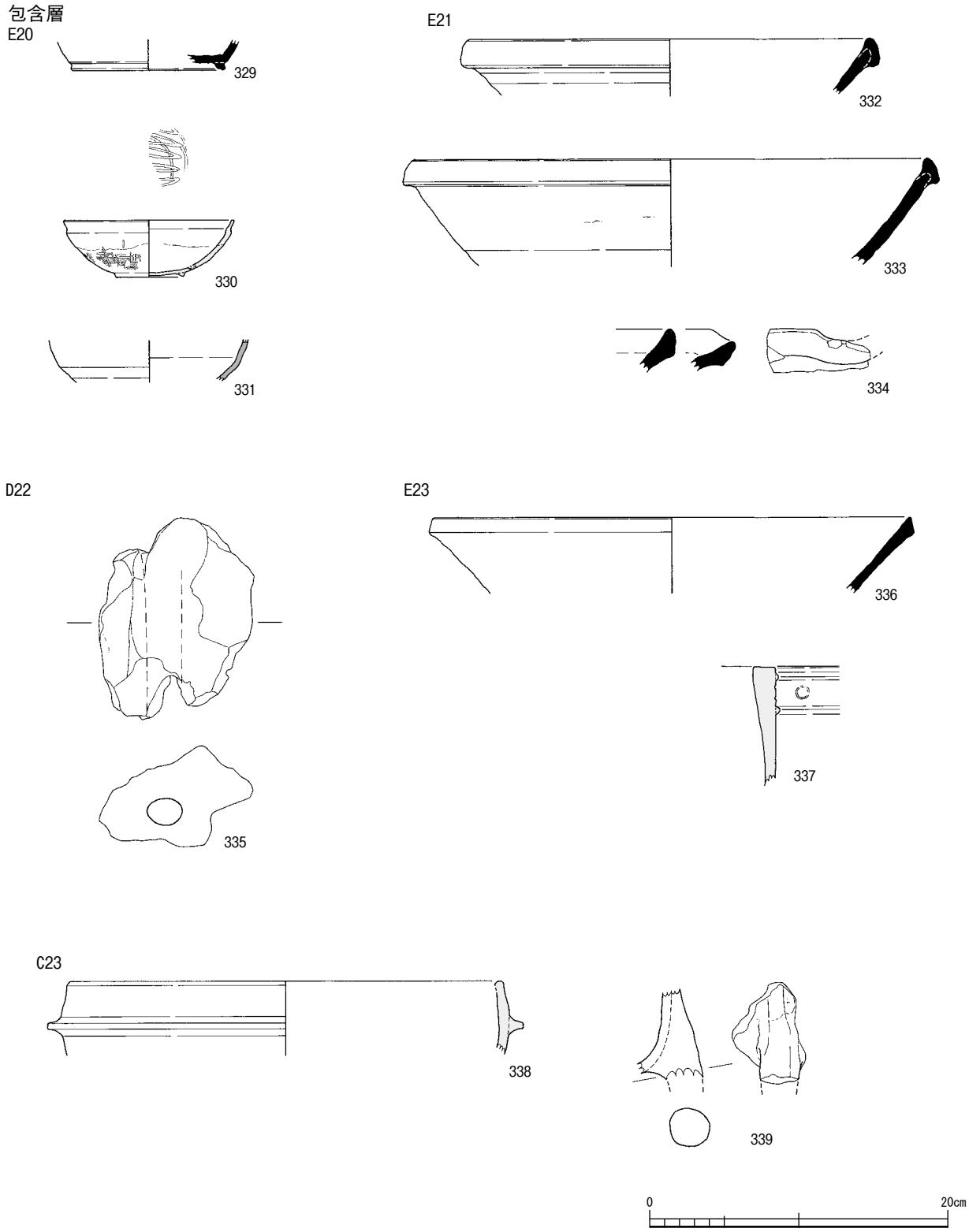






出土土器（平安～鎌倉時代８）

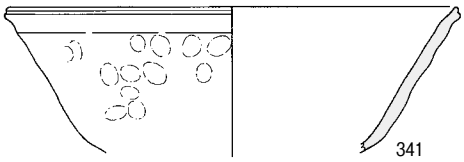
図版 66



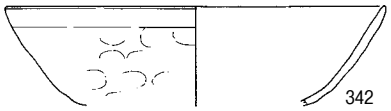
出土土器（平安～鎌倉時代９）

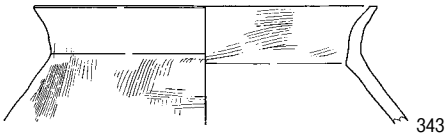
包含層

D～E25



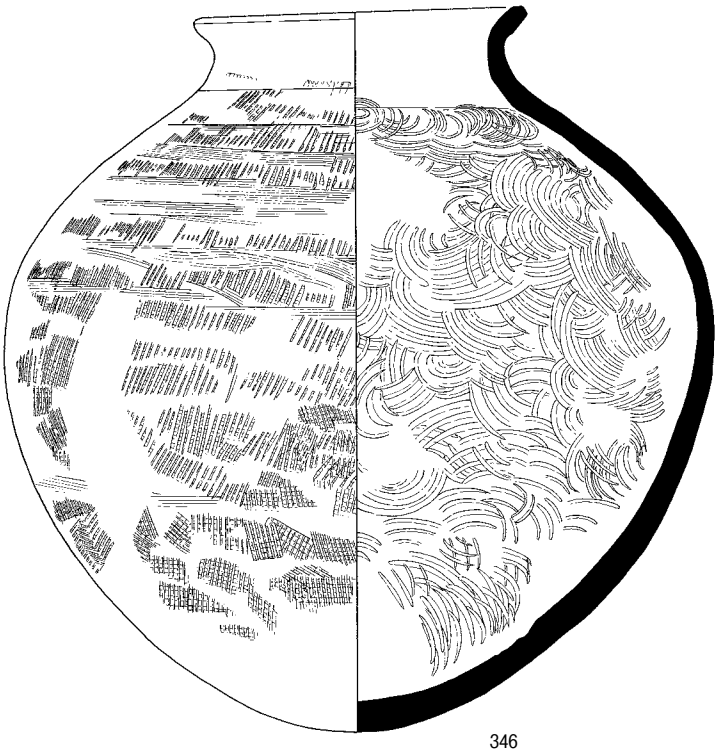
D14～E14

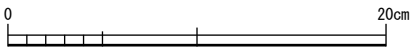




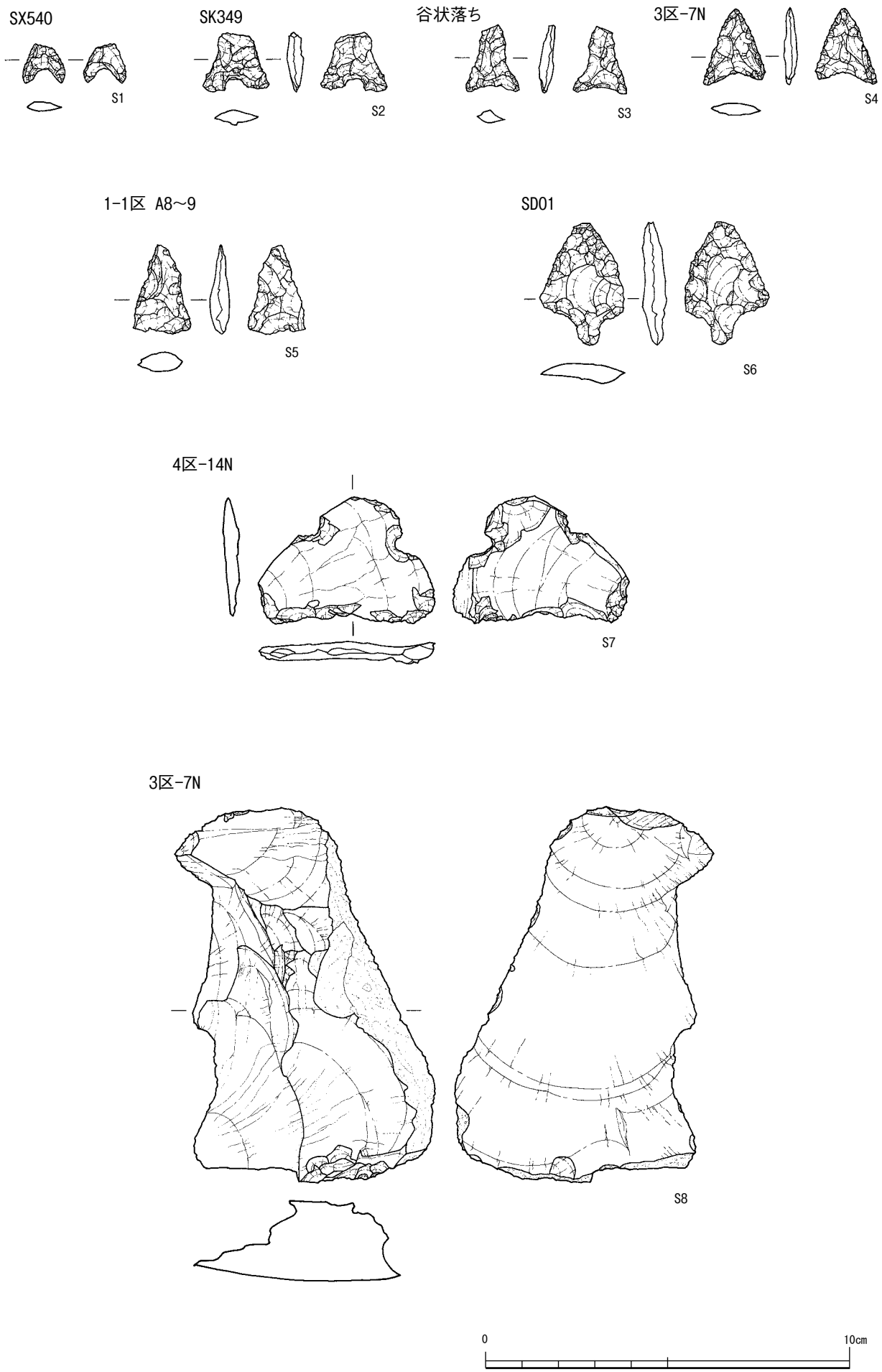
C12～E12

D～E24･25



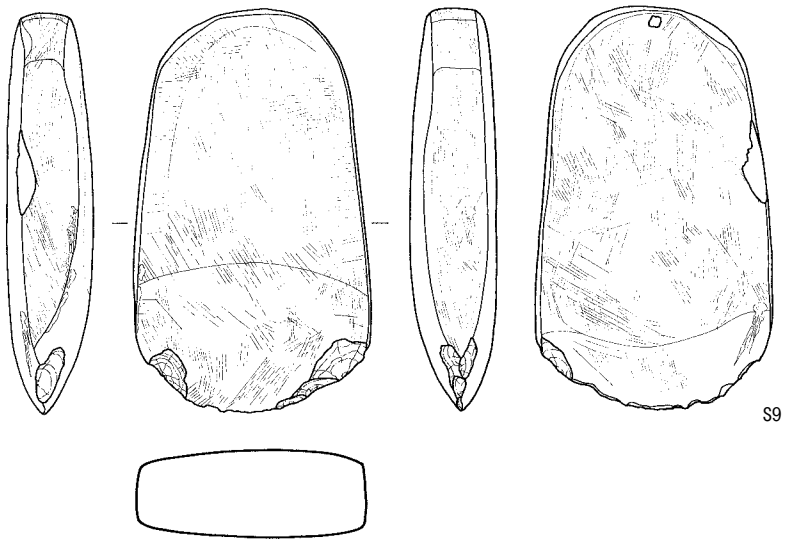


出土土器（平安～鎌倉時代 10）


SX540
S1
SK349
S2
谷状落ち
S3
3区-7N
S4
1-1区 A8～9
S5
SD01
S6
4区-14N
S7
3区-7N
S8
0
10cm

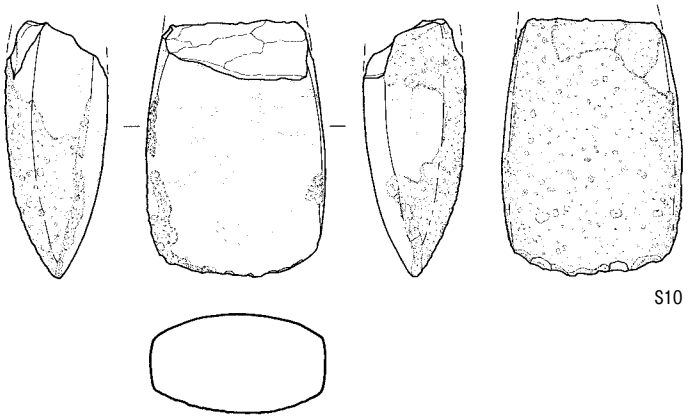
出土石器（1）

SK532



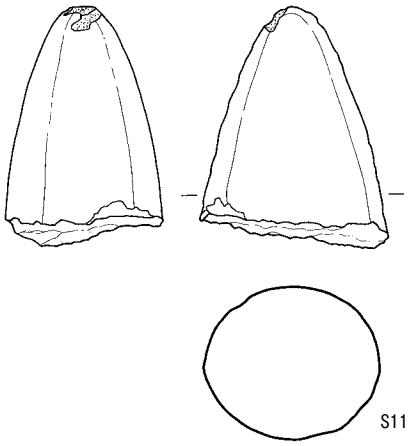
S9

3区-4



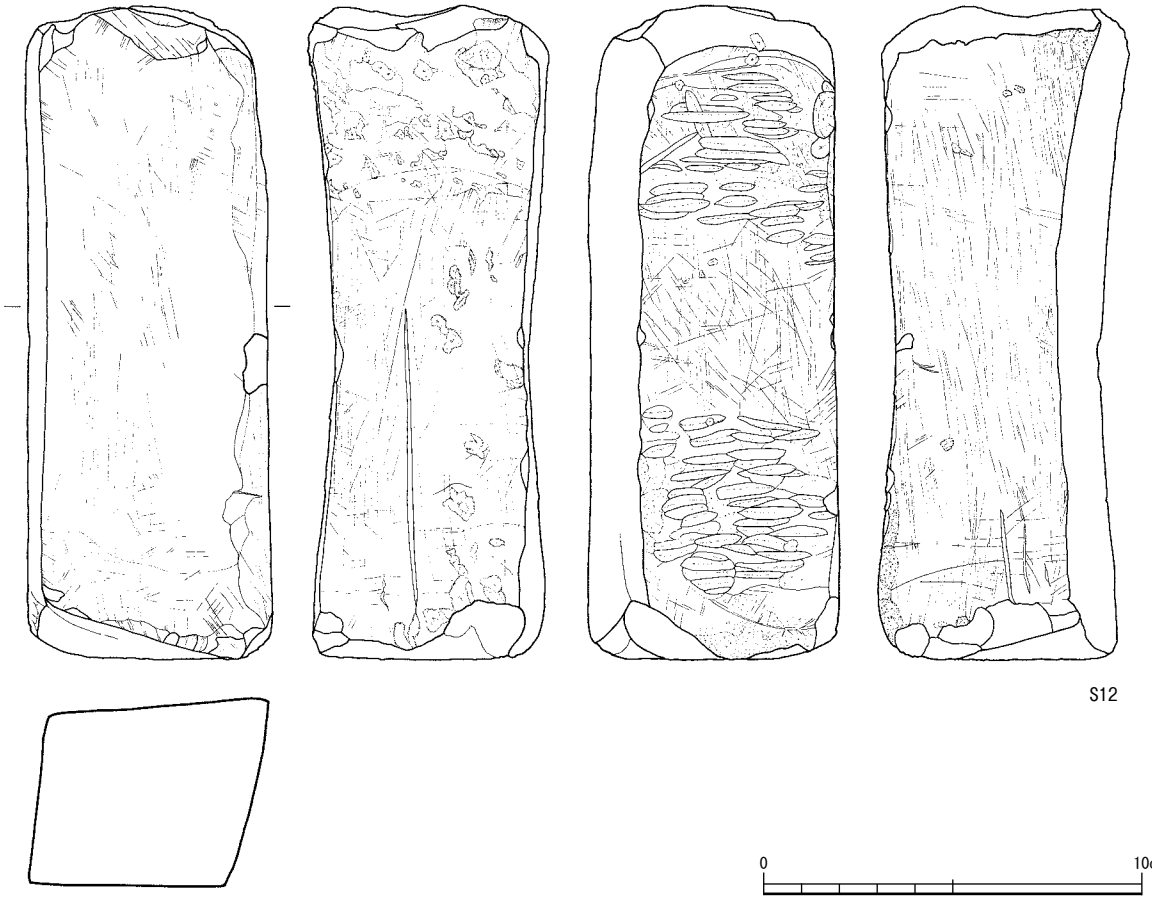
S10

3区-7N



S11

SX540

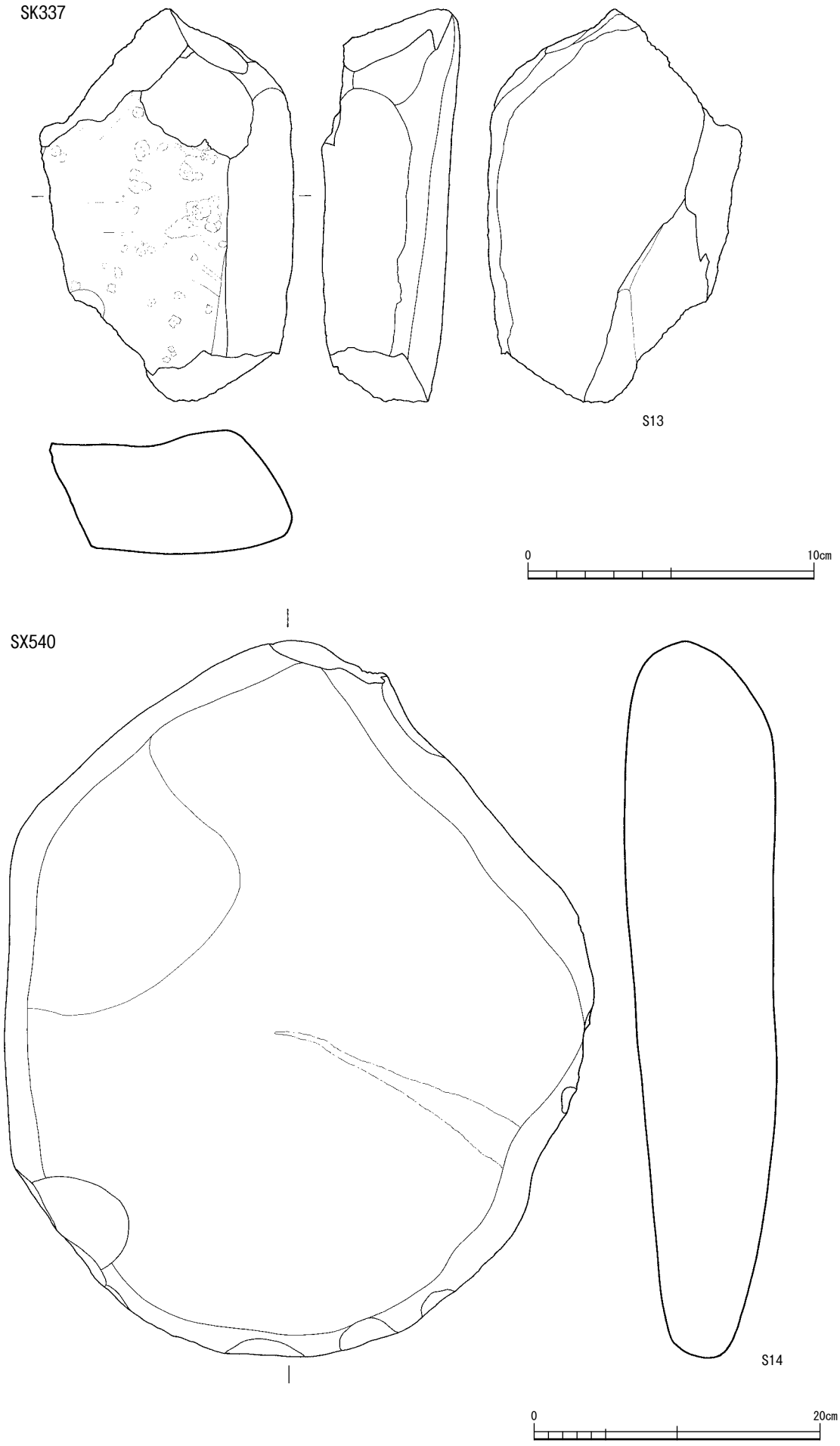


S12

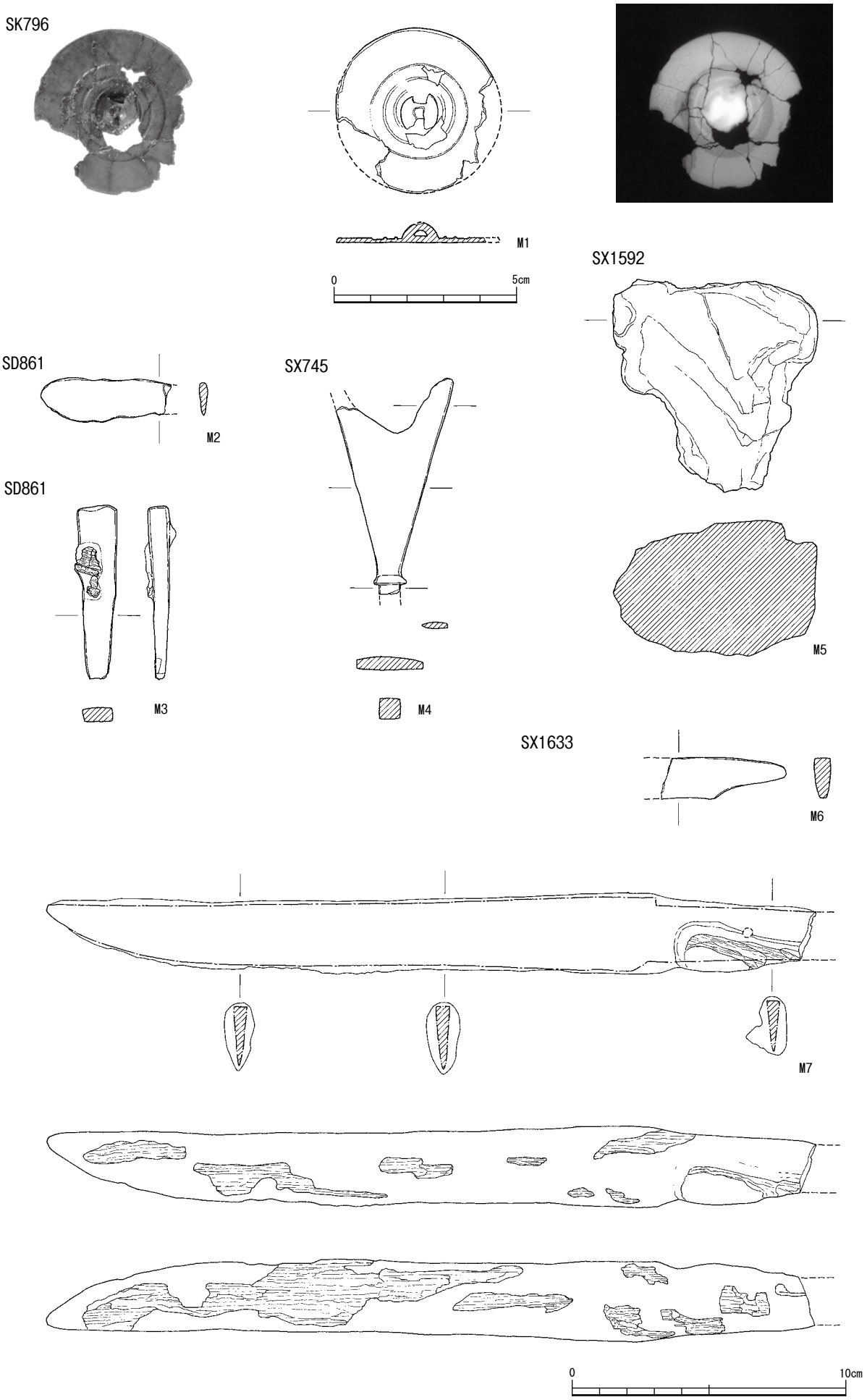
0 10cm

出土石器（2）

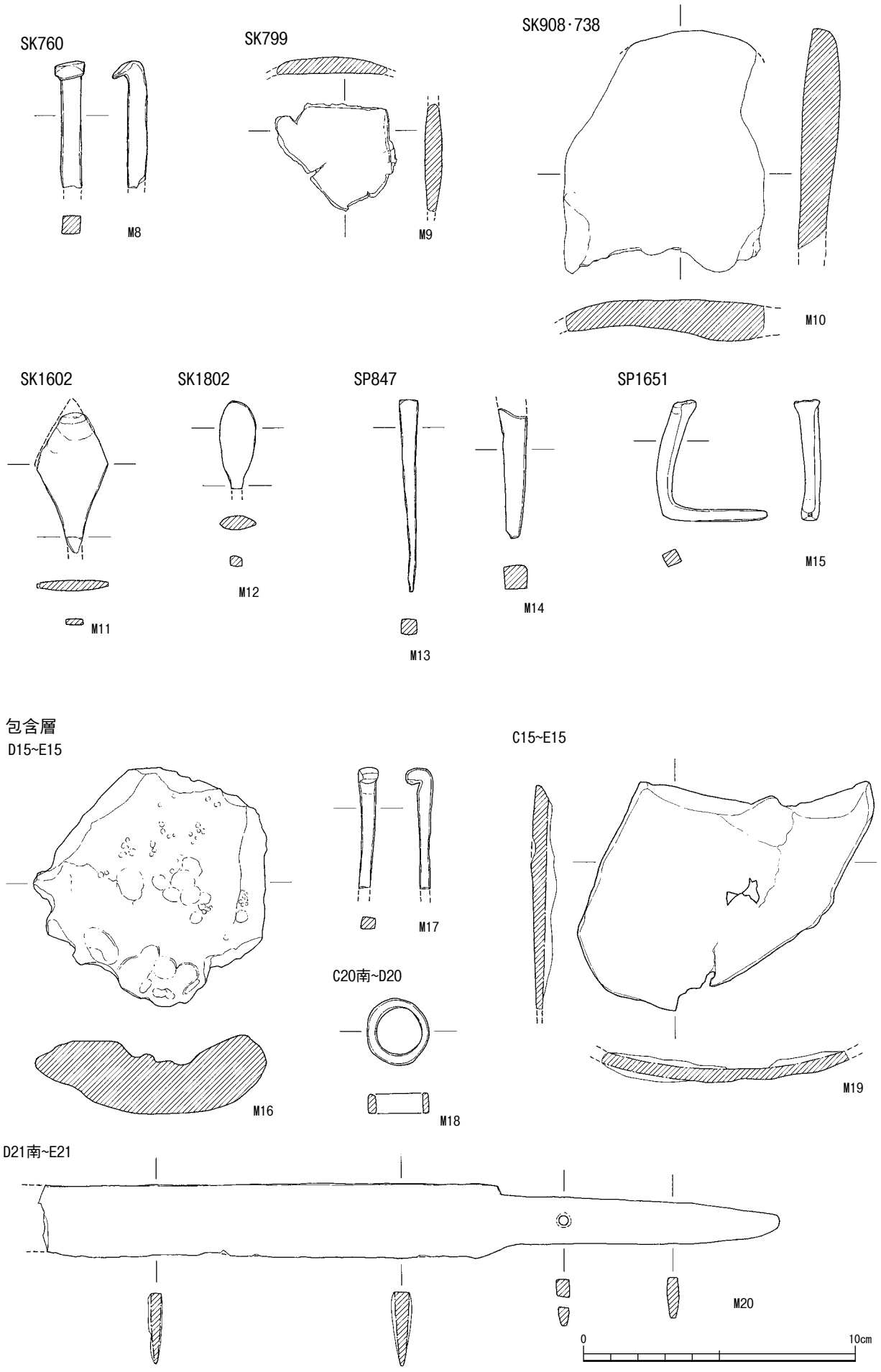
図版 70



出土石器（3）


SK796
M1
0
5cm
SX1592
SD861
M2
SX745
SD861
M3
M4
M5
SX1633
M6
M7
0
10cm

出土金属器（1）


SK760
M8
SK799
M9
SK908・738
M10
SK1602
M11
SK1802
M12
SP847
M13
M14
SP1651
M15
包含層
D15~E15
M16
M17
C20南~D20
M18
C15~E15
M19
D21南~E21
M20
0
10cm

出土金属器（2）

写 真 図 版

西畦野下ノ段・井戸遺跡　遠景（南から）

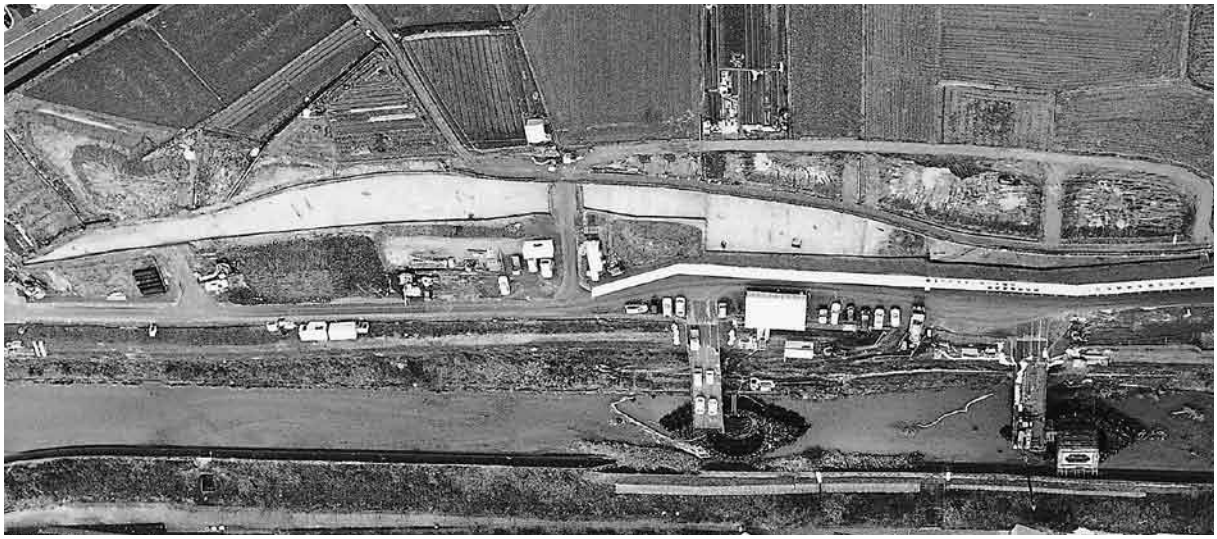
西畦野下ノ段・井戸遺跡　遠景（東から）

1 区　全景（真上から）

1 区　全景（西から）

１区　東半（西から）

２区　東半（西から）

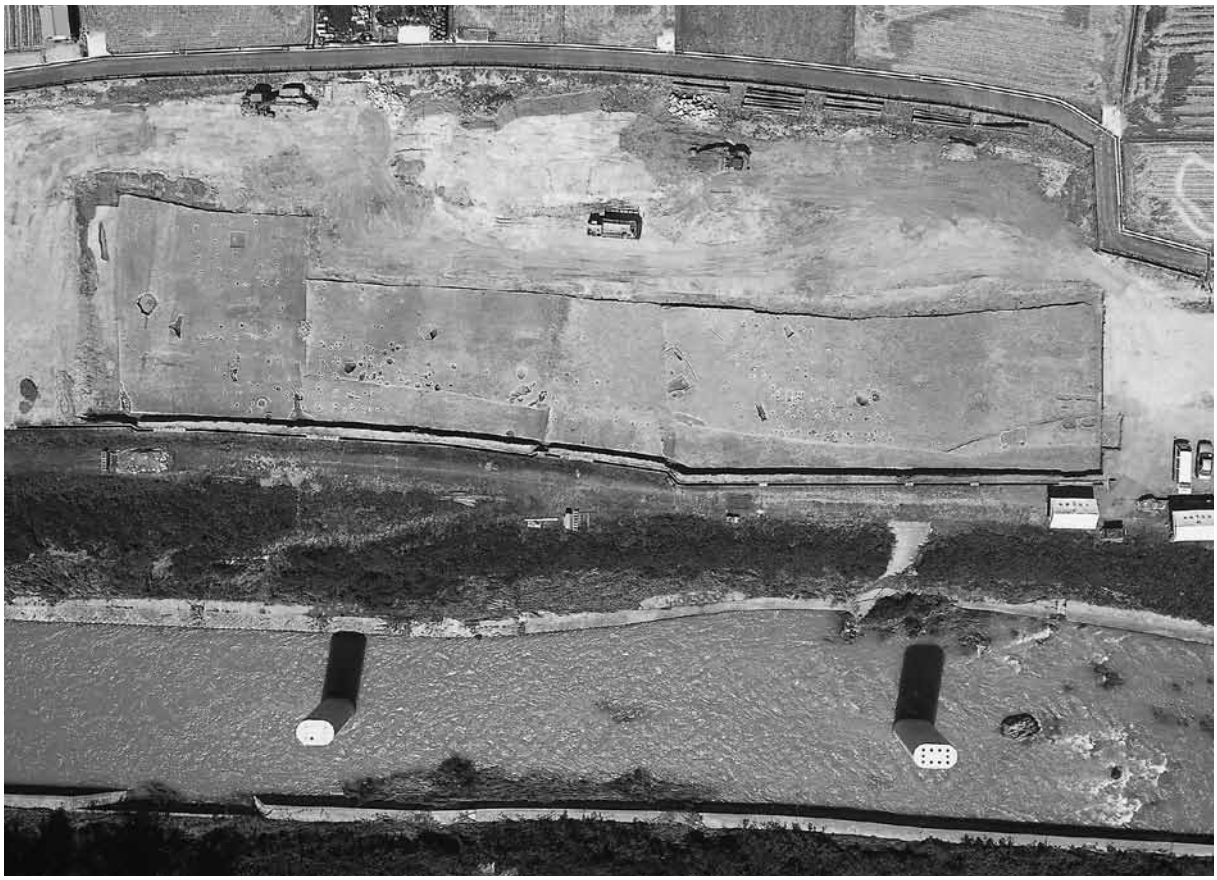


２区　全景（真上から）

２−２区　西半（西から）

３区　西半（西から）

４区　全景（真上から）



５区　全景（真上から）

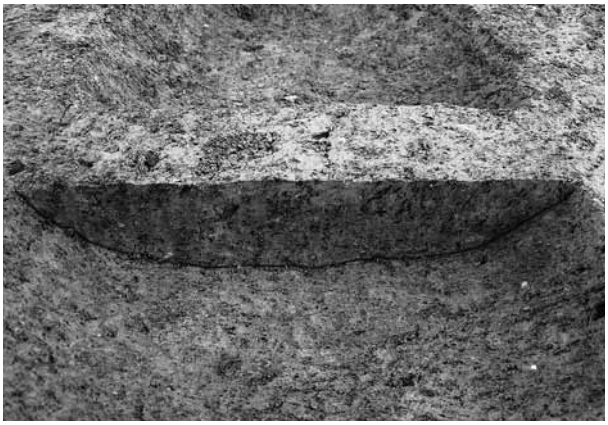
4区　全景（西から）

５区　東半（西から）

5区　東半（東から）

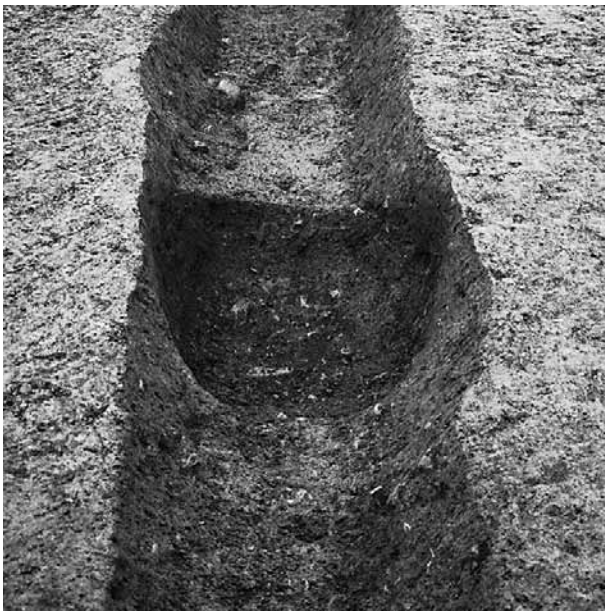
5区　西半（西から）

SK80　土層断面（北から）

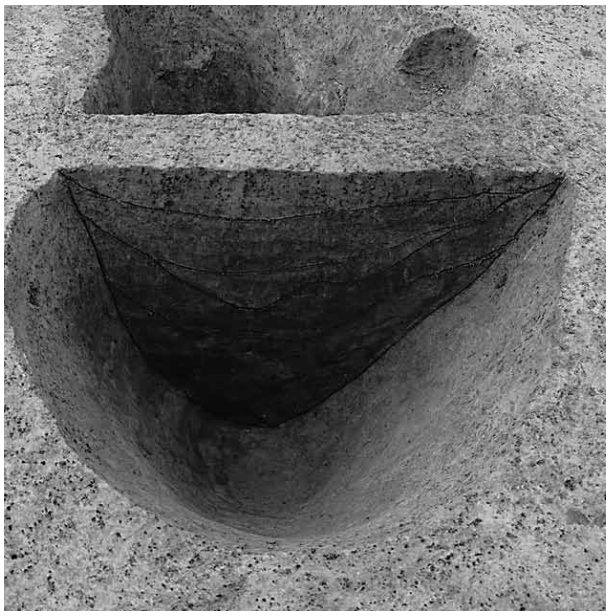


SK163　土層断面（南東から）

SK111　土層断面（東から）



SK111　完掘状況（東から）



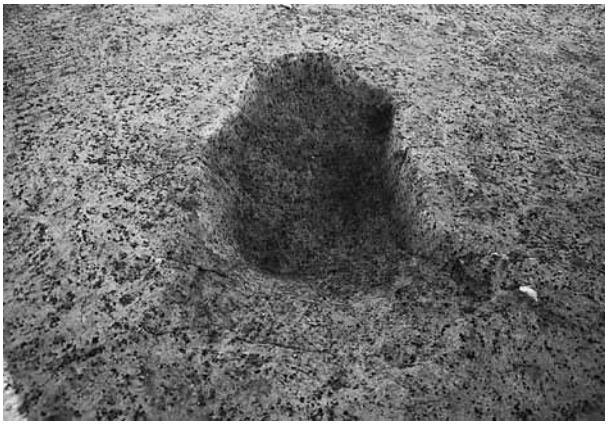
SK313　土層断面（北から）

SK313　完掘状況（北から）

SK337　遺物出土状況（西から）

SK337　遺物出土状況（南から）

SK337　土層断面（東から）



SK337　完掘状況（西から）

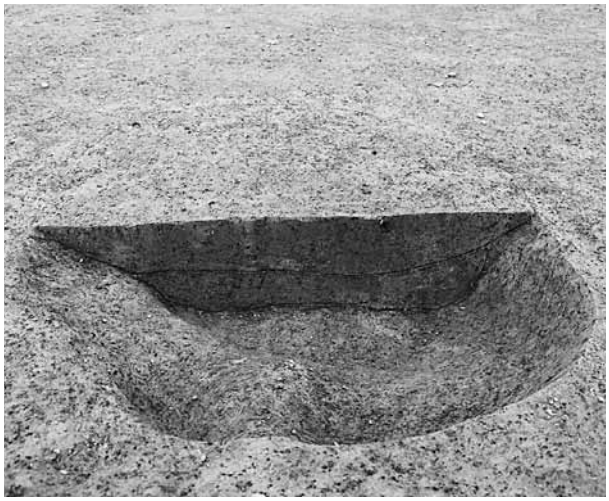
SK501　完掘状況（上：北から　下：東から）

SK501　土層断面（西から）

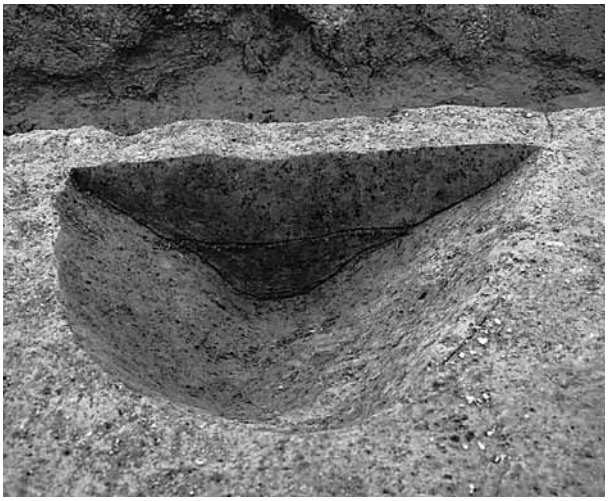
SK532　土層断面（東から）

SK532　完掘状況（南から）

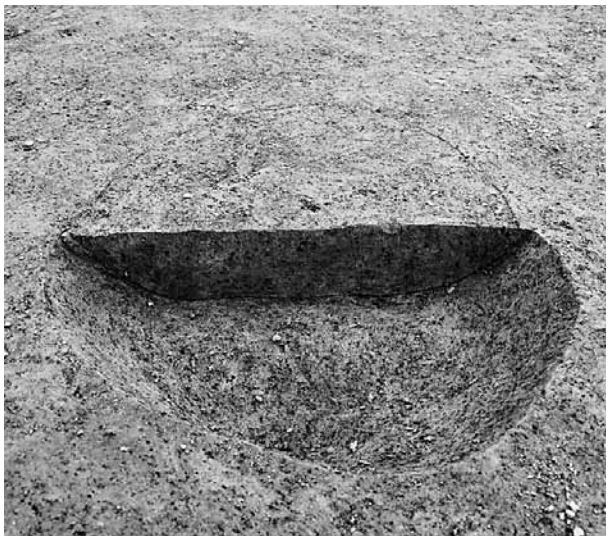
SK584　土層断面（北東から）



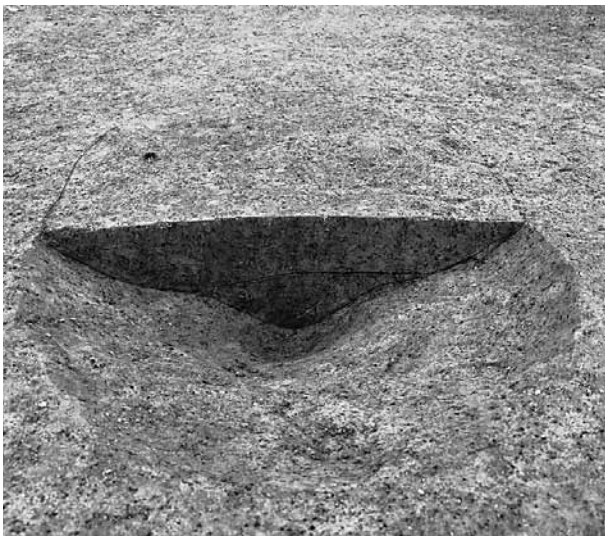
SK604　土層断面（南から）



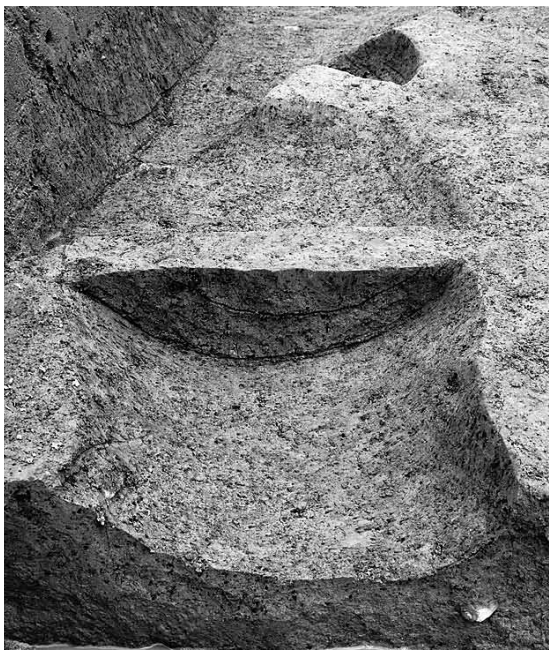
SK605　土層断面（東から）



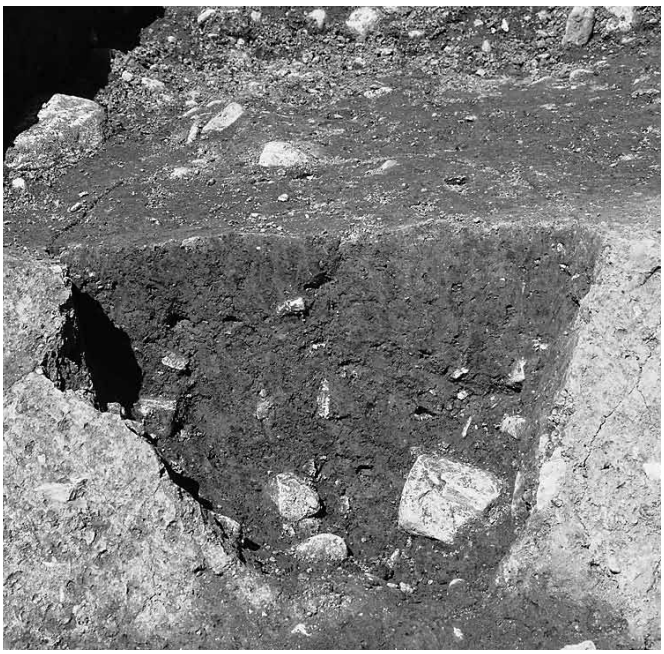
SK606　土層断面（南西から）



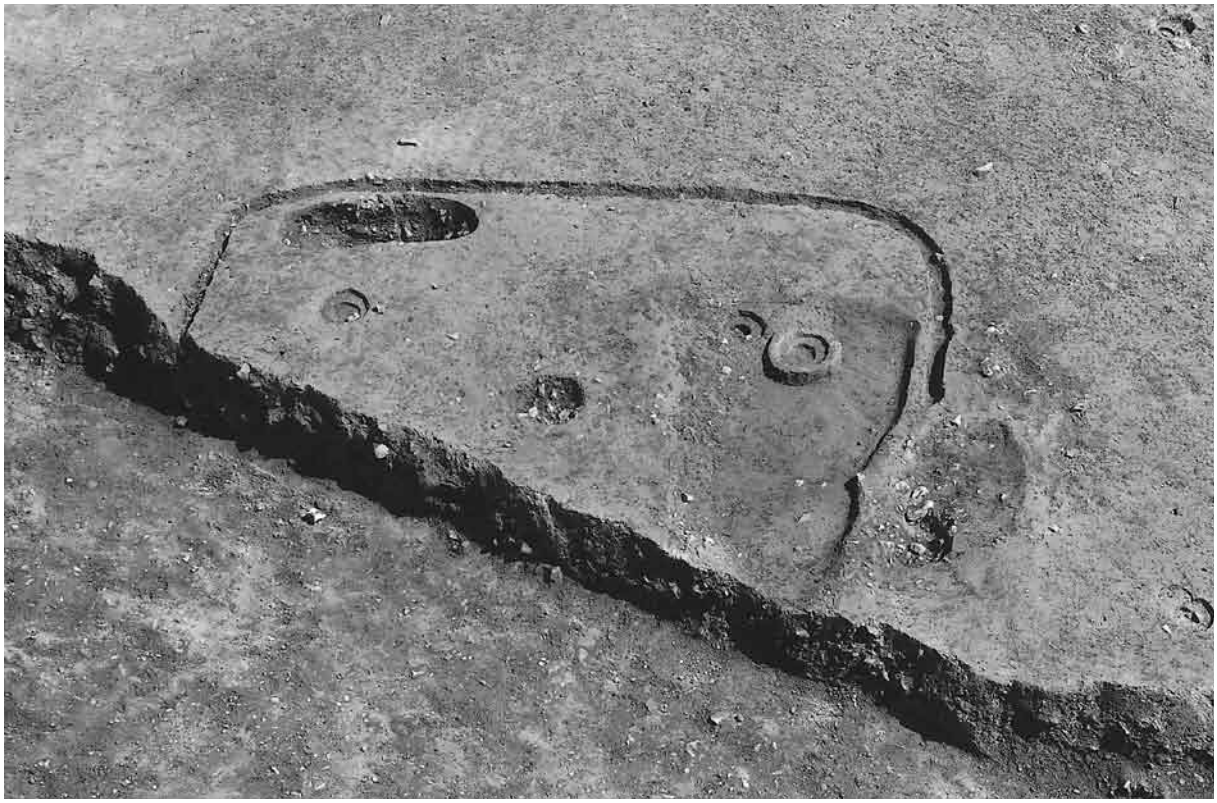
SK607　土層断面（南から）



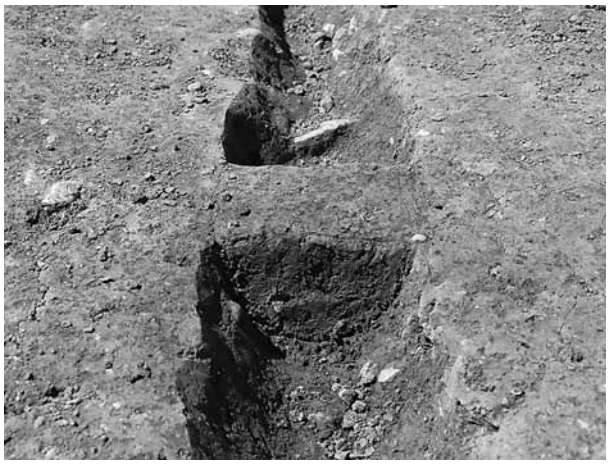
SK599　土層断面（西から）



SK1630　土層断面（南から）

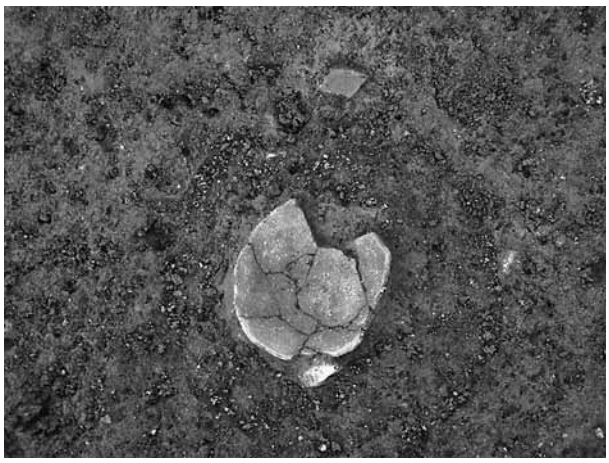


SH1607　完掘状況（南西から）

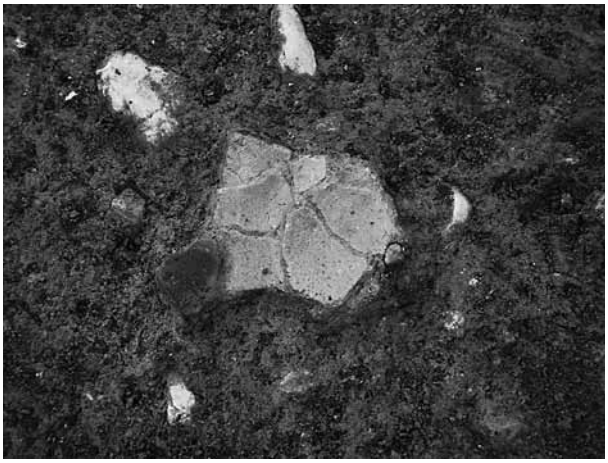


SH1607　周溝断面（西から）

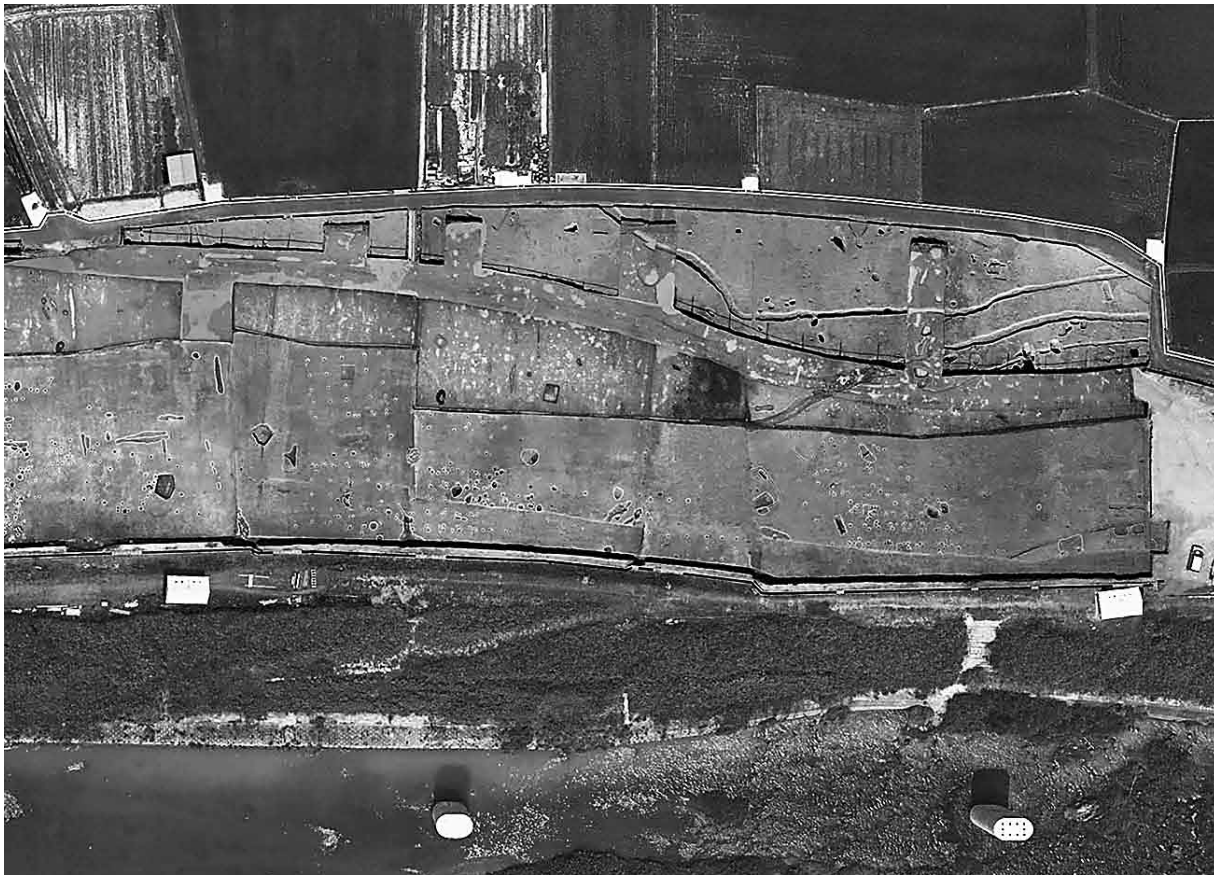
SH1607　土層断面（南から）



SH1607　遺物出土状況（東から）

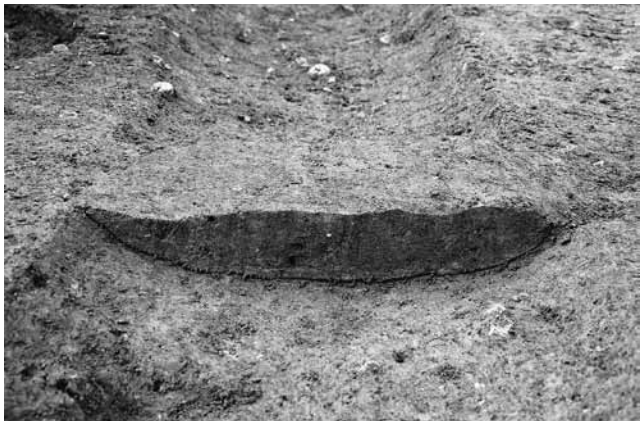


SH1607　遺物出土状況（東から）



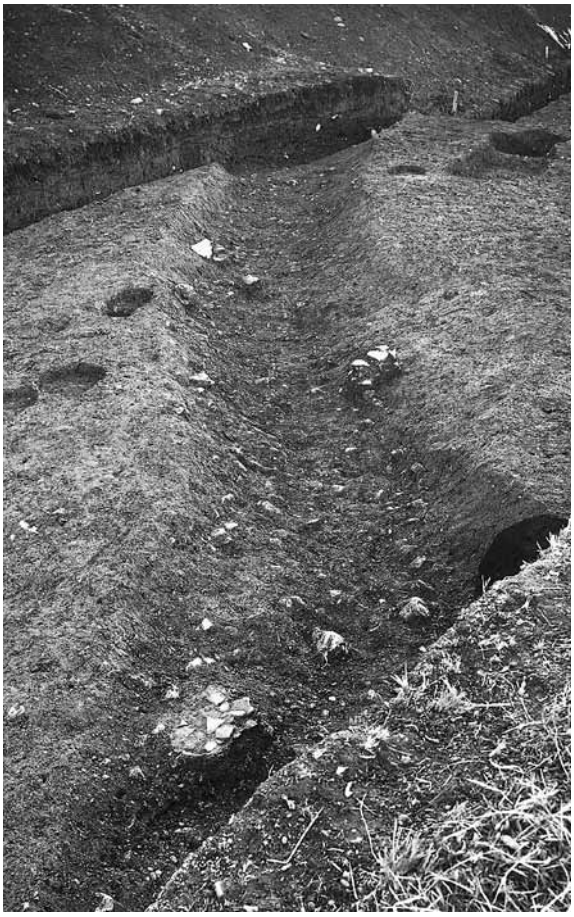
SD01・02・05　航空写真（真上から）

SD01・02・05（西から）

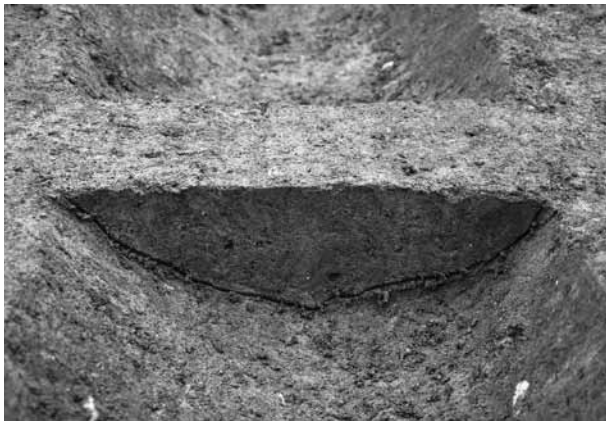


SD01 a-a’　土層断面（東から）

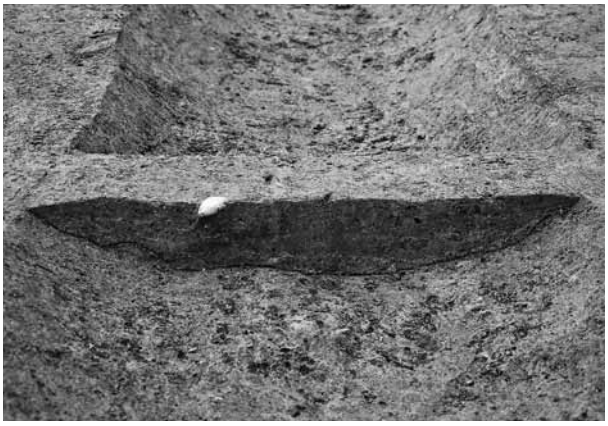
SD01 d-d’　土層断面（北東から）



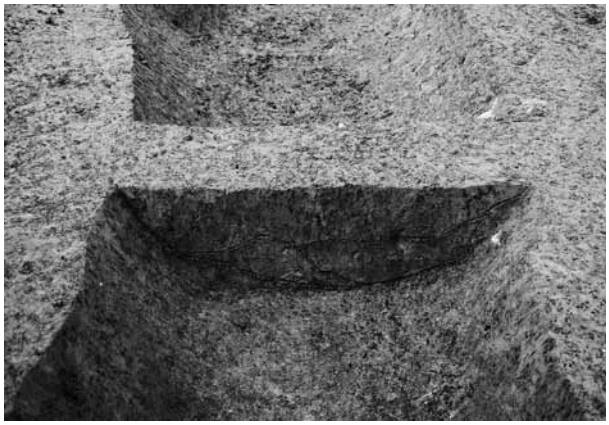
SD01 d-d’　断面付近（北東から）



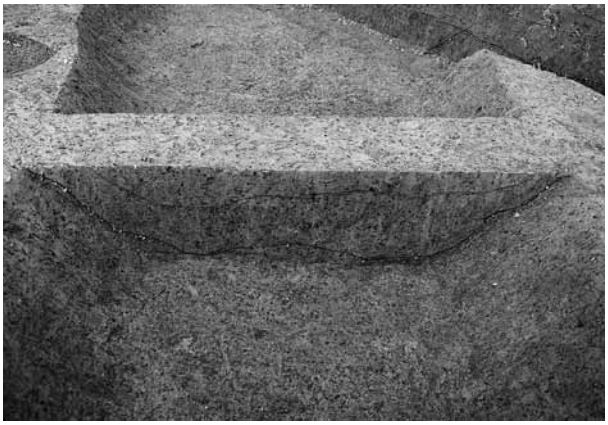
SD02 c-c’　土層断面（東から）



SD05 a-a’　土層断面（東から）



SD05 f-f’　土層断面（東から）



SD05 g-g’　土層断面（東から）

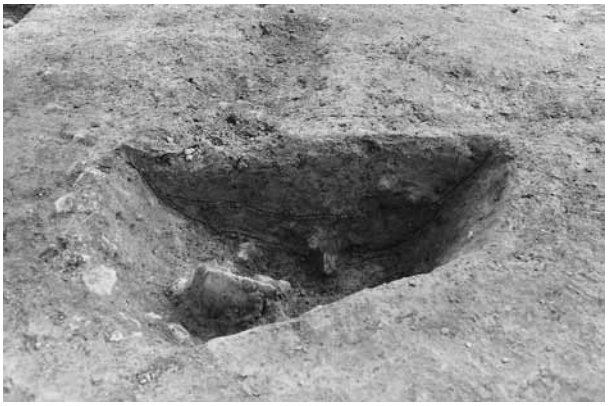
SD01 d-d' 付近遺物出土状況（東から）

SD01 d-d' 付近遺物出土状況（東から）

SD01 d-d' 付近遺物出土状況（東から）

SD01 d-d' 付近遺物出土状況（東から）

SD01(SD1602)・SD1604・SK1605・1606（南西から）



SK1603　土層断面（南西から）

SD1604　土層断面（西から）

SX540　遺物出土状況（南から）

SX540　完掘状況（南から）

SX540 ④・⑤区　遺物出土状況（南から）

SX540 ③・④区　遺物出土状況（南から）

SX540 ①区　遺物出土状況（南から）

SX540 ③区B 群　遺物出土状況（東から）

SX540 ③区　遺物出土状況（南東から）

SX540　遺物出土状況　土製品アップ

SX540 ②区A 群　遺物出土状況（北から）

SX540 ⑤区　遺物出土状況 砥石アップ

SX540 A-A'　土層断面（南から）

SX540 A-A'　土層断面（南から）

SX540 C-C'・D-D'　土層断面（西から）

SX540 A-A'　セクション除去後（西から）

SX540 B-B'　土層断面（西から）

SX1543　遺物出土状況（南から）

SX1543　土層断面（北から）

SX1543　遺物出土状況（東から）

SX1543　完掘状況（南から）

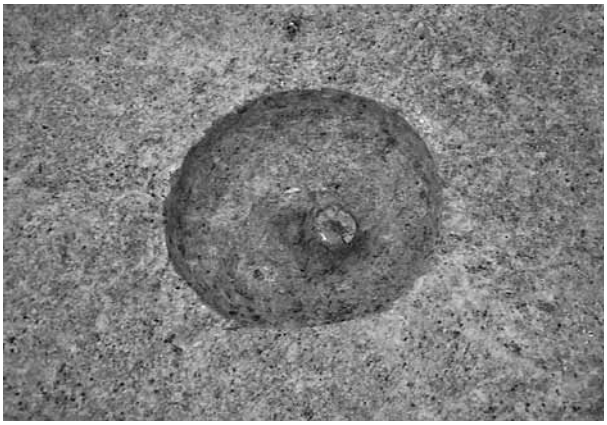
SX518　土層断面（北西から）

SX525　遺物出土状況（東から）

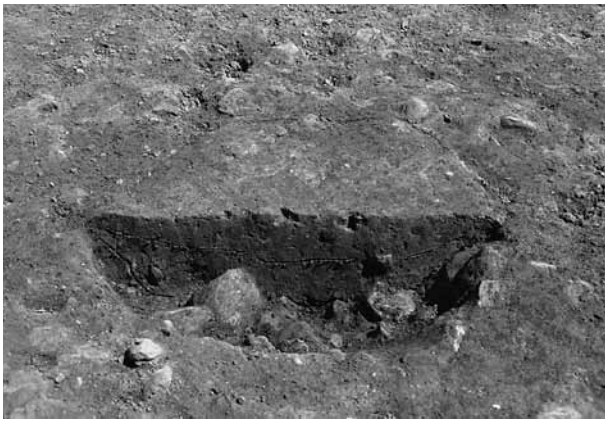
SX1539（南から）

SX1539　土層断面（南から）

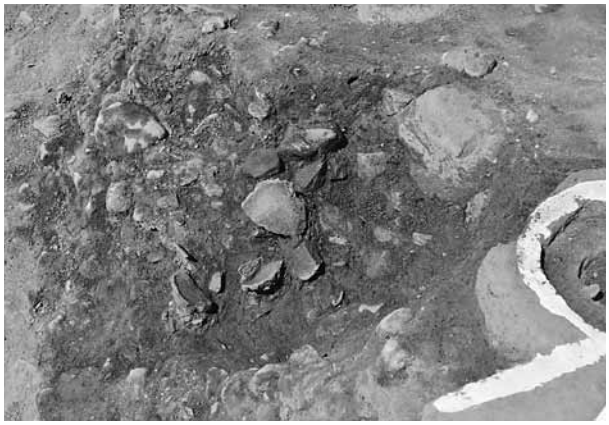
SX1539　遺物出土状況（西から）



SK796　重圏文鏡出土状況（南から）



SK1609　土層断面（西から）



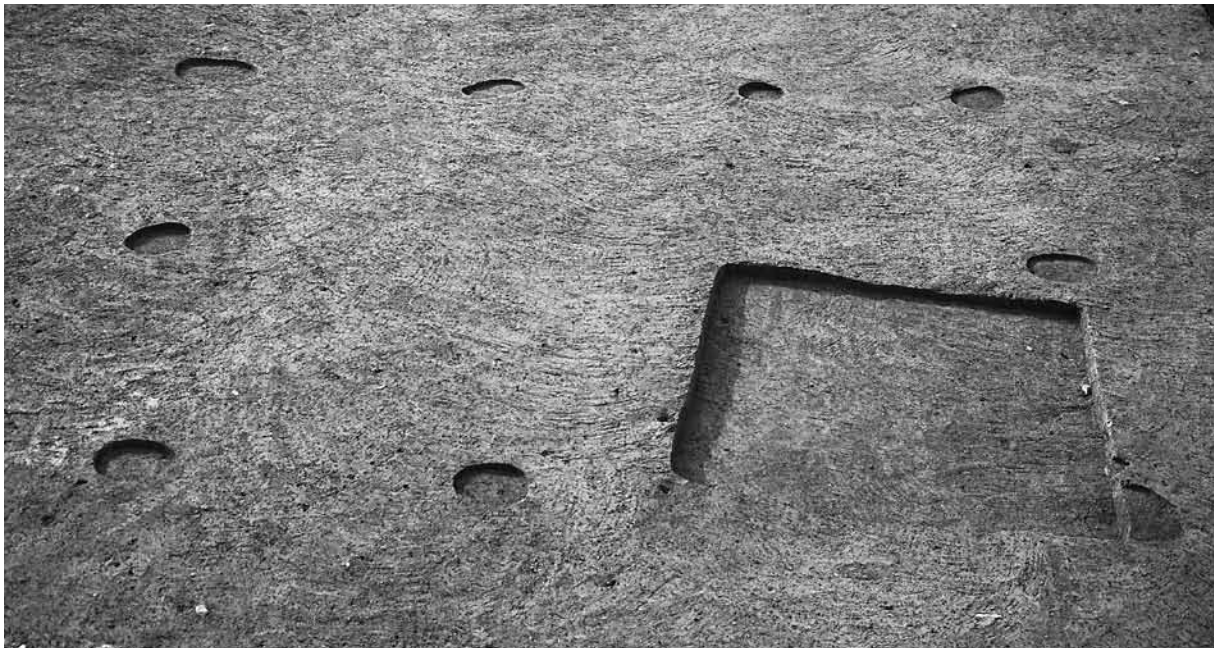
SK1662　土器出土状況（南東から）

SK1662　土器出土状況（北東から）

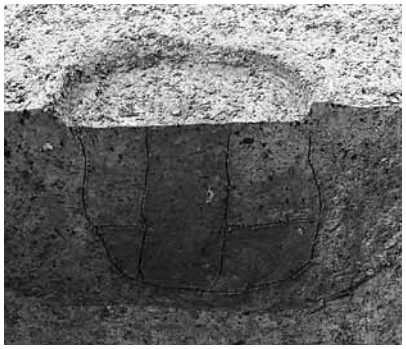
SK41　土器検出状況（西から）

SK41　土器出土状況（南から）

SK41　完掘状況（北から）

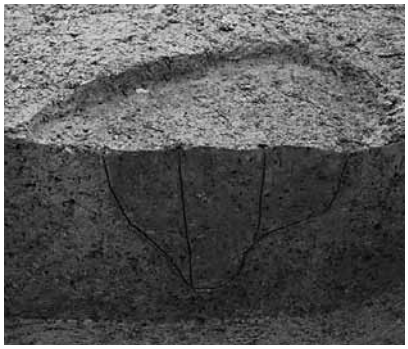


SB01　全景（東から）



SB01　SP168（東から）

SB01　SP170（南から）



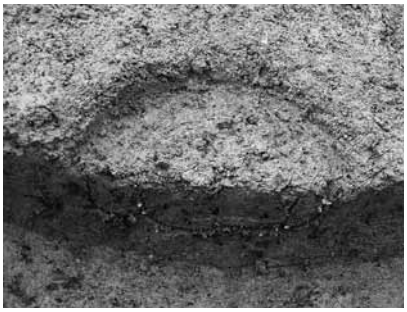
SB01　SP174（東から）

SB02・03　全景（西から）

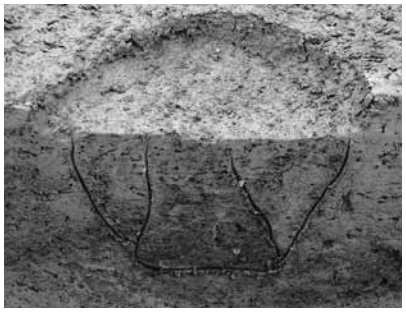
SB04　全景（西から）

SB02　SP303（東から）

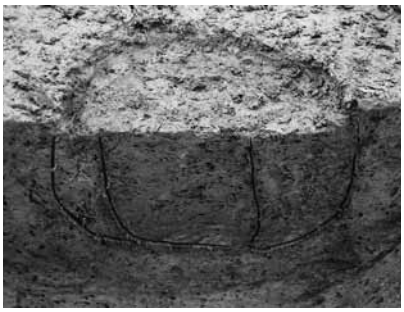
SB03　SP294（東から）



SB03　SP320（南から）



SB04　SP421（東から）



SB04　SP422（東から）

SB04　SP376（南から）

SB05・06　全景（南から）

SB05　SP974・SP886（南から）

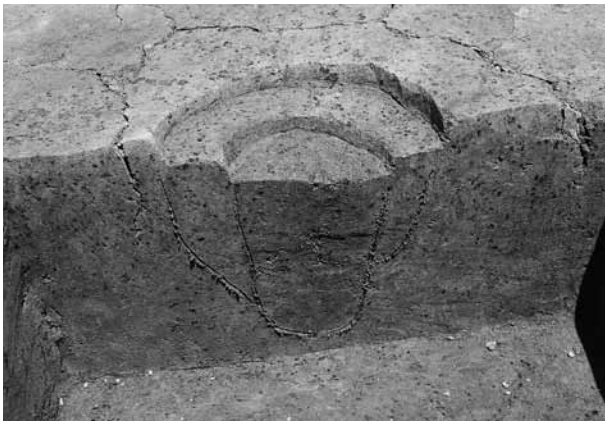
SB05　SP835（西から）

SB06　SP817 青磁出土状況（北から）

SB06　SP1008・836（北から）

SB07・08　全景（南から）

SB07　SP1048・SB08　SP1058（南東から）



SB08　SP1056（南から）

SB08　SP1057（南から）

SB08　SP1059（南から）

SB09　全景（南から）

SB11　全景（南から）

SB09　SP1033（北から）

SB09　SP1034（北から）

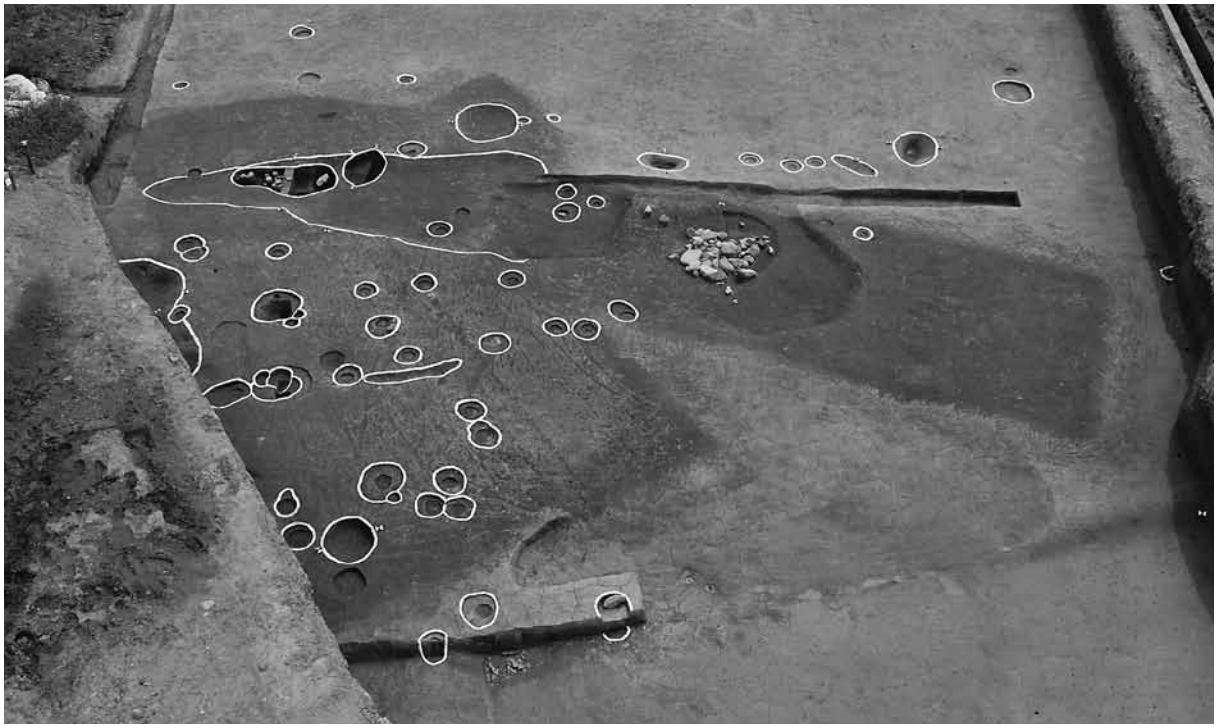
SB11　SP1088（東から）

SB10　全景（南から）

SB10　SP1085（北から）

SB10　SP1065（東から）

SB10　SP870（南東から）



SB12　全景（西から）

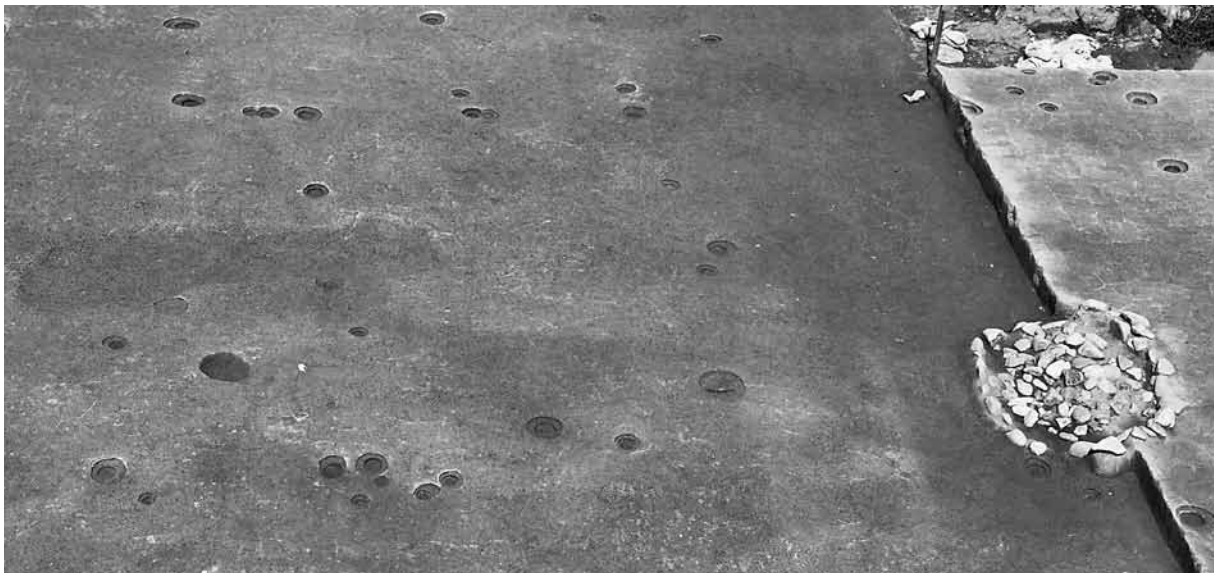
SB13・14　全景（南から）

SB12　SP772（北から）

SB13　SP1019（東から）

SB14　SP871（南から）

SB15　全景（南から）

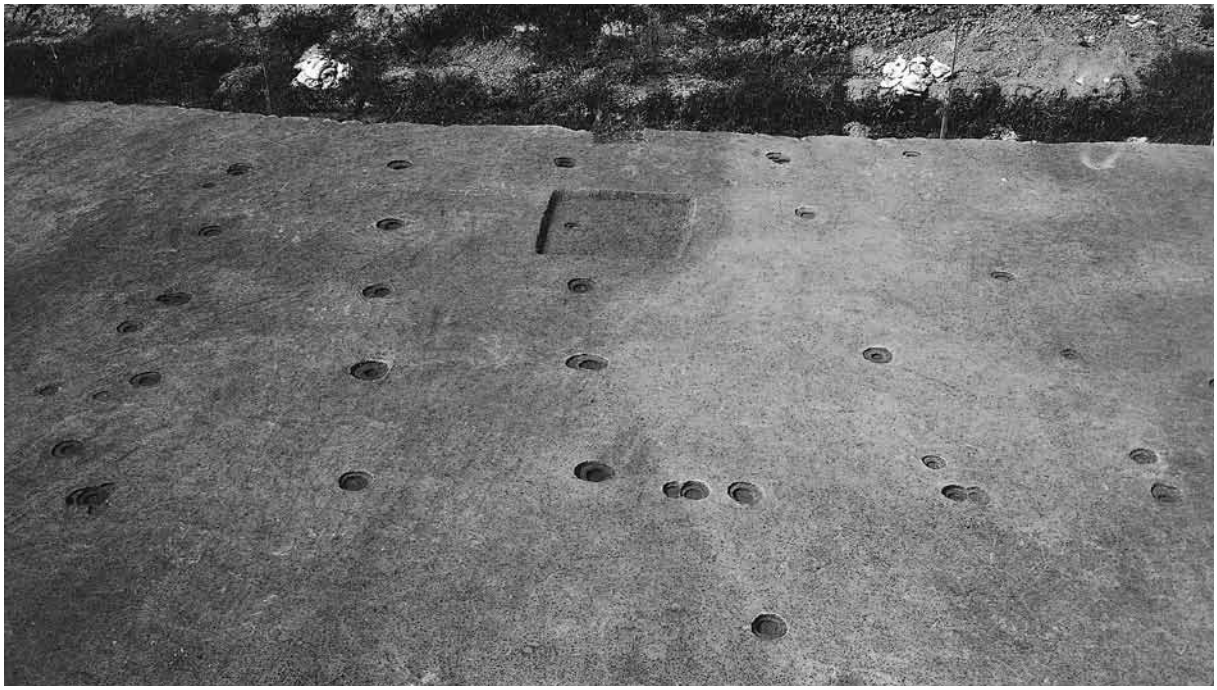


SB16　全景（南から）

SB15　SP956（南から）

SB16　SP965（西から）

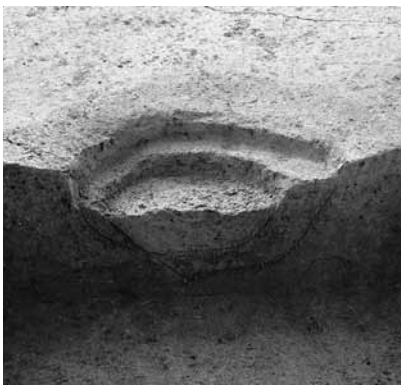
SB16　SP1671（南から）



SB17　全景（南から）

SB18　全景（南から）

SB17　SP1506（南から）



SB17　SP1524（東から）

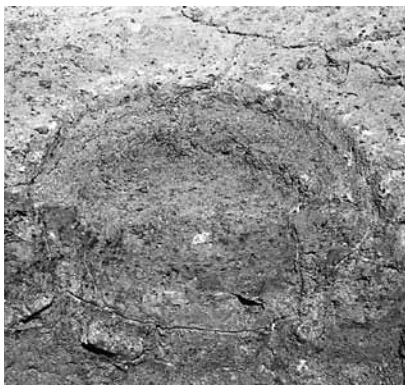
SB18　SP1687（南から）

SB19・20　全景（南から）

SB21　全景（南から）

SB19　SP1717（南から）

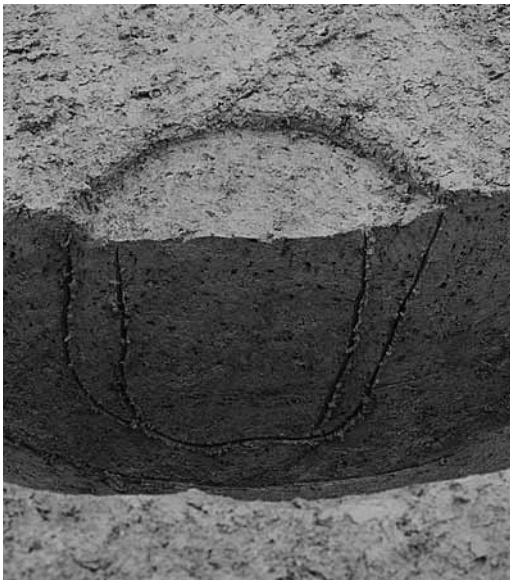
SB20　SP1559（西から）



SB21　SP1658（南から）

SB22～24　全景（南から）

SA01　全景（東から）

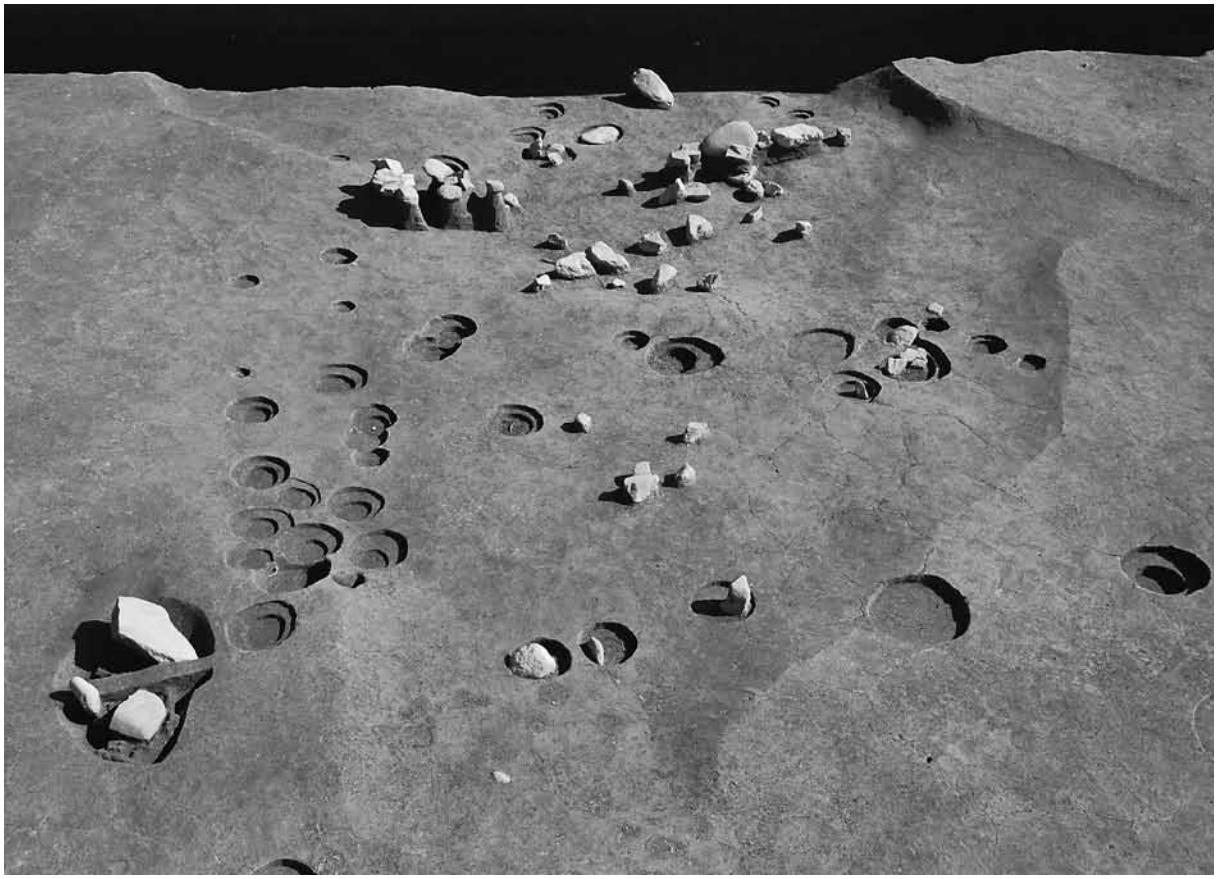


SA01　SP434（南から）

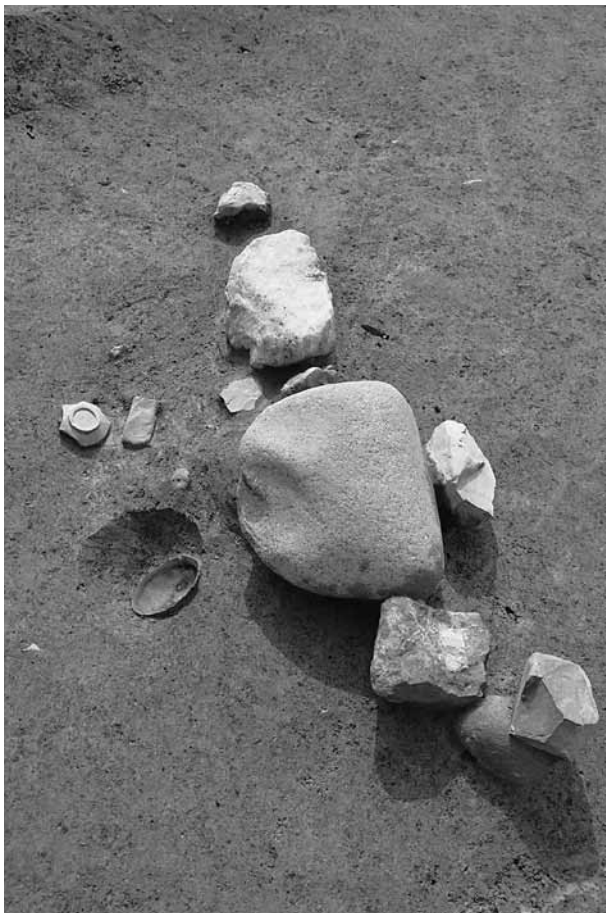
SB22　SP1801（南から）

SB23　SP1766（南から）

SB24　SP1765（南から）



谷状落ち　全景（北から）



谷状落ち　遺物出土状況（東から）

谷状落ち　土器出土状況（南から）

谷状落ち　土器出土状況（南から）

SX795　土層断面
（西から）

SX795　土層断面
（北から）

SX795　完掘状況
（北から）

SX1617　全景（南から）

SX1617　完掘状況（南から）

SX1617　土層断面（南から）

SX1617　土層断面（東から）

SX1618　土層断面（南から）

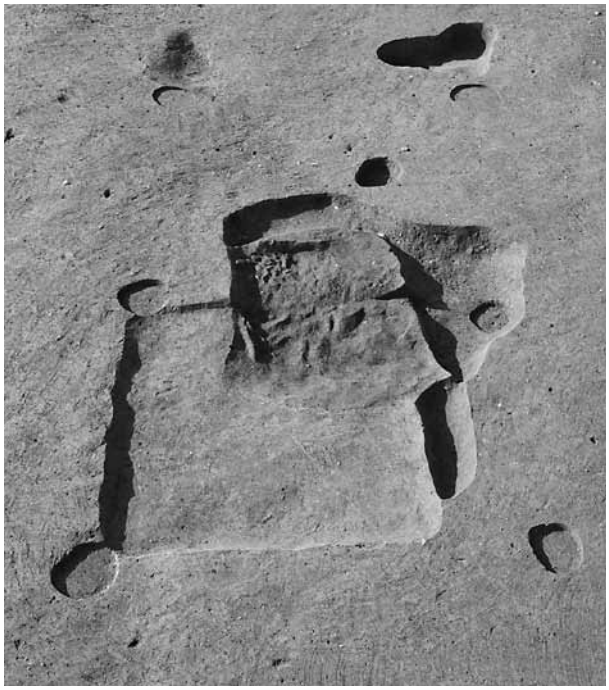
SX1618　完掘状況（南から）

SX1619　遺物出土状況（西から）

SX1633　遺物出土状況（東から）

SX1633　青磁出土状況（東から）

SX1633　鉄刀出土状況（東から）



SK60　焼土検出状況（東から）

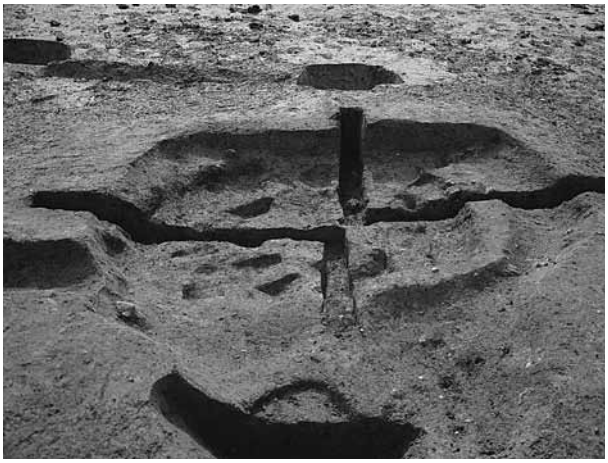
SK60　焼土検出状況（東から）

SK60　石敷状況（北から）

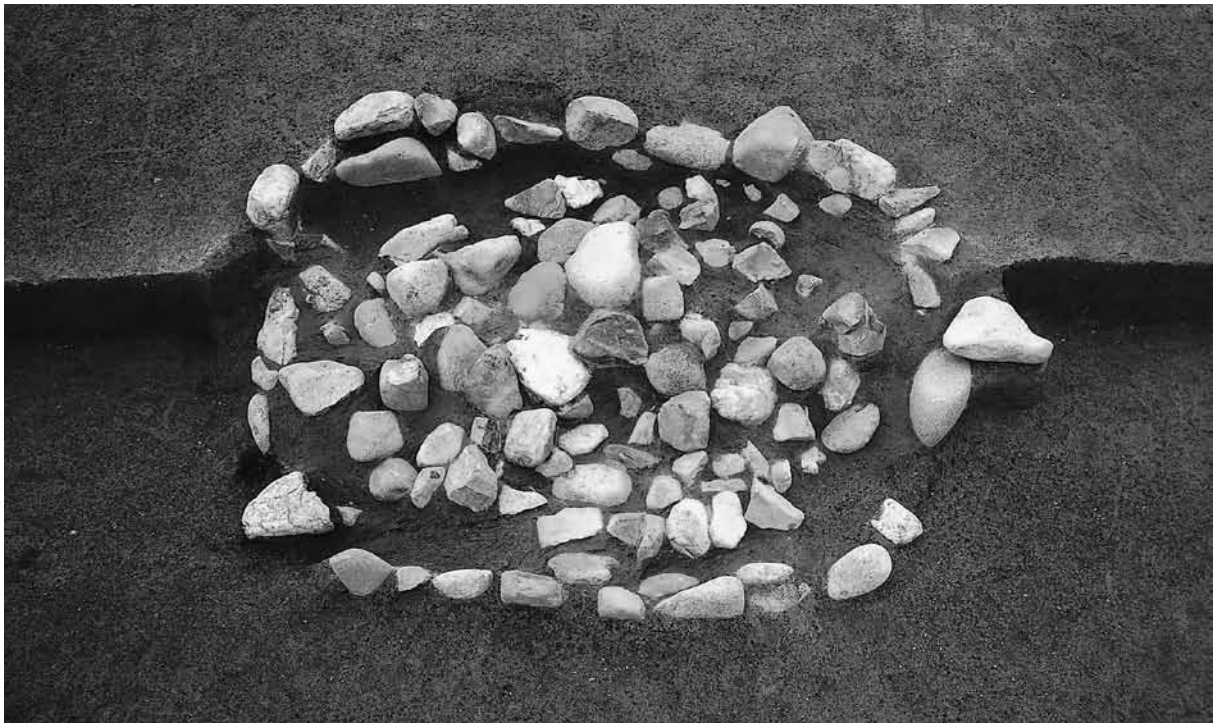
SK60　土層断面（北から）

SK60　土層断面（東から）

SK60　土器出土状況（東から）



SK60　完掘状況（北から）



SX1501　検出状況（西から）

SX1501　上層土層断面（西から）

SX1501　上層半截状況（西から）

SX1501　上層礫除去状況（西から）

SX1501　土器出土状況（東から）

SX1501　炭層　瓦器出土状況（南から）

SX1501　炭層検出状況（西から）

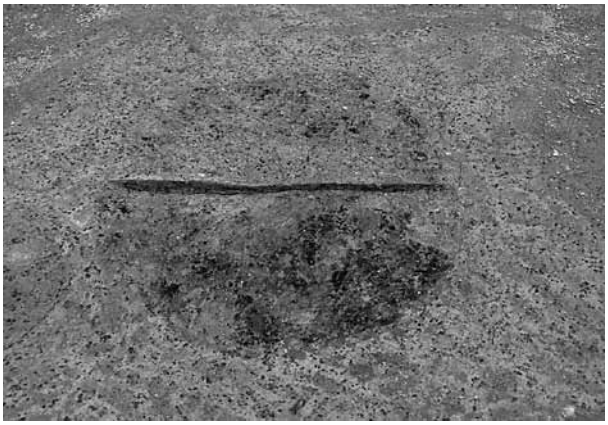
SX1501　石敷検出状況（西から）

SX1501　石敷半截状況（西から）

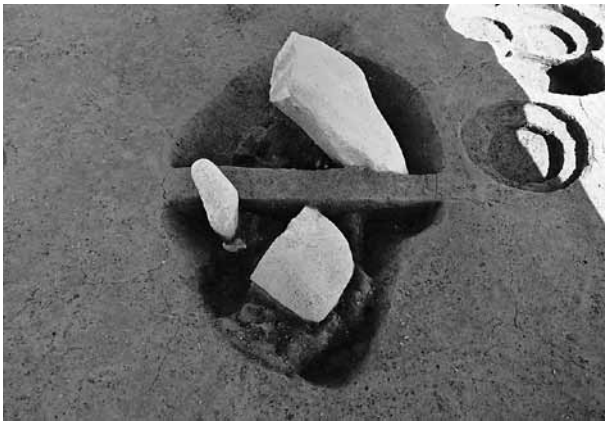
SX1501　石敷断割り状況（南から）

SX1501　完掘状況（西から）

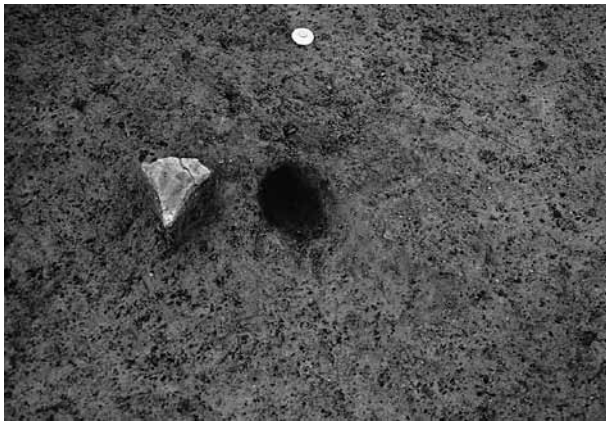
SK1537・1538　全景（南から）



SK740（南から）

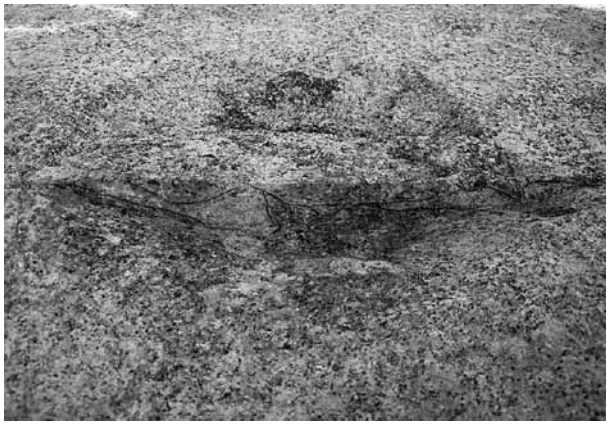


SK896（北から）



SK176（北東から）

SK187　土層断面（南から）



SK408　土層断面（南西から）

SK454　土層断面（北から）

SX745　集石検出状況（南から）

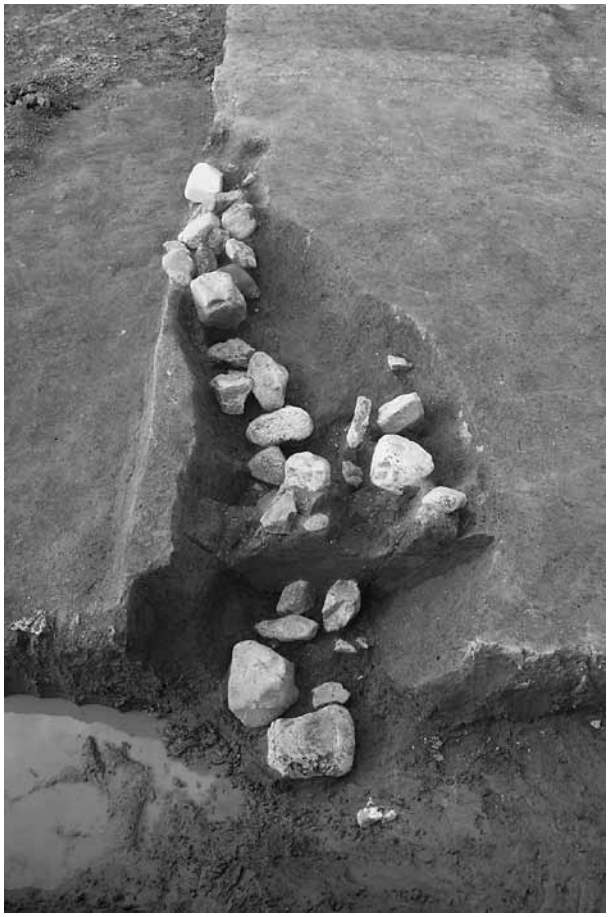
SX745　土層断面（南から）

SX745　遺物出土状況（東から）

SX745　遺物出土状況（北西から）

SX745　遺物出土状況（西から）

SX761　集石検出状況（南から）



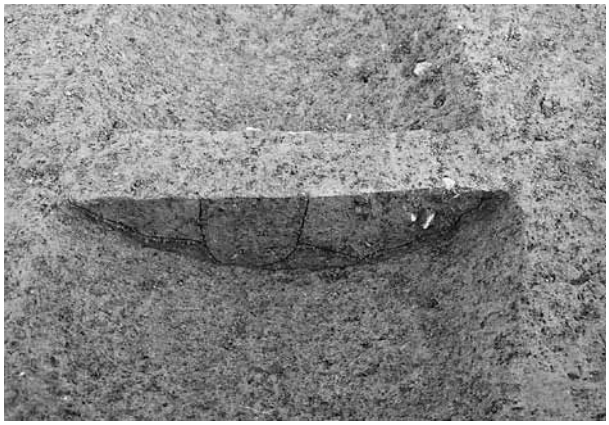
SX1592　土層断面（南から）

SX1592（南東から）

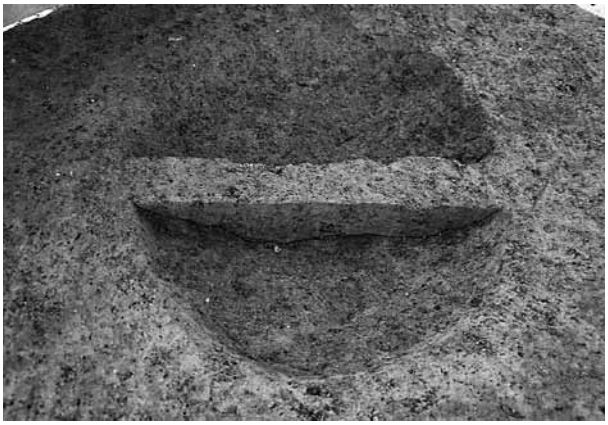
SX1592　完掘状況（南から）

SK68　完掘状況（南から）

SK72　土層断面（西から）

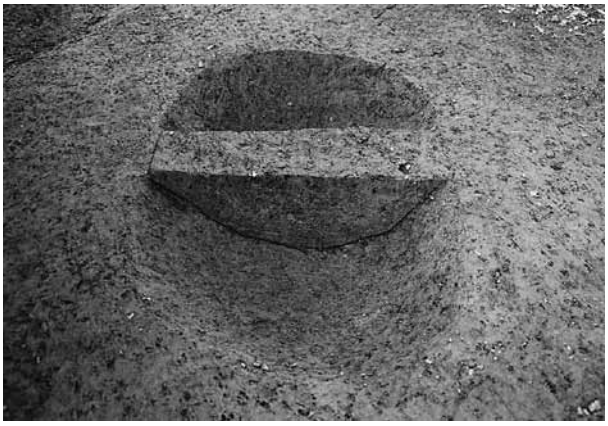


SK97　土層断面（南から）

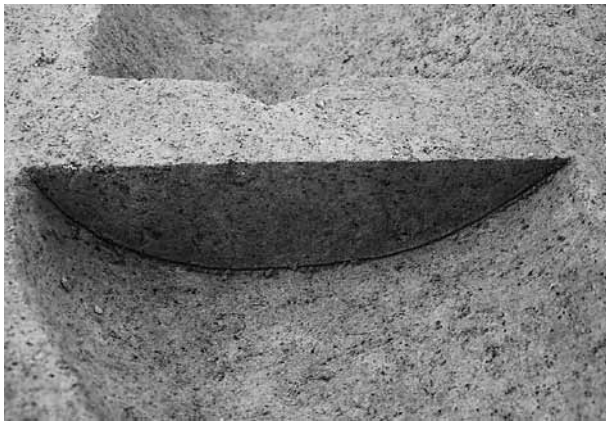


SK104　土層断面（北から）

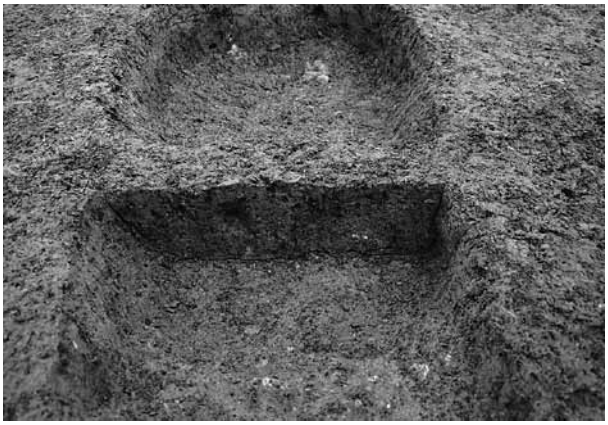
SK113　土層断面（南から）



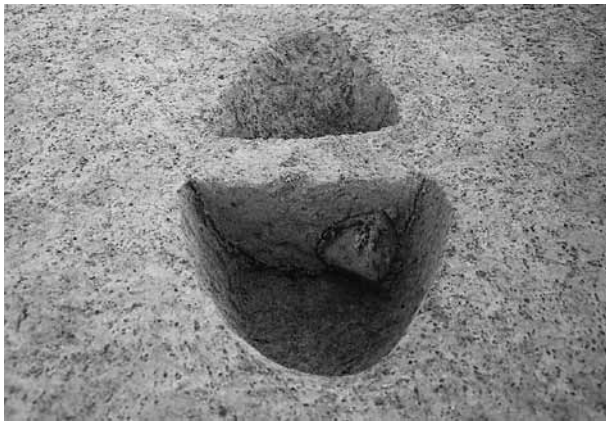
SK134　土層断面（南東から）



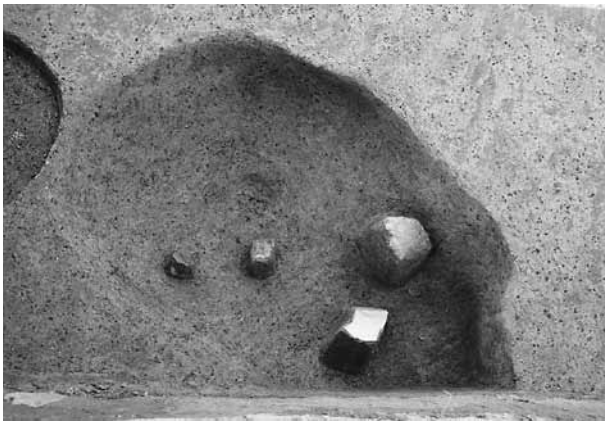
SK183　土層断面（北西から）



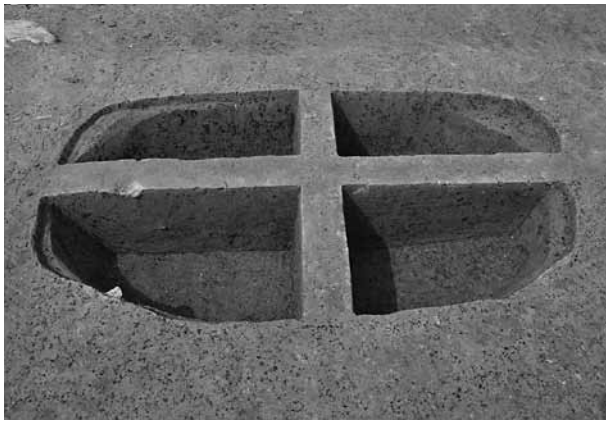
SK261　土層断面（西から）



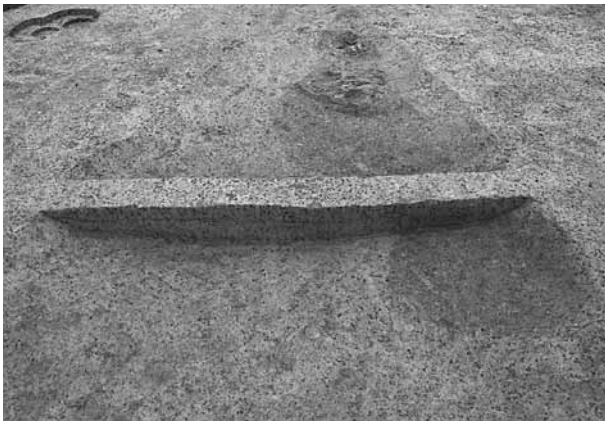
SK393　土層断面（南西から）



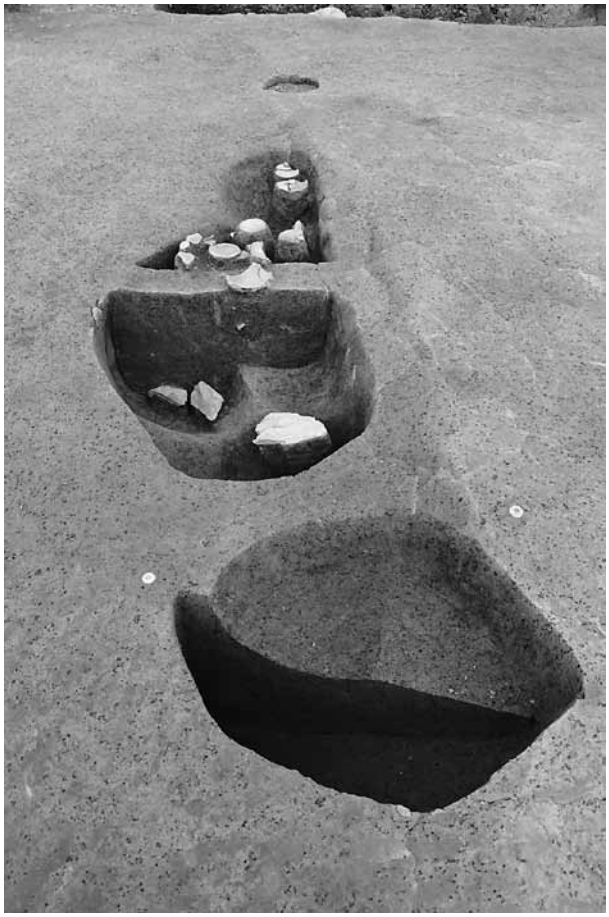
SK738　遺物出土状況（南から）



SK742　土層断面（南から）



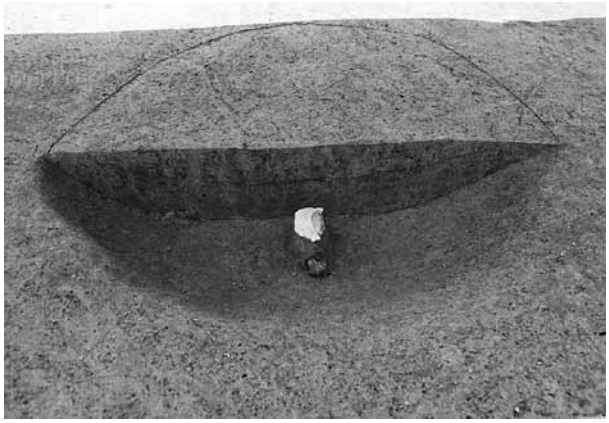
SK759　土層断面（南から）



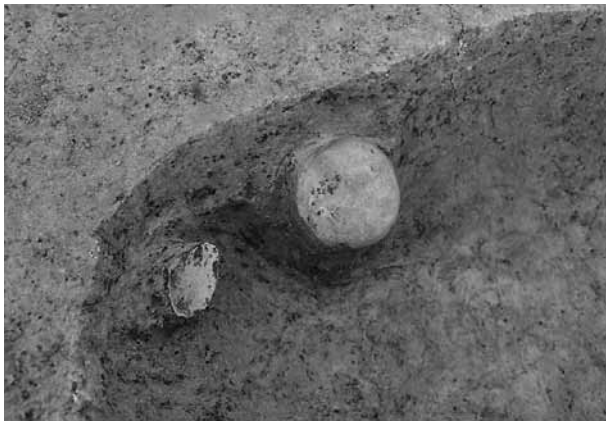
SD759 内　SK760・791　遺物出土状況（南から）

SK760　遺物出土状況（西から）

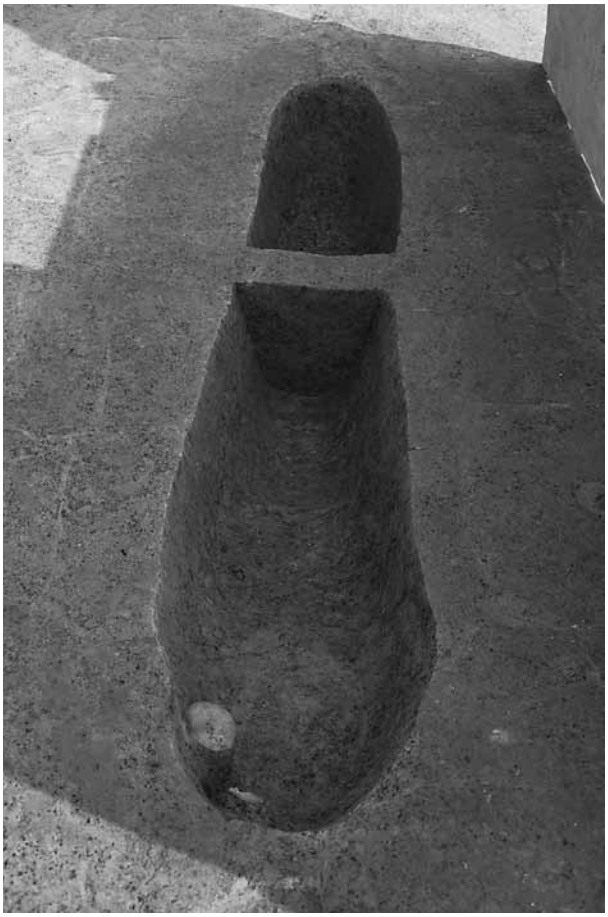
SK760　遺物出土状況（西から）



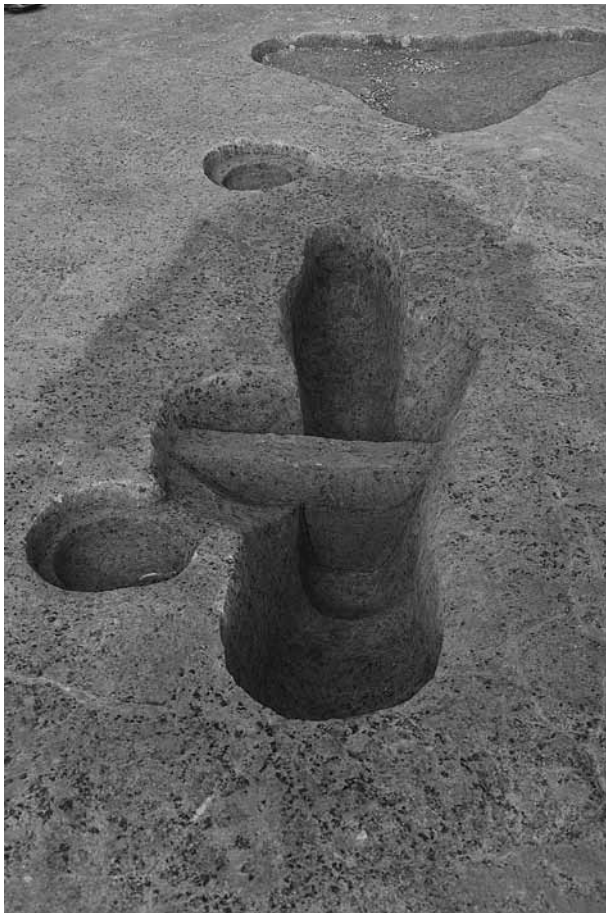
SK788　土層断面（東から）



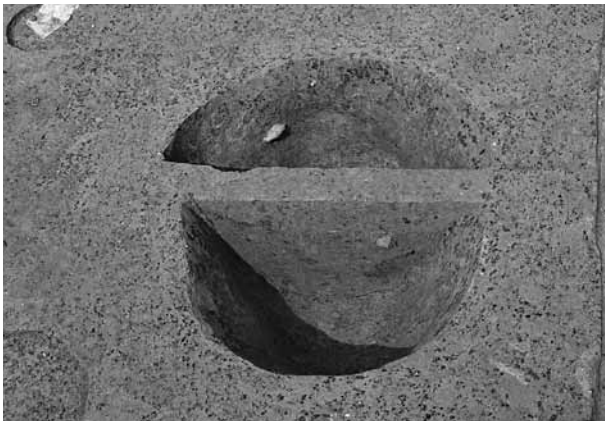
SK794　遺物出土状況（西から）



SK794　土層断面（北西から）



SK793　土層断面（西から）



SK799　土層断面（東から）

SK813　土層断面（西から）

SK814　土層断面（西から）

SK872　土層断面（南から）

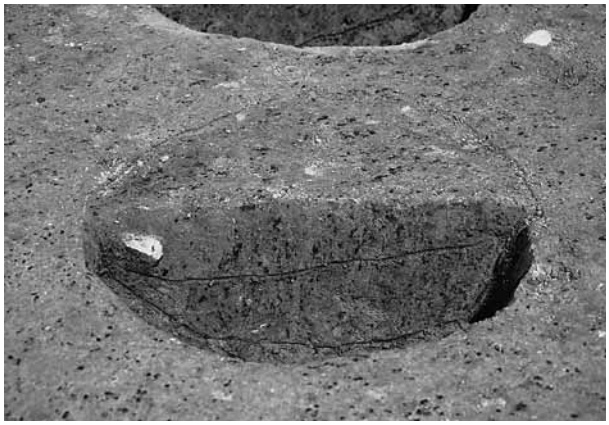
SK853　土器出土状況（西から）

SK853　土器出土状況（北東から）

SK859　土層断面（南東から）

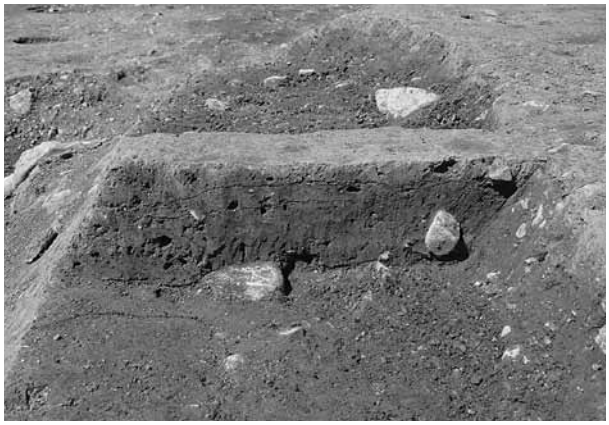
SK859　土器出土状況（南西から）

SK878　土器出土状況（南から）



SK1579　土層断面（南西から）

SK763（東から）



SX1614　土層断面（南東から）

SK256　土層断面（南から）

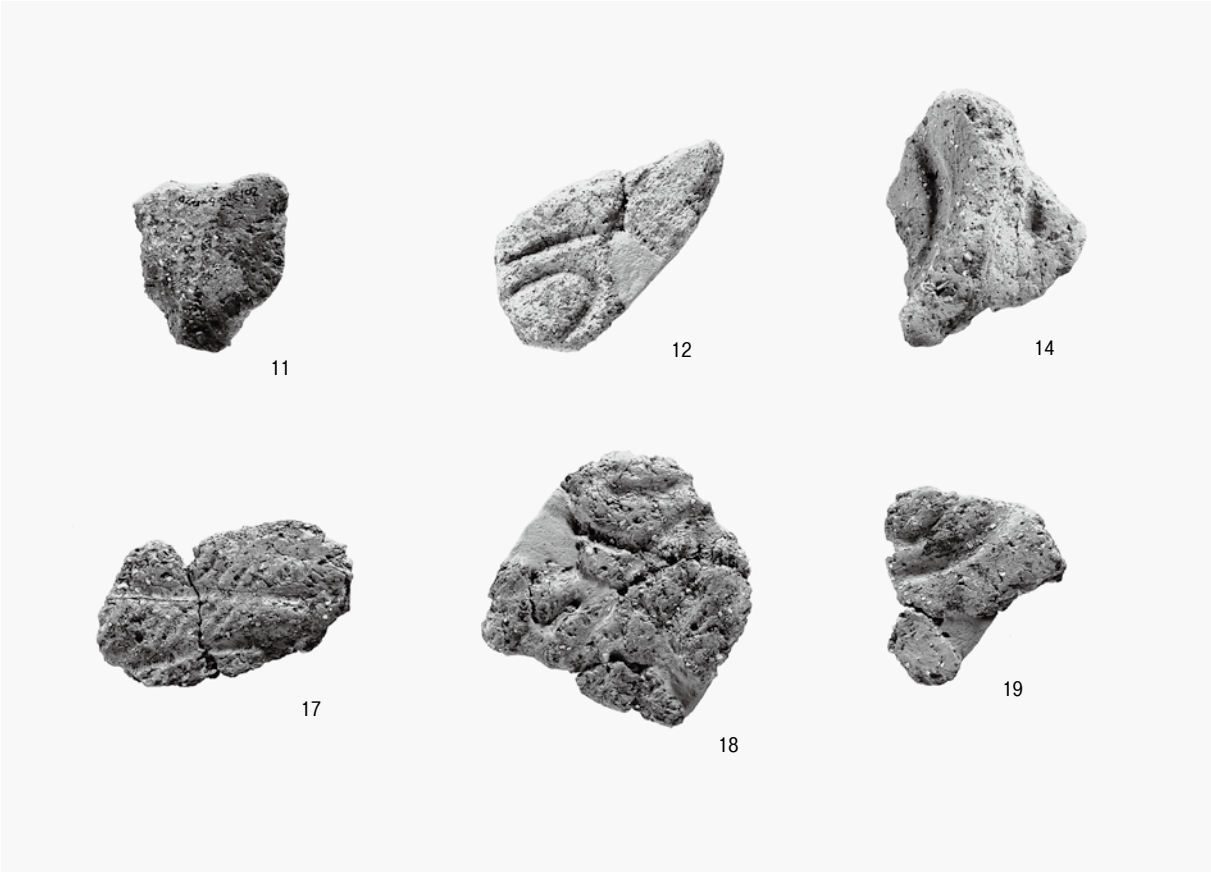
SP394　土層断面（南から）

SP862　土層断面（南から）

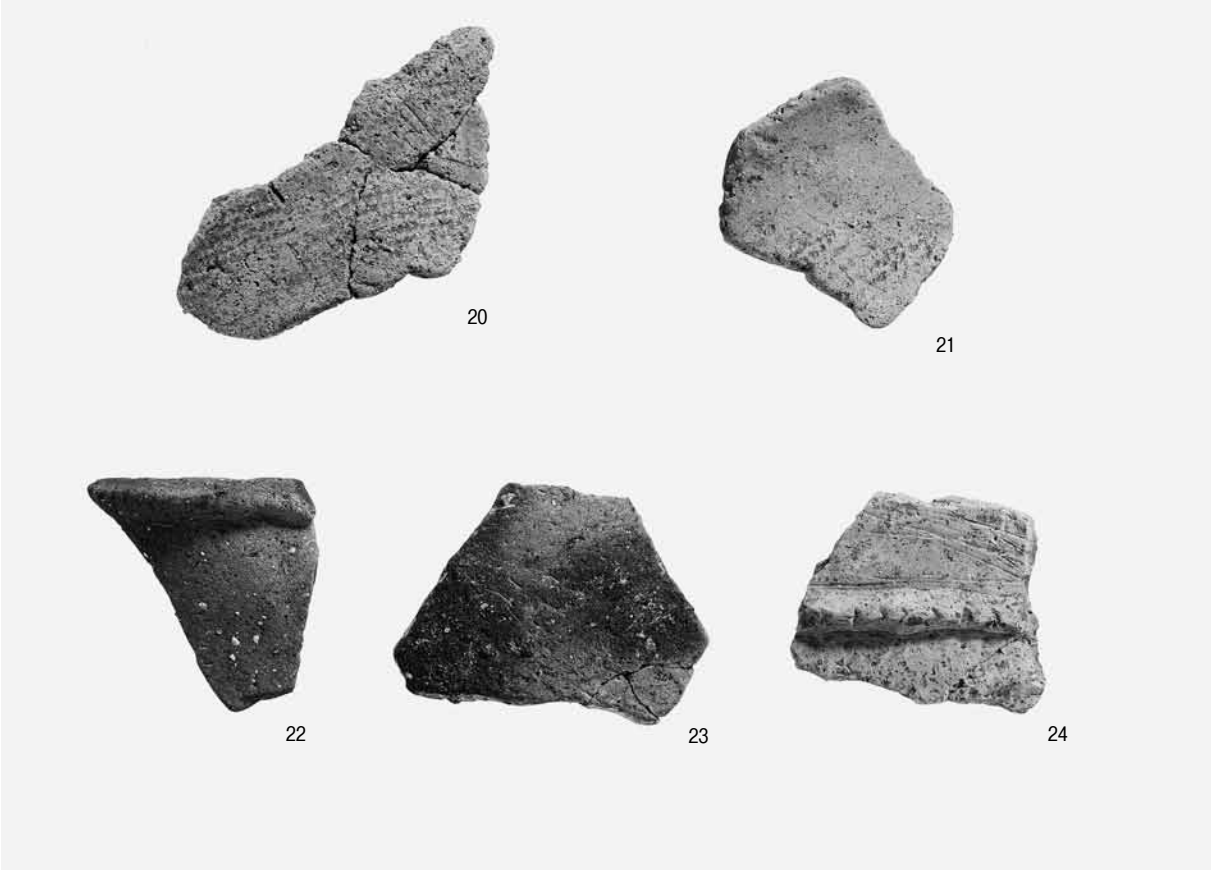
SP1071　土層断面（南から）

SP1571　土層断面（南から）

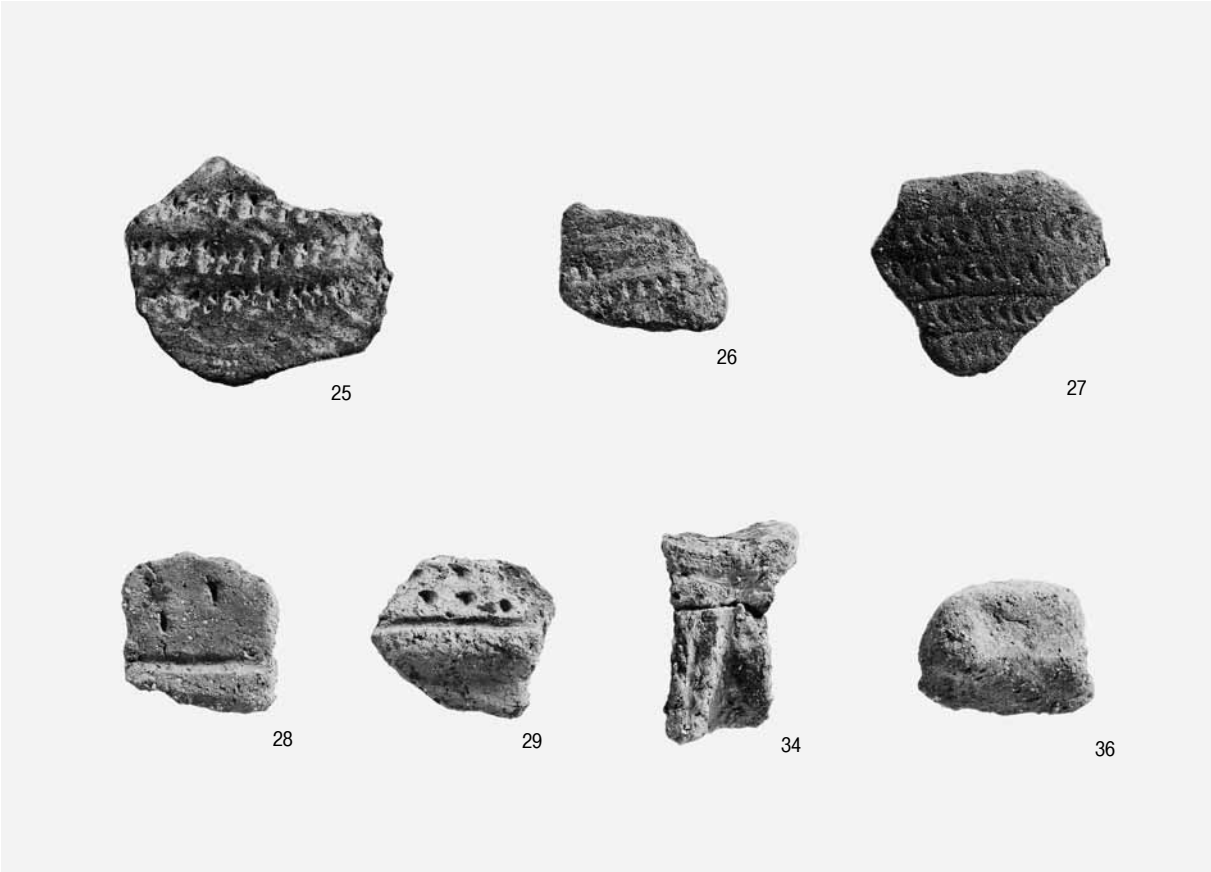
SK1616 出土土器



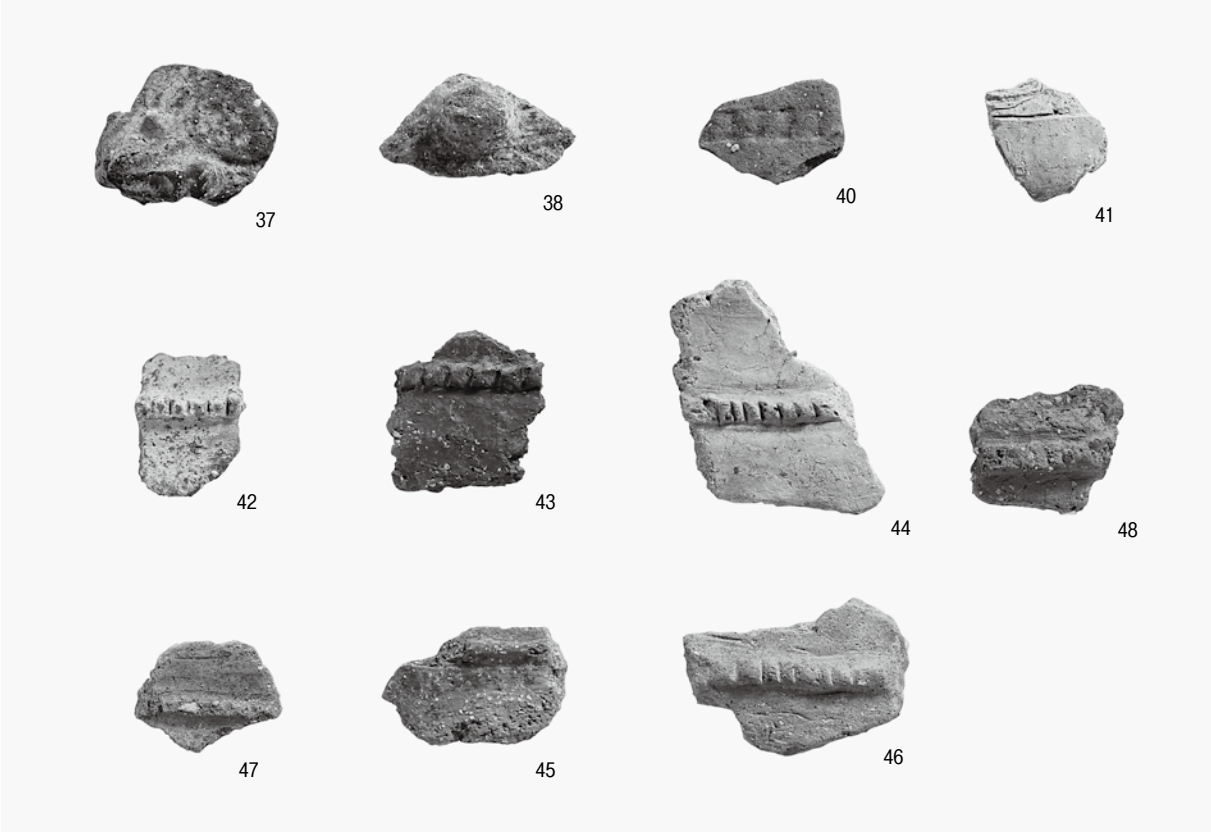
SK1630・111・501・313・337 出土土器



SK80・599・163 出土土器

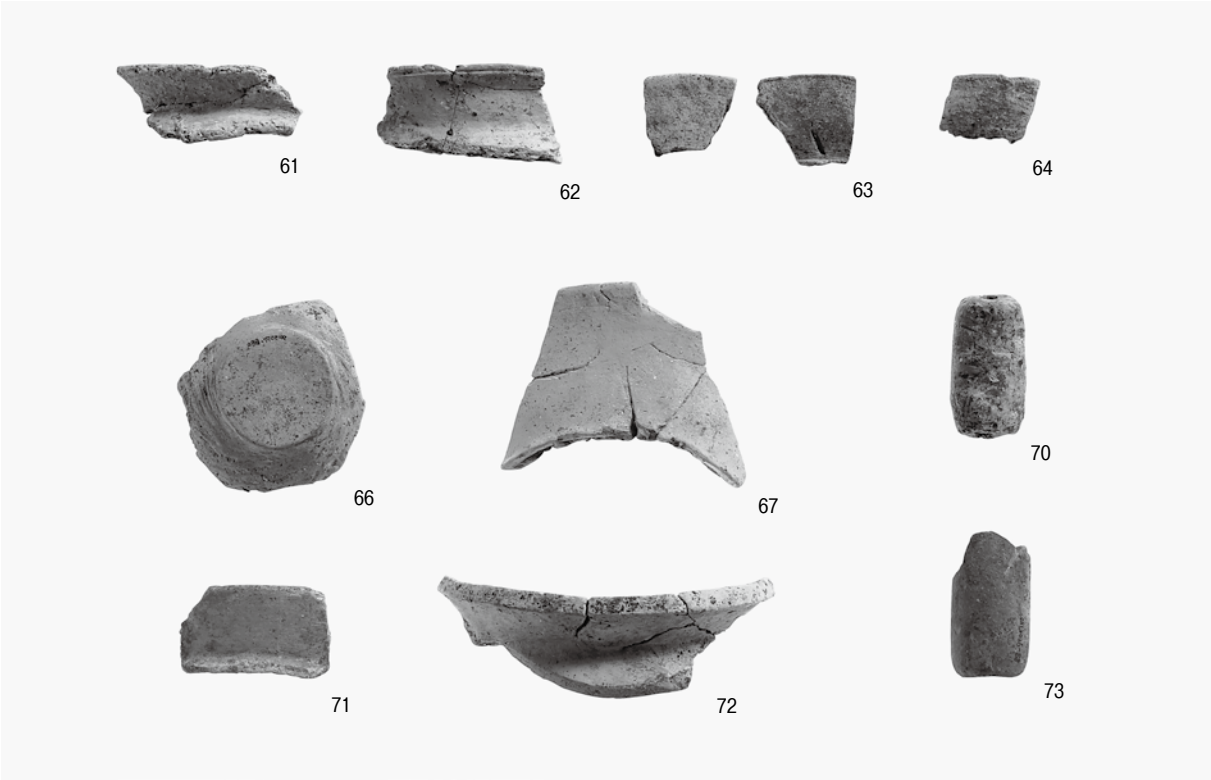


包含層出土土器（1）



包含層出土土器（2）

SH1607・SD1602 出土土器



SD1602・SX518 出土土器

SD1602 出土土製品

68

SD1602 出土土器

74

75

SX1543 出土土器

83

85

94

93

96

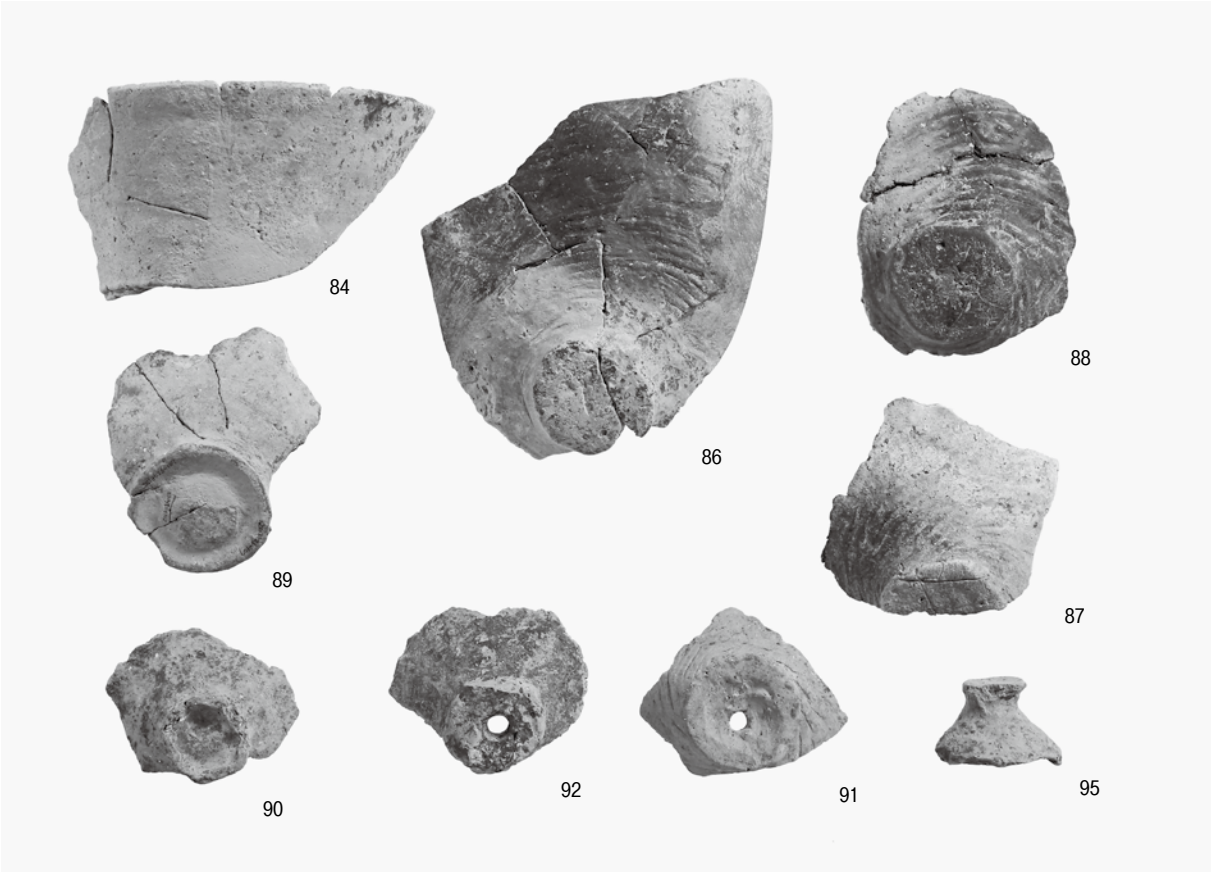
SX540 出土土器（1）

99

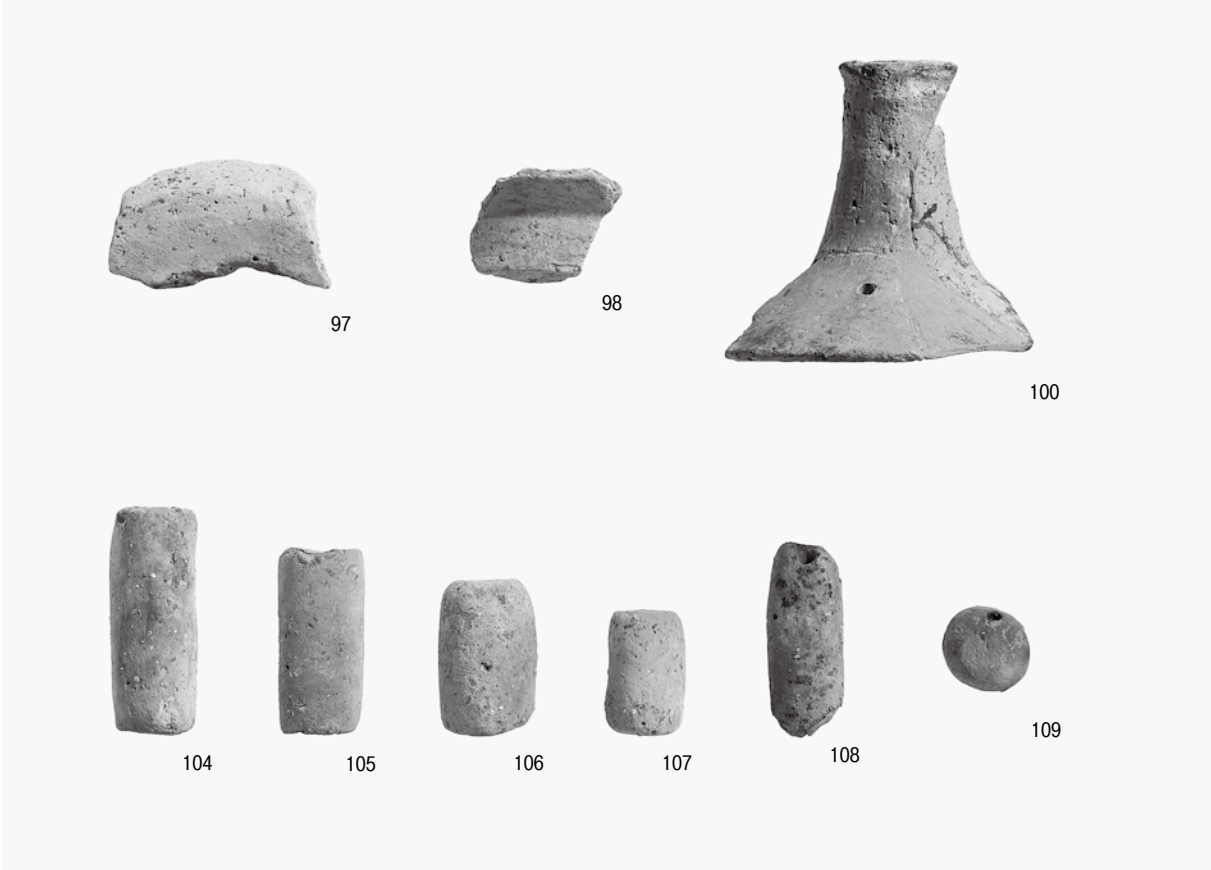
101

102

103



SX540 出土土器（2）

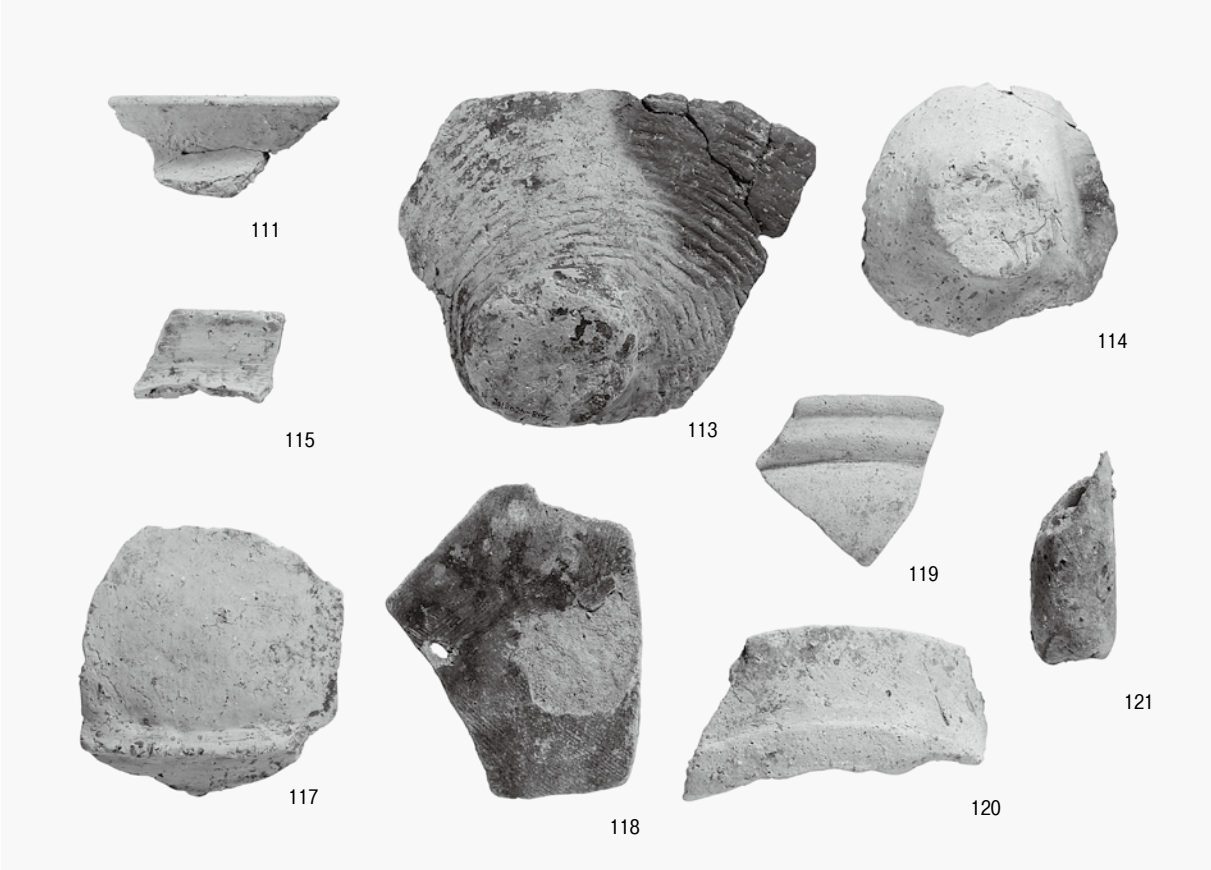


SX540 出土土器（3）

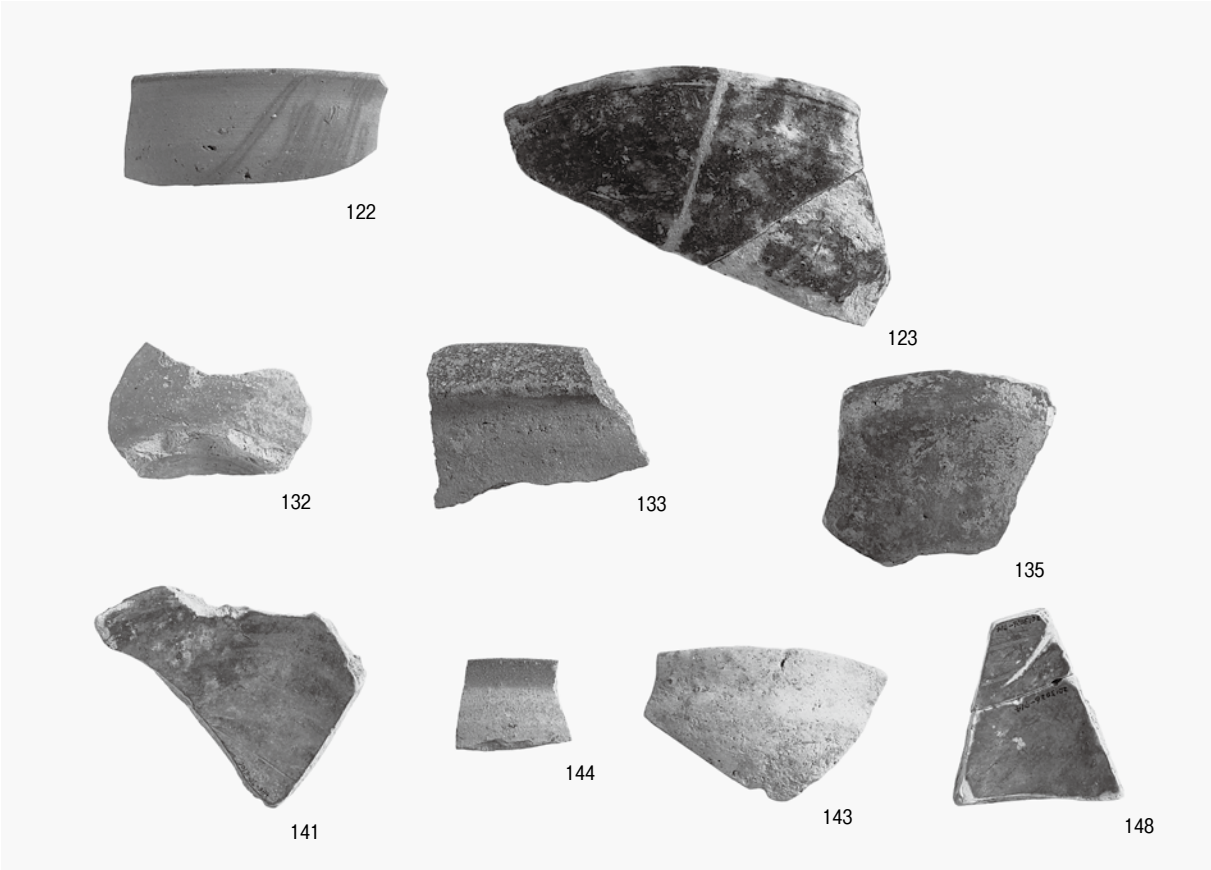
SK41 出土土器

SK1603 出土土器

SK1662 出土土器



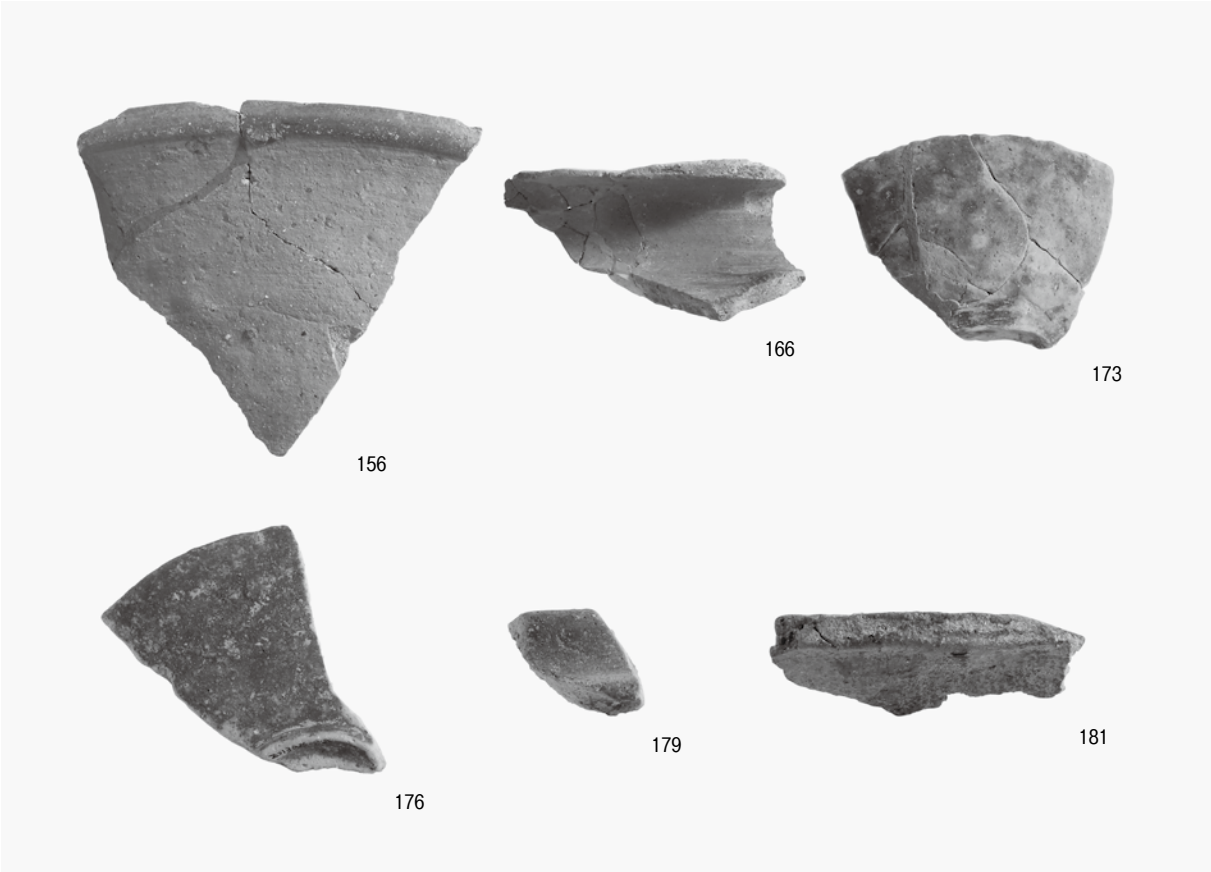
SK・SP・包含層出土土器



SB03～10 出土土器

SB10 出土土器

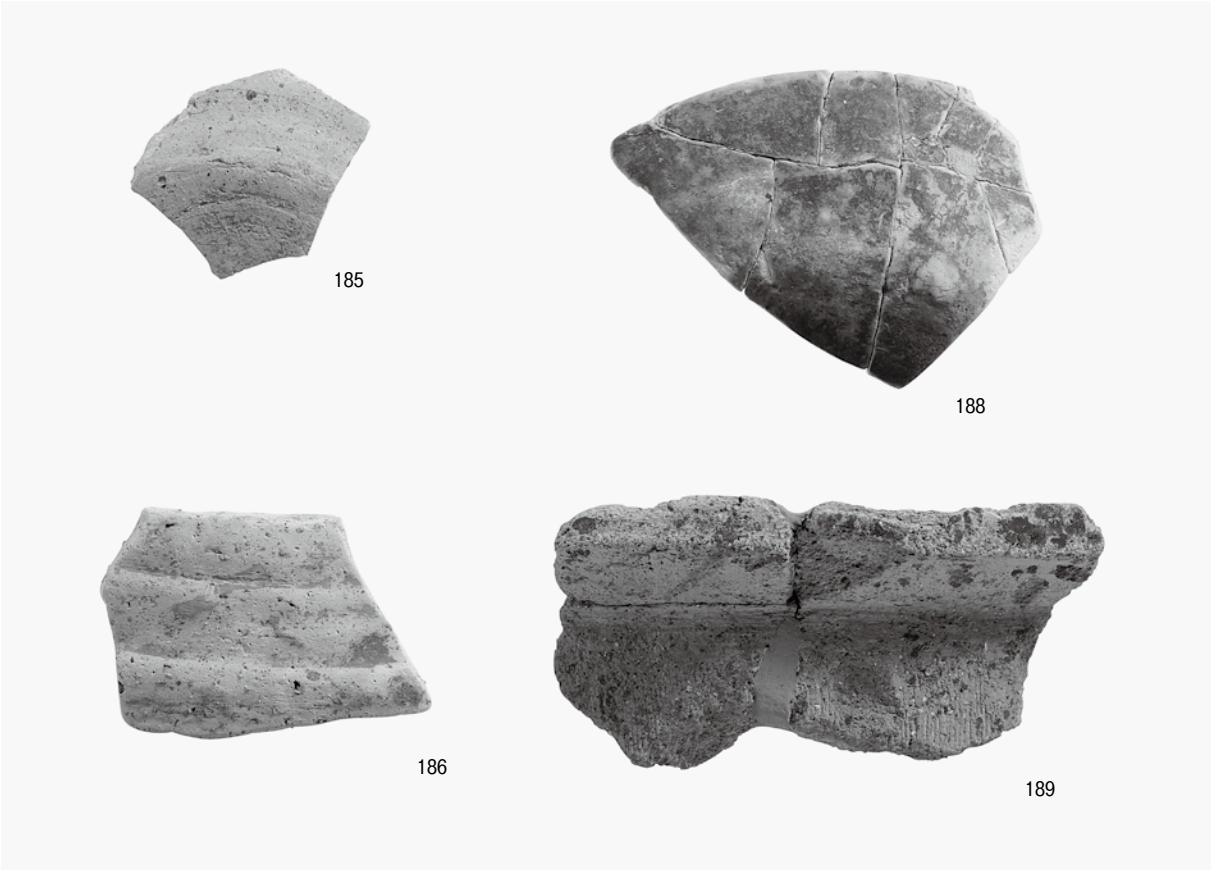
SB20 出土土器



SB12～25 出土土器

182

SD759 出土土器



185

188

186

189

SD822（左列）・SD857（右列）出土土器

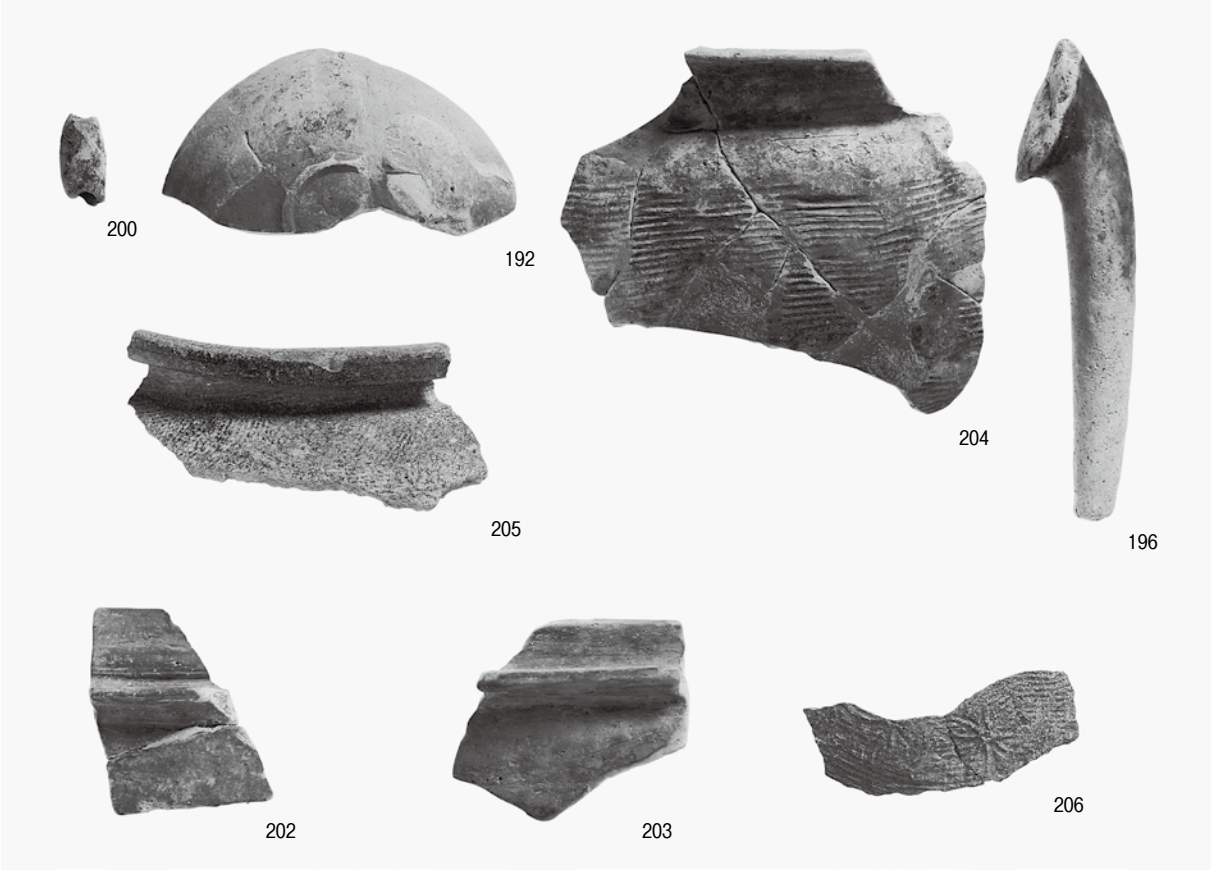
190

191

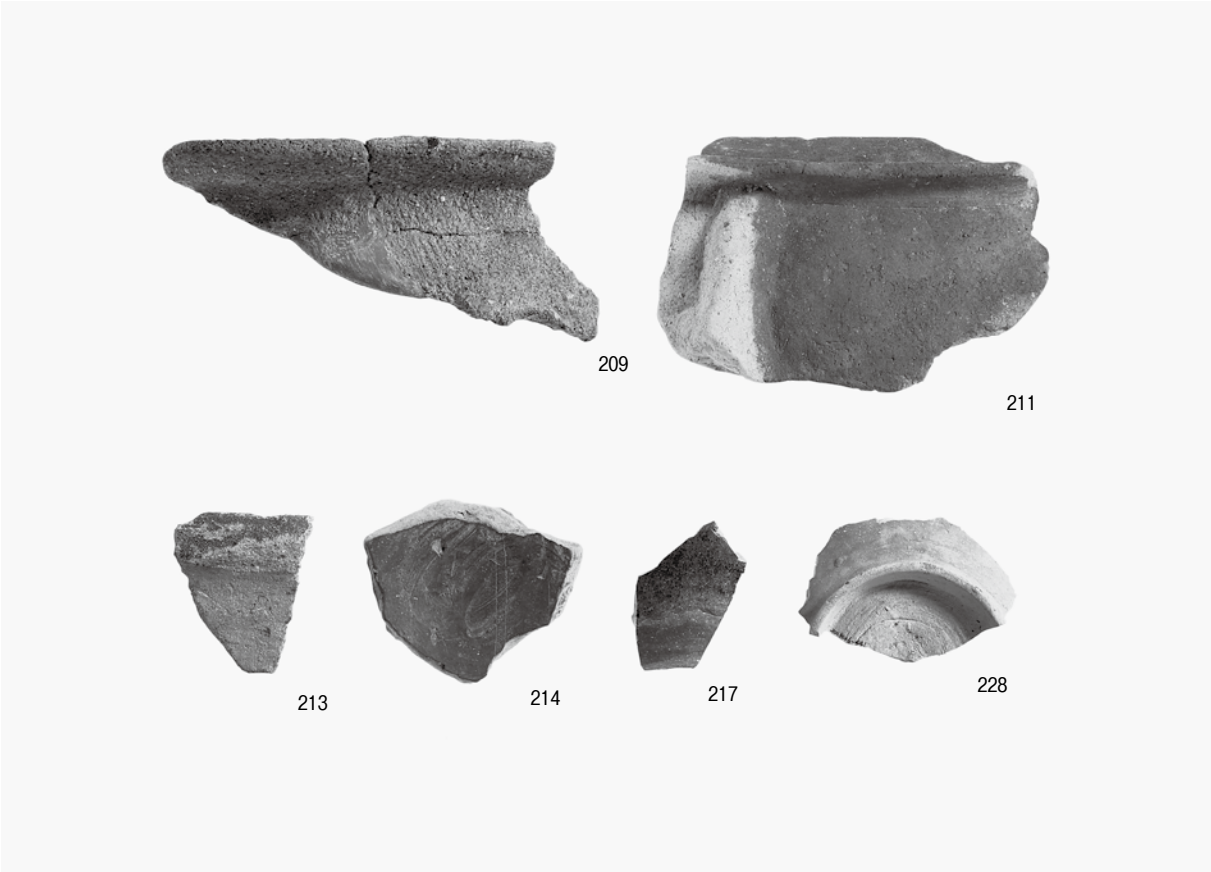
194

195

谷状落ち出土土器（1）



谷状落ち出土土器（2）



SX・SK 出土土器

216

SK396 出土土器

218

SK738 出土土器

219

220

221

222

223

224

225

SK760 出土土器

230

231

SK794 出土土器

237

SX1633 出土土器

236

SX1619 出土土器

238

SX60 出土土器

245

246

244

247

SX1501 出土土器

256

257

259

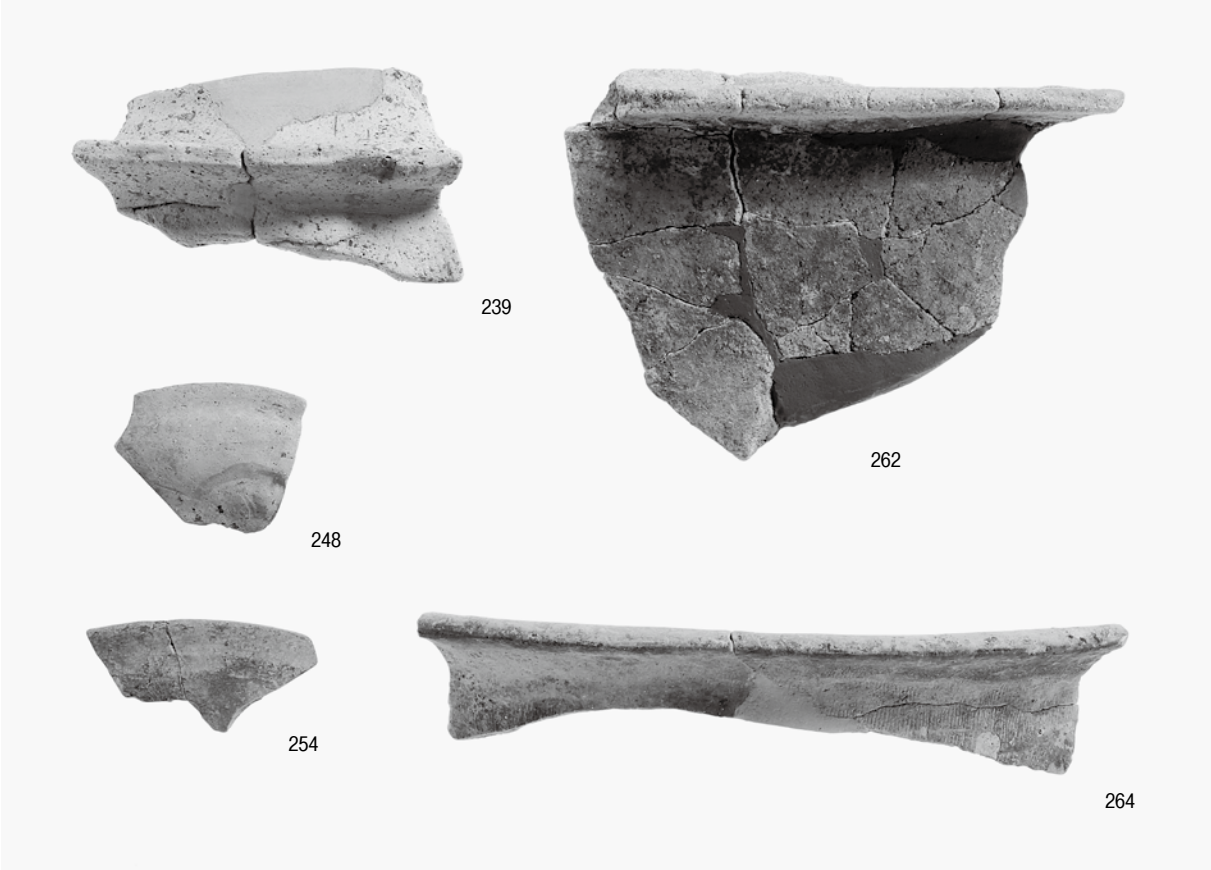
260

261

SK872・878・859 出土土器

258

SK853 出土土器

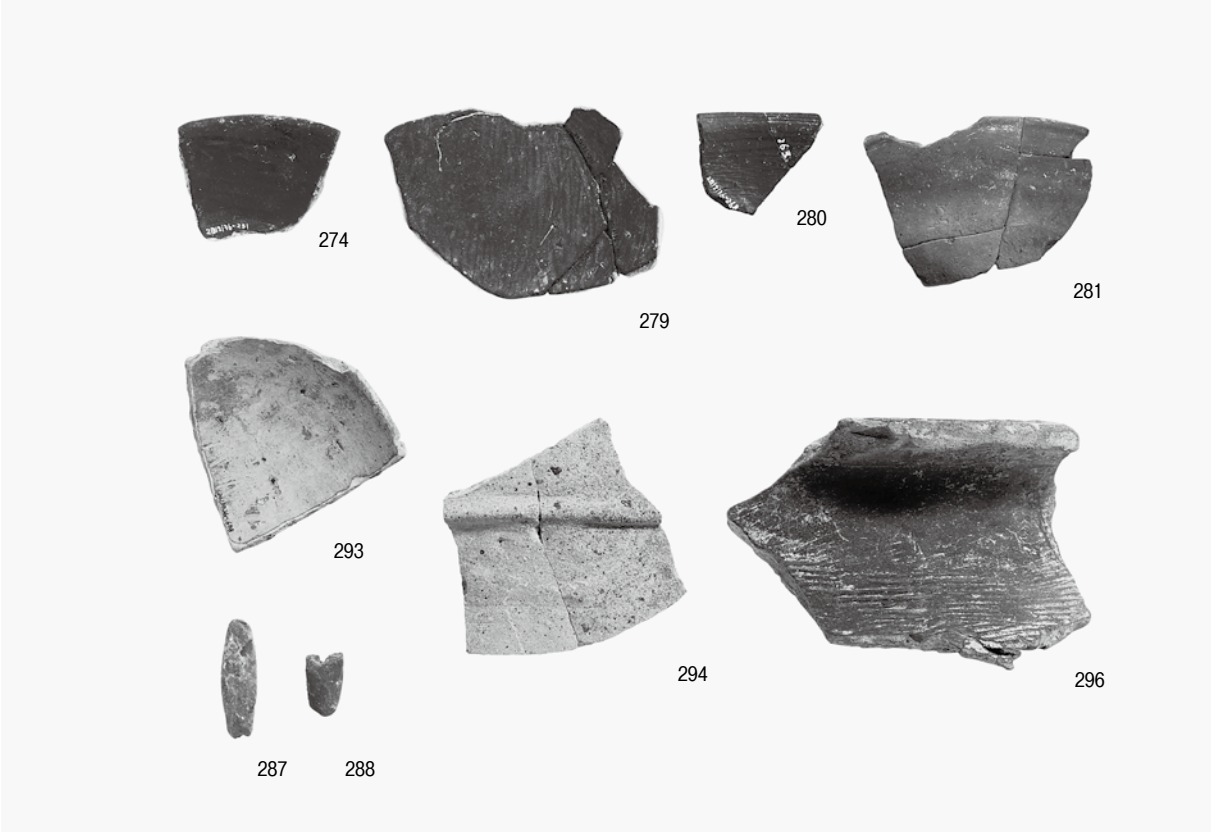


SX・SK 出土土器

SD01 出土土器

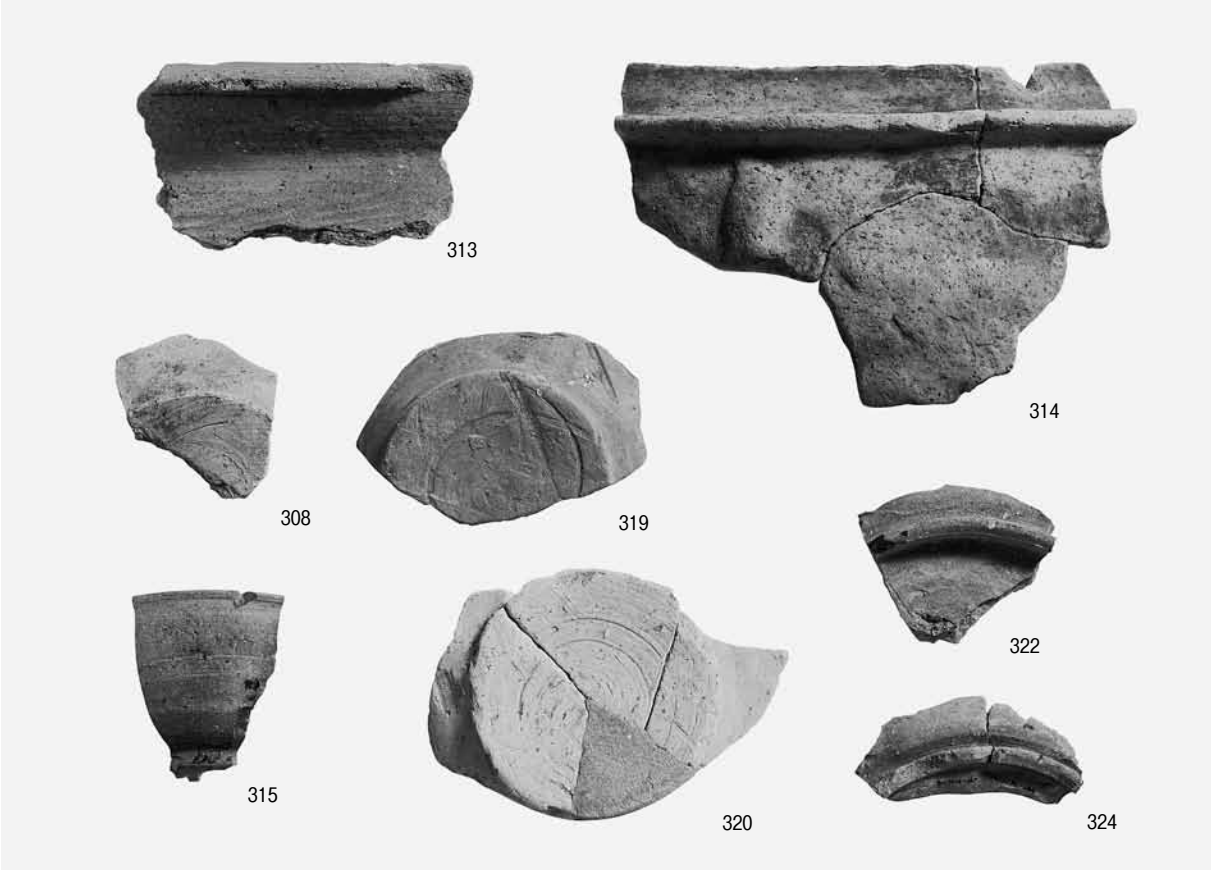
SP409 出土土器

SP743 出土土器

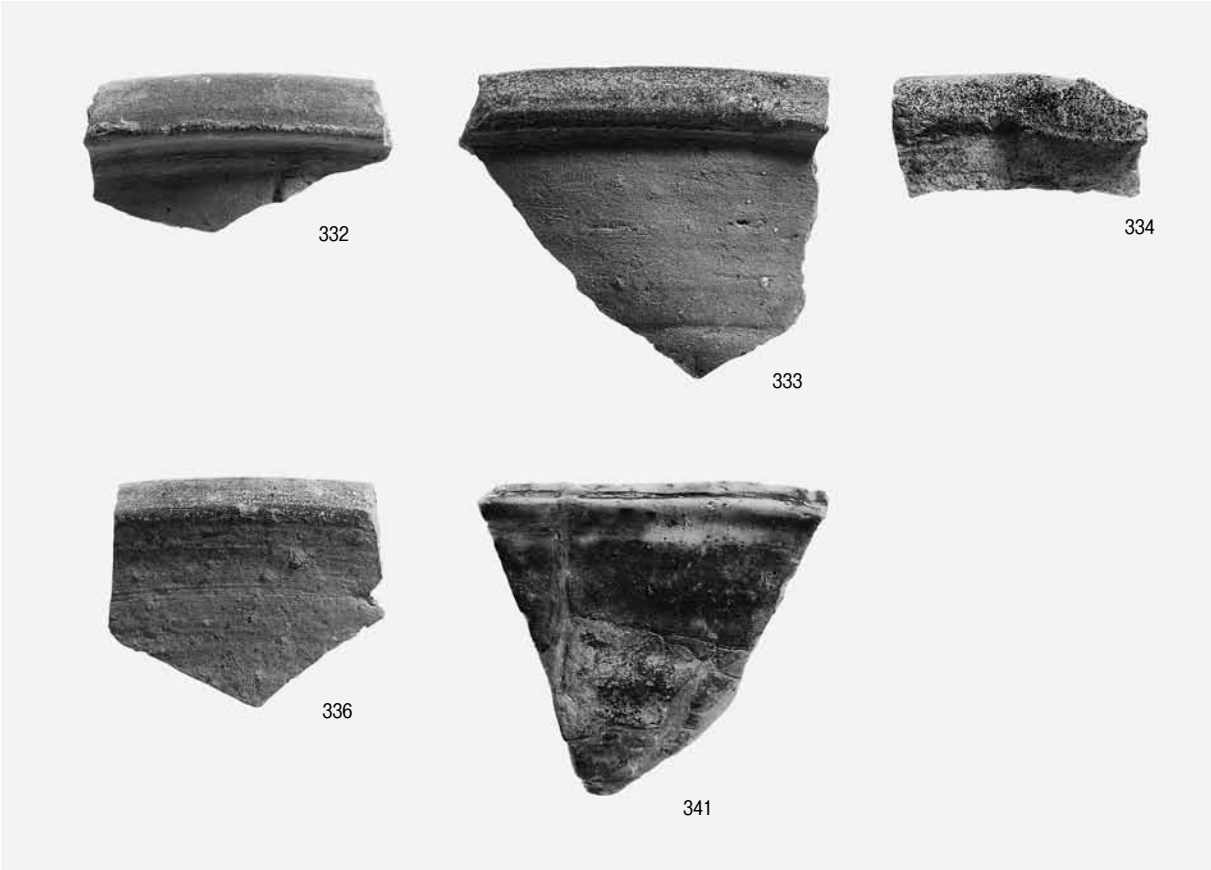


SP 出土土器

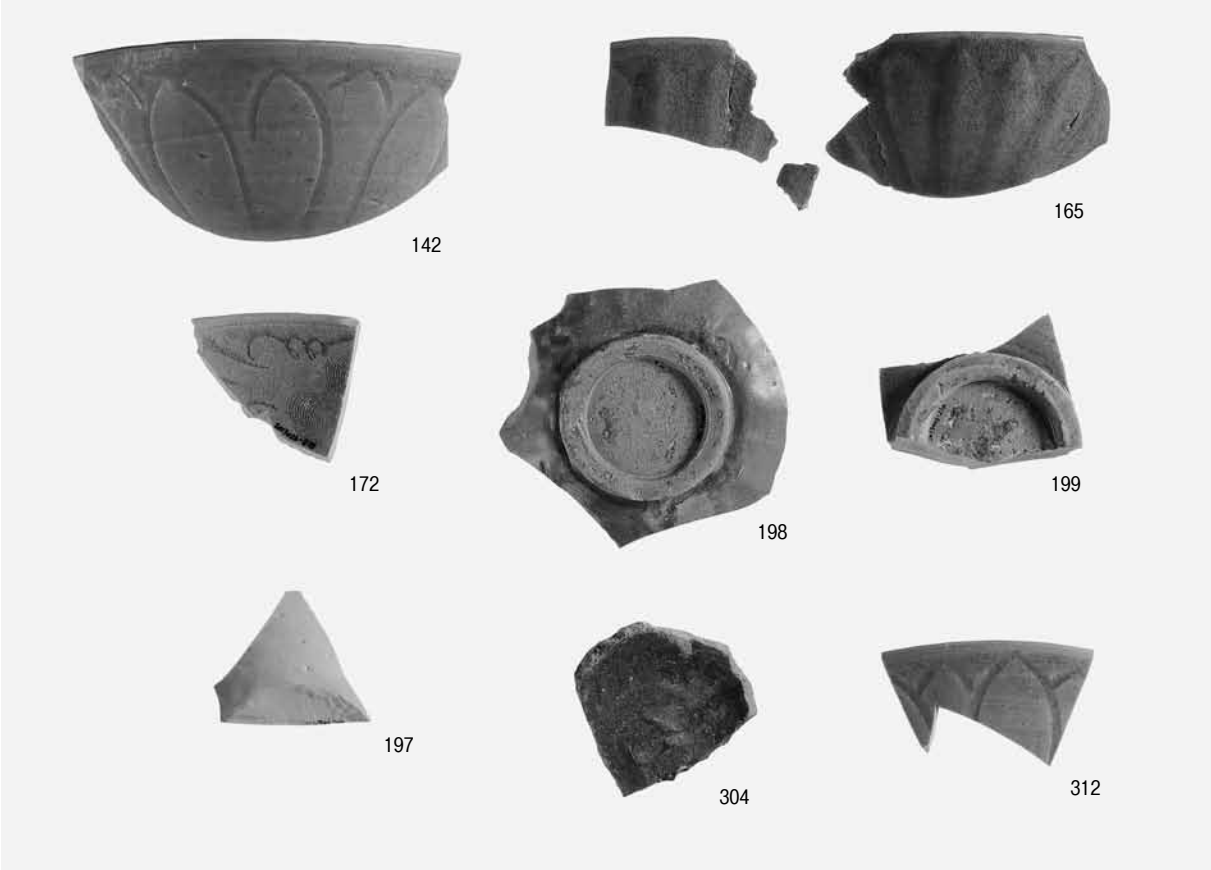
包含層出土土器（1）



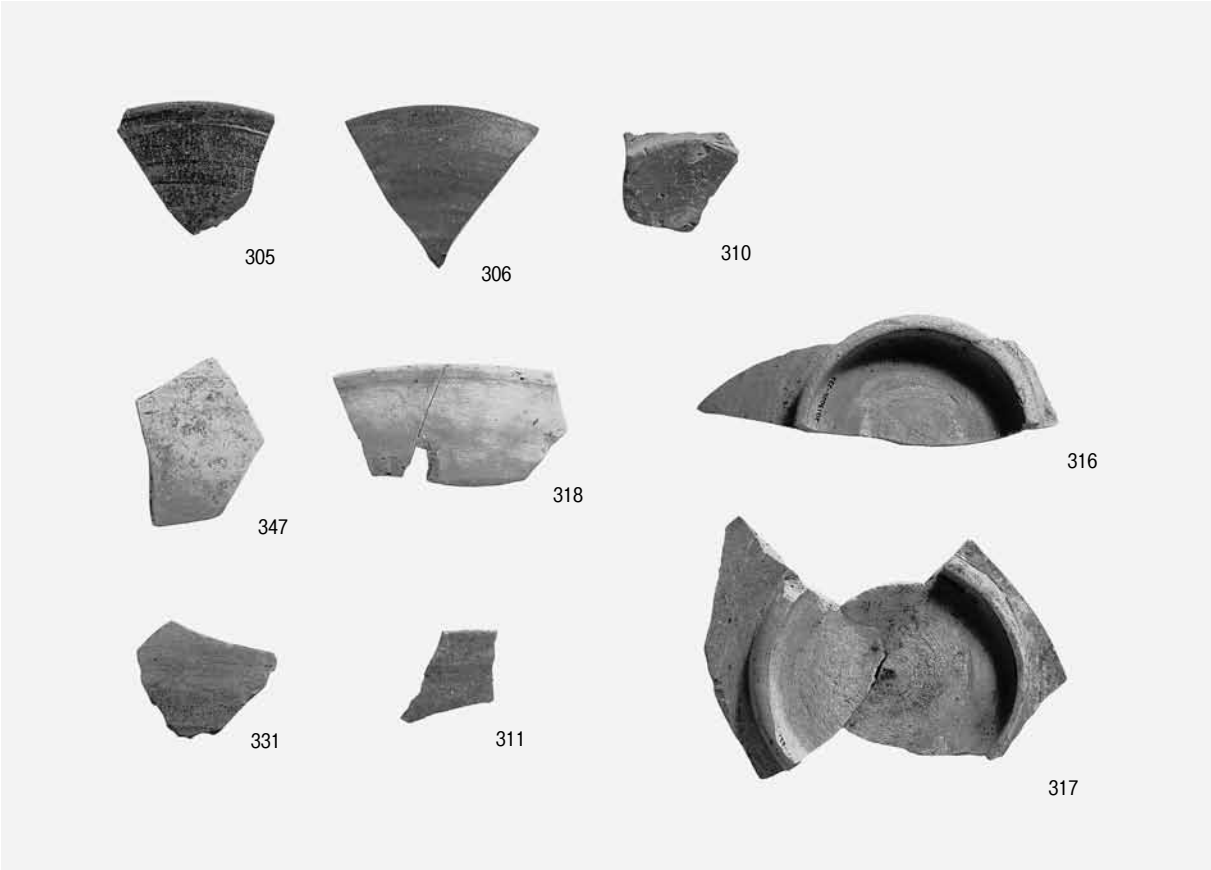
包含層出土土器（2）



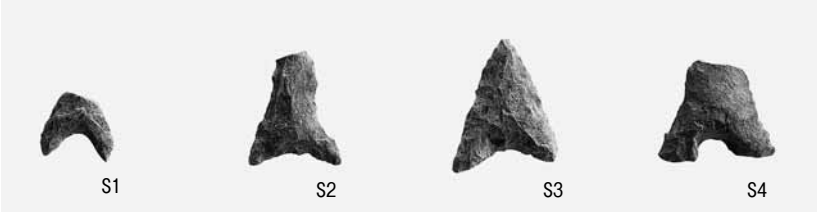
包含層出土土器（3）



出土　青磁・白磁



出土　緑釉・灰釉陶器



出土石器（1）

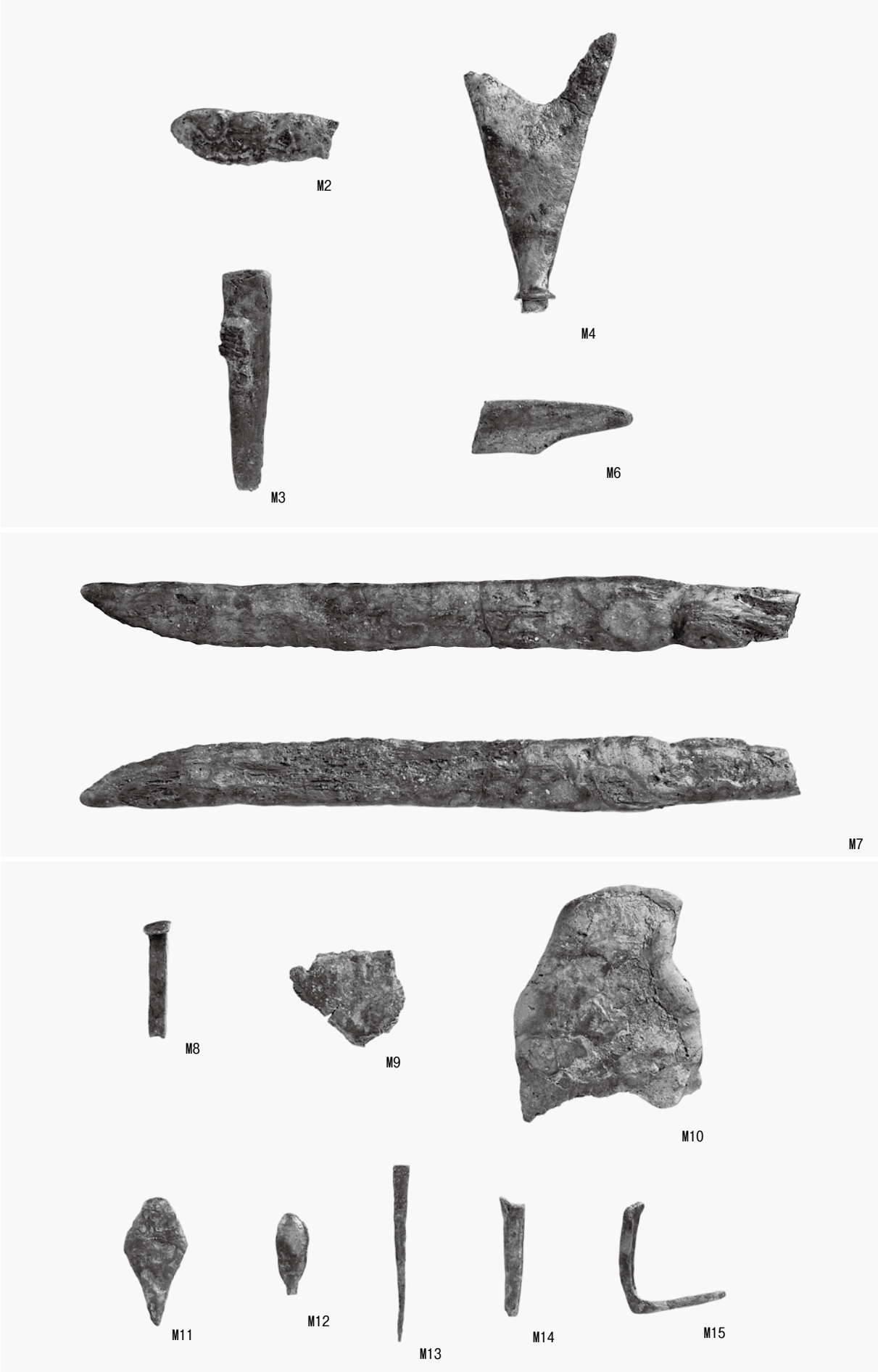
S12

S11

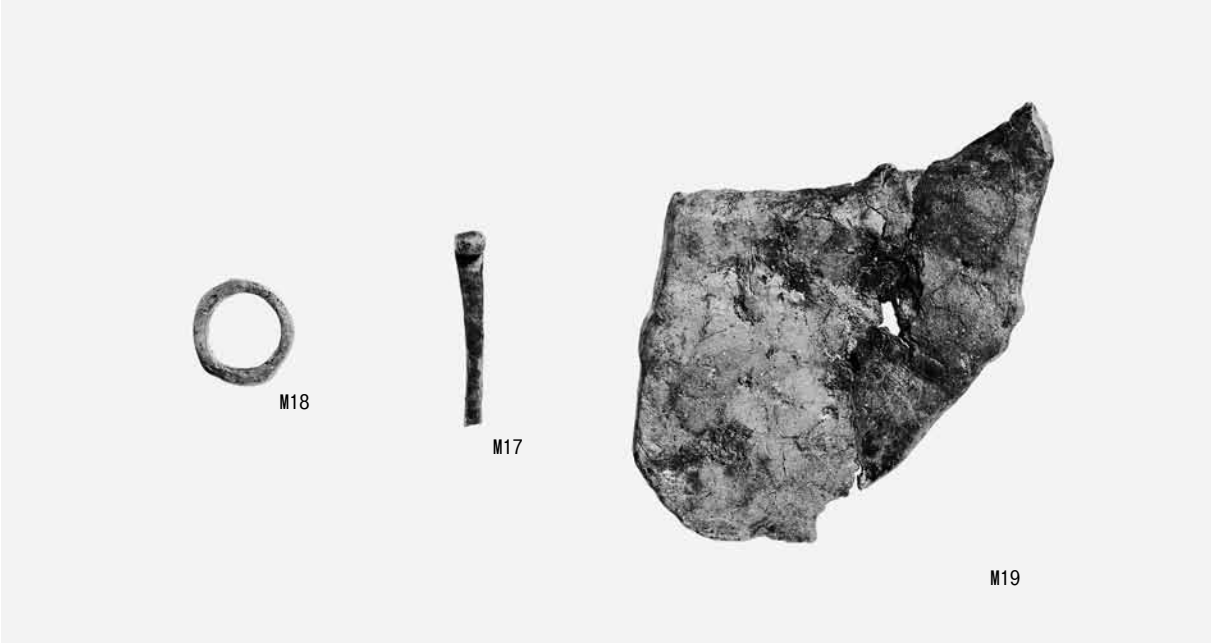
S14

S13

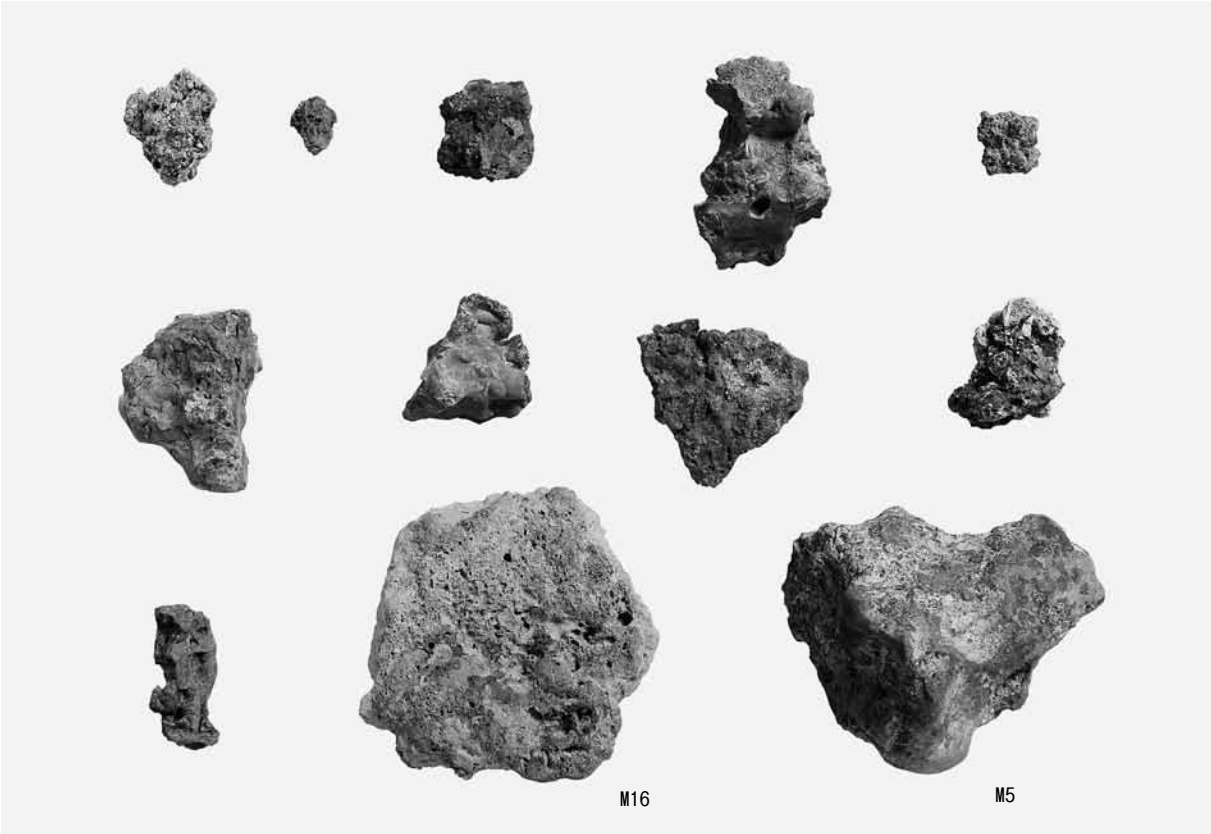
出土石器（2）



遺構出土金属器



包含層出土金属器



出土スラッグ

報　告　書　抄　録

ふりがな	にしうねのしものだん・いどいせき
書　　名	西畦野下ノ段・井戸遺跡
副　書　名	県道川西インター線建設工事、新名神高速道路　箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に係る 埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第484冊
編著者名	中川　渉・甲斐昭光・永惠裕和・岸本一宏・多賀茂治・大本朋弥
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
所　在　地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号（兵庫県立考古博物館内）　TEL079-437-5561
発行機関	兵庫県教育委員会
所　在　地	〒650－8567　兵庫県神戸市中央区下山手通５丁目10番１号　TEL078－362－3784
発行年月日	平成28（2016）年３月25日
資料保管機関	兵庫県立考古博物館
所　在　地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号　TEL079-437-5589

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間（遺跡調査番号）	調査面積（㎡）	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
西畦野下ノ段・井戸遺跡	川西市西畦野	28217		35°53′04″	135°24′08″	20110314・20110315・20110615（2011314）	98㎡	記録保存調査
						20121119～20130305（2012136）	3,222㎡	
						20130307（2012208）	4㎡	
						20130528～20131010（2013026）	6,413㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西畦野下ノ段・井戸遺跡	集落跡	縄文時代	土坑	土器・石器	中期末の土器が主体を占める
		弥生～古墳時代	竪穴住居・溝	土器・石器・重圏文鏡	鳥形土製品が出土
		平安～鎌倉時代	掘立柱建物・石敷遺構	瓦器・土師器・青磁・短刀	12世紀末～13世紀初めの集落跡

要約

大きく分けて縄文時代、弥生時代後期～古墳時代初頭、平安～鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。これらの遺構は、層位的には同一遺構面で検出している。

縄文時代の遺構は土坑である。遺物は前期、中期末、後期、晩期の土器が出土しているが、主体を占めるのは中期である。

弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構は、竪穴住居１棟、溝３条、多数の土坑・柱穴である。特筆される遺物として、土坑出土の重圏文鏡がある。

平安～鎌倉時代の主な遺構は、掘立柱建物25棟、木棺墓１基・土坑墓２基、石敷遺構２基、多数の炉跡などである。遺構の密度からは、当遺跡の主体を占める。遺物は、瓦器、土師器、須恵器、青磁などの貿易陶磁、短刀などの鉄製品がある。

兵庫県文化財調査報告　第 484 冊

川西市

西畦野下ノ段・井戸遺跡

－　県道川西インター線建設工事、新名神高速道路　箕面～神戸間
（兵庫県域）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　－

平成 28（2016）年３月 25 日　発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号
（兵庫県立考古博物館内）

発行：兵庫県教育委員会
〒650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通 5 丁目 10 番 1 号

印刷：交友印刷株式会社
〒650-0047　兵庫県神戸市中央区港島南町 5 丁目 4 番 5 号